

国道153号 伊那・松島バイパス
埋蔵文化財発掘調査報告書

—箕輪町内—

みのわ
箕輪遺跡

2005

長野県伊那建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

国道153号 伊那・松島バイパス

埋蔵文化財発掘調査報告書

—箕輪町内—

みのわ
箕輪遺跡

2005

長野県伊那建設事務所
長野県埋蔵文化財センター

序言

箕輪町・南箕輪村にかかる箕輪遺跡は、昭和26・27年にはじまる区画整理事業で多くの土器・木器が出土し、広く水田遺跡として知られるようになりました。当時は戦後間もない頃ながら、平出遺跡の発掘調査をはじめとして新たな歴史像をもとめて関心の高い時期でもあり、箕輪遺跡においても地域の方々の努力で資料の収集や記録、さらに研究が進められてきました。そして、以後も箕輪町・南箕輪村の教育委員会による発掘調査が進められてきています。

そうしたなかで、この度、国道153号改良工事 松島バイパス・伊那バイパス建設に伴って（財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとなり、平成12年～平成15年までの春と晩秋～初冬にかけて発掘調査を進めてきました。そして、その成果をここに報告書としてまとめ、広く公表するものであります。

発掘調査では弥生・古墳時代の水田跡の発見や、これまで予想されていたながら具体的な姿が不明瞭だった集落跡を確認するなど多くの成果をあげられました。そこでは当地域の自然環境と向き合って生きた古代の人々の足跡が明かになり、広く他地域との交流や影響を受けてきた姿も浮かんできています。そして、現在みる姿がこうした長い時間のなかで醸造されてきたようすも判明しました。

長い歴史のなかでつくられてきた地域の環境は、全く同じものは作り出すことができない、各土地毎に醸し出されたひとつの財産とみることもできます。それをどのように変えるのか、あるいは維持していくのか、さまざまな選択肢があると思いますが、これを考える際に土地の成り立ちを知ることは意味があるように思われます。遺跡は普段目にすることもなく地下に埋もれていますが、土地のかつての姿を具体的に留めている可能性があります。こうした遺跡の発掘調査の成果を通して土地の姿を考える上での一助になればと願うものであります。

また、最後になりましたが、発掘調査から整理作業および報告書刊行に至るまで、深いご理解とご協力を頂いた、伊那建設事務所、箕輪町・同教育委員会などの関係機関、ご指導・ご助言頂いた長野県教育委員会文化財・生涯学習課、また発掘・整理作業に携わっていただいた多くの方々に心から敬意と感謝を表す次第であります。

平成17年2月28日

財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所長 小沢 将夫















例言

1. 本書は長野県上伊那郡箕輪町三日町に所在する箕輪遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は国道153号の松島バイパス・伊那バイパス建設に伴う事前調査として実施し、伊那建設事務所の委託事業として財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターが実施した。
3. これまで年報等で調査成果を公表してきたが、本書をもって本報告とする。
4. 調査にあたっては伊那建設事務所、長野県教育委員会文化財生涯学習課、箕輪町・同教育委員会、箕輪町郷土資料館、南箕輪村教育委員会のご協力を得た。
5. 発掘調査から整理作業に至るまで多くの方々のご指導を賜った。第1章にお名前を挙げさせていただいたが、厚く御礼申し上げたい。
6. 実測・トレース・編集作業には整理補助員 阿部高子、市川ちず子、今井博子、臼田知子があたった。
7. 執筆・編集は市川 隆之があたり、調査1課長 廣瀬 昭弘が校閲した。また、自然科学分析と石器については以下の方々から原稿を賜った。その執筆分担は1章に記す。
植田弥生・黒澤一男・三村昌史・山形秀樹・新山雅広・鈴木 茂（藤根 久一珪藻）（パレオ・ラボ）、高橋哲・馬場伸一郎（アルカ）、望月昭彦（沼津高専）
8. 調査記録や遺物は箕輪町教育委員会に移管し保管される。

凡例

1. 掲載図の基本的な縮尺は全体図1/800、1/400、割付図1/200、水田個別遺構・住居跡完掘1/80、住居跡遺物出土状況図1/60、土坑1/40、遺物集中1/20で、遺物は土器1/4、石器3/4・1/2等、木器1/4・1/8・1/10、金属器1/1・1/3である。これ以外の縮尺も用いたが、各図中に示した。
2. 遺構番号は調査時のものを尊重し、一部遺構番号のつけられていなかったものを整理時に遺構番号を付けた。なお、平成12年度Ⅰ～Ⅲ区北部は100番代、平成13年度は住居跡30番代、土坑150番代以後をつけたが、それ以外は1から付けている。
3. 遺物番号は実測時に実測番号を付したが、最終的に掲載番号に統一し、掲載番号をつけて収納した。
4. 遺物出土状況図の「土」は土器、「石」は石器、「木」は木器、「金」は金属製品を表わし、アラビア数字は遺物掲載番号である。
5. 掲載図のスクリーン・トーン及び記号は以下を表す。

凡例

 焼土	 炭	 攪乱	 木	 石
▲ 土器	△ 石・石器	● 木・木器	★ 鉄器	
 土器	 陶器	 磁器	 鉄釉	 炭化物
 赤彩	 さび釉	 黒色	 石器研磨	

目 次

序言・例言・凡例・目次

第1章 調査の概要	1
第2章 箕輪遺跡の概要と周辺の遺跡	
第1節 箕輪遺跡の概要	7
第2節 周辺遺跡と歴史的環境	13
第3節 遺跡の地形環境と土層	19
第3章 遺構	
第1節 VI区(松島バイパス)の調査	25
第2節 I・II区の調査	39
第3節 III区北河道跡低地群の遺構	50
第4節 III区南～IV区北部微高地域の調査	84
第5節 IV・V区低地の遺構	148
第4章 遺物	
第1節 土器・土製品	163
第2節 石器	221
第3節 木製品	275
第4節 金属製品	333
第5章 科学分析	
第1節 箕輪遺跡のプラントオパール 鈴木 茂((株)パレオ・ラボ)	336
第2節 箕輪遺跡の珪藻化石群集 藤根 久((株)パレオ・ラボ)	348
第3節 箕輪遺跡の花粉化石 鈴木 茂((株)パレオ・ラボ)	354
第4節 箕輪遺跡から出土した炭化種実 新山 雅広((株)パレオ・ラボ)	359
第5節 箕輪遺跡出土骨片 黒澤 一男((株)パレオ・ラボ)	364
第6節 放射性炭素年代測定 山形 秀樹((株)パレオ・ラボ)	366
第7節 箕輪遺跡における木材利用と木材資源 三村 昌史・植田 弥生((株)パレオ・ラボ)	368
第8節 箕輪遺跡出土の弥生石器群の評価 馬場 伸一郎((株)アルカ)	388

第9節 箕輪遺跡の使用痕分析	398
高橋 哲 ((株) アルカ)	
第10節 箕輪遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定	402
望月 昭彦 (沼津高専)	

第6章 成果と課題

挿 図 目 次

第1図 箕輪遺跡の位置	第30図 A低地2面水田跡
第2図 調査地区とグリッド配置	第31図 A低地2・3面畦方位
第3図 調査地点と周囲の字名・遺跡	第32図 A低地3面水田跡
第4図 箕輪遺跡北部周辺旧公図と区画整理検出 杭列	第33図 B～D低地
第5図 周辺遺跡分布	第34図 C低地畦方位
第6図 調査地周辺の地形	第35図 E低地2・3面全体図と土層柱状図
第7図 調査区全体の土層模式図	第36図 SA31、SD58
第8図 VI区全体図と土層柱状図	第37図 SD24
第9図 VI区SA・SD方位	第38図 SD112・113
第10図 VI①区全体図	第39図 SC106
第11図 VI②・③区全体図	第40図 E低地2・3面畦方位
第12図 VI③・④区全体図	第41図 SC110
第13図 VI⑥・⑦区全体図	第42図 SA37
第14図 VI⑥・⑦区土坑	第43図 SA38、109、SD62
第15図 I・II区、II・III区境立会い調査地点全 体図と土層柱状図	第44図 SD61、114
第16図 I・II区SA・SD方位	第45図 F低地畦方位
第17図 SA101、102、SD107	第46図 III③・④区境立会い調査地点
第18図 SA103、SA104・105、SC104・105	第47図 微高地の遺構全体図と土層柱状図
第19図 SA106	第48図 微高地の遺構割付図1
第20図 SA107・108	第49図 微高地の遺構割付図2
第21図 SA33、II区SD断面	第50図 微高地の遺構割付図3
第22図 SH101	第51図 微高地の遺構割付図4
第23図 SB101遺物出土状況	第52図 微高地の遺構割付図5
第24図 SD110、115、SX102	第53図 微高地の遺構割付図6
第25図 III区河道跡低地群2・3面全体図と土層 柱状図	第54図 弥生中期住居跡規模グラフ
第26図 A低地土層	第55図 SB03(29)遺物出土状況
第27図 A低地各調査面	第56図 SB17遺物出土状況
第28図 A低地1a面遺構	第57図 SB21遺物出土状況
第29図 A低地1b面遺構	第58図 SB22遺物出土状況
	第59図 SB26遺物出土状況
	第60図 SB27遺物出土状況
	第61図 SB28遺物出土状況

第62図	SB31遺物出土状況	第102図	土器 1
第63図	弥生後期住居跡規模グラフ	第103図	土器 2
第64図	SB19遺物出土状況	第104図	土器 3
第65図	SB34遺物出土状況	第105図	土器 4
第66図	SB35遺物出土状況	第106図	土器 5
第67図	古墳後期住居跡規模グラフ	第107図	土器 6
第68図	SB04、08、10、33遺物出土状況	第108図	土器 7
第69図	SB03(29)、17	第109図	土器 8
第70図	SB16、21、22	第110図	土器 9
第71図	SB24、26	第111図	土器10
第72図	SB27、31	第112図	土器11
第73図	SB28、39	第113図	土器12
第74図	SB07、09、101	第114図	土器13
第75図	SB19、20、23	第115図	土器14
第76図	SB18、35	第116図	土器15
第77図	SB25、34	第117図	土器16
第78図	SB04、37・38、41	第118図	土器17
第79図	SB01、08	第119図	土器18
第80図	SB10、13	第120図	土器19
第81図	SB13カマド、33、36、42	第121図	土器20
第82図	SB02、05、06、14、15、32、30・40	第122図	土器21
第83図	SB11・12・43、SD98・99、SA52	第123図	土器22
第84図	囲溝址、ST15	第124図	土器23
第85図	ST01、02、03	第125図	土器24
第86図	ST04・05、06、07、09・10	第126図	土器25
第87図	ST08、11、12、13・14	第127図	打製石鏃・未製品規模グラフ
第88図	微高地の土坑	第128図	磨製石鏃・未製品規模グラフ
第89図	微高地の溝跡	第129図	擦切片
第90図	SD63、69・74	第130図	黒曜石・下呂石剥片規模グラフ
第91図	SD64・65、82、遺物集中	第131図	扁平片刃石斧、太型蛤刃石斧規模グラフ
第92図	Ⅲ④・Ⅵ②区境交差道路立会い調査地点	第132図	黒曜石石核・原石規模グラフ
第93図	Ⅳ・Ⅴ区遺構全体図と土層柱状図	第133図	白玉
第94図	Ⅳ・Ⅴ区遺構全体図	第134図	石器 1
第95図	SC202、203、SA43・44	第135図	石器 2
第96図	SA45・46・47	第136図	石器 3
第97図	SD72・81、SA41・42	第137図	石器 4
第98図	SD79	第138図	石器 5
第99図	Ⅳ・Ⅴ区畦方位	第139図	石器 6
第100図	Ⅳ①区下層 SD83、縄文土器出土地点	第140図	石器 7
第101図	Ⅳ②・Ⅴ②区境交差道路立会い調査地点	第141図	石器 8

第142図	石器 9	第180図	木製品10
第143図	石器10	第181図	木製品11
第144図	石器11	第182図	木製品12
第145図	石器12	第183図	木製品13
第146図	石器13	第184図	木製品14
第147図	石器14	第185図	木製品15
第148図	石器15	第186図	木製品16
第149図	石器16	第187図	木製品17
第150図	石器17	第188図	木製品18
第151図	石器18	第189図	木製品19
第152図	石器19	第190図	木製品20
第153図	石器20	第191図	木製品21
第154図	石器21	第192図	木製品22
第155図	石器22	第193図	木製品23
第156図	石器23	第194図	木製品24
第157図	石器24	第195図	木製品25
第158図	石器25	第196図	木製品26
第159図	石器26	第197図	木製品27
第160図	石器27	第198図	木製品28
第161図	石器28	第199図	木製品29
第162図	石器29	第200図	木製品30
第163図	石器30	第201図	木製品31
第164図	石器31	第202図	木製品32
第165図	石器32	第203図	木製品33
第166図	樽木の規格	第204図	金属製品
第167図	杭幅／厚さ規模グラフ	第205図	Ⅲ①区 A・E 低地試料採取地点付近の 土層断面と試料採取層準
第168図	SA38、109、SD61土手横木幅／厚さ規 模グラフ	第206図	Ⅲ①区 A 低地のプラント・オパール分 布図
第169図	SA38、109、SD61土手杭幅／厚さ規模 グラフ	第207図	Ⅲ①区 E 低地のプラント・オパール分 布図
第170図	SA38杭木取り摸式図	第208図	Ⅳ①区 A 地点の土層断面とプラント・ オパール分布図
第171図	木製品 1	第209図	Ⅳ①区 B 地点の土層断面とプラント・ オパール分布図
第172図	木製品 2	第210図	Ⅳ②区 C 地点の土層断面とプラント・ オパール分布図
第173図	木製品 3	第211図	V②区 D 地点の土層断面とプラント・ オパール分布図
第174図	木製品 4	第212図	Ⅵ①区南地点の土層断面とプラント・
第175図	木製品 5		
第176図	木製品 6		
第177図	木製品 7		
第178図	木製品 8		
第179図	木製品 9		

- オパール分布図
- 第213図 VI①区中央地点の土層断面とプラント・オパール分布図
- 第214図 VI①区北地点の土層断面とプラント・オパール分布図
- 第215図 VI②区南地点の土層断面とプラント・オパール分布図
- 第216図 VI②区北地点の土層断面とプラント・オパール分布図
- 第217図 VI③区南地点の土層断面とプラント・オパール分布図
- 第218図 VI③区河道跡低地内の土層断面とプラント・オパール分布図
- 第219図 VI⑥区南地点の土層断面とプラント・オパール分布図
- 第220図 VI⑦区北地点の土層断面とプラント・オパール分布図
- 第221図 SD61土層断面とプラント・オパール分布図
- 第222図 I①区北・A地点（信号機北）の土層断面とプラント・オパール分布図
- 第223図 I①区A地点（信号機北）の土層断面とプラント・オパール分布図
- 第224図 箕輪遺跡のプラント・オパール
- 第225図 各低地堆積物の珪藻化石分布図
- 第226図 堆積物中の珪藻化石顕微鏡写真
- 第227図 A低地の花粉化石分布図
- 第228図 E低地の花粉化石分布図
- 第229図 箕輪遺跡の花粉化石
- 第230図 箕輪遺跡の花粉化石
- 第231図 出土した炭化種実
- 第232図 出土した骨片
- 第233図 箕輪遺跡出土材・木材組織光学顕微鏡写真1
- 第234図 箕輪遺跡出土材・木材組織光学顕微鏡写真2
- 第235図 箕輪遺跡出土炭化材組織の走査顕微鏡写真
- 第236図 石鏃の属性分類 模式図
- 第237図 下呂石製有茎鏃の剥離面写真
- 第238図 黒曜石製有茎鏃の剥離面写真
- 第239図 黒曜石・下呂石製有茎鏃の対比
- 第240図 大型蛤刃石斧の使用痕
- 第241図 磨製石包丁と石槌の使用痕
- 第242図 隠岐以東の主な黒曜石産地分布図
- 第243図 箕輪遺跡出土の黒曜石の産地判別図1
- 第244図 箕輪遺跡出土の黒曜石の産地判別図2

表

- | | |
|-------------------------|---------------------------|
| 1 周辺遺跡 | 15 種別の樹種構成 |
| 2 土器観察表 | 16 土木材の用材 |
| 3 石器観察表 | 17 弥生中期・古墳後期の木製品 |
| 4 木器観察表 | 18 古代中世・近世の木製品 |
| 5 金属器観察表 | 19 弥生中期の炭化材形状別の樹種構成 |
| 6 試料1g当りのプラントオパール個数 | 20 弥生後期の炭化材形状別の樹種構成 |
| 7 堆積物の特徴とその堆積環境 | 21 古墳時代の炭化材形状別の樹種構成 |
| 8 産出花粉化石一覧 | 22 土木材・その他割材などの時代別にみた樹種構成 |
| 9 炭化種実出土一覧（弥生中期） | 23 樹種同定結果一覧 |
| 10 炭化種実出土一覧（弥生後期） | 24 炭化材の樹種同定結果一覧 |
| 11 箕輪遺跡骨同定試料一覧 | 25 石材と長さ階梯属性 |
| 12 箕輪遺跡出土動物種部位観察表 | 26 石材と器体の二次加工技術属性 |
| 13 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果 | 27 石材と鏃身形態属性 |
| 14 箕輪遺跡樹種同定試料 | |

- 28 石材と茎デザイン属性
- 29 下呂石製・黒曜石製有茎鏃の属性比較
- 30 箕輪遺跡の主要弥生石器の位置づけ
- 31 産地原石判別群
- 32 箕輪遺跡出土黒曜石産地組成

- 33 器種別分析試料
- 34 器種別産地組成
- 35 遺構別産地組成
- 36 箕輪遺跡出土黒曜石産地推定結果

写真図版

PL 1	Ⅵ区の遺構	PL33	土器 2	PL65	木器 5
PL 2	Ⅰ区の遺構	PL34	土器 3	PL66	木器 6
PL 3	Ⅱ区の遺構 1	PL35	土器 4	PL67	木器 7
PL 4	Ⅱ区の遺構 2	PL36	土器 5	PL68	木器 8
PL 5	Ⅱ区の遺構 3	PL37	土器 6	PL69	木器 9
PL 6	Ⅲ区河道跡低地の遺構 1	PL38	土器 7	PL70	木器10
PL 7	Ⅲ区河道跡低地の遺構 2	PL39	土器 8	PL71	金属製品
PL 8	Ⅲ区河道跡低地の遺構 3	PL40	土器 9		
PL 9	Ⅲ区河道跡低地の遺構 4	PL41	土器10		
PL10	Ⅲ区河道跡低地の遺構 5	PL42	土器11		
PL11	Ⅲ区河道跡低地の遺構 6	PL43	土器12		
PL12	Ⅲ区河道跡低地の遺構 7	PL44	土器13		
PL13	Ⅲ区河道跡低地の遺構 8	PL45	土器14		
PL14	Ⅲ区河道跡低地の遺構 9	PL46	土器15		
PL15	Ⅲ区河道跡低地の遺構10	PL47	土器16		
PL16	微高地の遺構 1	PL48	土器17		
PL17	微高地の遺構 2	PL49	土器18		
PL18	微高地の遺構 3	PL50	石器 1		
PL19	微高地の遺構 4	PL51	石器 2		
PL20	微高地の遺構 5	PL52	石器 3		
PL21	微高地の遺構 6	PL53	石器 4		
PL22	微高地の遺構 7	PL54	石器 5		
PL23	微高地の遺構 8	PL55	石器 6		
PL24	微高地の遺構 9	PL56	石器 7		
PL25	微高地の遺構10	PL57	石器 8		
PL26	微高地の遺構11	PL58	石器 9		
PL27	微高地の遺構12	PL59	石器10		
PL28	Ⅳ区低地の遺構	PL60	石器11		
PL29	Ⅴ区低地の遺構 1	PL61	木器 1		
PL30	Ⅴ区低地の遺構 2	PL62	木器 2		
PL31	Ⅴ区低地の遺構 3	PL63	木器 3		
PL32	土器 1	PL64	木器 4		

第1章 調査の概要

1 発掘調査にいたる経緯

箕輪遺跡は上伊那郡箕輪町～南箕輪村の天竜川西岸に広がる水田跡を中心とした遺跡である。昭和26・27年からはじまる区画整理事業で多数の杭列や土器が発見されたことから遺跡の存在が知られるようになり、それ以後は箕輪町・南箕輪村教育委員会による発掘調査が断続的に行われている。

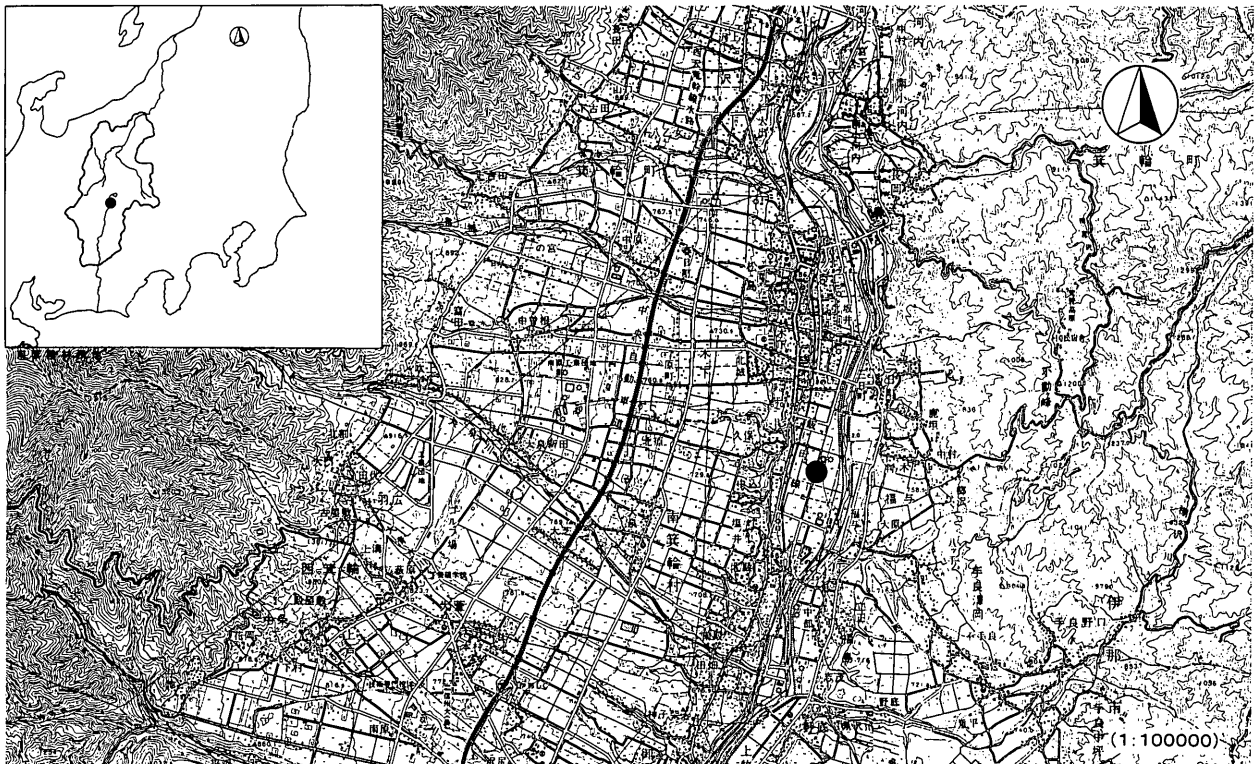
この度、箕輪遺跡を縦断するように国道153号松島・伊那バイパス建設が計画され、工事を管理する伊那建設事務所、長野県文化財生涯学習課、箕輪町教育委員会、箕輪町建設課による協議に係る発掘調査を長野県埋蔵文化財センターが担当することになった。これを受けて長野県埋蔵文化財センターでは、平成11年度に試掘調査を実施して遺構の存在を確認し、平成12・13年度は伊那バイパス予定地、平成14年度に松島バイパス4車線化に伴う未供用2車線部分、平成15年度に集落遺構のある現道下部分を調査した。遺跡地は水田地帯内であって耕作中は水没する恐れがあったので、水田の水が引く春先と秋～初冬に調査した。整理作業は平成14年度調査終了後から平成15度に継続し、平成16年度に印刷を行った。

2. 発掘調査・整理作業の経過と体制

(1) 発掘調査・整理の経過概要と体制

年次別の発掘調査・整理作業の概要と体制は以下の通りである。

- ・平成11年度試掘調査 12月6日～10日にかけて伊那バイパス予定地内に12本のトレンチを入れ、河道跡



第1図 箕輪遺跡の位置

低地内で水田跡、微高地で集落遺構を確認した。対象面積は約900㎡である。

[理事・所長] 佐久間 鉄四郎、[副所長] 山崎 悦雄、[管理部長] 山崎 悦雄 (兼)、[調査部長] 小林 秀夫、[管理部長補佐] 宮島孝明、[調査課長] 百瀬長秀、[調査研究員] 市川隆之・若林卓・伊藤友久

・平成12年度調査 平成12年度10月10日～平成13年1月26日にかけて伊那バイパス予定地北半分のⅠ・Ⅱ区・Ⅲ①・②区の約13000㎡ (延べ14500㎡) を調査した。Ⅰ・Ⅱ区で耕作関連遺構や杭列・溝跡・竪穴住居跡、Ⅲ①区河道跡低地内で水田跡数面、Ⅲ②区微高地で集落遺構を検出した。

[理事・所長] 佐久間 鉄四郎、[副所長] 春日 光雄、[管理部長] 春日 光雄 (兼)、[調査部長] 小林 秀夫、[管理部長補佐] 宮島 孝明、[調査課長] 百瀬 長秀、[調査研究員] 白居 直之・市川 隆之・上田 真・河西 克造・桜井 秀雄

・平成13年度調査 4月5日～同27日にⅢ③区の水田跡、同年9月17日～平成14年1月11日にⅡ区の残件部とⅢ③・④区北部の河道跡低地内水田跡、Ⅲ④区～Ⅳ区北部の微高地域の集落遺構、Ⅳ区南部～Ⅴ区の水田跡を調査した。調査面積は合計11250㎡ (延べ13000㎡) である。

[理事・所長] 深瀬 弘夫 (7月1日より)、[副所長] 春日光雄、[管理部長] 春日 光雄 (兼)、[調査部長] 小林 秀夫、[管理部長補佐] 田中 照幸、[調査課長] 百瀬 長秀、[調査研究員] 白居 直之・市川 隆之・桜井 秀雄・藤原 直人

・平成14年度調査・整理 松島バイパス4車線化に伴って箕輪遺跡北端部約2700㎡を4月5日～同26日に調査した。細長いトレンチ状の調査で部分的な水田遺構や杭列、土坑等を検出した。調査終了後に整理を開始し、記録類の整備や矛盾点のチェックと木製品の実測、土器洗浄・注記・接合作業を行った。

[理事・所長] 深瀬 弘夫、[副所長] 原 聖、[管理部長] 原 聖 (兼)、[調査部長] 小林 秀夫、[管理部長補佐] 田中照幸、[調査課長] 廣瀬昭弘、[調査研究員] 市川 隆之・青木 一男 (発掘)

・平成15年度調査 4月3日～同5月2日に現道切り替えに伴って、集落跡とその北側の河道跡内低地の1500㎡を調査した。整理は土器接合作業の続きと復元作業、土器・金属製品と平成15年度採取木製品の実測・トレース、遺構トレースと製版作業、掲載写真の選択、遺物の写真撮影を実施した。

[理事・所長] 深瀬 弘夫、[副所長] 原 聖、[管理部長] 原 聖 (兼)、[調査部長] 市澤 英利、[管理部長補佐] 上原 貞、[調査課長] 廣瀬昭弘、[調査研究員] 市川 隆之・桜井 秀雄 (発掘)

なお、広域に渡る調査のため概略以下のように調査を分担した。平成12年度Ⅰ～Ⅲ②区水田域—白居直之・河西 克造・上田 真、Ⅲ②区集落域—市川 隆之・桜井 秀雄、平成13年度Ⅲ③区水田域—白居直之 (市川 隆之・藤原 直人)、Ⅲ③区集落域—市川 隆之、Ⅳ区集落域—桜井 秀雄、Ⅳ・Ⅴ区水田域—白居 直之・市川 隆之、平成14年度Ⅵ区—市川 隆之・青木 一男、平成15年度Ⅲ⑤区水田域—市川 隆之、Ⅲ⑤・Ⅳ③区集落域—市川 隆之・桜井 秀雄である。調査実施全体の調整は平成12・13年度白居 直之、平成14・15年度市川 隆之があたった。また、整理作業は復元—徳永 哲秀、遺構・遺物整理—市川 隆之が担当した。発掘・整理作業に関わる業務委託は以下のものがある。

測量・空撮 (株) ジャステック プラント・オパール・樹種同定分析・放射性炭素年代測定・種子同定 (株) パレオ・ラボ 石器実測・使用痕観察 (株) アルカ 木器・土器・石器製版 (有) アルケリサーチ 黒曜石産地同定 沼津高専望月明彦、遺物写真撮影 (株) 長野フジカラー

上記委託のなかで打製石鏃の調整や石器について (馬場 伸一郎— (株) アルカ)、石器使用痕について (高橋 哲— (株) アルカ)、プラントオパール分析 (鈴木 茂— (株) パレオ・ラボ)、樹種同定 (三村 昌史— (株) パレオ・ラボ)、炭化材樹種同定 (植田 弥生— (株) パレオ・ラボ)、C14年代測定 (山形 秀樹— (株) パレオ・ラボ)、種子分析 (新山 雅広— (株) パレオ・ラボ)、獣骨分析 (黒澤 一男— (株) パレオ・ラボ)、黒曜石産地同定 (望月明彦—沼津高専) は分析結果を掲載した。

3. 発掘調査・整理の方法

埋蔵文化財センターでは調査の統一性を図るために「調査の方針と手順」を作成しており、今回の調査もこれに準じた。その方法の概要は以下の通りである。

(1) 発掘調査の方法 (第2図)

遺跡名と遺跡記号 登録遺跡名は「箕輪遺跡」で、遺跡名ローマ字表記の一部に、センターでの県内地区記号で上伊那を指すアルファベット「H」を冠して「HMW」という遺跡記号を用いた。

調査範囲と調査区 調査対象域が細長いため、いくつかの調査区に区切った。伊那バイパス部分は交差道路で区切ってⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区、さらに西側を①区、東側を②区とし、Ⅲ区のみは途中農道で区切って北西から①・②区、北東から③・④区、平成15年のⅢ・Ⅳ区現道下調査部分はⅢ⑤区、Ⅳ③区とした。後続した松島バイパス調査地はまとめて伊那バイパスに継続するⅥ区と呼称した。

調査グリッドの設定 調査では位置を示したり、測量の基準線とするために調査グリッドと呼ばれる方眼を調査域全体に設定した。調査域北西部の旧国家座標数値 $X = -11600$ 、 $Y = -45800$ ラインを基準として200m 四方の大々地区を設定し、そのなかを40m 四方の大地区を 5×5 の25個、さらに8m 四方の中地区と2m 四方の小地区に区分した。また、松島バイパスは伊那バイパス基準線から北側に松島バイパスⅢ区と伊那バイパスⅠ区が重なるように大々地区を設定した。グリッド呼称方法は第2図の通りである。

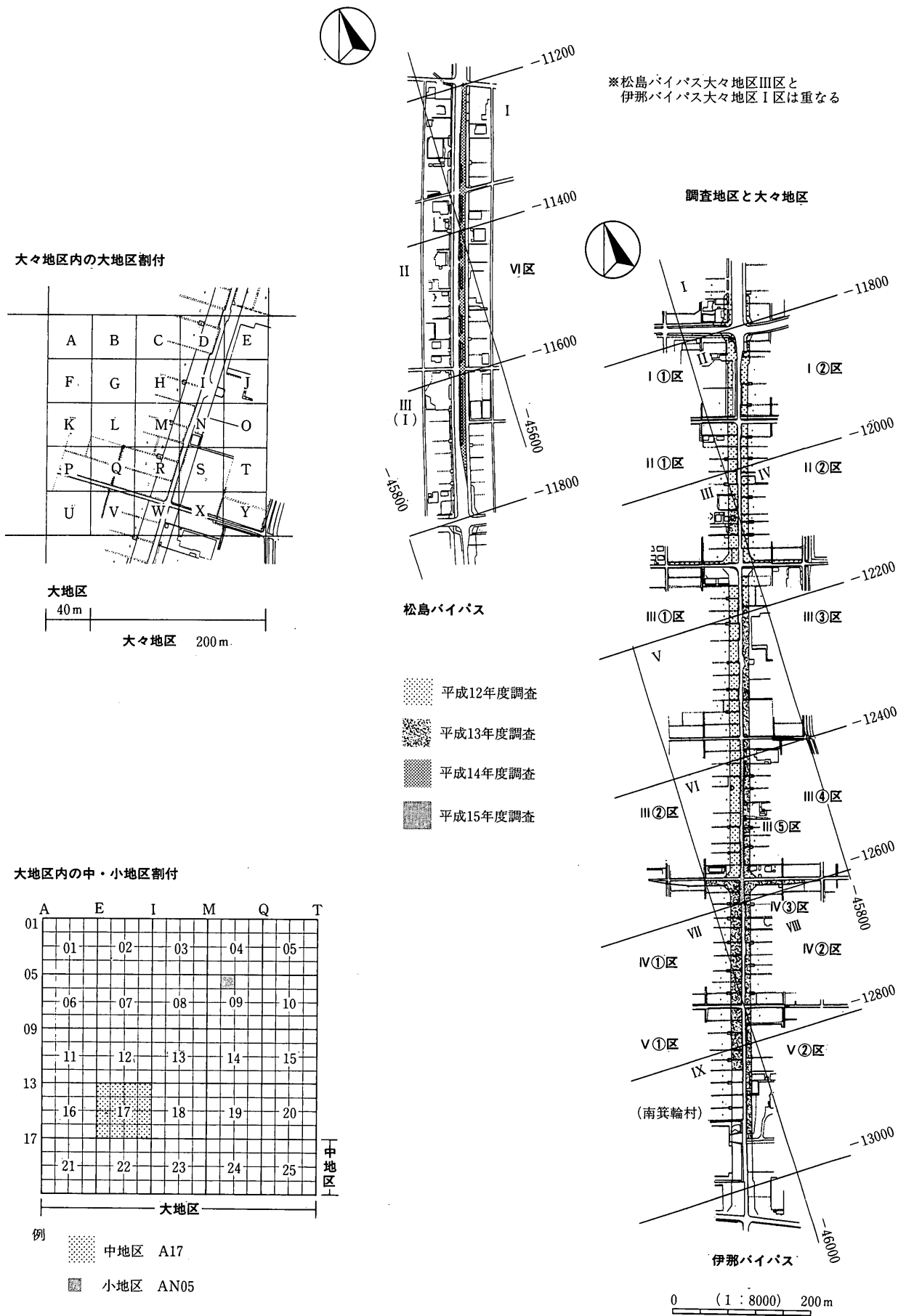
遺構記号 個々の遺構はアルファベットの遺構記号とアラビア数字を組み合わせて表記した。遺構記号にはSB (方形・円形の竪穴住居跡や竪穴建物跡)、SK (円形・方形・楕円形の土坑・柱穴跡などの落ち込み)、ST (柱穴跡が方形に配列する掘立建物跡)、SA (杭や柱穴跡が列状に並ぶ杭列や柵列跡)、SD (溝跡)、SQ (落ち込みを伴わない土器や石器の集中)、SC (畦跡)、SH (集石遺構)、SX (土坑以外の性格不明・その他の遺構) を用いたが、遺構記号は検出時に付けたために実態と異なる場合がある。例えば、SBを冠したものの、実態は土坑 (SK) と考えられるものなどである。今回は一部遺物整理が先行したこともあり、整理時の混乱を避けるために調査時の遺跡記号をそのまま用い、掘立柱建物跡の柱穴跡はSK、囲溝跡にはSD番号を併記している。

(2) 発掘調査の手順

①. 水田遺構の調査

水田域と予想された調査地区では、調査区壁際に重機で試し掘りのトレンチを掘り、その土層観察から調査面と調査方法を決定した。水田遺構には水田面が残るものと、耕作土中・下面、耕作土下方にのみ施設や痕跡が残るものがあるが、それぞれ次のような手順で調査した。まず、水田面が残存する例は泥炭層被覆のものがあり、Ⅲ区河道跡低地2・3面等が該当する。水田耕作放棄後に繁茂した植物が湿地内の水漬け状態で未分解のまま堆積し、水田面を覆ったと考えられたもので、断面の土層観察では泥炭層下に粘土質耕作土があって、境界面に耕作や足跡の細かな凹凸畦跡が認められた。ただし、踏み込み跡はモヤ状に下層耕土がめくりあがるように認められたところもあり、放棄された水田面の所産と再耕作に伴う泥炭層耕作時の耕作痕が重なっている可能性がある。調査は泥炭層中まで重機で掘削し、人力で泥炭層を除去して水田面の細部の凹凸を掘り出しながら耕作土上面を露呈した。水田面の凹凸から看取された畦跡を白色農業用ロープで示し、写真撮影と測量を実施した。最後に畦内を調査した。

次に耕作土中・下面検出の遺構である。堆積土層が薄かったり、長期に連続耕作されたと考えられる連続する粘土質土層中に、畦基部の礫や杭が見つかった例で、Ⅲ区河道跡低地内の石列、Ⅳ・Ⅴ区の石列、



第2図 調査地区とグリッド配置

杭列などが該当する。個々に検出されたことから個別に精査・記録した。また、耕作土と捉えられる土層下面に残る耕作の痕跡や畦痕跡（いわゆる擬似畦畔跡）と捉えた遺構があり、Ⅳ・Ⅴ区水田跡が該当する。この水田跡は泥炭層起源の黒褐色土を耕作土として下層の灰色シルト土層と色調差が大きく識別しやすいことから調査できたが、他地点の色調・土質が類似する土層間では調査できなかった。

最後に耕作土下方の遺構であるが、本来耕作された土層より下層に残存した痕跡と捉えたもので、杭、酸化鉄集積や溶脱の転写から認められる畦跡痕跡などがある。これらは自然堆積層と捉えた灰色シルト層・砂質土の上面で個別に検出し、個別に精査した。なお、酸化鉄集積・溶脱層による畦跡の検出は偶然発見されたものばかりで、トレンチでは捉えきれなかった。

②. 微高地域の集落遺構の調査

微高地域はⅤ層上面まで重機で掘削し、表面を薄く削って遺構を探す検出作業を行い、遺構の平面形や重複状況を確認した。次に試し掘りの溝（トレンチ）を掘り、他遺構との重なりや残存状況、遺物の出土状態を確認し、この所見によって掘り下げの手順を決定した。この掘り下げ後に断面の土層を記録し、遺物は破片で少量しか出土しない場合はまとめて取上げたが、遺物が多い場合は出土状況を記録する写真や測量図を作成した。その後、掘り上がった状態で写真と測量の記録を行ったが、堅穴住居跡では床面まで掘り下げて柱穴・貯蔵穴等やカマドといった諸施設を検出・調査し、最後に床面下（掘り方）を掘り出して写真撮影する手順を踏んだ。

③. 測量の方法

遺構測量は8m四方の調査グリッド（中地区）杭を基準線とした手取り測量、業者委託の単点測量、業者委託の空撮写真を用いる空測を用いた。空測は平成12年度の水田跡の記録に用いたのみである。手取り測量は測量基準線に物差しをおいて測量するもので、杭を設定する必要があるものの、追加・訂正が容易であった。遺物出土状況の記録や重複する堅穴住居跡・穴跡の測量や土層の断面測量、単点測量は掘り上がった遺構や分布が散漫な水田遺構の一部測量に用いた。単点測量は調査区内の位置・標高が明かな複数点を元に測量機械で必要な測量点の国家座標 X・Y 値、標高をデジタルデータとして計測する方法で、今回は遺構にマークした点を測量業者に委託して測量し、プリントアウトした測点を調査担当者が結線した。単点測量は、業者に委託したため頻繁な描き換えや追加が困難であるが、広域の測量は簡便であった。各測量方法はそれぞれ一長一短があるので、調査状況と併せ相互に補うように用いた。尚、方位は旧国家座標にもとづいて計測している。

④. 写真撮影

写真はモノクロ・スライド35mm、モノクロ・リバーサル6×7の4種類のフィルムで撮影した。同一対象に複数フィルムを使用したのは多様な利用方法と長期保存を想定したことによる。これ以外に平成12・13年度にラジコンヘリコプターの空撮を実施したが、平成14・15年度の調査では実施していない。

(3) 整理作業の方法

調査記録類の矛盾や書き洩れを補ったり、遺物洗浄・注記などを行う基礎整理を平成12・13年度冬季に実施し、記録類相互を調整して遺跡の所見を総合し、発掘成果を公表できるように整備する報告書へむけての整理作業を平成14・15年度に実施した。

① 基礎整理

図記録は調査中の測量誤差や、同一遺構で作製した図面をまとめ、矛盾を調整したり、記載洩れを補った。その際に図表題や縮尺・標高などの洩れ以外の矛盾点については、遺跡で作製された原図に直接手を加えず、トレーシングペーパーに写し取って修正した2次原図と呼ぶ図面を遺構毎に新たに作成した。ま

た、写真類は現像し、35mm・6×7モノクロネガはべた焼きプリントを添付し、35mm スライドはマウント付け、6×7スライドはマウントを付けずにアルバムに収納した。アルバムには撮影日・地区・撮影内容・撮影方向など現場で記録した台帳を転記した。さらに、これらの記録に残らない調査経過や遺構認定根拠や、遺構構造の所見については遺構担当者を決めて文章記録を作成した。

遺物は、扱いが異なる木器と金属器を選別し、木器、石器・土器はそれぞれ洗浄した。土器・石器は直接出土地点を細かい字で記入する注記作業を行ったが、木器は乾燥すると形が崩れるために常に水漬けとし、出土地点はプラスチック製荷札に記入して付けた。金属製品はX線写真を撮影した後に、物理的な方法で錆を落として水分と塩分を抜き出して樹脂を含浸させる保存処理を行った。

②. 報告書作成作業

上記の個別記録類を総合化して報告書にまとめる作業である。図面類は2次原図を元に報告書掲載用の作業図をつくり、併せて遺構全体図や発掘地点の位置図、土器や石器など図化した遺物の位置を示す図を作製した。これをトレースし、台紙に貼り付けて製版した。写真類は報告書掲載写真を選択してプリントし、写真の掲載範囲の枠を指示するトリミング作業を行って報告書掲載に備えた。

遺物は土器・石器・木器・金属器に大別して整理を進めた。土器は破片をつなぐ接合作業を行い、遺構別の出土土器の量計測や実測する土器の選別と台帳作成を行った。実測土器は遺存度の良好なものを中心に選択し、特徴的なものを補助的に加えた。これらは欠損部を補うものと、一部補強する復元作業を行い、土器を図化する実測作業を行った。実測は手実測で1/1の縮尺で当センターの実測用紙に鉛筆で図化した。石器は遺構ごとに出土種類と量を計測し、併せて実測遺物を選別した。図化にあたり、出土量が多いことから整理作業の便を図るため実測からトレースまで業者委託した。木器は中世以後の可能性があるものは調査段階ですでに選択して採取したため、できるだけ実測することとしたが、古墳時代以前の木製品はほぼ全て採取してきたので改めて実測するものを選択した。実測は水に濡れても収縮したり歪まない1mm方眼のセクションフィルムに1/1スケールで鉛筆を用いて実測した。金属器は保存処理後に実測と拓本を行った。上記の作業を通じて観察した結果を観察表にまとめた。

次に土器・木製品の実測図は掲載するサイズに合わせてトレースを行ったが、量が多いことから整理作業の便を図るために業者委託によりデジタルデータとして編集した。また、これらの作業と並行して比較的出土量の多い遺構について実測した土器・石器の出土位置を示す図を作成し、実測土器・石器・木器・金属器の一部を報告書掲載用写真を撮影した。以上の作業と平行して、所見記録類も報告書掲載用に加筆する作業を行い、最後に報告書に掲載した番号を記入し、台帳を整備した。

4. 指導者・協力者

調査・整理にあたり以下の方々の協力・助言・指導を得た。

伊那建設事務所、箕輪町建設課、箕輪町水道課、箕輪町教育委員会（柴 登巳夫・柴 秀毅・根橋 とし子・有賀 一治・赤松 茂・日野 和政）、南箕輪村（友松 諭）、辰野町教育委員会（福島 永）、伊那市教育委員会（飯塚 政美）、石川 日出志、白居 直之、神村 透、直井 雅尚、馬場 伸一郎、丸山 徹一郎、山下 誠一、山田 昌久

第2章 箕輪遺跡の概要と周辺の遺跡

第1節 箕輪遺跡の概要

1. 箕輪遺跡の調査歴概要

箕輪遺跡は古くから水田遺跡と知られ、長い調査歴がある。『箕輪町誌』を参照にこれまでの調査概要を簡単に紹介する。箕輪遺跡では大正5年、昭和11年に打製石斧が拾われていたが、昭和26・27年から始まる耕地整理事業で多数の土器・石器が出土した。地元の小川守人・小池修兵氏は収集と調査に努め、昭和28年12月に上伊那文化財保護調査会伊藤泰輔・北村勝雄氏、翌年1月に両名と藤沢宗平氏等がこれらの遺物等を視察し、同月に箕輪遺跡と命名して遺跡の発見届が提出された。杭の散布状況などから次第に広大な遺跡であることが知られるようになり、昭和29年には新聞で紹介され、箕輪史学会は『箕輪史資料集』を作製したり、出土遺物を一志茂樹・大場磐男氏等さまざまな研究者が見学した。上伊那教育事務所中尾猛夫氏は箕輪遺跡のスライドを作製して箕輪小学校PTA総会で上映し、昭和30年には箕輪町公民館で箕輪遺跡について藤沢宗平・八幡一郎氏の講演会も行われている。その後、箕輪遺跡では昭和40年に小清水第1地点、55年に大清水第1地点の発掘調査がはじまり、以後は断続的に箕輪町教育委員会・南箕輪村教育委員会により発掘調査が行われてきている。

2 箕輪遺跡に関するこれまでの知見

これまで箕輪遺跡に関する資料には耕地整理時の採取遺物・杭列分布の記録、箕輪町・南箕輪村教育委員会による発掘調査報告がある。前者は広域の傾向を知る情報が得られ、後者は狭い地点ながら遺跡の構造的情報が得られるので、以下に二つの資料の情報を簡単にみておきたい。

(1) 耕地整理時の採取遺物とその分布調査記録

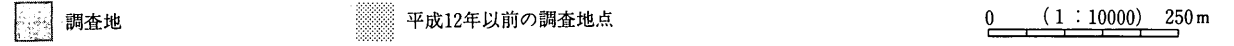
箕輪遺跡で最も古い遺物は箕輪町誌に有舌尖頭器と紹介される石器があるが、出土地点や認定の詳細はわからない。続く縄文時代では縄文中期初頭・晩期の土器が洪田・穴田・久保下など遺跡西部と北側の帯無川の押し出し先端付近、晩期土器・条痕文土器は箕輪遺跡西部段丘下周辺で採取され、縄文時代と思われる石器は穴田・馬場地区で石匙、弥生の可能性もある乳棒状石斧の出土が報じられている。

弥生時代は中期前半の阿島式土器が御室田地籍から出土し、中期後半の土器は今回の調査で集落遺構が確認された御室田と曾根田地区から縦羽状文甕・コの字重台付甕等、後期の土器は馬場・穴田・大清水・曾根田・御室田地区など広い範囲で採取されている。石器は大型蛤刃石斧・扁平片刃石斧・打製石斧・粗製横刃型刃器・抉入柱状片刃石斧が採取されており、大型蛤刃石斧・扁平片刃石斧は中期後半土器を出土した御室田地籍から、抉入石斧と刃器は北部の穴田地区で採取されている。打製石斧は弥生時代とは断じ得ないが広範囲で採取されている。石包丁出土は少ないが、この点は藤沢宗平氏も指摘している。

古墳前期土師器は採取品にみえないが、古墳後期土器類は多く採取されている。出土分布図には単に土師器とのみ掲載されていて古墳時代の土器か断じ得ないが、広範囲に認められ、なかでも御室田地区から



※太字は字名



※遺跡内の地形図は 1991『箕輪遺跡 7次』箕輪町教育委員会 を参照した。

第3図 調査地点と周囲の字名・遺跡

はおびただしい高杯出土が伝えられる。その後の古墳後期後半～奈良時代の土器は判然とせず、9世紀頃の内黒杯・灰釉陶器椀などの出土が多く知られる。平安後半期の所産は判然とせず、中世遺物は陶磁器・内耳鍋・カワラケなどがあり、石臼は北部の大清水・小清水地籍、内耳鍋は箕輪遺跡の東側曾根田地区で多く採取されている。なお、木製品は時期不明のものが多いが、杭・田舟・鋏・田下駄・斎串・人形・馬形・漆器容器などが採取されている。斎串・人形・馬形は大清水地籍の湧水地付近からの採取という。

これまでに、この採取遺物分布状況から時代が下るに従って次第に分布が広がる傾向が指摘されている。また、小池修兵氏は遺跡内が縄文晩期以後に天竜川で荒らされていない可能性を述べ、藤沢宗平氏は箕輪遺跡では長い時代の遺物が採取されているが、連続関係がスムーズでない点を指摘する。このことは今回の調査でも感じられたことで、必ずしも水田が安定的に営まれていない可能性を示唆するか。

なお、小池修兵氏の「箕輪遺跡の内容について」(1970『箕輪遺跡 調査第1集』に収録)掲載図には、住居址・住居址地帯と記載される地点が3箇所ある。そのうち、御室田地区隣接地点は今調査で集落跡が確認できたところと一致する。二つ目の小清水地区地点は町田橋南側周辺に示され、今回の調査地区では松島バイパスⅥ区南端からⅠ区東側周辺にあたる可能性がある。この周辺での住居跡検出はないが、今回南のⅡ区で1軒ながら竪穴住居跡がみつかった。3つ目の久保下地籍は全く様相が不明である。

(2) これまでの発掘調査の成果

これまでに遺跡北部が箕輪町教育委員会、南部が南箕輪村教育委員会により部分的に調査されており、ここでは概要を紹介しておく。なお、参考に報告書の図や記述から杭列方位を掲載したが、方位基準が磁北か真北なのかは不明である。また、丸内のアラビア数字番号は第3図の地図内番号に一致する。

①1980『箕輪遺跡 調査第Ⅰ集』箕輪町教育委員会

国道153号線バイパス建設で小清水(A)、下水道建設に伴って大清水(B)2地点が調査された。小清水地点ではN50°W方位の杭列が検出され、杭列は出土土器から平安時代以後～近世初頭の間と推測されている。大清水地籍では遺構検出はないが、同様に平安時代以後の土器等が採取されている。

②1981『箕輪遺跡 調査第Ⅱ集』・1982『箕輪遺跡 調査第Ⅲ集』箕輪町教育委員会

国道153号松島バイパス南端から西側の国道153号線に接続する箕輪美篤線建設に伴って、飯田線を挟んだ東西部分が1981年、飯田線東側が1982年に調査された。1981年調査では上層遺構として西端の現耕土直下でN75°W方向、T4区でN35°EとN23°E方向の杭列が検出され、下層遺構は西端T2区東端の河道跡低地?内泥炭質層下の灰色土層で田下駄などの木製品が出土した。1982年調査では第1調査地区の現耕作土層直下でN11°EとN82°W方向の水路に伴うとされるT字状杭列、それと併行するN80°W方向の道跡と報じられる木材集中が検出された。第2地点では幅2.5～3.0mのN72°W方向の杭列が検出されている。出土遺物は須恵器蓋・灰釉陶器・近世陶器、曲物底?不明木製品若干がある。

③1983『箕輪遺跡 第Ⅳ集』箕輪町教育委員会

田中城跡伝承地の調査で、区画整理で壊されて現在は土塁跡とされる土盛りが僅に残る。第2トレンチで黒色土の落込みが確認できた以外は砂礫層が露呈して遺構・遺物の出土はみられない。

④1991『箕輪遺跡 第5次調査』箕輪町教育委員会

箕輪遺跡北端近くの木下公民館建設に伴ってトレンチ状に調査された。遺構・遺物の検出はないが、プラント・オパール分析から河道跡低地内上部土層で稲作の可能性が想定された。なお、プラント・オパール分析を行った外山秀一氏は箕輪遺跡の地形についても触れており、空中写真に残る土壌色調の濃淡から河道跡と中洲状微高地、埋没した自然堤防などが存在することを指摘した。

⑤1991『箕輪遺跡 第6次調査』・『箕輪遺跡 第7次調査』1997『箕輪遺跡 第10次調査』

箕輪遺跡北東部、天竜川近くの下水道終末処理場予定地が継続的に調査されている。6次調査は処理場北部を対象とし、北からN60°Eと直交N20°W、やや離れてN35°Eの3条の杭列が検出された。南端の杭列は7次調査の杭列と形状が類似し、関連するものと想定されている。

7次調査は6次調査地点から60m南にあたり、2面の遺構検出面がある。上層遺構面では砂礫層に被覆された水田跡と杭列が見つかった。杭列はN35°E、N38°E、畦状遺構はN38°Eで杭列は6次調査南端検出杭列との関連が想定されている。この上層水田を被覆する砂礫層は東側へ深く傾斜し、天竜川の氾濫によるものと推測されている。下層遺構面は上層水田の暗茶褐色粘土層とその下の青灰色砂層・シルト層下にある黒褐色土上面で溝のみ検出され、古墳時代の長胴化しつつある甕が出土した。この溝跡もN38°E方向である。なお、上層の畦状遺構は内部より寛永通宝が出土し、近世以後の所産と報じられている。

10次調査は7次調査南側にあたり、7次調査から連続する杭列と畦状遺構が検出された。検出土層や遺構の状況は7次にほぼ同じである。畦状遺構はN30°W、杭列はN36°Eである。

⑥1994『箕輪遺跡 第8次調査』箕輪町教育委員会

国道153号バイパス南端から天竜川を渡る箕輪橋に至る道路部の調査である。松島バイパス南端隣接地で河道跡低地が見つかり、上層で杭列と水路状遺構が検出された。杭列はN73°W方向のもので一段落ちる段差に沿う。水路状遺構は兩岸に杭を密に打設し、緩やかなカーブを描く。

⑦1994『箕輪遺跡』南箕輪教育委員会

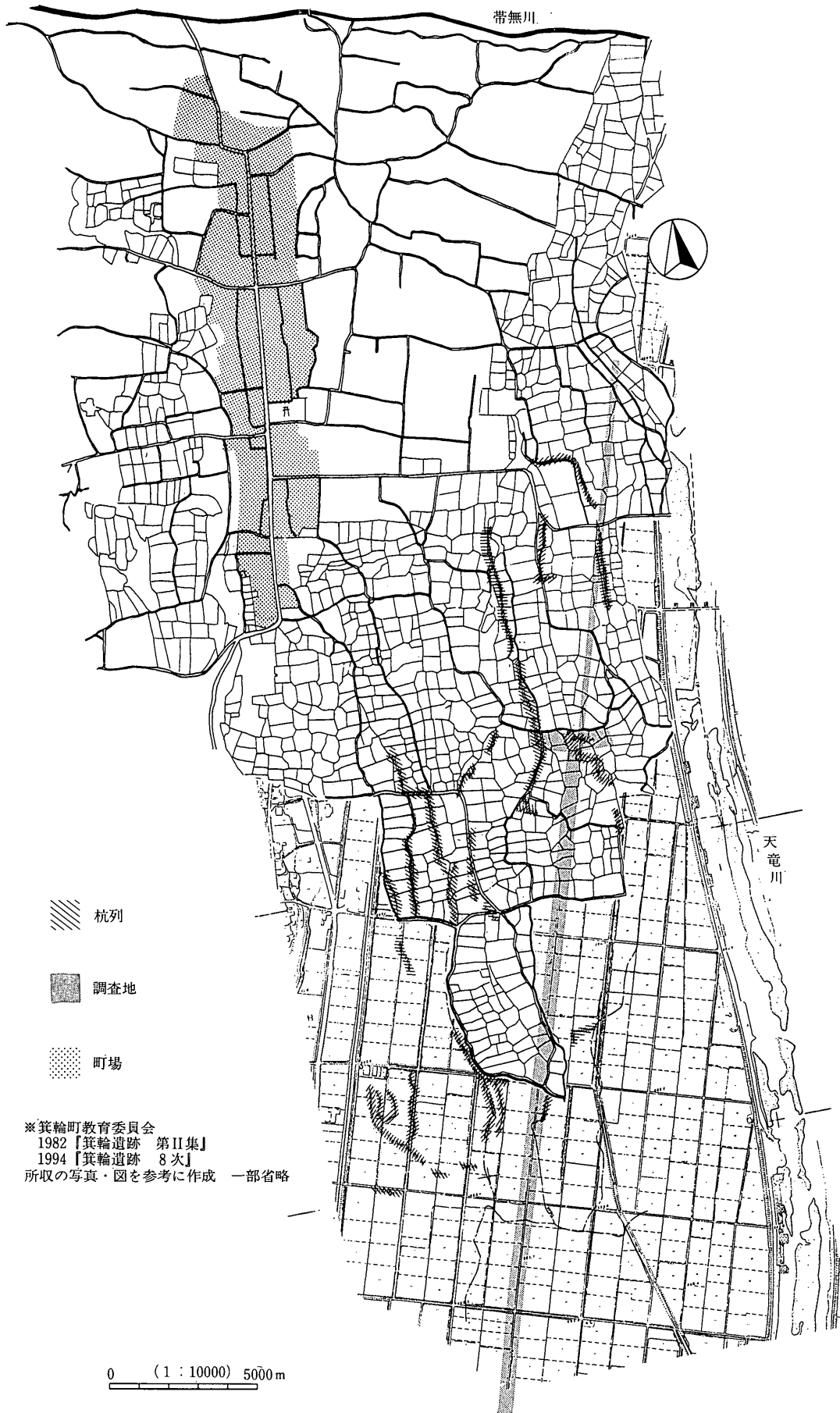
今調査域のⅣ区西方にあたり、トレンチ調査が行われた。遺構は検出されなかったが、埋積河道跡低地内でプラント・オパール分析が実施され、地表面下50cm前後にある黒色粘土層以上でプラント・オパールが検出され、下層は検出されていない。今回のⅣ・Ⅴ区調査結果と類似する。

⑧1993『箕輪遺跡』南箕輪村教育委員会

今調査Ⅴ区南端の南西隣接地にあたり、工場用地造成に伴って最も広い面積が調査された。河道跡低地3本があり、そのなかで黒色土3層、粘質黒土4層、粘質黒土6層の3面調査されている。3層が最も広く調査され、溝跡・杭列などがみついている。3層上部で古代～近世・現代陶磁器、下部で古代～中世の遺物が採取され、3層の河川跡は平安～鎌倉時代以前、他の遺構は鎌倉時代以後と捉えられている。4層では横材を伴う杭列、畦跡、河川跡が検出され、古墳時代～平安時代と捉えられている。6層は弥生土器片(S字甕)が採取された。この調査地区の様相は今調査のⅢ区北の河道跡低地と類似し、河道跡低地を中心に水田化が始まり、次第に水田域が拡大している状況が知られた。なお、3層の水路状遺構では割杭から丸木杭への変化が指摘されたが、今回の調査でも同様の傾向が確認できた。

参考文献

- 小池修兵1954「箕輪遺跡の内容について」(1970『箕輪遺跡 調査第1集』に収録)
- 藤沢宗平1954「箕輪遺跡の今後」(1970『箕輪遺跡 調査第1集』に収録)
- 柴登巳夫1983「箕輪遺跡」『長野県史 考古資料編 主要遺跡(中・南信)』長野県史刊行会
- 島田恵子1981「第4章 既出遺物」『箕輪遺跡 調査第Ⅱ集』箕輪町教育委員会
- 箕輪町教育委員会1982『箕輪遺跡 調査第Ⅲ集』箕輪遺跡
- 箕輪町教育委員会1983『箕輪遺跡 調査第Ⅳ集』
- 箕輪町教育委員会1991『箕輪遺跡 第5次調査』
- 箕輪町教育委員会1991『箕輪遺跡 第6次調査』
- 箕輪町教育委員会1991『箕輪遺跡 第7次調査』



※箕輪町教育委員会
1982『箕輪遺跡 第II集』
1994『箕輪遺跡 8次』
所収の写真・図を参考に作成 一部省略

第4図 箕輪遺跡北部周辺旧公図と区画整理検出杭列

箕輪町教育委員会1994『箕輪遺跡 第8次調査』

箕輪町教育委員会1997『箕輪遺跡 第10次調査』

南箕輪村教育委員会1993『箕輪遺跡』

南箕輪村教育委員会1994『箕輪遺跡』

(3) 旧公図からみた箕輪遺跡 (第4図)

箕輪遺跡周辺は昭和26年以後の区画整理事業で、かつての姿を一変させている。区画整理以前の姿は旧公図や終戦前後の米軍航空写真にしか留めていないが、今回は箕輪町教育委員会1997『箕輪遺跡 8次調査』掲載の木下周辺の旧公図写真から図を起こし、箕輪町教育委員会1982『箕輪遺跡 第Ⅱ集』に掲載されている区画整理時に発見された杭列分布図と重ねてみた(第4図)。この図は写真の写りが悪い北部や色調が類似する畑・民家は判読できず、縮小率差の歪みもあるが、次のような様相が知られる。

まず、遺跡周辺の道路には部分的な帯無川南側のN14°E方向の道路と、木下地籍町屋を貫く現国道を代表とするN5°Eのものがある。前者は扇状地に部分的に認められ、後者のN5°E前後と直交方向の杭列は水田域を含む範囲に分布する。杭列はN2~5°W方向の南北方向の杭列が多く、等間隔に配置されるようにも見受けられる。その方位は微妙にずれるものの、後者の道路方位に近似する。一方、東西方向の杭列もあるが、短く湾曲するものが多い。

これまでに区画整理時に検出された杭列が区画整理直前まで使用されていた灌漑用水の片側ないし、両岸に重なって存在するものが多いことは指摘されている。今回、比較材料とした『箕輪遺跡 第Ⅱ集』掲載の杭列分布図の作成方法は不明ながら、杭列の多くはほぼ公図に一致することは間違いなく、箕輪遺跡の杭列も大部分は区画整理以前の水田区画が形づくられた段階以後の所産と考えられる。また、地形ではなく、N2~5°W方位か直交方向という方位を重視した計画的なものとも思われる。ちなみに杭列に近い国道153号に沿う木下町屋は17世紀初頭の洪水を契機に箕輪遺跡内田中城跡地から陣屋を移転するに際して町屋割りされたとも伝える。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

1. 周辺の遺跡（第5図）

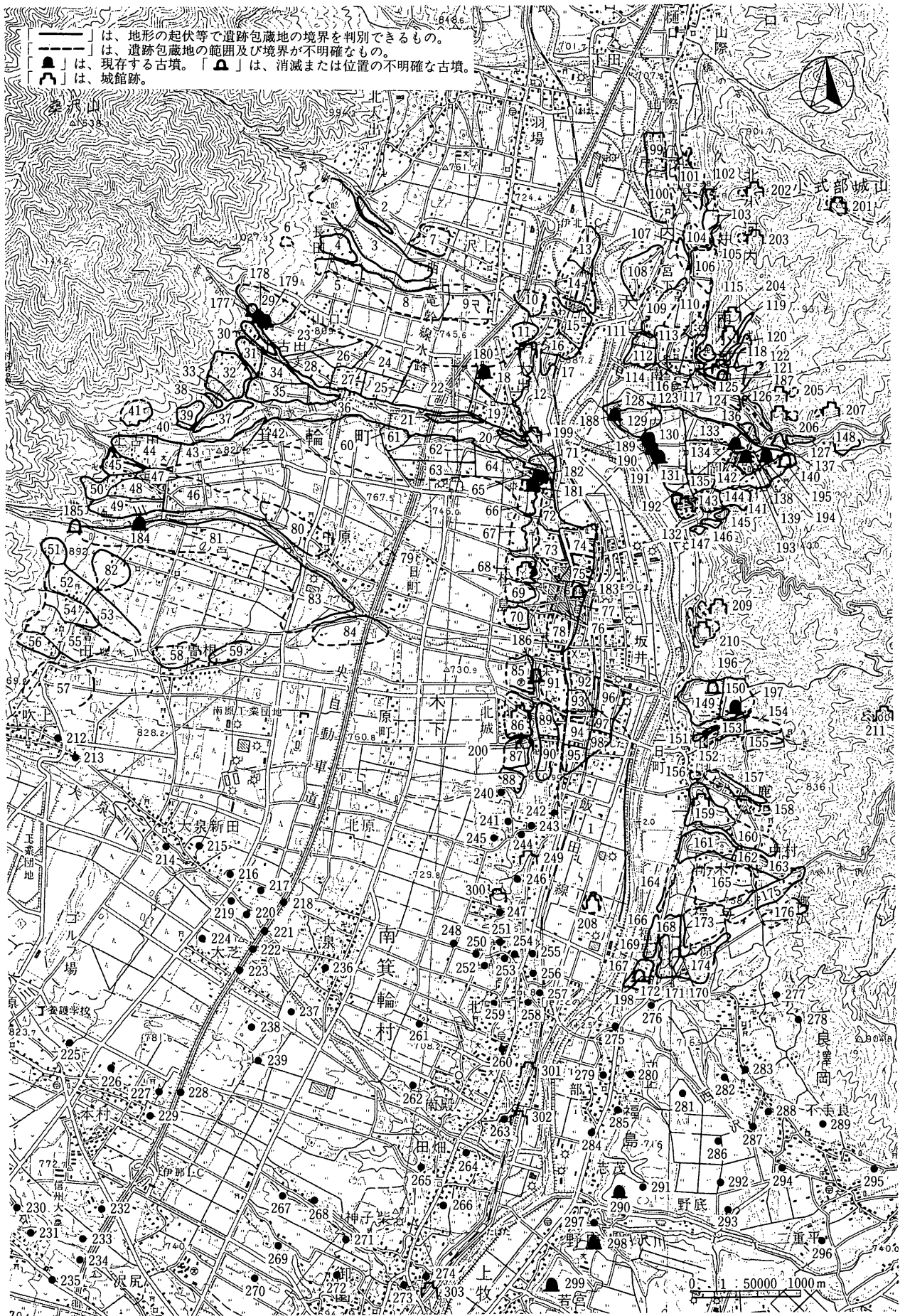
箕輪町から南箕輪村にかけての天竜川西側の遺跡は天竜川に面した段丘先端や沖積地や、扇状地帯の段丘上の中小河川沿いに分布し、河川から離れた段丘中央にはほとんど遺跡が分布しない。これらの遺跡を時期別数で比較すると縄文時代が最多で、平安時代、弥生時代、古墳時代と続く。比較的長期にわたる人間の活動の痕跡はあるが、仔細にみると弥生中期、古墳前期、平安後期など遺跡が少ない時期があって時期毎に遺跡数の増減が認められるようである。

旧石器時代の遺跡は西山麓や段丘上の中小河川に面した地点で竜ヶ崎、堂地遺跡、遺跡南西方向の段丘上に著名な神子柴遺跡がある。縄文時代は天竜川に面した段丘先端や低位段丘、帯無川扇状地先端付近に数多く分布し、帯無川以南の段丘先端には上の林遺跡、北城、南城、南箕輪村に久保上ノ平、天伯遺跡、その下の低位段丘と扇状地端では箕輪町鳳輦路・天王・下町・苦谷遺跡などがある。神子柴遺跡で縄文早期、北高根 A 遺跡は早・前・後・晩、大芝東遺跡で後・晩期、南城遺跡は前期の各土器が出土しているが、大部分は縄文中期の所産で、段丘先端に500m 前後の間隔で並ぶ。ただし、上の林遺跡が中期後葉、久保上ノ平遺跡が中期中葉、天伯遺跡は久保上ノ平遺跡より若干下る中期中葉頃と、若干の時間差があつて同時存在とは言いきれない。石器は打製石斧と大型刃器、石錘が多い点が共通し、石皿の出土は少ない。

弥生時代は条痕文土器が箕輪町上の林遺跡、やや離れて松島仲町遺跡などで出土している。中期前半は少なく、中期後半の土器は上の林遺跡、住居跡は南箕輪村北垣外遺跡で検出されている。上伊那全般に中期後半の遺跡は少ないが、箕輪町周辺は比較的遺跡がみつまっている。弥生後期は遺跡数が増加し、西側段丘上や西側山麓など広範囲に分布する。沖積地に面した段丘端部では北から箕輪町上の林・北城・猿楽、南箕輪村に天伯・久保上ノ平・北垣外遺跡、段丘上の中小河川沿いでは南箕輪村北高根 A・大芝東・春日道上遺跡などがあり、西山麓にも遺跡が散在する。墓跡は弥生後期と断じ得ないものもあるが、方形周溝墓 9 基が久保上ノ平遺跡や、北方に離れた堂地遺跡でみつまっている。出土遺物がなく時期不明であるが、上ノ平遺跡例は囲溝跡を切る。なお、当地域では弥生後期を中心に金属器が出土している。出土状況が判然としないものも多いが、南箕輪村北高根 A 遺跡の弥生後期末～古墳時代初頭と思われる 7 住からヤリガンナ、弥生土器片を出土した掘立柱建物跡周辺出土から銅釧と報じられている細板の環状銅製品、箕輪町上の林遺跡で表採資料ながら銅鏃、さらに南箕輪村久保上ノ平遺跡では出土遺構への帰属が断定されていないが、弥生後期住居跡から出土した板状鉄製品がある。

古墳時代前期は南箕輪村宮の上遺跡に可能性がある土器が採取されているが、箕輪町・南箕輪村共に遺跡が少ない。中期は箕輪町天竜川東岸の澄心寺下遺跡、南箕輪村の大泉・狐久保・丸山・久保下遺跡が知られ、仲町遺跡では当該期の古墳がみつかった。古墳後期は箕輪遺跡北方の低位段丘の松島仲町遺跡、南箕輪村天伯・北垣外がある。仲町遺跡 4 住からは羽口・刀装具が出土している。現時点ではやや遺跡数は少ないが、仲町遺跡や箕輪遺跡のように沖積地や低位段丘で今後遺跡の発見が増える可能性がある。なお、箕輪遺跡と近似時期の遺跡には仲町遺跡があるが、他は箕輪遺跡より後出するようだ。また、段丘端の宮の上遺跡では五鈴鏡が既出資料として知られている。

古墳では箕輪町内に上伊那唯一の前方後円墳の松島王墓があり、かつて古墳が群を成していたという。箕輪町内では他に天竜川東岸に長岡古墳群 三日町古墳群、天竜川西岸山麓の西部山麓古墳群や松島・木下の低位段丘に点在する古墳がある。現時点で低位段丘墳の仲町遺跡古墳が最も古く、松島王墓は既出の



第5図 周辺遺跡分布

表1-1 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	旧	細	弥	古	奈	中	近	備考
1	箕輪	箕輪町		○	○	○	○			
2	長田北原	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			
3	長田	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			
4	長田南原	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			
5	県営苗圃	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			
6	落し山	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			
7	在家	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			
8	長田東	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			
9	十蔵坊	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			
10	落原神社上	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			
11	丸山	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			1990・1994町教委
12	古城	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			1990町教委
13	井殿居	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			
14	若宮	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			
15	宮通	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			
16	町屋	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			
17	熊野	箕輪町中箕輪沢		○	○	○	○			
18	稲荷山	箕輪町中箕輪沢～大出		○	○	○	○			
19	大出	箕輪町中箕輪大出		○	○	○	○			
20	大出南	箕輪町中箕輪大出		○	○	○	○			
21	中道南	箕輪町中箕輪大出		○	○	○	○			1989町教委
22	中道	箕輪町中箕輪大出～八乙女	○	○	○	○	○			1974県教委、1989・1995町教委
23	下原山口	箕輪町中箕輪大出～八乙女	○	○	○	○	○			
24	高見下	箕輪町中箕輪八乙女	○	○	○	○	○			
25	東畑	箕輪町中箕輪八乙女	○	○	○	○	○			
26	祝神	箕輪町中箕輪八乙女		○	○	○	○			1974町教委
27	五輪	箕輪町中箕輪八乙女	○	○	○	○	○			
28	上漕	箕輪町中箕輪八乙女	○	○	○	○	○			
29	ガラシ	箕輪町中箕輪下古田	○	○	○	○	○			
30	北川	箕輪町中箕輪下古田	○	○	○	○	○			
31	堂前	箕輪町中箕輪下古田	○	○	○	○	○			
32	真勝沢	箕輪町中箕輪下古田	○	○	○	○	○			
33	大吠	箕輪町中箕輪下古田	○	○	○	○	○			
34	北又	箕輪町中箕輪下古田	○	○	○	○	○			
35	竜ヶ崎	箕輪町中箕輪下古田	○	○	○	○	○			
36	十郎	箕輪町中箕輪下古田	○	○	○	○	○			
37	下古田南原	箕輪町中箕輪下古田	○	○	○	○	○			
38	高見堂	箕輪町中箕輪下古田	○	○	○	○	○			
39	待屋	箕輪町中箕輪下古田	○	○	○	○	○			
40	深沢北	箕輪町中箕輪下古田	○	○	○	○	○			
41	金原	箕輪町中箕輪上古田	○	○	○	○	○			
42	大原坂頭	箕輪町中箕輪上古田	○	○	○	○	○			
43	尾崎	箕輪町中箕輪上古田	○	○	○	○	○			
44	円仏	箕輪町中箕輪上古田	○	○	○	○	○			
45	西久保	箕輪町中箕輪上古田	○	○	○	○	○			
46	五斗山	箕輪町中箕輪上古田	○	○	○	○	○			
47	幸道北	箕輪町中箕輪上古田	○	○	○	○	○			
48	幸道	箕輪町中箕輪上古田	○	○	○	○	○			
49	南原	箕輪町中箕輪上古田	○	○	○	○	○			
50	山の田	箕輪町中箕輪上古田	○	○	○	○	○			
51	北垣外	箕輪町中箕輪富田	○	○	○	○	○			
52	大久保	箕輪町中箕輪富田	○	○	○	○	○			
53	ソレツカ	箕輪町中箕輪富田	○	○	○	○	○			1980町教委
54	樫の木沢	箕輪町中箕輪富田	○	○	○	○	○			
55	土取場	箕輪町中箕輪富田	○	○	○	○	○			
56	清水	箕輪町中箕輪富田	○	○	○	○	○			
57	丁木	箕輪町中箕輪富田	○	○	○	○	○			
58	中曾根北	箕輪町中箕輪中曾根	○	○	○	○	○			1980町教委
59	下原	箕輪町中箕輪中曾根	○	○	○	○	○			
60	松島大原	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			1995・1998町教委
61	狐塚	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			1974県教委
62	堂地	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			1974県教委、1989・1995町教委
63	大道上	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			1996町教委
64	久保林	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			
65	王墓	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			
66	王墓付近	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			
67	白柱洞	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			
68	本城	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			1997・2000町教委
69	中山	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			
70	藤山	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			
71	王墓北	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			
72	北町	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			
73	神社付近	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			
74	東町	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			
75	旭町	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			2000町教委
76	通り町	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			2000町教委
77	仲町	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			1998町教委
78	南町	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			
79	南大原	箕輪町中箕輪松島	○	○	○	○	○			
80	中原	箕輪町中箕輪中原	○	○	○	○	○			
81	一の宮	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			
82	一の宮南	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			
83	並木下	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			1974町教委
84	小原	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			
85	上の林	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			1982・1983・1986・1991・1993町教委
86	北城	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			1977町教委
87	南城	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			1977町教委
88	猿栗	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			1976町教委
89	風登路	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			
90	天王	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			
91	西垣外	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			
92	芝宮	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			
93	上町	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			

番号	遺跡名	所在地	旧	細	弥	古	奈	中	近	備考
95	下町	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			
96	菅谷	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			
97	鍛冶屋垣外	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			
98	馬場	箕輪町中箕輪木下	○	○	○	○	○			
99	漆戸	箕輪町東箕輪北小河内	○	○	○	○	○			
100	大門畑	箕輪町東箕輪北小河内	○	○	○	○	○			
101	久保	箕輪町東箕輪北小河内	○	○	○	○	○			
102	無量寺	箕輪町東箕輪北小河内	○	○	○	○	○			
103	中村上	箕輪町東箕輪北小河内	○	○	○	○	○			
104	中村	箕輪町東箕輪北小河内	○	○	○	○	○			
105	築地	箕輪町東箕輪北小河内	○	○	○	○	○			
106	大庭平	箕輪町東箕輪北小河内	○	○	○	○	○			
107	松の木畑	箕輪町東箕輪北小河内	○	○	○	○	○			
108	宮下	箕輪町東箕輪北小河内	○	○	○	○	○			
109	北田	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			1993町教委
110	和倉	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
111	外紀屋敷	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
112	大垣外	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			1990-1993-1994町教委
113	堰下	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
114	町	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
115	山本	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
116	殿屋敷	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
117	日向前	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
118	普濟寺	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			1989町教委
119	日輪寺畑	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
120	知久平	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
121	上の平	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			1999・2001町教委
122	御射山平	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
123	さきり	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
124	日向	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
125	畔田	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
126	福沢	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
127	馬巻	箕輪町東箕輪南小河内	○	○	○	○	○			
128	古神	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
129	春名	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
130	羽場の森	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
131	寺原	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
132	荒城	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			2001町教委
133	直路	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
134	馬瀬口	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
135	鬼戸	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
136	樋口	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
137	北宮	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
138	久保畑	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
139	大門	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
140	源波	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			1988町教委
141	長松寺下	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
142	溝澤	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
143	荒井	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
144	角道	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
145	藤塚	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
146	高畑	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
147	戸沢	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			
148	一ノ沢	箕輪町東箕輪長岡	○	○	○	○	○			1989町教委
149	坂頭	箕輪町箕輪三日町	○	○	○	○	○			
150	御射山	箕輪町箕輪三日町	○	○	○	○	○			1980町教委
151	今町	箕輪町箕輪三日町	○	○	○	○	○			
152	二位殿坂	箕輪町箕輪三日町	○	○	○	○	○			
153	上朝馬場	箕輪町箕輪三日町	○	○	○	○	○			
154	澄心寺下	箕輪町箕輪三日町	○	○	○	○	○			1981町教委
155	大平出	箕輪町箕輪三日町	○	○	○	○	○			
156	小学校庭	箕輪町箕輪三日町	○	○	○	○	○			
157	鹿垣	箕輪町箕輪福与	○	○	○	○	○			
158	鹿垣南	箕輪町箕輪福与	○	○	○	○	○			
159	福与城	箕輪町箕輪								

第2章 箕輪遺跡の概要と周辺の遺跡

表1-2 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	旧	縄	弥	古	奈	平	中	近	備考
188	古神古墳	箕輪町東箕輪長岡									古墳
189	羽場の森1号墳	箕輪町東箕輪長岡									古墳
190	羽場の森2号墳	箕輪町東箕輪長岡									古墳
191	羽場の森3号墳	箕輪町東箕輪長岡									古墳
192	久保畑古墳	箕輪町東箕輪長岡									古墳
193	角畑古墳	箕輪町東箕輪長岡									古墳
194	徳門古墳	箕輪町東箕輪長岡									古墳
195	源波古墳	箕輪町東箕輪長岡									古墳、1988町教委
196	天王塚古墳	箕輪町箕輪三日町									古墳、1983町教委
197	おじょう古墳	箕輪町箕輪三日町									古墳
198	大塚	箕輪町箕輪福与									古墳
199	大出城	箕輪町中箕輪大出									城館跡
200	箕輪城	箕輪町中箕輪木下									城館跡
201	小式部城	箕輪町東箕輪北小河内									城館跡
202	寺山	箕輪町東箕輪北小河内									城館跡
203	城峰	箕輪町東箕輪北小河内									城館跡
204	豊久保	箕輪町東箕輪南小河内									城館跡
205	中の小屋	箕輪町東箕輪南小河内									城館跡
206	岩ヶ城	箕輪町東箕輪南小河内									城館跡
207	でえら	箕輪町東箕輪南小河内									城館跡
208	田中城	箕輪町箕輪三日町									城館跡
209	中込城	箕輪町箕輪三日町									城館跡
210	番場城	箕輪町箕輪三日町									城館跡
211	遠見城	箕輪町箕輪三日町									城館跡
212	桜畑	伊那市大泉吹上		○							
213	中道南	伊那市大泉吹上		○							
214	塚畑高根	伊那市大泉新田		○			○				
215	久保畑	伊那市大泉新田		○			○				
216	高根	南箕輪村大泉		○				○			
217	白木屋北	南箕輪村大泉		○	○						
218	北高根	南箕輪村大泉		○	○			○			1973県教委
219	権現堂	南箕輪村大泉		○							
220	荻河原	南箕輪村大泉		○							
221	南高根	南箕輪村大泉		○			○				1973県教委
222	大芝東	南箕輪村大芝		○	○		○				1973県教委
223	大芝原	南箕輪村大芝		○	○						1973県教委
224	大芝西	南箕輪村大芝		○			○				
225	大萱西	伊那市西箕輪大萱	○	○			○				
226	西箕輪養護学校	伊那市西箕輪大萱	○								
227	熊野神社	伊那市西箕輪大萱	○				○				
228	在家	伊那市西箕輪大萱	○								
229	富士塚	伊那市西箕輪大萱		○			○				
230	丸塚洞B	南箕輪村沢尻	○				○				
231	狐窪	南箕輪村沢尻	○				○				
232	三本木原	南箕輪村沢尻	○								1973県教委
233	大畑	南箕輪村沢尻	○								
234	曾利目	南箕輪村沢尻	○								1973県教委
235	南原C	南箕輪村沢尻	○								1973県教委
236	大泉	南箕輪村大泉		○	○		○				城館跡(大泉城)
237	大芝南	南箕輪村大芝		○	○						
238	富士塚	南箕輪村田畑							○		近世塚
239	二里沢	南箕輪村田畑		○							
240	石経	南箕輪村久保		○							
241	久保上ノ平	南箕輪村久保		○	○	○	○				1997・1999村教委
242	丸山	南箕輪村久保		○	○						古墳消滅
243	久保下	南箕輪村久保		○			○				
244	南垣外	南箕輪村久保		○	○						
245	天王原	南箕輪村久保		○			○				
246	向垣外	南箕輪村塩ノ井		○	○	○	○				
247	山の神	南箕輪村中込		○	○						
248	内城	南箕輪村北殿		○			○				
249	榎木城	南箕輪村久保									城館跡
250	塩ノ井山ノ神	南箕輪村塩ノ井		○			○				2003村教委
251	天伯	南箕輪村塩ノ井		○	○	○	○				
252	垣外	南箕輪村塩ノ井		○							
253	出頭沢	南箕輪村塩ノ井		○				○			
254	上人塚	南箕輪村塩ノ井		○			○				
255	塩ノ井	南箕輪村塩ノ井			○						1994村教委
256	東垣外	南箕輪村北殿			○	○					
257	西垣外	南箕輪村北殿		○	○	○					1992村教委
258	北垣外	南箕輪村北殿		○	○	○					
259	柴宮	南箕輪村北殿		○							
260	秋葉	南箕輪村北殿		○	○						
261	大泉下	南箕輪村南殿		○							
262	宮ノ上	南箕輪村南殿		○		○					1994村教委
263	大東	南箕輪村南殿			○		○				
264	羽場	南箕輪村田畑		○							
265	田畑	南箕輪村田畑		○							
266	道角	南箕輪村田畑		○							
267	牧ヶ原	伊那市御園駒見町		○	○						
268	神子柴	南箕輪村神子柴		○			○				
269	清水洞	伊那市御園駒見町		○							
270	石塚	伊那市御園山寺		○				○			
271	大清水	伊那市御園駒見町		○							
272	宮ノ前	伊那市御園南									
273	御園東部	伊那市御園東部		○							
274	内城	南箕輪村神子柴		○							
275	大上平	伊那市福島						○			
276	南原	伊那市福島		○			○				
277	堤林	伊那市手良八ツ手		○			○	○	○		
278	山の田	伊那市手良八ツ手		○	○						
279	福島上平Ⅲ	伊那市福島						○			
280	福島上平Ⅰ	伊那市福島						○			
281	池火平	伊那市福島		○	○						
282	中原	伊那市手良八ツ手						○			
283	島崎	伊那市手良八ツ手		○	○			○			
284	福島上平Ⅳ	伊那市福島						○			

番号	遺跡名	所在地	旧	縄	弥	古	奈	平	中	近	備考
285	福島上平Ⅱ	伊那市福島							○		
286	大原	伊那市手良沢岡						○			
287	垣外	伊那市手良下手良		○							
288	辻西幅	伊那市手良沢岡						○			
289	角城	伊那市手良下手良						○			
290	福島古墳群	伊那市福島									古墳群
291	原	伊那市福島		○							
292	松太郎窪	伊那市手良沢岡		○				○			
293	下手良中原	伊那市手良沢岡						○			
294	南垣外	伊那市手良下手良						○			
295	鍛冶垣外	伊那市手良野口		○				○			
296	二重平	伊那市手良下手良						○			
297	大久保	伊那市伊那部野底						○			
298	野底古墳群	伊那市伊那部野底									古墳群
299	上牧古墳群	伊那市伊那部野底									古墳群
300	中込城	南箕輪村中込									城館跡
301	倉田城	南箕輪村倉田城									城館跡
302	有賀城	南箕輪村南殿									城館跡
303	高木氏内城	南箕輪村神子柴									城館跡

参考文献 分布図は以下の文献を元に作製した。なお、奈良・平安時代は一括した。
 1997 箕輪町教育委員会『箕輪町遺跡詳細分布調査報告書』
 1986 柴 登巳男「第1編 原始・古代」『箕輪町誌 歴史編』箕輪町誌編纂刊行委員会
 1984 日戸武彦・倉田友雄「遺跡編」『南箕輪村誌』南箕輪村誌編纂委員会
 1997 南箕輪村教育委員会『久保上ノ平遺跡』
 2003 南箕輪村教育委員会『塩ノ井 山ノ神遺跡』
 2000 伊那市教育委員会『石塚遺跡』
 2001 伊那市教育委員会『下手良中原・大原・松太郎窪遺跡』
 2003 伊那市教育委員会『大原遺跡』

埴輪と須恵器の年代にずれが指摘されるが、古くて6世紀前半頃、新しく後半とされる。他の小古墳群はさらに下る。なお、仲町遺跡古墳周囲には馬骨を出土した土坑が検出されているが、報告書では関連性を断定していない。

古代の遺跡は中道遺跡を代表として箕輪町内には多い。奈良時代の遺跡は中道・本城遺跡など北部に多く、箕輪遺跡周辺では上の林、久保上ノ平遺跡など点的にしかみつからないが、8世紀末～9世紀の所産は箕輪遺跡周辺にも多く分布し、分布間隔も狭い。箕輪遺跡の北方松島の低位段丘上には仲町遺跡、段丘上には本城遺跡、箕輪遺跡に面した西段丘端には上の林、木下北城遺跡、遺物のみながら南城、南箕輪村では天伯・北垣外・久保上ノ平遺跡がある。これ以後の時期は竪穴住居跡が点在してみつかり、久保上ノ平遺跡で11世紀後以後の柱状高台杯、上の林遺跡で山茶碗を出土した住居跡がみつかり、他は段丘上の中小河川に面した南高根・大芝東・北高根Aなどがある。なお、注目される遺物として、中道遺跡で奈良三彩小壺蓋、炭化木製盤、畿内系の甕、木下北城遺跡で火のしと思われる銅製容器が出土している。また、南箕輪村宮の上墳墓では灰赤短頸壺に火葬骨を入れた墳墓、神子柴遺跡では完形土器が埋納された土坑墓、大道上遺跡で東山道跡と推測された遺構が発見されている。

中世遺跡は箕輪町～南箕輪村の段丘端に北から大出城、松島城、箕輪城、棚木城、中込城などの城館跡が知られ、箕輪遺跡内には田中城跡伝承地がある。このなかで松島城周辺は本城遺跡として発掘調査され、掘立柱建物跡や堀状溝跡が検出された。また、木下北城遺跡や南城遺跡では堀とされるL字状の溝が検出されているが、規模が小さかったり不整形などで仔細不明である。城館跡以外では北高根・高根遺跡で中世遺構が少量検出されたが、一般的な集落遺跡の様相は判然としない。

参考文献

- 1984 日戸武彦・倉田友雄「遺跡編」『南箕輪村誌』南箕輪村誌編纂委員会
 1986 柴 登巳夫「第1編 原始・古代」『箕輪町誌 歴史編』箕輪町誌編纂刊行委員会
 1997 箕輪町教育委員会『箕輪町遺跡詳細分布調査報告書』

2. 文献史料等からみた古代以後の歴史的環境

箕輪町誌を参照に箕輪遺跡周辺の古代以後の様相について概観しておく。古代は『和名抄』にみえる美和郷が箕輪町周辺にあたり、東山道の深沢駅が箕輪町北部周辺にあったとする説がある。東山道は大道上遺跡の通称春日街道脇に並行する古代の溝跡が検出され、段丘中央を直線的に縦断する可能性が捉えられている。その後、平安末期12世紀初頭までに当地で落原（ふきはら）庄が成立していたとされる。

鎌倉時代は『諏訪御符札之古書』に嘉暦四年（1329）松島・大井弓郷などがみえ、室町時代では『諏訪御符札之古書』に応仁三年（1469）箕輪藤沢遠江守がみえる。藤沢氏は諏訪氏一族で、諏訪に隣接した高遠町を本拠地としていたが、室町時代に松島・大出・長岡・小河内・福島・木下などの武士を配下とし、福与城跡に居城したと言われる。天文十四年（1545）武田信玄に破れ、以後は武田氏、天正十年（1580）織田信長方の毛利秀頼の支配へ変化する。織田信長滅亡直後に藤沢氏は一旦復帰するが、徳川氏に通づる保科氏に攻められて再度敗走し、その後は木曾氏、徳川方飯田城郡代菅沼定利、天正十七年の真田氏への代替地、徳川氏の関東移封に伴う豊臣氏配下の毛利・京極氏とめまぐるしく支配者が交代する。このなかで木曾氏支配時代に御射山社に土地を寄進した文書が残されているが、その文書自体には場所が明記されていないものの御射山社が御室（新府・神府）とも呼ばれることから御室田（今回の調査域の微高地周辺）に比定し、この頃は水田域であったとする説がある。

なお、箕輪遺跡内の天竜川近くの三日町地籍にかつて町屋があったが、慶長十七年の天竜川洪水で流出

して天竜川東側岸に移転したとの伝承がある。地名から市から発展した市町と思われるが、存在を含めて具体的な場所や様相はわからない。中世、市や売買の場では神仏の関わりが強いとされる。三日町を挟んだ天竜川西岸の木下に諏訪社の南宮神社、天竜川東岸の現三日町に秋宮があって、神体はこの二つの社を春秋遷宮するという。小池修兵氏は三日町が中間にあること、箕輪南宮神社と御射山社（新府社）は本来同一の社で御室田に関わりがあること、さらに市が関連する可能性を述べている。（小池修兵1954）また、桜井松夫氏は三日町が鎌倉時代に溯る川原に立てられた市で、周辺に残る「天王」地名から県内の例同様の牛頭天王信仰と関連する可能性を想定している。（桜井松夫2003）。

江戸時代になると慶長五～十八年（1600～1613）飯田城の小笠原氏、一時幕府領、元和三年（1617）～寛文十二年（1672）脇坂氏の飯田藩領となる。小笠原氏時代に箕輪遺跡内の田中城に陣屋が置かれていたが、慶長十七年（1612）三日町が流失した洪水を契機として陣屋も木下へ移転したと言われている。脇坂氏移封後は、若干変更はあるものの幕府領として明治時代を迎える。

江戸時代の耕地を検地帳から垣間みると、天正年間毛利氏検地の写しである江戸時代初期の文書によると遺跡に近い木下村は735石2斗7升4合、久保村416石2斗3升3合、三日町村722石2斗4升5合である。木下村は松島1470石、北・南小河内村1031石、長岡村877石に続く石高で、同様の石高に殿村707石5斗8升1合1勺があり、他村は500石以下である。箕輪遺跡周辺の村は比較的上位に位置するが、箕輪町誌に掲載されているその後の石高推移では、松島村の増加スピードがかなり鈍く、木下村は元禄十二年（1699）までの間に1700石—2.3倍に増加しているが、それ以後は微増に留まるといふ。このような増収は検地方法の変化や生産技術の向上など直ちに畑を含む耕地面積増加を表しているわけではないとされるが、木下村の17世紀代の飛躍的な増加と以後の微増に留まるといふ点は興味が引かれる。確実なところはわからないが、箕輪遺跡地周辺での新たな耕地開発、あるいは旧来耕作地内の荒地などの可耕地化が江戸時代前期に進行したが、18世紀にはかなり限界に近い範囲まで達していたのではないだろうか。ちなみに箕輪町誌掲載の人口増減をみると元禄年間に木下は約1100人で以後ほぼ横ばいで若干減少することが知られる。元禄年間以前の様相はよくわからないが、人口増減が横ばいなのは耕地増加がない点と関連するか。なお、正保二年（1645）『信州伊那郡青表紙高御領私領支配知行附』によると、箕輪町内の榑木成村は窪・木下・福島・下寺・三日町があったが、当時は芝山しかなく、サワラやヒノキは枯渇状態であったという。箕輪遺跡出土杭がサワラ主体であることを考えると、この記録は興味深い。

参考文献

- 1986 市川 脩一「第2編 中世 第3編 近世」『箕輪町誌 歴史編』箕輪町誌編纂刊行委員会
 2003 桜井松夫「中世 市のうつりかわり」『信濃 第55巻 第7号』
 1954 小池修兵「箕輪遺跡の内容について」（1970『箕輪遺跡 調査第1集』に収録）

第3節 遺跡の地形環境と土層

1. 箕輪遺跡の地形環境（第6図）

長野県南部は、西側に中央アルプス木曾山脈、東側に南アルプス赤石山脈とその前山の伊那山脈が南北方向に並行し、伊那山脈と赤石山脈の間を中央構造線が通る。これらの山脈に挟まれた南北方向に広がる細長い盆地が伊那谷と呼ばれ、箕輪遺跡はその北部の天竜川沿い沖積地に立地する。遺跡西方は木曾山脈山麓に形成された扇状地群が発達し、その先端部は断層等で形成された段丘崖となる。遺跡西・南縁はこの段丘で画され、北限は西側山地から流下した帯無川の扇状地に接するまでと推測されている。東限は帯無川扇状地付近から緩やかなカーブを描いて遺跡南端の段丘に接するように流れる天竜川である。

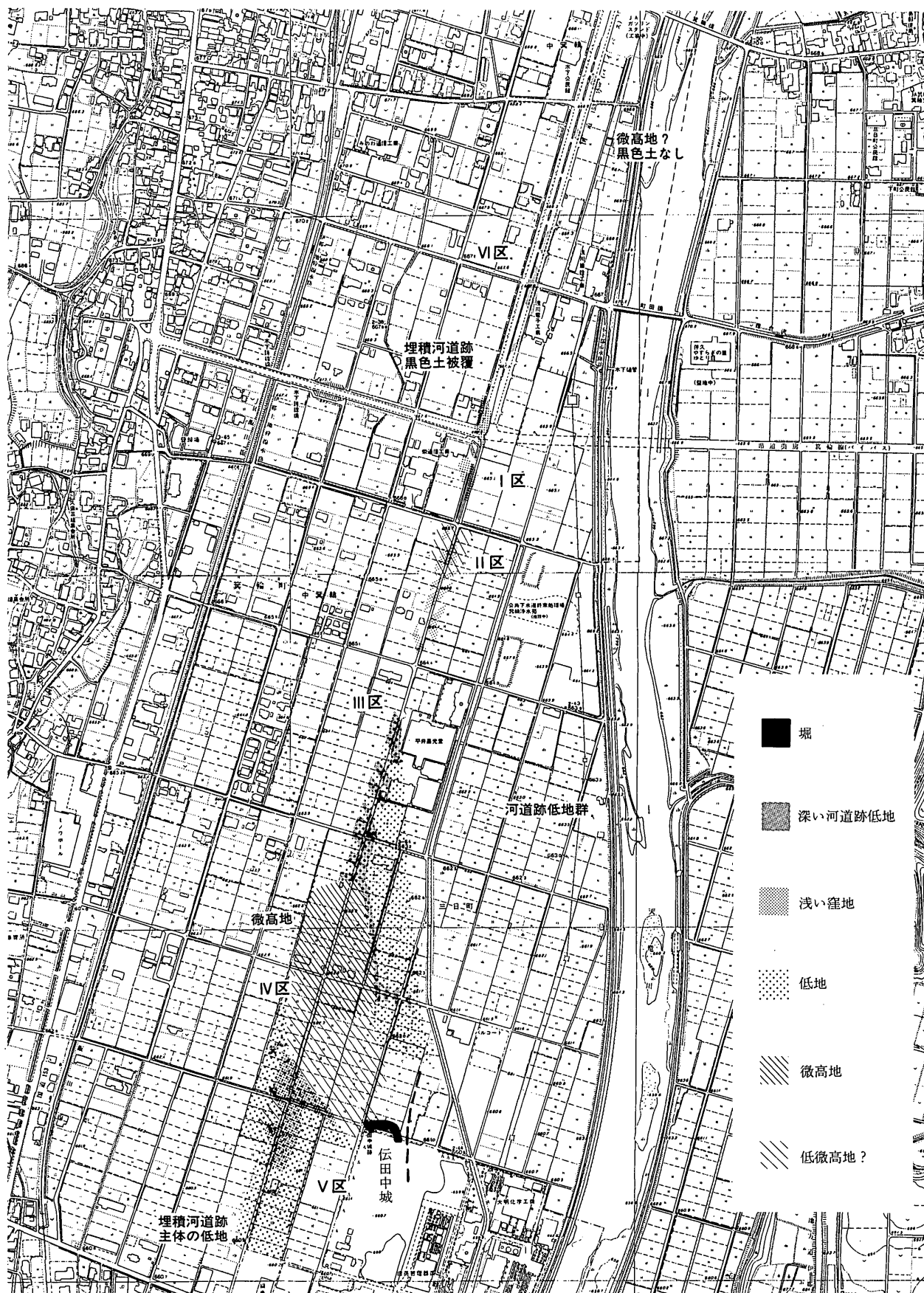
箕輪町教育委員会1991『箕輪遺跡 7次発掘調査』掲載図でみると、遺跡内は南北両端で比高差8mほどの南へ傾斜する地形であり、微視的には西の段丘際が高く、天竜川側へ傾斜しながらも、段丘下から少し東側で一旦窪地地形となり、その東側は細かな若干の高まりと窪地が繰り返しているように取られる。段丘直下が高いのは低位段丘や段丘崖からの崩落土、小河川が運んだ堆積物による崖錐地形や小規模な扇状地が形成されたことにより、その東側に微細な高まりや窪地地形が入り組むのは天竜川の堆積・侵食作用によると思われる。巨視的に遺跡西部の低い場所は後背低地で、天竜川沿いの狭い高まりが微高地とみられなくはないが、河道跡状の窪地が複雑に入り組んで明瞭に識別できない。

微高地と後背低地が不明瞭な理由は、堆積よりも侵食作用が地形形成上の大きな要因であったとも推測される。そう考える理由として、今回の調査で微高地下部にも埋没した古い河道跡が検出されたことから微高地・低地の区分は変化しやすい相対的な関係として捉えられるように感じられたことがある。さらに、下層に砂礫、上層に砂・シルト・粘土といった微細粒子の土層が堆積する傾向のなかで、微細粒子で形成された微高地が確認できなかったことがある。通常の沖積地地形は堆積作用で自然堤防と後背低地が形成されるが、本遺跡地は堆積土層の薄さからも河道跡の侵食作用でつくられた窪地が局所的な低地として発達する傾向があり、こうした侵食作用が相対的な低地—微高地の環境をつくる役割を果たしていると想定できよう。これらの河道跡低地は流水が停止、もしくは侵食量より堆積量が上回った時点で、侵食から堆積に転換し、次第に埋積して浅くなる傾向と考えられる。

こうした侵食作用を果たしたと思われる河道跡は今回の調査域内で埋没完了したもの、埋まる途中のもの、形成時期の新しい深いものなどさまざまなものがある。弥生時代以後の新しい河道跡は北部Ⅵ区のみとその可能性が残るものがあるのみで、少なくとも弥生以後に天竜川の流路に大きな変化はなく、遺跡内では中小河川の解析以外は大きな河道跡の形成は停止していると思われる。これらの河道跡の埋没状況などから今回の調査地内は以下のような地形に概略区分して捉えられる。

松島バイパス地点北部（Ⅵ区北部）—微高地？・黒色土なし

帯無川の扇状地端部が天竜川が接する箕輪遺跡北限と想定されている地点で、調査範囲内で最も標高が高い。Ⅵ区北部は以南の遺跡内に広域に認められる植物腐植による黒色・黒褐色土層が確認できず、表土から連続する灰色系の水田土壌を除去すると砂礫、あるいは砂質の強いシルト質土層が露呈する。また、全体的に傾斜は緩やかで北西～南東方向へ延びる解析谷あるいは河道跡（用水？）と思われる狭く細長い低地が散在的にあるが、何れも泥炭質土層が発達しない。こうした特徴から帯水した湿地環境ではなく、洪水等を受けやすい不安定な環境であったと思われる。検出遺構は近世以後と思われる土坑状の掘り込み、溝跡などがあり、比較的新しい時期に耕地化したとみられる。ただし、遺構に伴わないながらも摩滅して



第6図 調査地周辺の地形

いない古墳後期の土器が出土し、古墳後期には安定していた可能性もある。

伊那バイパス地点北部（Ⅵ区南端、Ⅰ・Ⅱ区）—埋積河道跡と小微高地・黒色土被覆

松島バイパス南端から伊那バイパス北部のⅠ・Ⅱ区、Ⅲ区北端にかけて緩やかな傾斜地となり、浅く小規模な河道跡低地や三角州状の小規模な微高地が点在する。河道跡低地は埋没した浅いもので、湿性が弱い環境と思われる。堆積土も薄く、植物腐食の黒色土層が全体を覆う。微視的にはⅥ区南部～Ⅰ区北部にかけての浅い河道跡が連続する地形、Ⅰ区南部～Ⅱ区の河道跡が少なく微高地も含む部分、Ⅱ区南部から比較的傾斜がきつくなる部分に細分しうる可能性がある。遺物は弥生時代後期と古代以後のものがあり、遺構は弥生後期末の住居跡1軒あるものの、ほとんどが中世以後の水田関連遺構である。

伊那バイパス中部北（Ⅲ区北側）—河道跡低地群

Ⅲ区北部はⅡ区からの傾斜地形が一旦緩やかになり、比較的深い河道跡低地が連続している。深い低地地形であることから複数の水田面が検出され、水田変遷が把握できる資料が得られた。河道跡低地の深さや幅はさまざま、浅い河道跡ほど堆積土層は薄く、逆に深い河道跡は堆積土が厚く分層枚数も多い。ただ、上層に灰色系シルト質土層、下層は泥炭質土層・黒褐色粘土層が発達する傾向は共通する。この河道跡群はⅢ・Ⅳ区境の東西交差道路の立ち会い調査において延長先が確認でき、Ⅲ区～Ⅳ区北部の微高地東縁を流れて南東方向へ抜けるが、Ⅳ・Ⅴ区境の交差道路立ち会い調査では確認できず、この地点より北側で後代の天竜川に削られたと推測される。出土土器には弥生中期から近世までの所産が認められた。

伊那バイパス中部南（Ⅲ区南側～Ⅳ区北部）—微高地

Ⅲ区北の河道跡低地群南は微高地となる。その北・東縁はⅢ区北部の河道跡低地、西・南縁はⅣ区の埋積河道跡低地に画され、紡錘形を呈して伝田中城跡方向へ延びるとみられる。ここは北側G低地から一段高いが、傾斜地形のため微高地域南部の標高は河道跡低地群底面標高より低い。遺物は縄文前期からあり、弥生中期・後期・古墳後期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが検出された。縄文前期には微高地域が安定し、弥生～古墳後期までは集落域として利用され、それ以後に耕地化したと思われる。

伊那バイパス南部（Ⅳ区南部から以南）—埋積河道跡主体の低地

上記微高地南側は埋没しながらも浅い窪地の河道跡低地群が組み合う。河道跡はⅢ区の河道跡低地群ほど深くはないが、Ⅰ・Ⅱ区ほど浅くもなく、巨視的には河道跡低地群が微高地西縁に沿って田中城南西側へカーブするものと思われる。この河道跡低地は微高地よりのⅣ区河道跡低地内では下層から縄文後期と思われる土器が出土し、後期には埋没しはじめていることが知られた。弥生時代には窪地として残存する程度だったと思われるが、黒色の泥炭質の強い土層が発達し、遺跡内では標高が低く地下水位が高いためか湿性の強い場所だったと思われる。この泥炭質土層以後の灰色粘土層堆積は薄く、泥炭質の黒色粘土層自体も中世・近世までの耕作土であった可能性がある。なお、南西方向の隣接地を南箕輪村教育委員会が調査し、比較的深い河道跡低地が確認され、3面調査されている。これはⅢ区北部の河道跡低地に類似した様相であり、今回の調査域西・南側には深い河道跡低地群が存在する可能性がある。また、これまでに低地域周辺で縄文晩期・条痕文土器が採取されている。

以上のように発掘地内の地形は天竜川の砂礫層が基盤層となっており、その上面は河道跡などによる著しい凹凸地形が発達していたと思われる。河道跡の形成時期は詳細が明らかでないが、Ⅲ区微高地以南で縄文前期末～後期・晩期土器が採取され、Ⅰ～Ⅴ区で弥生時代後期以後の土器、北部のⅥ区北部で古墳時代後期以後の土器が採取されていることから、時期をおって北・東側に遺物の散布が拡散する傾向が看取される。これがそのまま地形の安定化時期を示すとは限らないが、少なくとも発掘域中南部微高地域以南は縄文時代に地形原形ができ、調査域全体は弥生時代には安定化し、以後は砂・シルト・粘土といった粒子の細かい堆積物で埋められて高低差が減少する傾向であったと思われる。

なお、箕輪遺跡は昭和26年以後の耕地整理で様相を変えたが、かつての環境の挿話が小池修兵氏によって紹介されている（小池修兵1954）。それによると木下南部や苦谷・泉沢など遺跡周辺は豊富な湧水があって、湧水で水田にならないところを「釜壺」と称したという。こうした湧水と窪地地形で泥深く水田にならない沼が明治初年までは幾つかあり、小さな田はかつて泥沼でアシが生えていた場所という。また、湧水の多い木下・久保・塩ノ井に近い地区（段丘下～箕輪遺跡西縁部）はほとんどが下田となる沼田であって、牛馬は入れられず収穫時には粗朶や田舟で稲を畔まで運ぶことが大正末頃まで行われたという。江戸時代の記録には曾根田・城・御室田など箕輪遺跡南東部の微高地周辺が上田であったが、それでも湿地であったという。これらの膝が埋まるほど深い沼田は、水田耕作の便を図るために木材や粗朶・松葉を踏み込んで足の陥没を防いだが、恒久策として沼田に砂利を入れることが近年まで行われていたという。入れられた砂利は適当な高さでとまり、それ以下は沈下しなくなるという。また、箕輪周辺では江戸時代の洪水記録が多いが、昭和20・25・27年水害もそうであったように城安寺地籍の堤防が重要な位置を占め、ここが破れると南箕輪村までの一体が流されてしまうという。

参考文献

- 1984 清水秀樹「自然編 第1章 村の自然環境 第3節 自然概要 第二章 地形地質」『南箕輪村誌』南箕輪村誌編纂委員会
1954 小池修兵「箕輪遺跡の内容について」（1970『箕輪遺跡 調査第1集』に収録）

2. 遺跡の土層（第7図）

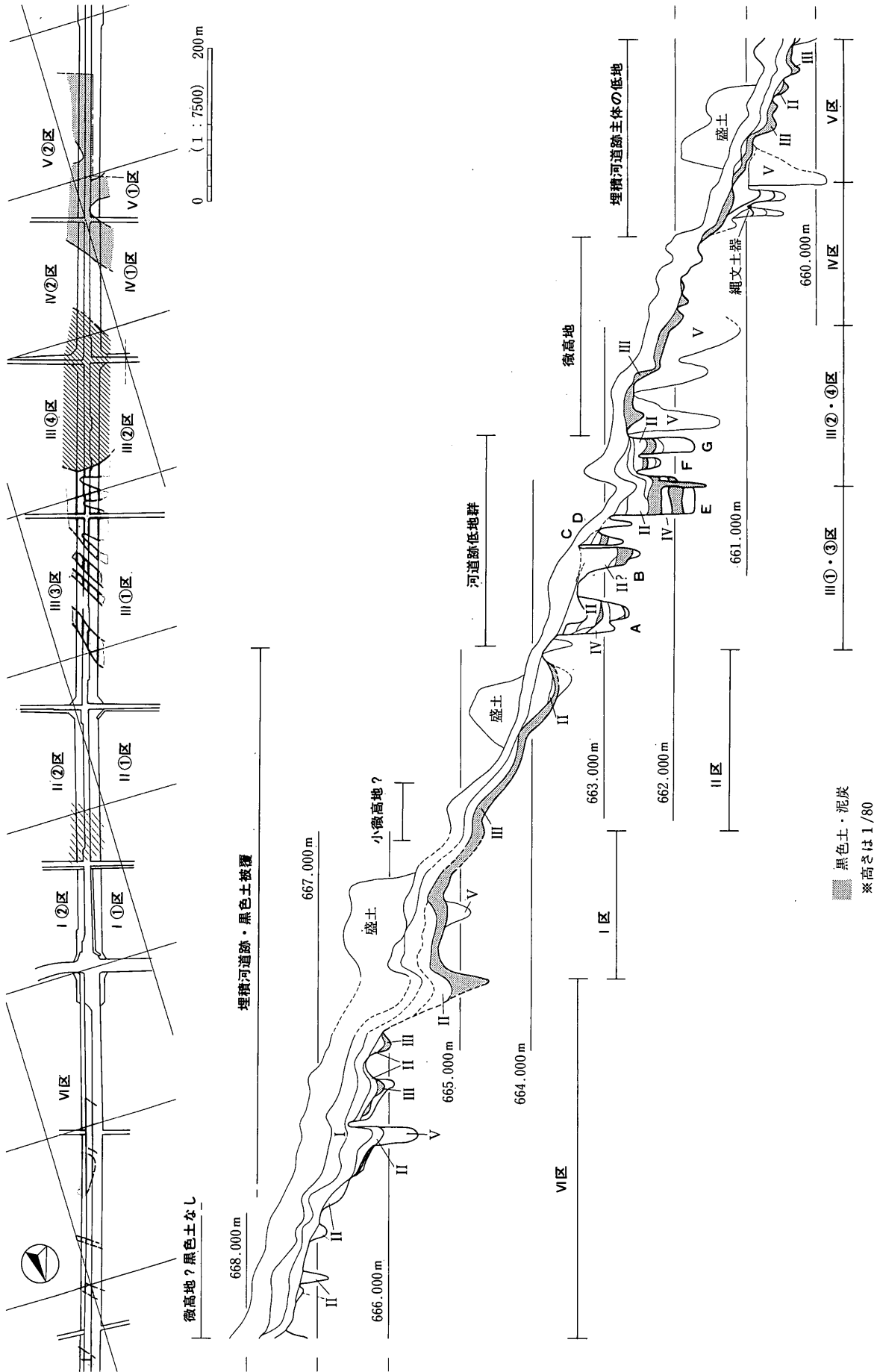
箕輪遺跡の土層は砂礫・砂・シルト・粘土など、基本的に天竜川を代表とする河川堆積物で構成される。下層に砂礫層、上層に粒子の細かい土層が堆積する傾向があるものの、高まり地形では現耕作土直下が砂礫層となる一方で、河道跡低地内では砂・シルト・粘土層が複数堆積して地点ごとに様子も異なる局所的な土層も多い。これは伊那谷の隆起する地形環境や傾斜が著しい地形によるためか、広く均一に洪水土が堆積する状況ではなく、洪水土が河道跡低地など低い場所を目指して堆積していったことによると思われる。こうした河道跡低地内の微細な堆積土は本流に近いほど埋積土層が多く埋積スピードも早く、埋積土はより低い部分を目指して堆積するが故に深い河道跡ほど浅い河道跡よりも埋積スピードが速い＝分層枚数が多く厚いながら、埋積進行と共にそのスピードが鈍るとも考えられ、場所や河道跡の深度で土層の様相が大きく異なっている要因のひとつとも考えられる。さらに、分割調査による地点ごとの分層・土層の捉え方の違いもあり、整理時に統一的な土層把握は困難に思われた。

しかし、巨視的にみると調査域内の土層は最下層に砂礫層があり、その上面の窪地地形内にシルト・粘土・砂などを粒子の細かい土層群が堆積し、上部に比較的広域にわたる黒・黒褐色土層、水田耕作土とみられる灰色ぎみの土層群、耕地整理の整地土や現耕作土となっている。以上のような傾向から、次のように土層群を大別して捉えた。なお、地点ごとの様相の詳細は個別のところでも記述する。

I層 現耕作土とそれに伴う耕地整理の整地土。ベースはII層で、褐灰色を基調とする。北部では現耕作土層の下に耕地整理に伴うと思われる砂礫を含む淘汰の悪い整地土層が厚く分布する。現耕作土をIa、整地に伴うと思われる土層をIb層とした。

II層 I層下において灰色を基調とするシルト質粘土で、低い地形部分では厚く残存するが、堆積土層の薄い南部や高まり地形では断片的にしか残存しない。耕地整理以前の連続耕作で形成された水田層と捉えられるが、黒色ぎみのところもあるなど下層土質の影響を受けて色調は微妙に違う。なお、灰色基調は地下水位の下降傾向による還元化か、水田耕作によるものかはわからない。

III層 微高地域や浅い河道跡低地などを覆う植物腐植の黒・黒色土層である。V層の直上に位置し、上部



第7図 調査区全体の土層模式図

はⅠ・Ⅱ層に覆われる。この土層自体が耕作されている可能性が窺えたところもある。

Ⅳ層 低地内の黒・黒褐色を基調とする粘土・シルト質粘土・泥炭・泥炭質粘土を含む水田耕作などの人為営力が加わったとみられる土層を一括し、自然堆積と思われる粘土・シルト層はⅤ層に含めた。ただし、あくまでも土層理解のための概念的に設定したもので、水田耕作の有無の識別は肉眼観察か遺構の検出有無によったため、Ⅴ層との識別が曖昧なところがある。形成時期はⅢ層と前後する時期を含むが、基本的にⅢ層と同時期に形成されたと思われる、本来はⅢ層に含むべきかもしれない。

Ⅴ層 砂礫層やその上面の窪地に堆積した粘土・シルト・砂など遺構検出の最下面にあたる自然堆積層を一括した。最下層に砂礫が位置することは同じだが、窪地を埋める砂・シルト・粘土は地点によって様相が異なる。

上述したⅠ～Ⅴ層の大別は一定の傾向として把握した概念的なもので、地点毎の耕作や堆積状況の差で色調や土質に若干差異を生じている。しかし、全般的に時代が下るに従って堆積物の粒子が細くなる傾向と共に河道跡が埋積して平坦化し、安定して植物が繁茂する環境へ変化していく変化の傾向とは捉えられない。なお、上記土層区分は遺跡地の堆積システムの理解が不十分なまま、調査結果から整理提示したもので、今後箕輪遺跡全体のなかで上記の土層区分も見直す必要があると思われる。

第3章 遺構

第1節 VI区（松島バイパス）の調査

1. VI区の概要（第8図）

調査概要 VI区は調査域最北部にあたり、箕輪遺跡北東限と推定される場所である。平成14年2月15日に松島バイパス4車線化工事に伴う発掘調査について伊那建設事務所、箕輪町教育委員会・町建設課、長野県埋蔵文化財センター、文化財生涯学習課による協議が行われ、長野県埋蔵文化財センターが発掘調査を担当し、箕輪遺跡範囲にあたる南端1工区約600mの未舗装2車線分を対象とするが、すでに開業している店舗・工場の入口、交差道路を確保すること、地表面下60cmの盛土を伊那建設事務所が除去した後の4月早々に調査を実施すること等が確認された。これを受けて当センターでは平成14年4月5日～同4月26日に調査を実施した。

調査対象地内の東側は概に歩道が完成し、下水道工事も実施されているなど遺跡自体は東側車線の西数mほどしか残存せず、調査面積は合計約2700㎡である。調査地区名は前年度の伊那バイパスに続いてVI区とし、道路や入口部で分断されるところで調査区を区切ってVI①～⑦区とした。調査地周辺では木下公民館建設に伴って箕輪町教育委員会が調査しており、水田耕作の可能性のある土層が捉えられているものの、遺構は捉えられていない。今回の調査でも箕輪遺跡北東部の様相の解明が課題となったが、中世・近世以後の水田耕作関連遺構と古墳後期の土器などが採取されたのみである。

地形 VI区は調査範囲内で最も天竜川に近接した場所で、地元の方の話では洪水にあいやすく、河道跡の窪地が沼として点在する場所だったという。発掘では地表面下60cm前後に微高地を削って低地を埋める大規模な整地土層が確認でき、かつては浅い河道状低地と三角州状微高地が組み合う凹凸地形だったと看取された。この整地作業により微高地は削平されてVI⑥・⑦区以外では遺構は検出できず、埋め立てられた河道跡低地内や窪地地形内のみで水田関連遺構や溝跡などが検出された。

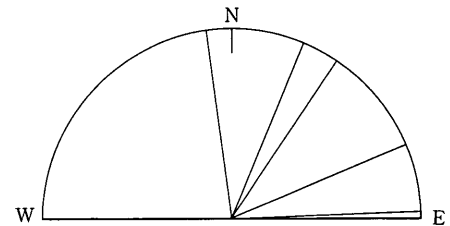
地形はVI③区と④区を境に様相が異なり、北部は基盤のV層上部が細砂・粗砂主体となる微高地状の高まりで、西側から流下する中小河川や支流が解析したと思われる小規模な河道跡や用水が散在する。それらの低地埋土は灰色粘土を基調とする。一方、南部はV層砂礫層を基盤として上部にシルトが載った浅く幅広い河道跡低地複数が組み合うやや起伏のある地形で、低地はシルト・砂ラミナが発達するものと黒色泥炭質土層が埋積するものがある。こうした地形・土層の違いは北部が天竜川に近く、洪水にさらされやすい不安定な場所であったことによると思われる。

土層 土層は局所的に異なる様相を示しながらも、最上部の道路盛土、I層耕作土、II層灰色・褐灰色系のシルト質粘質土・粘土層群、III層植物腐食由来と思われる黒・黒褐色土層群と局所的なIV層、さらに遺構検出面としたV層青灰・黄褐色シルト層や砂礫層群に大別される。I層は区画整理以後の耕作土Ia層と区画整理の整地層Ib層に分けられる。Ib層は微高地を削って低地を埋める砂礫を多く含む淘汰の悪い土質で、広範囲に分布して上部には水田耕作土層Ia層が1枚しかないことから昭和26・27年の区画整理の所産と判断される。II層は河道跡低地内、あるいは相対的に低い地形で削られなかった地点のみに残

存する水田土壌である。Ⅲ層は南部VI①～③区低地内に分布し、北部には認められないが、北部は氾濫にさらされやすい不安定な環境で植物が繁茂しなかったか、北部の形成時期が新しいと思われる。Ⅲ層下の灰色シルトをⅣ層としたが、遺構も明瞭でなくⅤ層に含められる可能性が高い。その下は河道跡低地を埋める砂・シルト、あるいは基本地形を形成しているⅤ層砂礫層となる。なお、VI区のみは地形変化が著しく、地区毎に記述する。

2. 検出遺構

遺構は大部分がⅡ層褐灰色土層関係の水田関連遺構で、Ⅲ層黒色土層に関連するものはVI①・②区河道跡低地内など一部にある。Ⅱ層出土の新しい遺物はVI①区古瀬戸平碗、VI⑥区連房天目茶碗があり、それぞれ15世紀、17世紀以後と捉えられる。南部VI①区では平安時代須恵器、北部VI⑥区で古墳後期土師器杯も採取されたが、Ⅱ層が当該期まで遡るかは断定できない。ただ、VI②区の北低地では自然堆積14層上のⅡ層から山茶碗系こね鉢が出土し、中世前半に遡る可能性は残る。



第9図 VI区 SA・SD 方位

(1) VI①区の遺構（第10図 PL1）

VI①区は松島バイパス南端の調査区である。伊那バイパスI②区北端の交差点北側地点から約60mほど離れているが、その中間は対象地幅が狭く、幹線上水道が埋設されていることから調査していない。地形は中央に黄灰色シルトの低い微高地があり、その北側にVI②区に連続する北西から南東方向に走流する河道跡低地（北低地）、南側に北東・南西方向に走る狭い窪地地形がある。

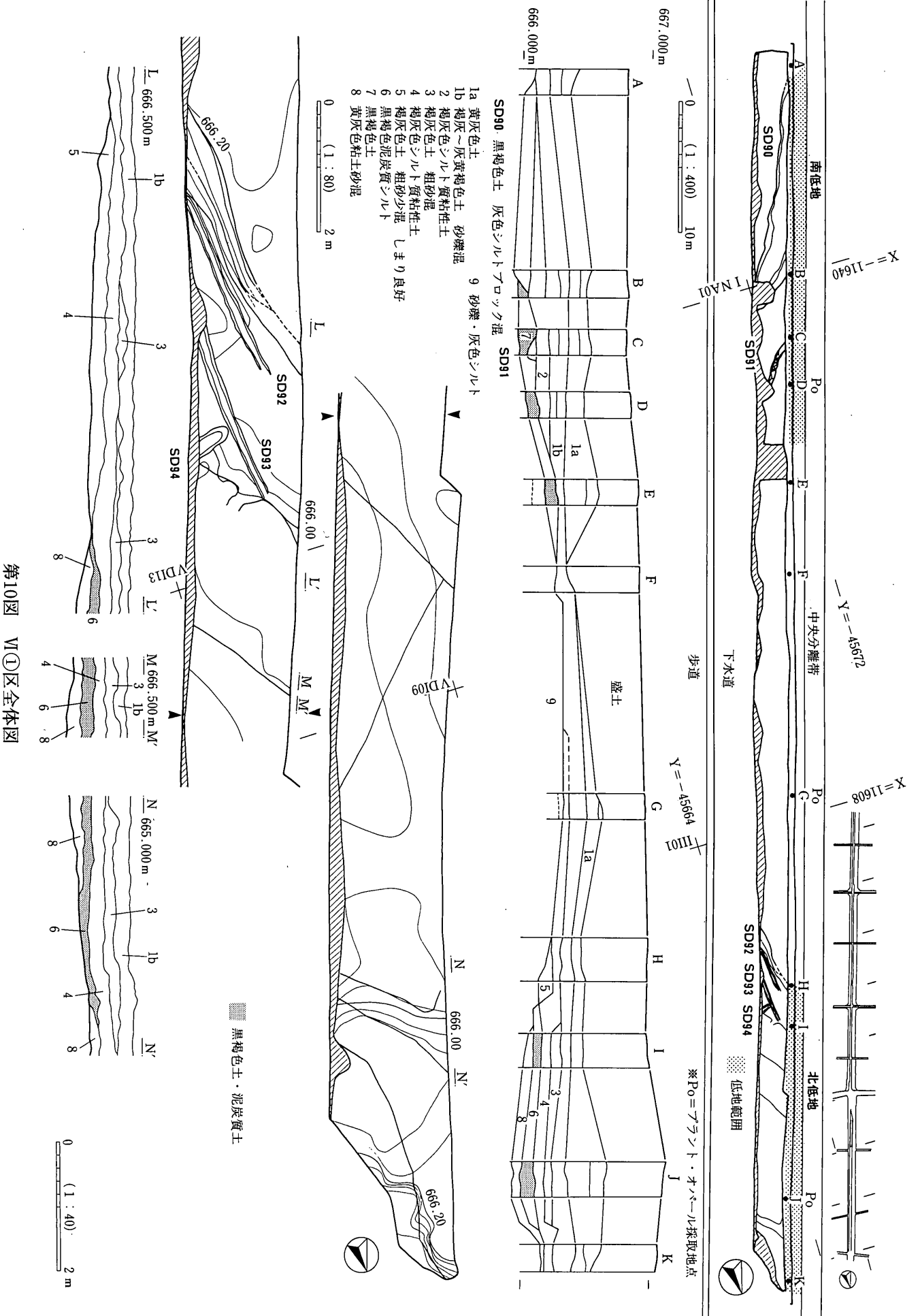
土層は全域に1a・1b層があり、その下は北・南低地を中心にⅡ層褐灰色土層の2～5層とやや泥炭質となるⅢ層黒・黒褐色腐植土層の6・7層がある。北低地はⅢ層下には黄灰色粘土のⅣ層？8層があるが、他はⅤ層の9層灰～黄褐色シルト・砂礫層となる。なお、南部の2層は下にあるSD90埋土が埋め土であることから1b層の疑いがあり、8層もⅤ層に含められる可能性がある。このVI①区では3地点でプラント・オパール分析を実施し、南部では7層以上、中央部では4層以上、北低地内では8層以上で稲作の可能性が想定されたが、何れも1a・1b層以外は量が少なく、ヨシ属のほうが圧倒的に多い。

遺構は微高地部では全く検出されず、南北低地の2層（Ⅱ層）下で溝跡SD90～94、4層（Ⅱ層）下で4層を耕作土とした水田底面の造成痕とも推定される僅かな段差が確認された。プラント・オパール分析結果と対比すると、Ⅱ層褐灰色土層群以上で水田耕作が行われていた可能性は調査所見と一致するが、8層（Ⅳ層？）下の水田遺構は認定に不安を残す。プラント・オパール分析と併せても水田耕作の有無は断定できなかった。出土遺物は僅で、中央の低微高地部の4層から平安時代須恵器、北河道跡4層から古瀬戸平碗破片が出土し、4層は室町時代以後と思われる。弥生以前と断定できる土器は採取されていない。以下には土層ごとに検出遺構を記述する。

①. Ⅱ層 褐灰色土層群の遺構

SD90（第10図 PL1） VH25・M05・10

南低地東端、7層（Ⅲ層）上面で検出した。若干緩やかなカーブを描きながら、北東から南東へN23°E方向に調査区を横断し、調査区内では18mほど調査した。幅は2.1mで、断面形は立ち上がり緩やかな逆台形を呈し、埋土はブロック土を多く含む人為的な埋め土とみられる。本跡上部にある2層は積極的に埋め土と断定できなかったが、2層上に1b層の整地層があり、本跡埋土が埋め土とすると中間の2層



第10図 VI①区全体図

がI b層の一部である可能性は残る。東岸はV層砂礫層となり、本跡東側が削平されているものの、本来高まりであったと思われる。なお、本跡南方の伊那バイパス交差点北のSD111は規模や位置から関係するものかもしれない。また、平行するSD91は同じ区画に則った関連遺構と思われる。

SD91 (第10図) VM25

SD90西側の黒褐色土7層(Ⅲ層)上面で検出された。SD90と平行する幅30cmほどの狭い溝跡で、やや蛇行しながらN34°E方向に調査区を横断する。遺存状態は不良で、凹凸が著しい底面のみ検出した。

SD92~94 (第10図 PL1) VD17

北低地南岸の5層(Ⅱ層)下で検出され、埋土は褐灰色を基調としたⅡ層起源の土層である。SD92・93はN7°W方向に河道跡南岸と平行し、SD94はそれに直交する。南端は下水道工事で削平され、北端は浅く消える。幅20cm前後で検出面からの深さは2~3cmと浅く、5層耕作時に削平された可能性がある。本跡が正方位なので、本跡を伴う水田造成で北低地南辺は削平されたと思われる。

②. Ⅲ層 黒褐色泥炭質土層の遺構

北低地8層水田跡(第10図 PL1) VD08・12・13・17

北低地では水田跡が存在する可能性を想定し、Ⅲ層黒色泥炭質土下の8層(Ⅳ?層)上面で水田跡の検出を試みた。しかし、土壌が乾燥していたためⅢ層がブロック状に剥がれて調査できず、次善の策として8層下面での水田造成・耕作痕跡を探した。南東方向へ傾斜する河道跡低地底面で僅かな段差が検出されたが、その痕跡も微弱で河道跡と同方向のみしか認められないことから水田遺構とは断じ得なかった。水田としても泥炭質土層以上での耕作の可能性が高い。

(2) VI②区の遺構(第II図 PL1)

VI①区の北約20m、VI③区の南10mほどに位置する。中央の砂礫層の高まりで隔てられたVI①区から続く南低地と、VI③区から続く北低地が検出された。低地を隔てる砂礫層の高まり頂部は1b層下面で途切れ、区画整理時に削平されたとみられる。また、この盛り上がり東側は水田造成で削平されている。

土層は表土の盛土、1a・1b層、両低地に旧耕作土と思われる2~7層(Ⅱ層)の褐灰色土層群があり、南低地は下層に11層(Ⅲ層)黒褐色土粘土層、13層(Ⅳ?層)褐灰色粘土層、北低地は河道跡を埋める薄い灰色・灰白色のシルトが縞状に重なる自然堆積層と思われる14層(V層)、最下部は砂礫層がある。なお、両低地のⅡ層褐灰色土層は対応関係が不明で別番号をつけた。また、南低地11層は色調からVI①区の北低地7層(Ⅲ層)に対応すると捉えたが、泥炭質ではなく、色調も暗褐色~褐灰色を呈することから耕作等で変質したⅡ層関連土層と捉えられるかもしれない。さらに、北低地にはⅢ層がなく、V層14層直上で中世陶器が出土したので北低地河道跡の形成時期は新しいと思われる。

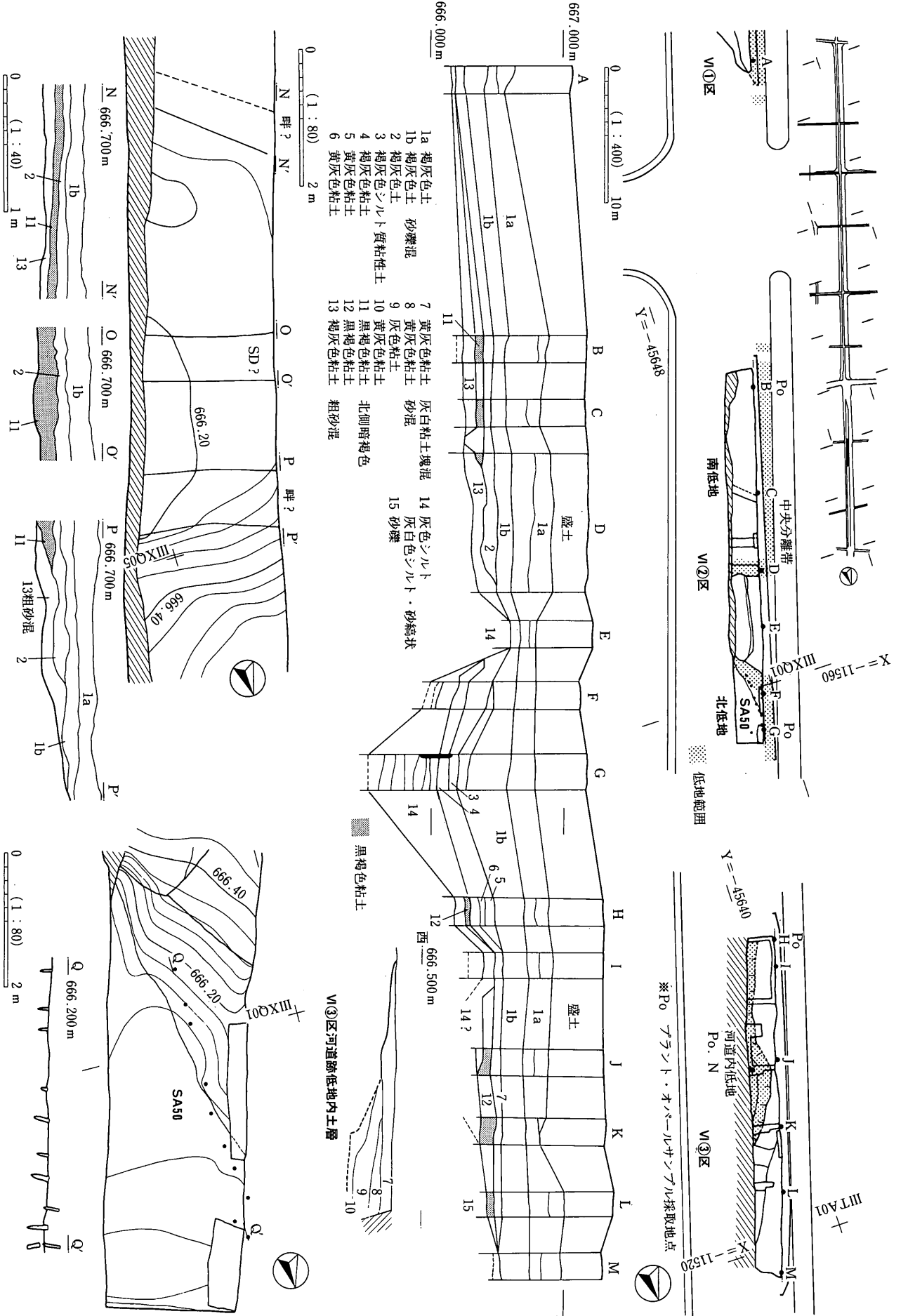
遺構は南低地9層(Ⅳ?層)下面で水田耕作関連遺構?、北低地で3層以上から打設された杭列SA50が検出され、遺物は南低地2層で内耳鍋小片、北低地4層で山茶碗系こね鉢が出土した。プラント・オパール分析は北・南低地各1箇所ずつ実施し、南低地は1b層まで大量、2・11・13層で少量検出され、13層以上での水田耕作の可能性が指摘された。北低地は3・4・14層でプラント・オパール分析を実施し、4層までは一定量認められたが、14層最上層で少量、14層上部で僅かに検出され、それ以下は全く検出されていない。14層上部で水田耕作の可能性が指摘されたことは調査所見と異なる。

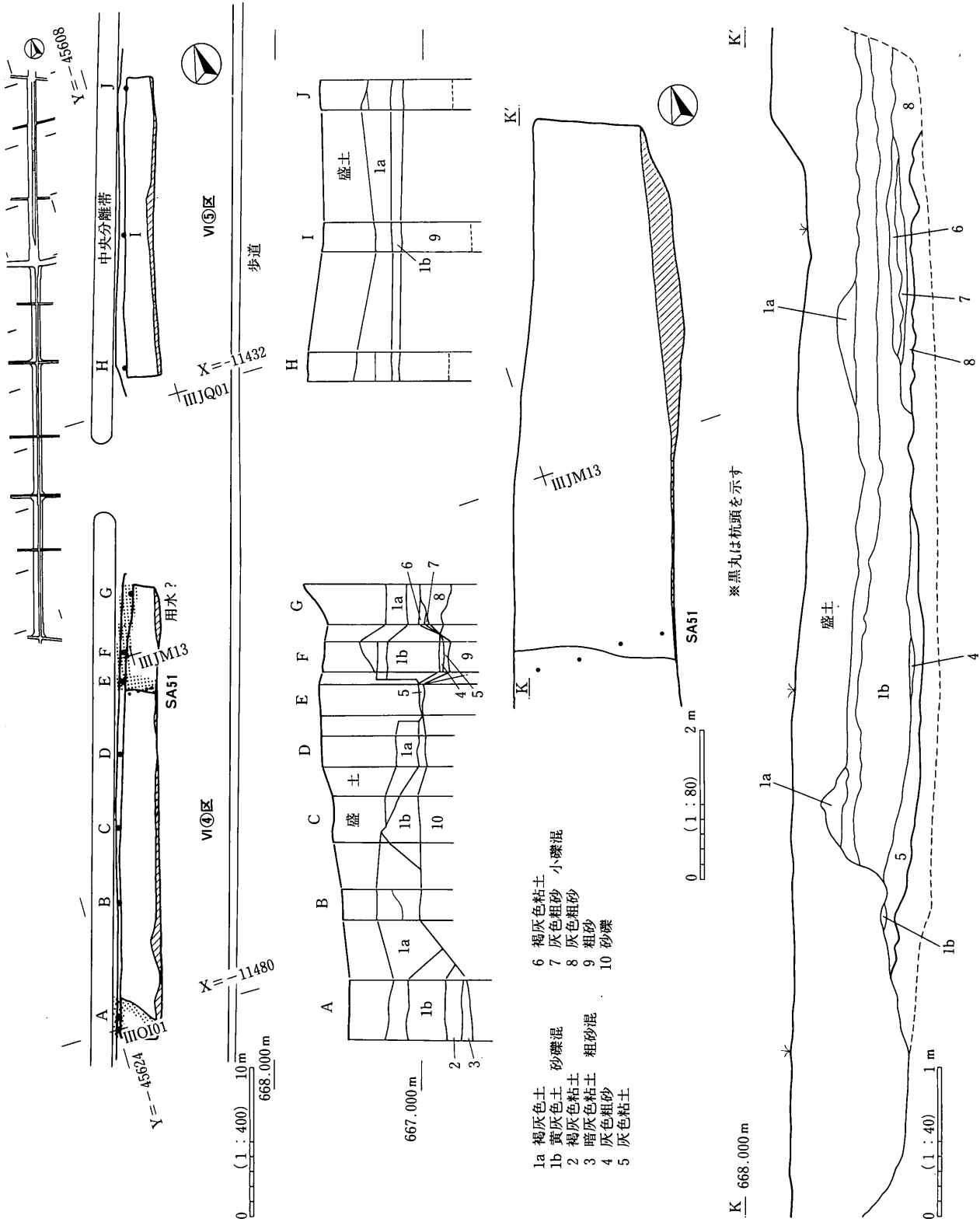
①. Ⅱ層 褐灰色土層群の遺構

SA50 (第11図 PL1) ⅢS25

北低地南縁にあり、調査区壁の土層観察から杭頭が3層中まで達すると確認された。N7°W方向の1列の杭列で、北西部は調査区外に延び、南端は低地南際の砂礫層際までである。杭列に伴う畦や溝跡は確

第11図 VI②・③区全体図





第12図 VI③・④区全体図

(6) VI⑥区の調査 (第13図 PL1)

VI区北部にあり、VI⑤区の北30m、道路を挟んでVI⑦区の南約10数mに位置する。調査区長は約40m弱で、地形・土層の様相はVI⑦区と同様である。地形は大部分がVI⑦区から連続する緩傾斜の微高地地形で、南端が一段低くなる。南端の低地は対岸が検出できず、規模も不明で河道跡状低地とも断じ得ない。土層は上部から道路盛土・1a・1b層、その下はII層関連の明黄褐色土シルトをブロック状に含む3層と南端低地内の粗砂混じり2層に分層された。何れも淘汰が悪く人為的な整地土と思われるが、3層は1b層と明瞭な層理面をなして水田土壌と思われる褐灰色粘土を基調とすることから、1b層とは別土層と捉えた。2・3層は中央から北部に分布し、土坑は3層の下、V層上面検出である。南端の低地は粗砂混じり褐灰色粘土、褐灰色粘土層で埋められ、当地区には黒・黒褐色土のIII層がない。

遺構はV層上面で検出し、不整形な土坑若干と砂質の強い帯状の土層や12層のシルトの低い高まりを検出したが、低い高まりは畦基部の可能性もあるものの痕跡が微弱で断定できなかつた。また、南低地内は連続耕作されたと思われる粘土層で水田遺構は検出できなかつた。本地区では3層に粘土ブロックを含むことから耕地整理以前に水田化されていた可能性が窺えたが、SK220・221と南低地土層との関係を見逃し、土坑との前後関係は明かにできなかつた。ただし、SK222が3層下まで立ち上がると捉えられ、SK224が3層と類似埋土であることから、土坑は3層形成直前か同時の所産で、3層から天目茶碗が出土したことを考慮すると17世紀以前と捉えられようか。また、古墳後期土師器杯の出土から、周辺で何らかの活動か遺構が存在する可能性がある。なお、プラント・オパール分析を南端低地の褐灰色土層群を中心に実施したが、2・5・6層でイネプラント・オパールが一定量検出され、稲作の可能性が想定された。

SK220 (第14図) IU16

南低地内で検出したが、低地内土層との関係は明らかにしえなかつた。1辺約1.4mの不整形を呈し、細かい砂礫を含む褐灰色土の埋土で、検出面から底面まで深さは約5cmほどである。

SK221 (第14図) IU11

南低地境に位置する。東側は下水管埋設で破壊され、西側もトレンチで壊した。平面形は1辺約2mほどのやや不整形を呈する。底面は平坦で、検出面から底面までの深さは約30cmほどである。埋土は他の土坑同様に砂礫を含む褐灰色土である。出土遺物はない。

SK222 (第14図) IU06・07・11・12

調査区中央南よりに位置する。上部はビニールパイプ埋設坑で破壊され、西端は調査区外へ延びる。長軸をN24°W方向とする不整形楕円形の土坑で、残存長は長軸約4.6m、短軸は2.6mを測る。調査区壁の土層観察から立ち上がりは3層下と確認できた。埋土は褐灰色粘土で、粗砂はあまり含まない。

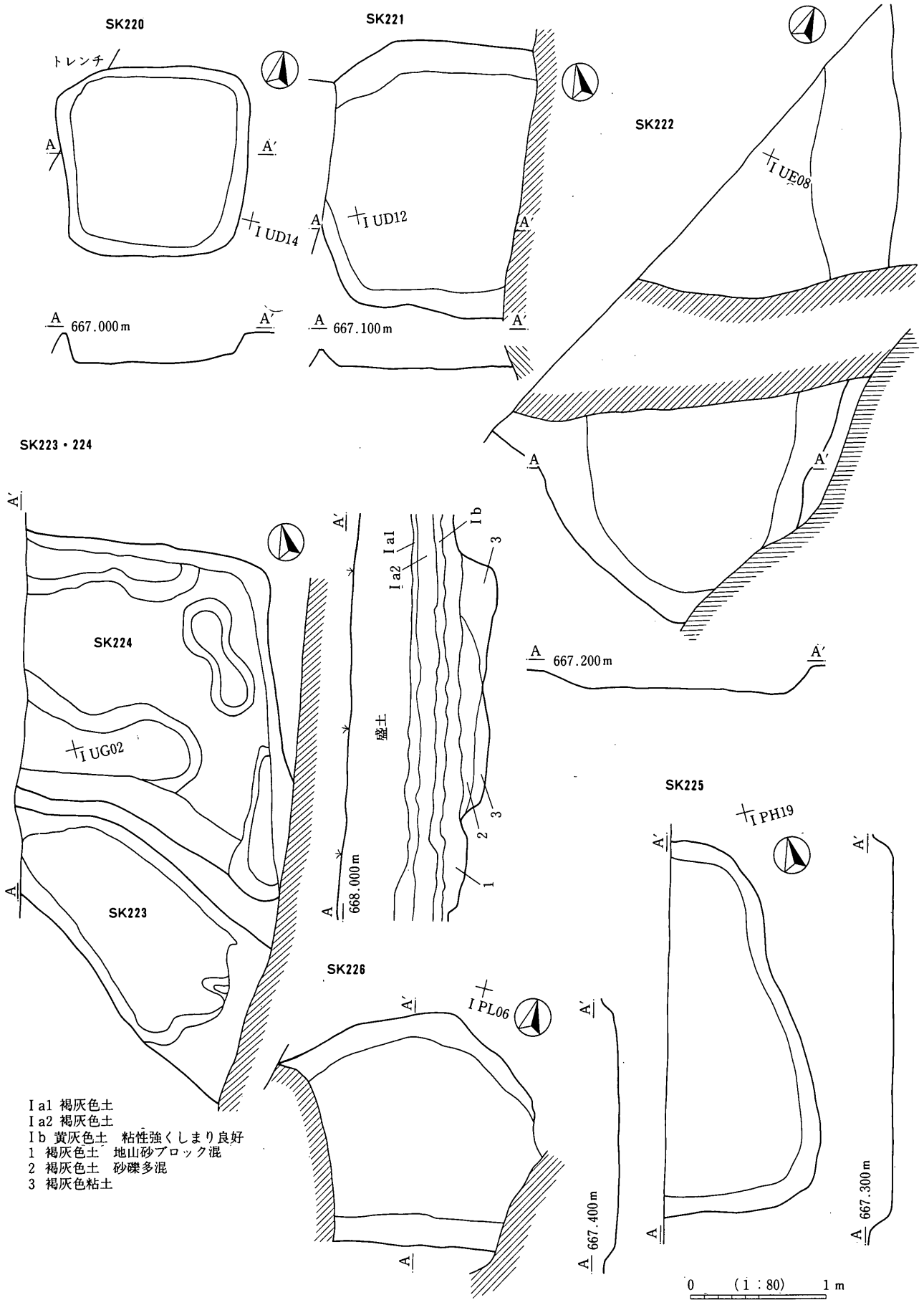
SK223 (第14図) IU02

SK224に隣接し、西端は調査区外へ延び東端は下水管で破壊される。長軸N32°Wで約2.6m以上、短軸約1mの不整形楕円形を呈し、西側は検出面から底面まで10cmほどの深さだが、東側は一段上がって徐々に浅くなる。埋土は3層と同じで粗砂を多く含む褐灰色粘土である。出土遺物はない。

SK224 (第14図) IU02

SK223北に隣接する。やや不整形な方形を呈し、西側は調査区外へ延びる。確認できた規模は南北約2m、東西は調査区内で約2mである。底面壁際が深く溝状に掘られるが、鋤を差し込んだ痕跡と思われる。埋土は上部に直径2～5cmの砂礫を多く含む褐灰色粘土、下層は砂礫をあまり含まない褐灰色粘土である。掘り込みは3層下にあり、検出面から底面までの深さは約20cmである。出土遺物はない。

SK225 (第14図) IP22



- Ia1 褐灰色土
- Ia2 褐灰色土
- Ib 黄灰色土 粘性強くしまり良好
- 1 褐灰色土 地山砂ブロック混
- 2 褐灰色土 砂礫多混
- 3 褐灰色粘土

第14図 VI⑥・⑦区土坑

調査区北部にある。西側は調査区外へ延び、南北方向で約2.8m測る。本跡も3層下にあり、埋土は砂礫を多く含む褐灰色粘土である。検出面から底面までの深さは約15cmで、出土遺物はない。

(7) VI⑦区の遺構 (第13図 PL1)

VI区最北端に位置し、南のVI⑥区とは箕輪橋に続く古道といわれる道路を挟んで隣接する。調査区長は26mほどで、地形はVI⑥区から連続した微高地ながら北端が緩やかに低くなる。土層は北端低地付近がIb層が厚く盛られたため区画整理以前のII層7～10層(II層)黄灰色粘土層が認められ、それ以外はIb層直下が灰色シルト・砂礫層の12区(V層)で、区画整地時の重機バケット痕と思われる攪乱が残る。遺構は12層(V層)上面で溝跡・土坑1基を検出した。北低地内の7～10層は酸化鉄の集積や還元状態、粒度などで細分したが、7・8層の土質は大差なく連続耕作の土層と捉えられる。水田関連遺構はV層上面で整地跡や酸化鉄集積のみ検出したが、黄灰色粘土層全てでイネプラント・オパールが一定量検出され、水田耕作の可能性が想定された。出土遺物がなく水田時期は不明である。

SK226 (第14図) I P08

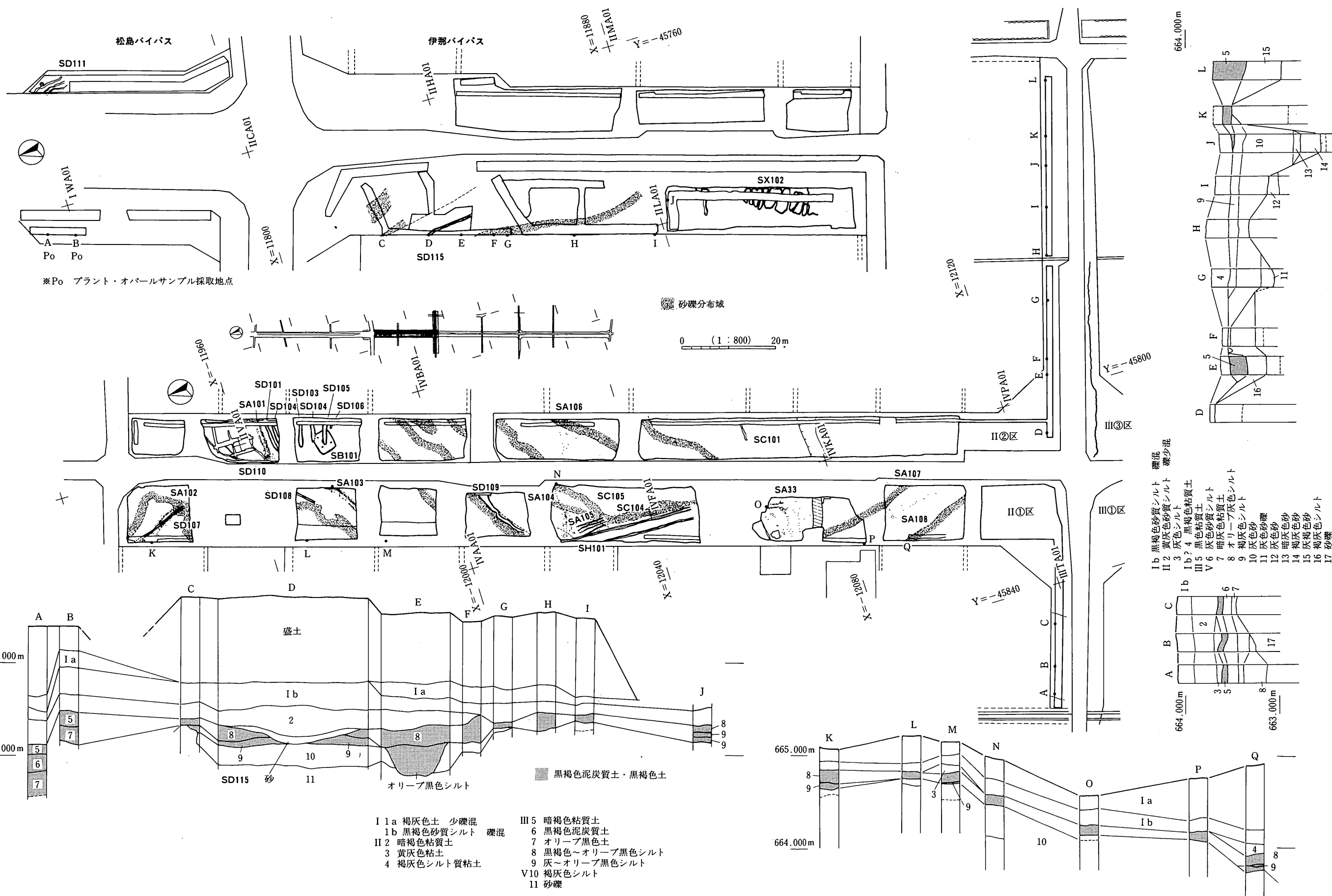
不整形長方形の平面形で、シルトブロックを多く含む埋土である。形状や埋土の類似からVI⑥区で検出された土坑とほぼ同様のものと思われる。

SD95 (第14図) I P03・04

調査地区中央南よりをN68°E方向に横断する。浅いU字状断面で埋土は黄灰色粘土である。性格は不明で、溝跡方位は北端の水田遺構や南の箕輪橋へ通づる旧道とは異なるが、VI⑥区土坑群と類似し、本跡から南に土坑群が分布することから正方位の区画に先行する区画と思われる。

北低地水田関連遺構

VI⑦区北部で黄灰色粘土9層分布境が一段低くなる地形と帯状酸化鉄溶脱範囲が認められた。前者は水田を造成するために傾斜地を削平した痕跡と思われる、後者は水田畦下が土中金属の浸透差で溶脱したものと思われる。いずれもN88°W方向で、箕輪橋へ抜ける旧道と平行し、箕輪遺跡全域に認められる正方位に近い、関連があると思われる。



第15図 I・II区、II・III区境立会い調査地点全体図と土層柱状図

第2節 I・II区の調査

1. I・II区の概要（第15図）

調査概要 松島バイパス南端交差点付近から伊那バイパス北部をI・II区とした。平成12年度を中心に調査し、I①区北端の栄通信工業用地部は平成13年2月、II①区の一部工場移転に伴う残件部分のみ平成13年度に追加調査した。ここでは、便宜上II区南端の東西交差道路脇の立会い調査も含めて述べる。

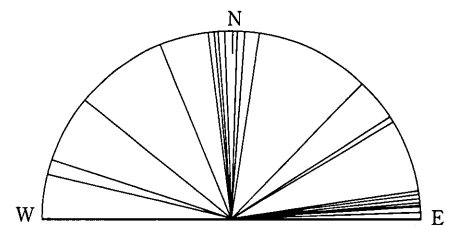
地形 I・II区はVI区南部から続く類似地形環境で、北西から南東方向へ抜ける河道跡が埋積して浅い窪地となり、若干起伏のある地形である。I①区北端の河道跡低地内で泥炭質土が認められたものの、全般的にⅢ層は黒・黒褐色土となって水漬きの湿地環境とは考えにくい。また、I区から続く緩やかな傾斜はII区北端で僅かに水平ぎみになり、傾斜地形内の小微高地を形づくっているが、ここで竪穴住居跡が検出された。この高まり以南はⅢ区北部の河道跡低地群へ向かって傾斜がやや急となる。なお、第15図の土層柱図では浅い河道跡が少ないようにみえるが、これは調査時に部分的にしか土層図を作製しなかったことによる。

土層 I区東側は区画整理で削平されたために、比較的残りの良い西壁の土層柱状図を掲載した。最上部には区画整理以後の現耕作土1a層、昭和26・27年区画整理による整地土層と思われる砂礫を多く含む褐灰色～オリーブ黒色土の1b層があり、その下は区画整理以前の耕土と思われる灰色粘土質のⅡ層にあたる2～4層、Ⅲ層の植物腐植土をベースとする黒～黒褐色土の5～9層、砂礫・灰色シルト・砂からなるV層の10・11層と続く。I区ではⅡ層が河道跡の窪地内を中心に残存するが、II区は削平されて部分的にしか残存しない。Ⅲ層はI区北端の河道跡低地内に泥炭質の土層6層があるが、他は灰褐色～オリーブ黒色シルト、あるいは灰～オリーブ黒色シルトでⅡ層に類似する。土層の色調からⅢ層としたが、層厚の薄さからも耕作の手が加わっている可能性がある。

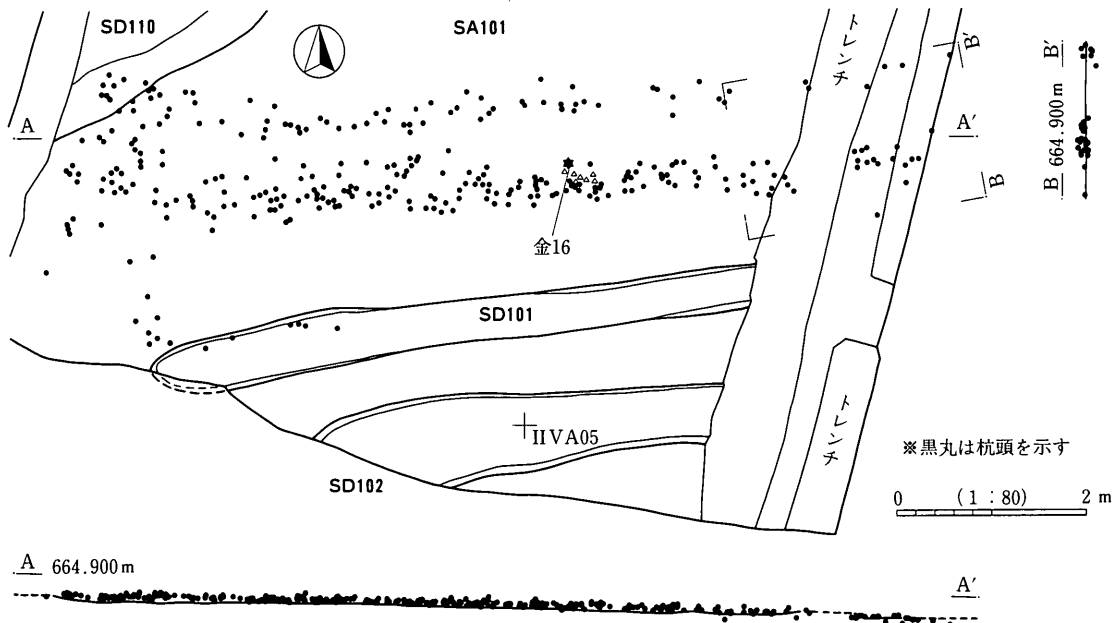
プラント・オパール分析はI①区北端の交差点北側河道跡低地内で実施し、2層以上で圧倒的なイネプラント・オパールが検出された。下層は急速に減少するものの6層泥炭質土上部まではイネプラント・オパールが検出され、6層以上で水田耕作の可能性が指摘されている。しかし、イネプラント・オパール自体が少ないことに加え、ヨシ属プラント・オパールのほうが圧倒的に多いこと、明瞭な水田耕作遺構は把握できていないことなどから6層前後まで積極的に水田耕作されているとも断定できなかった。

2. 遺構

遺構はⅢ層を除去してV層上面1面で検出したが、調査区壁土層等からⅢ層の上下面に分けられる。Ⅲ層上面のIb層直下～Ⅱ層上面で検出された遺構にはSD107・115、SH101があり、SX02も出土遺物からⅢ層以上の所産とみられる。杭頭がⅢ層中に認められた他の杭列も本来Ⅲ層上部以上から打ち込まれたと思われる。一方、Ⅲ層下面検出遺構は竪穴住居跡がある。このI・II区検出遺構は数も少なく、散漫な分布で密度は低い。これは被覆されて遺存する水田遺構がなく耕作土下面の遺構痕跡が部分的にしか残存しないこともあるが、基本的に水田化された時期は新しいことも関連しよう。なお、杭列・溝跡方位はII区北西部で地形に合わせたと思われるN30°Wと直交方向の遺構があるが、真北から若干東西に振れる方位か、その直交方位が多い（第16



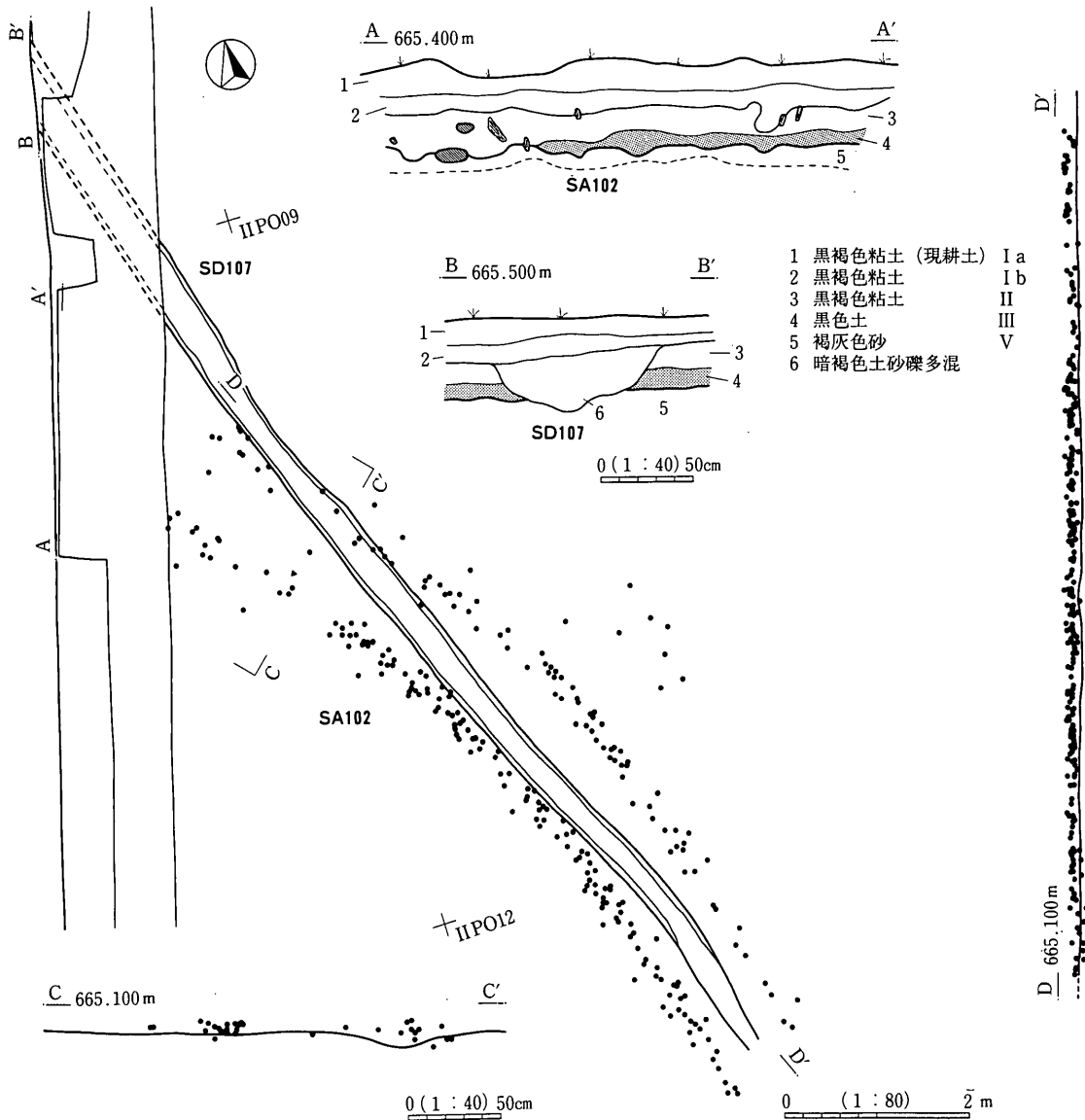
第16図 I・II区 SA・SD 方位



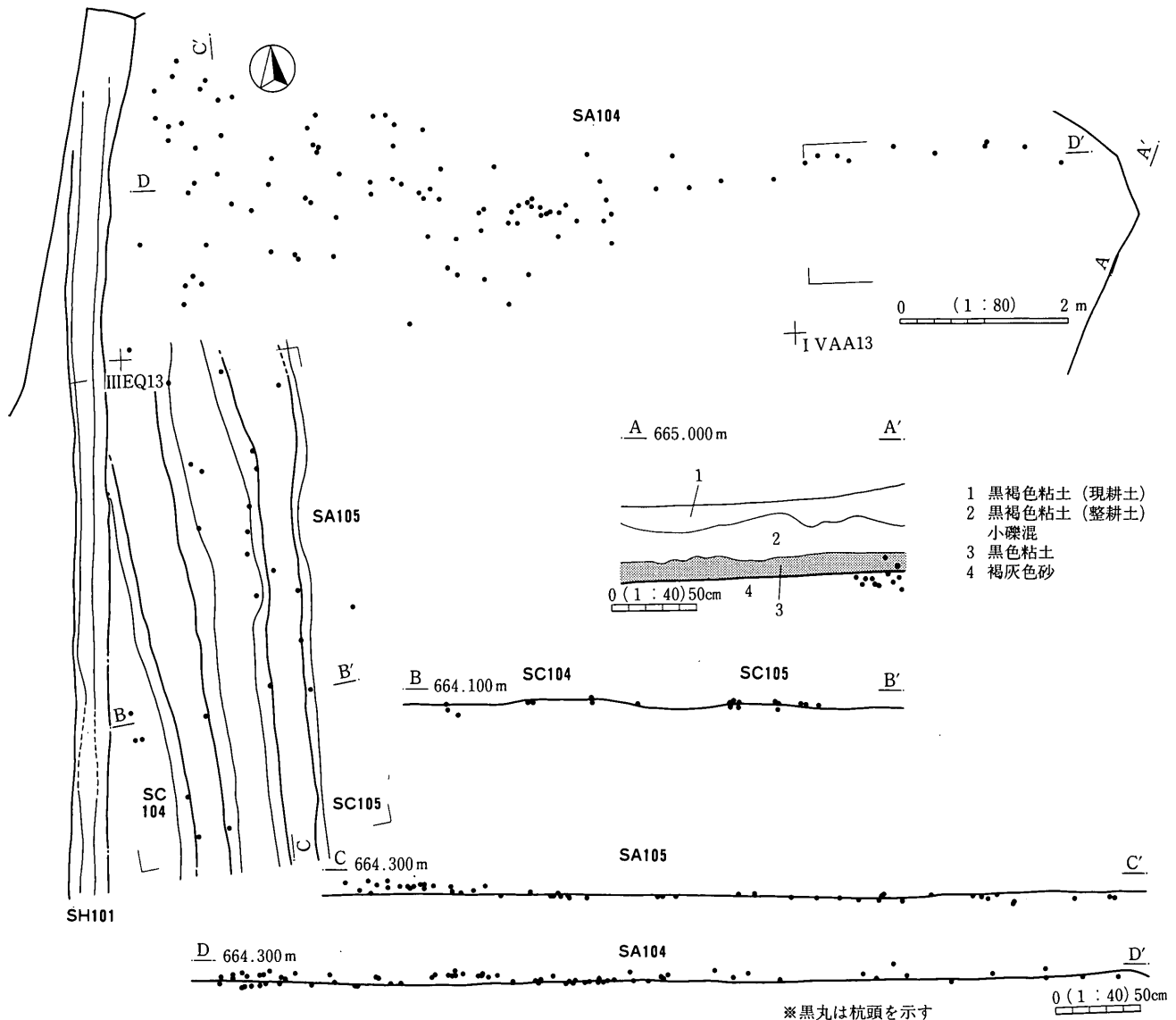
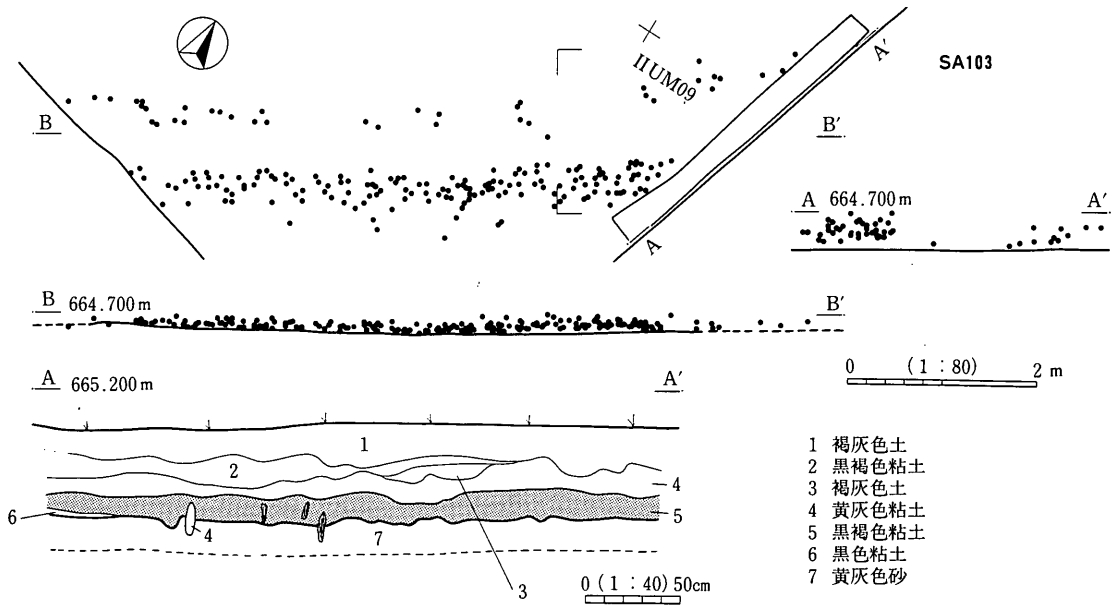
A 664.900m

※黒丸は杭頭を示す

0 (1:80) 2 m



第17図 SA101、102、SD107



第18図 SA103、104・105、SC104・105

図)。同一方位の溝・杭列・畦基部遺構が近接・重複することから基本的な区画は変化していないとみられ、遺構分布が散漫で異方位遺構の重複もないので水田化された時期は比較的新しく、区画変化も乏しいと思われる。以下には遺構種類別に報告する。

①. 杭列

杭列はⅡ区のみで検出され、杭列同士の重複はない。溝跡と並列あるいは重複する杭列があり、2列並行するものが多いことから溝護岸施設の可能性が考えられる。

SA101 (第17図 PL 3) ⅡU05、V01

Ⅱ②区北部に位置する。V層シルト層上面で検出したが、杭頭は上層にある。N84° E方向に調査区を横断し、長さ約9.9mを確認した。西側Ⅱ①区への連続状況は不明ながら、西端で若干北側へカーブするように見え、SA102に接続する可能性がある。中間に空白域を挟んだ2列の杭列からなり、南側は密で西端は若干南へ杭列が延びる。溝跡に伴う護岸施設で、傾斜下方にあたる南辺側を補強するために杭が密に打設されたと考えられる。南杭列検出中にキセルが出土した。

SA102 (第17図 PL 3) ⅡP14・19

Ⅱ①区北端にある。北西端は調査区外へ延び、南端は砂礫層が露呈する周辺で不明となる。調査区内では約8.6mほどを確認した。全体的にN31° W方向の緩やかなカーブを描き、南部はN26° W、西端はN51° W方向となる。砂礫層の高まりと直交し、地形にあわせて構築されている。調査区壁の土層観察から杭頭はⅢ層黒褐色粘土層中にあり、SD107に切られると観察された。幅は約1.6m、中間に80cmほどの空間を隔てて並列する2列の杭列からなり、西側杭列が密である。SD107と重複することや2列平行する様相から溝護岸施設と思われる。遺物は杭と検出時出土した近世末頃の行平鍋片がある。

SA103 (第18図 PL 4) ⅡU13・14

Ⅱ①区北部にあり、N59° E方向に調査区隅を横断する。調査区内では約6.6mのみを確認したが、南西・北東隣接区では延長先が検出されなかった。調査区壁の土層観察からⅢ層黒褐色土層上面に杭頭が達することが確認でき、Ⅱ層褐灰色・黄灰色粘土層以上から打設されたと推測される。幅約1.2mで、中間に40~50cmの空間を開けた2列の杭列からなる。北側杭列は散漫ながら南側杭列は密である。周辺の砂礫層分布から地形にあわせて設置されたとみられる。杭以外の出土遺物はない。

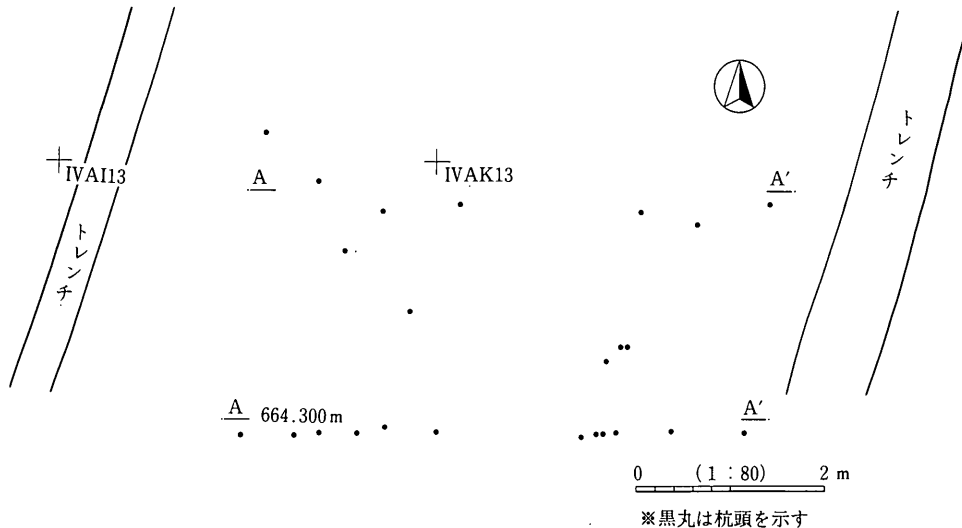
SA104・105 (第18図 PL 4) ⅣA11・12・16

Ⅱ①区中央付近に位置するL字状の杭列で、東西方向をSA104、南北方向をSA105とした。いずれもV層上面検出だが、SA104東端の調査区壁土層に杭頭高を投影させるとⅢ層黒色土以上から打ち込まれているとみられる。SA104はSA105延長先端付近からN88° E方向に幅約1.2m、長さ約10.8mの帯状範囲に杭が分布する。西側は比較的密で若干蛇行し、東側は比較的杭は粗いが2列に見える。東端は調査区外へ延び、その延長先にある類似方向のSA106に接続する可能性がある。SA105はSA104の西端から巨視的にはN3° W方向で南へ延び、幅2.4m、長さ約6.0mの範囲に杭が散在的に分布し、明瞭な列状にはならない。SA104に連続し、SC104・105、SH101は同方位で近接することから、同じ水田区画を踏襲する遺構と思われるが、SH101が後出すると捉えられる以外は前後関係が不明である。SA105検出時に内耳鍋と古瀬戸後期様式天目茶碗片が出土した。

SA106 (第19図) ⅣA18

Ⅱ②区中央のV層褐灰色シルト上で調査した。幅1.6m、長さ約6mの範囲に杭が散在的に検出され、西端はSA104に接続する可能性がある。構造や規模の詳細は不明であるが、2列に見えるところがある。遺物は杭しかないが、方位は箕輪遺跡で多く認められる真北か直交方向に近いものである。

SA107・108 (第20図 PL 4) ⅢO09・14



第19図 SA106

II①区南端に位置するL字状の杭列で、東西方向のSA107はN82°E方向で長さ約3.9m、幅約0.6m範囲に杭が散在し、杭列は2条並列する。南北方向のSA108はN7°W方向に幅1.1m、長さ約12.1m範囲に杭が散在し、2列とも思われるが分布が粗く不明である。正方位の遺構だが時期不明である。

SA33 (第21図 PL4) IIIJ19・20・24

II①区南部にあり、平成13年度調査した。上部は攪乱により遺構の残りが悪い。東西方向の3列の杭列を中心に北側にN6°W方向の2条の杭列、南側にも散在的な2条のN4°E方向の杭列がT字状に接続する。中央の杭列は東端で南に緩やかにカーブしてN87°W方向に調査区を横断する。北側に接続する杭列は密で幅約60cm間隔に2列平行して調査区北外へ延び、調査区内で約3.6mほどの長さを測る。南側の杭列は幅約80cmほどで南端は杭が散漫になって延長先が不明ながら約3.2m以上の規模である。これらの2条並行する杭列は溝兩岸に打設された護岸施設とみられ、中央の東西方向の空閑地は幅1.2mほどの道か用水と思われる。

②. 溝跡

SD115 (第15・21図) II B17・22、G02

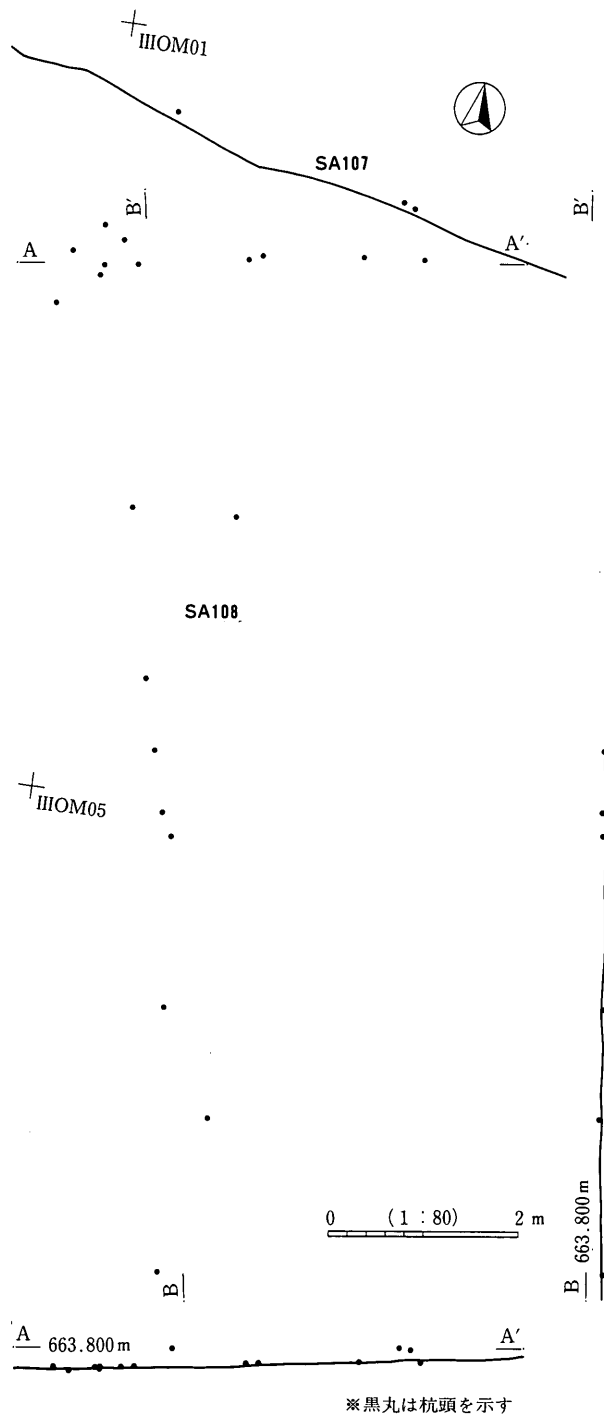
I②区のトレンチに溝断面がかかって存在が判明し、延長先を拡張して調査した。浅い河道跡低地中央に位置し、西壁土層断面からIII層上面まで立ち上がりが確認された。II層水田耕作中の遺構ながら、区画変化に伴って廃絶されたと考えられる。幅約60cm、確認範囲で約12mの長さで溝の方向はN5°Wである。断面形は立ち上がりが緩やかなU字状を呈して深さ約20cmを測る。埋土は砂で用水と思われる。遺物は出土していない。断面図はI・II区全体の土層柱状図中に掲載した。

SD111 (第15図 PL2) IW04

伊那バイパス北端交差点北側の歩道拡張部V層上面で検出した。西岸は砂礫層で微高地東縁に沿って構築されている。溝は若干蛇行しながらN7°W方向に調査区を横断し、調査区内では約6mほどを調査した。幅は約1.8m、断面は西側がやや深くなる2段状で、検出面からの深さは約30cmと浅い。出土遺物は弥生土器若干があるが、小破片で本跡に伴うか判然としない。本跡の約60m北の松島バイパスVI①区SD90とは形状や走行方向が類似し、関連する可能性もある。なお、本跡脇で深さ9cmほどの浅い円形の落ち込みが検出されたが、浅いために土坑と認定しなかった。

SD101～SD106 (第15・21図) II U05・10・15、V01・06

II②区北部に位置し、並列することから関連する遺構と捉えてまとめて記述する。何れも検出面から底



第20図 SA107・108

※黒丸は杭頭を示す

面までの深さが5 cm 前後、幅50~90cm で、東端は調査区外へ延びるが、南端のSD106以外は西端が揃って長さ3.8~6.4m 前後と類似規模で並列する。方位はSD101・102がN82~85° E、SD103~106がN73~78° W で、前者は北に隣接するSA101と並行し、後者は現道路の直交方向となる。他遺構との重複はSD104・105がSB101を切る。埋土はSD105のみ記録があり、黒褐色砂質土の単層である。遺物はSD105から瀬戸美濃連房灰釉碗、黄瀬戸鉢片が出土し、近世以後の所産とみられる。形状から畝等の耕作痕と思われるが、SD101・102は北側のSA101と関連した畦基部の可能性もある。

SD107 (第17図 PL 5) II P09・14

II①区最北端に位置する。N22° W 方向に調査区内を斜めに横断し、南端は砂礫層が露呈する周辺で不明となる。調査区内では約14.0m を確認した。調査区壁の土層観察からI b 層直下に立ち上がり確認される。幅0.4m で、I b 層下端から30cm ほどの深さのU字状断面形となる。重複するSA102は検出土層から本跡が切るとみられる。出土遺物は瀬戸美濃連房土瓶、伊万里碗片がある。

SD108 (第15・21図) II U08・09

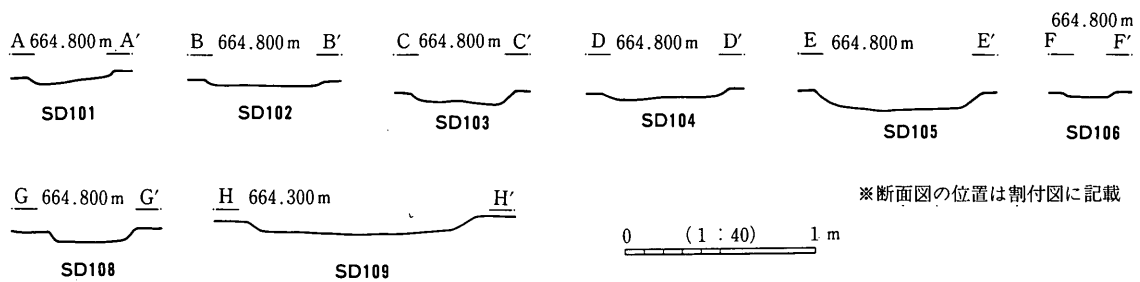
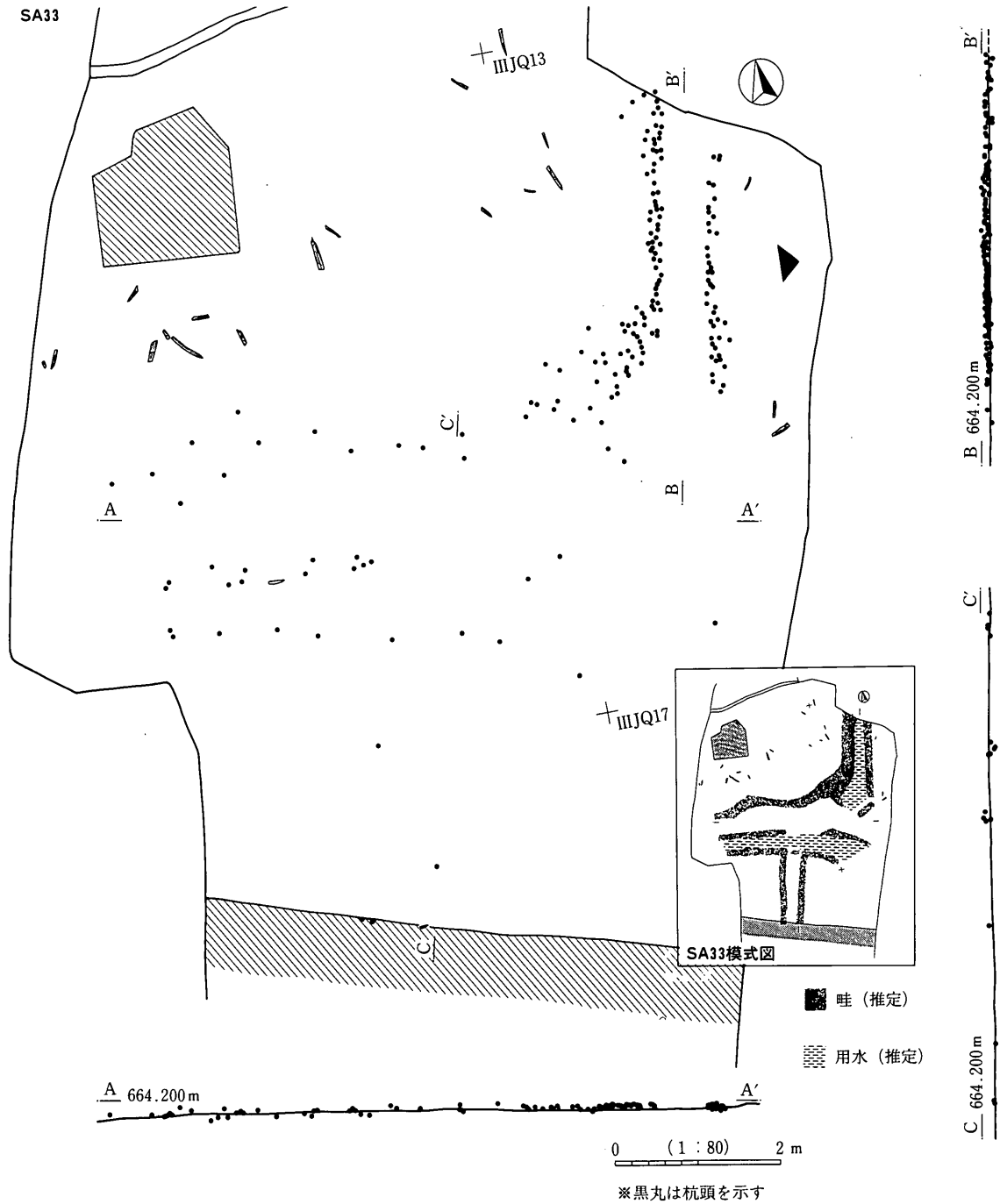
II①区北部に位置し、北東部は調査区外へ延び、南西端は浅く消えるまで約4.5m ほどを検出した。方位はN43° E で、南に位置するSA103や周辺の砂礫層の走行方向と類似する。幅は40cm 前後と一定し、断面形は浅い逆台形である。出土遺物は瀬戸美濃連房灰釉丸碗片、カワラケ片が出土し、近世の所産とみられる。畦畔際の深耕された部分の残存かもしれない。

SD109 (第15・21図) IV A02・06・07

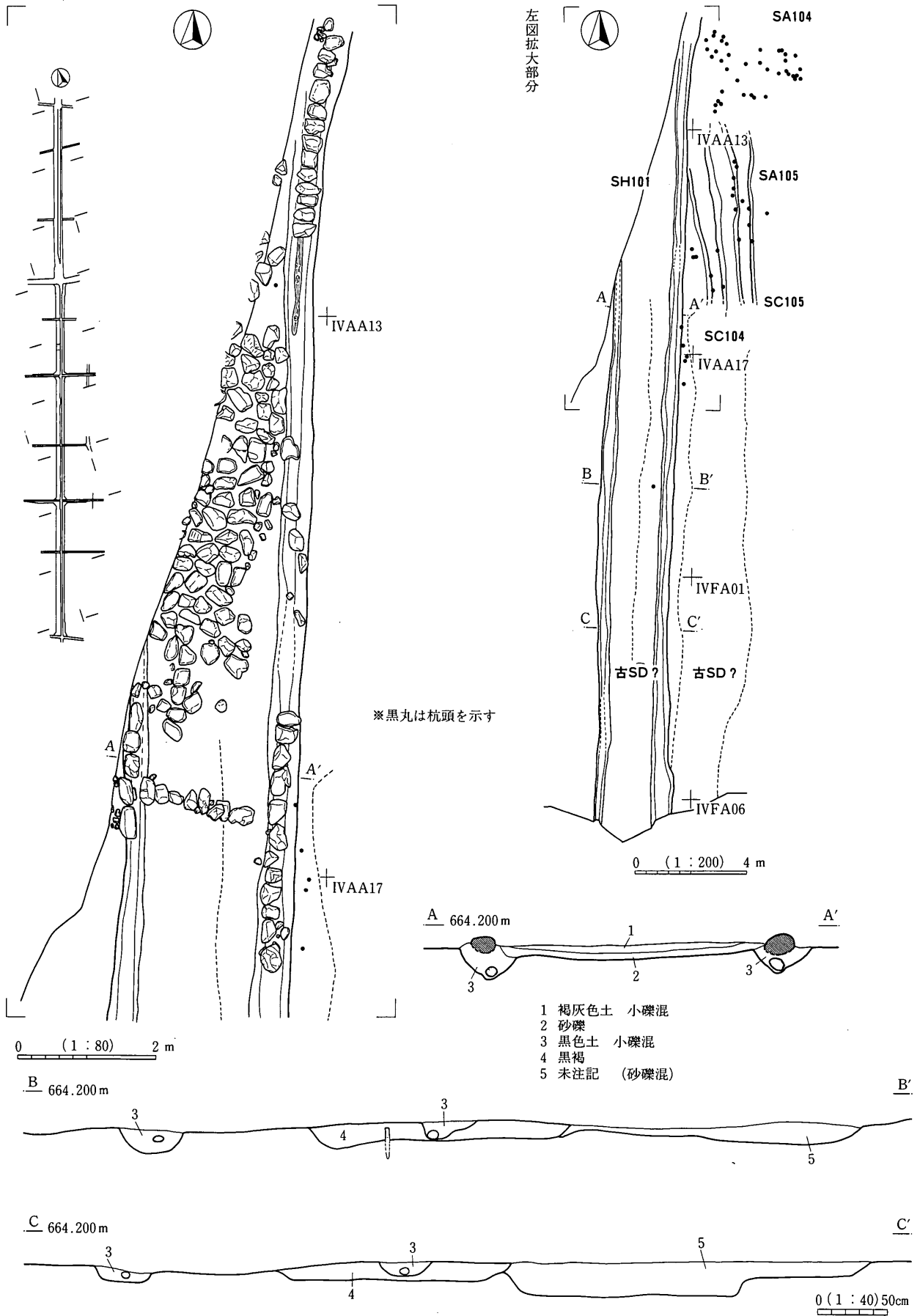
II①区中央に位置する。北東端は調査区外へ延び、南西端は浅く消えて調査区内で約12.8m ほど検出した。砂礫層際に沿ってN60° E 方向に緩やかなカーブを描いて途中僅かに屈曲する。幅は東端で約1.7m ながら、西端は約60cm と狭く、底面は西へ傾斜して両端の標高差は17cm ほどある。断面形は浅い逆台形で、埋土は記載洩れで不明である。本跡は砂礫層境に位置し、幅が一定せずに途中で屈曲するなど遺構ではない可能性も残る。

SD110 (第15図 PL 5) II O25、P21、U05、V01

II②区北部に位置する。調査区北東から南西方向にN60° E 方向に緩やかなカーブを描いて横断する。



第21図 SA33、II区SD断面



第22図 SH101

隣接したII①区では検出されず、南西端は不明である。幅は東端で9.0m、西端で約3.9mと一定せず、底面は凹凸があって西へ緩やかに傾斜し、検出面から底面までの深さは約14cm以下と浅い。形状から窪地地形か、耕作地造成に伴う削平痕の疑いがある。弥生土器片のほかに埋土中から蹄鉄が出土している。

SH101 (第22図 PL5) III E15・20、J05・10

II②区中央にある区画整理直前まで存在した用水跡で、整地土層1b層下面で検出した。N2°E方向に調査区を縦断し、南端は区画整理時に削平されたためか途中で消え、調査区内で約30m程検出した。重複遺構の調査所見はないが、断面図では本跡脇に溝状落ち込み1本が記録されており、空中写真でも東側に砂礫が顕著な土層帯状分布が認められる。本跡に先行する1(2)条の溝跡が存在したと思われる、SA105はこの溝に伴う可能性もある。幅約2.5m間隔で岸際に細い溝を設けて根太材を埋設し、その上部に護岸の石垣を積み上げている。北側約14mほどは石垣最下段が残存するが、溝中央に崩落した石が散乱し、この状態から調査当初集石遺構SHとされた。遺構記号は整理でもそのまま使用した。

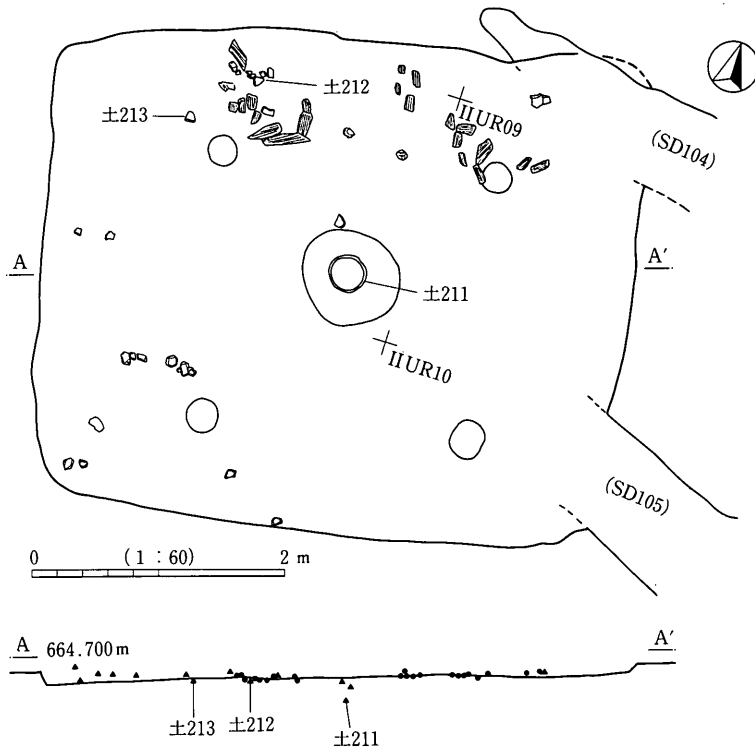
③. 畦跡

SC101 (第15図) IV F17

II②区南部に位置し、V層上面で溶脱範囲が帯状に認められたことから畦痕跡と捉えた。帰属する水田土層は検出面以上としかわからないが、本跡を境に北側が高く、南側は低くなる地形変換点に位置する。確認範囲では方位N86°E、幅約30cm、長さ約3.9mの規模である。

SC104・105 (第18図 PL4) IV A16

II①区中央にあり、西端はSH101に切られ、SA105との前後関係は不明である。V層褐灰色シルト上面で2列の低い帯状高まりとして検出され、形状から所謂擬似畦畔と呼ばれる畦基部と捉えた。西側のSC104はN6°W、長さ約7.0m、最大幅約1.0m、高さ約8cmの規模で、東側のSA105はN4°W、長さ約6.4m、最大幅約70cm、高さ約2cmである。二つの畦基部中間は浅く窪み、溝跡であった可能性がある。両端とも延長先は確認できていない。



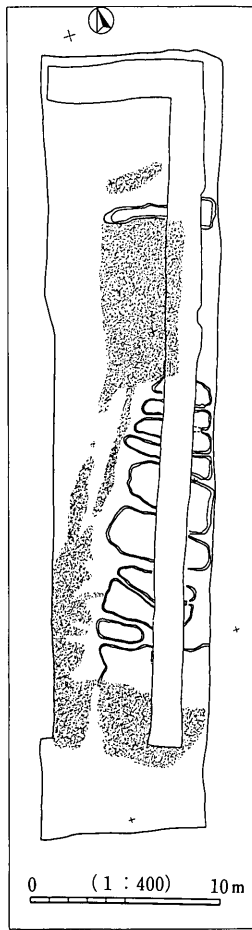
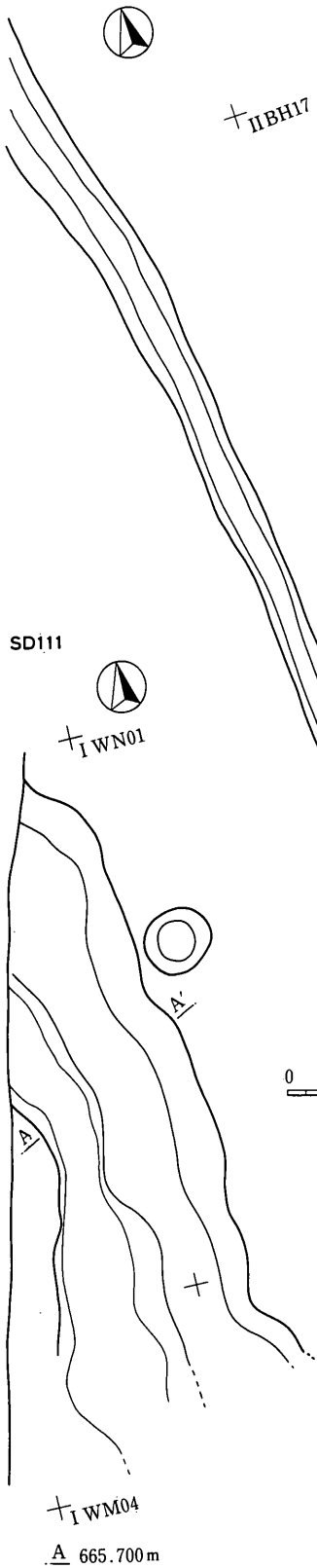
第23図 SB101遺物出土状況

④. 竪穴住居跡

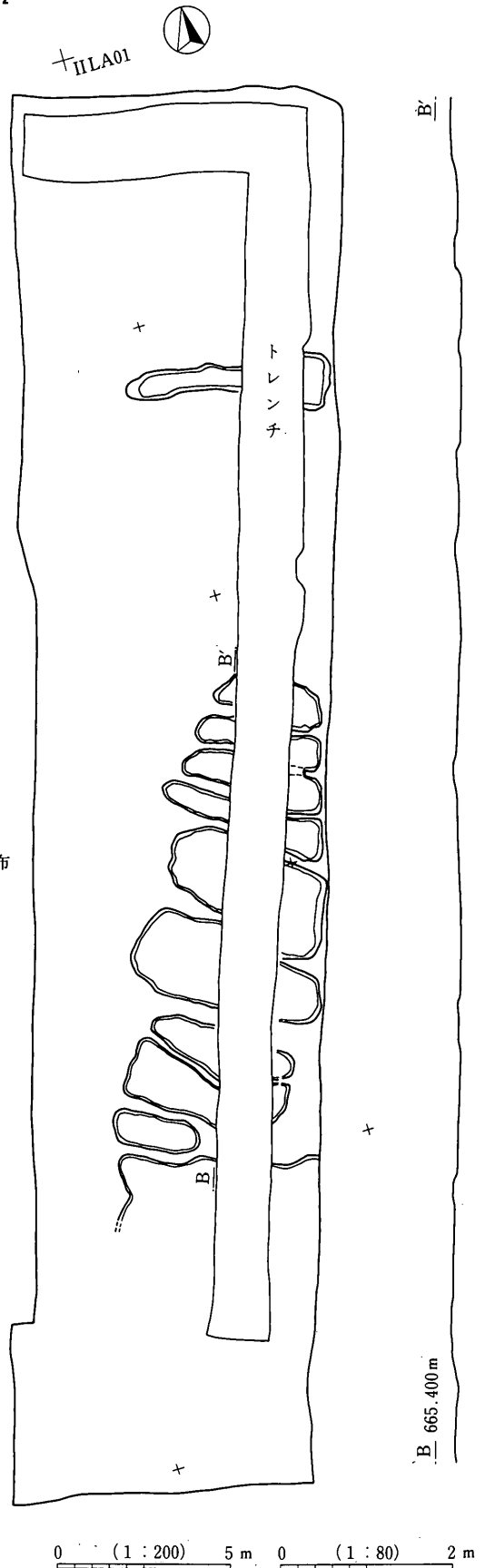
SB101 (第23・74図 PL5) II U09・10

II②区北部の小微高地にあり、SD104・105に切られる。平面形は東西約4.6m、南北約3.8mの長方形を呈し、主軸方位はN80°Eである。埋土は壁際の砂質黒褐色土、中央のやや黒みのある黒褐色に分層された。南西から北壁付近で土器破片が散在的に出土し、炭化材は北側周辺で検出された。壁はほぼ垂直で、床はV層の砂礫や青灰色シルトを均したもので、床面上では約2.1m間隔で方形に配置される柱穴跡4基と住居中央に配置される炉跡が検出された。炉跡は住居跡中央に位置し、広めの掘り方内に甕を逆位に埋設し、炉内埋土は住居埋土の1層と同様であ

SD115



SX102



■ 砂礫混土層の分布

※断面図は1区土層柱状図に記載

0 (1:40) 1 m

第24図 SD110、115、SX102

る。出土土器は弥生後期末頃の所産が少量ある。なお、完掘の図は微高地域の遺構のところに掲載した(第74図)。

⑤. 耕作関連遺構

SX102 (第24図 PL2) II L06・11、K10・15

I ①区南端で砂礫層に覆われる不整長方形の浅いくぼみが並列するように検出され、調査時に水田関連遺構と捉えた。しかし、整理時に空撮写真を再検討したところ、浅い窪み脇に数条の礫を含む土がN34° E方向に帯状に平行するように認められた。浅い窪地が並列する形状や砂礫層主体の土層で覆われる特徴は後述するⅢ区河道跡低地群のSX01に類似するように思われ、耕作地の改良に伴う整地遺構の可能性が考えられた。出土遺物は瀬戸美濃連房灰釉丸碗や産地不明の土瓶底などの陶磁器が若干採取され、近世末～近代の遺構と判断される。また、遺物から検出面は本来2層以上と思われる。

4. II区南端交差道路の立会い調査 (第15図)

II・Ⅲ区中間のバイパス交差東西道路脇の拡幅部分をトレンチ調査した。バイパス東側はかなり上面が削平されており、大部分は砂礫層か河道跡を埋積するV層の砂・シルト層が露呈し、Ⅲ層の黒色・黒褐色土層は河道跡窪地に部分的に残存するのみであった。一方、西側は比較的旧土層が残存し、I b層以下にII層群の黄灰色砂質シルト、灰色シルト、Ⅲ層の黒色粘質土が認められた。両地区で遺構・遺物は検出されていない。

第3節 III区北の河道跡低地群の遺構

1. III区北河道跡低地群の概要（第25図）

調査概要 III区北部には北西—南東方向に調査区を横断する細長く深い河道状低地7条が検出され、調査時に北からA～G低地と呼称した。調査は平成12年度にⅢ①・②区のA～G低地西側、平成13年度4月に平井星光堂前のⅢ③区A低地東側、同年9月以後にⅢ③区南部のB～E低地、Ⅲ④区のE～G低地の順に調査し、平成15年度は木製品が比較的多く採取されたE低地以南について現道下を調査した。

土層と調査面は平成12年度の調査区西壁際に入れたトレンチで確定し、泥炭質土層に覆われた耕作等による踏み込みの細かい凹凸や畔と思われる高まりが認められる水田面や、杭列や溝跡などが認められる層を調査対象とした。一方、河道跡低地間の砂礫層の高まりは耕地整理時に削平されていると捉えられたため、トレンチ等で杭列などが確認されない限りは面的調査を実施していない。

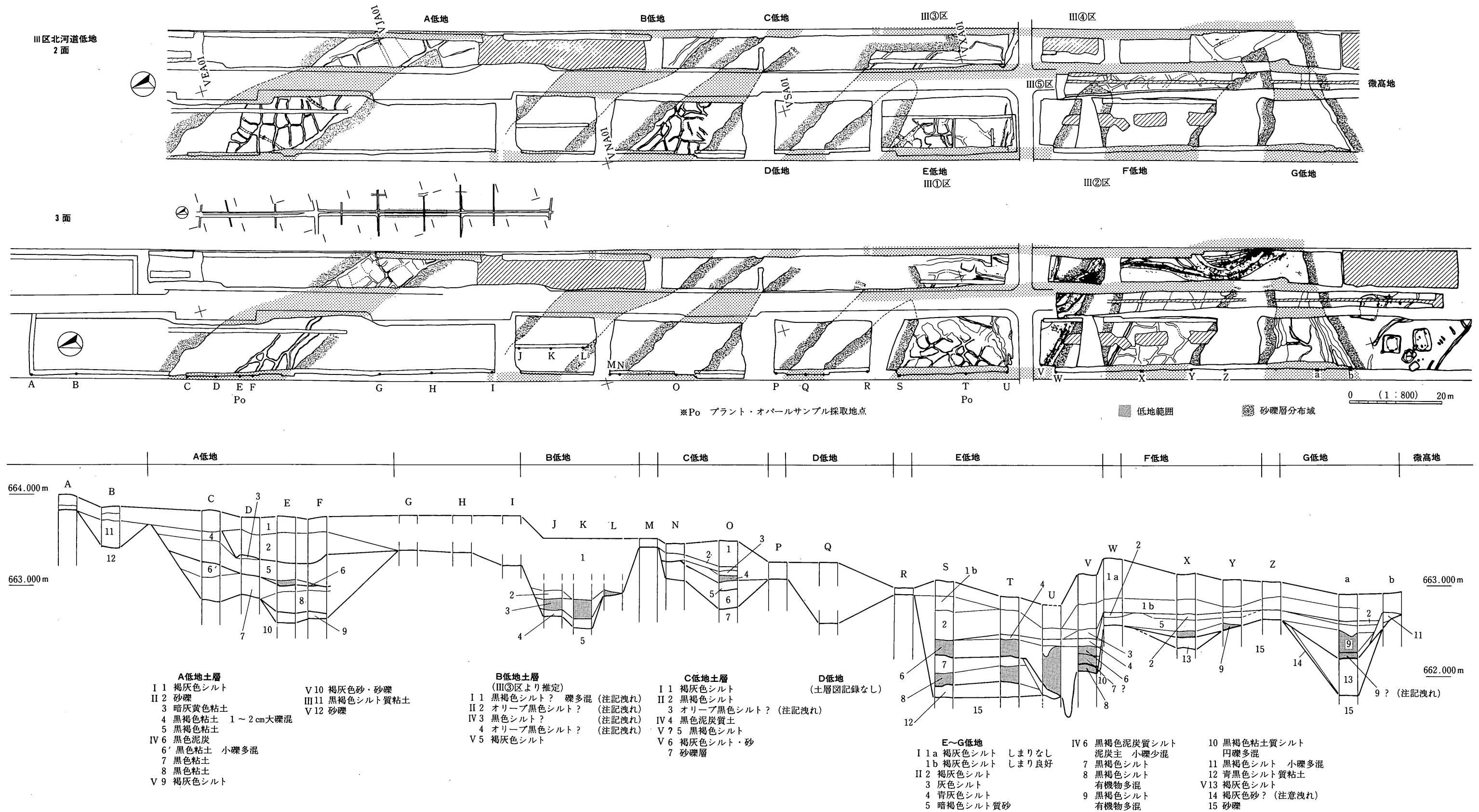
地形 II区南部から傾斜する地形がIII区北部で緩やかになる周辺に河道跡低地群が並列し、その南は集落跡のある微高地となる。河道跡低地群西側の様相は不明だが、東側はⅢ・Ⅳ区間の交差道路立会い調査で延長先がみつき、微高地の北・東縁にそって南東方向へ抜けると想定された。その南部のⅣ・Ⅴ区中間交差道路の立会い調査では認められず、Ⅳ区東方で天竜川に浸食されて途切れられると思われる。

河道跡の幅はD低地が6m前後と狭く、B・C・F・G低地は10～12m、A低地が20m強、E低地が最も広く30m前後である。最下層水田面の標高はE低地が最も低く、標高662.000m前後、河道跡岸の砂礫層頂部から約1mほどの深さを測る。その北側A～D低地は底面標高662.600m前後と近似するが、傾斜地形のため周囲礫層頂部からの深さは北側のA低地が1.1mと深く、B～D低地は0.3～0.4m前後と浅い。E区以南のF・G低地は何れも底面標高662.20m前後、周囲の礫層頂部からの深さは0.5mである。河道跡低地の規模や深度はさまざま、比較的規模が大きく深いA・E低地では泥炭質土層が発達して数面の水田面が調査しえたが、B低地などは上面が砂礫を多く含む土層で覆われ、良好な泥炭質土層も認められなかったことから水田面調査は実施せずトレンチ調査で終了した。

これらの河道跡は深さからも今回の調査域内では比較的成形成時期が新しいもので、河道跡形成以後は水田に利用されながら次第に埋積して浅化し、周囲の高まりと低地底面の比高差が減少してSX101やSA31のように河道跡低地を越えて広がる遺構や、地形より方位を重視した遺構が現われたと捉えられた。

土層 各河道跡低地は土層が多様で統一的な土層として整理できなかつたが、深い河道跡ほど泥炭質土層が発達して土層枚数が多く、上層は泥炭質が弱くなって灰色粘土質化する傾向が認められた。これは箕輪遺跡全体の土層傾向とも一致する。上層は現耕土・整地土のI層があり、低地内を中心に区画整理以前の水田土壌と思われる褐灰色基調のII層粘土質土層がある。このII層は下層ほど黒味を帯びる傾向はあるものの、河道跡低地を越えて広範囲に認められる。それ以下の土層は泥炭質傾向ながら、河道跡ごとに様相が若干異なる。浅い河道跡はII層以下が泥炭質粘土層あるいは黒色土層だが、A・E低地など深い河道跡はII層下に泥炭質が強い土層が発達し、水田耕土となるオリブ黒色土層と泥炭質土層が交互に2枚前後確認された。これらの土層の下層はV層灰色・青灰色のシルト・砂層、砂礫層となる。

上記の様相は巨視的に箕輪遺跡全体に共通するI・II・III・V層の構成と変わらないが、湿地環境下で泥炭質土層が発達すると共に流入した堆積土が耕作で変容した土層もあってIII層対応層が低地内では数枚に分層される傾向をもつ。こうしたことからIII層とは別に河道跡低地内の水田耕作関連土層をIV層とした。しかし、実際の対比ではV層との区別が難しい土層や、III層に類似する土層もあり、土層の捉え方に問題



第25図 III区河道跡低地群 2・3面全体図と土層柱状図

を残した。特に流水があって湿地性の強いA・E低地では泥炭質土層で覆われる水田面が把握できたが、浅く流水が無いと思われるB～D、F・G低地の黒・黒褐色土がⅢ層の可能性があり、この層が耕作土で、検出遺構は耕作土下の水田痕跡であった疑いがある。なお、Ⅲ区河道跡低地群は調査域内で最も深く、水田面とⅤ層砂礫層間の土層も薄いなどから新しい時期に形成されたと思われる。遺物も縄文土器がなく弥生中期後半以後の土器しかない。縄文後期土器を出土したⅣ区河道跡は弥生時代にかかなり埋積していることを考えると、縄文後期以後～弥生中期の間に形成された可能性がある。

2. 遺構 (第25図)

調査面はA・E低地3面、F・G低地は1～2面、C・D低地各1面で、B低地は面的調査を実施していない。これらは土層の対比から以下のような対応関係と思われた。

1面 Ⅱ層検出の遺構面である。A・E低地で調査した。A低地は更に1a・1b面に分けられたが、1a面は区画整理前後の整地遺構で他の低地に対応面はない。A低地1b面とE低地1面は厳密に同一層と対比できていないが、類似杭列を検出したことから近似時期と思われる。また、E低地SA31・SD58はC・E低地を横断しており、河道跡低地が埋積して平坦化した段階の遺構とみられる。低地上端にあるA低地SA110も同様であろう。他にE低地SD112・113、A低地SC108・109がある。

2面 A・E低地の上層泥炭土層を除去して検出した遺構面である。ここでは上層水田跡の痕跡も併せて検出され、該当する遺構としてA低地SC102・103、E低地106などの礫芯畦跡がある。類似形態のSC110は2面畦跡と重なることから2面に含めた。A低地2面を覆う土層から中世前半のカワラケが出土し、SC102・103はそれより後出するので、13世紀以後の可能性もある。

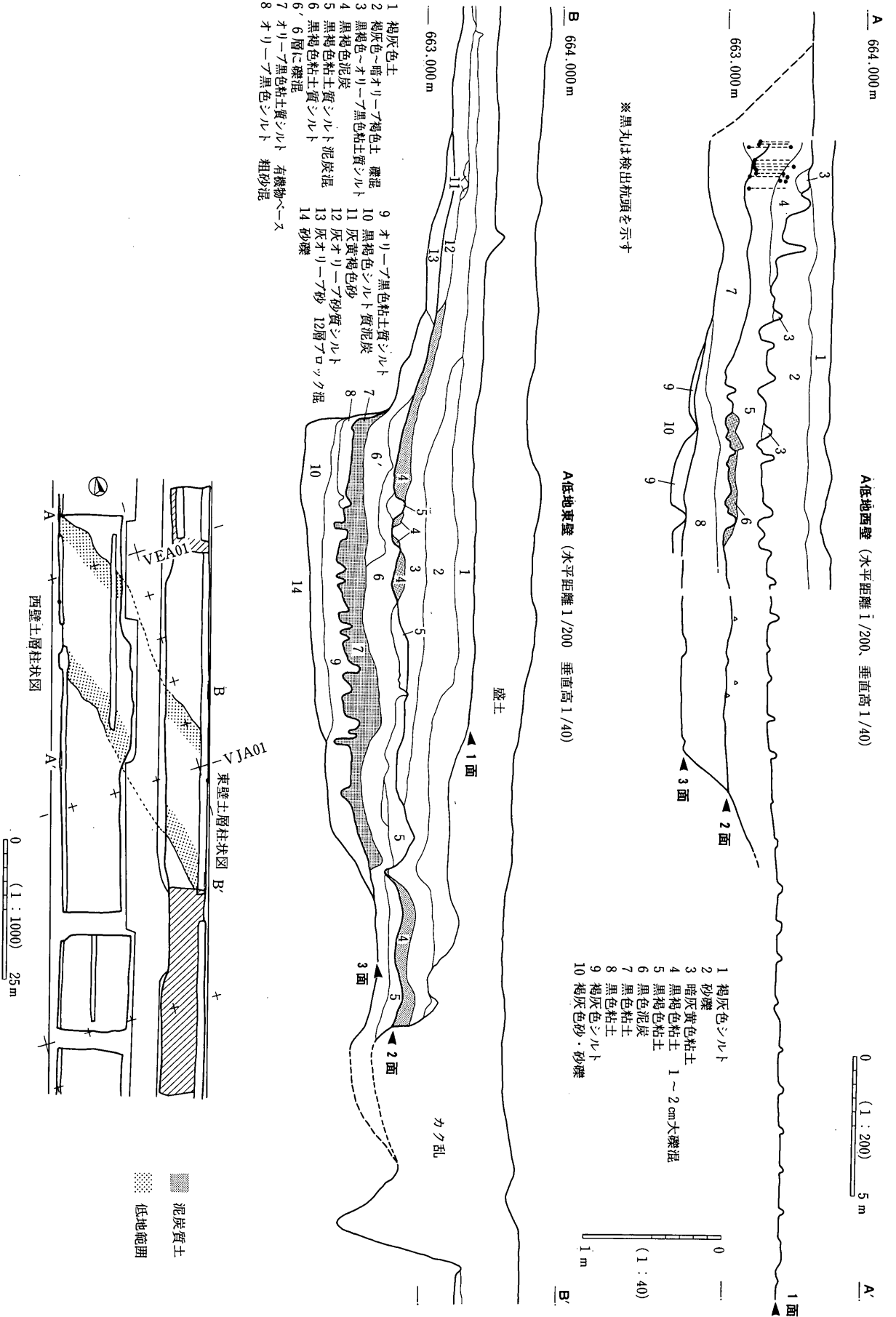
2面の水田跡は地形に合致する畦跡と、地形以外の規格によると思われる畦跡で構成され、木芯畦跡は検出されていない。この畦の様相はA低地で顕著に認められ、C低地水田跡も類似した様相からこの調査面に含まれよう。ただし、E低地は同様の畦跡が一部にしか認められず、やや様相が異なる。2面年代は判然としないが、E低地や類似様相を示すC低地の出土土器から平安時代9世紀代の可能性がある。

3面 A・E低地3面とF・G低地水田面が該当する。A低地では土畦の小区画水田跡、E低地で高い側に土畦の小区画水田、最深部に木芯畦跡が検出され、耕作放棄後に流れたと思われる自然流路SD114・61・62が検出された。出土土器はA低地3面から弥生後期と古墳後期の土器、E低地3面からは弥生中期～古墳時代後期の土器が出土している。また、E低地の木芯畦跡木材のC14年代測定(AMS法)暦年代では弥生後期と想定された。E低地の年代は一致していないが、土器自体も少なく確実に伴うとも断じきれないので、年代は断定できない。さらにF・G低地水田跡はE低地3面水田跡に対応する可能性があるが、F・G低地自体が耕作土下面を調査した可能性があり、河道跡の深さが異なることから水回しを考えるとすべて同時に水田耕作されたとも断じ得ない。

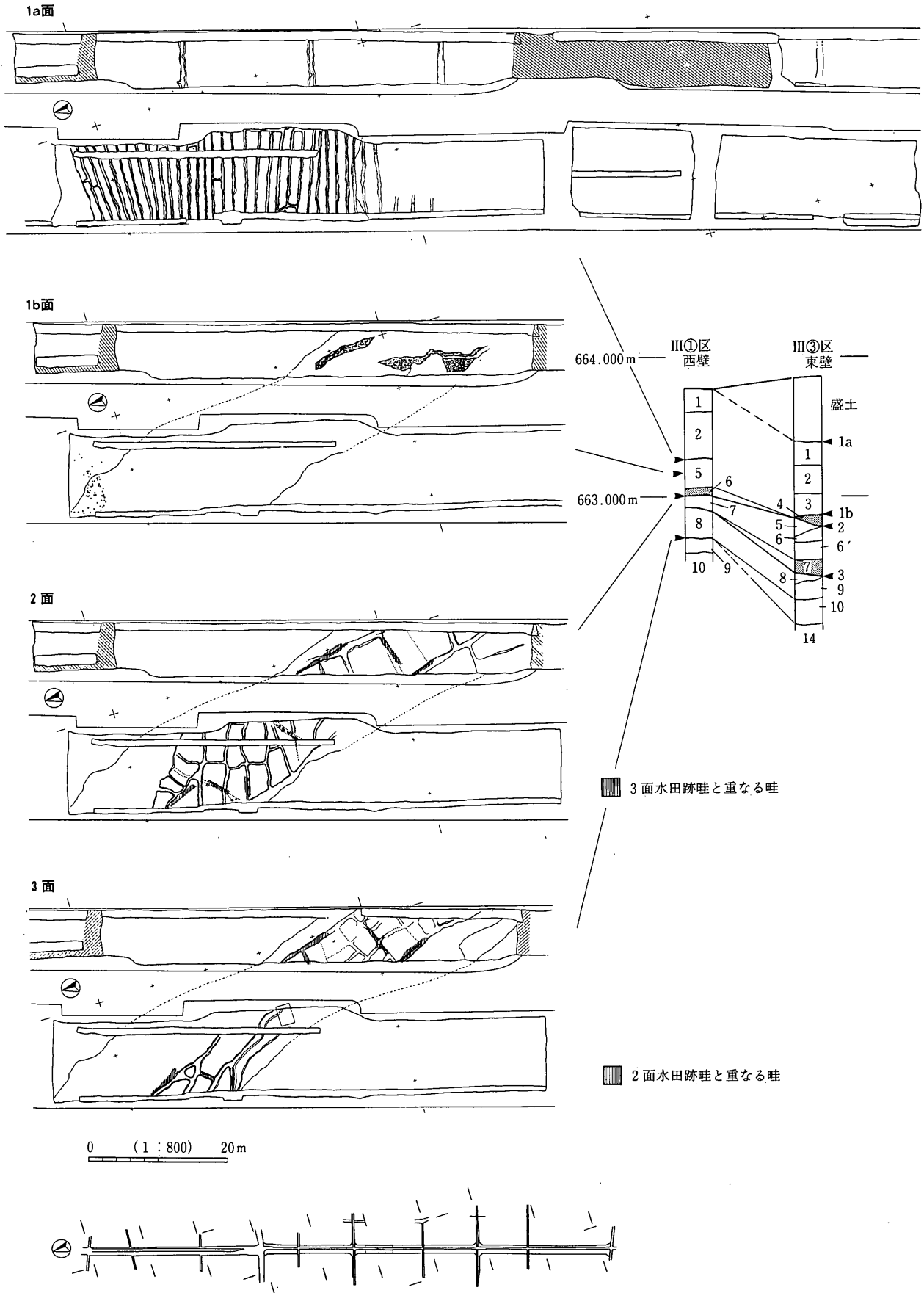
(1) A低地の遺構 (第26・27図)

A低地はⅢ区河道跡低地群北端にあり、北西から南東方向にやや湾曲しながら調査区を横断する。幅約22～24mで、東側は若干狭くなる。周囲の礫層頂部から調査最下面までは0.6～1.0mの深さで、底面は東側へ傾斜し東端で西側から0.5mほど下がる。調査は西側Ⅲ②区と東側Ⅲ③区に分割調査したが、東西で土層の様相が異なる。Ⅰ層に対比される土層は西側で1層耕作土があり、その直下にSX101を検出した砂礫層がある。東側にも工場盛土と西2層類似の砂礫混じり土があって、調査時はこれらを同一層と考えたが、検出された遺構・遺物の違いから別土層と判断された。

Ⅱ層は西側3層暗灰黄褐色粘土層、4層黒褐色粘土層、5層黒褐色粘土層、東側2層褐灰色～暗オリー



第26図 A低地土層



第27図 A 低地各調査面

ブ褐色土層、3層黒褐色～オリーブ黒色土層が該当する。西3・4層は上層のSX101に削平されて部分的な残存である。遺構は西5層で杭列SA110、東3層下～4層上面で酸化鉄集積の畦跡SC108・109を検出した。この調査面を1b面とした。

Ⅳ層上部には対応する泥炭層（西6層、東4・5層）があり、これを除去して西7層黒色粘土層と東6層黒褐色シルト質粘土上面で2面水田跡を検出した。2面水田耕土下の西8層黒色粘土層、東7層黒褐色粘土質シルト層となり、東側はその下の8層黒色シルト質粘土（泥炭質）に覆われる9層オリーブ黒色粘土層で3面水田跡を検出した。西側に対応する泥炭層はなく、9層褐灰色シルト層上面で3面水田跡とSQ101を検出した。これ以下はⅤ層で西10層褐灰色砂層、東10層黒褐色シルト質泥炭層、最下層が砂礫層となる。上述したようにA低地Ⅲ①・③区の調査面は2面のみ一致し、1・3面は検出土層は一致しない。なお、調査面2・3面の呼称は調査時のままで、土層番号はⅢ③区が調査時のまま、Ⅲ①区は調査時の3・4層を3層にまとめ、報告書では以下番号をずらせている（例 調査5層→報告4層）。

①. A低地1a面の遺構（第28図 PL6）

1a面はⅠ層直下検出の遺構面で、表土直下の類似した砂礫層を除去して検出したものの、先述したようにⅢ①区とⅢ③区では調査面が異なることが後に判明した。

SX101（第28図 PL6） Ⅲ①区 ⅢX24、VD04・09・13・1418・19・23・24

A低地西側Ⅲ①区2層砂礫層下面で幅約1～2m、長さ11mを越える細い溝跡が南北約50mほどの範囲に並列するように検出された。溝跡方位は北端がN86°E方向、南端はN72°W方向と少しずれる。調査時には砂礫埋没水田跡とも考えられたが、西壁の土層観察から本跡は3・4層を掘削しているように見え、水田内に溝を掘って砂礫を埋め込み、その上に掘り出した耕作土を盛りなおした整地遺構と推測した。本跡北端はSA110と重複するが、ほぼ同じ位置にあって同一区画を踏襲している。出土遺物はカワラケ、瀬戸美濃連房すり鉢、磁器香炉・瓶類などがあり、遺構は近世末以後の所産と思われる。

東側1a面水田跡（第28図 PL6） Ⅲ③区 VE・J・N

Ⅲ③区でSX101延長先を確認するため類似した砂礫混じり土を除去して検出したが、現道路と直交する18m前後間隔で並ぶ畦跡を検出し、その様相からSX101とは別遺構と判断された。Ⅲ③区上部には工場整地土が載っていたため現耕土は特定できなかったが、検出面は工場造成以前の水田面か、耕地整理直前の水田面と思われる。伊万里碗や近代の陶磁器片、古代の回転糸切り底の須恵器杯破片、内耳鍋片などが出土し、近代以後の所産と思われる。

②. A低地1b面の遺構（第29図）

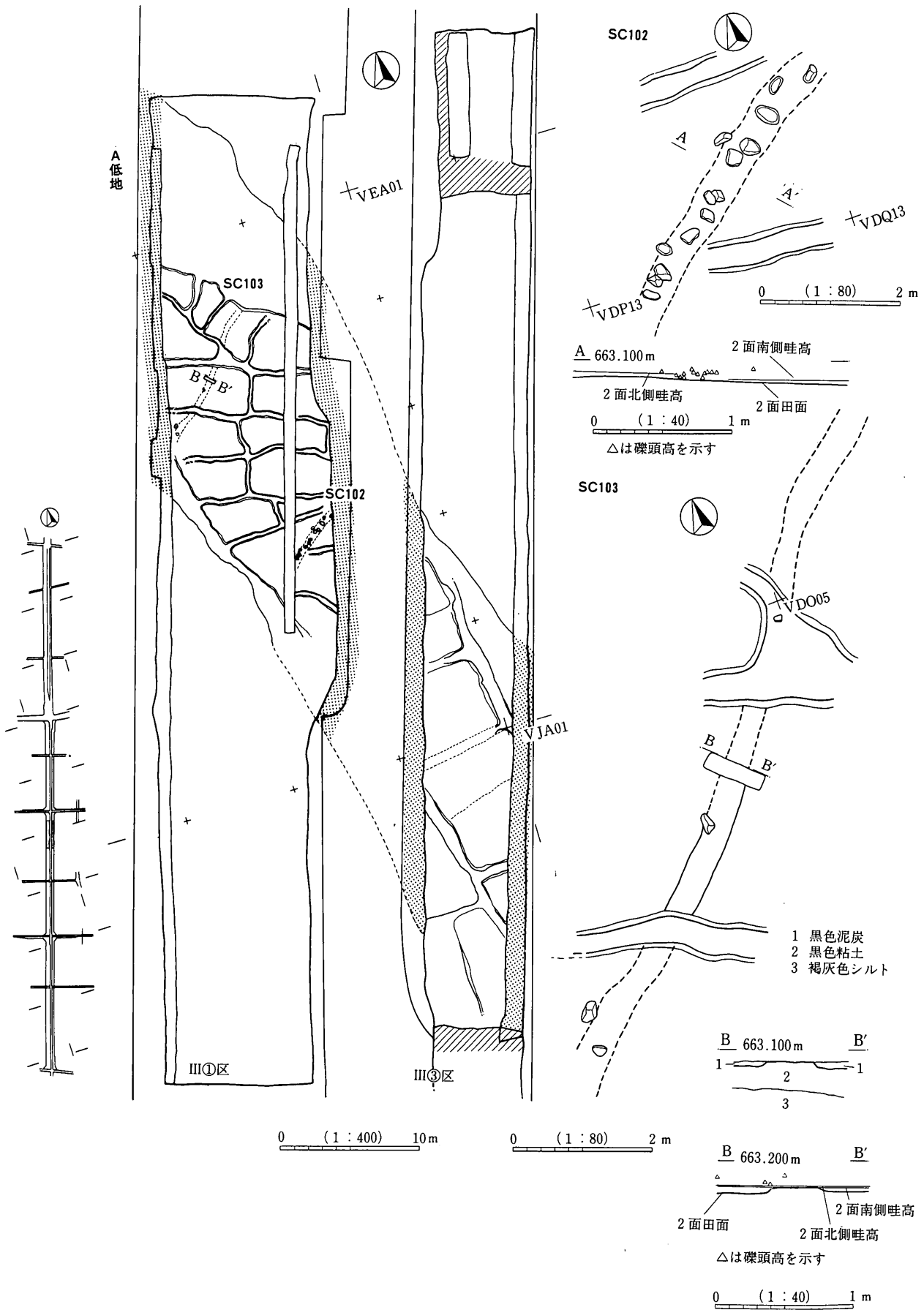
Ⅲ①区5層上部でSA110、Ⅲ③区4層上部で畦痕跡と思われる帯状酸化鉄集積SC108・109を検出した。SA110は河道跡埋積以後の所産で、SC108・109は検出面以上の所産としかわからない。

SA110（第29図） Ⅲ①区 ⅢX19・24・25

A低地西北岸の3～5層上面で検出された。SX101調査時に杭頭は認められたが、大部分は2面調査時に検出した。杭列はSX101北辺に重なるようにN85°E方向に幅2.6m前後、約8.4m以上の範囲で東西方向に延び、その西端は北側にN2°E方向に折れて、幅1m前後、長さ約5mほどの範囲に杭が分布する。杭は散在的ながら2列と認められる。出土遺物は杭のみあるが、採取していない。

SC108・109（第29図 PL6） Ⅲ③区 VD20・25

A低地東側の4層上面で2条の酸化鉄帯状集積を検出して畦跡と捉えたが、遺構番号は整理時につけた。SC109は北岸に沿ってN9°W方向に幅1.2～1.5m、長さ13mの規模で認められ、南側のSC108はN9°E方向に幅0.4～2.5m、やや蛇行して長さ約20mほど続く。その南部は南西方向に幅広く、中央に0.4mの帯状の空白部がある。帯状還元部分が畦部の転写と思われるが、帯状の集積部分の性格は不明で



第30図 A低地2面水田跡

ある。何れも土中金属の浸透差で認められた遺構で、本体は4層以上と推測される。

③. A 低地 2 面上の遺構 (第30図)

2面では畦跡と切り合う礫芯畦跡が検出され、礫頭は水田面より高く上層水田跡の畦基部と捉えた。

SC102 (第30図 PL 6) III①区 VD14

III①区 2面 で検出された。直径20~40cm の円礫列が N52° E 方向に幅約0.5m、長さ約4.5mほど認められ、礫頭は2面水田畦よりも若干高く、2面水田畦跡とは異方位で重複することから西側5層下部か6層を耕作土とする水田畦跡の基部と思われた。類似形状のSC103は本跡と平行する。

SC103 (第30図) III①区 VD04・09

N42° E 方向に幅約40~50cm、長さ約10.6m の範囲に礫が点在する。調査時の断面図には下部に低い盛り上がりが見られ、さらに3面の畦と重なることから3面水田跡の礫芯畦跡頭が2面に露呈したとも考えたが、SC102と形状・方位が類似し、礫頭が2面より高いことから2面上層の遺構とした。3面水田跡畦と重なる理由はわからなかった。

④. A 低地 2 面の遺構 (第30図)

2面水田跡 (第30図 PL 6・7)

泥炭質土層被覆の水田跡と捉え、西側III①区は泥炭質土層6層を除去した7層上面、東側III③区は泥炭質土層4層を除去した5層上面で水田跡を検出した。ただし、上層遺構SC102・103が検出されたように2面畦跡にも上層水田の畦基部が含まれる可能性が残るが、識別は十分できなかった。また、北部に水田遺構が検出されない三角部分は泥炭層が薄いか、高いために水田面が残存しなかったと考えられる。

2面畦跡の方位は多様ながら N85~52° W と直交方向の N17 (12) ~52° E 方向、N21° W~N4° E と直交方向 N69~87° E に大別しうるようによく見取される (第31図)。A 低地はおよそ N6~21° W 方向で後者に重なるので、後者は地形に一致した方位で前者は数値の分散幅が広く認定に不安を残すものの、地形以外の規格によると思われる。地形に沿った畦はIII①区北端にもあるが、III③区に多く、III①区とIII③区では水田区画が異なるような印象を受けるが、III①区では地形方向と異なる畦跡も東側ほど地形傾斜方向に近くなる傾向があり、東側は低地幅が狭く地形の規制を受けやすい様相と理解される。

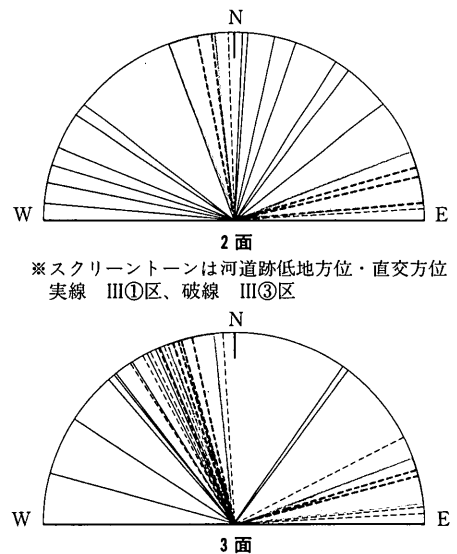
畦跡の規模差は見出しにくい、III①区北部の北岸高まり際の畦跡と地形ではない方位の北限畦跡は大区画の畦跡かもしれない。また、畦跡配置では河道跡を斜めに横断する方向が通りがよく、水田1枚この方向に長軸をとるものが優位で、規模は短辺約2.5~3.5m、長辺4~6m前後となる。面積はIII①区で北端の不整形なもので6㎡もあるが、11~15㎡が多く、III③区では約25、26㎡、大きめで41㎡となる。3面水田跡や類似したC低地水田跡よりも若干大きい。なお、地形と一致しない畦は条里区画との関連も想起されるが、仔細不明である。

出土遺物は西側III③区で2面を覆う4層で中世前半期のカワラケ、薄い板片や下駄などが出土した。泥炭層中出土なので、水田放棄後の所産と捉えられ、下限年代を示すとはかたがたない。

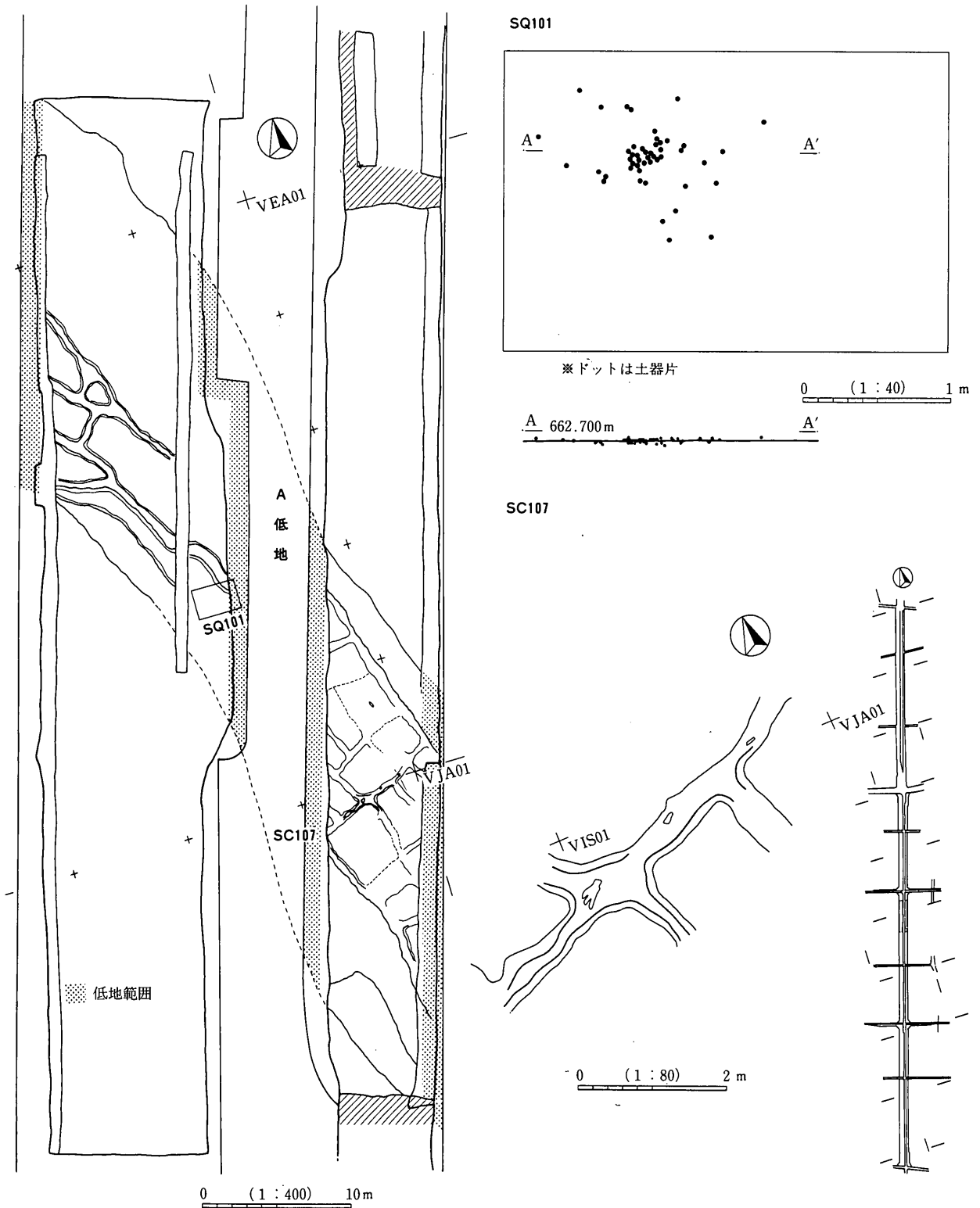
⑤. A 低地 3 面の遺構 (第32図)

3面水田跡 (第32図 PL 7)

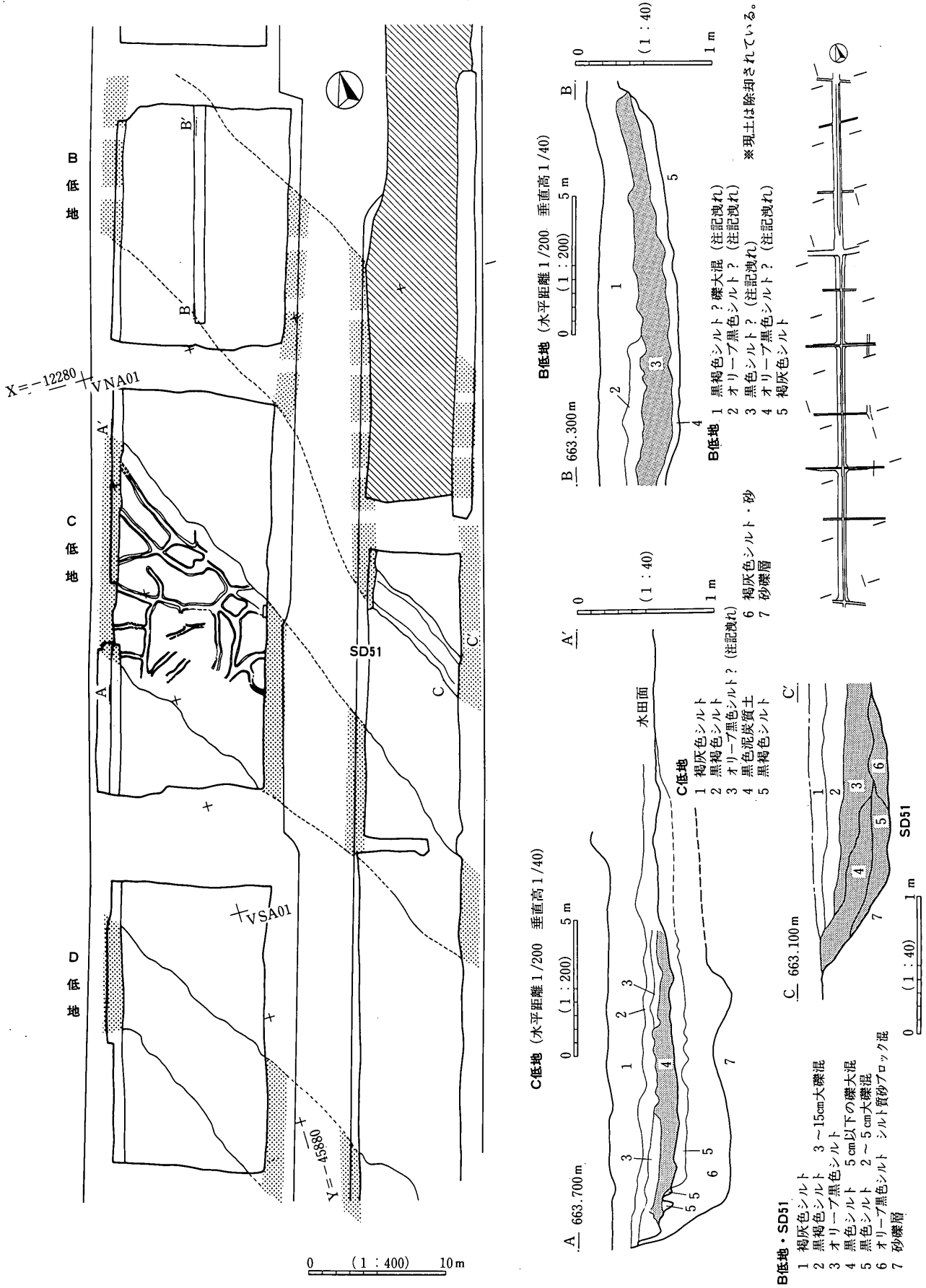
東側III③区では泥炭層被覆水田跡と捉えられたが、西側III①区は耕作土層下で畦痕跡を検出した。検出土層はIII①区が8層を除去した9層上面、III③区は泥炭質の西8層を除去した9層オーリー



第31図 A 低地 2・3面畦方位



第32図 A低地3面水田跡



第33図 B~D 低地

ブ黒色粘土層上面である。Ⅲ③区の7～9層はⅢ①区8層に対比され、Ⅲ③区では同じ水田耕作土層の上面、Ⅲ①区は下面を調査したと思われる。従って、掲載した図もⅢ③区は泥炭層で覆われた短期の様相を示すが、Ⅲ①区は複数時期の畦痕跡が重なっている可能性も残る。また、畦跡はⅢ①区では河道跡低地と類似方位のN24～41° W方向が主体だが、Ⅲ③区では河道跡と同方位のN3～31° Wと直交方向のN63～87° E方向である。Ⅲ①区は低地横断方向の畦跡が少なく、該当する畦跡は2面SC103と位置的に重なる。2面畦跡との重複背景はわからないが、横断する畦が少ないのも耕土下面を調査したことと関連しよう。

畦跡の規模差は判然としないが、河道跡脇にやや幅広い畦跡と河道跡低地を横断するSC107は大畦の可能性もある。畦区画はⅢ①区では河道跡方向のものが幅2.2～3.5m、Ⅲ③区は横断方向で幅1.5～2.5m、河道跡方向で長さ2～4m間隔である。面積は5～8㎡が多い。溝跡はなく、畦越の配水と思われる。水田面から板材などの木製品が採取され、Ⅲ③区から弥生土器片、古墳後期の黒色杯片が出土した。

SC107 (第32図) Ⅲ③区 VD25、L05

3面水田跡の木芯畦跡である。芯材は遺存不良で原形をとどめない。畦高は水田面から4～5cmの高さしかなく、幅約0.5m、長さ約9.0mでN68° E方向に河道跡低地を横断する。木材は点在するように検出されたが、杭は認められなかった。なお、2面でも近接場所に畦跡が位置する。

SQ101 (第32図 PL7) Ⅲ①区 VD19

Ⅲ①区3面で検出された土器集中である。1m四方ほどの範囲にS字甕の同一個体破片が集中的に検出された。口・底部破片もなく、完形にはならない。箕輪遺跡では河道跡低地の下層水田跡からS字甕破片が出土した例がいくつかあり、本例も同様の例といえよう。

(2) B低地の遺構 (第33図)

A低地南側にやや離れて並行する浅い低地で、幅約12m、底面は東へ緩やかに傾斜して周囲の砂礫層頂部から底面までの深さは西端0.6m、東端約0.4mほどである。平成12年度に西側(Ⅲ①区)、平成13年度に東側(Ⅲ③区)を調査した。Ⅲ①区はトレンチ調査で砂礫を混じり込む土層で占められていることが確認され、水田面調査は不能と判断して面的調査は実施しなかった。Ⅲ③区は上部がかなり攪乱されていたが、南側の残存部でSD51を検出した。Ⅲ①区は耕作土除去作業で上部が削平され、残存部も砂礫が混じるとの記述以外は記録洩れで土層の様相不明である。Ⅲ③区では1層褐灰色シルト(Ⅱ層)、2層黒褐色シルト、3層オリーブ黒色シルト(Ⅲ層)に分層され、南縁の3層下に低地上部からの流れ込みと思われる砂礫混じり黒色シルトがある。泥炭質土層は発達せず、下層は腐植土由来の黒色土、上層はⅡ層の灰色味が強い土層である。出土遺物は層位不明の瀬戸美濃連房製品の拳骨茶碗底部が採取された。

SD51 (第33図 PL8) Ⅲ③区 VN13・18

Ⅲ③区B低地南縁に沿ってN26° W方向に延びる。上面は低地上部からの流れ込みと思われる4層の砂礫混じりの黒色シルトに覆われ、3層堆積以前の所産であるが、低地中央底面との比高差は十数cmしかないことや、Ⅲ①区では確認されていないため河道底面の窪地地形の疑いがある。

(3) C低地の遺構 (第33図)

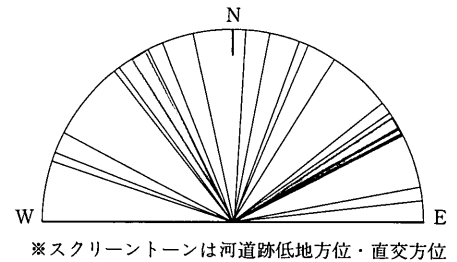
C低地水田跡 (第33図 PL7・8)

C低地はB低地の南約10mほどに位置し、水田跡1面を調査した。平面図記録の標高から類推すると調査面は4層上部にあたり、3層を除去して検出したとみられる。しかし、調査ミスによる注記洩れで土質が不明なので調査された遺構の性格は明らかにしえない。河道跡の浅さや流水を伴わない可能性からは

3層が泥炭質にしるⅢ層に対比しうる土層で、検出された遺構はこの土層を耕作土とした水田跡下面の擬似畦畔にあたり、複数時期のものが重複している可能性も残る。

検出された畦跡方位にはC低地岸と平行(N28~32° W)か直交方向(N58° ~62° E)に近いN12° ~39° Wか直交N52° ~62° E、それと異なるN62~72° Wか直交N3~32° E方位の2種ある(第34図)。前者は地形に合わせた畦と捉えられるが、後者は地形以外の規格による畦と思われる。両方位の境の畦跡は区画境界の大畦とも考えられるが、他畦跡と規模は大差ない。また、前者の畦方位は北西部、後者は南東部に分布する傾向があり、前者の方位区画は不整形なものが多いながら、後者は直交・平行して長方形区画を形づくり、その内部に地形傾斜方向の畦が重なる。水田区画は判明したところで、1辺約1.5~4.0m間隔と小さく、地形の微細な凹凸に由来する可能性がある。なお、地形以外の比較的通る畦は東西約5~7m、南北6mと類似間隔で位置する。水回しは畦越によるとみられる。

出土遺物は水田面精査で内黒椀・杯破片、ロクロ使用のカキ目を残す小型甕、外面にタテ刷毛痕を残す土師器甕破片、僅かながら時期不明土器小片が採取された。他に層位不明の内耳鍋と須恵器甕破片が出土しているが、水田面精査採取遺物は平安時代の9世紀前後のものである。



第34図 C低地畦方位

(4) D低地の遺構(第33図)

D低地水田跡(第33図 PL8)

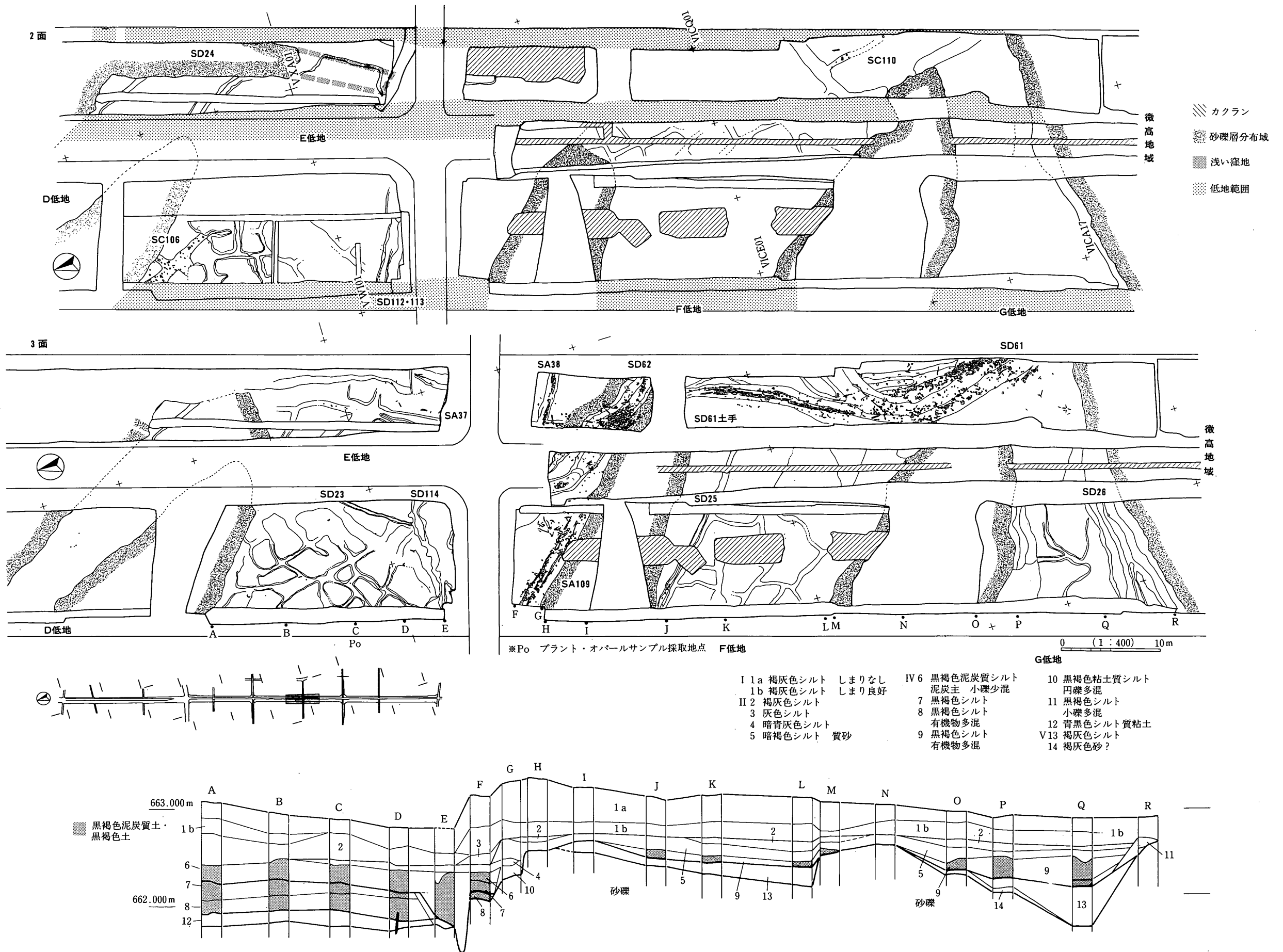
C低地の南約10mほどにあり、北西端は調査区外へ延び、南東端はⅢ③区E低地に接続する。上幅約12m前後だが、調査面の幅は6mで、検出面は比較的平坦で標高662.60m前後を測る。調査ミスで土層図や土層記録がなく、土層の様相は不明となった。面的精査では細かい窪み多数が検出されたが、畦跡は判然としない。細かな窪みは耕作関連の痕跡と思われるが、畦跡が判然としないことから耕作土下面を調査した疑いもある。また、D低地水田面の標高はE低地2面より若干高い標高で、水回しの関係からも水田跡としての利用はE低地が2面前後まで埋積した後の可能性がある。無文の甕体部破片が出土したが、時期の詳細は不明である。

(5) E低地の遺構(第35図)

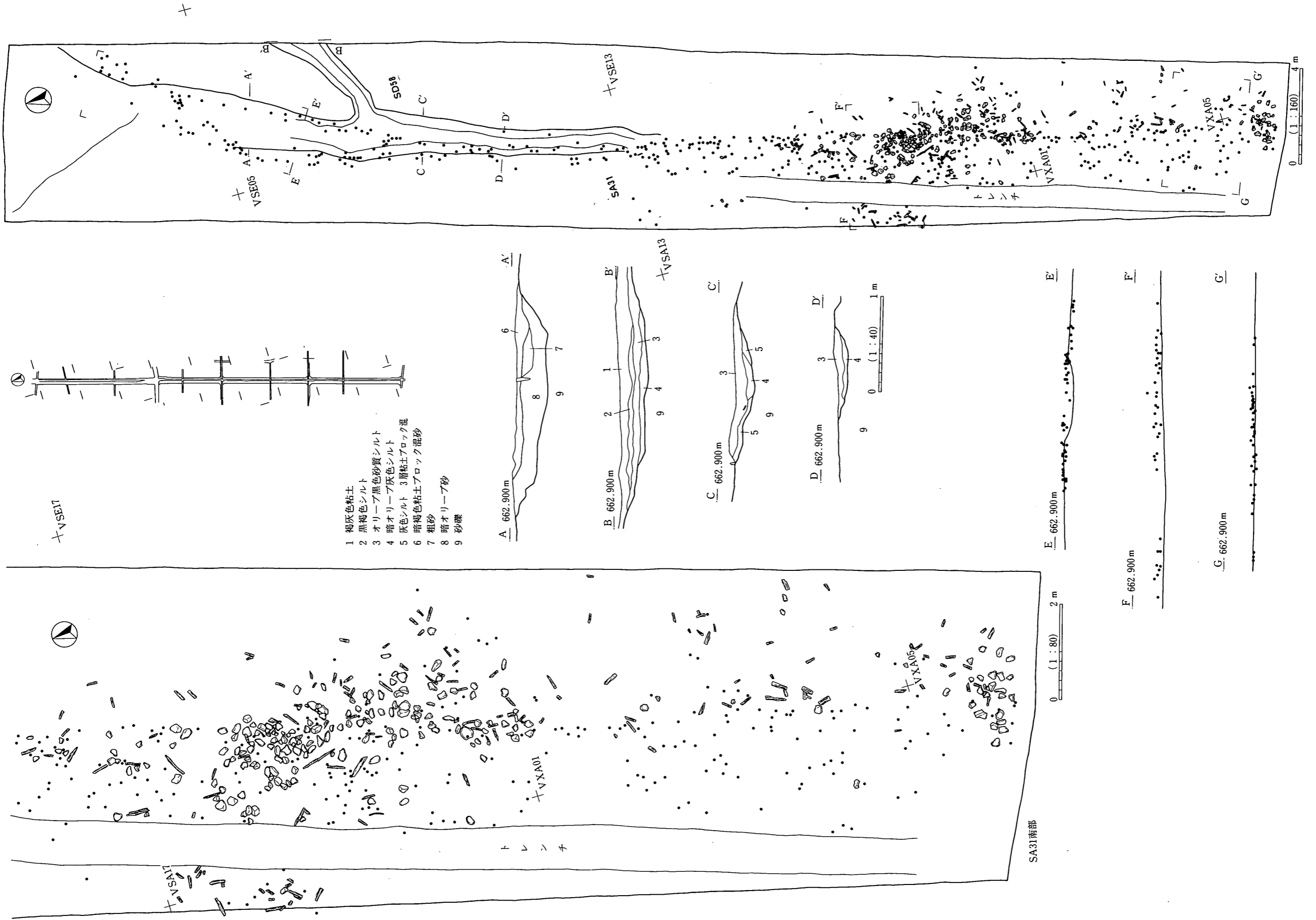
E低地はⅢ区北部河道跡低地群のなかで最も幅広く深い。Ⅲ①・②区からN45~50° W方向に斜めに調査区を横断し、Ⅲ③・④区境東方で大きくカーブしてN10~15° E前後に方向を変え、南東部でF・G低地、北東部でD低地が接続する。5つの調査区に分割調査し、平成12年は北西部Ⅲ①・②区、翌年はⅢ③・④区、平成15年にⅢ⑤区を調査し、Ⅲ④区はさらに工場入口確保のために3分割した。

分割調査したことから、E低地土層は統一的に把握しえなかったところもあるが、Ⅲ①区西壁土層に代表させると次のようである。上層から現耕作土の褐灰色~オリーブ黒色土、Ⅱ層対応で調査1面に当たる黒色粘土層、青灰色砂質土と続き、以下は泥炭質の強いⅣ層の黒色泥炭層、調査2面の黒褐色粘土層となる。その下はさらに黒色泥炭質土、調査3面のオリーブ黒色土・灰色粘土層と続くが、最深部にあるSD114・61・62周辺は流水による砂層と未分解植物を含む泥炭層が発達する。また、Ⅲ③区では部分的に上層泥炭層が判然としないところもある。最下層はⅤ層の自然堆積シルト、砂礫である。

遺構は3面調査し、1面でⅢ①区SD112・113、Ⅲ③区SA31、SD58、さらに見逃しと捉えたSD24がある。2面は泥炭質土層被覆と捉えた水田面と礫芯畦跡SC106・110を検出した。SC106は2面より上層



第35図 E低地2・3面全体図と土層柱状図



第36図 SA31、SD58

の遺構と思われるが、類似形態のSC110は2面水田畦跡に重なり、2面遺構の可能性がある。3面は下層泥炭質土層を除去して検出した水田面で、SD23・25、61・62・114、木芯畦跡SC37・38・109・SD61土手などを検出した。SD23は上部で2面調査を実施しておらず3面の遺構とも断じ得ない。

なお、F・G低地とE低地接続付近のⅢ⑤区では連続してSD25が検出されたことから、Ⅲ②区F・G低地調査面はⅢ⑤区下層水田面—E低地3面に対応すると思われた。ただ、Ⅲ②区は耕作土下面の遺構を検出した疑いがあり、すべて同一時期の遺構とは言いきれない。また、D低地は調査面の対応関係が直接把握できなかったが、底面標高が近似数値となるE低地2面かそれ以後に耕作されたと思われる。

出土遺物はⅢ①区南部2層で内耳・近世初頭の志野丸皿、Ⅲ②区2層で山茶碗系こね鉢、Ⅲ①区2面上の泥炭質土層から平安時代の須恵器杯・内黒椀・古瀬戸卸皿、古墳時代小型丸底土器、Ⅲ①区2面SC106周辺で平安時代9世紀の内黒椀・杯、Ⅲ、3面ではⅢ③区3面で弥生壺?片、SA38で古墳時代前期甕、SD61から弥生中期末?壺、土手芯材中からS字甕片、弥生後期甕、古墳時代後期の甕が出土している。1面は中世後半～近世と思われ、2面は古瀬戸卸皿1点採取されたが、複数土器が出土している古代の可能性もある。3面は弥生～古墳時代後期の土器が出土している。

①. E低地1面の遺構

1面はⅡ層で検出した遺構で、被覆層がない連続耕作の土層であるため、個々に遺構が検出された。

SA31 (第36図 PL8) Ⅲ③区 VS02・07・11・12・16・21、R25、W05、X01

SD24・58を切る。北端は緩やかにカーブして調査区北東方向、南端はⅢ④区方向へ抜けるが、Ⅲ④区北端上部は攪乱で不明となる。その南隣接地では検出されていないので、Ⅲ④・⑤区北部まで伸びないと思われる。調査区内の確認長は約52mで、E低地範囲を越えて広がる。中央南よりの西側へ分岐する杭が検出された周辺を境として、北部はSD58にそって杭が2列平行するが、南部は幅2.8～4.0m内に密に打設される。南部は横倒し杭材や礫が散在するが、この礫は下層のSD24埋土のものと思われ、上層耕作が深く及んだために混入したと推測される。SD58が途切れる理由も同様だろう。また、南部杭の密度が高いのは遺存しやすい環境に加え、低地にかかる軟弱地盤によるものかもしれない。このSA31は近接するSD24?→58から変遷したと推測される。本跡は他杭列の様相からも用水護岸施設と思われる。出土遺物は検出時に内耳鍋と平安時代須恵器杯片が採取された。

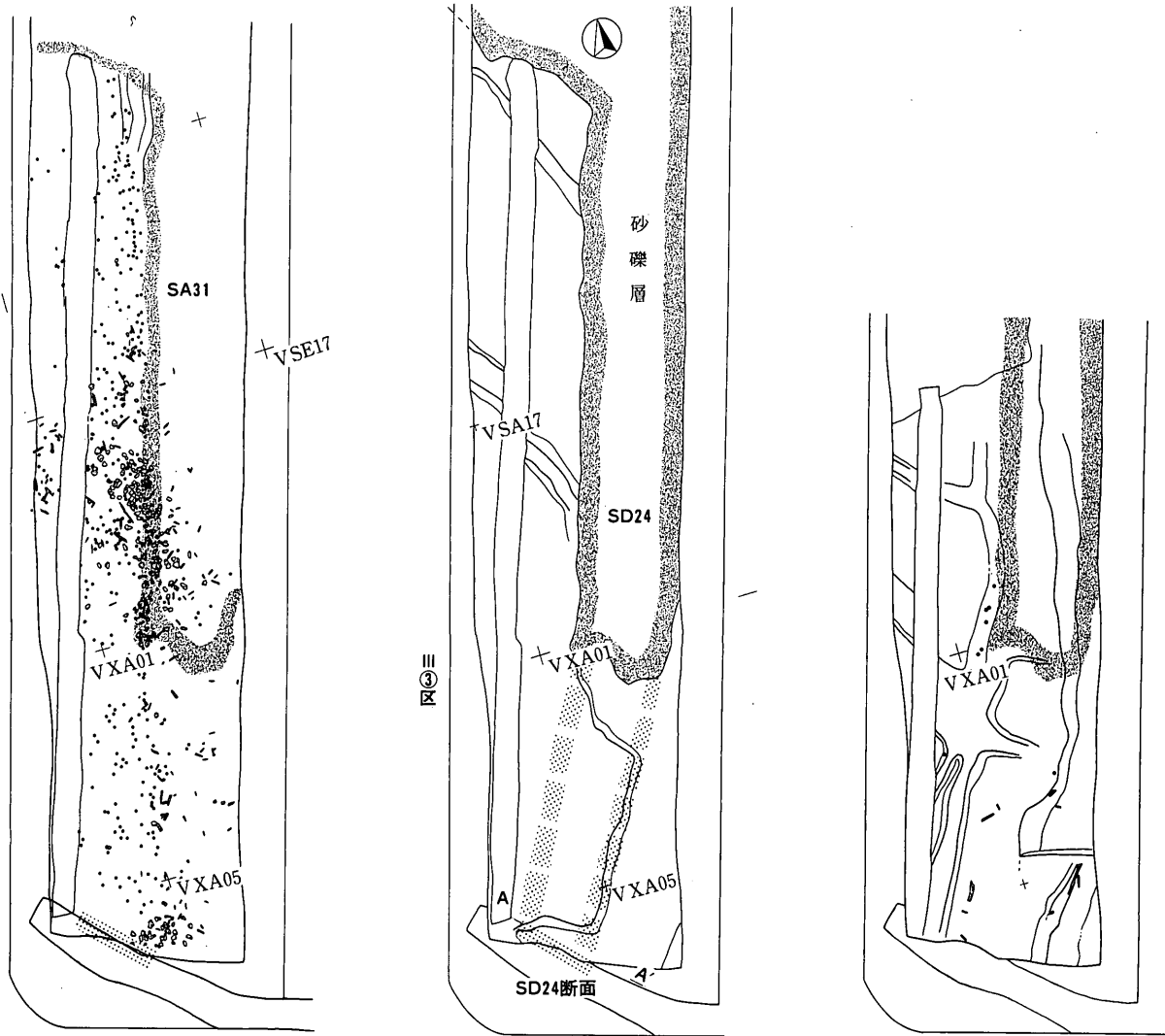
SD58 (第36図) Ⅲ③区 VS02・07・11・12

SA31北部にあり、本跡がSA31に切られ、SD24を切る。北端はC低地周辺で薄い砂層分布と認められ、途中から掘り込みが認められた。南端は浅く消える。北部で北東方向の溝跡が接続し、調査区内の確認規模は幅約1～2m、長さ約26mである。走行方位はN17°E方向でSA31、SD24とほぼ重なる。埋土は底面付近に灰色土、上部に黒褐色土が入り、北部では砂層が途中で認められる。本跡は用水と思われる。古墳時代土師器が出土したが、層位的にも本跡に関連しない遺物と思われる。

SD24 (第37図) Ⅲ③区 VS02・07・11・12・16・21、R25、W05、X01

本跡はⅢ③・④区境の交差道路立会い調査の際にⅢ③区付近で断面が確認されていたものの、Ⅲ③区平面調査では見逃された。立会い調査部の溝断面位置はⅢ③区2面検出の帯状砂礫層分布の延長先に一致し、3面ではこの砂礫分布範囲が逆に窪地として記録されていることから、この部分に砂礫で埋められた溝跡が存在したと捉え、整理時にSD24を認定した。また、2面の砂礫層分布範囲はSA31東辺ラインにも重なり、同じ区画に沿った遺構と思われる。

立会い調査断面記録から立ち上がりは2層下まで確認でき、東岸にSA31延長先と思われる杭が重なり、SA31に切られると判断される。本跡埋土と捉えたⅢ③区2面の帯状砂礫層分布範囲から走行方位はN15°Eで幅3.5～4.0m前後と思われる。北端は不明ながら1面SD58が本跡区画を踏襲したとすると、北東方

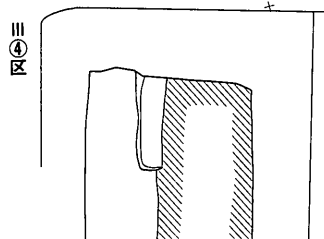


III③区南端 1面
(2面砂礫層分布を重ねたもの)

2面

3面
(2面砂礫層分布を重ねたもの)

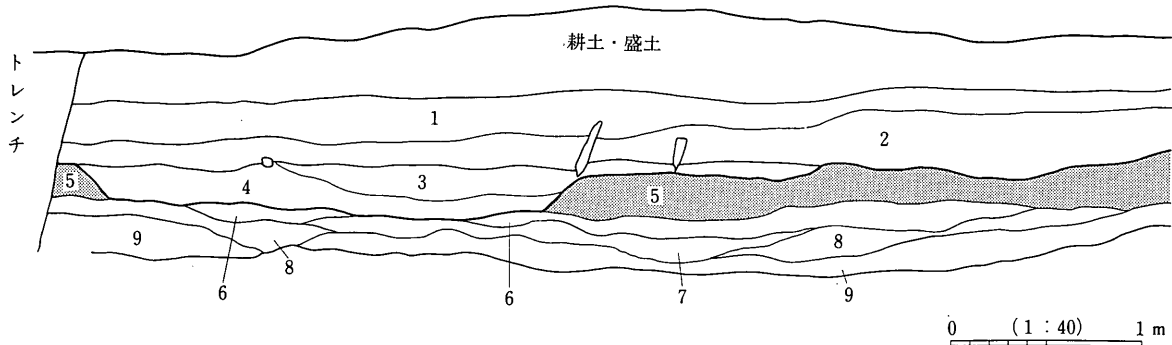
0 (1:250) 5 m



- 1 黒褐色シルト質粘土
- 2 オリーブ黒～黒褐色シルト質粘土
- 3 黒褐色砂質シルト (SD24)
- 4 黒褐色粘土質シルト 灰色シルトブロック混 (SD24)
- 5 黒色泥炭質シルト
- 6 灰～オリーブ黒色砂質シルト 泥炭ブロック混
- 7 砂
- 8 灰～オリーブ黒色砂質シルト
- 9 灰～オリーブ黒色シルト

A 663.400 m

A'



第37図 SD24

向に調査区外へ延び、南端は延長先が合致するⅢ④区北端の攪乱脇の浅い窪みとすると、Ⅲ④区北端で折れて南東方向へ抜けられると思われる。その長さは調査区内で約18.7m以上となる。埋土の記録はⅢ③・④区境の立会い調査部の断面図しかないが、上層に黒褐色砂質シルト、下層に灰色シルトブロックと黒褐色粘土質シルトの混在層がある。先述したように北部がⅢ③区2面砂礫層分布域に合致するならば、北部は河道跡低地間の砂礫層を削って埋められた可能性がある。出土遺物はない。

SD112・113 (第38図) Ⅲ①区 VW03・04

E低地北2層下面で検出した。SD112はN59°W方向にⅢ①区南西隅を横断し、調査区内では約6.6mを確認した。幅約0.7~0.9m、断面はU字状で深さは検出面から底面まで約20cmを測る。埋土は上層が黒褐色粘土、下層は灰褐色砂となり、流水があったと推定される。SD113はSD112北側にややずれて重複し、SD112に南岸が壊される。幅は不明ながら、長さは調査区内で10mほど確認できた。SD113埋土は上層に黒褐色シルト、下層に細砂が堆積する。SD112はSD113の作り替えの用水跡と思われる。

②. E低地2面上層の遺構

SC106 (第39図 PL9) Ⅲ①区 VR14・19

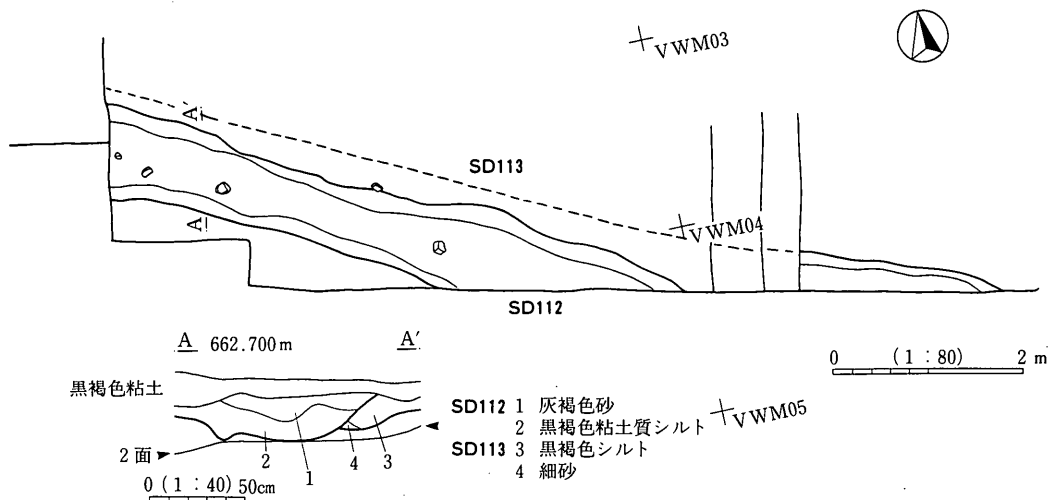
E低地2面の北西岸付近で検出された。N27°W方向に幅0.8~1.2m、長さ約8m範囲に礫が帯状に検出され、途中北側と南側に分岐する部分が認められた。形状はSC102・103と類似するが、礫は比較的小さく、礫混じり土に近い。2面水田跡畦と方位が異なり、礫頭の標高も高いことから2面上層の遺構と判断した。遺物は礫分布範囲内から平安時代前半の内黒杯底部が出土した。

③. E低地2面の遺構

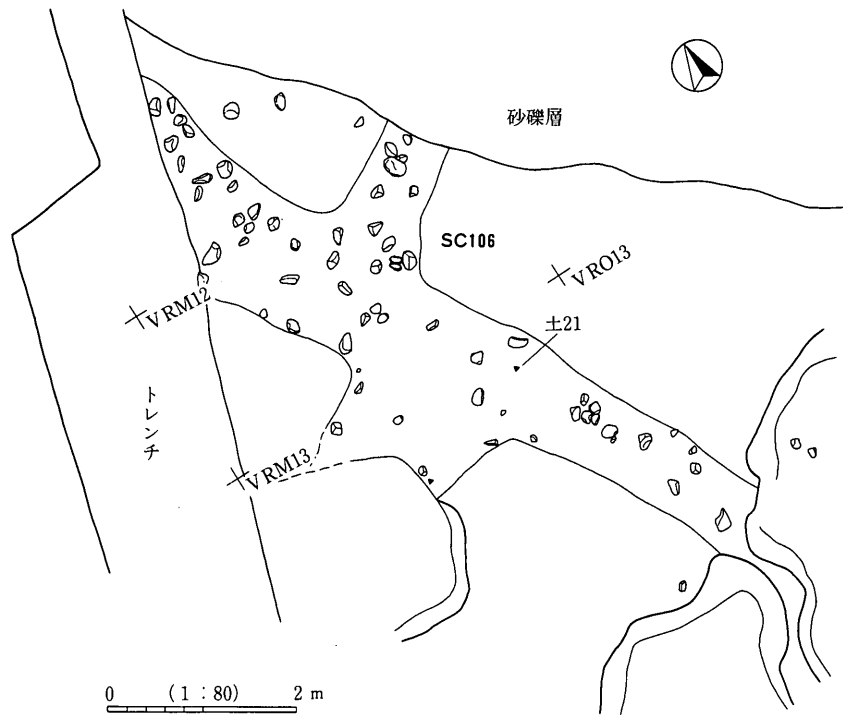
2面水田跡 (第35図 PL9) Ⅲ①~⑤区

2面水田跡はⅢ①区E低地西壁4層泥炭質土層を除去して5層の泥炭質シルト上面で検出した。泥炭質土層被覆水田跡と捉えたが、SC106など2面より上層の遺構が見つかったことから泥炭層自体が再水田化で耕作され、2面畦跡にも再耕作に伴う畦基部(擬似畦畔)が含まれる可能性がある。調査はⅢ①~⑤区に分割したが、Ⅲ①区は西半分のみ調査した。また、Ⅲ④区北端は攪乱で壊されて遺構は不明で、Ⅲ①・Ⅲ⑤区の最深部は水田遺構が判然としなかった。2面水田跡はE低地内とF・G低地とE低地接触部分付近に残存するが、F・G低地西側は上層耕作で削平されたためか対応土層がない。

地形は北西部の田面標高が662.40m弱、東部のⅢ③区で662.20m、南東のⅢ④区で662.10mと北西から南東方向へ緩やかに傾斜する。また、E低地最深部となる3面SD61・62・114と重なる部分のⅢ①・⑤



第38図 SD112・113

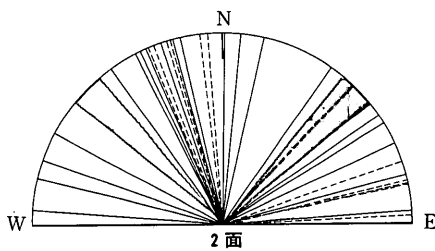


第39図 SC106

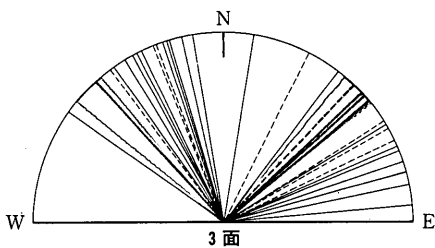
区は2面水田面が把握できなかったが、Ⅲ④区微高地寄りで2面水田跡が見つかった。類似環境の場所ながら、検出できたところとできなかったところがある。Ⅲ④区は調査面が異なるか、2面では沼地状の低地がⅢ①区から⑤区東方へ抜けていた可能性がある。

畦跡は杭・横木などの埋設物を伴わない土畦で、SC110のみ礫を伴う。規模ではⅢ④区の広い畦跡が大畦とも思われるが、他に突出した規模の畦跡がなく判然としない。方位はN12~35° Wか直交N35?~77° Eと、N62~85° Wと直交N1~13° Eの2方位が主体で中間方位は少ない(第40図)。E低地西部の河道跡方位はN45~50° Wだが、前者のN12~35° Wと直交方向N35~77° E方位の畦跡は3面でも認められており、基本的に地形傾斜に合わせた畦跡とみられる。後者のN62~85° Wと直交方向N1~13° E方向は3面に認められないことから、別規格の畦跡と思われる。

このN62~85° Wと直交方向N1~13° E方向の畦跡はⅢ①区北西部のやや高い地点に認められ、低い地点はほとんど前者の方位の畦跡で占められる傾向がある。



※スクリーントーンは河道跡低地方位・直交方位
実線 Ⅲ①区、破線 Ⅲ③区



第40図 E低地2・3面畦方位

畦配置はⅢ①区では北西部で地形と合わない異方位の畦跡があるが、南東側は3面水田跡と同様に等高線方向に2.5・4.5m間隔の畦と、その間を2.5~5.0m間隔の傾斜直交方向の畦で区切って、等高線方向に細長い水田をつくる。等高線方向の畦は通りがよく、直交方向の畦は複数水田跡を貫かない短い畦となる傾向がある。Ⅲ④区では河道跡の走行方位に長軸をとる水田区画とし、直交方向を3.5m前後の間隔で区切る。Ⅲ⑤区では等高線方向の南北方向に幅2.0~2.5m間隔の畦で区切り、そのなかを2.5~4.0m間隔の短い畦跡で東西に区切って細長い小さな水田を形づくる。南北に長い傾向はⅢ④区と同じであるが、小さな水田が主

体である。水田面積はⅢ①・Ⅲ⑤区では10㎡前後を中心とする5～19㎡が多いが、Ⅲ④区微高地寄りの地点で検出された水田跡は東西約3.5m、南北13m以上で175.5㎡以上と大きい。全般的にⅢ④区を除くと比較的狭い水田跡が多い傾向である。

出土遺物は平安時代の須恵器杯、内黒碗、古瀬戸卸皿、古墳時代の小型丸底土器が出土している。出土遺物が少ない上に年代幅があって時期決定は困難であるが、上層の2層から志野皿が出土しているので近世には下らず、3面から古墳後期の土器が出土して古墳後期までは溯らない。類似した堆積状況を示すA低地2面水田跡に対比しうならば中世前半以前で、1点のみの古瀬戸卸皿を混入と考えれば平安時代の可能性がある。

SC110 (第41図 PL9) Ⅲ④区 VIC09・14

Ⅲ④区2面検出。広い東西方向の畦南側からN11°W方向に分岐する幅約0.6mの畦跡で、北側上面で礫が検出され、南部は畦痕跡が判然としないが、その延長先の礫まで約6.9mほど続くとみられる。類似形状のA低地SC102・103、E低地SC106は、何れも2面畦跡とは異方位で重複していたことから上層遺構と捉えられたが、本跡は礫が2面畦跡に一致する。出土遺物はないが、近接して板状材が出土した。

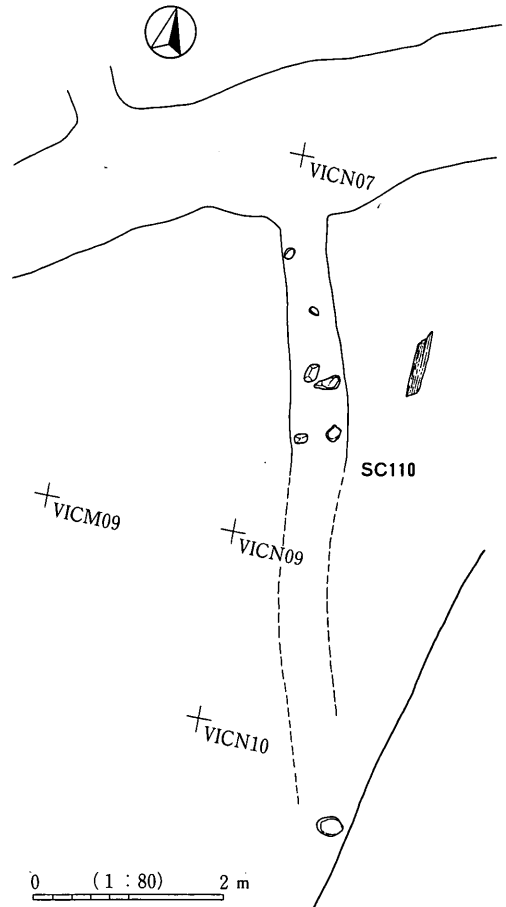
④. E低地3面上層の遺構 (第35図)

SD61・62・114 (第43・44図 PL11～14) Ⅲ①・②・④・⑤区 VW03・04・14・15・19・20・24・25、VIC04・08・09・13・14・18

E低地最深部を流れる流路で、調査時に連続関係が不明なまま別番号が付されたが、整理時に関連する1本の溝跡と捉えた。調査では最初にⅢ①区3面でSD114がみつき、翌年Ⅲ④区北端でSD114延長先にSD62とⅢ④区微高地よりで新たに南流するSD61に近接する土手状遺構が検出された。この調査時にはSD62がSA38など3面水田跡を切る上層遺構と観察され、一方でSD61は近接して土手状遺構を伴う3面遺構と捉えられたことから、直交方向となるSD62とは別遺構とされた。また、平成15年度Ⅲ⑤区調査では、SD62とSA38が重複し、Ⅲ④区同様にSD62の立ち上がりは3面上層にあることが追認された。

上記の所見を整理で再検討した結果、位置関係からSD114とSD62は連続する溝跡で、SD114が3面水田に伴うとする土層記録がないことやⅢ④・⑤区両地区でSD62が3面水田跡を切る所見が得られたこと、3面水田跡SA109・38はSD62との重複部分で杭のみ検出されたのも横木が流失したと捉えられることから、SD114・62は3面水田跡放棄後に流れた同一流路と判断した。また、SD61土手もSD61重複部分に杭しか残存せず切り合うと思われたこと、SD61土手がSD61に沿っていると捉えなければSD62から蛇行して連続すると捉えられることから、最終的にSD61土手はSD61に切られる3面水田の畦跡で、SD114・61・62は3面水田放棄後に流れた一本の流路と結論した。

上記から、SD114・62・61はⅢ①区SD114からⅢ⑤・④区SD62へ蛇行しながら連続し、一旦調査区外へ出てカーブして再びSD61とした部分に入って蛇行して抜け、合計長は約72mと推測される。切り合いはSD23とは関係不明で、本跡がSA38・109・SD61土手を切っている。また、Ⅲ④・⑤区では流路同士



第41図 SC110

の切り合いが認められ、流路が変化しているとみられる。Ⅲ⑤区 SD62に切られる小溝も SA38を切ることから同様の流路の一部と思われる。各地点の規模は SD114部分で幅約2.5～4.0m、断面はU字状を呈して3面水田面からの深さ40～50cmを測る。中部の SD62部分は幅2.2～3.5mで、3面からの深さは20cmで南縁の三角州状の砂礫高まり頂部からは約40cmほどの深さを測る。南端の SD61部分は幅約4m前後で3面から底面までの深さは約50cmである。埋土は流水を示す砂層と泥炭層の互層で、Ⅲ④区では礫が多く混じって出土した。

出土遺物はⅢ①区 SD114で木製品少量、Ⅲ④・⑤区 SD62では SA38横木の一部と思われる建築材と土器が少量、南東端の SD61では大足などの木製品が少量と、弥生中期後半の赤彩壺、口唇部に刺突を施す壺、羽状文甕、弥生後期の壺や波状文甕片・台付甕、古墳後期高杯・甕・須恵器片などがある。

⑤. E低地3面の遺構（第35図）

3面水田跡（第35図 PL9～13） Ⅲ①・②・③・④区

泥炭質土層被覆水田跡と捉えられ、8層有機物多混の黒褐色シルトを除去して12層の青黒色シルト質粘土層上面を露呈した。5つの調査地区に分割調査した。3面地形は北西から南東方向へ傾斜し、北西部で田面標高662.20m前後、Ⅲ①区東部は662.10m前後、東端のⅢ③区で661.70m前後と、Ⅲ①区東端から③区側へ急速に低くなり、東西の高低差は約50cmある。また、横断方向では南・西部が低く、中央付近で僅かに高くなって北側が若干低くなる。Ⅲ①区中央のプラント・オパール分析では3面検出土層まで多量にイネプラント・オパールが検出され、珪藻分析から比較的水深のある沼沢状湿地環境と推測された。水田面はⅢ①区から③区西部で広く土畦の水田区画が検出され、最も深いⅢ②・④・⑤区では木芯畦跡のみが検出された。なお、Ⅲ③区東壁際に深い落ち込みが検出されたが、V層堆積層を見誤ったか、自然地形の窪地と思われる。

E低地北・東部の土畦跡は1～2条異なる方位のものがあるが、N8～42°Wか直交方向のN38前後～87°Eが主体で、河道跡底面の等高線方向に一致する（第40図）。畦跡は等高線方向で若干上流側＝北西側に膨らみながら幅1.4～3.4m前後の間隔で通る畦を通し、やや北側に開いた放射状ぎみに直交方位N8～42°W方向の縦の畦を1.5～3.0m間隔で配置する。この2種の畦でやや不整形ながら等高線方向に細長い長方形・台形・菱形の小さな水田が形づくられる。水田面積は2.8～11.7㎡で、6～9㎡前後が多い。

南・東部の低い地点でみつかった木芯畦跡には、E低地西辺の砂礫層境際に SA109があり、Ⅲ④・⑤区北端の SD62と重なる付近で直交方向の SA38と接続する。SA38は途中で東側に延びる畦を分岐させ、北方向延長先には SA37がある。また、SA109もⅢ②区東端で北側に延びる畦が付属し、SA38と109北側の畦の距離は約11～12mである。この木芯畦跡区画内には細分区画土畦は検出されていない。

なお、3面検出の SD114・61・62は3面水田跡を切る自然流路と捉えられ、本低地は水が漬きやすい湿地環境であった可能性を示す。水田耕作中も排水が重要な課題と推測され、3面水田跡時にも何らかの排水用施設が付設されていた可能性は考えられるが、SD114・61・62が上層遺構と捉えられたので、この3面に伴う排水施設は明らかにしえなかった。

出土遺物は僅かしかないが、水田面を埋める黒色土層から田下駄が出土し、土器は弥生中期後半と思われる土器、弥生後期、弥生後期末～古墳時代前期、古墳時代後期の所産がある。古墳後期の所産は SD61とG低地接続部周辺、SA109で採取され、他に SA38・109、SD61土手からは弥生後期末頃～古墳前期の土器が得られた。弥生中期とは断定できないが、弥生後期～古墳後期の所産で、古墳後期の可能性が高いと思われる。ただし、SA38・109横木の C14年代測定（AMS法）は弥生後期前後と推測された。

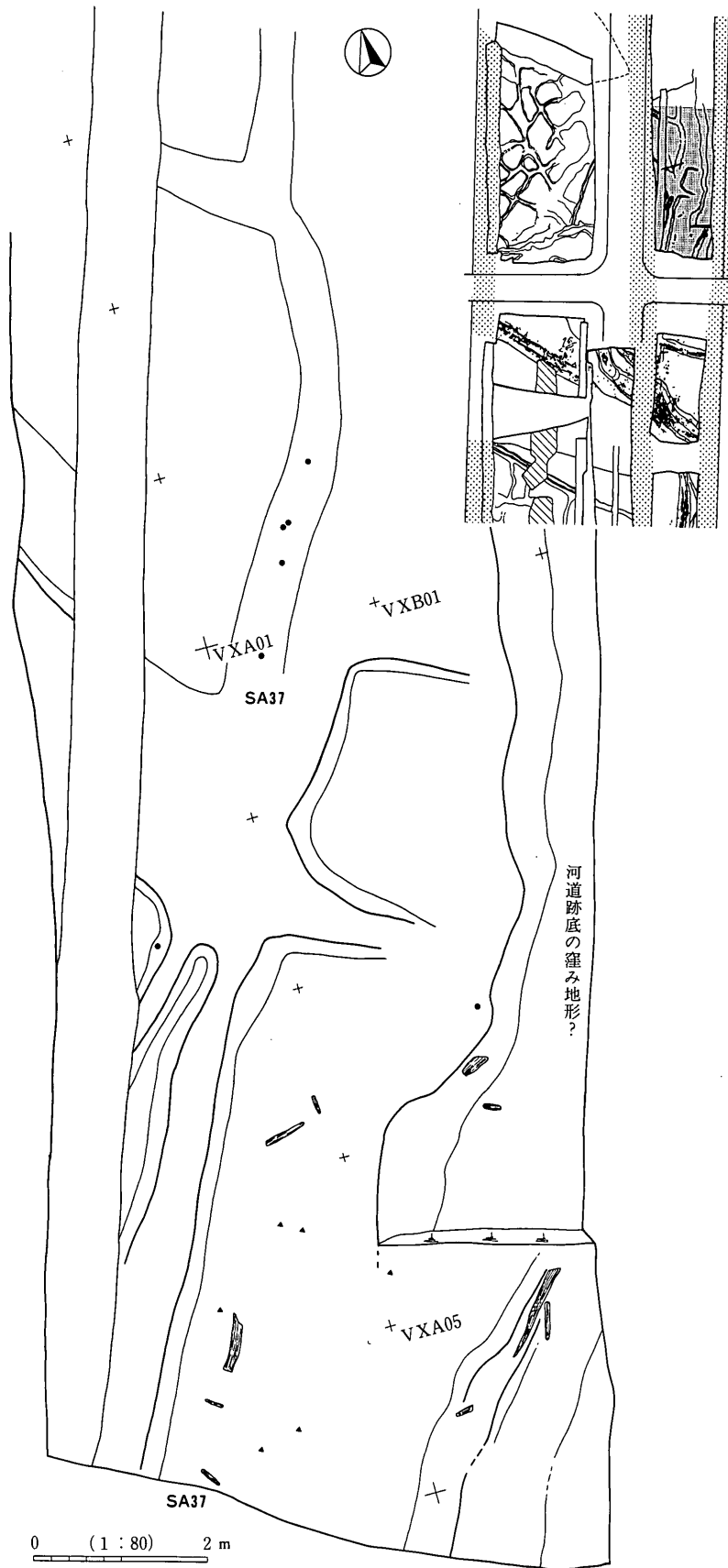
SA37（第42図 PL10） Ⅲ④区 VS21、W05・10、X01

Ⅲ③区南端3面で検出。調査時の遺構位置が記載洩れで所在不明となったが、整理ではSA37として採取されていた木材と平面図の照合からⅢ③区南端の杭列に比定した。本跡はE低地北東部の岸際の畦跡からN31°E方向に折れて低地を横断するように南北方向に延びる畦跡で、北部に横木を伴わない杭7本の杭列、南部には若干ずれて東側に木材が帯状に並んで検出された。この2地点を調査時にSA37とされたようだが、畦跡と杭・横木に密接な関係はなく、同一畦跡とする根拠も弱い。ただ、巨視的にみるとSA38の北延長先に当たるようにも看取される。木製品若干が出土した。

SA38 (第43図 PL11・12)

Ⅲ④・⑤区 VW15

Ⅲ④区北端3面で検出し、上面の攪乱は本跡まで及ばずに比較的良好に遺存していた。SD62に切られ、SA109・37は連続する関連遺構とみられる。Ⅲ④区調査ではSD62付近からN19°E方向に直線的に調査区外へ延びる部分と、調査区北端をN58°W方向に直交する二つの畦跡がSA38とされたが、Ⅲ⑤区で検出された延長先と思われる杭列も含めた。構造は横木を杭で固定し、人頭大の礫を所々入れながらオリーブ黒色シルトを盛って畦とし、水田面から畦頂部まで約20cmの高さを測る。幅は最大約1.1m、長さは南北方向部分で約12m、東西方向部分で約6mである。南部のSD62寄りではSD62に壊されて横木材が杭列脇に散在する。杭は散漫に打ち



第42図 SA37

込まれており、土留めというより横木を固定するものと思われる。また、南北方向の畦杭にはⅢ⑤区とⅢ④区に平行する杭列が検出され、しかも SA38内でも横木の下になる杭や横木を貫く杭があることから、数度の補修が想定できる。出土遺物は図示した甕片、杭、板材、壁板材などの木製品がある。

SA109 (第43図 PL10・11) Ⅲ②・⑤区 VW06・11

E低地南西岸際にあり、Ⅲ②・Ⅲ⑤区に分割調査した。北西端は調査区外へ延び、南西端はSD62が南岸砂礫層と接触する付近のSA38接続部分までである。Ⅲ⑤区周辺は杭のみ検出されたが、SD62に壊されて横木が流失した可能性がある。全長約16mほどを確認し、畦方位はN40°W方向に直線的に延びてⅢ②区東部に北側に延びる畦が接続し、その先はSD114に切られる。構造は横木を入れて杭で固定し、砂礫混じり土を盛ったものである。横木は遺存不良ながら、田舟破片や板材を用い、広面を横にして立てた状態で設置することから土留めとみられる。また、横木は2列平行するように検出されたが、西側中間にもう1列短い板材の横木列が認められている。SA38同様に改築、補修されている可能性が窺える。遺物は建築材や田舟などがあり、他に古墳の土師器甕、弥生時代と思われる甕片が出土した。

SD61土手 (第44図 PL12・13) Ⅲ④区 VW24、VIC04・09

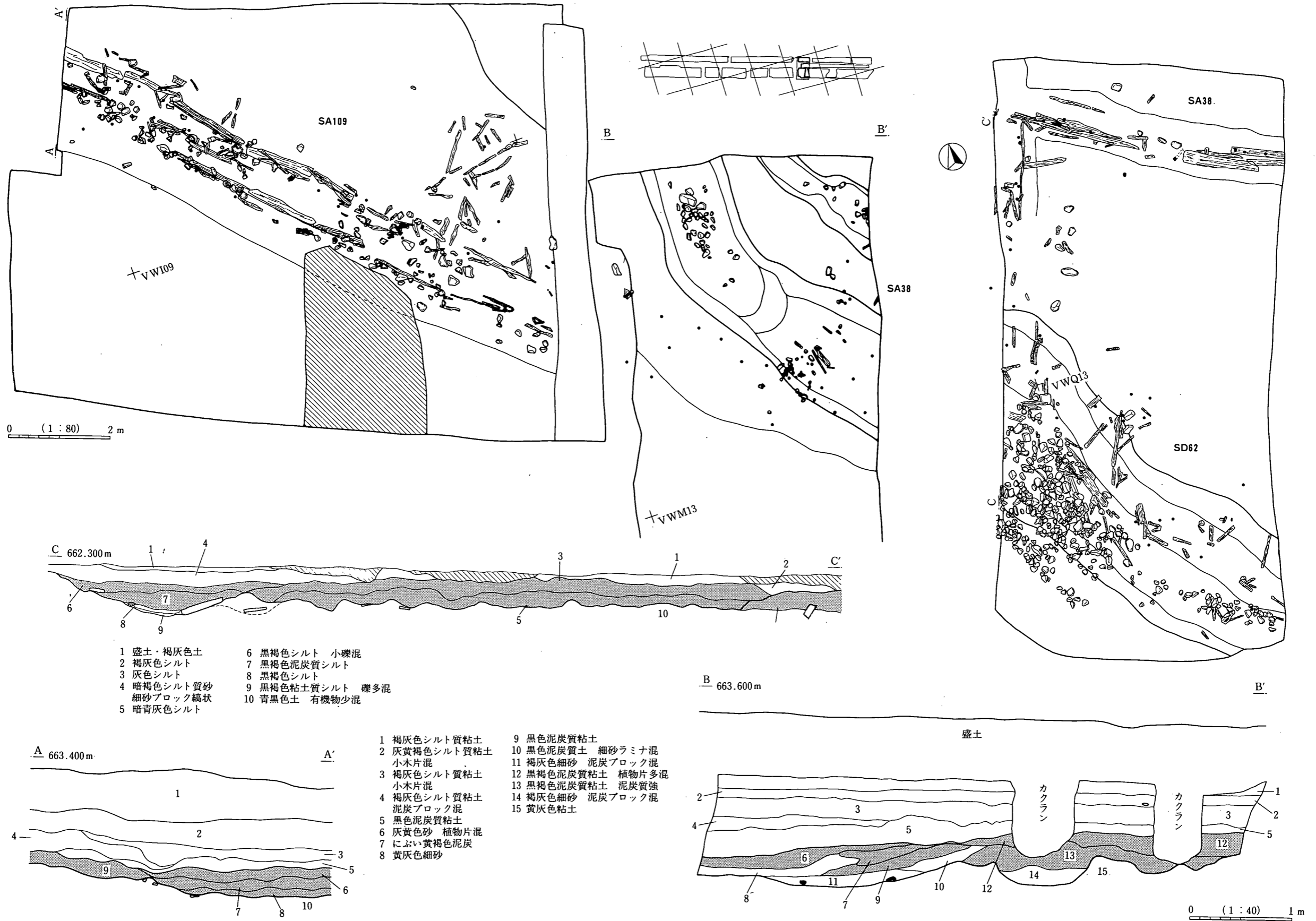
Ⅲ④区3面で検出。調査時にSD61護岸施設とされたが、整理時の検討からSD61に切られた3面水田跡の木芯畦跡と判断した。ただし、遺構番号は変更せず、調査時のまま用いている。E低地の南東屈曲部から南部にかけてのE低地西岸脇に位置し、SD62～61に浸食されなかった部分のみ残る。杭はSD61に切られる付近以南は散漫になって南端は不明である。幅は土盛範囲で幅約1.0mだが、杭自体は砂礫層の高まり側に寄った約1.8mほどの幅まで分布する。低地岸際に設置される様相はSA109と同様である。N33°E方向に延び、残存長は約16mである。遺存不良ながら細長い板材を杭で固定し、その上に礫混じりの粘土を盛る構造で、杭は散漫ながら数条認められた。SA38・109同様に改築・補修されている可能性がある。出土遺物は横木板材、杭に転用された建築材、弥生土器壺・波状文甕・甕片、S字甕片、古墳後期と思われる壺・甕・高杯片などが採取された。

SD23 (第35図 PL9・10) Ⅲ①区 VR24、W04

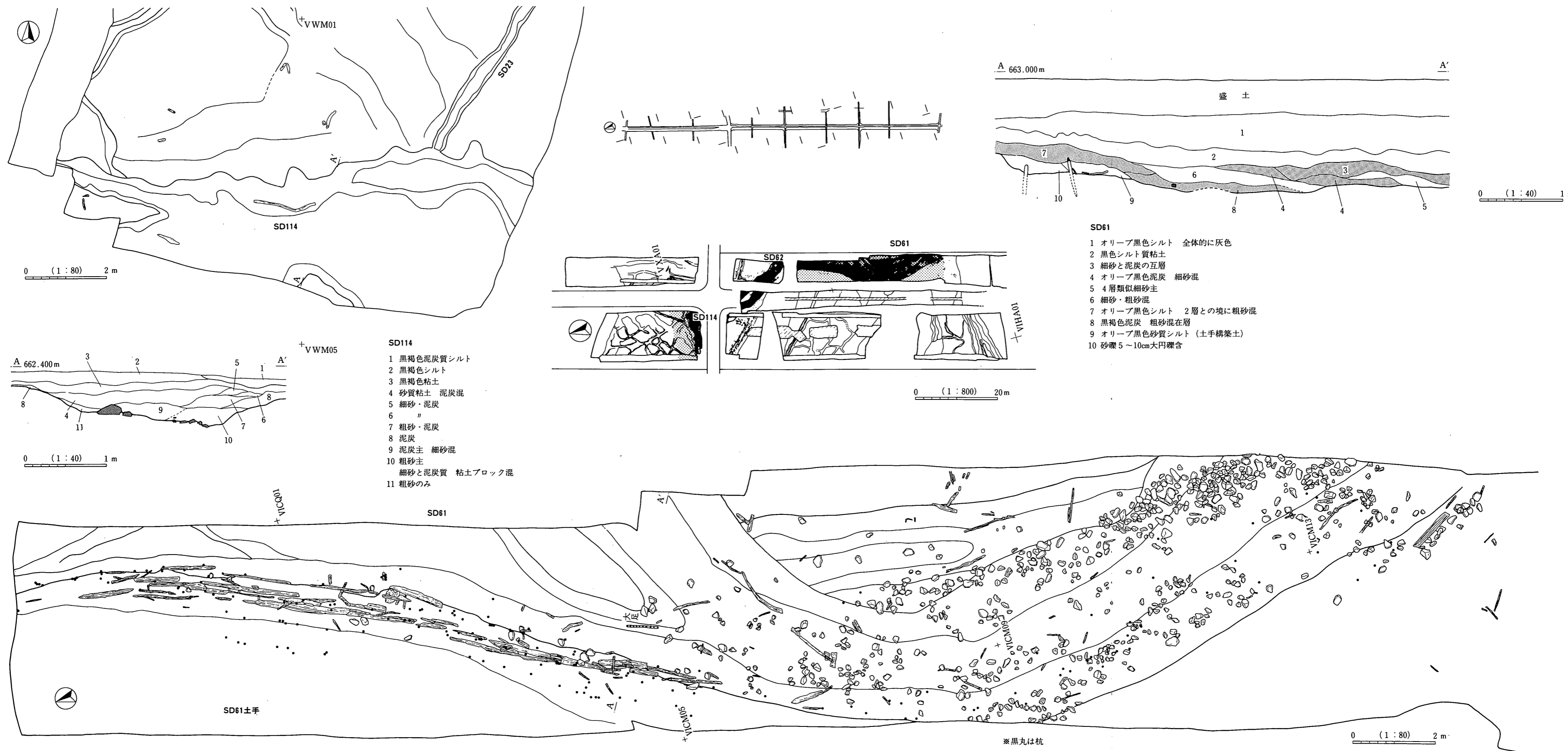
Ⅲ①区3面で検出したが、上部は2面調査を実施しておらず3面水田跡に伴うとも断じ得ない。上層遺構とする根拠も弱いので便宜的にここで扱う。南端はSD114と重なる付近からみつき、北端は調査区外へ延びる。3面水田跡畦跡が並列するところもあるが、3面水田跡とは走行方位が異なるように見受けられる。南端はSD114に接続するか、切られるか明らかにできなかった。幅約0.3～0.4m、方位はN38°E、調査区内で約8m確認した。3面から底面までの深さは約8cmと浅い。出土遺物はない。

(6) **F低地の遺構** (第35図)

E低地とG低地中間の浅い河道跡低地で、西北端は調査区外へ延び、南東端はE低地に接続する。走行方向はN41～61°Wで上幅約25m、調査面幅約18mである。底面標高は北西端で662.400m、南東のSD61接続部分で662.00m、南東方向へ傾斜して周囲の礫層頂部から40cm前後の深さを測る。河道跡の最深部は南側に偏り、河道跡の立ち上がりは緩やかである。土層はほぼG低地と同じで、上層から現耕作土褐色シルト、褐色シルト・灰色シルト・暗褐色シルト質粘土があり、その下が黒褐色泥炭質粘土、褐色シルト、砂礫層と続く。調査面は黒褐色泥炭質土層を除去して褐色シルト上面で水田遺構を検出した。隣接するE低地との接触部分にあたるⅢ⑤区ではE低地同様に2枚調査できたが、SD25の延長先がⅢ⑤区下層で検出されたのでⅢ②区調査面はE低地3面に対応すると思われる。ただ、G低地同様に水田耕作土の下面を検出した疑いもあり、E低地3面と全く同じ水田面とは断定できなかった。遺物は水田面から時期不明の土器小片が出土し、水田面を覆う泥炭質土層から上層採取と思われるF低地黒土層と表



第43図 SA38、109、SD62

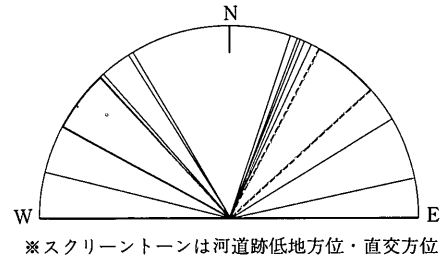


第44図 SD61、114

記された内耳鍋、F低地周辺で瀬戸美濃連房仏華瓶が採取されている。

F低地水田面 (第35図 PL14・15) Ⅲ②・⑤区

Ⅲ②区中央は攪乱で壊されているが、広く水田跡が検出された。調査時には泥炭被覆水田跡と捉えていたが、上述したように耕作土下面を検出した疑いがある。ただ、Ⅲ⑤区では泥炭被覆水田面と認められ、地区により土層の様相が異なっている。水田跡は北岸の高い地点に溝跡SD25を配し、低地内に中央から北側と南側で若干様相が異なる水田区画が形づくられている。南側は河道跡走行方向の3.6、2.8m間隔の畦と、直交方向の6.3、6.5m間隔の畦で菱形・長台形の水田区画が形づくられている。北側は中央の河道跡走行方畦からN72°W、N80°W方向に斜めに接続する畦と、直交方向の畦で2.0~4.8m間隔の畦で台形の水田となる。こうした形態差は低地底面の傾斜と関連する可能性がある。畦方位は河道跡方向と類似するN42・61・76°W、N31・32°W方向のものがあり(第45図)、これと直交する横断方向はN18~25°Eと変則的な畦跡2条ある。水田面積は判明するものが少なく、南側で15、24㎡、北側で7、10㎡のものがある。出土遺物は黒土層と表記された内耳鍋が採取されているが、本跡に伴うか不明である。



第45図 F低地畦方位

SD25 (第35図) Ⅲ②区・Ⅲ⑤区 VW17・18・23・24

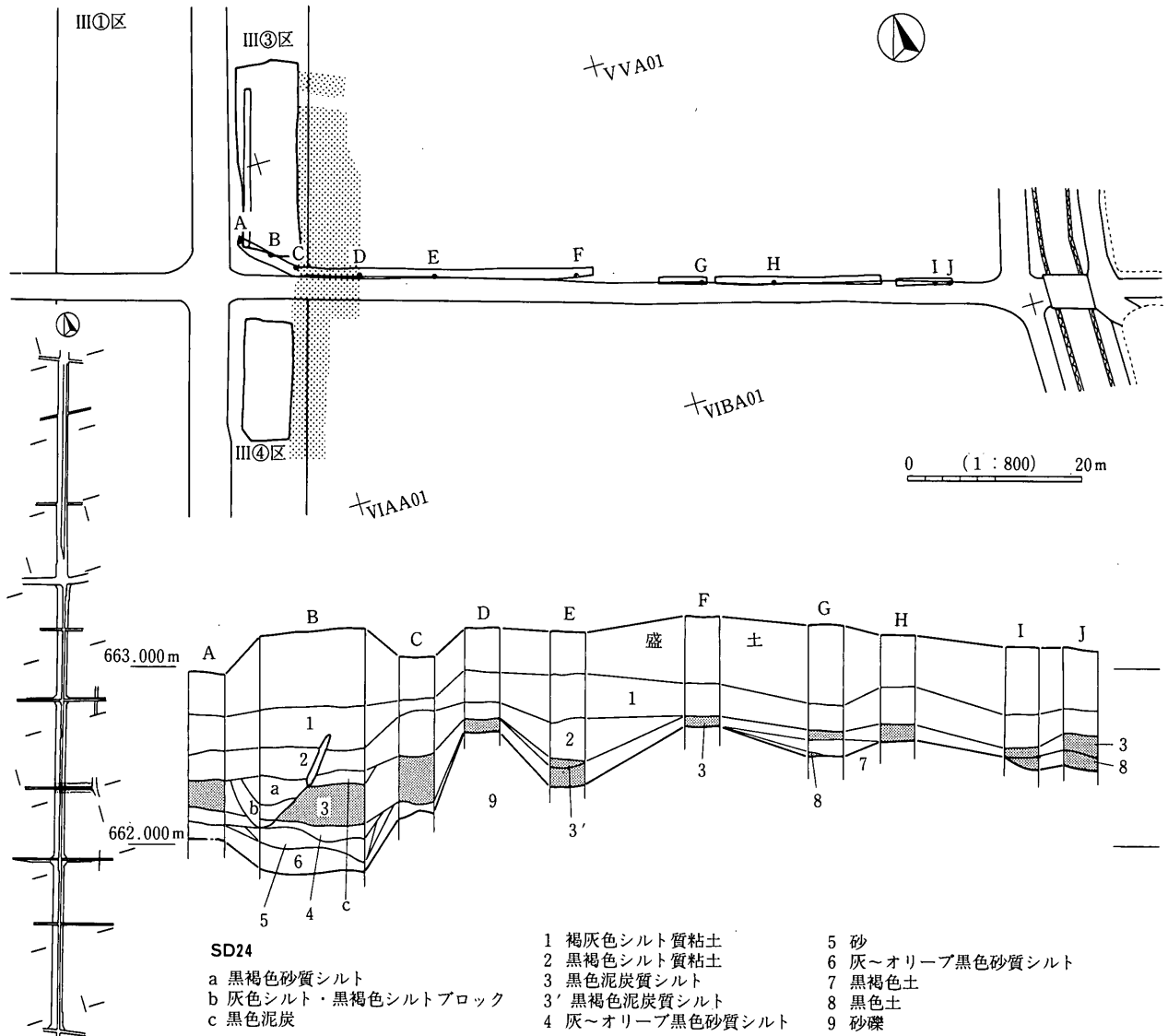
Ⅲ②・⑤区下層で連続して検出され、両調査面が対応することが知られた。低地北縁に沿ってN46°W方向にあり、西端は調査区外へ延び、東端はⅢ④区で見逃して不明である。幅約0.4~0.6mで調査区内は長さ約18.4mを測る。断面形はU字状で検出面からの深さ数cmしかない。埋土は泥炭質土が入り、西端では埋土中に礫が集中的に検出されている。Ⅲ②区では本跡に伴う低い畦跡が認められた。浅いながらF低地北岸に位置することから用水と思われる。出土遺物はない。

(7) G低地の遺構 (第35図)

G低地は河道跡低地群南端にあり、南岸は集落遺構が見つかった微高地域となる。西側は調査区外へ延び、南東端はE低地に接続する。他の河道跡低地と異なって走行方向は南辺N70°E、北辺N65°Wで、幅を減じながらE低地SD61脇に繋がる。調査面の底面標高は西端662.200mで、E低地と接続する付近のSD61脇で662.00mを測り、西から東へ緩やかに傾斜して最深部は南側に寄っている。F低地よりも西端は深い接続部分の底面標高はあまり変わらない。南岸の立ち上がりは急傾斜ながら、北岸は緩やかで、幅は西部の礫層頂部間で約27m、調査面では19m、東側上幅で約12m、調査面で約7mを測る。調査はⅢ②・④・⑤区に分割調査したが、最も広く調査できたのはⅢ②区のみである。また、Ⅲ⑤区は検出土層を誤って掘りすぎ、遺構が不明となってしまった。

土層はF低地と同様で、上層から褐灰色シルト、褐灰色シルト、灰色シルト、暗褐色シルト質粘土、黒褐色泥炭質粘土、褐灰色シルトとなるが、微高地側の南辺では多くの砂礫が混じる黒褐色が分布し、この土層から古墳時代土師器破片が数多く採取された。水田跡はⅢ②区で泥炭質粘土層を除去した褐灰色シルト上面1面で検出したが、E低地に隣接したⅢ⑤区では2面調査できた。F低地同様に上層水田跡はⅢ②区に対応層がなく、Ⅲ⑤区下面が対応する可能性がある。ただ、Ⅲ⑤区は泥炭層被覆水田面と捉えたが、Ⅲ②区は堆積層が薄く、Ⅲ⑤区泥炭質土層が耕作土に混じり込み、検出遺構は疑似畦畔の疑いがある。出土遺物はⅢ④区E低地2面調査時に古墳後期壺・甕・高杯、Ⅲ②区調査面で古墳後期高杯?、弥生後期土器片、微高地との境界の砂礫混じり黒褐色土層中では古墳後期土師器破片が出土した。

G低地水田跡 (第35図 PL15) Ⅲ②・⑤区



第46図 III③・④区境立会い調査地点

III②区で最も広く調査でき、泥炭質粘土層を除去して褐灰色シルト上面で遺構を検出した。しかし、F低地同様に泥炭質粘土層はIII⑤区よりも厚く、それ自体が耕作土で、遺構は耕作土下面の水田痕跡である可能性が残る。遺構は低地北岸と南岸脇に比較的幅広い畦状の盛り上がりがあり、南岸のものは溝跡を伴う。低地中央部では畦跡が判然とせず、北側の若干低い部分を横断する畦状の盛り上がりのみが検出された。全体的に水田跡の痕跡が少ない。出土遺物はIII⑤区から古墳後期と思われる高杯などの土師器小片、櫛描波状文を施す弥生後期甕体部破片が出土し、III②区でS字甕、古墳後期甕、古墳後期高杯、不明小片がある。年代的には古墳後期と思われる。

SD26 (第35図) III②区 IVB25、C21

西端に細い溝を接続させてG低地南岸の微高地境に沿ってN75°E方向にIII②区を横断し、III④・⑤区では延長先が検出されていない。調査区内の規模は西端で幅約2.5m、長さ約14m、検出面から底面までの深さ10cmほどと浅い。埋土は砂礫混じりの黒褐色土で古墳時代後期の土師器破片、ミニチュアが出土した。

G低地境の土器集中 III②・④・⑤

微高地域とG低地との境界部で土師器が多く出土した。調査時にSQ31・35、G低地境土器集中とした

が、ここではG低地境の土器集中としてまとめる。土器は微高地域北端のG低地にかかる斜面付近に分布し、ほとんどが破片で、調査では一括して取り上げた。上層として取り上げられた土器には古墳後期の壺・小壺・杯・高杯、弥生土器、不明土器片、ミニチュアなどがあり、他の一括取上げでは僅かながら弥生時代壺・甕（波状文・短斜文）、S字甕片も含むが、古墳後期の壺・小型壺・甕・杯・高杯が主体となる。これ以外に近世の連房すり鉢片、内耳鍋、古瀬戸平碗片があるが、混入だろうか。古墳後期の所産が中心となり、器組組成も集落遺構出土のものと変わらず、破損した土器を廃棄したと思われる。

(8) Ⅲ③・④区境立会い調査（第46図）

平成12年の冬期にⅢ③区と④区境にある交差道路脇用水建設に伴って立会い調査を実施した。工事に際して掘削された溝の壁で土層を観察し、部分的に土層図記録を作成した。この立会い調査からバイパス東脇でE低地が立ち上がり、それ以東は緩やかに古川へ向かって傾斜していくことが知られた。土層はⅡ・Ⅳ・Ⅴ区同様だが、やや泥炭質が強い。A～C低地の延長先は明らかにしえなかった。

第4節 Ⅲ区南～Ⅳ区北部微高地域の調査

1. 微高地域の概要

調査概要 伊那バイパス中央南寄りのⅢ区南部～Ⅳ区北部にかけては微高地となる。平成11年の試掘調査でⅢ②区南部周辺のトレンチで住居跡が確認され、平成12年度にⅢ②区、翌年13年度にⅢ④区とⅣ①・②区、平成15年度に現道下をⅢ⑤、Ⅳ③区として面的調査を実施した。また、Ⅳ②区の一部が用地関係から残件とされたが、平成14年1月立会い調査を実施し、遺構がないことを確認した。この微高地は昭和27年の区画整理時に多数の土器が採取された旧字「御室田」周辺に当たり、当時は焼土跡の発見から住居跡の存在は予想されていたが、今回の調査で具体的な姿が捉えられた。検出遺構は弥生中期後半・後期、古墳後期の3時期の所産を中心とし、古墳後期以後の集落遺構は検出されず、耕地化したとみられる。ちなみに旧字名の御室田の「御室」とは御射山社の別称であることから、戦国時代天正十一年木曾氏が御射山社に寄進した場所と想定し、この頃には耕地化していたとされる（小池修兵1954）。

地形 微高地は北・東縁がⅢ区北から続く河道跡低地群、南・西縁をⅣ・Ⅴ区に続く埋積河道跡低地群に画された細長い島状の高まりである。主軸は北西—南東方向で、その南東延長先に伝田中城跡がある。北西部が最も高く、微高地途中から南へ傾斜し、南部標高は北側の河道跡底と類似した数値となるが、傾斜地形にあるために天竜川直交方向では高い。微高地上面には微高地以前の埋没河道跡の窪みや砂礫層の高まりによる微細な凹凸が発達する。遺構は微高地北部に多く、南部はやや遺構分布が粗い。この微高地域で採取された最も古い土器には縄文前期土器があり、このころには離水していたと推測される。

土層 土層は上から1a層現耕作土、床土か区画整理整地と思われる1b層褐灰色土があり、その直下は2（Ⅲ）層植物腐植土の黒褐色土層、Ⅴ層の灰・黄灰色シルトや砂礫層と続く。堆積層が薄く、耕土直下で砂礫層が露呈するところもある。2（Ⅲ）層は形成時のままのものではなく、耕作関連遺構と思われる溝跡埋土にⅢ層起源と思われる土層が認められることから後代に耕作の手が加わっていると思われる。遺構埋土の大部分はⅢ層起源であり、Ⅴ層上面で検出した。また、Ⅴ層上部の遺構として縄文前期・晩期の土器集中が検出された。なお、微高地では北西から南東へ傾斜するなかで東側は区画整理時に多く削平を受け、Ⅲ層の遺存が悪い。また、東側道路脇にある埋設用水でⅢ④区～Ⅳ②区西側とⅢ⑤・Ⅳ③区東側にかけて幅7m前後は破壊されていた。特にⅢ④区北西部の埋設用水路屈曲部周辺は攪乱が著しく遺構は検出されなかった。

参考文献

1954小池修兵「箕輪遺跡について」（1970『箕輪遺跡 調査第Ⅰ集』箕輪町教育委員会 に収録）

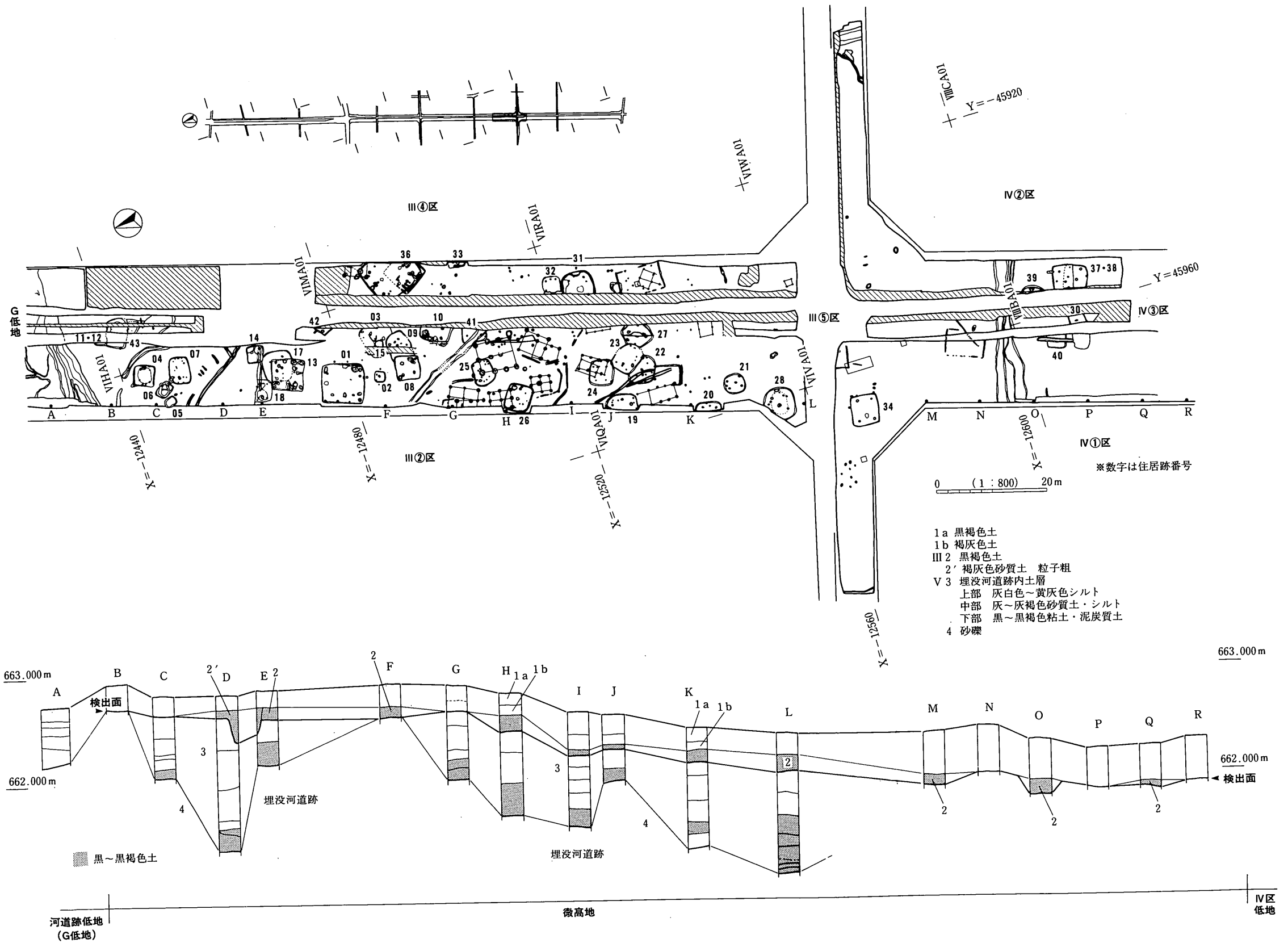
2. 検出された遺構

以下には遺構種別（住居跡のみ時期別）に記述する。なお、Ⅳ区微高地背面では水田跡が検出されたが、微高地域の水田跡は明らかにできなかった。また、Ⅱ区SB101完掘図は便宜的にここに掲載した。

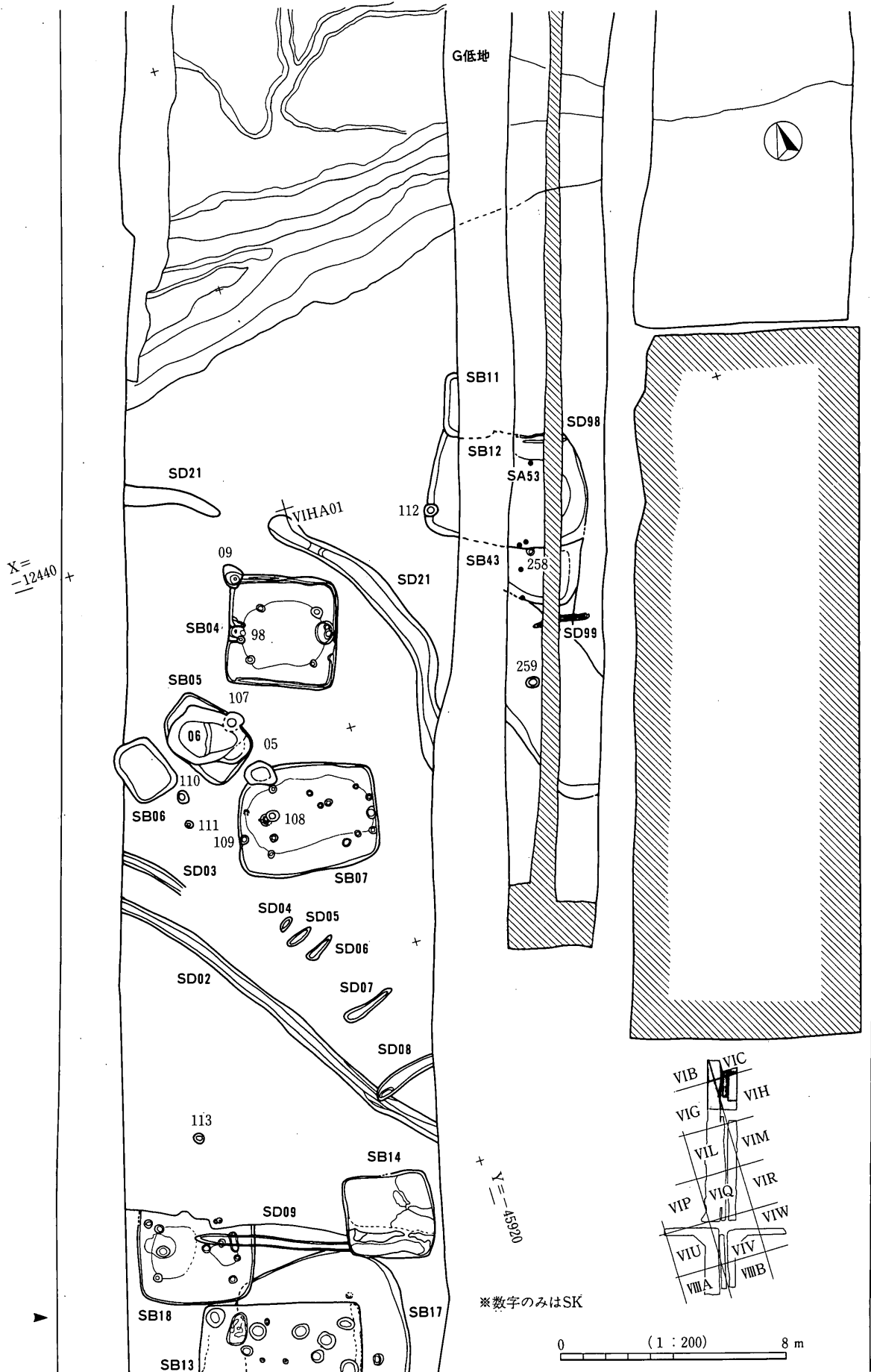
①. 住居跡

弥生中期後半の住居跡

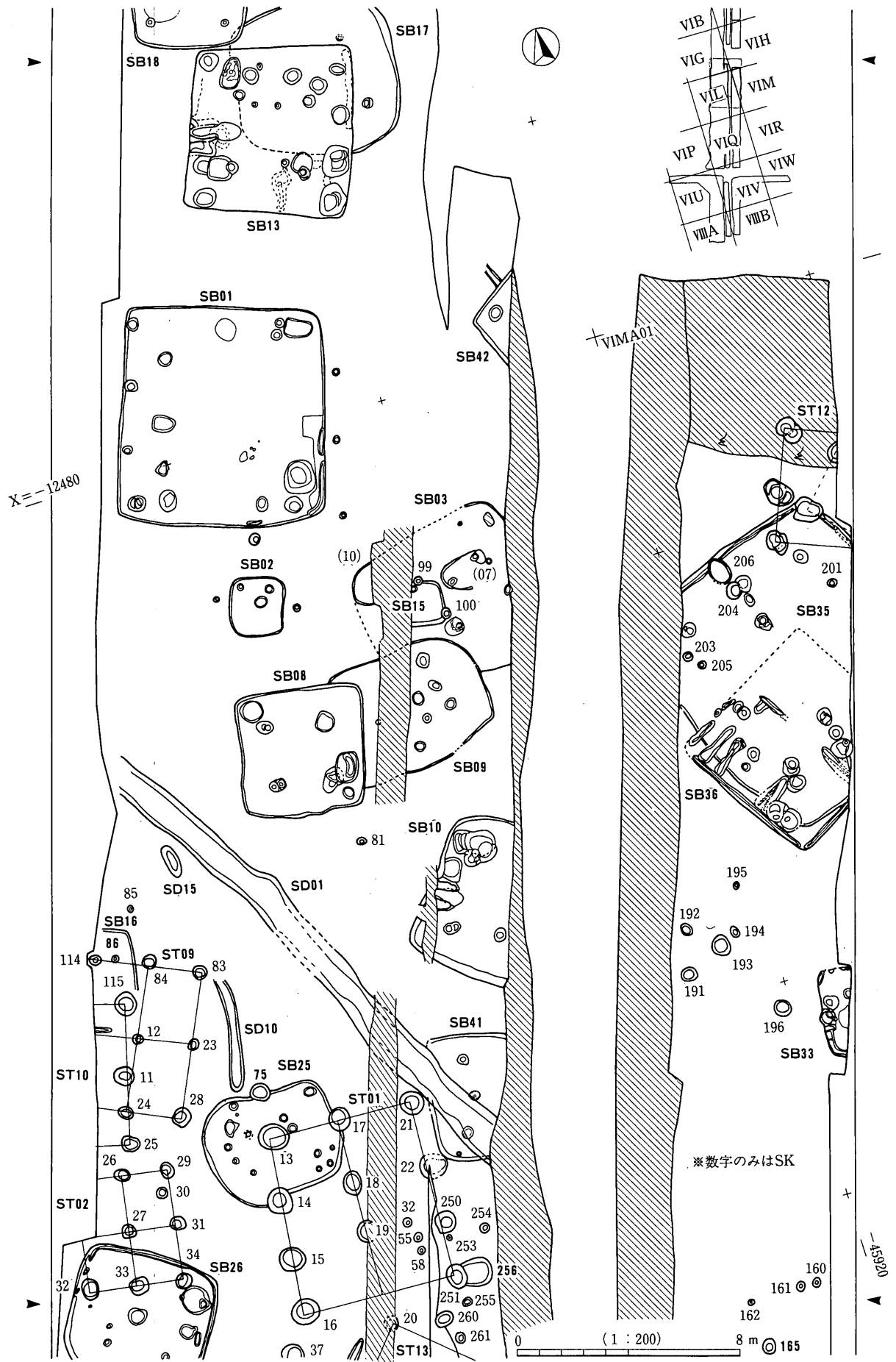
弥生中期後半の住居跡は11軒あり、微高地域中央付近に散在する。平面形はかなり丸味みを帯びるものもあるが、隅丸方形を基調とする。規模は長軸4～6m、短軸3～6mと本遺跡の他時期ほど格差はない



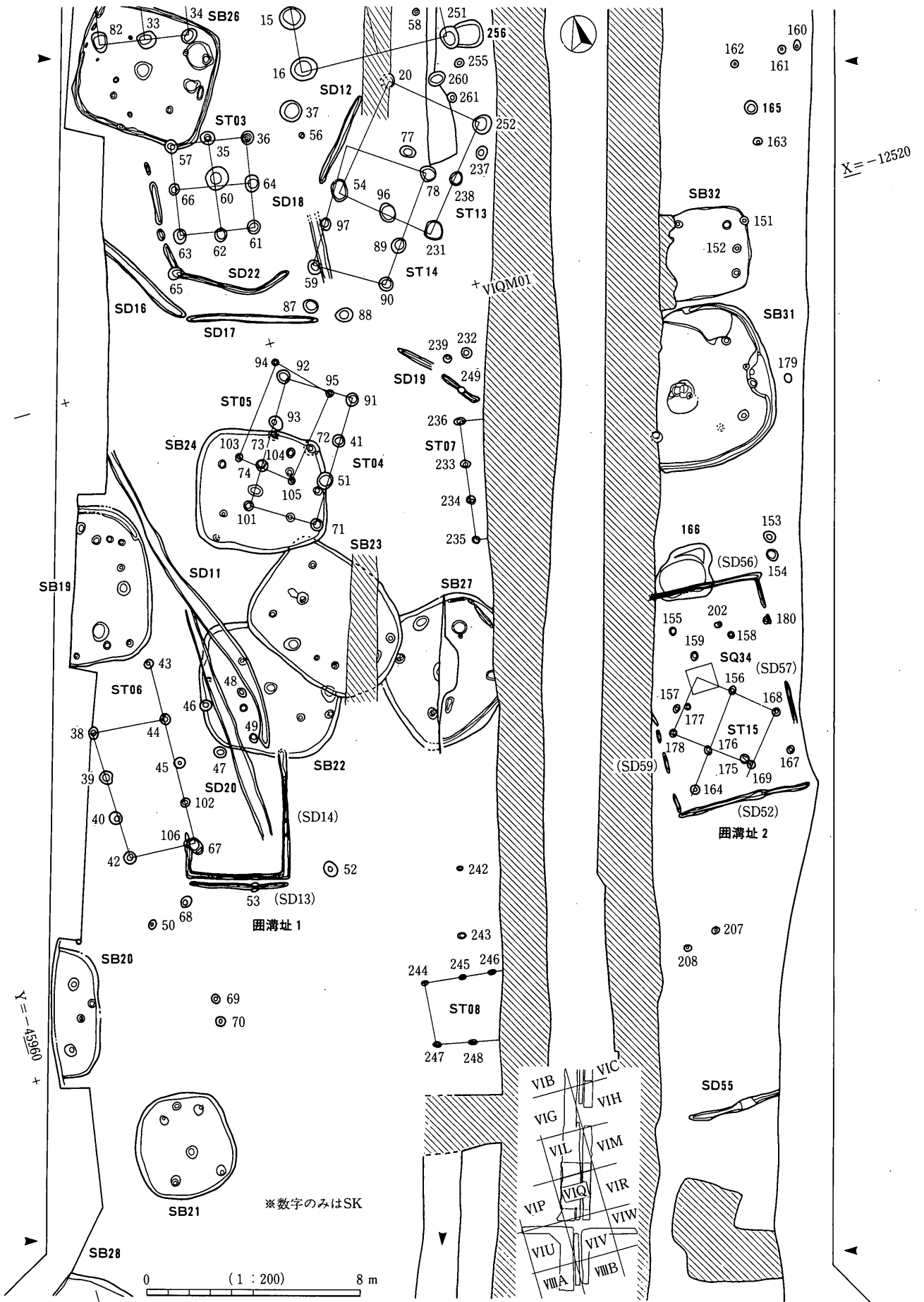
第47図 微高地の遺構全体図と土層柱状図



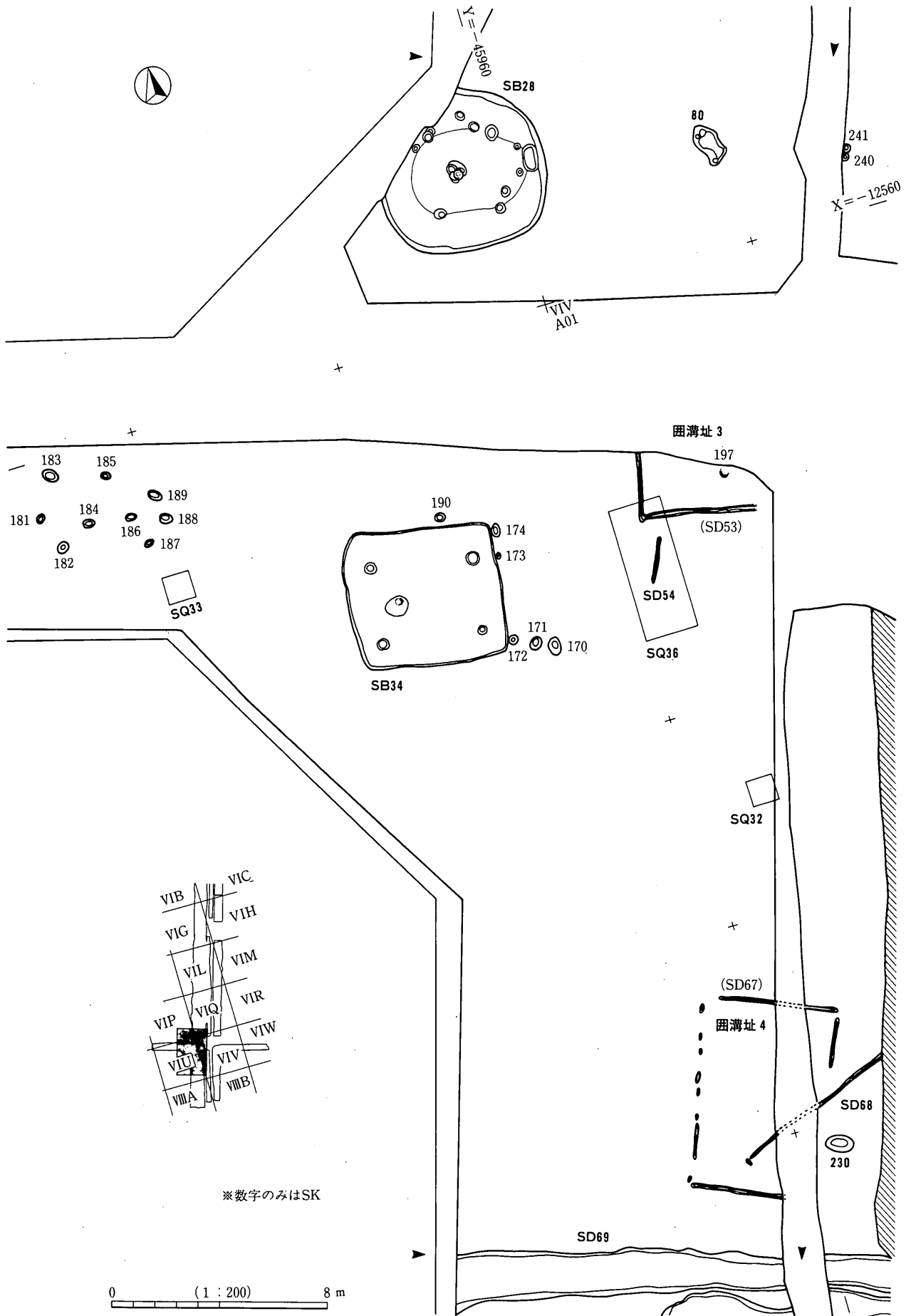
第48図 微高地の遺構割付図1



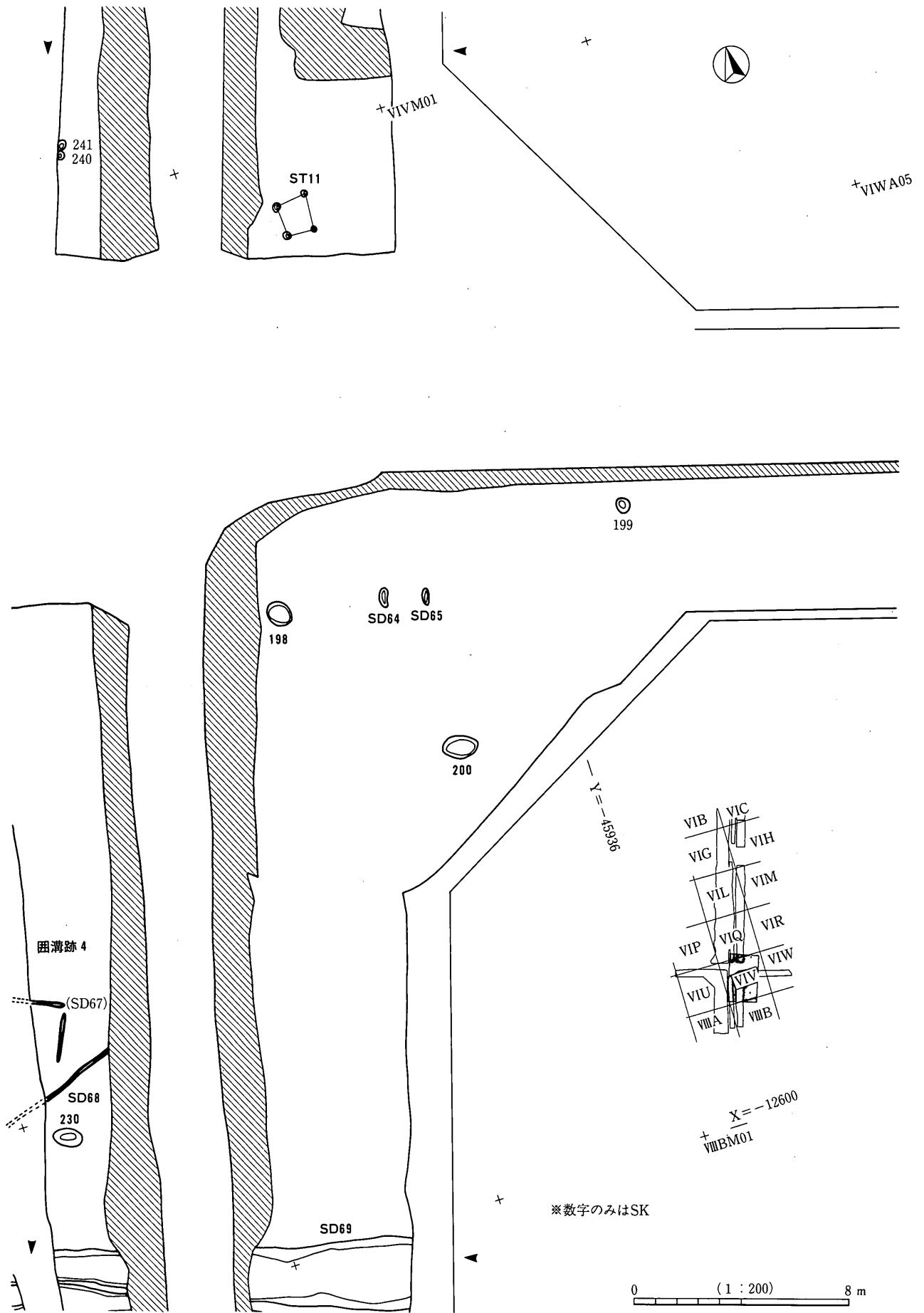
第49図 微高地の遺構割付図2



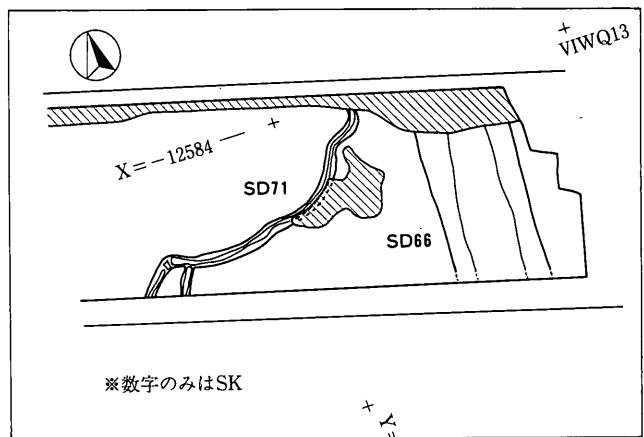
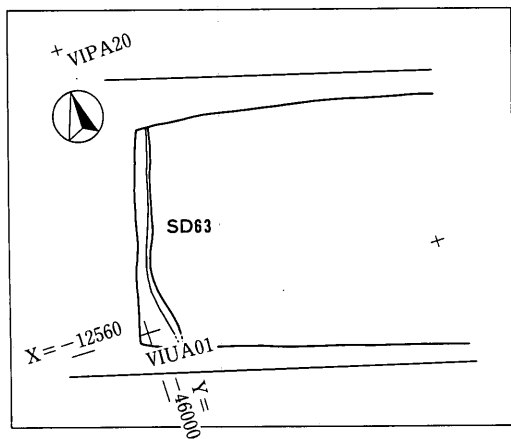
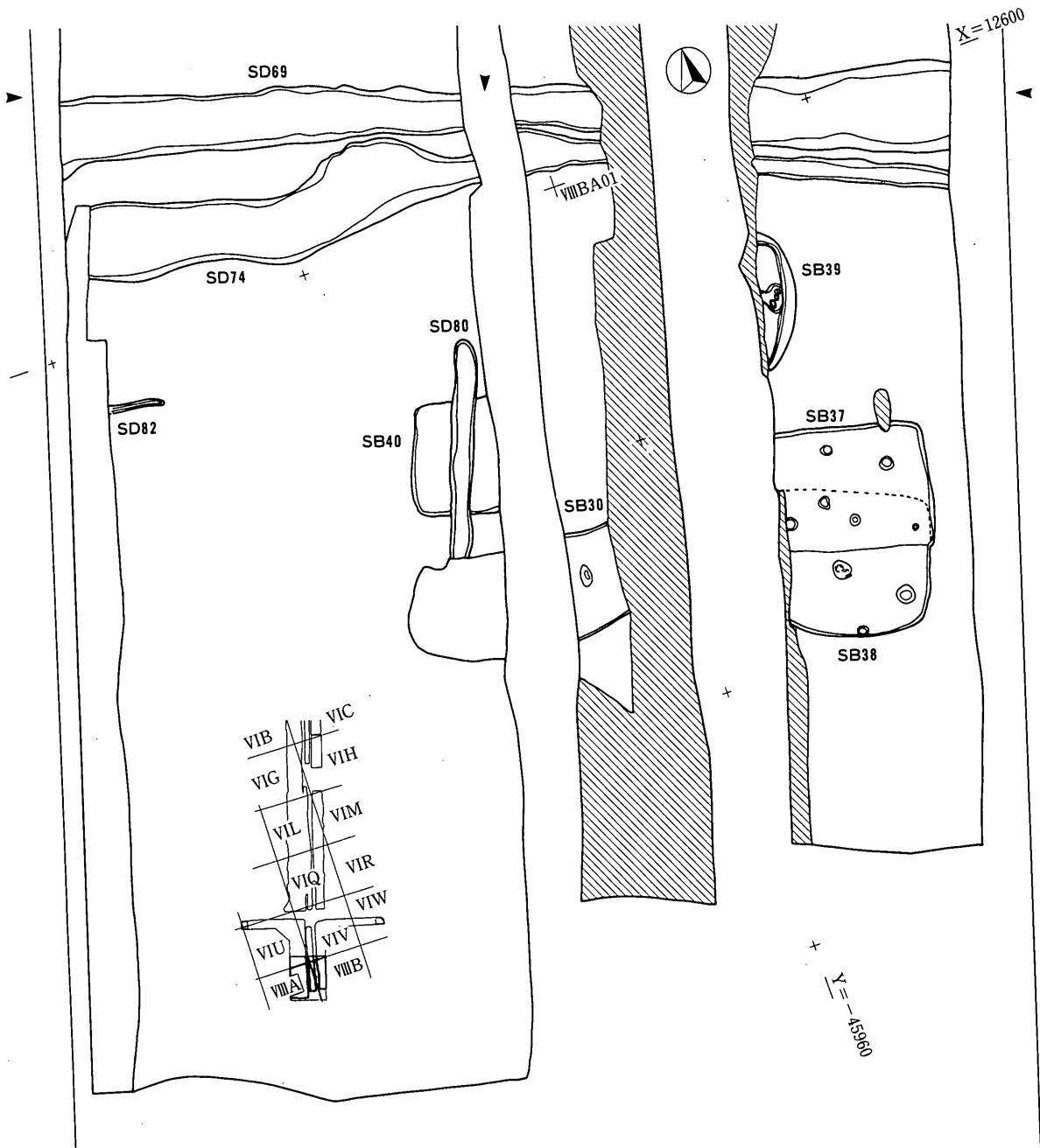
第50図 微高地の遺構割付図3



第51図 微高地の遺構割付図4



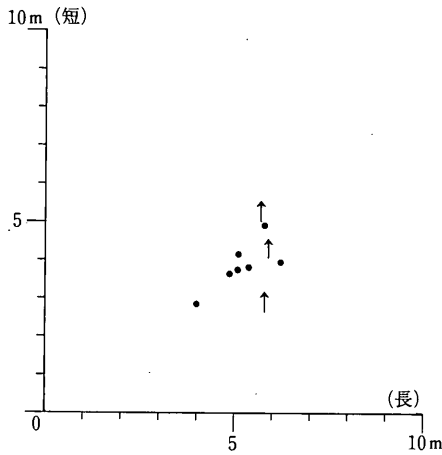
第52図 微高地の遺構割付図5



0 (1:200) 8 m

※数字のみはSK

第53図 微高地の遺構割付図6



第54図 弥生中期住居跡規模グラフ

が、4.0×3.8mの小型(SB21)、4.9～5.4×4.6～5.1mの中型(SB22・24・26・27・(31))、5.7～6.2×5.9m前後の大型(SB03・17・28)に細分しえる(第54図)。中型を主体として大型が少量、小型は僅かで、大型住居跡は集落中央よりも外側に分布し、中型は中央、小型は外縁近くに分布するようにも見受けられる。なお、SB39は規模不明ながら、残存部から小型と思われる。

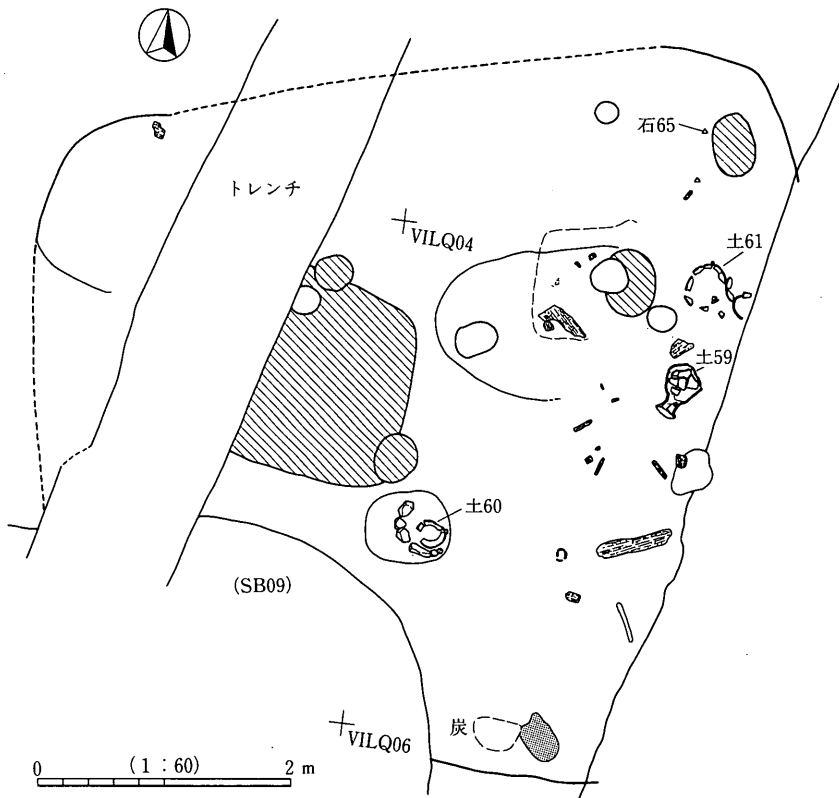
内部施設には柱穴、入口施設、性格不明の掘り込み施設、壁溝、炉跡がある。柱穴跡は4本を基本としてその中央に炉が位置する。炉は地床炉と埋甕炉があり、前者が多い。SB31のように埋甕炉を3回作り替えるものもある一方で、SB28のように埋甕炉を埋め戻して地床炉に作り替えるものもあり、厳密な作り分けは認めがたい。入口施設は柱穴跡状のものが多いが、SB31・39など大きめの浅い掘り込みを伴い、SB31は内部から砥石が出土した。また、SB28には壁際に長楕円形の掘り込みが検出され、内部から略完形の土器、ミニチュア、管玉等が出土した。貯蔵穴の可能性は残るが特殊な遺物が多く断定できない。壁溝はSB16・26・27・31・39など伴うものが多い。なお、SB28は掘り方で溝状の痕跡が二重に検出され、住居跡が拡張して作り替えられた可能性が窺えた。これ以外にSB22では赤彩小型壺を床下に埋設した施設、SB24では壁際に甕底を埋設した施設が見つかった。

焼失住居跡としてSB03・17・31・26・22などがあり、中～北部に多く分布する。SB31を除いて焼失住居跡からは比較的遺存良好な土器が多く出土したが、焼失住居跡以外でもSB27・28は土器を多く出土している。一方、SB21・24・39は破片が少量しか出土していない。なお、周辺の南箕輪村北垣外遺跡では当該期住居跡数軒が検出されている。方形の平面形で炉は梁行柱穴中間に位置するなど弥生後期的な特徴

をもつ。本遺跡に後続する時期と思われる。

SB03 (29) (第55・69図 PL16) III②区 VIL05

微高地中央北よりに位置し、SK09・15、SK99・100に切られ、東部は埋設用水で破壊される。III②区東壁際で検出された炉跡や床面の一部からSB03が認定され、後に隣接したIII⑤区で検出されたSB29は同一住居跡と捉えられたことから整理時にSB03にまとめた。また、III②区のSK07・10は本跡埋土と同様の炭化材を含み、SK10の北辺はSB29北辺延長ラインに一致することから本跡の一部に含めた。平面形はやや不整形な



第55図 SB03 (29) 遺物出土状況

隅丸長方形で、主軸方位はN72° E、東西約6.0m以上、南北約5.7mの規模である。埋土は僅かに残存し、炭化物を多く含む暗褐色土である。南辺周辺が焼けて赤化していることから焼失住居跡と捉えられる。床面は深い掘り方を伴わず荒掘り後に浅く均したもので、比較的堅い。床面上でピット数基検出されたが、関係は判然とせず、P1のみは上面で炭化材が検出され本跡の施設と捉えられた。炉跡は石囲埋甕炉で、甕胴部破片を埋設して西縁に石を並べている。

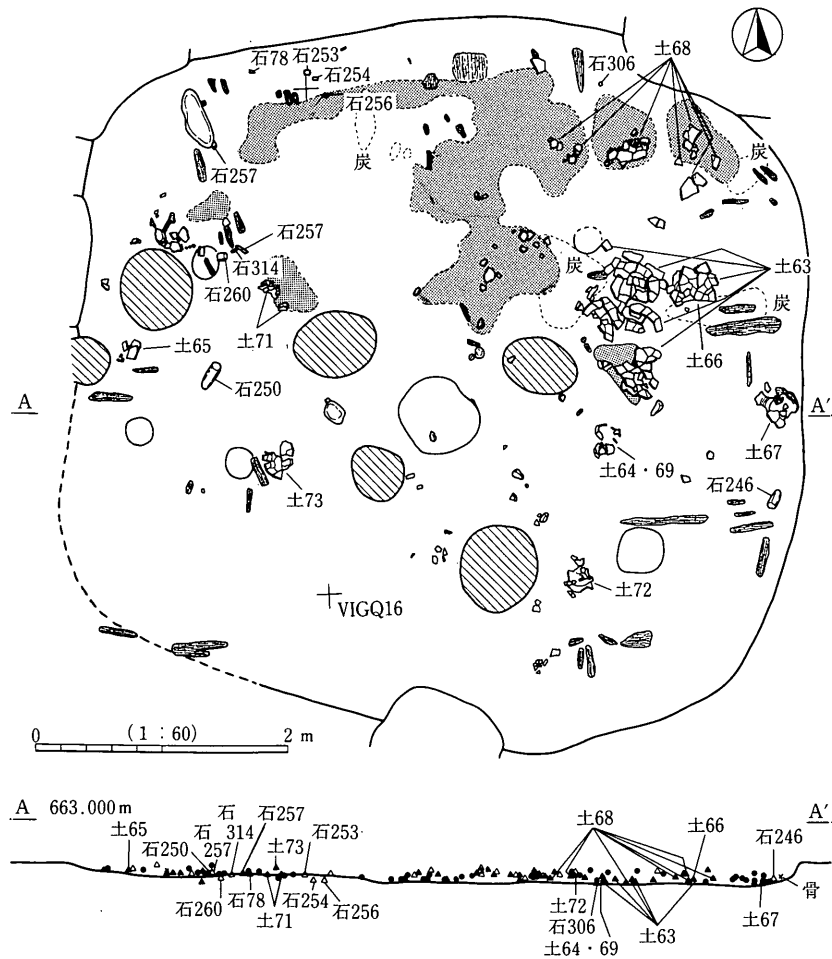
遺物は少ないが、Ⅲ⑤区調査で略完形の壺、甕口縁部、石鏃・磨製石鏃などが出土した。甕口縁部はほぼ全周し、壺も半分の遺存である。床直上に置かれた完形品が耕作等で削平されたものと思われる。

SB16 (第70図 PL16) Ⅲ②区 VIL08

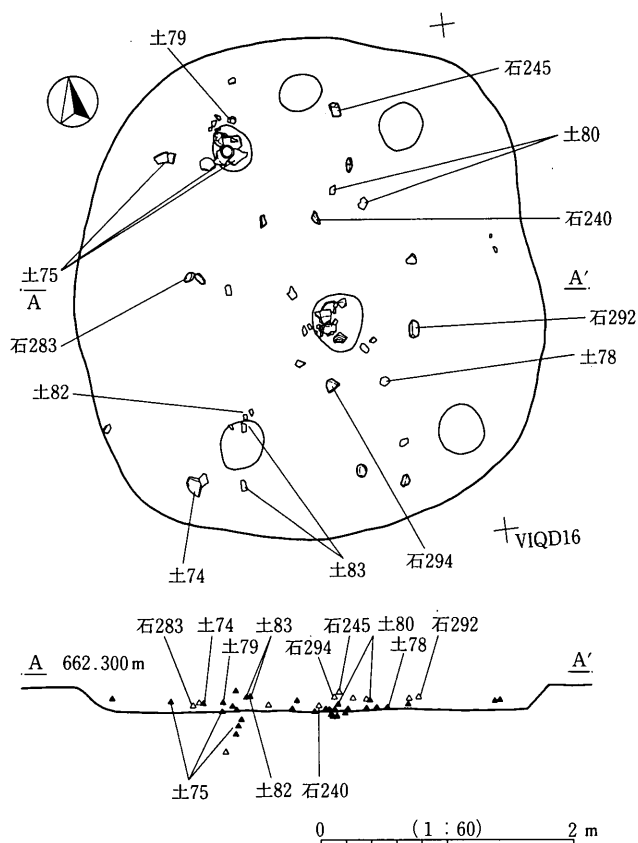
微高地中央の調査区西壁際で検出され、半分以上が調査区外へ延びる。調査時に本跡の所産とされた2基の柱穴跡は古墳後期土器を出土し、配置関係からもST09・10の柱穴跡と判断してSK114・115に変更した。一方、本跡内で検出されたSK86は弥生中期の壺片を出土して本跡施設の可能性を残すが、重複関係がわからず別遺構とした。本跡は遺存不良で北壁が約6cmほどしか残存せず、床は軟弱で南辺は北壁と平行する壁溝しか検出できなかった。残存部から平面形は隅丸方形と思われ、主軸方位はN83° W前後、規模は南北約3.6m、東西は調査区内で約1.6mほどである。出土遺物は南壁近くで略完形の土器62が出土したが、他は破片が少量しかない。出土遺物から弥生中期の住居跡と判断した。

SB17 (第56・69図 PL16) Ⅲ②区 VIG19・20

微高地北部にあり、当該期住居跡分布の最北端に位置する。SB13・18、SD09に切られ、SB13と重複す



第56図 SB17遺物出土状況



第57図 SB21遺物出土状況

る南西部は遺存不良である。平面形は南北約5.8m、東西約5.8mの隅丸方形を呈し、主軸方位は $N81^{\circ}W$ である。埋土は黒褐色砂質土が主体で、北・東部床直上に炭化物や焼土を多く含む黒褐色土が分布する。焼失住居跡と捉えられ、北部で焼土塊や放射状に散在する炭化材が検出された。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、床面までの深さは約10cm前後である。床面は荒掘り後に浅く均したものだが、比較的堅い。床面上ではピット5基と炉跡が検出された。P4はやや不明瞭で認定に不安を残すが、位置的にP1～4が主柱穴跡と思われ、何れも直径20～30cm前後の円形平面形である。位置がずれるP5は重複する別遺構の可能性がある。炉跡は直径55～65cmの不整形円形に浅く窪んだ地床炉で住居中央に位置する。

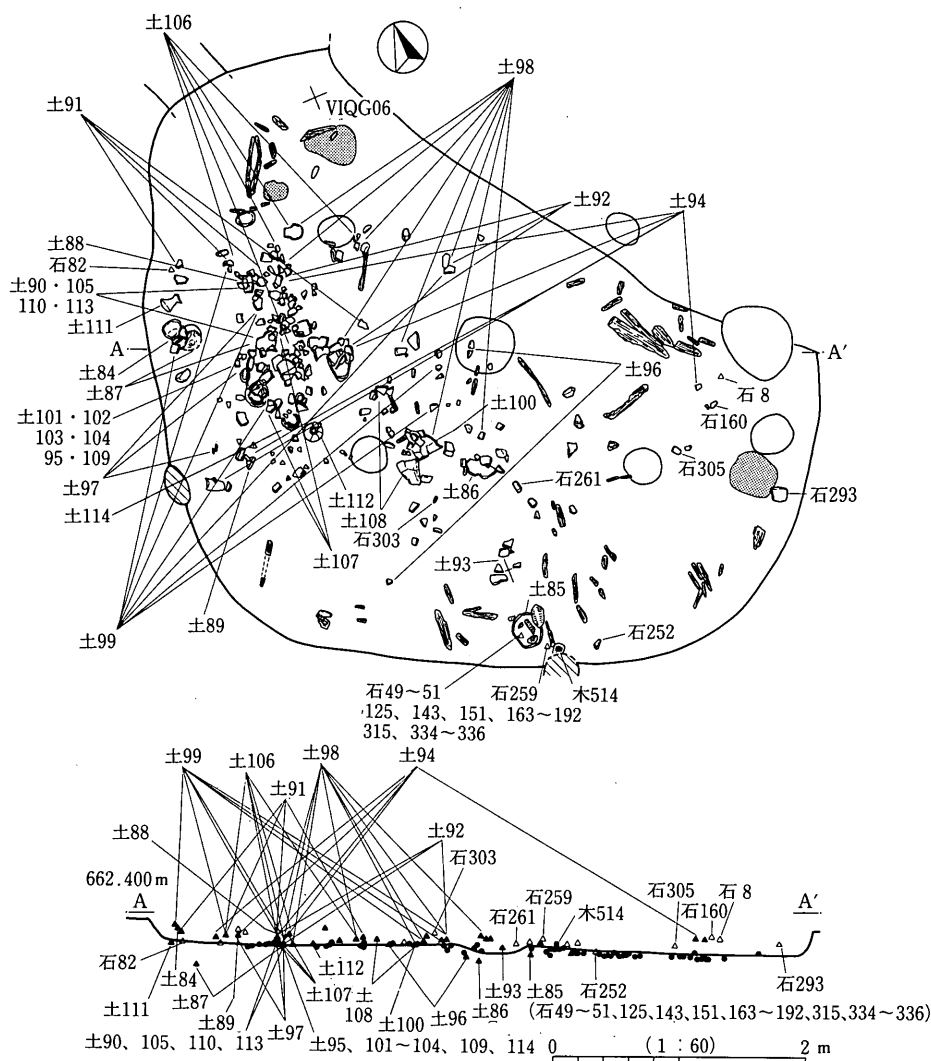
遺物はSB13重複部分に少ないが、東側で大形破片や略完形土器、北東壁際と北西壁際で扁平片刃石斧と未製品、中央西側と東壁際で大型蛤刃石斧が出土した。また、北西隅で台石と思われる平石が床直上で検出された。他に磨製石鏃未製品、砥石、石槌、黒曜石原石・石核、鹿角がある。

SB21 (第57・70図 PL17) III②区 VIQ16

微高地南部に位置し、他遺構との切り合いはない。平面形は隅丸不整形で主軸方位は $N4^{\circ}E$ 、規模は南北約4.0m、東西約3.8mである。埋土は上層に黒褐色土、下層に褐灰色土がある。壁は若干斜めで検出面から床面まで14cmほどである。床面は壁際を深く掘り込んで薄く均したもので軟弱である。床面上ではピット5基と炉跡が検出された。P1～4が主柱穴跡で、平面形は直径30～40cmの円形・楕円形を呈し、床面から30cmほど掘り込まれ、すべて中央に向かって斜めに傾斜する。P1内で直立した円礫と、大型土器破片が出土し、柱抜き取り後に入れられたと思われる。P5は入口施設と思われる。炉跡は中央南よりにあり、床面から10cmほど掘り窪められた地床炉で、底面からもろくなった土器片が出土した。遺物は弥生中期後半の土器と、大型蛤刃石斧、打製刃器、タタキ石、砥石などの石器が埋土中から散在的に出土した。

SB22 (第58・70図 PL17) III②区 VIQ07

微高地南部にあり、SD11、ST06、SK46・48・49、SB23に切られる。重複する囲溝址SD14は見逃して掘り壊したが、残存部から本跡を切ると確認できた。平面形は主軸方位 $N77^{\circ}W$ 、東西約5.4m、南北約4.8mの隅丸方形を呈する。埋土は1層褐灰色土、2層炭化物や細かい地山ブロック土を含む褐灰色土、南部の一部床面上に炭化物を大量に含む褐灰色土がある。炭化物は2層下部～3層に多く含まれ、土器は住居跡西側2層からの出土である。焼失住居跡で、床面は被熱を受けて赤化し、断片的ながら放射状に細かい炭化材が検出された。壁は若干斜めながら、床面との境は明瞭で、検出面から床面までの深さは約20cmほどである。床面は荒掘り後に浅く均したもので、全体的にやや軟弱である。床面上ではピット7基、地床炉1基が検出された。P1～3とSB23床下検出のP6が主柱穴跡とみられ、南北約1.8m、東西約2.3m



第58図 SB22遺物出土状況

間隔に長方形に並ぶ。何れも直径20cm強～30cm前後の平面円形で、床面から底面までは20cmほどである。P2は柱痕が確認できた。P4は入口施設と思われ、P7は小型の壺が正位で埋設されていた。P5は東壁近くにある西側が深くなる不整形ピットで、住居跡施設ではなく植物根痕の疑いがある。炉跡は床面から8cmほど掘り窪めた地床炉で、炭化物が多く出土した。

遺物は住居跡西側2層を中心に大型破片・略完形品の土器、打製石鏃・磨製石鏃未製品・扁平片刃石斧・小型砥石・置き砥石が出土している。特筆すべき遺物として南壁際の土器85内から黒曜石石核・石鏃未製品・剥片多数やみがき石が出土し、その脇から炭化した弓破片が出土した。

SB24 (第71図 PL17) III②区 VIQ02・03

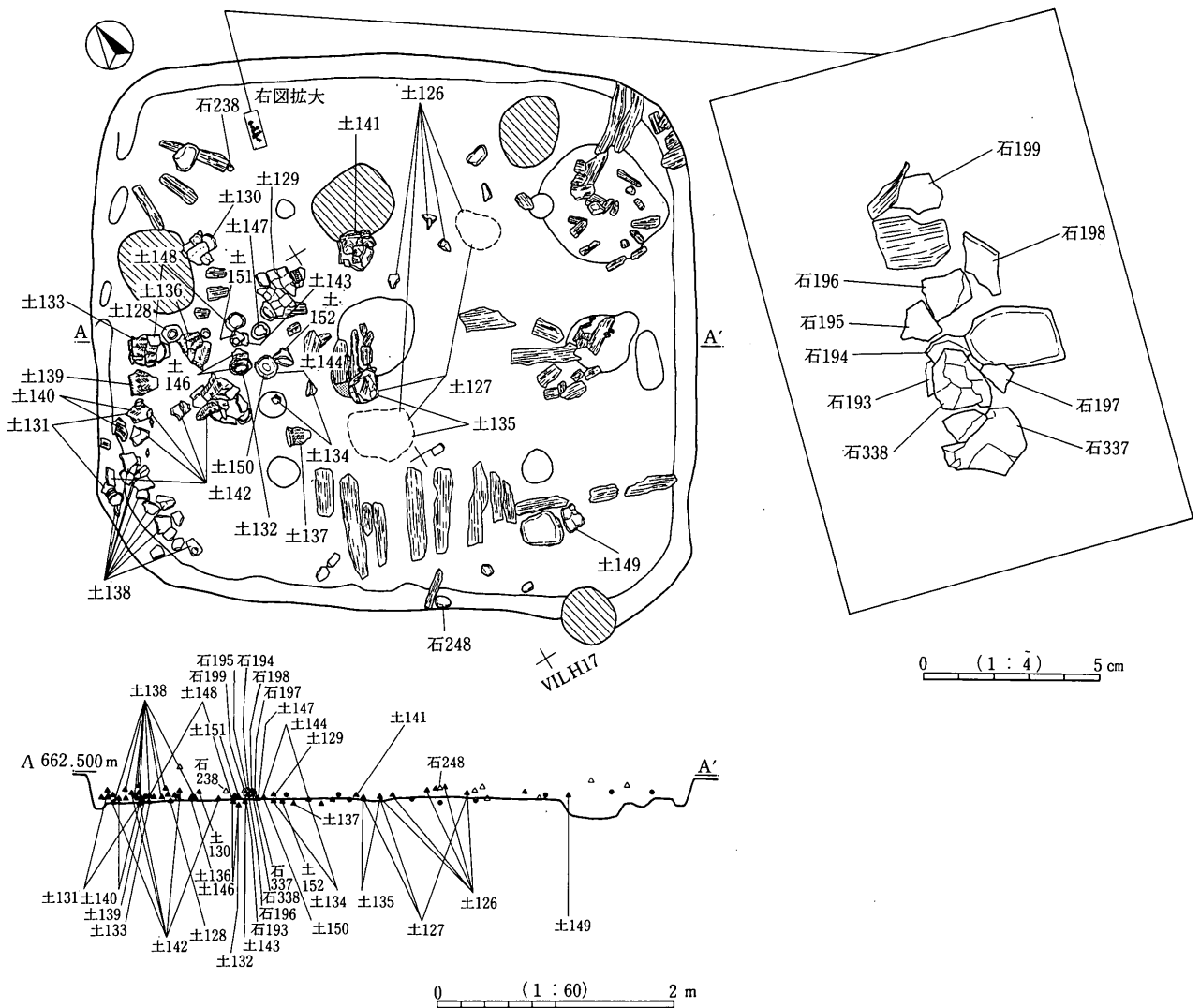
微高地南部に位置し、ST04のSK51、SK104・74、SB23に切られる。検出時は東半分が不明瞭だったが、トレンチを入れながら平面形を確定した。平面形は東西約4.9m、南北約4.6mのやや不整形な隅丸方形を呈し、主軸方位はN71°Wである。埋土は黒褐色土と暗褐色土に近い黒褐色土に分層され、黒味の強い上層はⅢ層起源の廃絶後の窪地流入土と思われる。壁は若干斜めに掘り込まれ、検出面から床面までの深さは約30cmを測る。床面は荒掘り後に浅く均したもので、支柱穴に囲まれた内側が比較的堅い。床面上ではピット6基と地床炉1基が検出された。支柱穴と思われるのはP1～4で、何れも直径30cmほどの円形平面形で床面から20～30cmほど掘り込まれる。P2・4で柱痕が確認され、P4底は平石が置かれていた。

P5は入口施設と思われる、住居壁側が若干斜めに掘り込まれる。南西壁際のP6では甕底部を出土したが、重複位置上部でも甕胴部・口縁部破片が出土しており、甕を埋設固定した施設と思われる。他のピットは配置関係から本跡と重なる掘立柱建物跡の柱穴跡の可能性が残る。炉跡は中央西よりに位置し、数cmほど掘り窪めた地床炉である。底面で焼土が確認された。

遺物はP6に重なって出土した略完形の甕があるが、多くは埋土中から散在的に土器破片や石鏃・UFなど黒曜石製小型石器が少量出土したのみである。

SB26 (第59・71図 PL17・18) Ⅲ②区 VIL17・18

微高地中央に位置し、ST02のSK32・33・34、SK57に切られる。東西約5.1m、南北約4.7mの隅丸方形の平面形で、主軸方位はN56°Wである。埋土は上部に黒褐色土、床面近くでは炭化物を多く含む黒褐色土と少量含む黒土が交互に入る。焼失住居跡と捉えられ、炭化材が床面から壁溝内、一部のピット内にも入り込んで検出され、南東部では南辺と直交方向に数本平行し、1本がそれと直交するように出土した。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、直下に壁溝がめぐる。壁溝は西辺が浅く断続的ながら、他はほぼ全周し、床面からの深さ4～5cmで、住居床面直上の炭化物を含む黒褐色土が入る。床面は検出面からの深さ約20cmを測り、荒掘り後に浅く均したもので比較的堅い。床面上ではピット9基、炉跡が検出された。配置関係からP4・6・8・9の4基が支柱穴跡とみられ、東西約2.2m、南北約2.2mのほぼ方形に位置する。



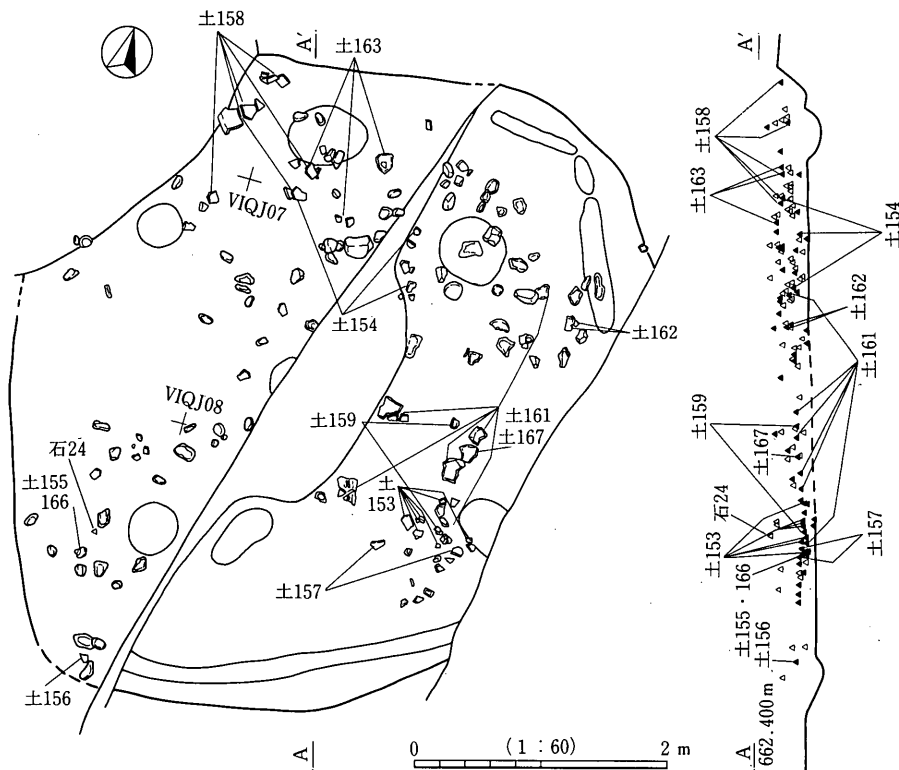
第59図 SB26遺物出土状況

何れも直径約20~30cm前後の円形で、底面までの深さは約30cm前後である。P3・5・7は浅いが、P7は重なる位置で壺が出土し、壺設置ピットの可能性がある。P1は位置的に入口施設と思われる。P2はP9を切るように位置する大きめの穴跡で性格不明である。埋土中から炭化材が出土し、住居跡廃絶時には開口していたとみられる。炉は住居跡中央に位置する直径60~70cmの不整形円の地床炉で、床面から10cmほど掘り窪められ、底面は凹凸が著しい。炭化物を大量に含み、焼土は検出されていない。

遺物は比較的多く出土した。略完形や完形土器は住居跡西辺南部に集中し、石鏃もこの周辺から出土している。石器は下呂石製石鏃が注目され、他に扁平片刃石斧、その未製品、太型蛤刃石斧、石錐、黒曜石製打製石鏃がある。また、住居跡北西部床直上で黒曜石剥片・石核が狭い範囲に集中する黒曜石集中が検出された。他に南東部で平石が1点出土している。

SB27 (第60・72図 PL18) III②・⑤区 VIQ08

微高地南部に位置し、III②・⑤区に分割調査した。中間は工事中測量杭があつて調査できず、東辺は埋設用水路で破壊される。平面形はやや不整形な隅丸方形を呈して南北約5.1m、東西約5.1mの規模と認められた。主軸方位はN22°Wである。埋土は4層に分けられ、1層黒褐色土、2層褐灰色土層を主体とし、北側の壁際に黒褐色土とやや暗褐色ぎみの黒褐色土層が入る。1層はIII層由来の廃絶後の窪地内流入土と考えられ、2層以下は地山シルト小ブロックを含むことから埋め土の可能性がある。また、埋土中には拳大の河川礫が散在的に含まれていた。壁は若干斜めで床面との境は明瞭で、III⑤区調査の東~南辺で浅い壁溝が検出されたが、III②区では見逃した可能性がある。床面は北边上端から約24cmの深さを測り、荒掘り後に浅く均したもので軟弱である。床面ではピット6基、炉跡1基が検出された。主柱穴は約2.5mほどの間隔で方形に配置されるP1・2・4・5と思われ、いずれも直径約30~40cmほどの平面円形で、深さは約30~40cmである。P3は北壁中央やや西よりにあつて入口施設と思われる。長軸60cm、短軸40cm強の楕円形平面形で、床面から10cmほど掘り込まれ、埋土は底面上と中位に炭化物を多く含む。P6は浅く細長く、本跡の施設とも断定できなかった。他に床下検出のピットP7があるが、別遺構の可能性がある。



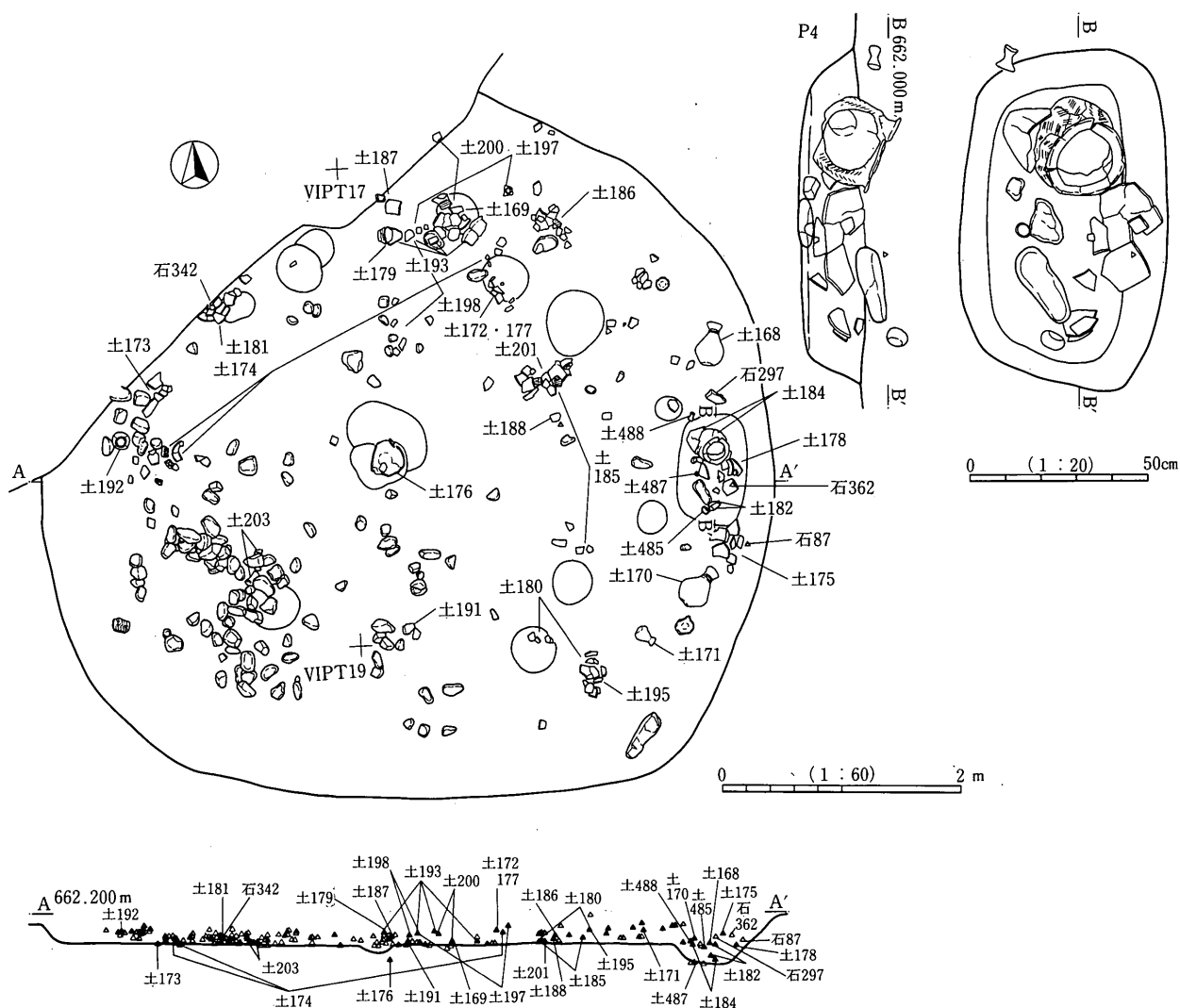
第60図 SB27遺物出土状況

る。炉跡は住居跡中央やや西よりにある地床炉で、III②区壁にかかって半分ほど調査できた。床面から数cmほど掘り窪められ、周囲と内部で炭化物が多く検出された。

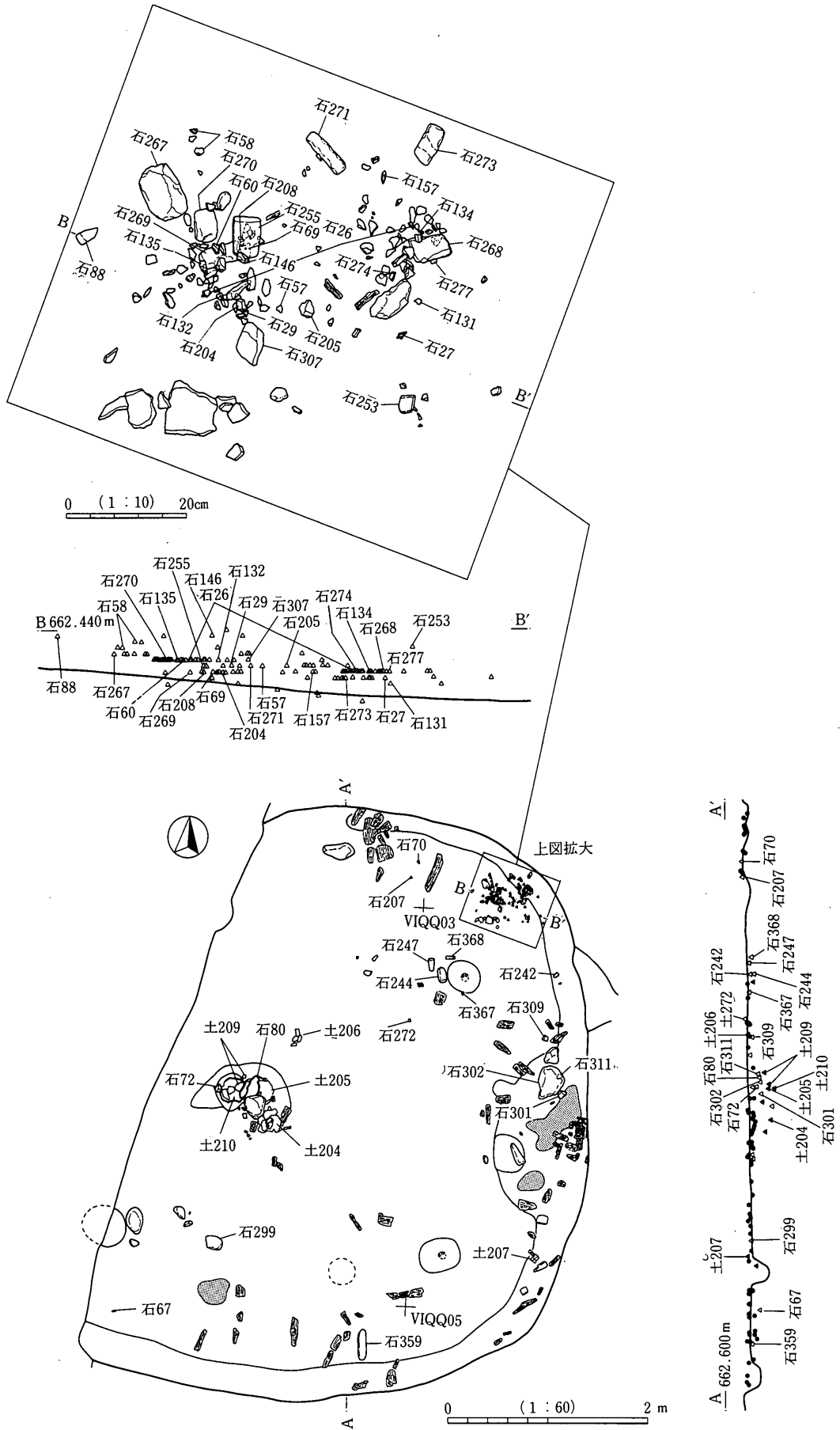
遺物は住居跡北半分の埋土中から多く出土し、略完形・完形土器はなく破片で出土した。石器は黒曜石原石、石核、打製石鏃、磨製石鏃未製品、打製石鏃未製品など小型石器が多い。

SB28 (第61・73図 PL18) III②区 VIP25・Q21

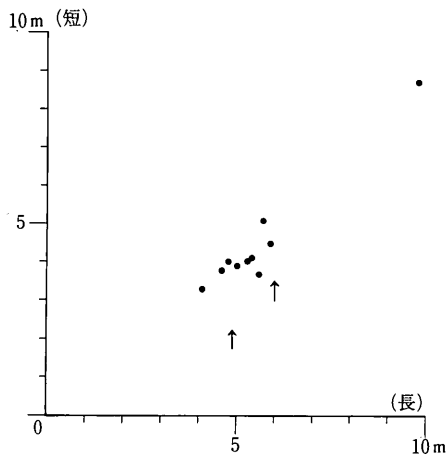
微高地南西部調査区壁際にあり、北西部は調査区外へ延びる。検出時に土器散布から住居跡の存在が想定できたが、平面形は不明瞭で試掘トレンチを入れながら確定した。他遺構との重複はないが、建替えされた可能性がある。平面形は主軸N3°W、東西約6.2m、南北約5.9mの隅丸方形である。埋土は上部から1層黒褐色土、北壁際に炭化物を少量含む2層黒褐色土層、床面上に3層褐灰色土があり、南西部埋土中で埋め戻しによると思われる部分的な砂利混じり土が検出された。壁は若干斜めながら床面との境は明瞭で、検出面から床までの深さは約20cmである。床面は荒掘り後に薄く均した貼り床で、掘り方調査で二重の浅い溝跡が確認できた。見逃した壁溝か、壁際が深くなった掘り方の痕跡と思われるが、二重に廻ることから拡張の可能性が窺えた。これは柱穴跡の重複とも関連すると思われる。床面上ではピット12基、炉跡が検出された。ピットはP1～7が床面上、P8～12は見逃した可能性もあるが、掘り方で検出した。P3・5～8・10・11が柱穴跡とみられ、P7・10・11、P5・8はそれぞれ近接して建て替えの関係と思



第61図 SB28遺物出土状況



第62図 SB31遺物出土状況



第63図 弥生後期住居跡規模グラフ

われる。P9・12はP4脇に並列し、両者ともに砂利を多く含む独特の埋土である。P1は位置がずれるが、柱穴跡と思われ、P2は浅いくぼみで施設とは断定できない。P4は東壁中央にある隅丸長方形の穴跡で略完形の甕、ミニチュア、管玉などが出土した。入口施設か貯蔵穴と思われるが、遺物の特殊性から何れとも断定できない。炉跡は住居跡中央にあり、埋土の観察から南側の埋甕炉が最初につくられ、それを埋め戻して北側に地床炉を作り替えている。地床炉自体も作り替えされた可能性がある。

出土遺物は多い。東～北壁付近で完形・略完形の土器が多く出土し、南西部は出土土器も少ないながらも双口の壺破片が出土した。石器は散在的に打製石鏃、磨製石鏃、砥石、石核、扁平片刃石斧未製品などが出土した。また、ミニチュア土器、双口壺、管

玉など特殊な遺物が多く出土した点は特筆される。

SB31 (第62・72図 PL19) Ⅲ④区 VIQ04・05・09・10

微高地中央に立地し、西側を埋設用水路で破壊されている。掘り方で検出されたP5は別遺構の可能性はあるが、他に切り合う遺構はない。平面形は南北約5.9m、東西5.0m以上の隅丸方形で、主軸方位はN88°Wである。埋土は全体的に暗褐色を呈する砂質の粘質土を基調とし、床面上に薄く炭化物を多く含む。本跡は焼失住居跡で、床面上では壁際を中心に細い炭化材が放射状に検出され、東辺中央付近と北辺付近の一部で炭化材が多く検出された。東辺では放射状と東辺に平行する炭化材が重なった状態で検出され、構築物的一部分と思われるが、構造は把握できなかった。

床面は荒掘り後に浅く均したもので、V層砂礫層が露呈した北側は砂礫が掘り残されてやや高い。また、炉周辺は比較的堅いがそれ以外は軟弱である。床面上では壁溝、ピット4基、入口施設、炉跡が検出された。壁溝は基盤の砂礫が高い北辺では判然としないが、青灰色のシルトを基盤とする南辺は比較的深く大きく掘り込まれている。支柱穴は南北約2.8m、東西約3.4mの長方形に配置されるP1・3・4が該当し、P1・3上部から柱材の一部と思われる直立した炭化材が見つかった。P2は東辺中央にある入口施設と思われる。南北1.6m、東西0.9mの半円形の浅い掘り込みを伴い、内部に柱穴状穴跡が1基ある。浅い掘り込み部分は上部に焼土が入りこみ、廃絶時には開口していたと思われるが、西縁柱穴状穴跡内には焼土が含まれていなかった。炉跡は住居跡中央にあり、壺胴下半部を正位に埋設した北側旧炉と甕胴部破片を敷きつめた北側新炉2基が重なって位置し、少し離れた南に壺を逆位に埋設した南側炉がある。3つの炉跡の南側は若干窪み、炉上部で人頭大の礫が出土した。北側旧炉は底付近に炭化物・焼土粒を少し含む土層、上部はブロック土を含む埋土で埋め戻されている。北側旧炉の西脇と北側新炉炉体土器北脇下から磨製石鏃がそれぞれ1点出土した。

遺物は炉体土器以外の土器は小片しかないが、石器は特徴的な出土状況が認められた。住居北東部では黒曜石剥片、石鏃未製品、扁平片刃石斧未製品、磨製石鏃、砥石破片が80×50cmほどの範囲に集中し、P1周辺でも太型蛤刃石斧2点、磨製石剣破片、研磨された粘板岩片が近接して出土した。さらに東辺中央のP2内や南部床面上で砥石や台石が出土している。

SB39 (第73図 PL19) Ⅳ②区 ⅧB01

微高地南部に位置する。Ⅳ②区西壁際で僅かに検出され、その西側は埋設用水で壊される。他遺構との重複はない。規模は南北約4.1m、東西は残存部で約1.1mを測り、残存部から平面形は隅丸方形で主軸方位は東辺からN69°Wと推測される。埋土は上層の黒褐色土1層と、床面直上の薄い2層灰黄褐色土層

に土質の似た暗灰黄色土と黄灰色土、床直上の壁際にやや暗めの黄灰色土がある。壁はほぼ垂直で、床面までの深さは24cmを測る。床は荒掘り後に薄く均したもので、中央付近が比較的堅い。床面上ではピット12基、炉跡が見つかった。ピット埋土は床土と類似して検出しにくかったが、形状からP1・8・11が柱穴跡で、P10・12も準ずると思われる。北東部の柱穴跡は確認できなかった。P6は入口施設と思われ、P9は土器底部が正位で出土したことから土器埋設施設と思われる。P5・7は浅く、施設ではない可能性がある。炉跡は住居西よりのP1・8中間にある。埋甕炉2基が重複し、西から東側へ作り替えられている。東側炉内には炉体土器と重なって二重に土器片が出土し、同一炉内で炉体土器を追加していると思われる。遺物は少なく、土器破片が少量埋土中から散在的に出土し、石器は打製刃器1点ある。

SB09 (第74図 PL20) Ⅲ②区 VI L09

微高地中央に位置し、Ⅲ②、⑤区に分割調査した。中央を試掘トレンチで壊され、西辺はSB08に切られ、本跡がSB03を切る。平面形は主軸方位N85°E、長軸5.3m、短軸約4.0mのやや不整形な隅丸長方形である。床面は検出面から深さ1～2cmの深さで、荒掘り後に薄く均して床面とし、全体的に軟弱である。床面上ではピット6基と炉跡が検出された。P4・5のみ床面から底面まで約20cmと深いが、他は深さ10cm程と浅く、P6から横倒し状態の完形甕が出土した。ピット配置に規則性は認めがたい。炉跡は住居跡西側に試掘トレンチにかかって検出され、甕を正位に埋設した埋甕炉である。遺物は少なく、炉体土器とP6出土土器以外は小片で、他に打製石鏃と磨製石鏃未製品、石核数点が出土した。

SB18 (第76図 PL20) Ⅲ②区 VI G14・19

微高地北部に位置し、SB17を切り、SD09に切られ、北側1／3程度は後代の深耕で削られている。埋土は壁際に褐灰色土が認められたが、大部分は黒褐色土が占める。平面形はほぼ方形を呈すると思われ、主軸方位N73°Wで、東西約4.1m、南北は残存部で3.3mを測る。壁は若干斜めに掘り込まれ、検出面から床面までは10cmを測る。床は荒掘り後に薄く均したもので、炉周辺からその東側は比較的堅く明瞭に捉えられた。この床面ではピット8基と炉跡が検出された。P2・7・8が主柱穴跡とみられ、北西部の柱穴跡は判然としないが、浅いながらもP1か9が該当すると思われる。P3は溝状ながら入口施設の可能性があるが、P4～6は浅く性格不明である。炉跡は中央西よりにあって甕を正位に埋設した埋甕炉である。炉周囲は床面より若干窪み、炉体土器周囲がドーナツ状に焼けて赤化していた。炉内の下部に炭化物を多く含む土が入り、上部は住居跡埋土に同じである。遺物は炉体土器と土器片少量、敲石がある。

SB19 (第64・75図 PL20) Ⅲ②区 VI Q02・03

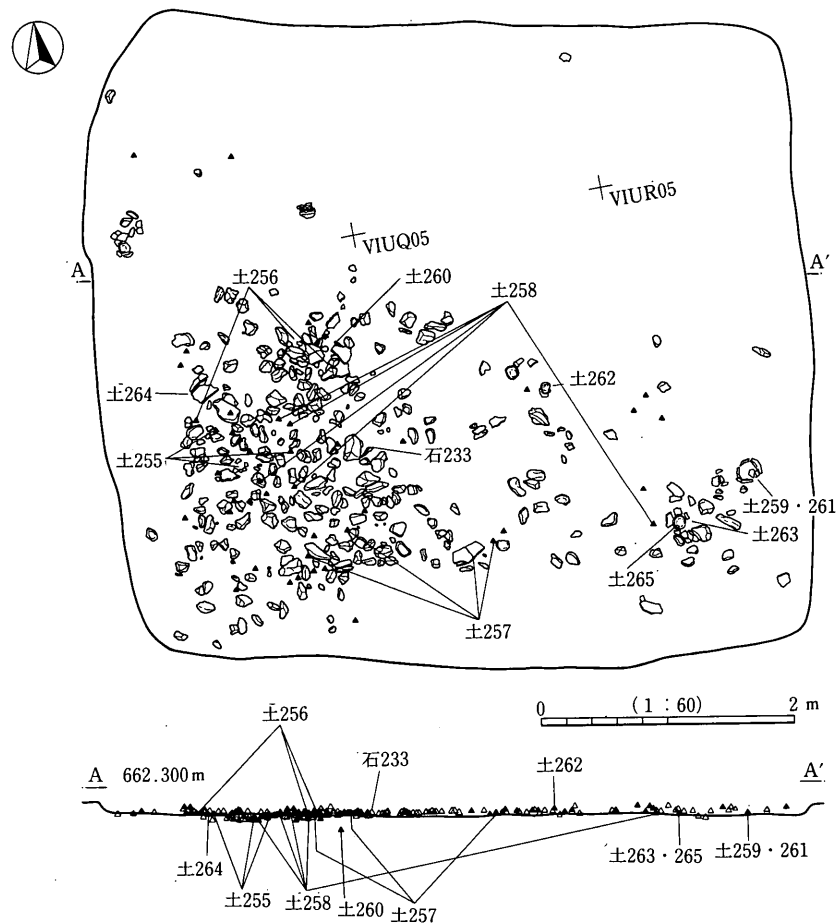
微高地の中央南よりに位置し、調査区西壁にかかって西半分が調査区外へのびる。調査は一旦検出した範囲を掘り下げ、後に西側を拡張した。他遺構との重複はないが、床面検出ピットには本跡を切る別遺構が含まれる可能性がある。確認範囲から平面形は隅丸方形を呈すると思われ、主軸方位はN8°E、規模は南北約6.0m、東西は調査域内で3.0mほどである。埋土は上部から1層褐灰色土、2層黒褐色土、壁際の地山シルトブロックを含む3層褐灰色土層に分層され、礫や土器は1層下部～2層にかけて多く出土した。壁は若干斜めで、検出面から床面までの深さは約18cmを測る。床面は荒掘り後に薄く均したもので、軟弱である。床面上ではピット10基を検出し、形状から柱穴跡と思われるものはP1～3、5、7～10の7基がある。ただし、P1は浅く柱穴跡とするには不安がある。これらのピットは壁際に方形に並ぶようにもみえ、本跡と重複する建物跡の可能性もある。P4・6は柱穴跡ではないが、性格は不明である。なお、P6のみは上面に遺物や礫が載っており、本跡の施設と断定しえた。また、住居跡の北壁周辺で壁溝が見つかったが、浅く連続しない。遺物は後期住居跡としては比較的多く、なかでも土器壺破片や砥石が多く出土した。

SB20 (第75図 PL20) Ⅲ②区 VI Q11

微高地南部に位置する。調査区西壁にかかり、大部分は調査区外へ延びる。検出範囲で一旦調査し、西側を拡張追加調査した。他遺構との切り合いはないが、南側上部がコンクリート壁埋設で破壊される。平面形は隅丸方形を呈すると思われ、主軸方位はN16° E、規模は南北約4.9m、東西は調査区内で1.7mを測る。埋土は上部に1層の黒褐色土、中位に2層の褐灰色土、床面上の壁際に黒褐色土が入る。壁はほぼ垂直で、床面までの深さは検出面から約22cmを測る。床面は荒掘り後に薄く地山土を均したもので、中央周辺が堅い。床面上ではピット4基が検出された。P3・4が主柱穴跡とみられ、いずれも直径40cm強の円形・楕円形を呈し、床面から30cm強ほど掘り込まれる。P3では柱痕が確認できた。P1は入口施設と思われ、P2はやや上部が開く不整形ピットで、内部施設かどうか判然としない。遺物は埋土中から土器片少量と、磨製石鏃製作に関わる剥片・未製品が出土した。磨製石鏃製作に関わる剥片はP1内でも出土しており、本跡使用時でも磨製石鏃が製作されていた可能性がある。

SB23 (第75図 PL20) III②区 VIQ07・08

微高地南部に位置し、試掘トレンチで一部破壊した。本跡がSB22・24・27を切る。平面形は主軸方位N40° W、長軸約5.9m、短軸約4.5mの隅のやや丸い不整形な長方形を呈する。埋土は上層に黒褐色土、下層にやや暗褐色に近い黒褐色土があり、上層は基本土層Ⅲ層黒褐色土に由来する窪地流入土と思われる。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、検出面から床面までの深さは約22cmを測る。床面は荒掘り後に薄く均したもので、主柱穴で囲まれた範囲内が比較的堅い。床面上ではピット7基、炉跡1基が検出された。P1・4・7の3基が主柱穴跡と思われ、長軸約3.0m、短軸約2.2mの長方形に配置する。北東部柱穴跡は試掘トレンチで破壊して不明である。東壁付近のP3は試掘トレンチで一部破壊して全容は不明だが、位置的に



第65図 SB34遺物出土状況

入口施設とみられる。他のP2・5・6は性格不明で、いずれも浅く施設と断じ得ない。炉跡は住居西側に位置する埋甕炉で、中央に炉体土器を設置し、その外側にも大型破片が認められた。作り替えられた可能性がある。炉跡西側に薄く炭化物が散布していた。遺物は非常に少なく、土器は埋土中央東よりで大型破片が出土したが、他は少片が散在的に出土した。石器は磨製石鏃と下呂石磨製石鏃未製品がある。

SB25 (第77図 PL21) Ⅲ②区 VIL08・13

微高地中央北よりに位置し、ST01柱穴跡SK13・14・17、SK75に切られる。平面形は長軸約4.8m、短軸約4.0mのかなり不整形な長方形を呈し、主軸方位はN87°Eである。埋土は西側最上面に部分的な黒褐色土1層、地山の灰色シルトブロックと黒褐色土の混在層2層があるが、主体は地山土小ブロックを少量含む黒褐色土3層で、下層は黒褐色土層となる。1～3層は埋め土の可能性ある。壁はほぼ垂直ながら下端は緩やかに床面に続く。床面は荒掘り後に薄く均したもので軟弱であり、検出面からの深さは約17cmを測る。床面上でピット13基と炉跡を検出した。P1・6は壁に近いが、P1・6・7・12が支柱穴と思われる、西辺約2.5m、東辺約2.3m、北辺約2.8m、南辺約3.0m間隔で配置される。他のピットは円形の平面形ながら、浅いタライ状で性格不明である。炉跡は西側にあり、甕を逆位に設置した埋甕炉である。出土遺物は非常に少なく、散在的に破片が出土したのみである。

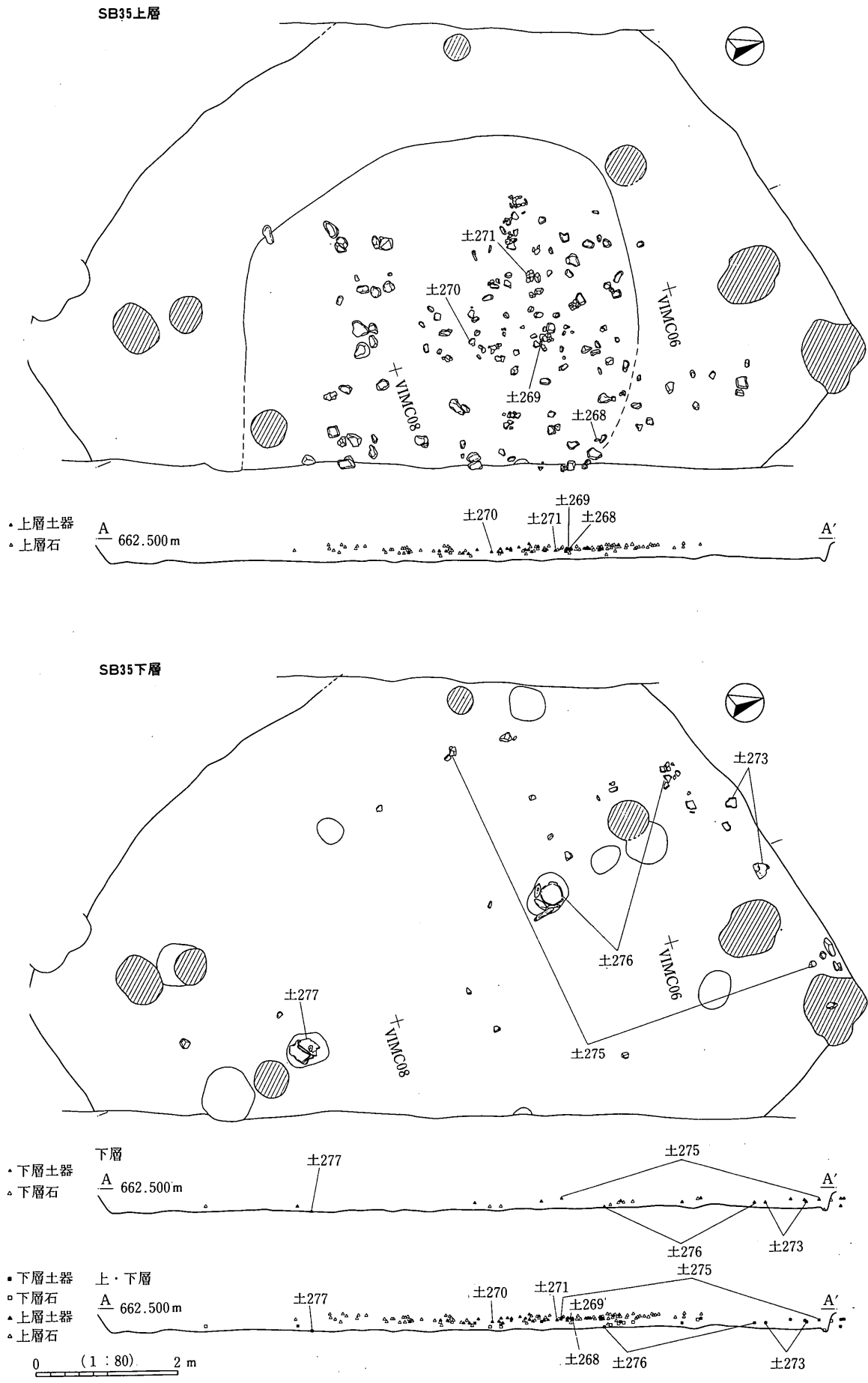
SB34 (第65・77図 PL21) Ⅳ①区 VIU04

微高地南部に位置し、重複遺構はない。平面形は長軸5.7m、短軸5.1mのやや不整形な長方形を呈し、主軸方位はN82°Wである。埋土は黒褐色土の単層で南半分に多量の礫が検出され、埋め戻されている可能性が窺えた。床面は荒掘り後に薄く均したもので、検出面からの深さは5～10cm、上面でピット4基と炉跡を検出した。P1～4が支柱跡とみられ、西辺約2.8m、東辺約2.7m、北辺約3.8m、南辺約3.7m間隔に配置される。各ピットは直径40～50cmの円形平面形で、底面までの深さは約20cmほどである。炉跡は西側支柱穴中間に位置し、長軸90cm、短軸70cmの楕円形の掘り方内に甕を埋設した埋甕炉で、東側に同一個体破片3片が重ねられていた。炉跡内では炭化物があまり顕著に認められていない。出土遺物は当該期住居跡のなかでは比較的多く採取され、特に礫が多く検出された南部から出土した。石器は石鏃がある。

SB35 (第66・76図 PL21) Ⅲ④区 VIL10、M06・11

微高地北部にある。北西部は埋設用水で破壊され、南東部は調査区外へ延び、南東部がSB36、北部はST12のP1・4、SK201・203～206に切られる。当初は黒褐色土の円形の落ち込みと認められ、下部にトレンチを入れたところ、北壁の立ち上がりで炉2基が確認されたことから住居跡と認定した。2基の炉検出から2軒の住居跡の重複とも考えたが、検出できた北辺に対して炉跡が直交方向で並ぶこと、住居跡内のトレンチ土層観察でも切り合いが認められず、床面に断差がないことから1軒の大型住居跡と結論した。埋土は最上部に当初窪地と捉えたⅢ層起源の黒褐色土があり、その下には褐灰色土層、床面上に薄くやや黒い土層がある。1層は廃絶後の窪地に入った流入土で、2・3層は住居廃絶後の堆積土か埋め戻し土と捉えた。遺物は1層から多く出土しているが、1層を上層、2層以下を下層として別々に取り上げた。

平面形は南北約9.8m、東西約8.7mの長方形を呈し、主軸方位はN28°Wである。床面は部分的に堅いが全体的に軟弱で、地山の青灰色シルトを薄く均して床とする。床面上ではピット8基、炉跡2基を検出した。ピット8基は南北2間、東西2間の長方形に配列し、北辺中央のP2と南辺中央のP6がやや外側に張り出す。柱穴跡は南北辺3.1m前後間隔で全長約6.2m、東西は2.3～2.5m間隔で約4.8mを測る。なお、P1はP2と北炉跡の間にあり、形状は柱穴跡に類するが性格は不明である。炉跡は南北に2基並び、北炉は南辺に石を配する埋甕炉で、炉体土器内や周囲に焼土や炭化物が認められた。南炉は浅く掘り窪めた中に壺の胴部破片を敷き、住居内側となる北側へむかってやや傾斜する。炉体土器上面に炭化物を多く含む土があり、その上は地山土ブロックを含む土で埋められていた。2基の炉は形態や廃絶の仕方が



第66図 SB35遺物出土状況

異なる。

遺物は1層中で礫と共に破片が多数出土したものの、下層は住居跡の北半分で土器片が散在的に出土した。石器は下層で磨製石鏃未製品、砥石が出土した。なお、上層出土土器はS字甕、有段口縁壺など弥生後期末頃の土器である。

SB37・38 (第78図 PL22) Ⅳ②区 ⅧB06

微高地南端に位置する。調査ではSB38が37を切る2軒の住居跡の重複とされたが、1軒の可能性もあるのでまとめて扱う。SB37は南北辺約3.7m、東西方向は調査区内で約4.6mほどである。平面形は長方形とみられ、主軸方位はN73°Wである。壁は若干斜めで床面との境の屈曲は明瞭で、検出面から床面までの深さは約10cmほどである。床面は荒掘り後に薄く均したもので、全体的に軟弱である。床面上ではピットP4～8の5基が検出され、南壁にそってP4・7・8がほぼ直線的に並び、若干内側にP5、反対側の北辺にP6が位置する。いずれも浅く柱穴跡とは考えにくい。

SB38はSB37南に隣接し、北部が重複する。平面形は南北に長い不整長方形で、規模は長軸約5.4m、短軸は調査範囲内で約4.1mを測り、主軸方位はN20°Eである。埋土は上部に黒褐色土、下層に暗褐色土があり、礫が大量に含まれていた。埋め戻しされている可能性がある。壁は若干斜めで床面との境は不明瞭で、検出面から床面の深さは約12cmである。床面はSB37同様に軟弱である。床面上ではP1～3のピット3基、炉跡が検出された。P1と2は柱穴跡と思われ、炉跡は埋甕炉である。土器は北側に半分ほど残存する。炉南東縁上で礫が検出されたが、縁石の残存か判然としない。遺物は下層から床面にかけて散在的に出土し、その量は少ない。

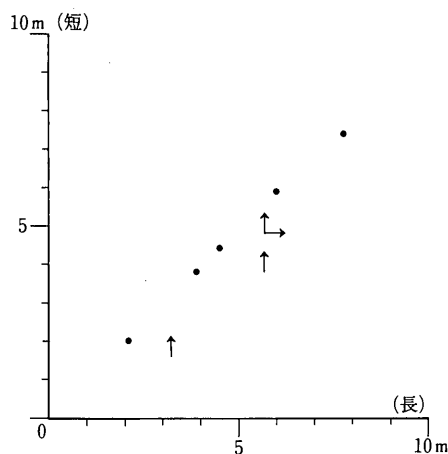
調査時、SB37・38の2軒の切り合いと判断された根拠は両住居跡を横断するトレンチ土層の観察結果と、床面の段差による。しかし、SB38とされた重複部分は西側のSB30延長先に合致し、この重複部分を住居跡の切り合いと誤認した疑いがある。しかも炉跡が1基しかない点も1軒の可能性を支持する。1軒の住居跡とすると、主軸方位N20°E、長軸約6.3m、短軸は確認範囲内で約4.6m以上の規模で、主柱穴はP1・2で、P6は入口施設に該当しようか。ただ、切られるSB37部分が深いとする所見があり、一軒とも断じ得ずにそのまま報告する。遺物は埋甕炉の土器、石器は石鏃、磨製石鏃原石、扁平片刃石斧破片がある。

SB41 (第78図 PL22) Ⅲ⑤区 ⅦL14・19

微高地中央に位置し、中央部をSD01が切り、東側半分は埋設用水路で破壊される。Ⅲ②区に僅かにかかるが主体はⅢ⑤区で調査した。南北約4.5m、東西は残存部で2.6mほどで、主軸方位はN80°W、残存部から東西方向に長い隅丸長方形の平面形と推測される。埋土は暗褐色土を主体とし、壁際に地山シルトブロックを含む褐色土が入る。壁はやや斜めで、検出面から床面までの深さは約10cm程度である。床は荒掘り後に均したもので、平坦ながら中央南側はV層砂礫の頭が露呈する。床面上では柱穴跡3基と炉跡が検出された。P1・2が主柱穴とみられ、P3は本跡を切る柱穴跡の可能性が残る。炉跡はP1・2中間に位置し、壺を逆位に埋設した埋甕炉である。焼土は炉跡西側にかけて薄く認められたが、上面がSD01に削られて僅かに残存する。遺物は少なく、少量の土器片や石鏃が出土した。

古墳後期の住居跡

古墳後期の住居跡は微高地域北部に分布し、その南には掘立柱建物跡が並ぶ。住居跡は8軒だが、他に竪穴遺構と報告した遺構がいくつかある。平面形は方形を基調とし、1辺3m前後の小型(SB33・42?)、4.0～4.5m前後の中型(SB04・08)、5.8～6.0m前後の大型(SB10・13)、8.0m前後の特大型(SB01)に区分できる(第67図)。弥生時代より規模格差は大きい。SB36は規模が不明ながら、大型以上のグループに



第67図 古墳後期住居跡規模グラフ

帰属するだろうか。内部施設はカマド、柱穴、壁溝、貯蔵穴、性格不明の埋設穴跡、間仕切溝がある。カマドはSB04・10・13・33・42の5軒で確認され、SB01もカマドが存在した可能性がある。これを加えると6軒となる。何れも住居跡の西辺中央に構築された粘土カマドで、SB04では細長い自然礫の支脚が検出された。また、SB10・13・33のカマド袖内に焼土ブロックを含み、補修や作り直された可能性がある。壁溝はSB04・10・36などで確認され、SB13にも部分的に存在した可能性が窺えた。柱穴跡は4本を基本とし、柱材はSB10で出土した。また、SB08・10は2基ずつ柱跡が近接しており、建て替えが想定される。貯蔵穴は判然としないものがあるが、SB10・13・33ではカマド脇に位置する。このほかに大型住居跡には壁際に一定間隔にブロック土を含む埋土の穴跡が検出されている。数基が重複したり、上面に床が貼られるなど住居廃絶以前に埋め戻されている。この穴跡は壁際にそって並ぶことから住居跡上屋を支える柱穴跡とも考えたが、主柱穴跡よりも大きく、全ての辺に均等に配置されないことから柱穴跡とは考えがたい。間仕切り溝と思われる施設はSB36で検出された。中央に東西方向の溝跡、直交方向に数本の溝跡を配し、SB13でも床下検出ながら類似した溝状施設がみついている。なお、この古墳後期住居跡は床面下の掘り方が深いものが多い。また、SB04は焼失住居跡で、SB10は埋土中に炭化物・焼土ブロックを多く含むものの、炭化材の出土が認められず焼失住居跡とは断定できなかった。

SB01 (第79図 PL23) III②区 VIG23・24、L03・04

微高地北部にある。本跡東辺外側に平行する柱穴列が検出されたが、重複する掘立柱建物跡か本跡の施設か不明である。また、南東隅に調査時SK04とした穴跡は本跡の内部施設と捉え、P13に変更した。平面形は南北約7.8m、東西約7.4mの方形を呈し、主軸方位はN72°Wである。遺存不良で検出時には床面が露呈し、埋土は東側周辺に僅かに残存するのみであった。埋土は褐色土の単層である。床は貼り床で、一部堅い部分が残存する。床面上ではピット13基、壁溝が検出された。柱穴跡と思われるものはP1～3、5～11の10基で、その内主柱穴跡と思われるのはP1・3、近接するP8・9、P10・11である。ただし、これらのピットは壁際に寄っており、認定に不安がある。これ以外のP5～9は西壁に沿って一定間隔で並び、これらは重複する掘立柱建物跡の柱穴跡とも考えられるが、埋土がほとんど残存しないために本跡と重複する別遺構かどうかはわからなかった。他に浅い楕円形のP4やP12がある。また、P13は掘り方を切って構築され、埋め戻された後に貼り床されている。内部から比較的多くの土器が出土したが、遺物はSK04として整理を進めてしまったため別に掲載している。カマドの有無は判然としないが、検出時西壁中央に僅かながら焼土の散布が認められ、西壁にカマドがあった可能性がある。また、壁溝は住居跡の南東部周辺で検出されたが、他は削平されて不明である。

遺物は比較的多いが、ほとんどピット内出土である。古墳後期土師器が出土している。

SB04 (第68・78図 PL23) III②区 VIG05・H01

微高地の最北端に位置し、SK09・98が本跡を切り、南東部が攪乱で一部壊される。平面形は南北約3.9m、東西約3.8mの方形で、主軸方位はN71°Wである。埋土は黄灰色土ブロックを含むにぶい黄褐色土を主体とし、床直上に炭化材を含む黒褐色土がある。焼失住居跡と思われ、中央床面上には小材ながら北西-南東方向に並列する炭化材が出土した。壁はほぼ垂直で、検出面から床面まで最大20cmを測る。床面は南側をやや深く荒掘りした貼り床で、中央部が強くしまる。掘り方北東部で土器破片が多く出土したが、

埋め戻しピットを見逃した可能性もある。床面上では柱穴跡4基、入口施設と思われる穴跡1基、壁溝、カマドが検出された。P1～4が主柱穴跡と思われ、直径約30～40cmの円形で、南北1.8～1.9、東西2.0～2.1mの間隔でほぼ方形に並ぶ。P2・4で柱痕が確認された。P5が入口施設と思われ、長軸80cm、短軸60cmの楕円形の掘り込み中央に柱穴状の穴跡2基が重なる。壁溝は北辺から東辺の一部を除いて南辺まで巡り、幅は10～20cm前後で深さは8cmほどである。カマドは西辺中央にある粘土カマドで、貼り床後に構築されている。天井部は壊れて袖のみが残り、火床には細長い円礫が支脚として埋設されていた。

出土遺物は少なく、土器はカマド内や周辺から大型破片が出土した以外は小片が散在していた。また、東壁際で長楕円形の円礫が数個まとまって出土した。コモ網石と思われるが、数が少なく断定できない。

SB08 (第68・79図 PL23) III②区 VIL09

微高地中央にあり、SB09を切る。平面形は東西約4.5m、南北約4.4mの方形を呈し、主軸方位はN12°Eである。埋土は上層に1層黒褐色土、下層に2層黒褐色土、西壁近くに部分的な明黄褐色土ブロック土が入る。1・2層は酸化鉄集積で分層されたもので同一層と思われる。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、床面までの深さは約16cmを測る。床面は貼り床ながら軟弱で、ピットは6基検出された。方形に並ぶP4～7の4基が主柱穴跡とみられ、床面から30cm前後掘り込まれている。P5～7はそれぞれ2基重複する。P1～3は住居跡隅の壁際にあつて、いずれも浅いが、埋土中や周辺で土器が多く出土した。このなかでP7をP2が切っている。カマドは検出されなかった。土器はP1・2周辺で多く出土し、他に滑石模造品、白玉、敲石、磨石、混入と思われる磨製石鏃、打製石鏃が出土した。

SB10 (第68・80図 PL23) III②・⑤区 VIL14

微高地中央に位置する。III②区で南西隅を検出したが、大部分はIII⑤区で調査した。東半分は埋設用水で破壊され、規模は南北約5.7m、東西は残存部で約3.8mを測る。平面形は主軸方位N36°Eのほぼ方形と推測される。埋土は床上に炭化物を多く含む土層、中に炭化物や焼土粒をあまり含まない土層、上部には炭化物や焼土粒・地山シルトブロックを多く含む土層や炭化物を縞状に薄く含む土層がある。炭化物が多く含まれるが、炭化材は検出されなかった。壁はほぼ垂直で検出面から床面までの深さ約20cmを測る。床面は貼り床で中央部が堅く、北側にV層砂礫層が露呈して北側が若干高い。床面上でピット6基、壁溝、カマドが検出された。P1・3が主柱穴跡と思われ、それぞれ2基ずつ重複し、P1の南側柱穴跡から柱材が出土した。北側の古い柱穴跡はP2に切られる。P2・5は重複した穴跡で、何れもブロック土や砂礫を含み埋め戻しされたと思われる。P2がP5を切ると捉えられたが、P2自体が掘り直されている可能性がある。P6は位置的に貯蔵穴と思われるが、浅く断定できない。壁溝は南辺が明瞭ながら、北辺は判然としない。カマドは西辺中央に位置する粘土カマドで、袖内側が赤化してカマド内は天井部の崩落土が入るが、火床はあまり赤化していない。袖内にも焼土・炭化物が混じることから作り替えか補修されたと思われる。本跡では柱穴跡の重複から建て替えが想定されるが、それと関連しようか。カマド内からは土器が多く出土したが、埋土中では破片が散在的に出土したのみである。

SB13 (第80・81図 PL23) III②区 VIG19・20・24・25

微高地北部にあり、SB17を切る。検出時に床面やカマドが露呈し、一部は掘り方しか残存していなかった。SB17重複部分の範囲認定に不安は残るが、南北約5.9m、東西約6.0mの方形の平面形と思われ、主軸方位はN69°Wである。床面は部分的な残存ながら堅く、床面でカマド、柱穴跡、性格不明の穴跡が検出された。このうち、P12～16は見逃して本跡が切るSB17調査中に検出したもので、配置や出土土器、埋土の特徴から本跡の施設と認定した。主柱穴跡は1辺約2.6m間隔に方形に配置されるP6～9の4基と思われる。いずれも直径40cm前後で床面から40～60cm前後の深さである。P16は掘り方調査中に検出されたが、本跡の施設か判然としない。P1～3、10・12～15は壁際に配置される長軸120cm・短軸90

cm～長軸60cm・短軸40cm前後の円形の穴跡で、何れも地山土ブロックを含み、住居跡使用中に埋め戻されたとみられる。類似施設は南辺際には認められなかったが、各隅と北・東辺では規則的に配列する。P4・5も類似形状で、P5上面には貼り床が確認されたが、支柱穴跡と重複して住居跡中央よりに位置するなど壁際のものと同様相が異なる。P11は埋土に焼土を多く含む浅い穴跡だが性格は不明である。また、P4は2基の穴跡が重複し、P9との前後関係は見逃した。カマドは西辺中央にあり、左袖部は検出時にも確認できたが、右袖は判然としない。右袖は廃絶時に破壊された可能性がある。カマド袖にかかった下から炭化物や灰を多く含むP17が検出された。カマドの構造は削り残した地山を基礎とした粘土カマドで、P17は支脚埋設穴の可能性もあるが、やや大きめで断定はできない。なお、掘り方で西壁北部と南東部に溝状落ち込みが検出され、壁溝や間仕切り溝を見逃した可能性がある。

出土遺物はピット内と掘り方から出土し、床面出土の遺物はない。P6・8・9・11・16からは遺物が出土せず、P3・7・12・13・14・17・19は200g以下、P1・2・4・5・10・15が400g以上で、なかでもP1・2から多量の土器が出土した。このなかでP1とP2、P2とP3、P1とP15出土土器が接合している。石器は砥石、磨石、他にSB17の混入と思われる打製石鏃未製品、黒曜石石核も出土した。

SB33 (第68・81図 PL23) Ⅲ④区 VIM16

微高地域中央北のⅢ④区東壁際にあり、大部分は調査区外へ延びる。検出面で床面が露呈し、カマドの焼土ブロックや方形に巡る壁溝が断片的に検出できた。規模は南北約3.2m、東西は調査区内で1.2mを測る。主軸方位はN7°Eで、平面形は残存部から方形と思われる。床面は貼床ながら僅かに残存するのみで、床面上ではカマド、ピット2基、壁溝が検出された。カマド脇のピットは貯蔵穴と思われ、カマド東側の小ピットは本跡を切る可能性がある。壁溝は断面U字形で、カマドより南側は連続するが、北側は断片的にしか残存しない。カマドは上面が耕作で削平されるが、残存部から粘土カマドとみられる。その一部の粘土ブロックはカマド脇ピット内にも入っており、カマド袖は廃絶時に壊れている可能性がある。遺物はカマド前周辺で甕片が多く出土した以外は、破片が散在的に出土した。

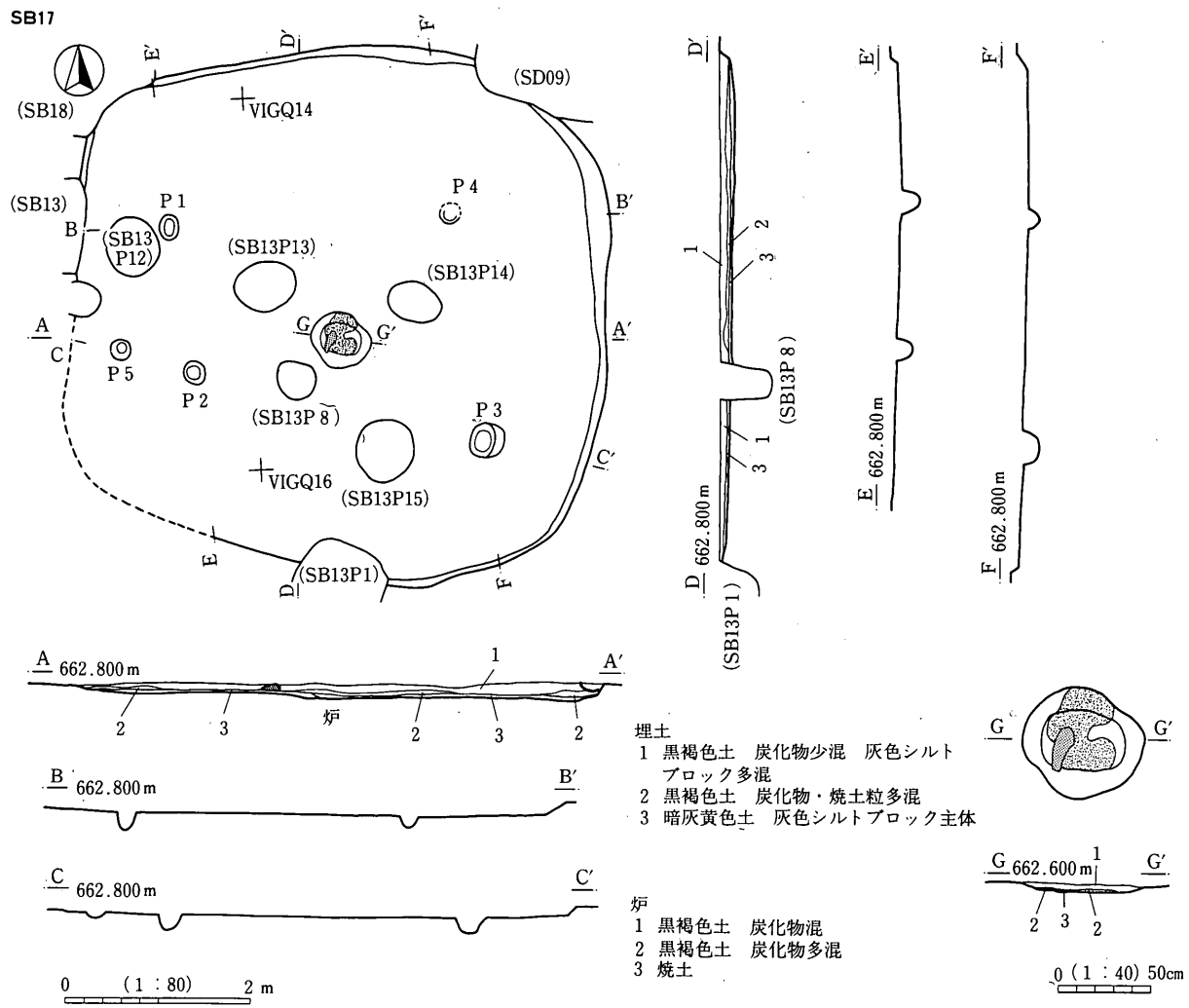
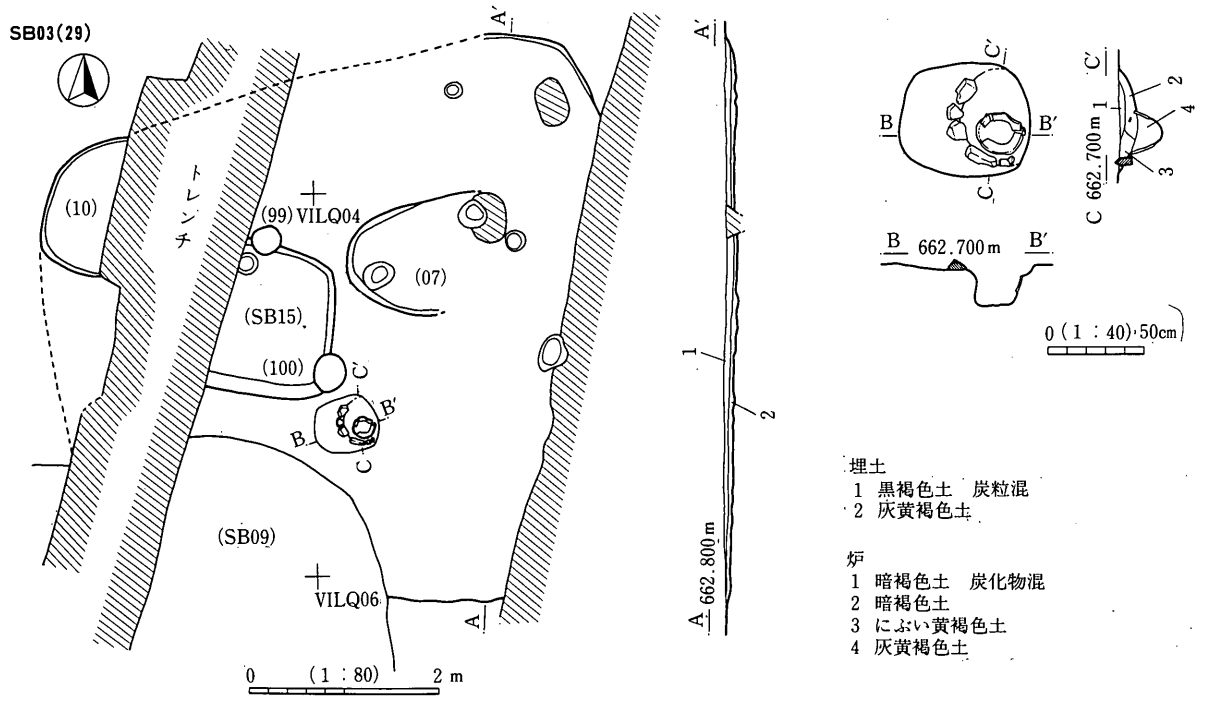
SB36 (第81図 PL24) Ⅲ④区 VII10、M06・11

微高地北部の調査区壁際に検出され、東側は調査区へ延び、SB35を切って南辺はほぼ重なるように位置する。検出面ですでに掘り方が露呈し、北側と西側は攪乱と耕作で削平されて残存せず、住居南側の掘り方や壁溝のみが残る。確認範囲の規模は東西約5.7m以上、南北約4.8m以上であるが、確実な南辺と柱穴跡の配置から推測すると、本来の規模は1辺約6.0m前後と推測される。主軸方位はN32°Wで、他の当該期住居跡とはやや異なる。床面自体が削平されて帰属関係は判然としないが、壁溝、ピット、間仕切り溝若干が検出された。ピットは全部で9基あり、P1・2・3・9が柱穴跡、8も浅いながら柱穴跡の可能性もある。全体的に南側の穴跡が深く、北側が浅い傾向をもつ。なお、P9底から腐った礎板残片と思われる薄い板材が見つかった。P4・5・6は壁際にあり、いずれも地山シルトブロックを多く含む埋土である。P6・5は間仕切り溝を切るように見受けられ、住居使用時に構築し、埋め戻されたと思われる。また、P7は掘り方検出の小ピットだが、本跡の所産か判然としない。床の掘り方は南辺側の壁際に深く掘り込まれ、中央は浅い。間仕切り溝と捉えたものは5本あり、住居中央を北西-南東方向に配置されるものと、南辺と直交方向で西側2本、東側2本重複する短いものがある。これらの溝内埋土は地山のシルトブロックを含む埋め土である。

遺物はピット内と床下掘り方出土の土器破片のみがある。石器は石核や磨製石鏃未製品が出土しているが、本跡を切るSB35からの混入とみられる。

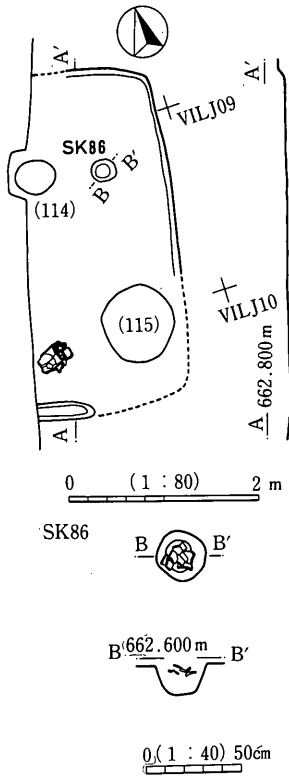
SB42 (第81図 PL24) Ⅲ⑤区 VIG25

東側は埋設用水で破壊され、住居跡北西隅のみの残存である。他遺構との切り合いはない。平面形は残

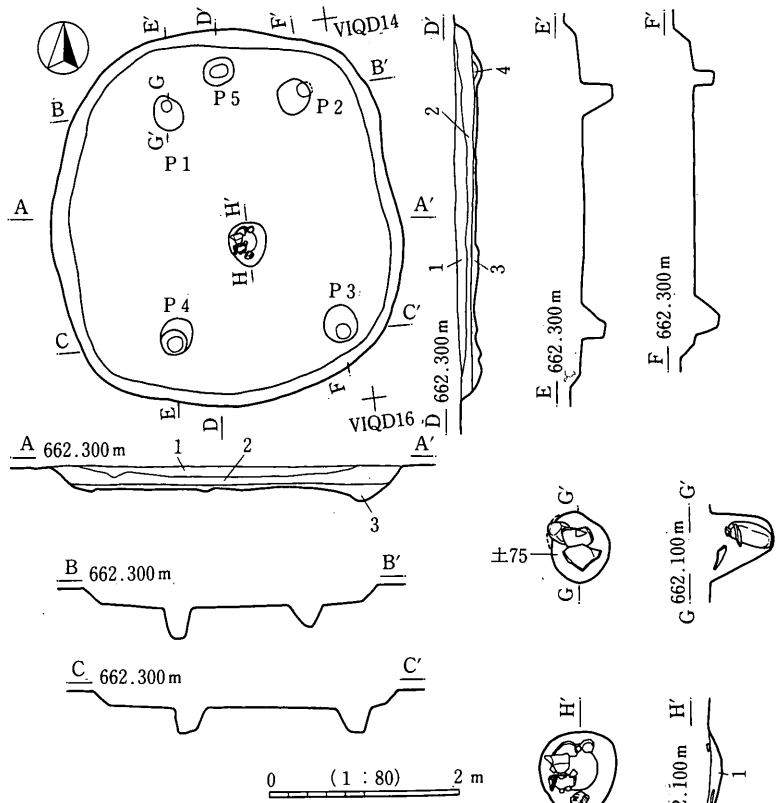


第69図 SB03 (29)、17

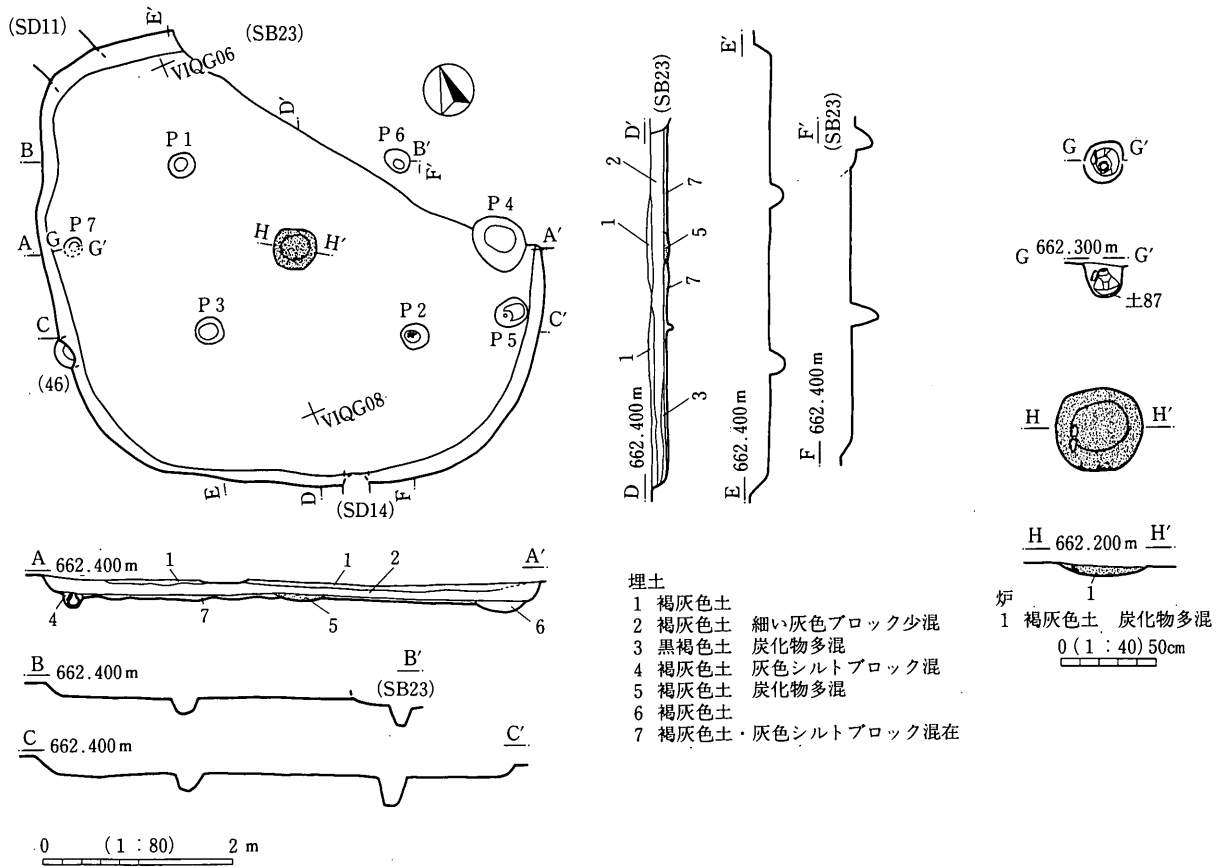
SB16



SB21



SB22



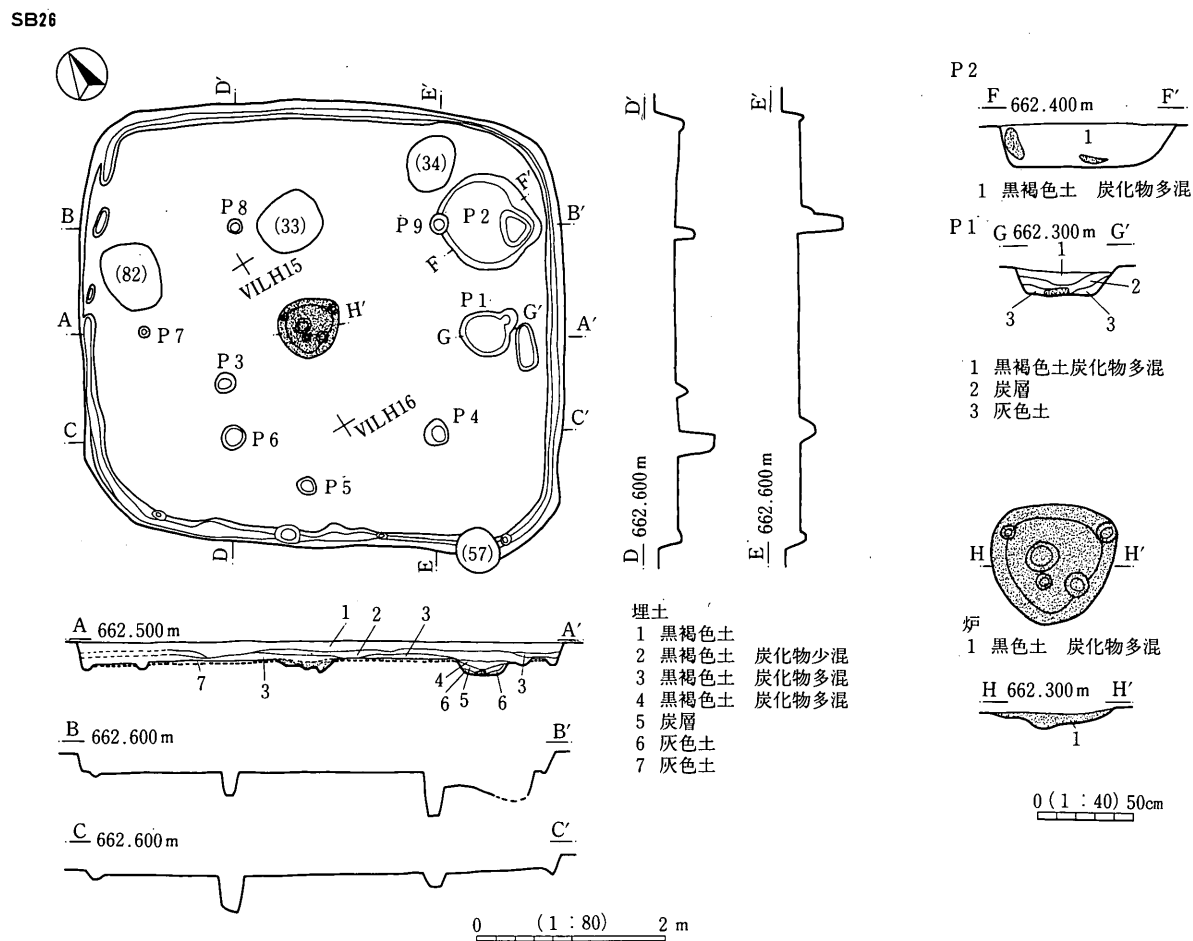
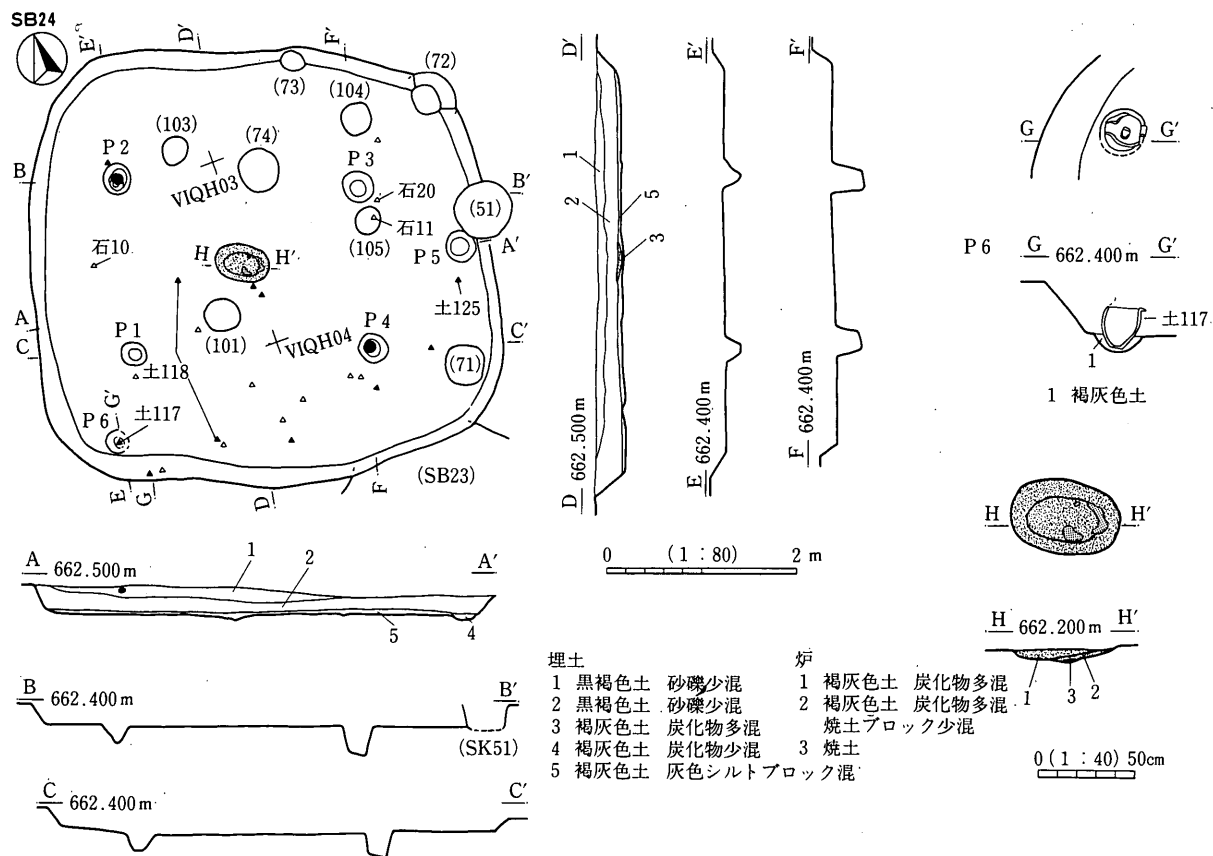
- 埋土
- 1 黒褐色土 炭化物少混
 - 2 褐灰色土 炭化物少混
 - 3 灰黄色土 黒褐色土・灰色シルトブロック混
 - 4 黒褐色土

- 炉
- 1 黒褐色土 炭化物混

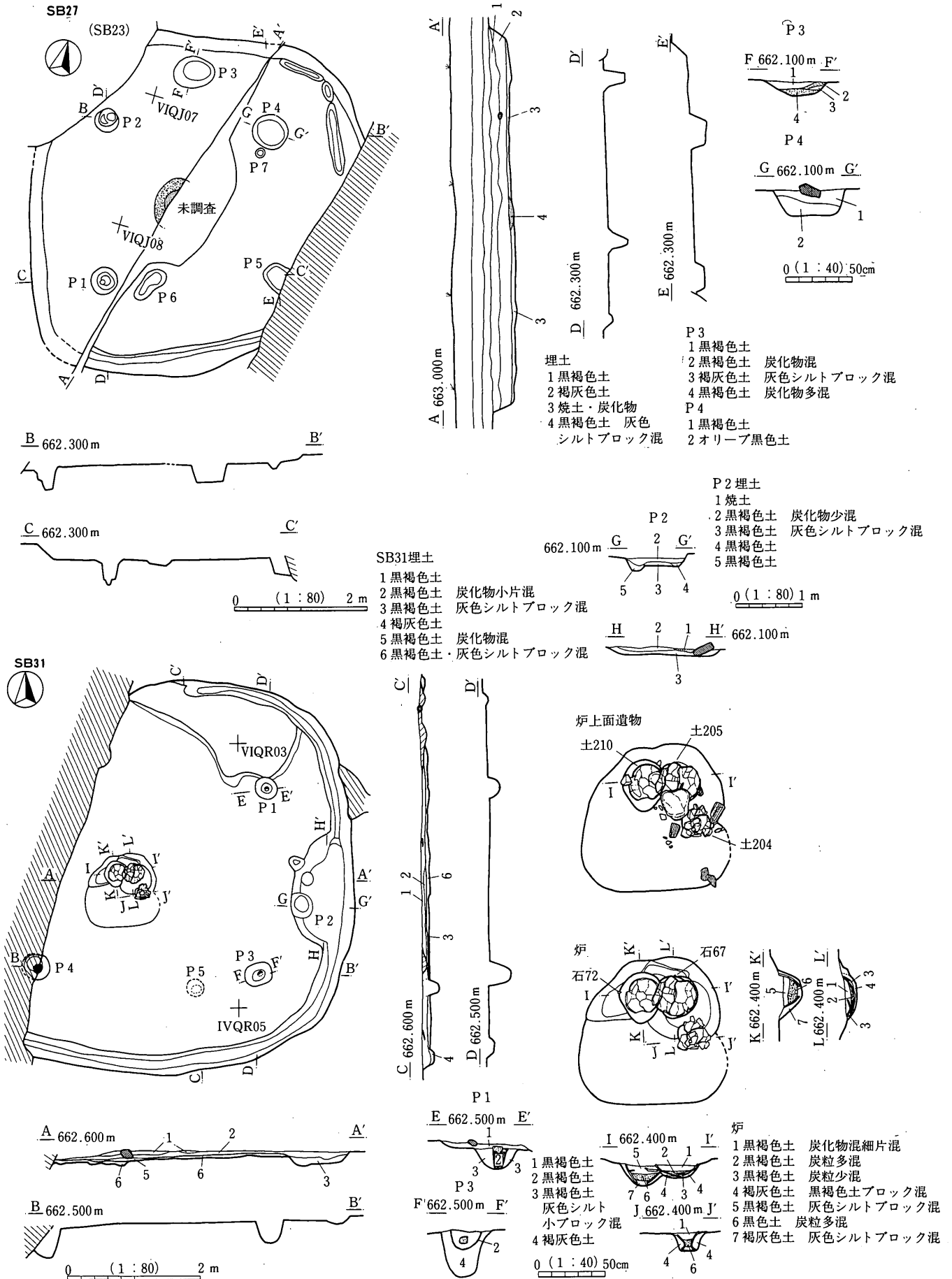
- 埋土
- 1 褐灰色土
 - 2 褐灰色土 細い灰色ブロック少混
 - 3 黒褐色土 炭化物多混
 - 4 褐灰色土 灰色シルトブロック混
 - 5 褐灰色土 炭化物多混
 - 6 褐灰色土
 - 7 褐灰色土・灰色シルトブロック混在

- 炉
- 1 褐灰色土 炭化物多混

第70図 SB16、21、22

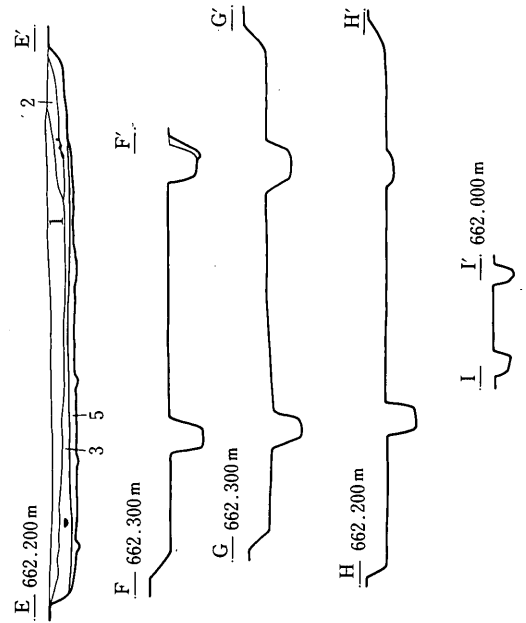
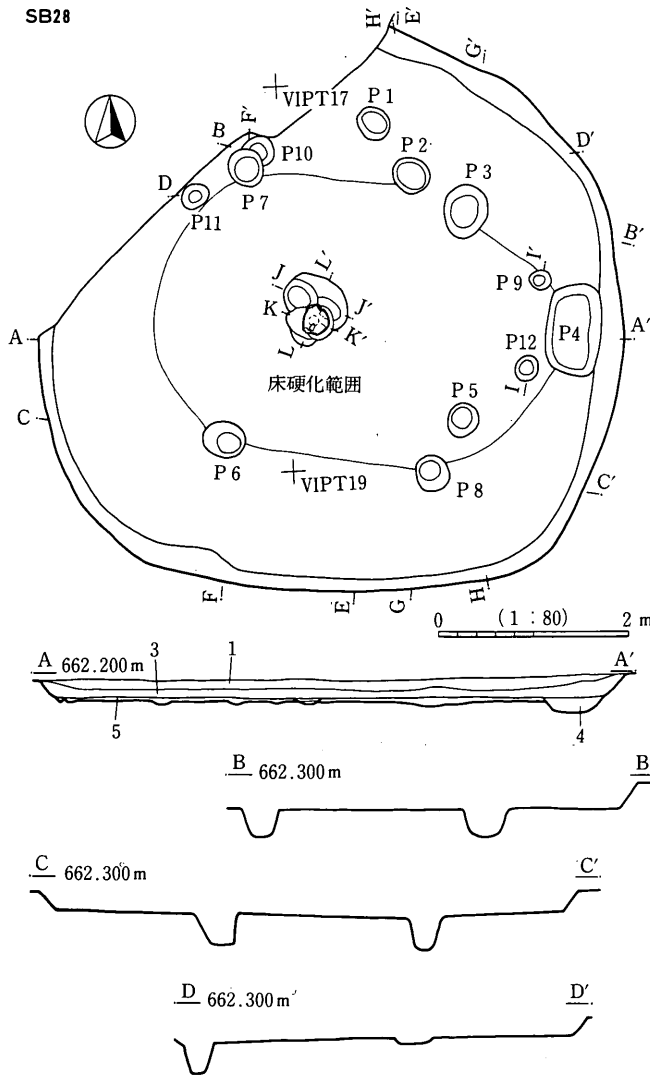


第71図 SB24、26



第72図 SB27、31

SB28

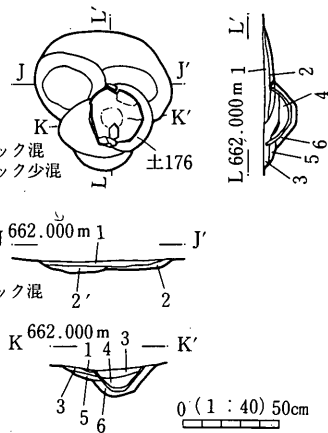


埋土

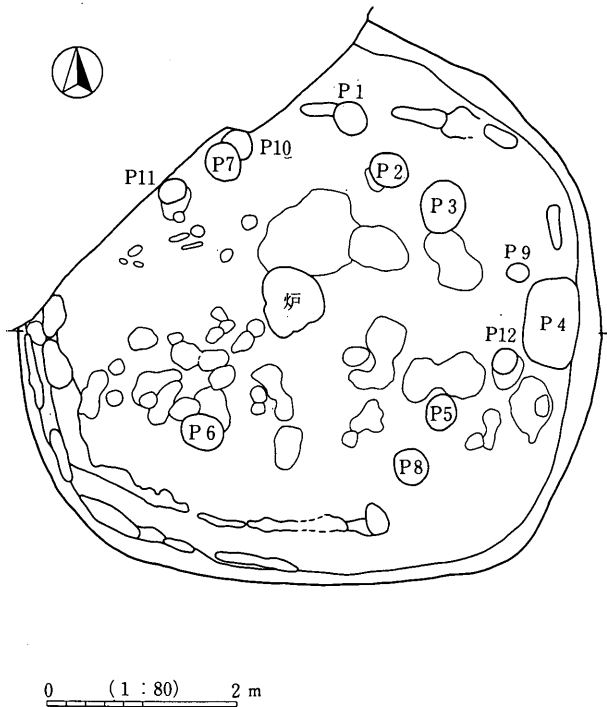
- 1 黒褐色土 炭化物少混
- 2 黒色土 炭化物少混
- 3 褐灰色土 黒褐色土小ブロック混
- 4 褐灰色土 灰色シルトブロック少混
- 5 黄灰色土

炉

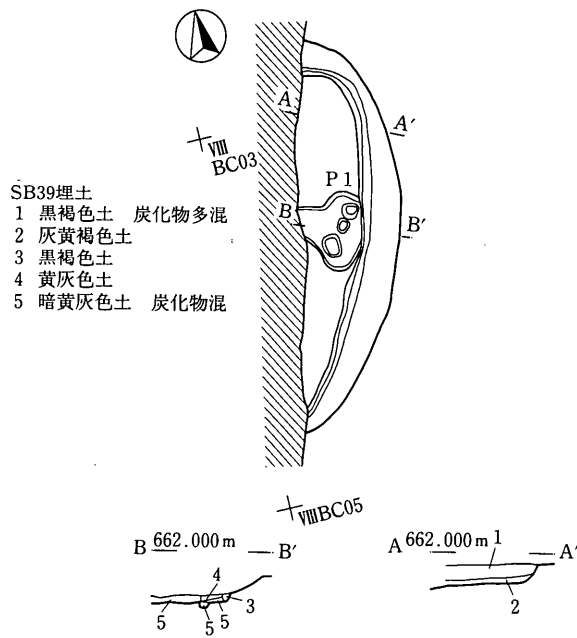
- 1 黒色土 炭少混
- 2 黒色土 炭化物多混
- 2' 同上、灰多混
- 3 灰黄色土 灰色シルトブロック混
- 4 黒色土 灰・炭化物多混
- 5 黒色土 炭化物多混
- 6 黒褐色土



SD28掘方



SB39

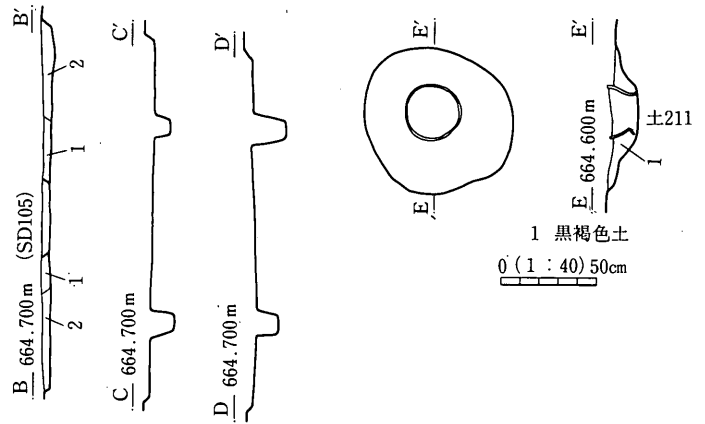
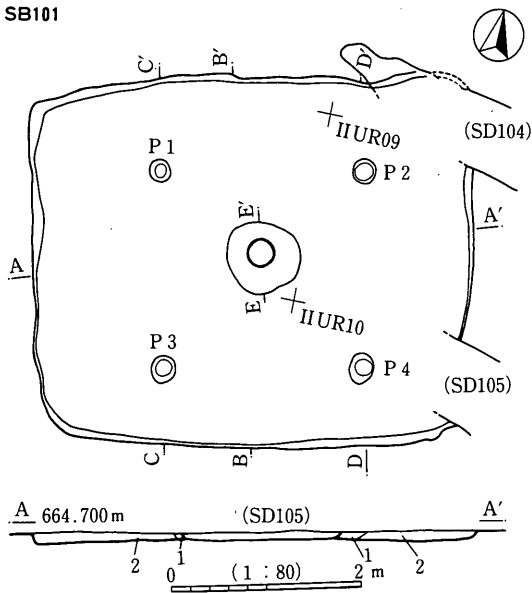


SB39埋土

- 1 黒褐色土 炭化物多混
- 2 灰黄褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 黄灰色土
- 5 暗黄灰色土 炭化物混

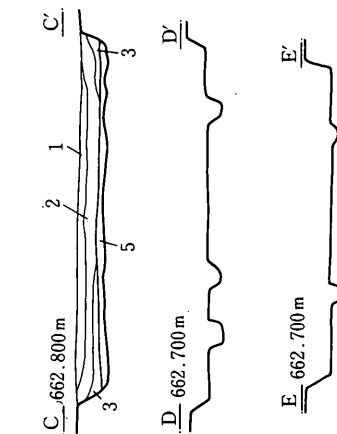
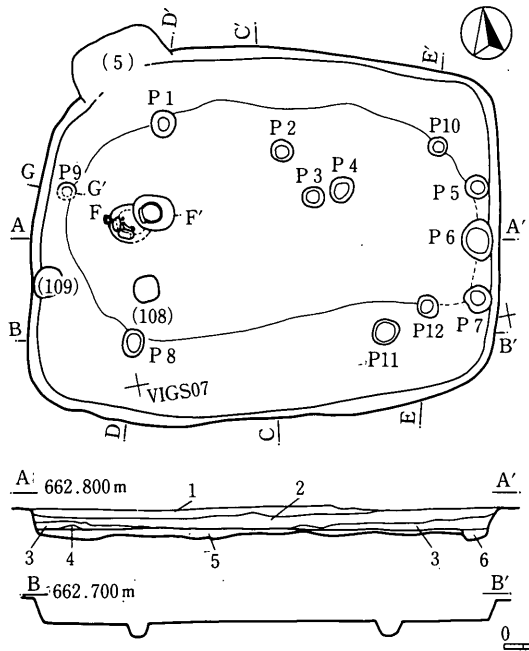
第73図 SB28、39

SB101



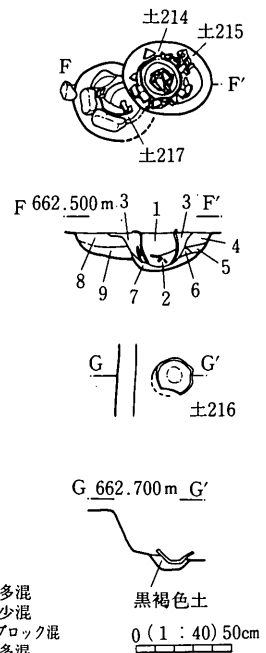
埋土
1 黒褐色土 小礫混
2 黒褐色土 小礫混炭化物少混

SB07

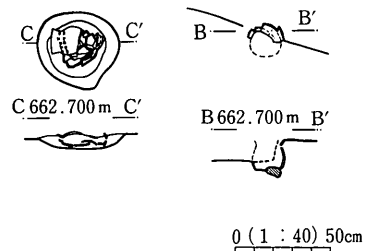
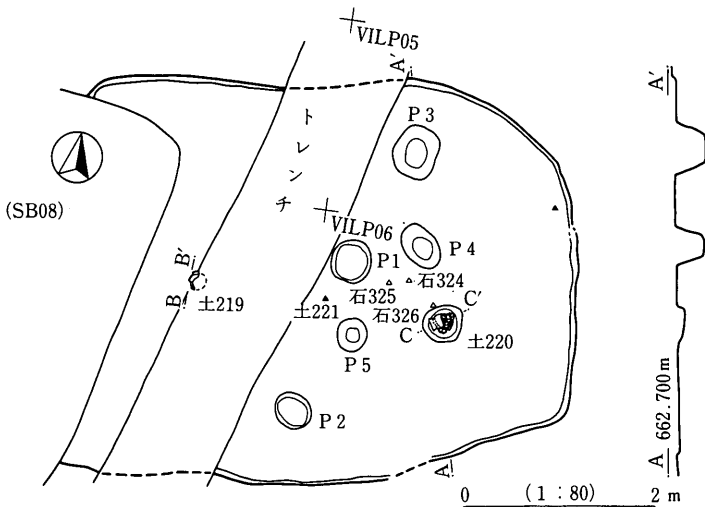


埋土
1 暗灰黄色土
2 褐灰色土
3 褐灰色土 炭化物少混
4 褐灰色土 炭化物多混
5 褐灰色土 灰色シルトブロック混
6 黒褐色土

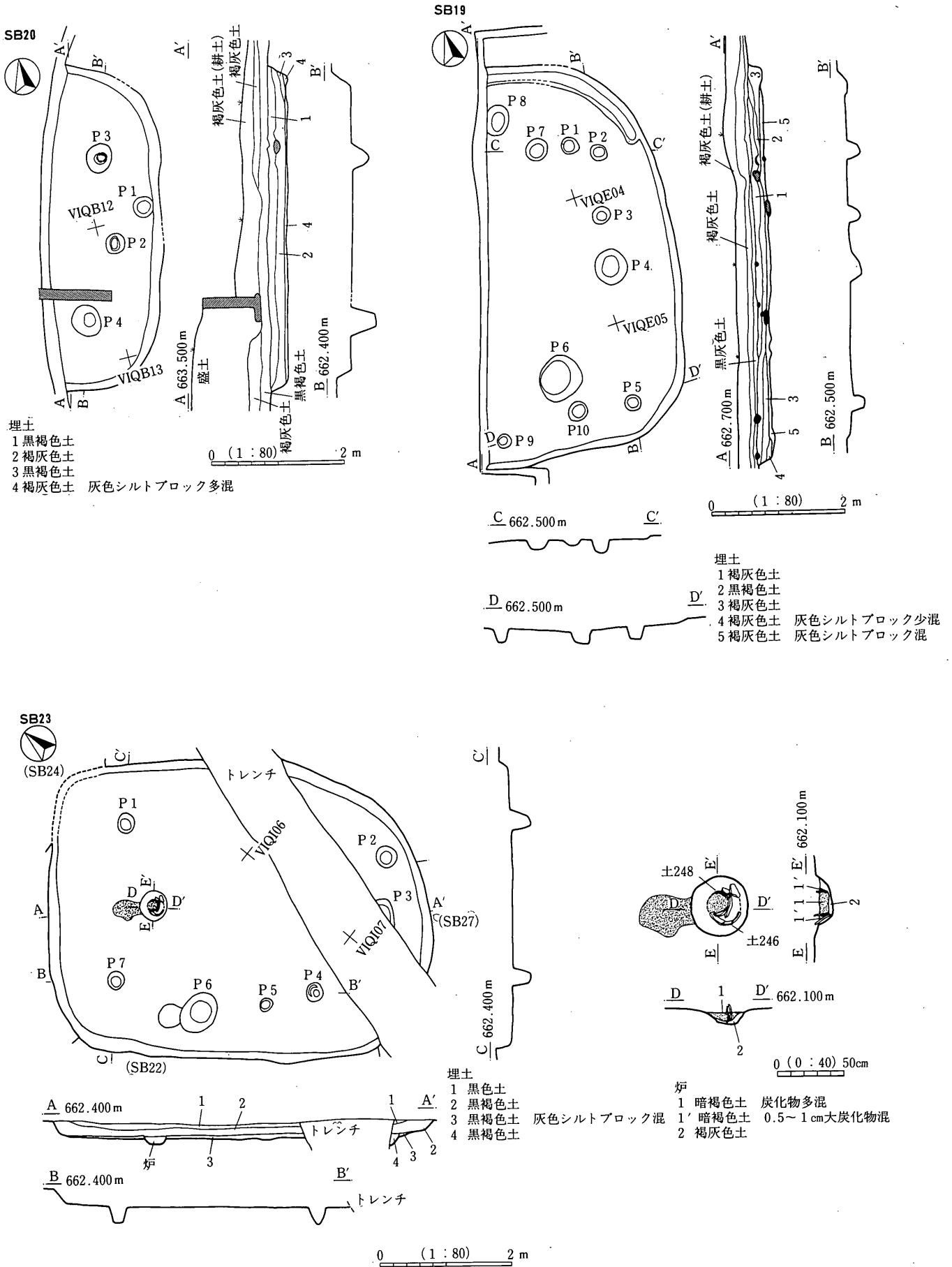
炉
1 黒褐色土
2 黒褐色土 炭化物多混
3 黒褐色土 炭化物少混
4 褐灰色土 灰色シルトブロック混
5 黒褐色土 炭化物多混
6 黒褐色土 炭化物・焼土ブロック混
7 灰白色土
8 褐灰色土
9 黒色土 炭化物多混



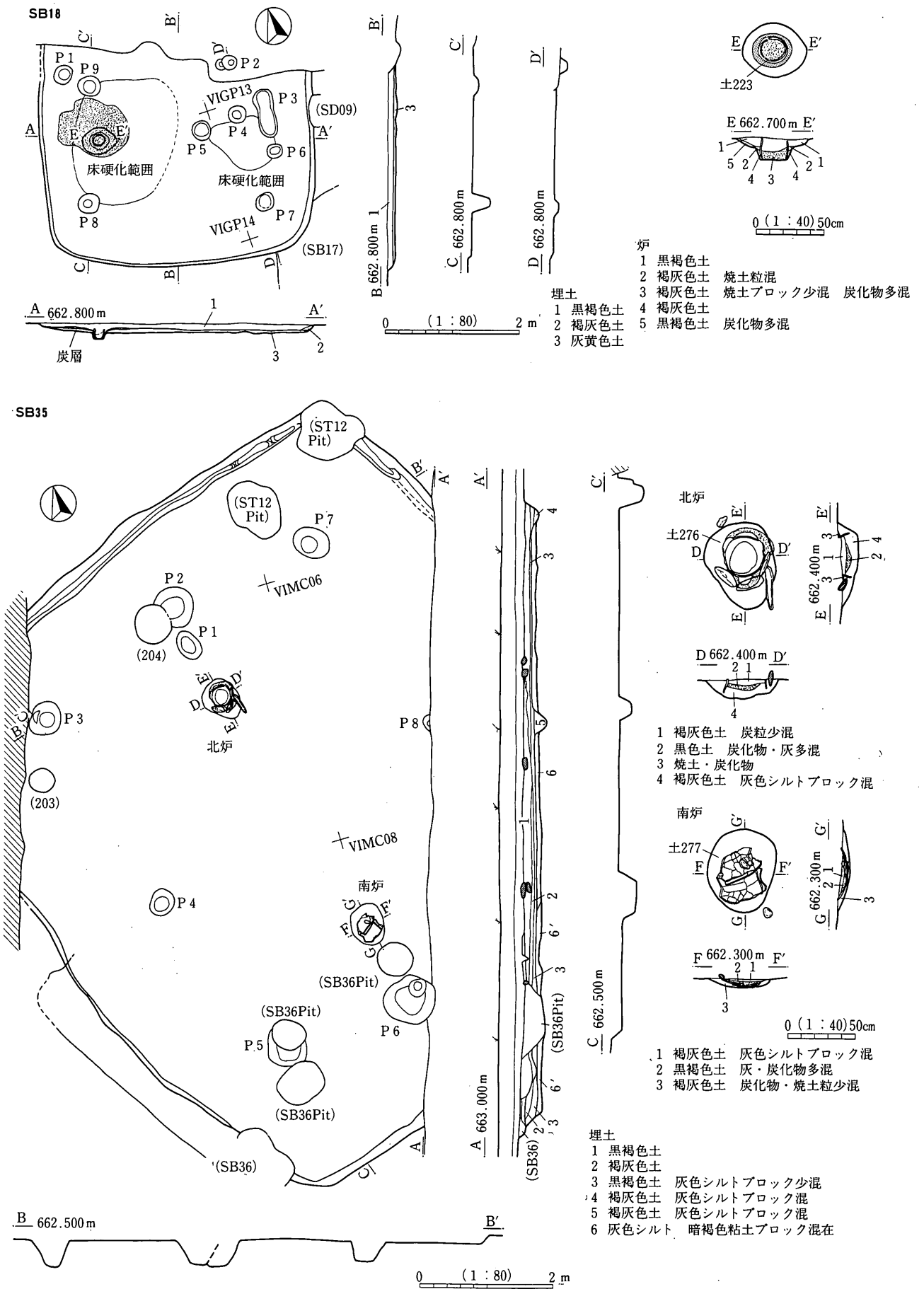
SB09



第74図 SB07、09、101

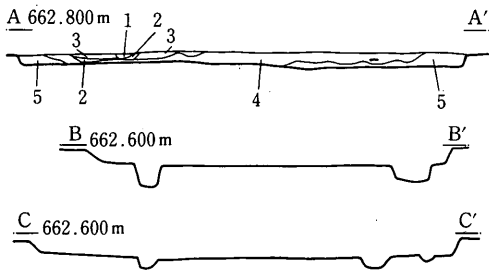
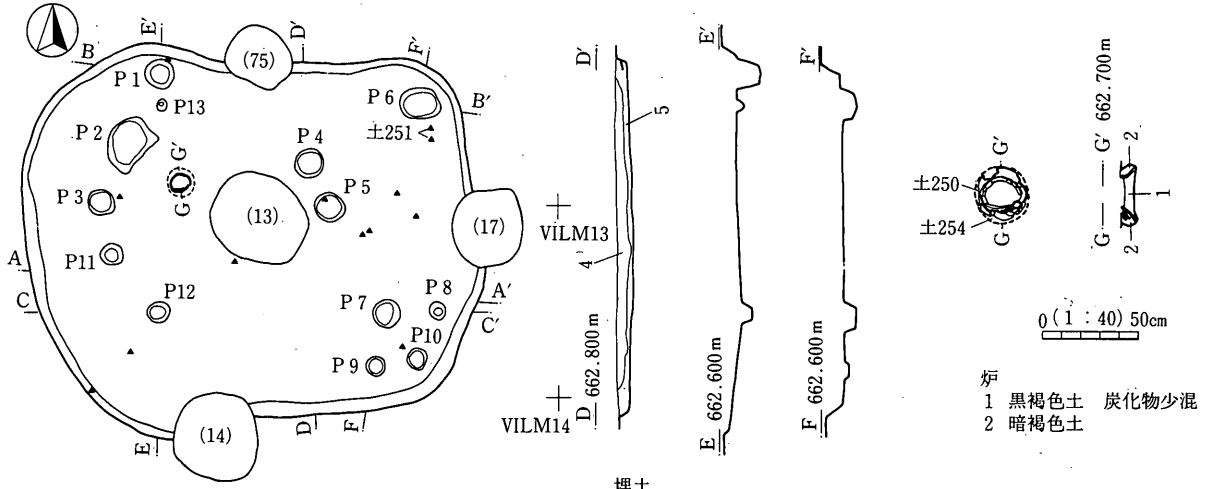


第75図 SB19、20、23



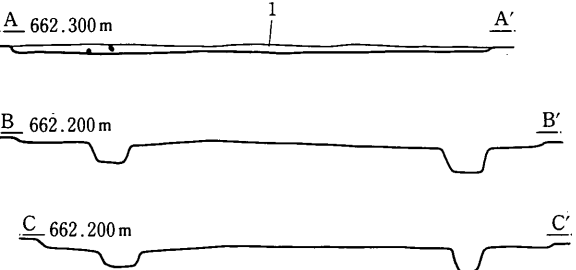
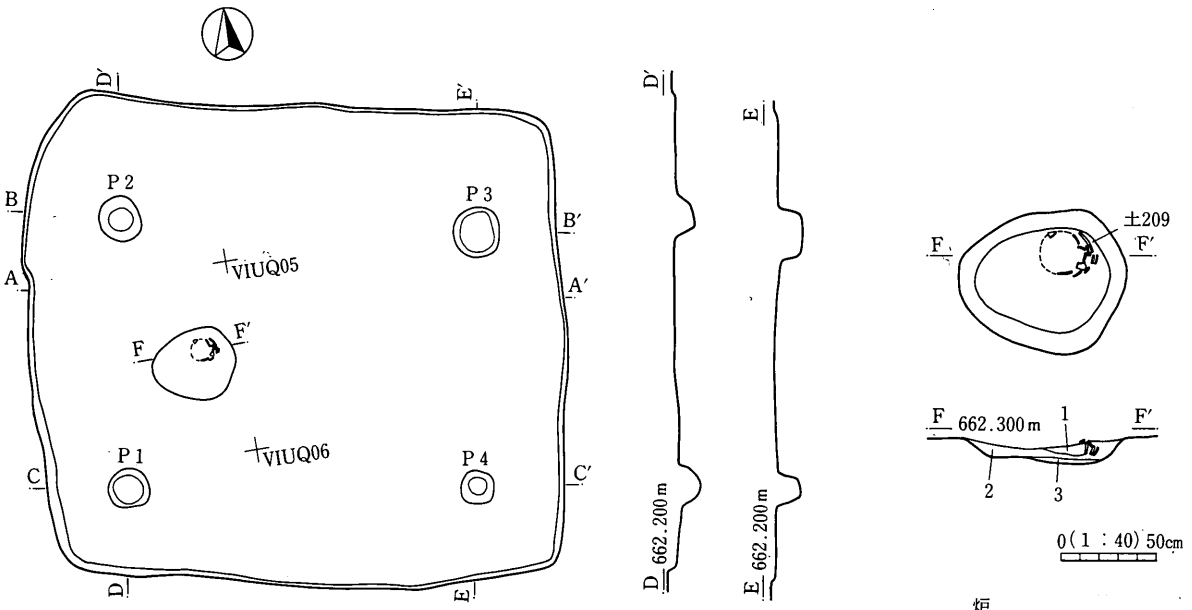
第76図 SB18、35

SB25



- 埋土
- 1 黒褐色土
 - 2 黒褐色土 灰色シルトブロック混
 - 3 暗褐色土
 - 4 黒褐色土 灰色シルトブロック少混
 - 5 黒褐色土

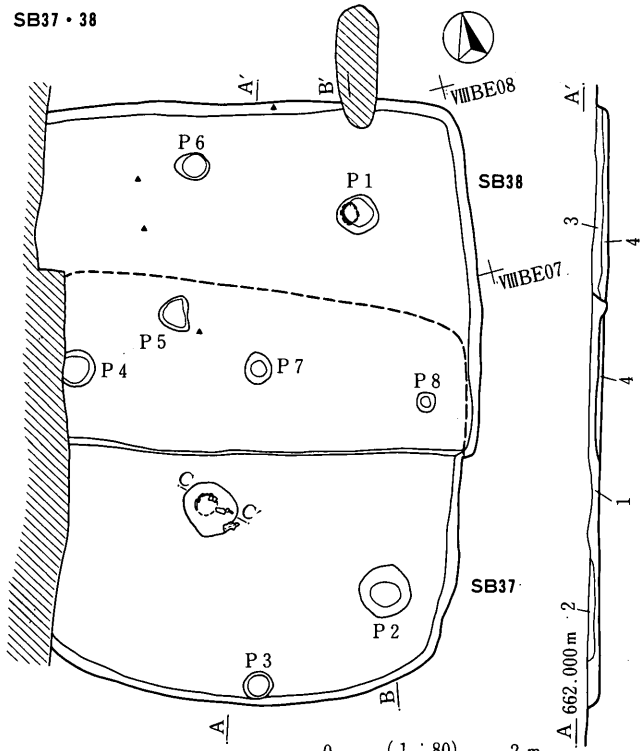
SB34



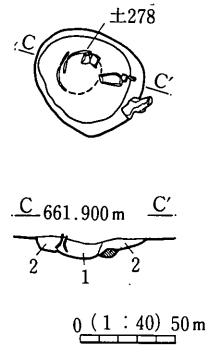
- 埋土
- 1 暗褐色土
- 炉
- 1 黒褐色土粒子粗
 - 2 黒褐色土
 - 3 灰オリーブ色土

第77図 SB25、34

SB37・38

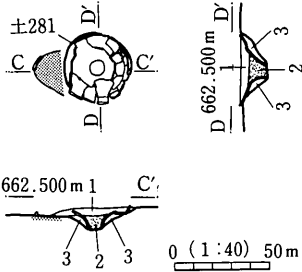


- 1 黒褐色土
- 2 黒色土 灰色シルトブロック混
- 3 黒褐色土
- 4 暗褐色土



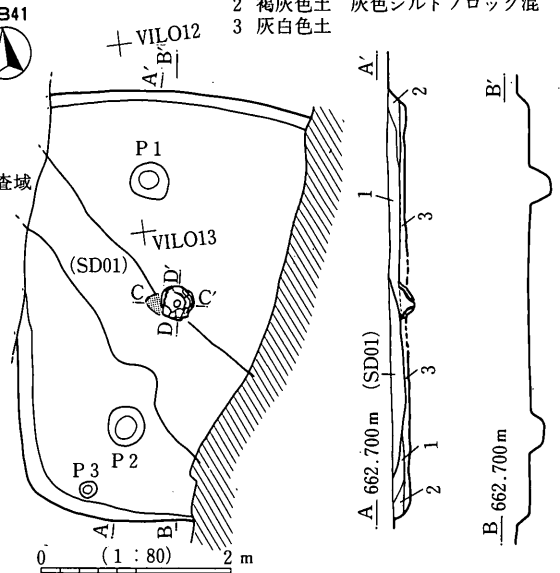
- 1 黒褐色土
- 2 褐灰色土 小礫混

- 1 褐灰色土 炭化物少混
- 2 褐灰色土 炭化物多混
- 3 黒褐色土



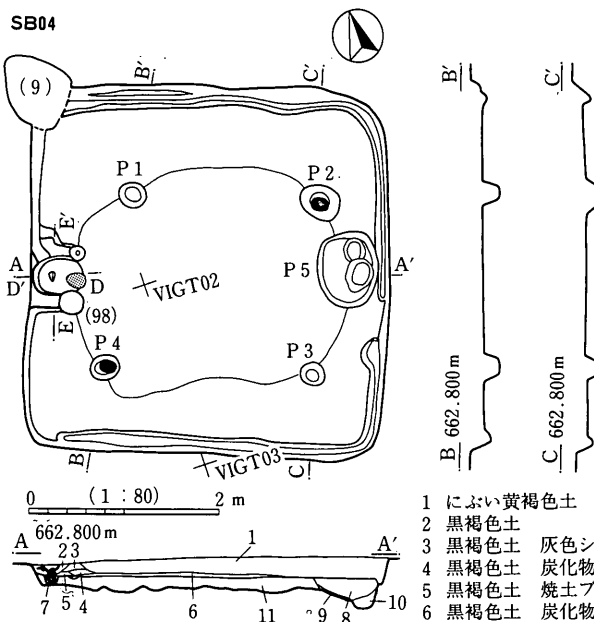
平成12年度調査域

SB41

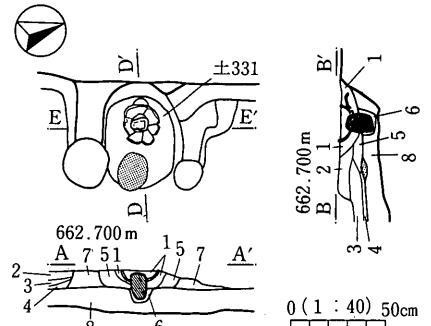


- 1 暗褐色土
- 2 褐灰色土 灰色シルトブロック混
- 3 灰白色土

SB04

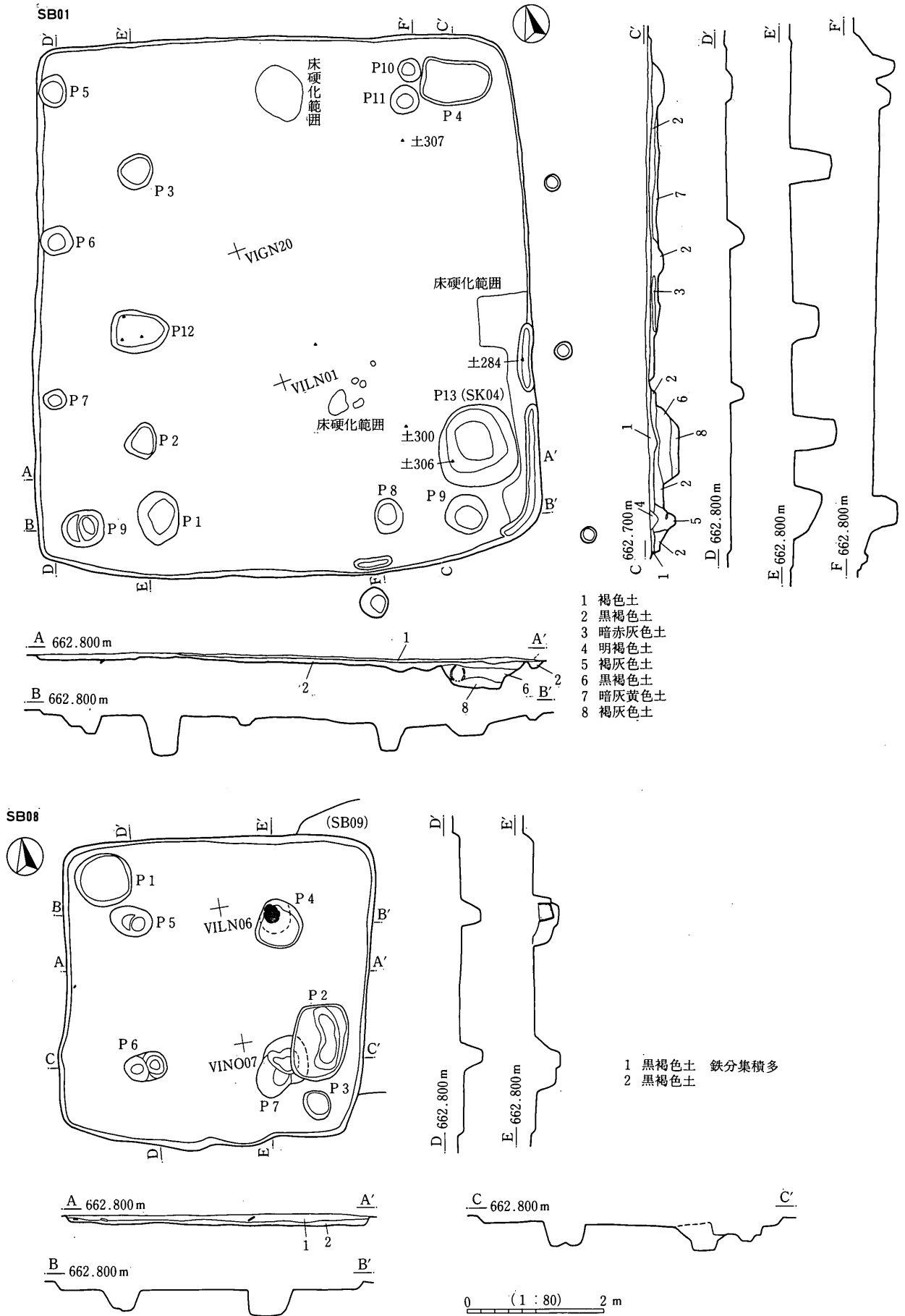


- カマド
- 1 黒褐色土
 - 2 黒褐色土 にふい
 - 3 黄褐色土 ブロック混
 - 4 黒褐色土 灰色シルトブロック混
 - 5 黒褐色土 灰色シルトブロック混
 - 6 黒褐色土 焼土ブロック混
 - 7 にふい黄褐色土
 - 8 黒褐色土 灰色シルトブロック混在

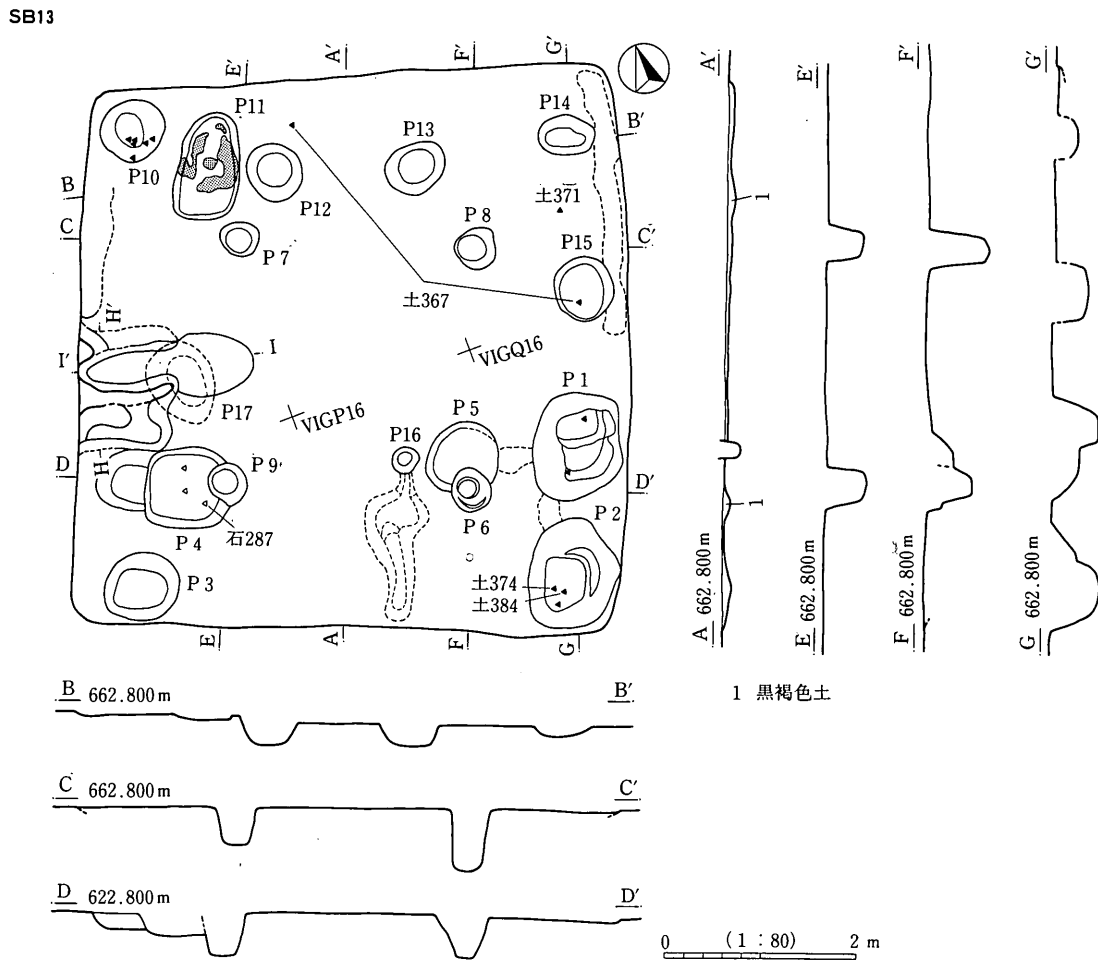
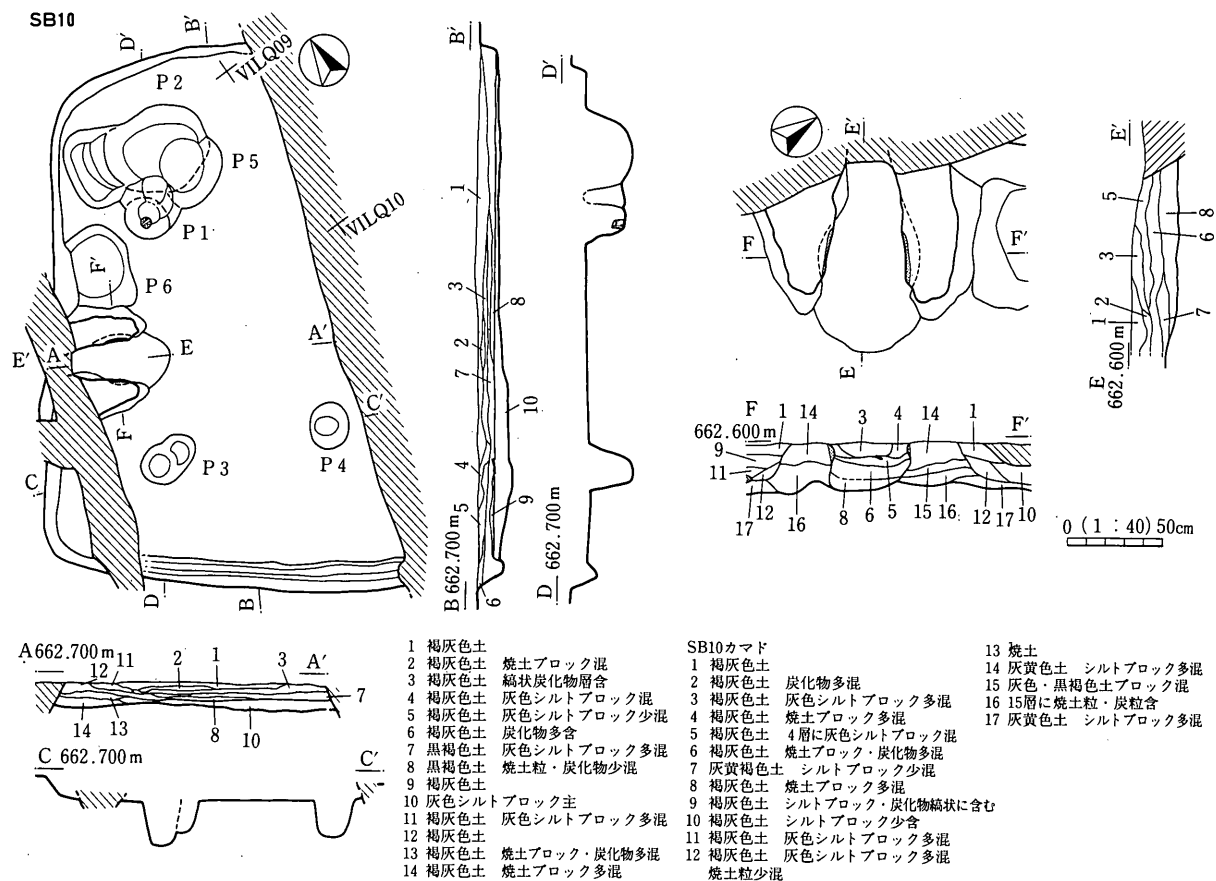


- 1 にふい黄褐色土 灰色シルトブロック混
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土 灰色シルトブロック混
- 4 黒褐色土 炭化物多混
- 5 黒褐色土 焼土ブロック混
- 6 黒褐色土 炭化物多混
- 7 褐灰色土
- 8 黒褐色土 細い灰色シルトブロック混
- 9 炭層
- 10 黒褐色土 灰色シルトブロック多混
- 11 黒褐色土 灰色シルトブロック混

第78図 SB04、37・38、41

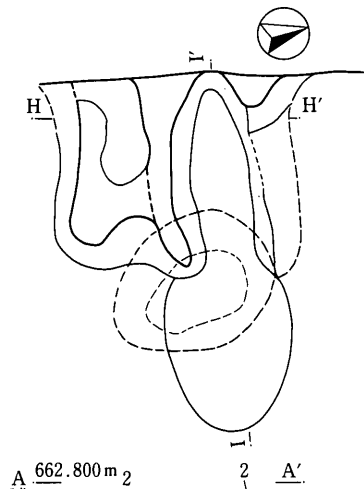


第79図 SB01、08



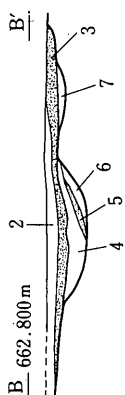
第80図 SB10、13

SB13カマド

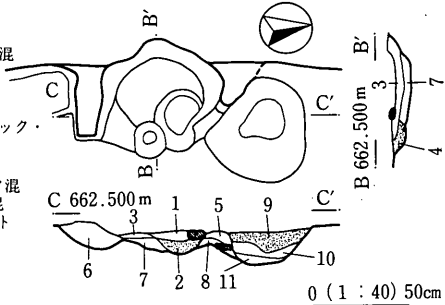
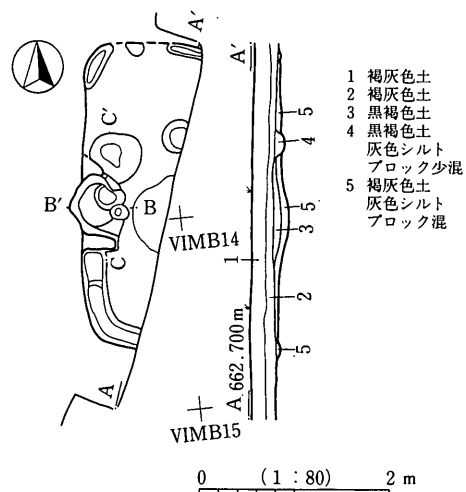


- 1 黒褐色土 灰色シルトブロック混
 2 黒褐色土 焼土ブロック多混
 3 黒褐色土 炭化物多混
 4 暗灰黄色土 炭化物少混
 5 黒色土 炭化物・灰多混
 6 暗灰黄色土
 7 黒褐色土 焼土粒少混
 8 黄灰色土 灰色シルトブロック混
 9 暗灰黄色土 灰色シルトブロック混

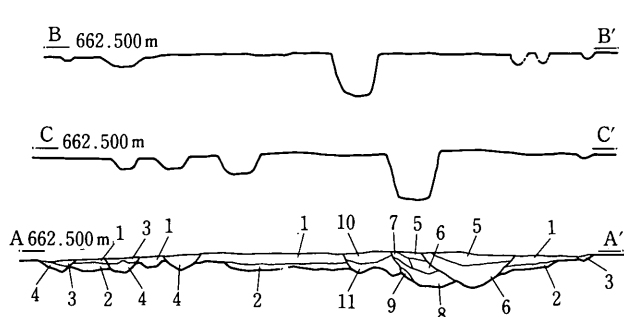
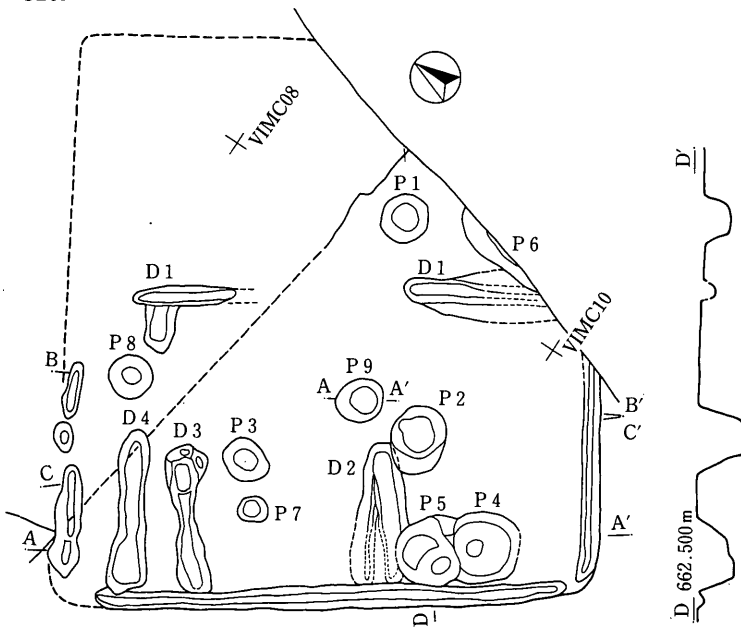
SB33



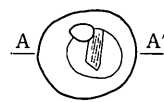
- カマド
 1 褐灰色土 炭粒・焼土粒混
 2 黒褐色土 炭粒・焼土粒多混
 3 黒褐色土 炭粒・焼土粒混
 4 黒褐色土 炭粒・焼土粒・灰色シルトブロック混
 5 黒褐色土 灰色シルトブロック・焼土ブロック多混
 6 灰黄褐色土
 7 褐灰色土 細い灰色シルトブロック混
 8 黒褐色土 灰色シルトブロック多混
 9 黒褐色土 焼土粒・炭化物・灰色シルトブロック多混
 10 黒褐色土
 11 褐灰色土



SB36

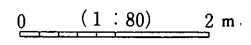
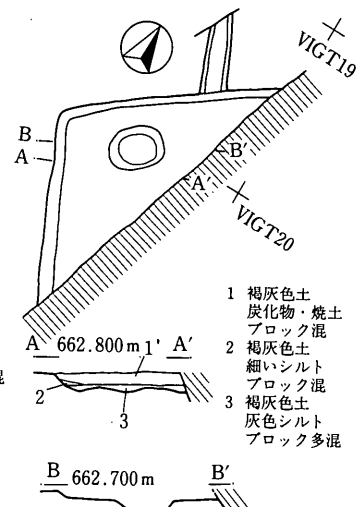


- 1 黒褐色土 灰色シルトブロック少混
 2 黒褐色土 灰色シルトブロック多混
 3 黒褐色土
 4 黒褐色土 灰色シルトブロック多混
 5 灰黄褐色土 灰色シルトブロック少混
 6 褐灰色土 灰色シルトブロック多混
 7 褐灰色土 細いシルトブロック混
 8 黒褐色土と灰色シルトブロック混
 9 褐灰色土 細いシルトブロック多混
 10 黒褐色土 シルトブロック多混
 11 黒褐色土 細いシルトブロック混



- 1 褐灰色土 灰色シルトブロック少混
 2 褐灰色土 灰色シルトブロック多混

SB42



- 1 褐灰色土 炭化物・焼土ブロック混
 2 褐灰色土 細いシルトブロック混
 3 褐灰色土 灰色シルトブロック多混

第81図 SB13カマド、33、36、42

存部から方形と思われ、確認範囲で東西約2.4m、南北約2.2mの規模で、主軸方向はN54°Eである。西辺のカマド煙道を辺中央とすると本来は1辺3.2m前後の規模と推測される。埋土は壁際に褐灰色シルトブロックを含む土層が入るが、ほぼ炭化物・焼土粒を含む褐灰色土の単層である。壁は若干斜めで、検出面から床面までは10cmほどと浅い。床面は軟弱ながら厚く貼り床される。床面上では貯蔵穴と思われる浅い鉢状の穴跡1基が検出された。炭化物・焼土を多く含む埋土であった。カマドは見逃して掘り壊してしまったが、煙道が西壁上で検出された。火床は検出されなかった。出土遺物は破片が散在的に出土したのみである。

竪穴遺構・時期不明竪穴住居跡

方形・長方形の平面形で、底面は平坦な竪穴住居跡に類する形状ながら、炉など内部施設を伴わない遺構を竪穴遺構として報告する。規模は竪穴住居跡より小さく、土坑より大きめである。このような遺構はこれまでに土坑、竪穴住居跡として報告され、必ずしも評価が定まっていないが、管見に触れたなかでは弥生～古墳時代の遺跡に散見される。岩崎卓也氏は長野県史で内部施設を伴わない方形・長方形の遺構を附属施設として触れられ(岩崎1989)、臼居直之氏も附属屋として集落分析に積極的に取り上げている(臼居1993)。しかし、火処など内部施設がないこと以外は明確な基準はなく、規模でも臼居氏が取り上げた松本市三の宮遺跡例は5m前後ながら、松本市向畑遺跡例は長方形で長軸3～4m、短軸3mほどと小さい。ここでは特定の遺構と断定できないものの、小規模で火処など内部施設が検出されなかった竪穴遺構、遺存不良で住居跡とも断定できない遺構をまとめて扱う。一方で、カマドがないSB08や有無が確認できないSB36は規模から竪穴住居跡に含めた。

参考文献

- 1989 岩崎卓也「第二章 第二節 六 ムラの生産と生活」『長野県史 通史編第1巻』長野県史刊行会
1993 臼居直之「弥生時代終末から古墳時代前期の様相」『長野県考古学会誌69・70』

SB02 (第82図 PL24) Ⅲ②区 VIL04

微高地北部にあり、切り合いはない。南北約2.1m、東西約2.0mで主軸方位N75°Wの不整形の平面形で、検出面から床面まで5cmと浅い。埋土は上部に黒褐色土、中央下部に炭化物層が認められた。壁は若干斜めで、床面は軟弱でピット4基が検出されたが、浅く柱穴跡とは断じ得ない。中軸線上の外側にあるピット2基は関連が不明である。古墳後期の壺・甕片少量と滑石製模造品が出土した。

SB05 (第82図 PL26) Ⅲ②区 VIG05

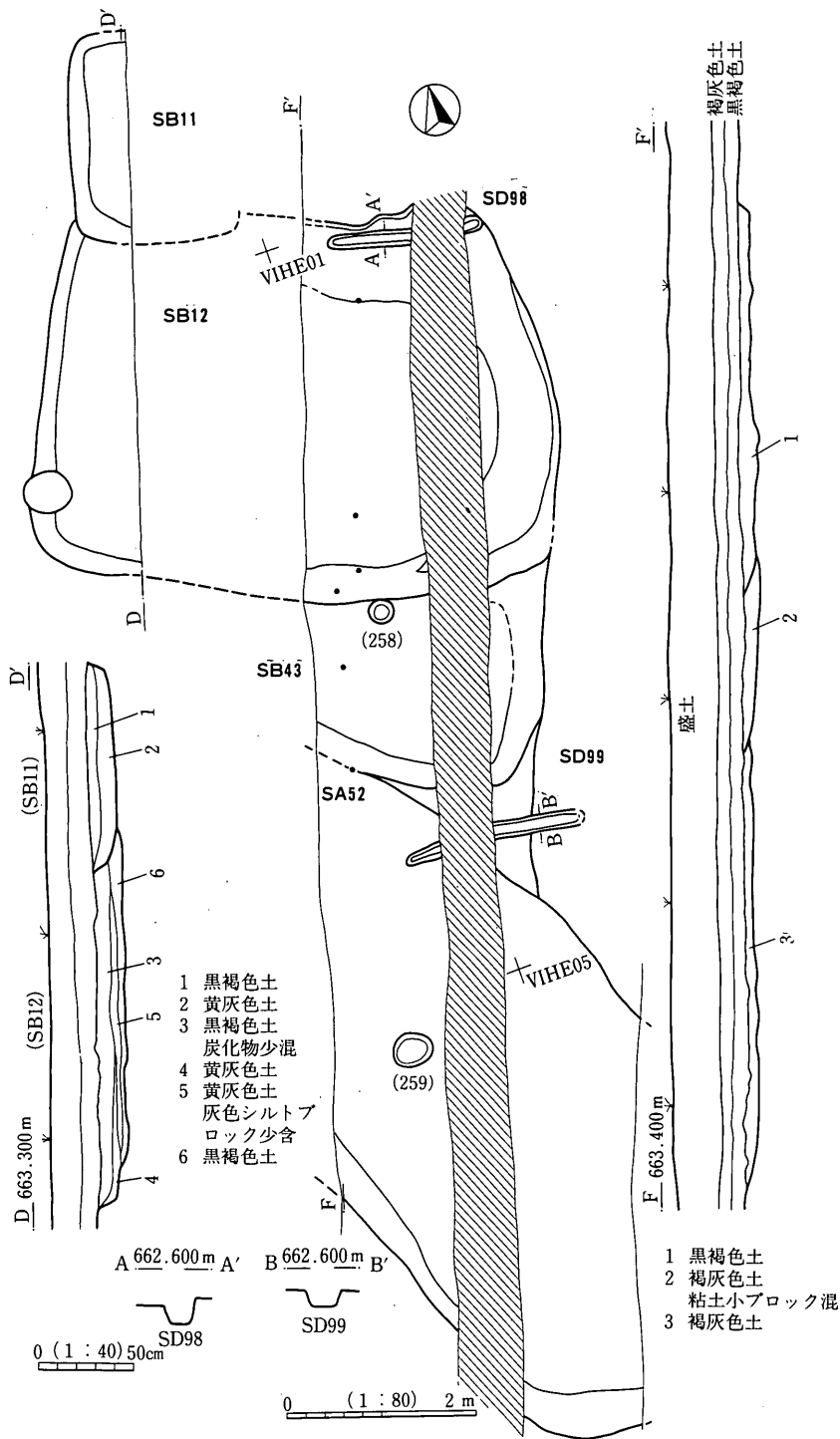
微高地北部にあり、中央部をSK06に切られ、壁際周辺のみ残存する。平面形は主軸方位N38°W、長軸約3.1m、短軸約2.1mの不整形長方形で、底面は部分的ながら軟弱で、検出面から16cmほどの深さを測る。埋土は黒褐色土の単層で、時期は切り合いから古墳後期以前とみられる。類似形態のSB06が隣接する。

SB06 (第82図 PL24) Ⅲ②区 VIG10

微高地北部に位置し、切り合いはない。主軸方位N16°W、長軸2.2m、短軸1.6mの不整形長方形の平面形で、壁は斜めに掘り込まれ、床面は平坦ながら軟弱で、検出面から16cmの深さを測る。埋土は黒褐色土ブロックを多く含む灰黄褐色土である。古墳後期土師器高杯片など小片が少量出土した。

SB11・12・43 (第83図 PL24) Ⅲ②・⑤区 VIC21・H01

微高地北端に位置する。Ⅲ②区東壁にかかってSB11・12とした2基の方形落ち込みが捉えられ、隣接Ⅲ⑤区でも落ち込み2基が検出されたが、1基は別遺構で、不整形の落ち込みが3基重複すると捉えられた。切り合いはSB11がSB12を切り、SB12がSB43を切る。また、SB12がSK112、杭列SA52に切られるが、SD98とSK259とSB11・12との関係は見逃しで不明である。SB11は北壁の立ち上がりが見え不明瞭なが



第83図 SB11・12・43・SD98・99・SA52

SB14 (第82図 PL24) Ⅲ②区 VIG20

微高地北部に位置する。北側は後代の耕作で削平されて遺存不良で、範囲認定に不安を残す。平面形は南北約3.1m、東西約3.1mの方形とみられ、埋土はV層シルトブロックを含む黒褐色土である。内部施設はない。出土遺物は僅かに弥生後期土器小片が得られた。上部削平された住居跡の可能性が残る。

SB15 (第82図 PL24) Ⅲ④区 VII05

微高地中央にある。SK99・100に切られ、SB03を切り、西半分は試掘トレンチで壊した。平面形は南北1.5m、東西1.5m以上の隅の丸い方形・長方形を呈し、主軸方位はN85°Wである。埋土は上部に暗褐色土、下層に黒褐色土が入る。壁は斜めで、底面は平坦で検出面からの深さ約10cmを測る。ピット1基

ら、南北約2.3m、東西は調査区内で60cmほどを測り、東辺は未調査である。埋土は上層に黒褐色土、下層に褐灰色土があり、床面は平坦ながら軟弱で検出面からの深さは約26cmほどである。SB12は南北約3.6m、東西5.5mの不整長方形の平面形で、主軸方位はN23°Eである。埋土は壁際に僅かな褐灰色土があるが、主体は黒褐色土である。西壁はほぼ垂直ながら東壁は緩やかである。床面は軟弱で、附属施設は確認されなかった。南端のSB43は西辺が未調査で約2.4mしか確認できず、南北方向は約2.3mである。平面形はやや丸みのある方形で、底面は中央に向かって緩やかにくぼむ。検出面から床面までの深さは約12cmほどである。埋土はSB12に類似するが、若干黒味が強い。

遺物はひとつの遺構と誤認して一括で取上げてしまい、個別の遺構に戻すことができなくなってしまった。土器には弥生中期後半・後期の所産が多く含まれ、僅かに古墳後期の土師器・須恵器がある。他に土製紡錘車1点や磨製石鏃が出土した。底面が窪む形状などから、土坑の可能性もある。

のみ検出されたが、本跡の所産か判然としない。遺物は古墳後期土師器小片少量と滑石製模造品の勾玉が出土した。出土土器から古墳後期の所産と思われ、規模から土坑の可能性も残る。

SB30 (第82図 PL22) IV③区 VIIA10

微高地南端に位置する。本跡東部は埋設用水路で破壊され、西側も調査域外へ延びるが、延長先はIV①区攪乱とされた落ち込みに一致する。この攪乱はSD80南端付近から東西方向に直交し、現道路を横断することから区画整理前の所産と捉えられ、東延長先はSB37・38重複境にも重なる。この様相から溝跡の可能性が高いが、炭化物を含む落ち込みが検出されたり、弥生後期土器片が採取されていることなどから溝跡とも断じ得ず、ここに掲載する。幅約3.0mの規模で、南辺の方位はN85°Eである。壁はほぼ垂直で、底面は平坦ながらV層砂礫層礫頭が露呈し、検出面から底面まで10cmほどの深さである。中央で平面楕円形の落ち込み1基検出され、断面形はU字状で底面まで20cmほどと深く、炉跡とは断じ得ない。遺物は僅かで、調査時にSB39と誤認して取り上げられて混在したが、調査時には弥生後期の土器片出土が確認されている。

SB32 (第82図 PL24) III④区 VIQ05

微高地中央付近にあり、上面はSK151・152、西辺は攪乱に切られる。床面か掘り方のみの僅かな残存で遺構認定に不安を残すが、方形の落ち込みと認定された所見を尊重して掲載する。規模は南北約3.4m、東西は約3.2m以上で、方形か長方形平面形と思われる。主軸方位はN79°Eである。埋土は褐灰色土の単層で遺物は検出時に南東隅で大型破片が出土した以外は小破片が少量得られたのみである。床面上ではピット3基が検出され、南西の柱穴跡は未検出ながらほぼ方形に配置される。ピットは平面円形で浅い。遺物は古墳時代土師器杯1点あるが、他は弥生後期土器しかない。弥生後期住居跡の可能性が残る。

SB40 (第82図 PL24) IV①区 VIIA05

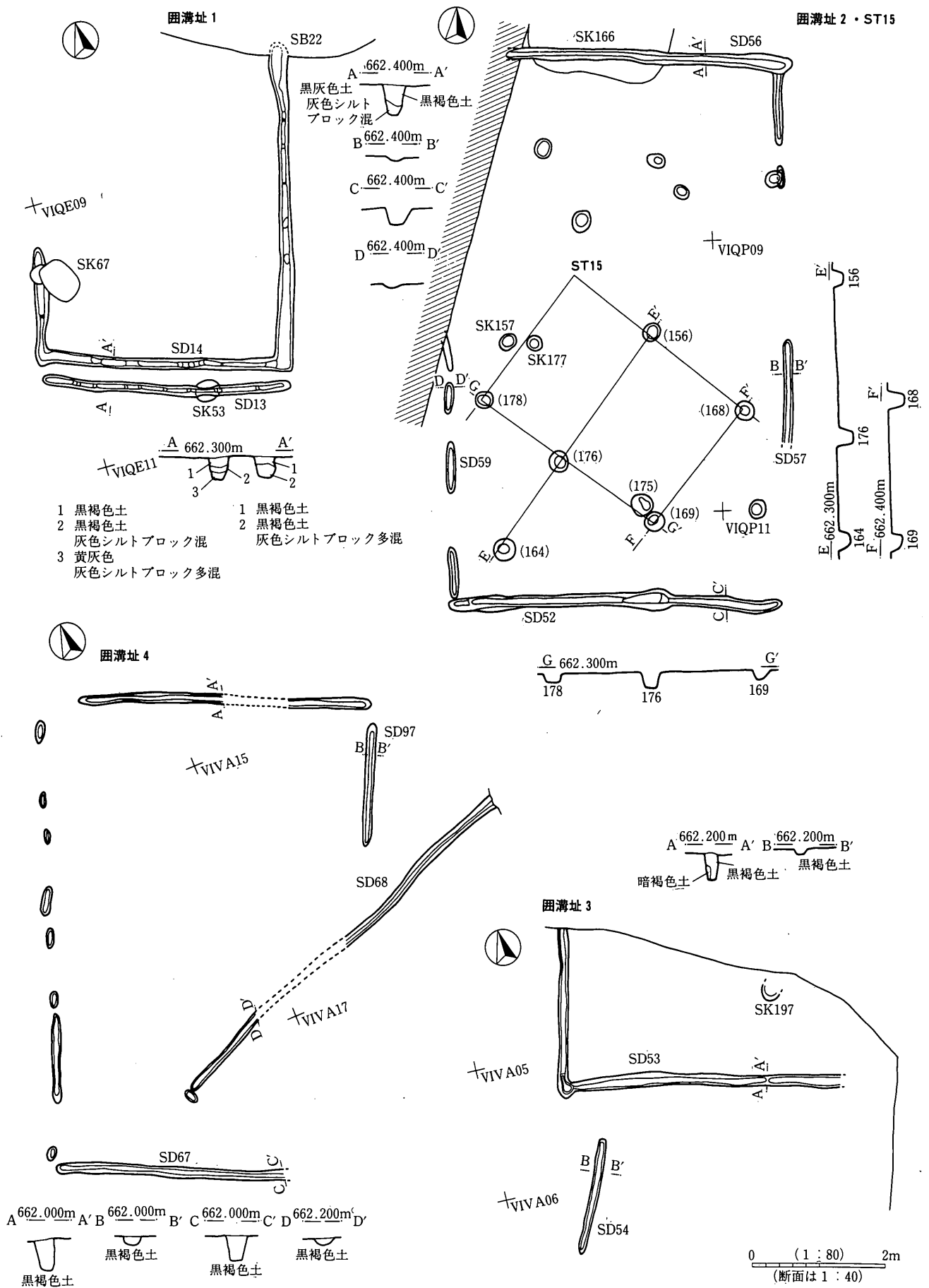
微高地南部に位置する。IV③区東壁にかかって1/3ほどが調査区外へ延び、住居跡中央をSD80に切られる。平面形は南北約3.5m、東西は確認範囲で約2.6mの方形と思われ、主軸方位はN22°Eである。埋土は10cmほどの残存で、黒褐色土の単層が確認された。床面は軟弱で、施設は何も検出されていない。遺物は弥生土器と思われる土器片十数片あるのみで時期不明である。

②. 囲溝址

囲溝址(いこうし)とは溝が長方形にめぐる遺構で、伊那谷南部の弥生後期遺跡ではよく知られている。今回、箕輪遺跡でも類似した遺構が検出されたので囲溝址として報告する。

この遺構は1971年飯田市(旧鼎町)山岸遺跡で「周溝をもつ建築物」として報告されたのが初見である。その前後に竪穴住居跡周溝の残存と捉えられたものもあるが、1977年飯田市(旧上郷町)高松原遺跡の報告書で周溝を利用した建築物「囲溝址」と報告された(御堂島1977)。その後、飯田市・高森町・松川町周辺で発見が相次ぎ、「囲溝址」が定着すると共に下伊那に多く分布することが知られるようになった。これまでの調査で弥生後期集落遺跡に認められ、1遺跡内では竪穴住居跡よりも少ないこと、他遺構との重複や囲溝址同士の重複があって建て替えられる事例が知られる(山下1993)。規模は大きくとも10mは越えないようで、内部施設は何も伴わない場合が多いが、柱穴跡を伴う例が少数あるという。系譜や機能は明らかにされていないが、酒井幸則氏は掘立柱建物跡に近接していることから農耕関連の集落内共通施設で、屋根を必要としない板壁構造の建築物として家畜小屋の可能性を想定している(酒井幸則1987)。

今回の調査で柱穴跡が伴うと断じられた例はなく、短辺側溝の掘り込みが深く断面長方形で、長辺側は浅い共通点が知られた。断面形状から短辺は開放状態ではなく、埋設物があったと想像され、辺毎に深さが異なるのは建物構造に関連すると思われる。根太材を井桁状に組む基礎部分か、短辺側に主要な上部構造を支える板・棒状材を埋設したと思われるが仔細不明である。いずれにしろ、酒井氏が指摘するように



第84図 囿溝址、ST15

構築物基礎と思われる。本遺跡の分布は微高地南部に類似主軸方向で約28m 間隔に並列するよう見受けられ、特定地点に集中することから集落共有施設と考えられる。なお、囲溝址は本遺跡に近い南箕輪村北垣外遺跡で1基みつかっており、松本市県町遺跡の203号溝跡もその可能性がある。現時点では長野県中部まで分布する可能性があり、本遺跡が北限とは言えない。

参考文献

- 1971 長野県教育委員会・中央道遺跡調査団『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 飯田市地区 昭和45年度』
 1977 御堂島正「2集落に関わる諸問題」『高松原遺跡』高松原遺跡調査団
 1987 酒井幸則「V 2 囲溝跡」『垣外遺跡』松川町教育委員会
 1992 南箕輪村教育委員会『北垣外遺跡』
 1993 山下誠一「IVまとめ 後期の遺構・遺物について」『丹保遺跡』上郷町教育委員会
 1990 松本市教育委員会『県町遺跡』

囲溝址 1 (SD13・14) (第84図 PL26) III②区 VIQ11・12

微高地南部にあり、ST06のSK67・102が本跡を切り、SB22との重複部は見逃して掘り壊したが、残存部から本跡が切ると判断された。本跡は検出面で2層が掘り残された範囲に入れたトレンチでSD13・14を検出し、再検出でSD14がコの字状に廻るようみつかって囲溝址と認定した。平面形はSD14が北側に開いたコの字状となり、南辺にSD13が平行する。主軸方位はN14° Eである。SD14南辺と13はほぼ平行するが、短辺が2重になる囲溝址は他に認められず、2基の囲溝址が重複した可能性がある。SD14は東辺約4.8m以上、南辺約3.8mのコの字状で、西辺は約1.7mしか検出できなかった。南辺の断面形は壁が垂直となる長方形で、幅は最大24cm、検出面から底面までの深さは最大18cmを測る。底面は凹凸があり、南辺は深・浅い部分が繰り返すように認められた。埋土は黒褐色土を基調として地山のブロック土を含む。SD13はSD14南辺に約20cm離れて平行し、幅18cm前後、長さは3.7mである。断面形状はSD14南辺同様の長方形で、検出面から底面までの深さは約16cmを測る。出土遺物はSD13・14共に弥生土器小片が僅かに採取された。切り合いから弥生中期後半以後と思われるが、時期の詳細は不明である。

囲溝址 2 (SD52・56・57・59) (第84図 PL26) III④区 VIQ09・14

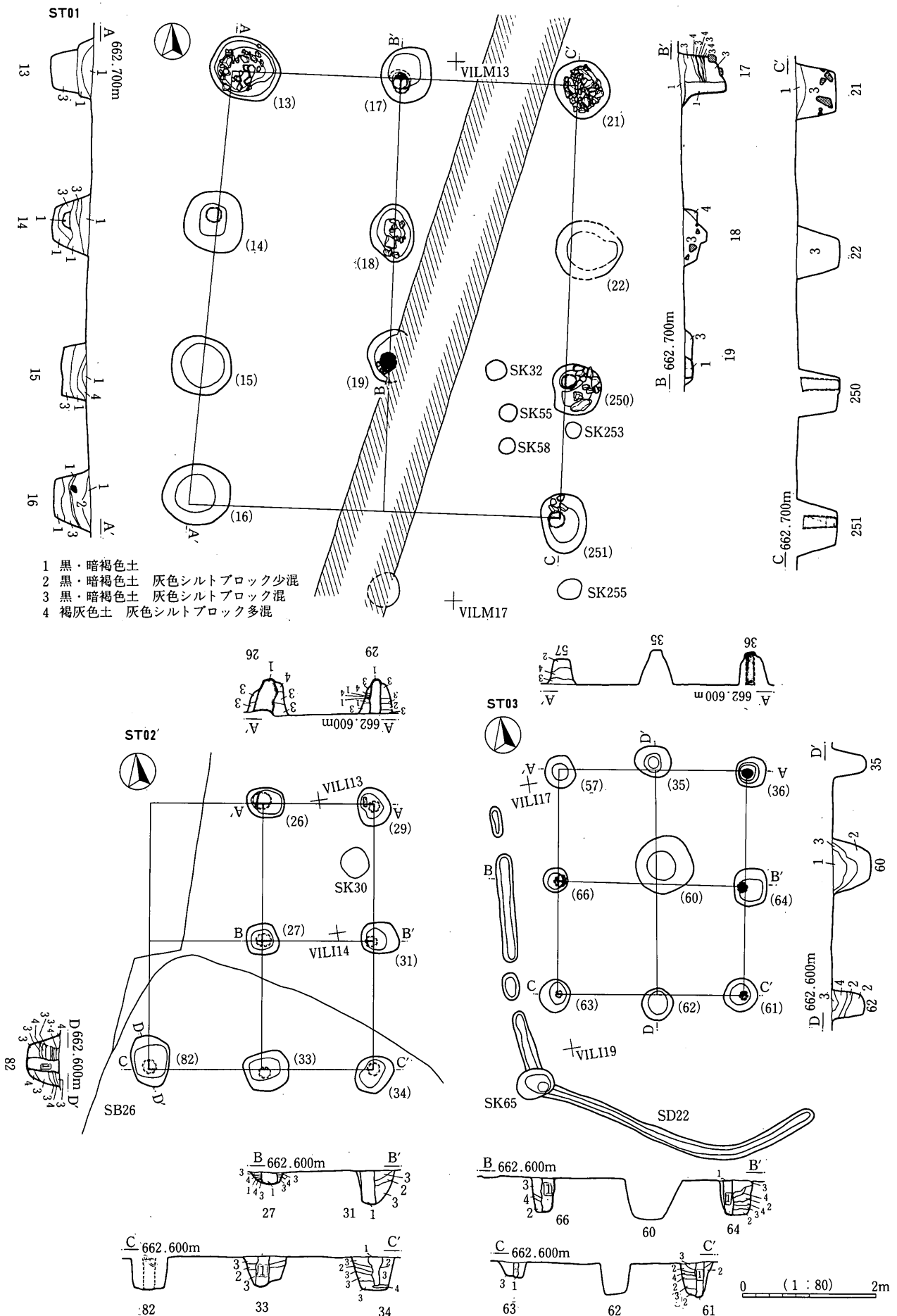
微高地南部に位置する。SK166を切り、SK180と重複するSD57は浅く前後関係は不明である。溝区画内で柱穴跡が検出されたが、ST15が認定されたように本跡とは別遺構と思われる。SD52・56・57・59の4条が長方形に廻り、その規模は長軸約8.0m、東西約5.1m、主軸方位はN6° Eである。短辺SD52・56は幅20cm前後、断面形は長方形で深さは検出面から底面まで約14~21cmを測る。埋土は上部に黒褐色土、底面近くに地山青灰色シルトブロックを含む黒褐色土が入る。長辺のSD57・59は検出面からの深さ4cm前後と浅く、一部は底面しか残存しない。遺物はSD56から櫛描波状文甕小片が出土している。

囲溝址 3 (SD53・54) (第84図 PL26) IV①区 V01・06

微高地南部のIV①区北東隅の調査区壁にかかって検出され、北・東側は調査区外へ延びる。L字状の細い溝跡で、形状から囲溝址と判断した。調査区内で南辺4.2m以上、西辺は約2.5m以上の規模と確認され、主軸方位はN11° Eである。南辺溝断面は長方形で、幅20cm弱、検出面からの深さは20cm前後を測る。埋土は北側壁際に暗褐色土が僅かに認められたが、大部分は黒褐色土である。西辺は幅約10cm強で検出面から底面までの深さ約8cm前後で、北端が20cmほど深くなる。溝で囲まれた内部では何も遺構が検出されなかった。遺物は弥生中期後半と思われる甕片、弥生後期と思われる甕片が出土した。

囲溝址 4 (SD67 (97)) (第84図 PL26) IV①・③区 VIU20・25、V16・21

微高地南部に位置し、IV①区で西1/3ほど調査し、IV③区で残りを追加調査した。SD68とは位置的



第85図 ST01、02、03

に重複するが、直接重ならず前後関係は不明である。規模は長辺約7.2m、短辺約5.0m、主軸方位はN20°Eである。長辺は浅く断続的にしか検出できなかったが、短辺は掘り込みが深い。埋土は黒褐色土の単層で、北・南辺は幅20cm弱、検出面から底面まで約20cm強の深さである。西辺は遺存不良で幅14cm、検出面からの深さは最大6cm程と浅い。出土遺物は弥生と思われる土器片が僅かに得られた。

③. 掘立柱建物跡

柱穴跡が長方形に配列する遺構を掘立柱建物跡とした。微高地域の土坑は大部分が柱穴跡と捉えられるが、具体的な建物跡として組めたものは少ない。しかも、整理時に配置関係から追加認定したものも多く、一部は建物跡認定に不安を残す。検出された掘立柱建物跡は形態上2種類に大別できる。ひとつは直径0.5m以上の大きめの柱穴跡で構成される梁行2間の建物跡であり、ST01～03、09・10などが該当する。時期は古墳後期が多い。もう一種は梁行1間で直径0.3～0.6m前後の小さめの柱穴跡で構成される建物跡である。柱穴跡が小さく出土遺物も少ないために時期特定は困難であるが、弥生中期後半のSB22、24を切るものや、弥生後期SB07、古墳時代後期SB04を切るものもあり、弥生後期・古墳後期以後の可能性もある。なお、ST10の柱穴SK11から糸切り底の須恵器杯が出土したが、他に平安時代遺物がないこと、ST10の他柱穴跡からは古墳後期土師器が出土していることからST10は古墳後期と捉えた。また、調査時にST11・12以外は個別柱穴跡にSK番号を付し、報告でもそのままSK番号を用いている。

ST01 (第85図 PL25) Ⅲ②・Ⅲ⑤区 VIL18・19

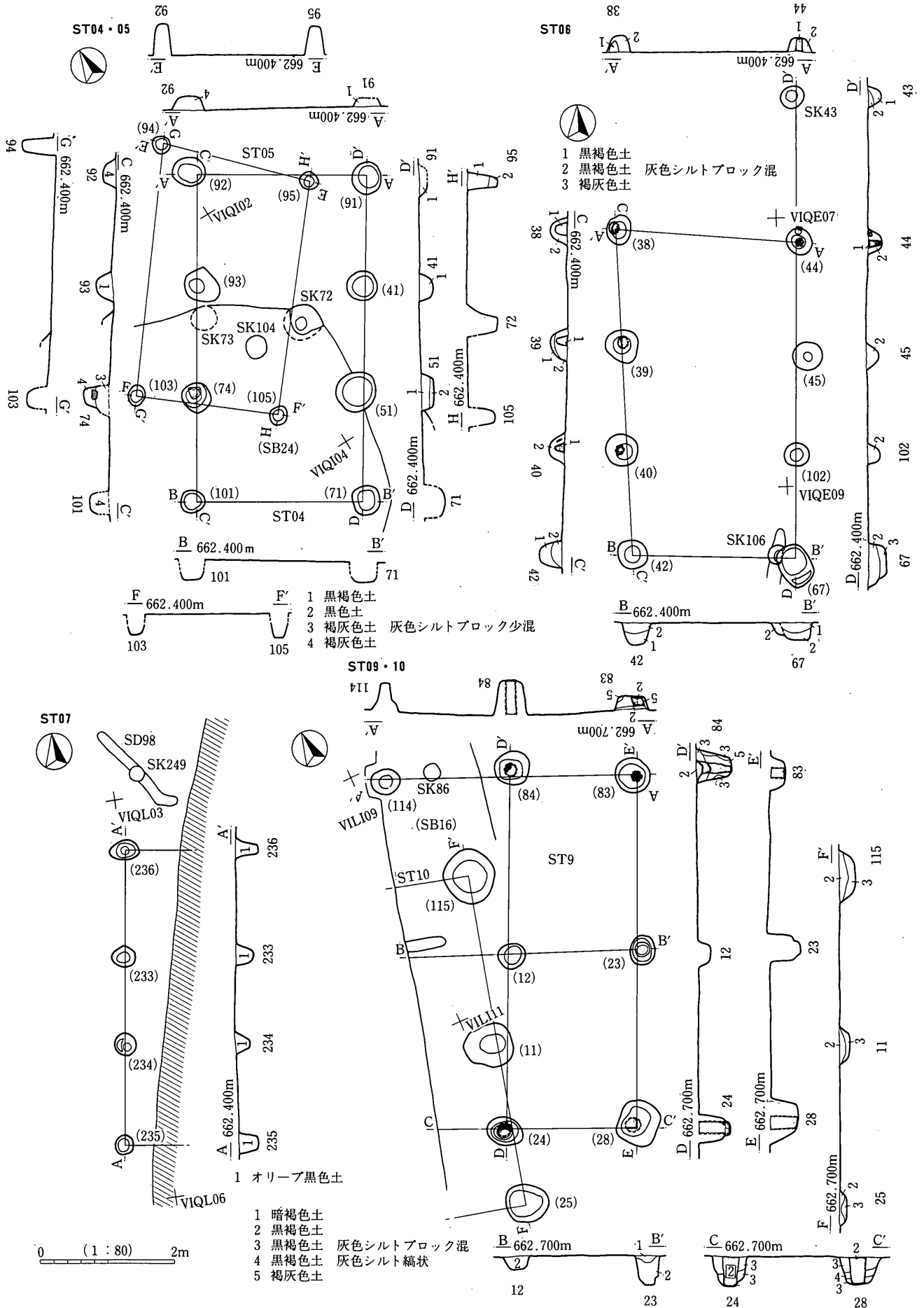
微高地中央部に位置し、中央南側柱穴跡は平成11年度試掘調査トレンチで壊した。Ⅲ②区では柱穴跡9基が長方形に配列することから本跡が認定され、Ⅲ⑤区で半分残存する1基を含む南東隅柱穴跡3基を追加調査した。本跡はSK13～19、21・22、250・251からなり、棟方向南延長先のSK20は対応柱穴跡がないため別遺構とした。規模は棟方向N3°E、桁行3間約3.4m、梁行2間約5.2mの総柱建物跡で、柱間寸法は梁行が2.6～2.9m、桁行が2.0～2.4mである。柱穴跡は直径0.9～1.1m前後の円形の平面形で、断面形は方形を基調として検出面からの深さ約60cm前後を測る。ただし、中央南側のSK19・18は若干浅い。SK18・250の底面には柱圧痕と思われる円形の落ち込みが認められ、SK17から礎板の可能性がある板片が出土した。埋土は数層に分層されたが、柱痕と埋土に大別され、一部は埋土中にV層砂礫層起源の礫を大量に含む。出土遺物はSK13～19、21・22、250・251から古墳後期土師器、須恵器片や弥生土器片が少量採取されている。土器から古墳後期の所産と思われる。本遺跡で最も大きな掘立柱建物跡である。

ST02 (第85図 PL25) Ⅲ②区 VIL17・18

微高地中央のST01北西側にあり、調査時にSK26・27・29・31・33・34・82から構成される建物跡と認定された。SB26を切り、西側に延びる可能性がある。棟方向はN8°E、桁行2間約4.0m、梁行2間約3.4mの総柱建物跡で、柱間寸法は1.9～2.0m、梁行約1.7mである。柱穴跡は直径約50～70cm円形・隅丸方形を呈し、検出面から底面までの深さは中央のSK27が約20cmと浅いが、他は40～50cm前後である。埋土は柱痕と埋め土に大別され、埋め土は黒褐色土を基調として地山の灰色シルトブロックの含まれ方で分層された。灰色シルトブロックと黒褐色土の異なる比率の土層が交互に認められたものが多い。また、柱痕跡はすべて確認され、SK26・29・33では底面に柱圧痕を残す。出土遺物は僅かしかないが、SK26・27・34・82で古墳後期土師器片、SK29・31・33は弥生土器と不明土器片、SK29底面から炭化材片が出土した。古墳後期の所産と思われる。

ST03 (第85図 PL25) Ⅲ②区 VIL22・23

微高地中央ST01西側に位置する。他遺構との重複はないが、本跡西・南側にある溝跡は関連する可能性がある。調査時にSK35・36・57・60～64・66から構成される総柱建物跡と認定した。棟方向はN10°E、桁行2間約3.4m、梁行2間約2.8mの規模で、柱間寸法は桁行約1.7m、梁行約1.3～1.4mである。



第86図 ST04・05、06、07、09・10

柱穴跡は中央のSK60が直径約90cmとやや大きいものの、他は直径約40～50cmの円形・隅丸方形の平面形で、検出面からの深さは南西隅のSK63が約20cmと浅いが、他は約40～50cm前後、SK60のみが約60cmと深い。埋土は黒褐色土基調の柱痕と、地山の灰色シルトブロックを含む埋め土に大別される。柱痕はSK36・61・63・66の4基で確認され、SK35・36底面に柱圧痕が残る。出土遺物はSK35・36・60・61・66から古墳後期土師器・須恵器が出土し、SK57・62・63・64では不明土器片や弥生土器片少量しか出土していない。出土遺物から古墳後期の所産と思われる。

ST04 (第86図 PL25) III②区 VIQ02・03

微高地南部に位置する。整理時にSK41・51・71・74・91・92・93・101がほぼ長方形に配列することから掘立柱建物跡と認定した。本跡のSK51はSB24を切る。SK74・101はSB24床面で検出したが、床面構築以後の所産ではあるのでこれらは見逃したと思われ、SK71もSB24掘り方検出だが、同様の見逃しと思われる。規模は梁行1間(北辺2.6m、南辺2.5m)、桁行3間(西・東辺4.9m)で棟方向はN32°Eである。桁行柱間寸法は西辺で北から1.7・1.6・1.6m、東辺は北より1.6・1.6・1.7mとほぼ一定する。柱穴跡の平面形は直径30～50cmの円形を呈し、深さは検出面から20～32cmである。埋土は黒褐色土・灰黄色を基調とし、地山ブロック土を少量含む。出土遺物は少ないが、SK41・74・91・101には遺物がなく、SK51・71・92・93から弥生中期壺・甕片が少量出土し、SK74では斜めに入り込む平石が出土した。本跡はSB24より新しいと捉えられるが、時期の詳細は不明である。

ST05 (第86図 PL25) III②区 VIQ07

微高地南部にあり、SB24を切り、重複するST04とは直接切り合わず前後関係は不明である。個々に検出された柱穴跡SK94・95・103・105の配列から整理時に建物跡と認定した。規模は棟方向N36°E、梁行1間(約2.2m)、桁行1間(約3.7m)である。桁行が長すぎ、桁行上のSK72を含む可能性がある。柱穴跡は直径30cmの円形平面形で検出面からの深さは30～60cmを測る。埋土は黒褐色、黒色の単層である。出土遺物はSK94・95から弥生壺片が出土した。

ST06 (第86図 PL25) III②区 VIQ06・07

微高地南部にあり、囲溝址2を切る。調査時に個々に検出されたSK38～40・42～44・67・102の配置から掘立柱建物跡と認定した。平面形は北側が若干開く長方形で、梁行1間(北辺約2.8m、南辺約2.5m)×桁行4間(東辺約6.6m、西辺約4.8m以上)で棟方向はN3°Eである。柱間寸法は桁行西辺で北から1.7・1.6・1.5m、東辺で北から1.7・1.7・1.6・1.6mである。西桁行延長上の柱穴跡は調査区外へ延びる。柱穴跡は直径30cm強～60cm前後で円形・楕円形の平面形で、断面形はU字状で検出面から底面までの深さは20～40cmを測る。SK38・39・40・44で柱痕が検出された。出土遺物はSK38・41・42・45・67・102・106から出土せず、SK39・40・44から弥生中期後半甕・壺片が出土した。出土遺物から弥生時代と思われる。主軸方位が類似して隣接するST05とは関連すると思われる。

ST07 (第86図) III⑤区 VIQ03・08

微高地中央南よりに位置する。SK236・233・234・235が等間隔で列状に並ぶことから掘立柱建物跡と認定した。棟方向は南北方向のN5°Eと思われ、規模は桁行3間(約4.4m)、梁行は埋設用水路で破壊されて不明である。桁行柱間寸法は1.4～1.6mを測る。柱穴跡の平面形は直径30cm強の円形で、検出面から底面までの深さは約30cm強である。出土遺物はSK233・234から弥生中期甕片、SK235で弥生壺片が出土し、SK236からは遺物が出土していない。

ST08 (第87図 PL25) III⑤区 VIQ17・18

微高地南よりに位置し、コの字状に配置されるSK244～248を掘立柱建物跡と認定した。東側は埋設用水路で破壊され、他遺構との重複はない。柱間寸法から棟方向はN78°W方向と思われ、確認できた規

模は梁行1間(約2.3m)、桁行2間以上(約2.6m以上)である。柱穴跡は棟方向に長い長軸約30cm弱、短軸10cm強の楕円形で、断面形はU字状を呈して検出面からの深さ20cm強を測る。遺物はSK244で不明土器片、SK245・246から弥生壺・甕片、SK247・248からは遺物が出土していない。

ST09 (第86図) III②区 VL13

微高地中央に位置し、整理時に配置関係からSK12・23・24・28・83・84・114で構成される掘立柱建物跡を認定し、出土遺物からSB16を切ると判断した。棟方向はN25°E、西側は調査区外へ延びる可能性があり、確認範囲では桁行2間(約5.2m)、梁行2間(約3.8m)、柱間寸法は桁行約2.6m、梁行約1.9m前後である。柱穴跡は直径40~60cmほどの円形の平面形で、深さは中央と北東隅の柱穴跡が検出面から20cmと浅いが、他は50cm前後を測る。埋土は黒褐色土を基調とする柱痕と地山の灰色シルトブロックを含む埋め土に大別され、後者はブロック土の含まれ方で細分された。SK24・28・83・84の4基で柱痕が確認され、SK84底で礎板の可能性のある板状木片が出土した。また、SK23は底面に柱圧痕と思われる窪みが検出された。出土遺物はSK12・23・24・28・83・84から古墳後期土師器片が出土している。

ST10 (第86図) III②区 VL13

ST09と重複し、主体は調査区西外へ延びる。形状・埋土が類似するSK11・115・25が直線的に並ぶことから整理時に掘立柱建物跡と認定した。検出された部分は東側桁行と思われ、N16°E方向に2間約5.0m、約2.5m間隔に配置する。柱穴跡は直径約60~90cmの不整円形を呈し、検出面から底面までの深さは約16~24cmと浅い。埋土は地山の灰色シルトブロックを多く含む下層と黒褐色土の上層に分けられ、柱痕は確認されなかった。出土遺物はSK11から平安時代の回転糸切須恵器杯、SK115から古墳後期土師器片、SK25から弥生?壺小片他が出土した。微高地域では平安時代遺構・遺物が他に検出されていないので混入と考え、SK115出土土器から古墳後期の所産と判断した。

ST11 (第87図 PL25) III④区 VIV03

中央微高地南部に位置し、他遺構との重複はない。4つの柱穴状ピットが方形に配列することから調査時に掘立柱建物跡と認定した。1間四方の小規模な建物跡で、東西辺は1.0~1.2m、南北辺は1.2~1.4m、東西辺方位はN0°Wである。柱穴は直径20~40cmほどの円形を呈し、検出面から底面までの深さは10~20cmと浅い。遺物はわずかな土器片が出土したのみである。時期の詳細は不明である。

ST12 (第87図 PL25) III④区 VIM01・02・06・07

微高地中央の調査区東壁際にあり、SB35を切り、北側上部は攪乱で削平される。調査時に柱穴跡が数基近接して検出されたことからST12を認定したが、整理時の検討で2棟の重複と想定されたのでA・Bに分離した。本遺構のみ調査時の番号を尊重したため変則的な遺構番号となった。周囲にあるSK203~205はST12P4と直線的に配列し、SB36柱穴跡もこの直線的配置と対応するようにもみえるが、一つの建物跡には大きすぎ、梁行の規模に比して柱穴跡が少ないことから本跡に含めなかった。

ST12AはP1~3で構成され、それぞれ2基ずつ柱穴跡が重複する。検出された柱穴列は梁行と思われ、2間約4.1m、柱間寸法は南から約1.7、2.4mを測る。桁行は柱間寸法約2.6m以上と思われるが、桁行柱間寸法が長すぎ、逆に梁行が短いなど認定に不安が残る。埋土は黒褐色土を基調としながら地山の灰色ブロックの含まれ方から分層され、柱痕は検出されなかった。P1上部からは略完形甕と白玉破片、底からは礎板と思われる板2枚、P2からは杯、滑石製紡錘車片や木片が出土した。P1の甕は柱穴跡上層から横倒し状態で出土し、柱穴跡の窪地内に転倒、もしくは埋納されたと思われる。

ST12BはP5・4から構成される。大部分が調査区外へ延びると推測され、規模等は不明である。P4・5は柱間寸法約1.8mを測る。埋土は地山の灰色ブロックを含む。遺物は古墳後期の壺・小型壺・甕・杯・高杯・須恵器、弥生・不明土器片が出土した。

ST13 (第87図) Ⅲ②・⑤区 VL23・24

微高地中央に位置する。整理時に配置関係からSK20・54・79・96・238・252の6基で構成される掘立建物跡と認定した。ST14に重なるが、直接切り合わないため前後関係は不明である。また、北側梁行中央の柱穴跡想定位置はⅢ⑤区調査時に工事用杭があって未調査である。本跡は棟方向N38°E、桁行2間約4.6m、梁行2間約3.7mの規模で、中央の柱穴跡と西桁行中央の柱穴跡の有無は調査で確認できておらず、側柱建物跡か総柱建物跡かは不明である。柱間寸法は桁行で約2.3m、梁行で約1.8～1.9mを測り、柱穴跡は直径40～90cmの円形・楕円形を呈して検出面から底面までの深さは40～60cmである。埋土は黒～黒褐色土基調の柱痕と、灰色シルトブロック土を含む埋め土に大別され、後者はブロックの含まれ方で分層された。柱痕はSK79・252の2基で確認された。なお、本跡南に近接するSD19は類似方位で本跡に伴う可能性がある。遺物はSK20・252で出土せず、SK54・79・238から古墳後期の土師器・須恵器片が出土し、SK96から弥生土器片が出土した。古墳後期の所産と思われる。

ST14 (第87図) Ⅲ②区 VL23

ST13南側に位置するが、直接切り合わない。Ⅲ②区検出の柱穴跡を整理時に検討し、長方形に配置するSK78・89・90・59・97の5基からなる建物跡と認定したが、北西隅の柱穴跡は確認できておらず、認定に不安も残る。主軸方位はN36°E、規模は梁間1間(約2.8m)×桁行2間(約4.4m)である。桁行柱間寸法は南側から1.7m、2.7mで北側が長い。柱穴跡は直径40～60cm前後の円形で検出面からの深さは30～40cmである。埋土は柱痕が黒褐色土を基調とし、埋め土は灰色シルトブロックを多く含み、ブロックの含まれ方で細分した。出土遺物はSK78・59・97から弥生土器片、SK89から古墳後期土師器片、SK90から不明小片が出土し、古墳土師器はSK89のみで他は弥生土器が出土した。

ST15 (第84図) Ⅲ④区 VIQ09・14

微高地中央南よりにあり、重複する囲溝址2とは直接切り合わない。囲溝址2周辺の柱穴跡配置を整理時に検討し、梁行1間約(2.2m)、桁行2間(約3.2m)の本跡を認定したが、北側柱穴跡が未検出で認定に不安が残る。柱穴跡は直径30cmほどの円形の平面形で、検出面から底面までの深さは20cm前後である。埋土は黒褐色土の単層で出土遺物はない。これまで囲溝跡に柱穴跡が伴うとも指摘されるが、本遺跡内では他の囲溝址に伴う柱穴跡がなく、本跡も方位が異なることから囲溝址とは別の建物跡と判断した。

④. 土坑

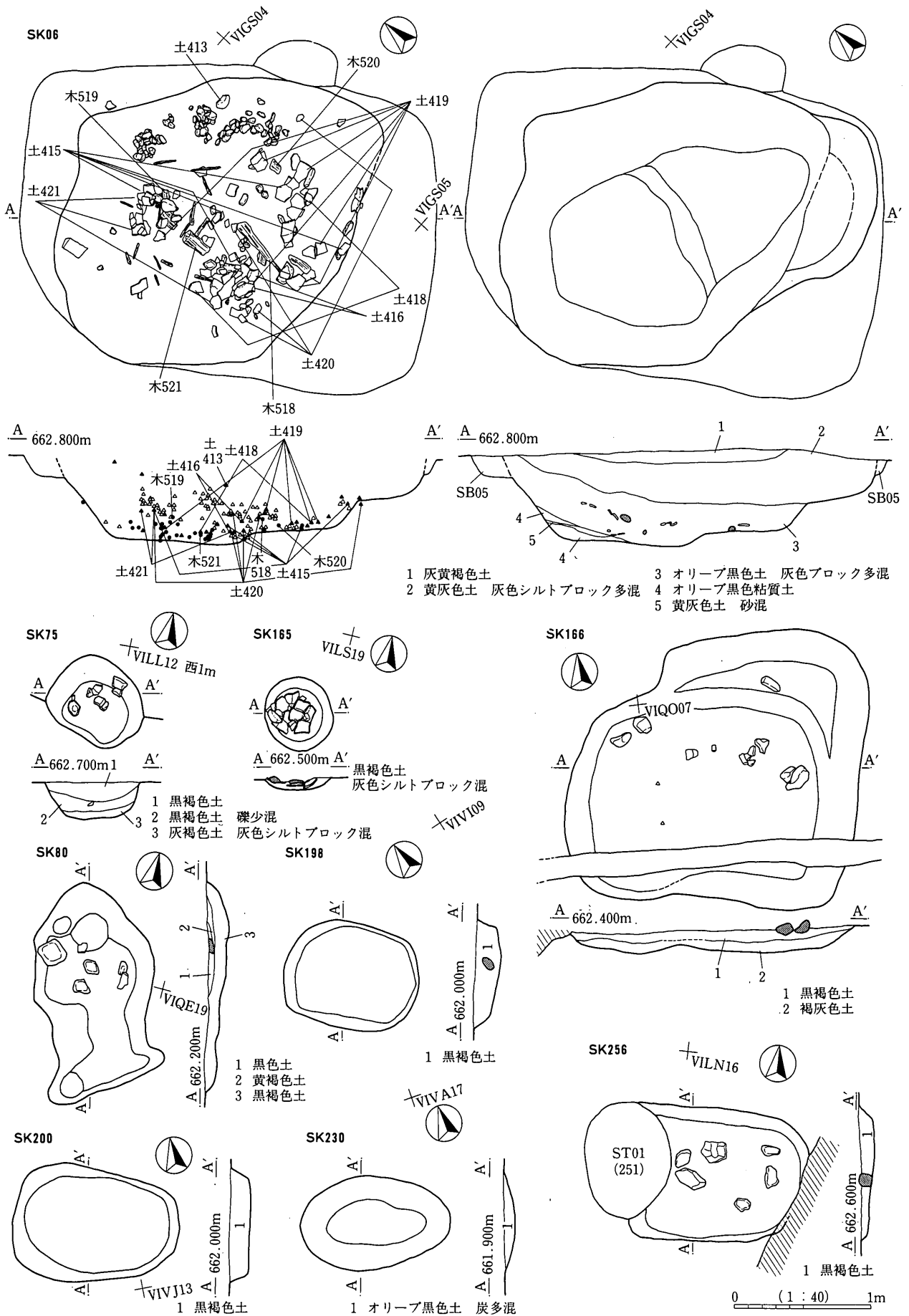
柱穴跡以外の特徴的な土坑を報告する。

SK06 (第88図 PL26) Ⅲ②区 VIG05・10

微高地北部に位置し、SB05中央を切って、SK107に切られる。SB05は本跡の一部とも考えたが、主軸方位が異なることや、SB05類似形態のSB06が近接することから別遺構とした。平面形は長軸約2.8m、短軸約2.1mのやや不整形円で、東側から階段状に南西へ深く傾斜する。西・南壁は急傾斜で、検出面から底面までの深さは64cmを測る。浅い北東部はSB05の一部とも考えたが、埋土の様相から本跡の所産と結論した。埋土は2・3層の地山ブロックを大量に含む埋め土を主体とし、西壁際に砂質の褐灰色土7層と薄い黒褐色土6層が交互に堆積する。ただし、3層下部と西壁際の6・7層とは遺物の出土状況に差はない。遺物は3層を中心に略完形・完形の古墳後期甕・杯破片、木片が出土した。北壁には貼りつけられたような拳大河原石の集中があるが性格は不明である。祭祀器物の廃棄土坑か、井戸跡と考えられる。

SK75 (第88図 PL26) Ⅲ②区 VIL13

微高地中央に位置する。SB25を切り、ST01西桁行延長上にあるが、関係は判然としない。長軸約0.7m、短軸約0.6mの楕円形平面形で、断面はU字状を呈し、検出面から底面までの深さ30cmを測る。埋土は底上に地山シルトブロックを含む土層、上部に黒褐色土層が入る。古墳後期の土器片が多く出土した。



第88図 微高地の土坑

SK80 (第88図 PL26) Ⅲ②区 VIQ21

微高地南部にあり、平面形は長軸約1.5m、短軸約0.9mの不整楕円形を呈する。埋土上部に地山ブロック土を含む土層があるが、黒褐色土を主体とし、散在的に弥生土器片や縄文晩期土器片、土製円盤、不明土器片若干、台石が出土した。底面に凹凸があり、壁の立ち上がりも不明瞭など木根痕の可能性はある。

SK165 (第88図 PL27) Ⅲ④区 VIL25

微高地中央に位置する。平面形は直径50cmの円形タライ状で、検出面から底面までの深さは10cmと浅い。底面付近から古墳後期の土師器甕片が出土し、埋土はシルトブロックを含む黒褐色土の単層で人為的に埋め戻された可能性がある。

SK166 (第88図 PL26) Ⅲ④区 VIQ09

微高地南部に位置し、囲溝址2に切られる。平面形は南北約2.1m、東西約2.1mの北東部が突出した方形を呈する。壁は北東側が緩やかで途中から一段深くなり、東西約2.1m、南北約1.6mの隅丸長方形を形づくる。底面は平坦ながらも凹凸がある。埋土は上層に黒褐色土、下層に褐灰色土がある。出土遺物は弥生中期壺・甕・鉢が多く、僅かに古墳後期の壺?・甕・須恵器片、土製円盤が出土した。囲溝跡に切られる所見から古墳時代土器は混入とみられる。他に底面近くで磨製石鏃が2点出土した。

SK198 (第88図) Ⅳ②区 VIV12

微高地南部に単独であり、平面形は長軸約1.0m、短軸約0.8mの楕円形で、断面形は逆台形で検出面から底面まで深さ約20cmを測る。埋土は黒褐色土の単層である。弥生中期後半の土器3片のみ出土した。

SK200 (第88図) Ⅳ②区 VIV13

類似形態のSK198の南6mにあり、平面形は長軸1.0m、短軸約0.8mほどの楕円形で、断面は逆台形を呈し、検出面から底面までの深さは約15cmを測る。埋土は黒褐色土の単層で、弥生甕片少量出土した。

SK230 (第88図) Ⅳ③区 VIU25

微高地南部に単独である。長軸約1.1m、短軸約0.7mの楕円形の平面形で、検出面から底面まで6cmと浅い。埋土は炭を多く含むオリブ黒色土の単層で、出土遺物はもなく、時期・性格不明である。

SK256 (第88図 PL27) Ⅲ⑤区 VIL19

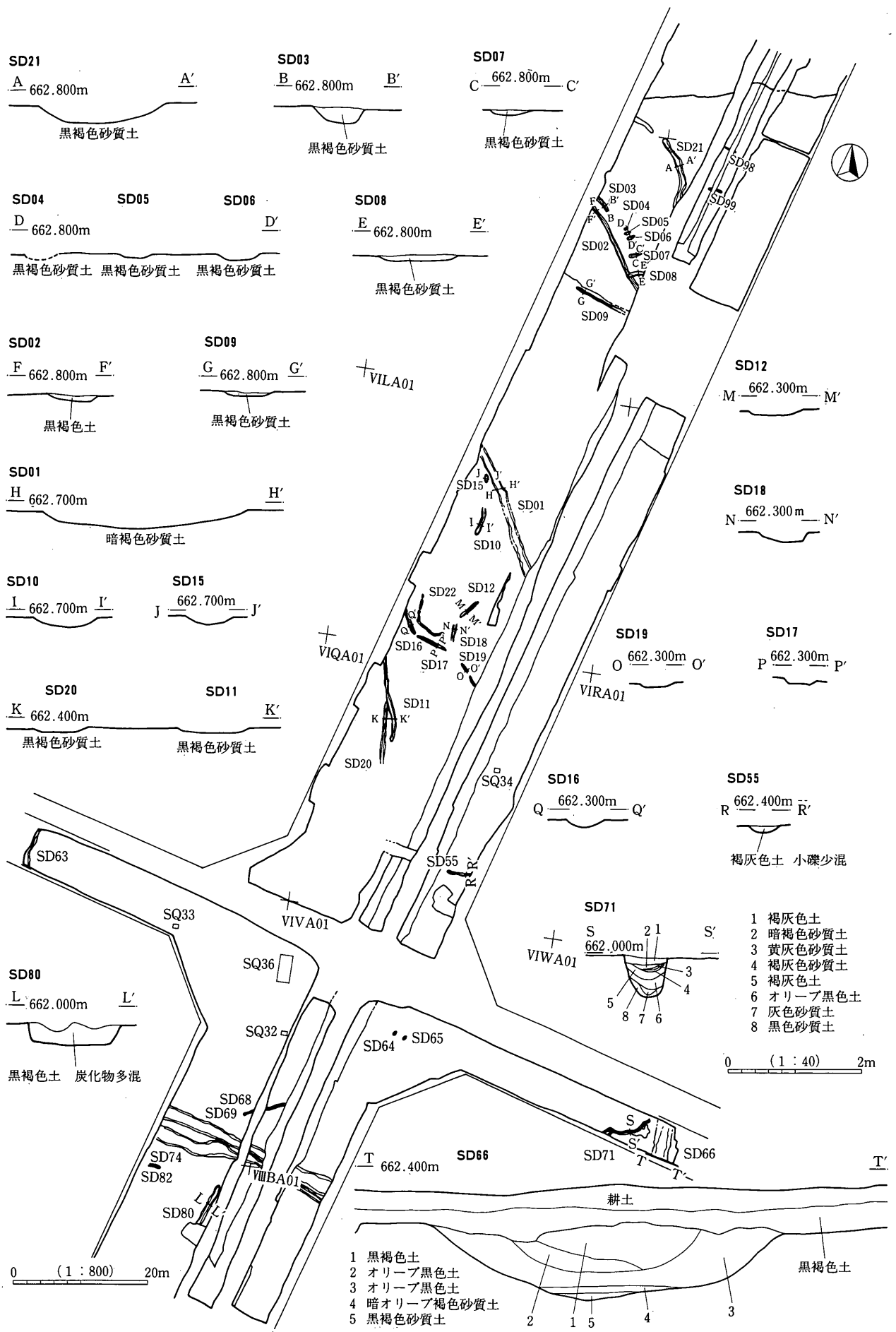
微高地中央にあり、西端をST01のSK251、東端を攪乱に切られる。平面形は長軸約1.3m、短軸約1.0mの隅丸長方形を呈し、断面形は浅い逆台形で検出面から底面までの深さは約10cmほどである。埋土は黒褐色土の単層で、底面付近で弥生土器破片や礫が散在的に出土した。

⑤. 溝跡

微高地域では囲溝址以外に31条の溝跡が検出された。このなかでSD82・SD68(・97)・54は断面形状等から囲溝址とも思われるが断定できないもので、短い溝跡が平行しているSD98・99とSD64・65は施設の一部と思われる。SD22はST03に伴う可能性もあり、SD12・16・17も同様かもしれない。上記以外には古墳後期以後の耕作に関連した溝跡と思われる。微高地の溝方位はおおよそ2グループに分けられる。一つは正方位に近いN10～20°E・Wか直交方位で、微高地中央から南部に分布する。Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ区の水田遺構にも認められる方位だが、微高地では真北か直交方向のSD10・18・55・66と、ややずれるSD09・11・20・68・69(74)・63?に細分しうる可能性もある。もう一つはN30～55°Eか直交方向のもので、微高地北部に多い。SD01・02・03～06、21?が該当し、SD07・08も含まれるか。耕作関連の溝跡と断じ得ないが、SD12・16・19も同方位ではある。正方位以外は地形に規定されたか、方位を意識しながら地形に合わせた変則的な方位とみられる。

SD01 (第89図 PL27) Ⅲ②・⑤区 VIL08・13・14

微高地中央をN29°W方向にSB41を切って横断する。西端は調査区外へ延び、東はⅢ⑤区攪乱部分ま



第89図 微高地の溝跡

で確認されたが、その延長先は区画整理時に削平されたためか検出されなかった。確認長は約20m、幅は約0.1～1.2m、断面形は立ち上がりが緩やかなU字状で、検出面から底面まで深さ約10cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層である。走行方位は地形傾斜方向に近いが、走行方位が類似するSD02やSD11・20は関連すると思われる。出土遺物は古墳後期土師器類が主体ながら、僅に瀬戸美濃連房すり鉢、大窯？すり鉢片があり、近世末頃の所産とみられる。微高地域が水田化された段階の用水跡と思われる。

SD02・03 (第89図 PL27) Ⅲ②区 VIG09・10・15

微高地北部に位置する。SD02は西端がやや屈曲するが、ほぼN32°W方向にⅢ②区を横断し、Ⅲ④区では延長先が検出されず、確認できた長さは約14.1mを測る。なお、SD08は検出時に本跡を切るように看取されたが、接触部分に平石が検出され、関連する溝跡と捉えた。幅約0.6m、断面形はU字状で底面は東へ傾斜し、検出面からの深さ約10cmである。SD03はSD02西部に平行し、東端は重機で削平したため約2.4mほどしか確認できなかった。幅約0.4m、断面形はU字状で検出面からの深さ約10cmである。なお、SD02に直交するSD04～08、離れて平行するSD01は関連する溝跡と思われる。出土遺物は弥生・古墳後期土師器しかないが、SD01と同様に近世以後の所産と思われる。

SD04～08 (第89図 PL27) Ⅲ②区 VIG10・15

微高地北部のSD02北側に直交方向で並列する溝跡群で、まとめて記述する。幅は0.2～0.6mで南西端が広く、東端は浅く消え、最長のSD08で長さ約2.1mと短い。方位はSD04からN56°E、SD05でN64°E、SD06でN54°E、SD08でN72°Eとなる。SD08は南端のSD02と重なる部分で平石が検出され、関連すると思われる。埋土は砂質の強い黒褐色土の単層で、検出面から底面までは数cmと浅い。畝跡とも思われるが、SD08はSD02から分岐した枝用水の可能性もある。出土遺物は弥生土器・古墳時代土師器片しかないが、SD01同様に近世以後の所産と思われる。

SD09 (第89図) Ⅲ②区 VIG19・20

SD02南方にあり、SB14・17・18を切る。N79°W方向で西端は浅く消え、東端も調査区外へ延びるが、隣接Ⅲ④・⑤区では検出されなかった。調査区内で長さ約5.3mを確認した。幅約0.2～0.4で検出面から底面まで数cmと浅い。埋土は黒褐色砂質土の単層である。本跡北側が深耕でⅢ層黒褐色土が一段深く落ち込み、本跡はこれに平行する。出土遺物はないが、微高地域が耕地化した以後の所産と思われる。

SD10・15 (第89図) Ⅲ②区 VIL08・13

SD10・15はSD01南側直交方向の同一ライン上にある。SD10は若干カーブしながらN11°E方向に延び、長さは4.4m前後のみ検出された。幅約0.5m、断面形は緩やかなU字状を呈して深さは残りが良いところで検出面から10cmほどである。SD15はその約4m北先にあり、N3°W方向、両端は浅く消え、長さ約1.0mほど確認した。幅約0.4mで断面形や深さはSD10同様である。両者は連続した可能性があり、SD10南側のSD18も関連する疑いがある。弥生土器小片しか出土していないが、方位から微高地が耕地化した以後の所産と考えられる。

SD12 (第89図) Ⅲ②区 VIL23

微高地中央付近にある。遺存不良で深さ数cm、長さも3.5mほどの残存である。幅は約0.2mで、走行方向はN40°Eとなり、SD01直交方向か、ST13と同方位ともみられるが両者との関係は明らかにしえなかった。摩滅した土器小片2片しか出土していない。

SD16・17 (第89図) Ⅲ②区 VIL22・23

微高地中央南よりにあり、位置関係から同一溝跡の可能性もある。SD16は西端が調査区外に延び、調査区内ではN31°W方向に約4.0mほど延び、南端が浅く立ち消える。その先にSD17が屈曲するようにN76°W方向に長さ約4.9m続いて東端が浅く消える。何れも深さ数cmしか残存せず、幅はSD16が20

～30cm、SD17は40cmほどである。出土遺物はない。北に類似したSD22がある。

SD18 (第89図) III②区 VIL23

微高地中央に位置し、SK97を切り、SK59との関係は不明である。遺存不良で長さ約2.3mほどの残存で、幅約0.4m、検出面から底面まで数cmと浅い。N2°E方向で北延長先に同方向のSD10があり、北東に近接するSD12、南のSD19とも関連するようにみえるが、関係は断定できなかった。古墳時代杯や弥生甕片が出土したが、いずれも小片である。

SD19 (98) (第89図) III②・⑤区 VIQ03

微高地中央にあり、III⑤区SD98も同一溝跡と捉えてSD19に含めた。ST07との関係は不明である。両端は浅く消え、N40°W方向の長さ約3.6mを確認した。幅約0.2m、埋土は黒褐色土の単層である。西延長先のSD17・18や直交方向SD12との関連は不明である。出土遺物はない。

SD11・20 (第89図 PL27) III②区 VIQ01・02・07

微高地中央南よりにあり、SD11と20は前後関係が不明ながら、ほぼ重複し、同一溝跡の作り替えと捉えた。何れもSB22を切る。SD11はN11°W方向に北端は調査区外へ延び、南端は浅く消えて調査区内で約12.5mほどを確認した。SD20はSD11途中で検出され、N4°W方向に約9.2mほどの長さを確認した。いずれも幅は0.3～0.6m前後で検出面からの深さは数cmである。出土遺物は弥生・古墳後期土師器片があるが、形状と走行方向からSD01に関連する用水跡と思われる。

SD21 (第89図) III②区 VIB25・H01

微高地北端際にあり、西部はN53°W方向で調査区内に入り、途中N9°E方向に屈曲して調査区東外へ延びる。遺存不良で一部は底面のみの残存である。幅は0.5～0.9m、長さは約16.0mを確認した。遺存良好なところでは断面U字状で検出面から底面までの深さ約10cmを測る。底面は東へ傾斜して細かな凹凸、酸化鉄集積が認められた。埋土は黒褐色砂質土の単層で、出土遺物はない。用水と思われる。

SD22 (第89図) III②区 VIL22・23

微高地南部ST03西・南側を取り巻くようにあり、SK65に切られる。西部はN2°E方向にほぼ直線的に4.4m続き、SK65周辺で折れてN28°W方向にカーブして東端は屈曲して約4.3m続く。幅は約0.2mだが、底面しか残存しないところもある。ST03の付属施設とも思われるが、断定はできない。

SD55 (第89図) III④区 VIQ23・24

微高地中央南よりに位置し、上部は攪乱で壊され遺存不良である。西端は浅く消え、東端は調査区外へ延びる。直線的N89°E幅約0.2～0.3m、長さ約3.6mを確認した。断面形はU字状で、検出面から底面までの深さ約6cmと浅い。砂を含む褐色土の埋土で、I・II層の遺構とみられる。

SD63 (第89・90図) IV①区 VIP21・U01

IV①区北部の本線交差道路脇で検出した。N9°W方向の溝跡で東岸しか検出できず、規模は不明である。近接して現用水があるが、調査区壁では現耕土下に立ち上がりが観察され、区画整理以前の所産と思われる。溝底には溝と同方向の木材が出土した。護岸施設か石垣の基礎とみられる。

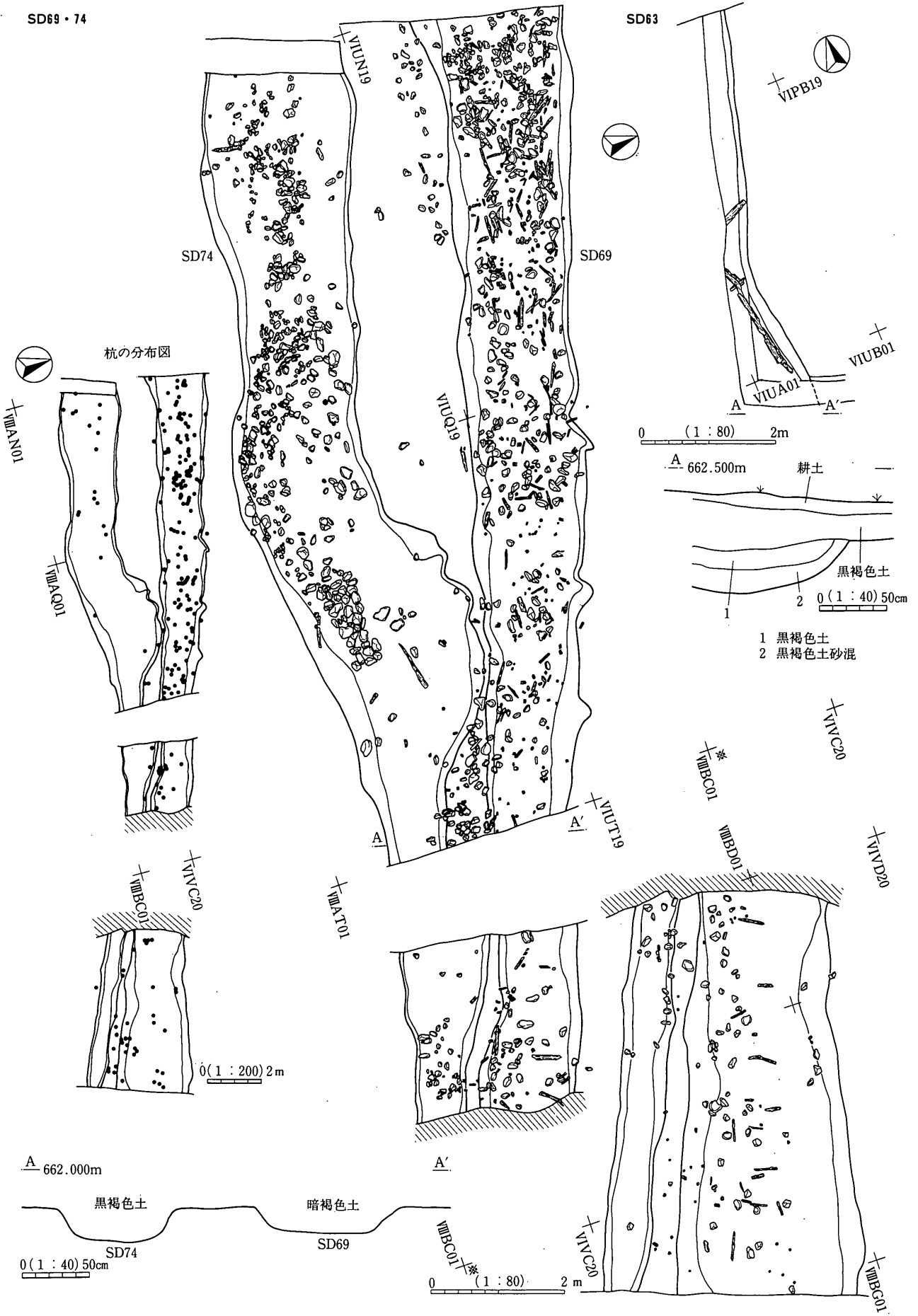
SD64・65 (第89・91図) IV②区 DMV13

微高地南部にあり、N15°E方向に1.4m間隔に併行する幅約0.2m、長さ約0.8mの短い溝跡である。形状から構築物の一部と思われる。逆台形の断面形で検出面から20cmほどの深さである。埋土はオリブ黒色土を基調とし、SD65下部に黒味の強い土層がある。出土遺物もなく時期不明である。

SD66 (第89図 PL27) IV②区 VIW18

IIIIV区境の交差道路脇IV②区東端に位置する。N4°E方向に調査区を横断し、長さ約4.1mを確認した。その南方のIV・V区境の立会い調査で延長先と思われる溝跡が検出された。幅約2.2mの緩やかなU

SD69・74



第90図 SD63、69・74

字状断面で、検出面からの深さは約50cmを測る。埋土は上から小礫を含む黒褐色・オリブ黒色砂質シルト、薄く暗オリブ褐色、黒褐色の砂質土である。正方方位を意識した用水と思われる、出土遺物はない。

SD68 (・97) (第89・90図) IV①・③区 VIU20・25、V16・21

微高地南部に位置し、IV①・③区に分割調査した。囲溝跡4とは重複位置ながら、直接切りあわず前後関係は不明である。走行方向はN76°Eで、東端は埋設用水路で壊され、西端は浅く消えて直角に折れるように短く浅いくぼみが付く。調査域内で長さ約6.2mを確認し、幅は12cm前後、断面形は緩やかなU字状で検出面から底面まで深さ約8cmほどである。埋土は黒褐色土の単層で、出土遺物はない。本跡西端が屈曲するようにみえることから囲溝跡の可能性も残る。

SD69・74 (第89・90図 PL27) IV①・②・③区 VIU24・25、V21・22、VIII B01・02

微高地南部に位置し、IV①～③区に分割調査した。中央東よりが埋設用水で壊される。SD69・74は隣接・平行し、同一溝跡の作り替えとみられ、中間も溝内同様の杭・礫が分布する。SD69が直線的なので構築当初のものかもしれない。なお、SD80は南に直交し、関連する可能性がある。

SD69はN73°W方向に直線的に調査区を横断する。幅約1.4～2.8mで長さは約26.8mを測る。断面形は立ち上がり急なU字状で、埋土中に横倒しの杭や礫が出土した。礫は溝内に多く、埋め戻しされた可能性がある。これらの木材・礫下の岸際や溝中央に護岸の施設と思われる杭が多数検出され、補強や追加されたものが重なると思われる。出土遺物は杭、古瀬戸合子？、瀬戸美濃連房鉄釉碗片がある。SD74はSD69南側にあり、西部は幅約1.8～2.2mと幅広く蛇行し、東部は幅約0.7m前後で直線となる。西と東で形状が異なり、本跡内は流路の変化や改修が加えられた可能性がある。断面形は逆台形で、検出面から底面までの深さは約20cmほどである。溝中央に蛇行する帯状の礫分布が認められ、杭はSD69より少ない。出土遺物は杭と瀬戸美濃連房丸碗と大窯？皿がある。近世の所産と思われる。

SD71 (第89図 PL27) IV②区 VIW17

IV②区北の交差道路脇の東端にあり、不整形な形状から遺構ではない可能性がある。全体的にN70°E方向に湾曲し、南端は二つに分岐する。幅は約0.5m、断面形はU字状で検出面から底面まで深さは約30cmを測り、底面は凹凸がある。埋土は褐色を基調として薄い黄灰色、暗褐色、黒色土層が挟まれる。遺物は僅かな弥生土器と不明土器小片がある。時期・性格不明である。

SD80 (第89図) IV①区 VIIIA05

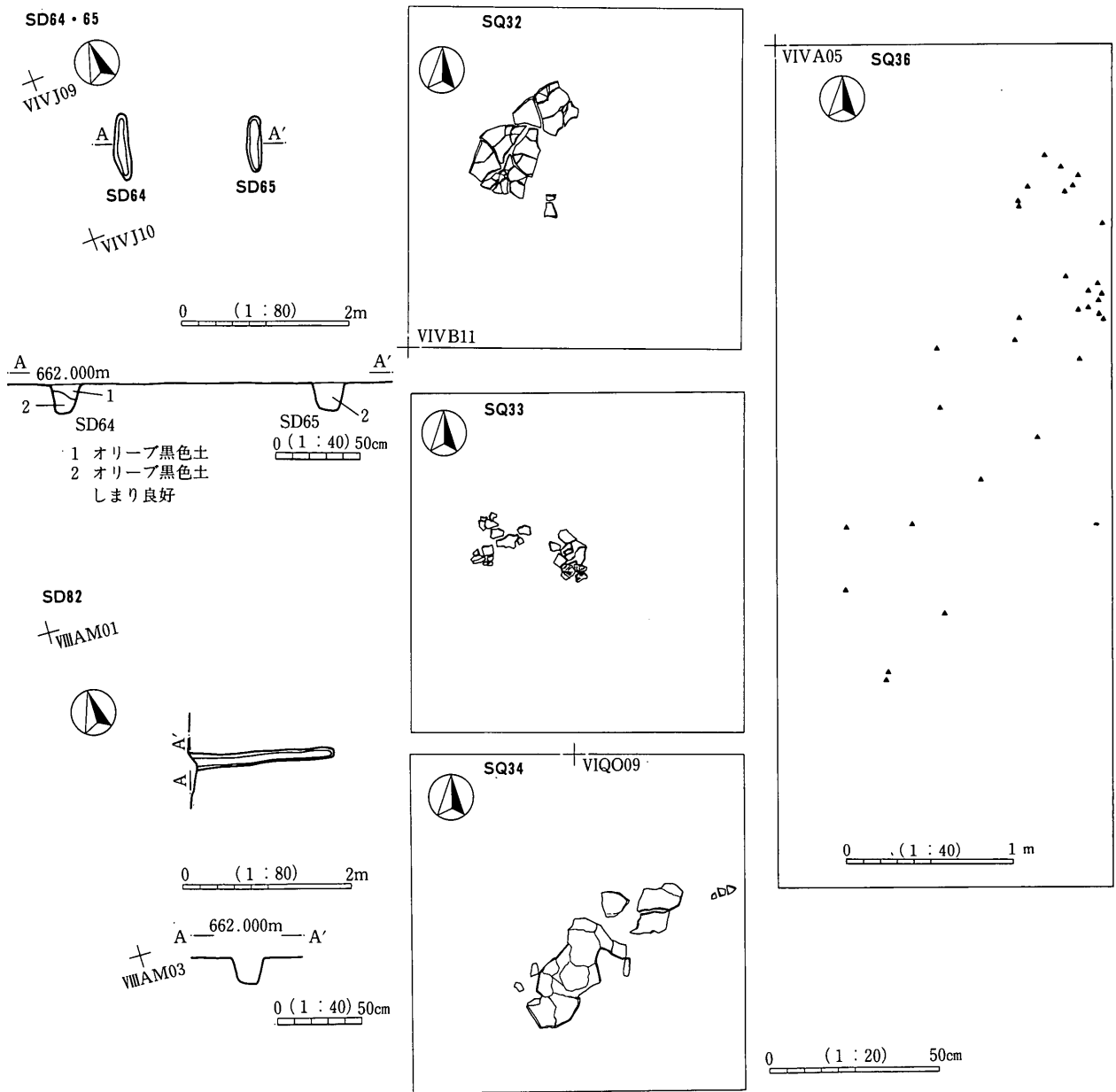
微高地南端に位置する。N19°E方向に延びて、SB40を切り、南端は攪乱と捉えた部分に重なる。幅約0.6～0.7mと一定し、埋土は炭化物を多く含む黒褐色土の単層である。断面形は浅い逆台形で検出面からの深さ20cmを測る。南端の攪乱部分は東延長先がSB30、SB37・38の重複境に合致し、本跡と連続した溝跡とも思われる。時期は不明ながら、SD69・74とは直交しており、関連する可能性がある。

SD82 (第89・91図) IV-①区 VIIIA04

微高地南端の調査区西壁にかかって検出された。断面形は囲溝址と類似する長方形で、対応する北辺はSD69・74に壊された可能性もあるが、断定できないためここで扱う。西端は調査区外へ延び、東端は調査区内で立ち上がる。N80°W方向に約1.7mを検出した。幅約0.2m、検出面から底面の深さは約18cmで、埋土は黒褐色土の単層である。弥生中期？土器や不明土器小片が僅かに出土した。

SD98・99 (第83・89図) III⑤区 VIH02

微高地北部に位置する。SD98・99はSB11・12・43底面調査中に検出され、両者は6.4mほど離れて平行する。SB11・12・43との前後関係は調査ミスで不明である。SD98は幅約0.2m、長さ約1.7mで、底付近のみ残存する。埋土は僅かながら黒褐色土と確認できた。南側のSD99は幅約0.2m、長さ約2.0mで、底付近の残存ながら同じ埋土であった。何かの施設の一部と思われるが、時期・性格は不明である。



第91図 SD64、65、82、遺物集中

⑥. 遺物集中

掘り込みを伴わず、大型土器破片等の集中出土を遺物集中とした。微高地南部で4箇所みつき、SQ32～34はV層上面検出でSQ32・34が縄文晩期、SQ33は縄文前期土器を出土し、SQ36のみⅢ層黒褐色土層下部検出で弥生中期後半土器片が集中して出土した。SQ32・34のみでは不安もあるが、黒褐色土層の形成（＝植物が繁茂する安定期）は縄文晩期～弥生中期の間であった可能性を示すと思われる。

SQ32 （第91図） IV①区 VIV11

微高地南部の若干窪んだ地形内V層上面で検出された。40cm四方ほどの範囲に縄文晩期と思われる土器の大型破片が集中的にみつかった。土器は完形にはならなかった。

SQ33 （第91図） IV①区 VIU03・04

微高地南部のV層褐色シルト上面で検出された。10×20cmほどの範囲に土器破片が集中出土したもので、土器は細かく割れていた。遺存不良ながら縄文前期土器1個体分の大型破片とみられる。

SQ34 (第91図) Ⅲ④区 VIQ14

微高地中央南より、囲溝址2付近のV層上面で同一個体と思われる破片が50cm四方に集中的に検出された。土器は遺存不良で表面が剥落するが、縄文晩期の浅鉢である。土器は図示しえなかった。

SQ36 (第91図) IV①区 VIV06

微高地南部の囲溝址3の南側、SD54付近で検出された土器集中である。土器は北東から南西へむかって帯状に散布し、複数個体分の小片が散在する。時期は弥生中期後半が多い。

⑦ 杭列

微高地北端で1条のみ杭列が検出された。微高地と低地の比高差が減少し、水田化されたことを示す。

SA52 (第83図) Ⅲ⑤区 VIN01・02

微高地北部、SB11・12・43を切っている。N22° E方向に6本の杭が間隔を空けながら直線的に約5.0m並ぶ。杭は遺存不良ながら割材を用いる。Ⅲ区SA31と同様のものか。

3. Ⅲ④区・Ⅳ②区境の交差道路沿いの立会い調査 (第92図)

平成13年5月11・16日に、Ⅲ④区とⅣ②区境の東西交差道路拡幅部分の工事立会い調査を実施し、道路際に掘削された溝の断面を観察して特徴的な地点のみ土層図を作成した。この立会い調査地点では本線のⅢ区北部河道跡低地群の延長先と思われる低地が確認されたが、北部河道跡低地とやや様相が異なり、全体的に窪んだ低地内に狭い河道跡状の深い落ち込み地形が並列していた。土層はほぼ全域に道路盛り土、その下に旧耕土となる1 (I) 層黒褐色～褐灰色土、2 (II) 層黒褐色土～灰色土、泥炭をベースとする黒褐色土の3 (III) 層が分布する。その下は浅いところで暗褐色のシルト・砂質土や灰色シルトといったV層が露呈し、溝状の河道跡低地部分は上部に有機物を含む黒色砂質シルトが認められる。それ以下は河道跡低地ごとに様相が異なる。東側低地内は4層下に木片を含む黒～オリーブ黒色の砂質シルト、粗砂層と続き、中央の河道跡低地は砂と泥炭、オリーブ黒色土がレンズ状に堆積している。そして、西側の河道跡低地は黒～オリーブ黒色シルト、シルト質砂層に続く。

全体的に底面上に砂層、木片を含む泥炭質の強い土層が堆積し、中央の河道跡は流水があったことが知られる。走行方向からⅢ区北部SD61の延長先の可能性はあるが、確証はない。水田跡は明確に把握できなかったが、東側の河道跡低地内で杭、東部で溝跡が検出された。土器は採取されず、時期やⅢ区北部との関連は明らかにできなかった。

第5節 IV・V区低地の遺構

1. IV・V区の概要（第93図）

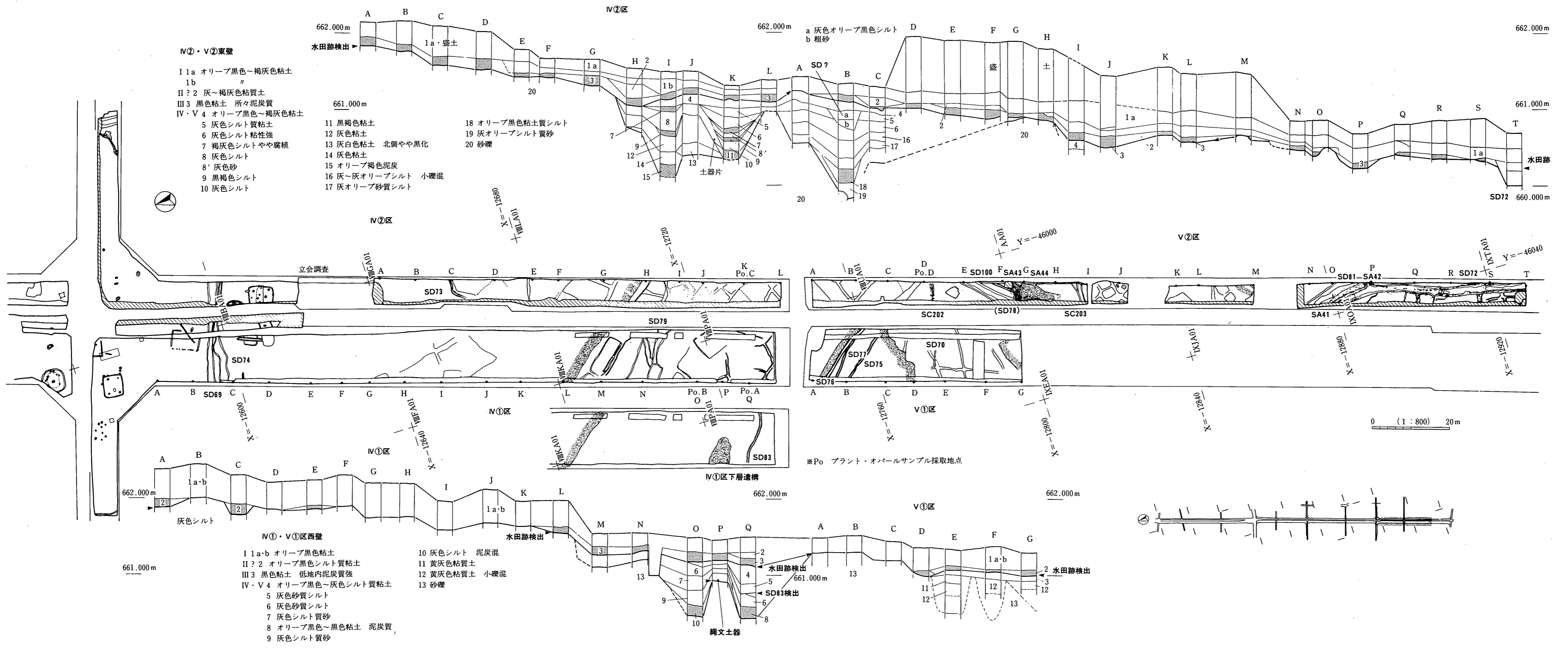
調査概要 調査域南部に当り、V区以南は南箕輪村となる。平成11年度の試掘調査で畦状の低い高まりや杭、溝跡が検出されたことから、平成13年度に面的調査を実施した。まず、微高地側からIV①・V①区西壁沿いに土層と検出面を確認するトレンチを掘削し、IV①区、V①区、V②、IV②区の順に面的調査を進めた。面的調査終了後はIV②・V②区北部にトレンチを入れて下層土層を確認して調査を終了した。また、本線調査終了後の冬季にIV・V区中間の東西交差道路脇の立会い調査を断続的に行なった。

IV・V区周辺では箕輪町教育委員会が③の田中城跡伝承地（第3図）、南箕輪村教育委員会がV区南西の⑦⑧の2地点を調査している（第3図）。③地点は遺構・遺物が判然とせず、城館跡の形状も不明であったが、今回北側隣接地の立会い調査では伝土塁跡北側に大きな溝状の落ち込み3条が検出された。また、南箕輪村教育委員会の⑦地点はトレンチ調査ながら、イネプラント・オパール分析では地表面下50cmの黒色粘土までしか検出されておらず、今回の調査地点とほぼ類似した状況である。一方、⑧地点では河道跡低地内に3面の調査面があるが、今回のIV・V区調査面は南箕輪村教育委員会調査⑧地点1面に該当し、南箕輪村調査地点の2面目はIV・V区内の対応土層が判然とせず、3面目に該当する土層は認められていない。その一方で、IV①区2面目は⑧地点には対応面がない。

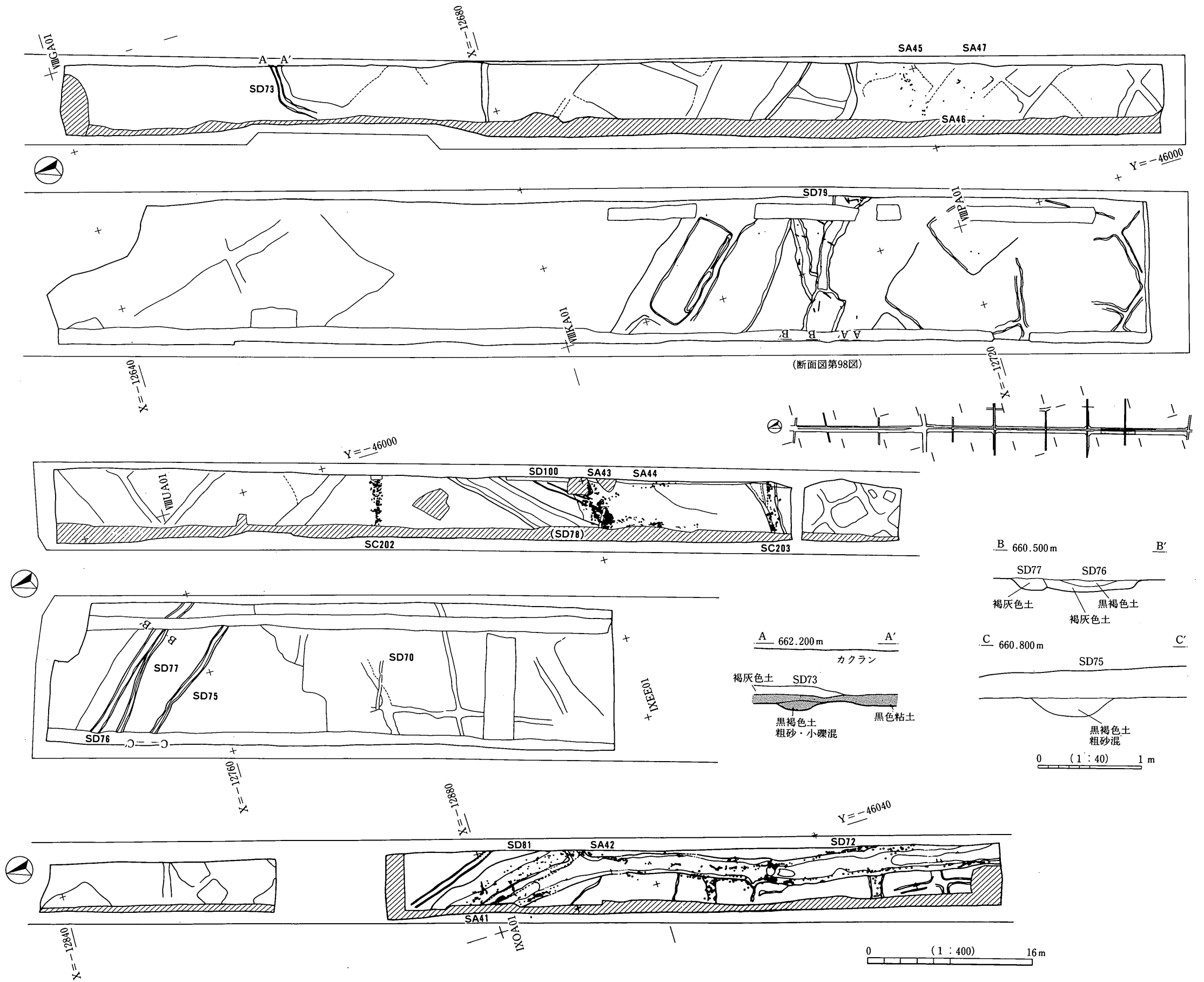
地形 IV・V区は微高地南側から緩やかに傾斜し、微高地西縁を廻って南東方向に延びる埋積途中の河道跡群から構成される低地である。ここはⅢ区北部の河道跡低地群のように深くなく、所々狭い三角州状の高まりを挟み込む。最も広い河道跡低地は微高地西縁を巡ってIV①区南端からV②区北部へ斜めに横断する河道跡低地で、蛇行して南西方向に抜ける。耕地整理以前の用水SD78・72はこの河道跡低地に一部重なる。これと直交してV①区を南西方向へ抜ける浅い低地、さらに平行してV区中央を貫く低地がある。これらの河道跡低地は形成時期の異なるものが複数重複したと思われるが、前後関係は明らかにしえなかった。このなかでIV区南端を貫く河道跡低地は下層から縄文後期と思われる土器が出土し、縄文後期頃には埋積して浅化傾向にあったことが知られた。

土層 IV・V区上部は比較的広域に分布する土層で構成され、下層は河道跡低地を埋積する土層であって低地毎や同じ低地内でも地点によって様相が異なる。上層は1層現耕作土（Ⅰ層）、部分的に残存する2層灰～褐灰色土（Ⅱ層）、黒色粘土層3層（Ⅲ層）である。1層は区画整理以後の耕土で、耕作された締まりのない1a、締まった1b層に細分される。2層（Ⅱ層）は区画整理以前の耕作土と思われ、区画整理で削平されなかった所に部分的に残存するが、僅かな残存なので耕地整理以前でもⅡ層は薄かったとみられる。3層（Ⅲ層）は地表面下約40cm前後にある泥炭質の強い土層で微高地域の黒褐色土層2層（Ⅳ層）から連続する。湿地性が強いながらも安定した環境下で繁茂した植物が生成した土壌で、後に水田耕作土にされたと思われる。また、3層からは弥生中期後半、古墳時代の土師器が少量、中世以後の陶磁器などが採取されている。微高地から連続する土層であることやIV①区下層で縄文後期土器が出土したことから、少なくとも縄文晩期以後～弥生時代中期後半の間に生成されはじめたと思われるが、遺構の年代は明らかにできなかったものが多い。なお、3層は調査時2層と呼称されたが、整理で3（Ⅲ）層に変更した。遺物の注記等は調査時のままなので注意されたい。

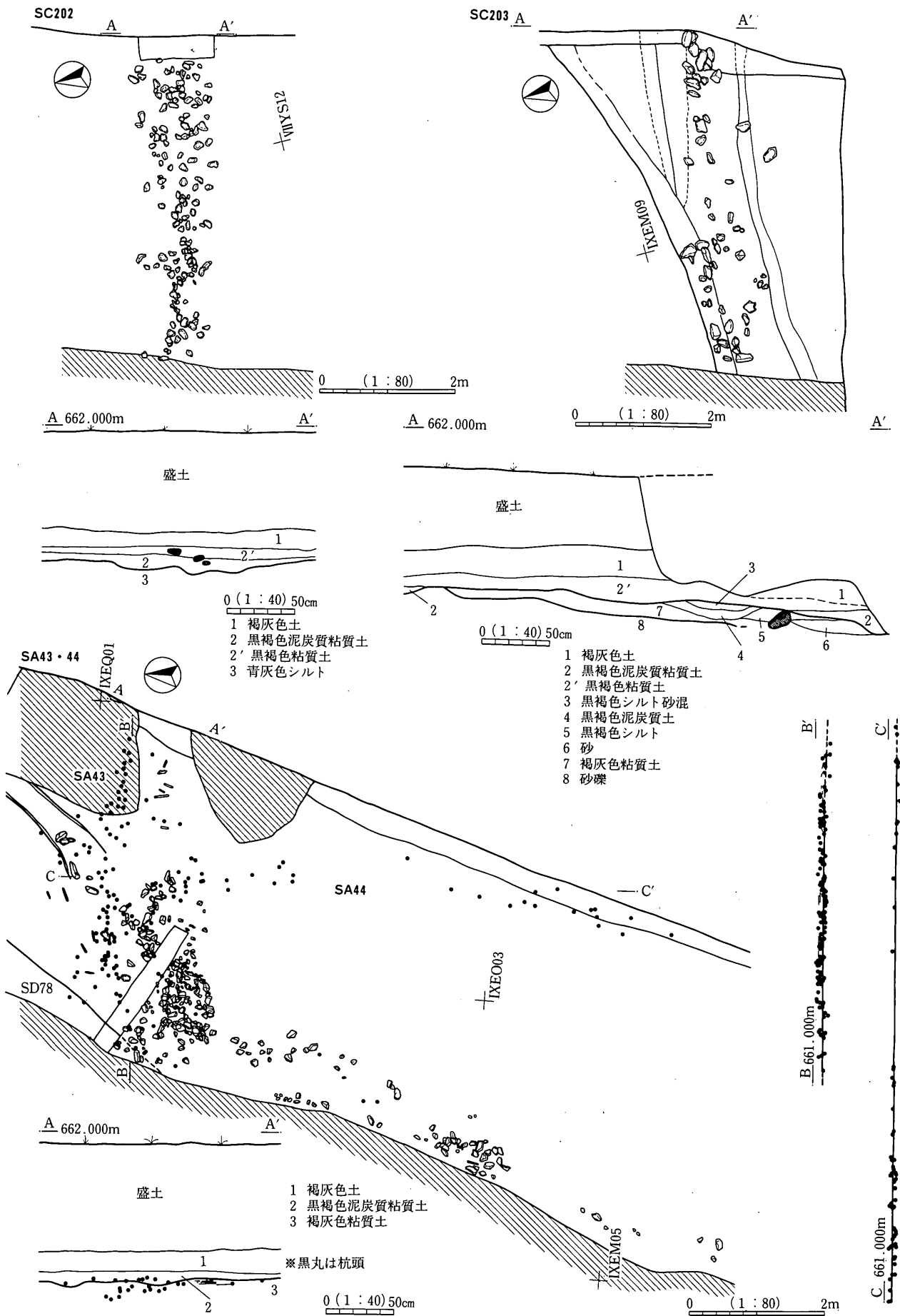
下層は3層の影響をうけて黒味を帯びるオリブ黒色～褐灰色粘土層の4層（Ⅴ層）と、5層灰色シルト（Ⅵ層）が河道跡低地内上部に比較的広く認められるが、最下層が砂礫層である以外は河道跡毎、地点



第93図 IV・V区遺構全体図と土層柱状図



第94図 IV・V区遺構全体図



第95図 SC202、203、SA43・44

毎に様相が異なり、土質も灰色・暗褐色シルト質粘土層、砂層、泥炭等さまざまである。このなかでⅣ区南端の河道跡低地内5層下で粗砂を混じりこむ溝跡SD83が検出され、この下層のオリーブ黒色～黒色粘土、灰オリーブ～灰色砂質シルト層から縄文土器が出土した。この溝跡に関連すると思われる流路がⅤ②区北端でも認められ、連続していた可能性がある。

プラント・オパール分析はⅣ区南端の河道跡低地を中心にⅣ①区2地点、Ⅳ②区とⅤ②区各1地点で実施した。Ⅳ①区南側では3層黒色泥炭質土層と4層オリーブ黒色～灰色シルト質粘土層上部まで大量のイネプラント・オパール、SD83を覆う灰色砂質シルト層までは微量のイネプラント・オパールが検出され、稲作の可能性が指摘されている。Ⅳ②区も同様ながら、さらに下層からもイネプラント・オパールが検出された。一方、Ⅳ①区北側では1・2層から圧倒的な量のプラント・オパールが検出されたが、3層黒色粘土層では極端に減少し、上層のみ稲作を行った可能性が窺えた。Ⅴ②区北部では現耕作土が圧倒的なながら、3層の黒色粘土層では量を減じ、それ以下ではイネプラント・オパールの検出がなかった。

以上のプラント・オパール分析では、Ⅳ区南端の河道跡低地中央部では下層までイネプラント・オパールが検出されたが、その縁辺部のⅣ①区北、Ⅴ②区北では3層黒色泥炭層か上層までしか稲作の可能性が捉えられない結果となった。河道跡低地中央深部のみ稲作が行われていたか、あるいは流水のある湿地環境からイネプラント・オパールが混入したと考えられる。今回の調査ではSD83では出土遺物も伴わず、明確な遺構と断定できなかったため、2面での水田耕作は断定できない。

2. 検出された遺構（第93・94図）

Ⅳ・Ⅴ区全域は3層（Ⅲ層）を除去した4層（Ⅴ層）上面での1面調査を実施し、Ⅳ①区のみ下層の縄文土器散布地点とSD83を検出した2面の調査を実施した。1面遺構はさらに3層上面・中位と3層下面＝4層上面検出遺構があるが、3層上面・中位の遺構はSC202、SA40～47、SD72・78・79・81など部分的なもので、4層上面や掘削途中に個別調査した。3層下面の遺構はSD75～77、3層を耕作土とする水田痕跡がある。この1面遺構には正方位と地形にあわせた方位があり、後者から前者への変化が窺える。

2面はⅣ①区のみで実施したもので、河道跡低地内埋積土層中で縄文後期と思われる少量の土器集中と溝跡1条を検出した。両者は本来検出土層が異なるが、標高が類似するため同一面で調査した。

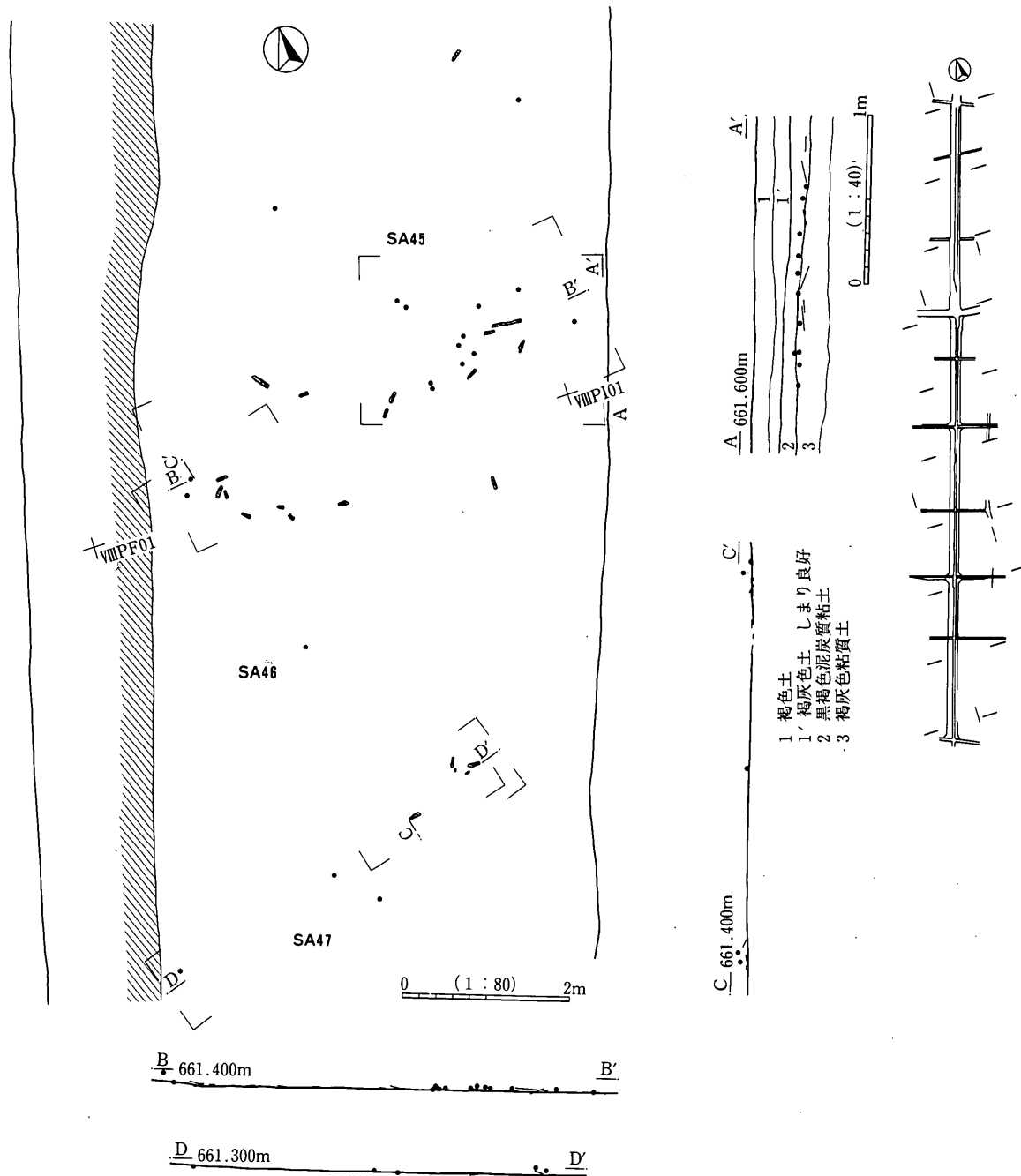
(1) 3層上面・中位の遺構

SC202 （第95図 PL30） Ⅴ②区 ⅧY15

Ⅴ②区北部の3層中で直径10～20cmほどの河川礫集中がN80°W方向に幅1mの帯状に検出された。東端は調査区外へ延び、西側は埋設用水路で破壊されて調査区内では長さ4.8mほどを調査した。調査区東壁の土層観察では盛土も掘り込みも伴わないことから溝跡や暗渠ではなく、3層耕作土の水田跡に伴う上部削平された畦跡の芯材と捉えた。また、西延長先にはⅤ①区溝跡SD70があるが、同一区画に則るものの、構造的な違いから別遺構と判断した。出土遺物は礫内から古瀬戸天目茶碗が出土した。

SC203 （第95図 PL30） Ⅴ②区 IXE13・14

Ⅴ②区中央の三角州状高まり南縁に位置する。東端は調査区外へ延び、西端は砂礫層の高まりに接する部分で途切れ、規模は幅約1.3m、長さは調査区内で約5.4mである。N82°W方向の円礫を伴う砂質土の帯状分布と認められ、調査区東壁の土層観察で南側が落ち込むことから洪水砂堆積部が溝跡が耕作で削り残された畦跡とした。また、断面北側に溝跡とも思われるU字状の泥炭質土の落ち込みが認められたが、落ち込み西延長先は砂礫の高まりで途切れることから畦内に残された古い畦跡の痕跡と結論した。畦内からは古墳時代土師器片が出土した。本跡は上部が攪乱されて検出層位が判然としないものの、礫を伴う形



第96図 SA45・46・47

態や走行方位から SC202同様の3層中の遺構と捉えた。ただし、作り替えが想定されたことから構築は遡る可能性がある。

SA43・44 (第95図 PL30) V②区 IXE04

V②区中央の三角州状高まり北部に位置し、SD78南端をかすめるように調査区を横断する。SD78との重複は僅かだが、SD78は耕地整理直前の溝跡なので、本跡が切られると思われる。杭頭は3層上部に達する。SA43・44はT字状に接続し、東西方向のSA43はN87° E方向に延びて西側は埋設用水路で壊され、東側は調査区外へ延びて約5.2mほど確認できた。杭は幅1.0~1.4mの範囲に2列並列し、北側が比較的密である。また、西側に礫が散布するが、SD78に平行する溝跡のものと思われる。SA44はSA43途中から南へN5° W方向に延び、幅60cm前後に杭が散在して南側へ次第に本数を減じて調査区外へ続く。

長さ約4.0mを確認した。SA43接続付近は北側にも杭が散布するが、SD78周辺の造成や耕作で杭が破壊された可能性がある。

SA45～47 (第96図 PL29) IV②区 VIII K22・23、P02・03

IV②区の南部に位置し、4層上面検出ながら杭頭は3層中に達する。杭の分布が散漫で並びも不明瞭ながら「エ」字状の3列の杭列と捉えてSA45～47とした。周辺には横倒し杭も散在しており、上層耕作で壊された可能性がある。SA45はN82° E方向の北端に位置し、東端は調査区外に延び、西端は埋設用水路で破壊される。最大幅約1.1m間に散漫に杭が分布し、長さは約5.5mほど確認した。SA46はSA45西端とSA47中間に検出された1本の杭から想定したもので認定に不安がある。走行方向はN15° W、長さ約5.1mと捉えた。SA47はSA46南端に接するN72° E方向の杭列で、東端は調査区外へ延びる可能性があり、西端は埋設用水路で破壊される。確認長は約5.0mである。縦引き鋸製材の杭が出土し、縦引き鋸製材普及後の所産とみられる。

SD70 V①区 (第94図) VII Y08・13

V①区南部の4層上面で粗砂を含む土層が帯状に検出されたことから、溝跡底の残存と捉えて本跡を認定した。幅約0.3mでN69° W方向に約5.6mを確認した。両端は浅く消え、東延長先はSC202が位置するが、構造が異なることから別遺構とした。出土遺物はないが、下面の擬似畦畔を切っていること、SC202と同方位であることからSC202同様の3層上面・中位の遺構と判断した。

SD72・78・81、SD100、SA(40・)41・42 (第97図 PL31) V②区 VII Y20・24・25、IX E04、J21、O01・06・11、N20・25、S05

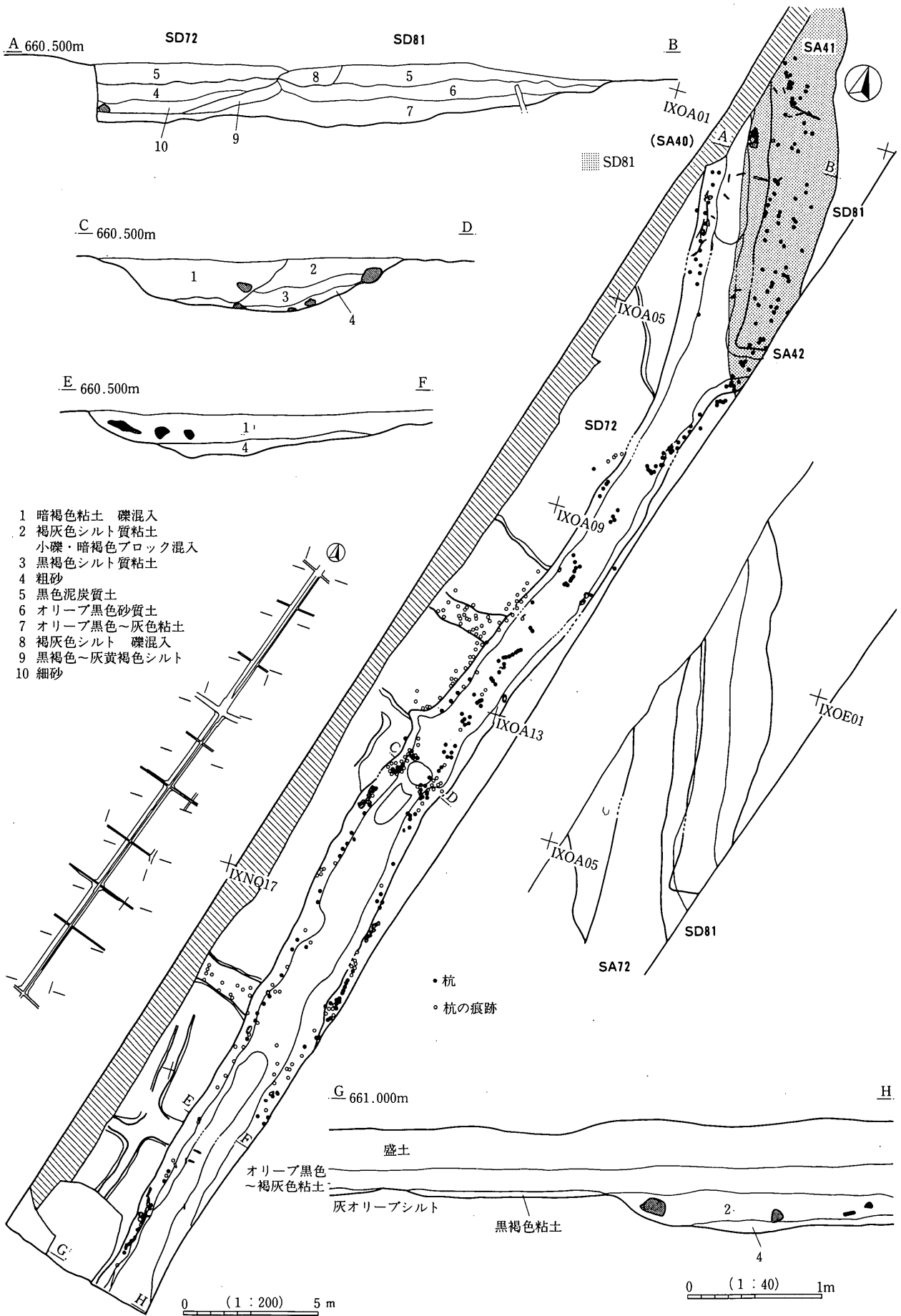
V区南端の3層上面で検出した。SD78とSD72は形状や走行方向から同一溝跡と思われ、SD81はSD72に先行する溝跡、SA41・42もSD72に先行する溝跡の護岸施設と判断されるのでまとめて扱う。SD78はV区中央をN52° E方向に横断し、SD72はV区南端をN11° W方向からN20° E方向に縦断する。両者は蛇行しながら連続し、総延長約は148m以上と推測される。さらに、IV・V区中間の道路協立会い調査で検出された溝跡がSD78の北延長先とすると、全長190m以上となる。

SD72はSD81、SA43や南端で検出された正方位の擬似畦畔を切り、幅約1.8～2.4m、検出面から底面までの深さ約30～40mで緩やかなU字状を呈する。護岸施設として中央付近の両側に杭が打設され、一部は杭に細枝を編み込んだものや石を配列する。これらはSD72の廃絶時に伴う施設とみられる。一方、SD72北東部から東岸周辺に沿うようにSA41・42が検出され、これらが若干ずれて北東に膨れるようにカーブすることからSD72に先行する溝跡の護岸施設と思われた。これらのSA41・42、SD72はSD81を切る。SD81はSD72に北端東側に一部切られるように重複し、幅約2.6～3.4m、断面は浅いU字状を呈してN11° W方向に調査区を横断する。長さ約10.3mを確認した。なお、SD78脇に平行する幅約0.6mのSD100がある。当初SC201としたが後に溝跡と認められてSD100に変更した。

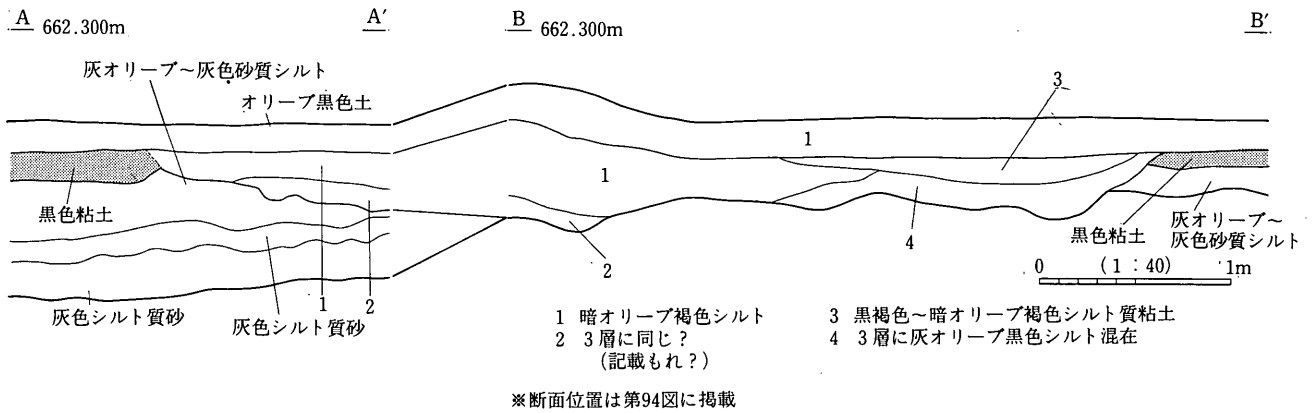
以上から、SD81→SA41・42→SD72への3段階に変遷し、最終的には区画整理時まで継続した用水と思われる。また、SD72北端の岸側に砂礫を大量に混じりこむ層が検出されたように、本跡は埋積と掘り直しを繰り返していたとみられる。最も古いSD81の時期は不明だが、SD78がN87° WのSA43を切り、SD72がN5° E方位の擬似畦畔を切ることから、これらの正方位の遺構に後出すると考えられる。出土遺物は比較的多いが、近世末から近代の陶磁器がほとんどでガラスや鍋柄などが出土し、他に石包丁・石鏃も採取された。なお、近接の南箕輪村教育委員会調査地点でもほぼ南北方向に流下する溝跡が検出されており、箕輪遺跡南部にはこのような南流する大きめの用水がいくつかあったとみられる。

SD79 (第98図 PL28) IV①・②区 VII O15・20、VIII K16～18・21～23

IV①区南端の河道跡低地北岸付近で検出され、III層黒褐色粘土層を切る。西端に長方形の掘り込みがあ



第97図 SD72・81、SA41・42



第98図 SD79

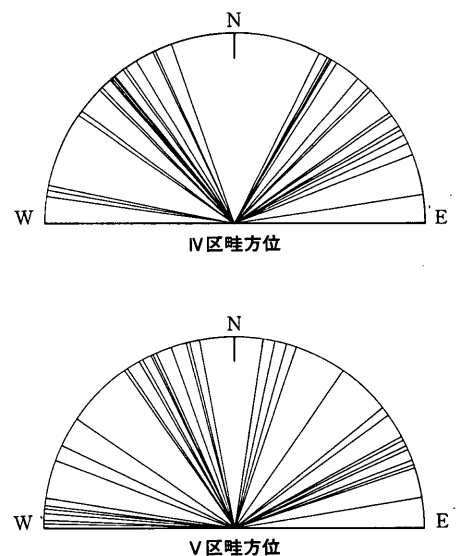
り、その東端から溝状落ち込みが2本分岐する形状だが、その先は浅く消える。東側IV②区では延長先が検出されていないが、近接して一部深く落ち込むところがある。西端の長方形の掘り込みは幅約3.2m、西端は調査区外へ延びて調査区内では長さ約4.4mを測る。主軸方向はN52° Wと3層下面の擬似畦畔と類似方位である。その北東隅から幅約1.2mの溝状落ち込みがN87° W方向に分岐し、もう一つは西端から幅約1.2m、西端の長方形落ち込みと類似方位のN58° W方向に緩やかなカーブを描きながらIV①区を横断し、東端は幅約3.6mほど広がる。出土遺物は杭とみられる木製品と近世の瀬戸美濃連房すり鉢があり、近世の所産とみられる。形状から溝跡としたが、水田造成跡の可能性もある。

(2) 4層上面の遺構

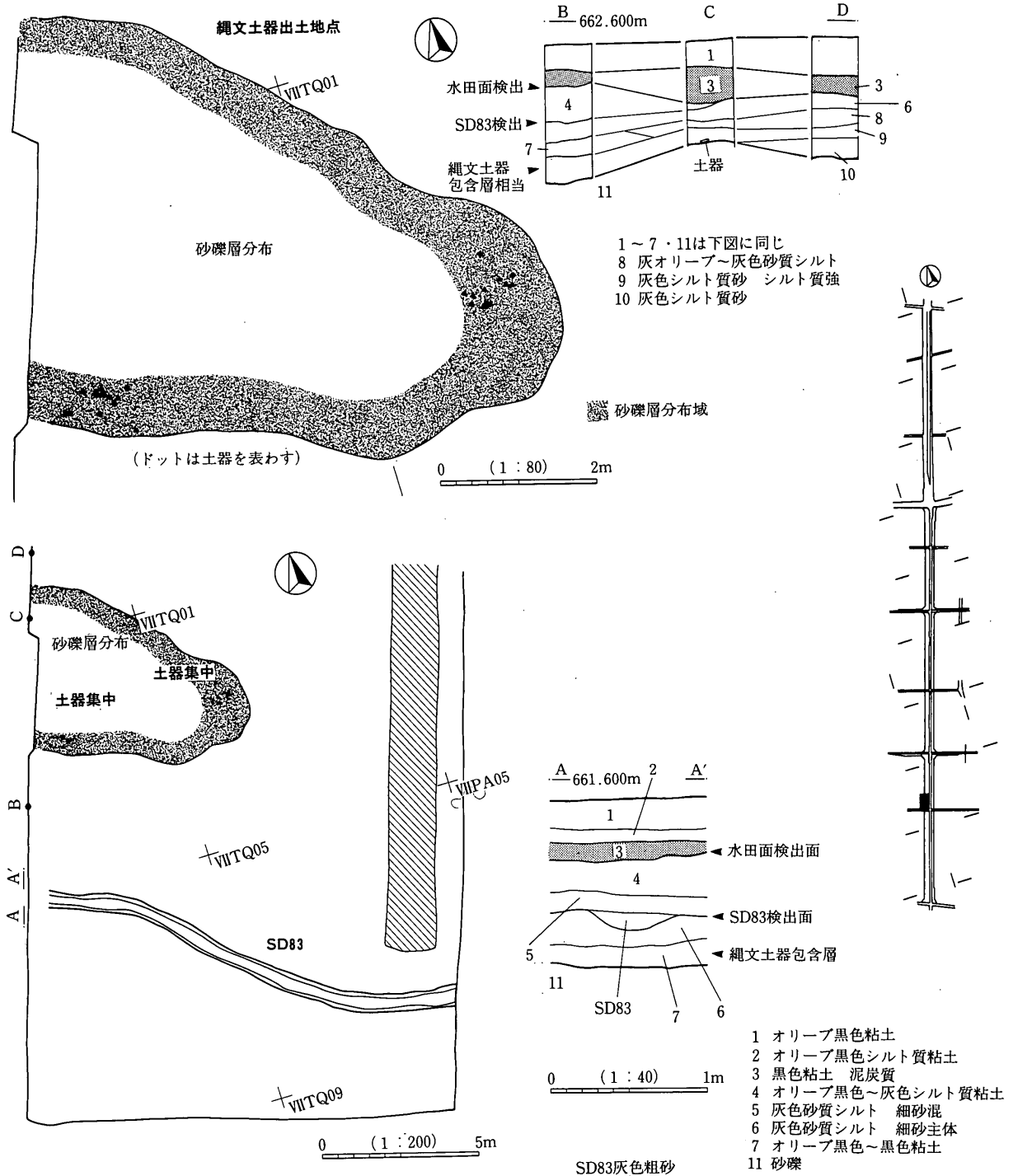
4層上面水田跡 (第94図 PL28~30)

黒褐色粘土3層を除去して4層上面で検出した水田跡で、河道跡低地内を中心にIV区南部からV区にかけて広域に検出された。調査は3層中まで重機で掘削し、人力で残りの黒色粘土を除去して4層上面の凹凸を掘り出し、耕作痕と思われる細かい窪みが認められない帯状空白地、緩傾斜地を水平に段切りした造成痕、低い帯状の高まりなどを畦痕跡と認定した。畦状の高まりも低いことから、3層を耕作土とした水田跡の下面の痕跡を露呈したと捉えた。しかし、上記のように耕作土下面に転写された痕跡を検出したとすれば、かつて存在した畦跡すべてが残されたとは言えず、複数時期の水田区画を検出している疑いがある。しかも、畦痕跡とした遺構も微弱な痕跡で認定に不安を残すものもある。なお、IV区南端の河道跡低地内では下層にイネプラント・オパールが僅かながらも検出され、4層のオリブ黒色~灰色シルト質粘土層自体が水田耕作土であった可能性も残るが、関連する遺構は認められなかった。

畦跡と認定したなかでSD75~77延長先の畦跡のみ幅が広く大畦と想定できるが、他は規模差が明瞭でない。畦の方位(第99図)はIV区でN20~54° Wと直交方向のN25~70° E、N78~82° W方向の2種、V区ではN10~35° Wと直交方向N54~70° E、N55~68° Wと直交方向N55° E、さらにN80~88° Wと直交方向のN8~19° Eの3種が認められる。V区のN55~68° Wと



第99図 IV・V区畦方位



第100図 IV①区下層 SD83、縄文土器出土地点

直交方向 N55° E 方位の畦跡は数も少なく認定に不安を残し、巨視的には N20~54° W・直交方向 N25~70° E と正方位に近い N8~19° W と直交方向 N80~88° W に大別すべきかもしれない。前者は、IV区からV②区北部に多く分布してIV区南端の河道跡低地方向に近似することから地形に規定されたとみられ、後者の正方位の畦はV区南端に多い。V②区北部では正方位 SC202が3層中で検出されていることから、地形に規定された水田から方位重視の区画への変化と推測され、方位別に分布域が異なる傾向は耕作深度と関連したもので低いところほど古い区画が残りやすい状況によるものかもしれない。

上記の N20~54° W・直交方向 N25~70° E 方向の水田跡は等高線方向に長軸をとる長方形が主体で、規模は幅7m(10m)前後で長さ10m強、5m前後で長さ10m前後、幅・長さともに2~3m前後のものがある。一方、後出する N80~88° W と直交方向 N8~19° E 方向の畦は断片的で、規模は幅4m前後のものがあるとはかわからない。

上述したように洪水土や泥炭層で覆われた水田面ではないため、遺構時期は幅があると思われる。3層掘削時に採取された遺物には弥生後期土器と古墳後期土師器少量と中世以後の陶磁器が多く採取され、中世以後では山茶碗・山皿・山茶碗系こね鉢・蓮弁文青磁碗、古瀬戸瓶子など13世紀前後と、内耳鍋・大窯すり鉢・稜皿?など15後半~16世紀の所産、僅かながら志野丸皿など17世紀初頭の所産、あとは18世紀末以後といくつか集中する時期がある。弥生後期・古墳後期に水田耕作されている可能性も残るが、少なくとも主体は中世以後と思われる。

SD73 (第94図) IV①区 VIII F14・15

微高地背面に位置し、南側に擬似畦畔を伴う。東端は調査区外へ延び、N88° W 方向に約2.8m 延びたところで N40° E 方向に屈曲して4.0m 続いて南端は浅く消える。幅約0.4m、U字状断面形で検出面からの深さ約10cm である。埋土は粗砂・小礫を含む黒褐色土の単層である。出土遺物はない。

SD75~77 (第94図 PL30) V①区 VII T18・19・23・24、Y04

V①区北端の三角州状高まり部分の現耕作土下V層上面で検出した。この周辺に3層は分布しないが、埋土は黒褐色土で、本跡延長先は4層上面水田跡畦跡と一致することから3層の遺構と捉えられる。

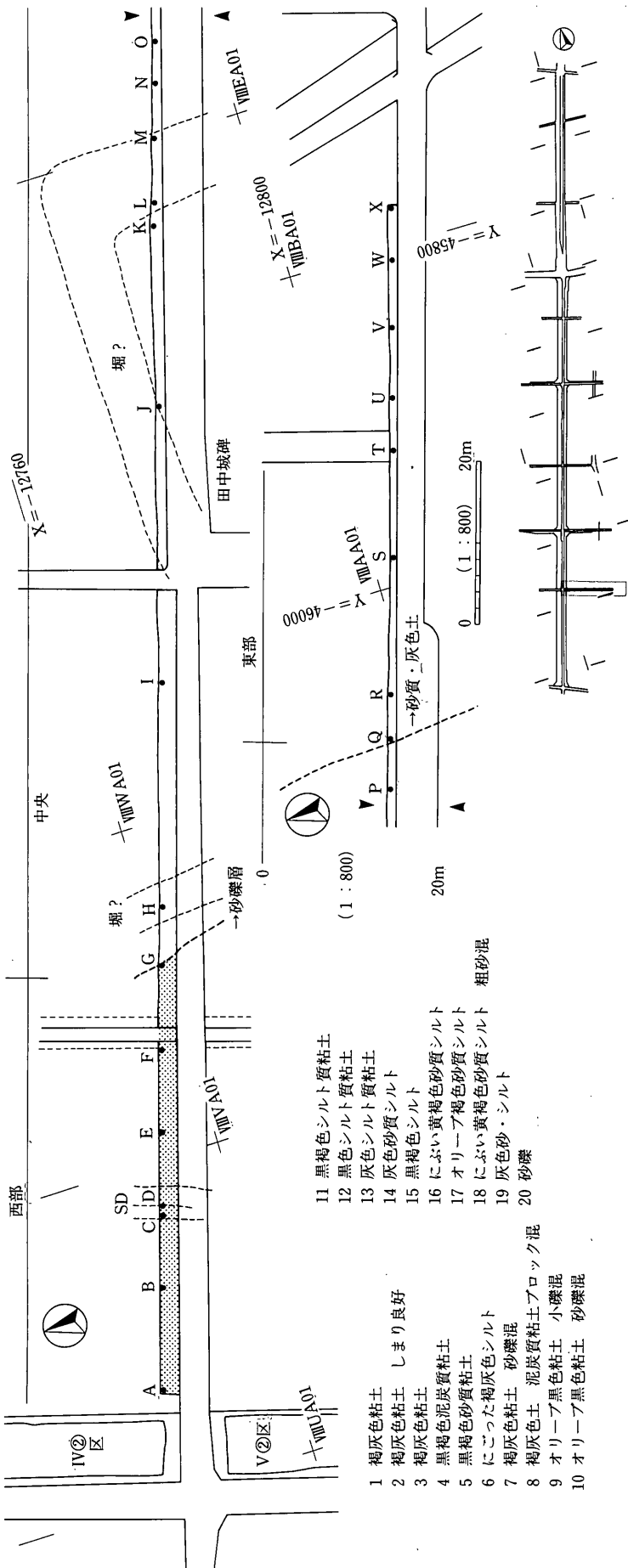
SD75は幅約0.5m、U字状断面で検出面からの深さは約20cm 強、埋土は上部が小礫を含む黒褐色土、下部が褐灰色土となる。SD76はSD75北側約2.4m に併行し、幅約0.8m、断面U字状で検出面からの深さ約20cm である。埋土は上部に小礫を僅かに含む黒褐色土、下部に黒褐色土が入る。SD77は先端でSD76とほぼ重なり、調査ではSD77を切ると判断したが、認定に不安が残る。幅約0.5m のU字状断面形で検出面からの深さは約20cm 強、埋土は上層に小礫を少し含む黒褐色土、下層に褐灰色土が入る。これらの溝跡からは出土遺物がなく、時期の詳細は不明である。溝跡の方位はSD75が N39° W、SD76が N51° W、SD77が N38° W で、4層上面の地形方向の畦跡に一致する。何れも西端は調査区外へ延びる。東端はSD75が調査区内で浅く立ち消え、SD77・76東端は調査区東側へ延びるが、延長先のV②区では検出されず、その延長先に畦跡が検出されている。この畦跡と同じ区画の遺構と思われる。

(3) IV区河道跡内の2面遺構

IV区南端の河道跡低地内では4層下の5層灰色砂質シルト下面でSD83、下層の9層灰色シルト質砂で縄文土器集中を検出した。両者の検出層は異なるが、標高が類似することから同一面で調査した。

SD83 (第100図) IV①区 VIII T09・10

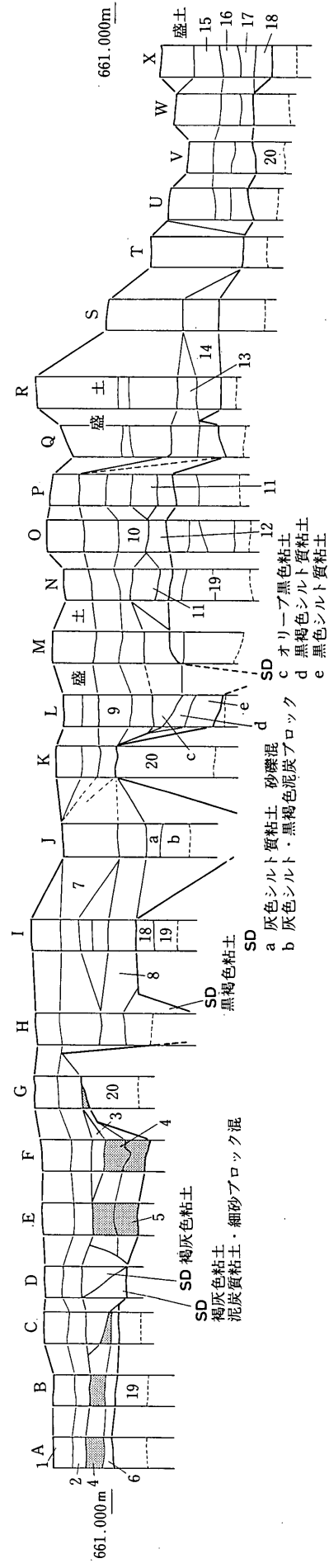
IV区①区南端の河道跡低地5層下で検出された。東側IV②区は下層調査を実施していないが、深堀トレンチ土層に記録される砂埋土の落込みに連続する可能性があり、IV②区で大きく湾曲して調査区外へ抜けるとみられる。幅約0.4m、断面U字状を呈して検出面からの深さ約10cm である。埋土は粗砂主体で、



- 1 褐灰色粘土
- 2 褐灰色粘土 しまり良好
- 3 褐灰色粘土
- 4 黒褐色泥炭質粘土
- 5 黒褐色砂質粘土
- 6 にごった褐灰色シルト
- 7 褐灰色粘土 砂礫混
- 8 褐灰色土 泥炭質粘土ブロック混
- 9 オリーブ黒色粘土 小礫混
- 10 オリーブ黒色粘土 砂礫混
- 11 黒褐色シルト質粘土
- 12 黒色シルト質粘土
- 13 灰色シルト質粘土
- 14 灰色砂質シルト
- 15 黒褐色シルト
- 16 にぶい黄褐色砂質シルト
- 17 オリーブ褐色砂質シルト
- 18 にぶい黄褐色砂質シルト
- 19 灰色砂・シルト
- 20 砂礫

662.000m

662.000m



第101図 IV②・V②区境交差道路立会い調査地点

流水があったことを示す。遺構ならば箕輪遺跡で最も古い水田遺構となるが、出土遺物が伴わず、形状からも遺構とは断じ得ない。

縄文土器集中 (第100図) IV①区 VII T04・05

IV①区南部の河道跡低地内北岸側に中州状の低い高まりがあり、この上面の9層灰色シルト質砂層中で縄文土器が散在的に検出された。Jaブロックと呼称したが、面的調査では少なくとも2地点に分散して土器小片が出土することが判明した。土器の遺存状態は不良で、大部分はもろく文様も判然としないが、唯一網代底と認められる破片があったことから後期以後の所産と推測した。

(4) IV・V区境の交差道路部立会い調査 (第101図)

平成14年の1月22・31日、2月4・26日に、IV・V区境の交差道路沿いの水路工事に伴って立会い調査を実施した。全長約240mにわたり工事で掘削された溝内の土層観察を行って土層柱状図を作製した。立会い調査域内は土層の様相から西部、中央、東部の3地点に大別できる。

西部はIV・V区から60mほど東方で礫層が急速に立ち上がるまでの埋積河道跡低地内にあたる。この間の土層はほぼIV・V区と同様で、東部のI層下にII層褐灰色粘土層が僅かに残存し、他はIII層黒褐色泥炭質粘土、III層の影響を受けたIV層黒褐色砂質粘土、砂礫・灰色シルト層に続く。なお、本線交差点から24mほど東で溝跡が検出されたが、走行方向からV区SD72(81)・78に連続すると思われる。

中部は田中城周辺の砂礫層が高まる地形部分で、上層に砂礫や泥炭質土・褐灰色土ブロックからなる埋め土、その下に砂礫や灰色シルトが認められた。上層は微高地を削平・盛り土したものと思われる。ここでは大きな幅約5m、16m、10mの3つの大きな落ち込みが検出された。中央に幅16mと10mの落ち込みが近接し、調査地点は北東側にL字状に折れる溝跡を斜めに縦断した可能性がある。田中城主郭周囲の堀とも考えたが、底は未確認で出土遺物も採取できていないため詳細不明である。中部東側はやや低い地形で、礫混じりのオリーブ黒色粘土下は黒褐色シルト質粘土層、灰色シルト層がある。

東部はバイパス本線から東約170m以東の工場前にかかる部分で、古川と呼ばれる天竜川旧河道跡に近く、最も低い。全体的に砂質が強い灰色土層を基調とし、中部とは土質が異なる。天竜川による比較的新しい時期の堆積土と思われる。

第4章 遺物

第1節 土器・土製品

箕輪遺跡では縄文時代から近代にいたる焼物が出土し、なかでも集落跡からは弥生中期後半、弥生後期、古墳時代後期の土器がまとまって出土した。比較的長期にわたる土器が出土しているが、一方で土器がほとんど見当たらない時期もあり、こうした時期も含めて箕輪遺跡を考えていくことが必要と思われる。ここでは時代ごとの傾向を概観し、遺構別に出土土器を記述する。

1. 時代別出土土器の概観

①. 縄文時代

縄文土器はⅢ区南の微高地域からⅣ区の低地域にかけて散在的に採取されている。土器集中と認められた例もあるが、多くは他時代遺構から混在して出土したり、検出面で採取されたもので明確な生活遺構に伴うものはない。これらの土器がどのような活動に伴うものかはわからなかったが、最も古い土器は436の微高地出土の縄文前期後半下島式に比定されるもので、この頃には微高地域が離水安定していた可能性を示す。後期と思われる土器には微高地出土439とⅣ区南河道跡2面出土の470があり、470はⅣ区南の河道跡内土器集中から出土したことから、河道跡がこの頃に埋積しはじめていることが知られる。縄文晩期は水式に比定できる437・440～444の土器が微高地域を中心に採取できた。浮線網状文を施す浅鉢、口縁部に沈線を施す深鉢があり、縄文土器のなかでは比較的量が多い。

②. 弥生中期後半

縄文晩期の次に確認できた土器は弥生中期後半のものである。Ⅲ区南部～Ⅳ区北部の微高地域検出の住居跡SB03(29)・16・17・21・22・24・26・27・28・31・39から比較的多く出土し、微高地以外では北側に隣接するⅢ区のE低地以南で少量採取されているが、弥生後期ほどは分布が広がらない。

本遺跡の弥生中期後半の土器は広義に長野県北部に分布する栗林式に含められ、伊那谷南部の北原式は出土していない。従来、栗林式土器は長野県北部域から松本平南部まで分布すると捉えられていたが(直井雅尚1991)、本遺跡は南箕輪村北垣外遺跡と共に現時点で知られる栗林式土器で構成される最南端の集落遺跡といえよう。近年、下伊那の北原式と捉えられてきた土器群に栗林式土器の影響を指摘する見解も示されており(山下誠一2002)、本遺跡はこうした指摘を考える上で興味深い資料を供したと思われる。また、当該期の資料が少なかった上伊那北部域の土器様相を明らかにしえる資料として注目される。

ア. 器種別の概観

器種は壺・甕・台付甕・甌・鉢・高杯・双口壺がある。ちなみに、完形品が多数出土したことから保有状況のある程度窺えると思われるSB26出土の完形・略完形品を数えてみると、壺は大1・中5個の計6個、甕は大3・中4個・小3個の計10個、小台付甕4個、片口鉢1、高杯1、鉢1、甌1点がある。これが標準保有量とは断じ得ないが、他住居跡も出土比率は類似しているように思われる。

壺 器形は胴部下半に最大径をもち、頸が長く緩やかに延びてラッパ状、もしくは受け口状の口縁にいた

る形である。胴部最大径が中位近くにあたり、あるいは胴の張りが弱く細身で徳利状のもの、球胴ぎみのものもある。球胴ぎみの胴は北原式の影響も考えられるが、栗林式にも類例があり、これまで知られている栗林式壺の範疇から外れるとは言いきれない。なお、僅かな例であるが、受口部に片口状の注ぎ口、あるいは胴中位に注口をつけるものがある。

成形方法は内面下半をナナメ・ヨコハケ、頸部より上はナデを施し、口縁部内面が磨かれる。外面はハケ調整後に頸部・胴下にタテミガキ、胴中位にヨコミガキ、あるいは口縁部周辺が弧を描くようなヨコミガキが施されるが、施文後にミガキが施されるので、その範囲は模様によって若干異なる。

文様は口縁部と頸部、胴部中位に縄文・沈線文が施され、施文部位の組み合わせが数種類認められる。壺の文様は施文部位を文様帯（装飾帯）に区分し、その組み合わせとして把握する試みが長野市松原遺跡の整理で上田典男氏（上田典男1995）、贄田 明氏（贄田 明2000）によって行われた。その方法の有効性は認められつつあり、石川日出志氏はこの方法を発展させて異なる区分方法を提唱した（石川日出志2002）。石川氏は縄文土器文様帯とは文様帯相互の関係理解や、文様帯の意味合いが異なることから混同を避ける意味で「装飾帯」と呼称し、文様が横線重視か垂下文重視かの性質も加味して器形上の施文場所を狭い範囲に限定せず、紋様帯の区別しにくいものを関連する文様帯の数字を併せて表記した。ここでは石川氏に準じ、口唇部・口縁部を1帯、頸部の横線重視の施文帯を2帯、頸部中央の懸垂舌状文をもつものを3帯、胴部上部に施される横線主体の文様を4帯、その下の連弧文などが施される部位を5帯、無紋を0として（）内で示すと以下の通りとなる。なお、単なるアラビア数字は本報告の掲載番号を表す。

本遺跡の文様種類は施文部位が少ないものから、口唇部以外の施文がない（1・0）は130、口唇部・頸部のみに施文する（1・2・0）は、口唇部をヒダ状にして頸部に沈線を施す86・169、口唇部・頸部のみに縄文・沈線の組み合わせ文様を施す126・129・168・170などがある。口唇部・頸部・胴部中位前後に施文する（1・2・0・4・5）は、縄文と沈線を組み合わせる63・67・135、4帯が幅広くヨコ方向の櫛描文・沈線を用いる75・181、4・5帯が胴部上部に及んで縄文・沈線文が施される179などが該当する。4種目には口唇部・頸部・頸部下・胴部まで模様が施される（1・2・3・4・5）では、頸部に懸垂舌状文を施し、内部をタテ櫛描文で充填する66・127・173・174がある。

上記以外の少数例として頸部から胴部まで沈線で充填する154・180がある。これは胎土に粗砂を含む特徴から同一個体とも思われる。頸部上部の施文帯が欠損して不明ながら、4帯が頸部まで連続して施され、5帯にはボタン文とともに垂下する沈線で長方形を重ねた文様を形づくる。装飾帯では（?・2+4・5）となろうか。他に破片で仔細不明ながら、類似した構成のものに頸部に櫛描文を施す155、受口状ながら作りが簡素な156がある。なお、上記文様以外の装飾では後述する赤彩・矢印状の沈線記号がある。

甕・台付甕 甕の器形は胴上部が脹らみ、口縁部は短く強く外反して体部下半は比較的直線的にすぼまって底部に至る形となる。口縁部は壺同様に外反と、受口状のものがある。これ以外にやや異質な形態として口縁部が開いた鉢に近い器形を思わせる193がある。甕の規格は感覚的ながら大・中・小の三種あると思われ、小型は少ない。調整はハケ調整し、外面施文後に胴部下半から底部をタテミガキ、内面はタテミガキかその後にヨコミガキ、口縁内外面をヨコミガキする。

甕は頸部に櫛描波状文・横線文・簾状文が施されるものがある。これらの施文もしくは頸部を胴部施文の上限とし、口唇部に縄文・刻み・ユビ押さえでヒダ状とするか、受口状口縁に縄文と鋸歯状沈線を加える以外に口縁部外面に施文されていない。この点は本遺跡の弥生後期土器と異なる大きな違いであるが、これは壺も同様で、受口状口縁は機能的な役割と共に施文も関係しているように思われる。

甕の胴部文様は櫛描文、縄文・沈線、無文があり、櫛描文が主体で他は少ない。櫛描文はさらに羽状文と波状文があり、羽状文にはタテ羽状、ヨコ羽状、さらにタテ羽状の変形である格子状文、波状文には波

状文のみか垂下櫛描文を加えるものがある。量的に最も多いのは羽状文である。なかには98のハケ調整のようなヨコ羽状文の変形かナナメ櫛描文と思われるものや96のヨコ羽状を棒状工具の沈線で表現したものなども少量ある。さらに137のように胴下半に櫛描文施文具による刺突が施される例もある。

波状文はヨコ方向に波状櫛描文を施したもので、波状文のみと垂下する櫛描文を加えるものがある。多くは中部高地型櫛描文と呼ばれる全周しないものだが、一部の92・158・161・(162?)・192は一周する畿内型櫛描文もある。この畿内型櫛描波状文の甕は量的に少なく、92のような何段も重ねるものと、158・(162?)のように1段のみ施されるものがある。158・162は他の櫛描施文具と異なるように思われ、162は口縁外側に施される後期の甕のようにもみえる。小型甕では104がある。垂下櫛描文を加えたものは140、小型の71がある。70は垂下する櫛描文の有無は不明である。

上記以外には縄文・沈線（コの字重ね文）、無文の甕が少量ある。縄文・沈線文の甕は少量で、185のみ図示した。無文はミガキのみの101・103・189・193がある。193は北原式の古段階の甕に類似する器形のようにみうけられる。また、205はミガキが認められることから甕としたが、詳細は不明である。

台付甕は小型が多い。143・146・192の櫛描波状文か縄文・沈線区画文、あるいは垂下櫛描文のみの144があり、124は不明ながら、基本的に櫛描羽状文は認められないようだ。また、107のように貼付ボタン文を施すものがある。縄文とボタン文は壺と共通する文様で甕には少ない。206は小型甕、もしくは台付甕と思われる破片であるが、文様は弥生後期に類似する短斜櫛描文を施す。なお、台付甕の系譜は調べられなかったが、中期後半に県内に定着することが知られ、本遺跡では多くの住居跡で出土した。

甌 甌とした土器は鉢型で底部に孔1つ穿孔された器形を指す。用途は明らかでないが、ここでは形状から仮称する。出土数は少なく、113・114・152を図示した。直線的に開く器体で、ナナメハケ調整後にミガキが施される。また、底部がないため仔細不明だが、81も体部の傾斜から甌の可能性もある。

高杯・鉢 高杯・鉢は少ないながら、比較的遺存良好なものがある。高杯は直線的に立ち上がる細身の111、口縁部が内湾する112、口縁端部を外に折る150がある。何れもスリップ技法で赤彩され、内湾口縁は外面に縄文と沈線鋸歯状文が施される。直線的に立ち上がるもの以外は鉢と同じ器形である。

鉢は内湾ぎみに立ち上がる73・82・83・109・110・151・198・200、内湾して口縁部に縄文・鋸歯状沈線文が施される201、口縁端部を折る202がある。内湾ぎみのものが多く、口縁部に2孔穿孔、あるいは短い貼付文を施すものがある。赤彩されるものが多いが、110・163は赤彩が認められなかった。ただし、壺同様に焼成後の赤彩が剥落した可能性は残る。また、202は破片を図化したもので口径の復元に不安がある。これ以外に147の片口状の造作がみられるものもある。

双口壺 203の1点のみある。一つの胴に二つの頸を接合した壺で胴下半は欠損する。二つの頸部と胴部接合内面は滑らかにナデられ、逆位で成形したか、接合部をナデ調整しながら最後に頸部を積み上げたと思われる。片方の頸部に縄文・沈線、もう一方にミガキのみを施す。口縁部に焼成後とみられる赤彩が残存しているが、遺存不良で全体に施されていたか判然とししない。類例は阿島遺跡出土品にある。

イ. 文様その他の特徴

A. 施文具と文様

本遺跡出土の土器には栗林土器同様の施文が確認できる。器面上の文様は主に沈線文、櫛描文、縄文があり、それぞれ施文具は棒状工具、櫛歯状工具（簾状工具—徳永1995）、縄と思われる。これ以外に僅かながら貼付文がある。ただし、本遺跡では特定の工具で施される文様が他工具に置き換えられる例がいくつかある。例えば、櫛描羽状文が棒状工具で表現されるもので羽状沈線文の96、格子沈線文の160などがある。また、水田域出土の39は口唇部に見ると縄文風だが、仔細にみると窪みの断面が鋭角となる刺突文である。

櫛歯状工具の施文には押し引きした簾状文、ナナメ・タテ・ヨコ方向に引く羽状文の他に、刺突があり、櫛描文には回転台を用いて全周する畿内型櫛描文、断絶する中部高地型櫛描文がある。長野市松原遺跡では中部高地型櫛描文が主体で、少量の畿内型櫛描文が存在することが明らかにされている。青木一男氏は土器製作では回転台を用いるが、施文はタテ施文指向の強さから中部高地型櫛描文が施されたとする。(青木一男2000) 本遺跡でも比率的には松原遺跡と類似していると思われ、本遺跡の少ない畿内型の波状文を強調して上伊那の特徴的な様相とはいえない。

この櫛描文は甕胴部に多く、壺の一部にも施される。壺では簾状文と波状文を施す75、頸部にヨコ方向に施す127や169・181、さらに懸垂舌状文内の充填に用いられる例がある。このなかで懸垂舌状文の壺は2帯に縄文・沈線文を併用する173・174のほか、66・127・181のように縄文地文を伴わないか、極端に少ないものがある。また、頸部に櫛歯状工具で刺突文を施すものもあるが、これは上述した縄文の置き換えかは断じ得なかった。154・180は胴部重四角文に櫛歯状工具が用いられている可能性がある。

甕は基本的に櫛描文が多用され、羽状文、波状文、簾状文、垂下文、斜めやヨコ羽状文の変形とも思われる調整とも識別しにくい98の例などがある。羽状文は中期前半の調整痕を文様として継承・発展したものとされ、横方向に展開するヨコ羽状文、タテに矢羽状に施すタテ羽状文、格子文などがあるが、波状文に垂下する櫛描文を加えるものは栗林式土器の後段階では認められなくなる傾向が指摘されている。(寺島1999、小山岳夫1999、直井雅尚1999) 本遺跡では波状文と羽状文の甕が共存し、波状文もタテに垂下する櫛描文で区切られるものがあるが、これらは本遺跡の年代を考える材料となろう。なお、櫛歯文よりやや粗い158は徳永哲秀氏の指摘する1本づつずらして用いる櫛歯状工具だろうか(徳永哲秀1996)。簾状文は甕頸部に胴部文様上限を画するように位置し、向かって右から左へ施文される。この簾状文に代わって93・102・186のように櫛描横線文が施される例もある。また、上記以外に192のような受口状口縁部外面にタテに短く施文したと思われるものがある。

棒状工具施文は沈線と押し引き列点文があり、器面の沈線断面形から円形か半円形断面の棒状工具が用いられたと思われる。沈線は壺など器面分割に用いられる場合と、装飾に付加的に施されるものがある。前者は壺における文様帯の分割や懸垂舌状文の区画などが該当し、後者の事例として5帯の連弧文、2・4帯の波状文・鋸歯文、あるいは台付甕の楕円区画文、甕のコの字重ね文がある。基本的に縄文とセットで施される事例が多く、壺は櫛描文との併用もある。甕は縄文を地文として主文様に用いられる185のようなコの字重ね文、191・195のような台付甕の楕円区画文がある。他に先述したような櫛描文を沈線で表現するものもある。押し引き列点文は66・135・154・180など壺の一部に認められる。なお、基本的に簾状文と同方向の向かって右→左に施文されるが、同一個体の可能性がある154・180のみが向かって左から右方向に施文される。この列点文は付加的文様に用いられ、あまり普遍的ではない。

縄文は甕口唇部・受口口縁外面、壺、台付甕に部分的に用いられる。地文として用いられる場合が多いが、沈線と組み合わせたり、施文部位は限られる傾向がある。

B. 赤彩と記号状沈線

上記の以外に特徴的に認められた装飾として、赤彩と記号状沈線について触れる。まず、赤彩であるが、弥生土器の赤彩については徳永哲秀氏の一連の検討(徳永哲秀2000)によると、焼成前にベンガラを混ぜた化粧土をかけて磨くものと磨かないもの、さらに焼成後に赤彩するものがあることが想定されている。栗林式土器では鉢・高杯など小型土器を中心に化粧土(スリップ)をミガキで定着させるものが多く、北信地域では大型壺の赤彩が少ない傾向が指摘されている。一方、佐久地域は化粧土のみの赤彩、焼成後の赤彩が施される大型壺が若干高い比率であるという(徳永哲秀2000)。箕輪遺跡の土器では小型鉢・高杯類については赤色が落ちにくいミガキを伴う化粧土(スリップ)の赤彩であることが確認できたが、さら

に大型壺沈線内などに部分的に赤彩が残るものがあり、これらは焼成後の赤彩かミガキによる化粧土を定着させない焼成前赤彩と思われる。十分検討できたわけではないが、本遺跡の様相は佐久地域に近い状況とみられる。

次に記号状沈線であるが、これは壺頸部に「↑」状の沈線が施されるもので90・153がある。焼成前に単独で施され、文様の一部ではないと思われるが、その意味は不明である。類例は十分調べていないが、長野や佐久地域などの栗林式土器ばかりでなく、東海地域にも散見されるようだ。

ウ. 出土状況の特徴

当該期の住居跡からの土器出土状況は他時代と比べた場合、大きく二つの特徴が認められる。一つは土器の出土量の多さである。時代別の竪穴住居跡出土土器量では弥生後期が最も少なく、古墳後期と弥生中期後半は多い。二つ目にSB03・17・22・26・27・28など床面上に完形・略完形土器が出土した例があり、遺存良好なものが多い傾向が指摘できる。この点が古墳後期と異なる。これらの特徴は弥生中期後半の住居跡全てに当てはまるわけではないが、集落廃絶の仕方に関連すると思われる。

エ. 箕輪遺跡の弥生中期後半土器の年代的位置

本遺跡の中期後半土器は上述した器形・文様の特徴から栗林式土器の範疇で捉えられる。各地域の資料蓄積により、栗林土器分布圏はかつて想定されていた範囲よりも広く捉えられるようになってきており、本遺跡例はさらに分布範囲が広がることを示す。こうした動向と併せ、中南信では従来の土器型式の見なおしが進められている。例えば、直井雅尚氏は従来の百瀬式と呼ばれていた土器群を栗林系土器が伊那谷の土器影響下に解体していく土器群と捉えなおし（直井雅尚1991）、山下誠一氏は下伊那の北原式土器に栗林式土器の影響を認める（山下誠一2002）。今回、伊那谷北部に位置する箕輪遺跡で栗林式土器が主体となる状況が確認できたことは、伊那谷＝北原式という図式に改めて再考を促す。さらに、本遺跡の土器に折衷が認められないことは栗林式土器分布圏のあり方を考える上で興味深く、本遺跡が後期に連続しない点も関連しよう。また、従来の想定よりも栗林・北原式土器分布圏がごく至近距離にあることとなり、相互の交流の可能性は高まる。これは山下氏の見解（山下2002）を補強するものといえるが、本遺跡の栗林式土器内に北原式土器の影響が認められないことは、分布圏の拡大と関係して情報の流れが北から南へのものであったことを示すか。いずれにしろ、現時点で栗林式土器の成立が長野県北部と想定されることから本遺跡の成立時期が栗林式土器分布圏の拡大を考える上で問題となる。

詳細に検討できたわけではないが、本遺跡の年代的位置を考える上での指標となりそうな点を列挙してみる。まず、甕の文様に中部高地型櫛描波状文を垂下文で区切るものがあり、僅かながら胴部下半の刺突文が認められるものがある。壺は装飾帯5帯に縄文を伴う沈線連孤文を配し、頸部の文様は基本的に2帯下に短いながらも無紋帯0を配置するが、3帯が頸部中頃まで拡張しているものがある。台付甕が比較的多く認められる特徴もある。

栗林式土器編年案は寺島孝典氏（寺島孝典1995・1999）、小山岳夫氏（小山岳夫1999）、青木一男氏（1996）、贅田明氏（贅田明2000）、石川日出志氏（石川日出志2002）氏らによって提示されている。このなかで青木・贅田氏の検討は松原遺跡の報告に関連して述べられたもので栗林式土器の中・新相が中心となり、寺島、石川氏がトータル的に扱った検討といえる。筆者はこれらの検討を十分理解できておらず、それぞれ微妙な差があるように思われるが、およそ青木・贅田氏の様相2（2段階）、寺島氏の中段階古相、石川氏の2式段階に該当すると思われる。この推測から本遺跡は栗林式土器の最古段階と後半段階が欠落し、松原遺跡などの大規模集落展開期に重なる可能性が高い。さらに、比較的短い期間の集落遺跡と捉えられる。なお、町田氏は松原・榎田遺跡を始めとする巨大集落の出現に石器生産と流通システムの動向が密接な関わりをもつ可能性を指摘する（町田勝則2002）。山下氏も大型蛤刃石斧などの流通を栗

林式土器の拡散背景に想定するが、本遺跡地がこうした石器流通との関わりは十分検討できていない。

参考文献

- 1995 上田典男「栗林式土器研究の一視点」『長野県埋蔵文化財センター紀要4』長野県埋蔵文化財センター
- 2000 賛田 明「第1章 第3節(2) 文様帯の設定」『松原遺跡 弥生・総論編3 弥生中期・土器本文』長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター
- 2002 石川日出志「栗林式土器の成立過程」『長野県考古学会誌』
- 1995 徳永哲秀「箱清水式時の施文具および施文方法について」『長野県考古学会誌75』
- 2000 青木一男「第1章 第3節(4) 施文手法」『松原遺跡 弥生・総論編3 弥生中期・土器本文』長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター
- 1996 青木一男「『松原遺跡弥生編』整理中間報告」『長野県埋蔵文化財センター紀要5』
- 1999 寺島孝典「長野盆地南部の様相」『長野県の弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会
- 1999 小山岳夫「佐久地方の弥生土器」『長野県の弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会
- 1999 直井雅尚「松本盆地南部における弥生中期後半～後期の土器編年」『長野県の弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会
- 1996 徳永哲秀「松原遺跡の櫛描文土器」『長野県埋蔵文化財センター紀要5』長野県埋蔵文化財センター
- 2000 徳永哲秀「松原遺跡の赤彩土器製作技法」『松原遺跡 弥生・総論編3 弥生中期・土器本文』長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター
- 2002 山下誠一「弥生時代中期北原式土器にみられる栗林式土器」『伊那2002・6月号』伊那史学会
- 1991 市沢英利「第二編 第4章 農耕社会の始まり—弥生時代—」『下伊那史』第1巻
- 2002 町田勝則・青木一男「中部地域・松原遺跡と篠ノ井遺跡群」『日本考古学協会2002年度大会研究発表要旨』日本考古学協会
- ※筆者原典未見

③. 弥生後期前半

弥生中期後半以後はしばらくの断絶時期を経て、弥生後期土器が出土している。弥生後期は後期前半と後期末の2時期あるが、ここでは後期前半を中心に述べる。当該期の土器片はⅥ区を除くⅠ～Ⅴ区で採取され、弥生中期後半より広範囲に分布する。このなかで微高地域のSB07・09・18・19・20・23・25・34・35・36・37・41などの住居跡から比較的まとまった土器が出土したが、栗林式土器で占められていた弥生中期後半の土器とは異なり、下伊那地域の影響を受けた土器で占められている。

ア. 器種別の概観

器種は甕が最も多く、壺が少量、高杯、鉢類はほとんど認められなかった。

壺 壺は出土量が少ないため、器形の詳細は不明瞭であるが、胴中位が膨らみ、丸味のある卵形かやや胴が張った体部から外反・受口状に屈曲する口縁に緩やかに続くと思われる。器壁が厚く、重量感のあるものがある。外反する口縁は255、受口状で端部を上方に屈曲する口縁は229がある。後者は上方に内湾ぎみに軽く屈曲し、後期末のSB35上層出土267のように鋭角に折れない。壺のサイズは感覚的ながら277のような特大、228・227・229などの中型、281の小ぶりな小型など3～4種があるようだ。器面調整は傷みがひどく、ハケ調整の痕跡ぐらいしか認められず、ミガキの有無は把握できなかった。

文様はほとんど胴部上半の頸部付近から口縁部にしかなく、胴以下は施文されない。当該期の施文は横方向を基調とし、縦方向の区画はみられないが、櫛描文を基調とするものと、三角の区画内を短斜櫛描文や櫛描波状文で充填する227・281などがある。後者は所謂北原式系譜、前者は下伊那の恒川式・座光寺原式など後期に主体となる文様で、頸部を中心に櫛描簾状文、波状文、短斜櫛描文、所々貼付ボタン文が認められる。新旧の2系統併存する様相は甕と類似する。

甕・台付甕 甕は出土土器の大半を占める。灰黄褐色～褐色の1～2mmほどの長石・石英粒、細かい雲母を含む胎土で、つくりが薄く器面の傷みが著しい。しかも破片が多く、全形を窺える資料は住居跡の埋甕炉体土器が中心である。器形は胴中位から上半に最大径をもち、緩やかなカーブを描きながら底部に至り、口縁は緩やかに外反する。最大径が口縁部にあるものと、口縁部と胴部が類似径となるもの、胴部に最大径のあるものがある。口縁は弥生中期後半の甕より屈曲が弱く、胴部から文様が連続して施される。口縁は外反するものが多いが、236のように面取りするものや、口唇部が面取り状となるものも少量ある。279は受口状口縁であるが、取り上げミスによる弥生中期後半SB39出土の疑いがある。

甕形態のバリエーションについては、松本平南部で中期後半末からの継続器形（口縁径が大きいか、同径）と後期的な新器形（胴部径のほうが大きい）が併存する様相（直井1996）と捉えられているが、この様相は下伊那も同様のようで、北原系と後期継続タイプの壺が併存する様相にも通づると思われる。

なお、265・275は底部脇にタテ方向に細長い粘土紐を貼り付ける。煮炊きに際しては目につかない部位だが、機能や系譜はわからなかった。

調整は器面が傷んで仔細不明なものが多い。掲載図ではハケ調整の痕跡を図化したか、その上のミガキの有無は不明である。また、外面胴中位上半の波状文施文周辺のみハケ目が顕著に残るものが多いが、口縁部と胴下半はナデやミガキによりハケ目が消えたか、櫛描文を施すための再調整ハケとも思われる。内面の調整も傷みで不明ながら、260・278・280にはミガキが確認できた。ただし、278はミガキとするには幅広く雑な調整で弥生中期後半の丁寧なミガキとは異なる。

文様は無文、縄文、櫛描文があり、無文のハケ調整のみと縄文の甕は僅かで、大部分は櫛描波状文・簾状文・短斜文が施され、口唇部を除いて縄文と櫛描文が同一土器に施されることはない。ハケ調整のみの甕は241があり、他の無文例は表面剥落によって文様の有無が確認できないものである。縄文施文は240・247があり、同様の例は松本市竹淵遺跡（2次）9号住、飯田市猿小場遺跡出土例、岡谷市橋原遺跡に櫛描工具刺突と記載される縄文様の施文をもつ壺がある。本遺跡では39のように刺突で縄文風の表現をとるものもあるが、本例は縄文と認められる。ただし、縄文自体は中期後半のものより不明瞭である。他に232・236のように口唇部に縄文を施すものが少量ある。

櫛描文は横位施文を基本として、短い斜方向の櫛描文（短斜文）、波状文、簾状文などが胴部上半～口縁部にかけて3～4段施される。頸部に施される簾状文・波状文は中期後半で胴部文様の上限を画するように位置していたが、後期はこれを越えて口縁部外面にも施文される。短斜櫛描文、波状文は単一種もしくは組み合わせで用いられ、頸部を意識してこの部位の施文方法を変えるものもある。胴部施文は波状文を主体としながらも、多様な組み合わせが認められる。波状文のみが219・222・223・233・235・236・238・250・275と多く、他に短斜文・波状文244・258・264、短斜文・波状文・短斜文282、波状文2段と短斜文214、波状文2帯と短斜文・波状文279の例がある。頸部簾状文を施すものは簾状文・波状文・短斜文217、短斜文・簾状文・短斜文232、短斜文・簾状文・短斜文2段の280と少ない。短斜文のみは220・251・276があるが、251は頸部で短斜文施文角度を変えており、頸部が意識されている。なお、221はSB09出土ではあるが、重複する弥生中期後半SB03からの混入かもしれない。

台付甕には283や262があるが、脚のみの出土で全体形状は全くわからない。本遺跡の住居跡は基本的に埋甕炉であり、埋甕炉にはSB41のように逆位の壺を用いる場合もあるが、甕を正位に置くものが多い。埋甕炉はSB18など炉体土器周囲が焼けている例からも甕を差し込んで使用するとと思われるが、台付甕の場合、どのように用いられたかは明らかにできなかった。ただし、平底甕も炉埋甕の頸部にかかるように設置するならば、胴部最大径はより下方にあるほうが良いとも思われるが、必ずしもそうではないので、上記のような炉の使用法とは言い切れないかもしれない。

イ. 文様

上述したように、甕の一部に縄文も認められるが、基本的に横位の櫛描文が主体で、沈線は壺の一部以外ほとんどない。しかも弥生中期後半ほど壺・甕の文様の区別はない。

櫛描文は当該期の主文様で波状文・簾状文・短斜文が確認できたが、円弧文は判然としない。波状文は畿内型櫛描文が認められ、中部高地型櫛描文と断定できる例はなかった。波状文は間隔を空けないものもあるが、比較的間隔を空けるものが多い。短斜文は弥生中期後半にも206のような例もあるが、普遍的ではなく当地域の弥生中期後半からの継続ではないと思われる。この文様は波状文同様に施文部位が限定されておらず、口縁部や、波状文との組み合わせで胴部施文に用いられ、229のように壺でも用いられている。簾状文は壺の胴部にも施されるが、甕は頸部に限定される。弥生中期後半では頸部の簾状文が胴部文様上限を画していたが、後期は簾状文を越えて口縁部まで施文される。また、簾状文に変わって波状文・短斜文が施されたり、波状文が連続して施される場合もあって、簾状文は普遍的とはいえない。なお、弥生中期後半SB27の162のような口縁部に波状文を施すものがあるが、後期土器との関係は明らかにできなかった。

当該期の櫛描文は下伊那地域の恒川式・座光寺原式土器に共通する。下伊那弥生後期土器の編年（山下2002）によると、下伊那では後期前半に短斜・波状文の組み合わせにバリエーションがあるが、次第に口縁部の波状文・短斜文→波状文に集約されてくる変化と捉えられている。これは外反の強い器形に集約されてくる動向と表裏をなしていると理解する。また、上伊那の福島 永氏（福島 永1999）、山下誠一氏（山下誠一2002）の編年案によると、口縁部の伸張化傾向と波状文の多段構成への変化が想定されている。短斜文・波状文併用から波状文主体へ変化するならば、本遺跡の様相は下伊那同様に多様性が認められ、上・下伊那の形態差が拡大する後期後半以前の所産と考えられる。

縄文は甕に限定され、240・247のように胴部上半に縄文のみ施されるものの他は、僅かに口唇部にのみ施される。沈線文は壺のみがあり、227・281のように三角の区画に用いられる事例がある。施文範囲は胴部上半に限定されるように見受けられる。

ウ. 出土状況の特徴

弥生後期住居跡の土器出土状況の特徴は、量が少ないこと、破片出土が多いこと、出土器種の少なさが挙げられる。出土量の少なさは土器廃棄場所が別にあったか、あるいは使用量自体が少ないか、土器が持ち出された等が考えられるが、調査では明らかにしえなかった。弥生中期後半の住居跡のように焼失住居跡床面にそのまま完形土器が散在して検出された状況もない。

エ. 土器の特徴と年代的位置

後期前半の土器は下伊那地域の土器と極めて類似した形態・施文が認められる。そこで、下伊那地域の土器編年（市沢1991、山下1999・2002）を参考に本遺跡の年代的位置を考えてみる。壺は北原式系の文様も僅かながらあるが後期にみられる文様主体であること、壺の口縁は緩やかな屈曲で上方にのびるもので、甕は口縁部の屈曲の強いものが認められないこと、頸部簾状文は区画の役割が弱い特徴から、本遺跡の土器は櫛描文系Ⅱ期（市沢1991）、Ⅳ段階（山下1999）、後期Ⅰ段階（山下2002）に対比しうと思われる。下伊那地域で後期に続く新しい要素が認められる時期にあたり、時間差をおかずに同様の土器が当地域でも展開した可能性が窺える。

また、北原式系の施文をもつ壺は、中期後半の栗林式土器で占められていた段階には認められず、当該期に認められる点は、SB19で後期に続く壺と北原系壺が出土した状況から、甕同様のバリエーションの並存状況と捉えられ、それ自体が特徴の一つとできる。これは下伊那地域でバリエーションが認められている点とも共通しよう。そうしたなかで、縄文施文の甕の位置付けが問題として残る。後期の縄文施文土

器は下伊那にも例はあるが、やはり松本平南部域に類例が多いようである。縄文の甕は地域性を表現する可能性もあって、この土器が本遺跡の性格を理解する鍵となるようにも思われるが、この点は十分検討できなかった。

ところで、後期前半に下伊那地域の影響を受けた土器が出現することは松本平南部でもすでに指摘されており、栗林系土器群が伊那谷南部の土器の影響をうけながら解体し（直井雅尚1991）、後期前半段階で下伊那地域の影響を受けた土器様相に劇的に転換してしまう（直井1995・1999・2001、小山2001・2002、山下2002）とされる。このなかで直井氏は後期の土器を神村透氏が使用した「多段帯状施文」の呼称を使って、横位の帯状施文を間隔開けずに縦に配置すること、頸部における文様の集約、あるいは頸部の簾状文・波状文による上下の施文を画する原理を持たない点、さらに短線文を用いる点などの特徴を指摘した（直井2001）。一方、こうした多段帯状施文系土器のなかに小地域的な発展を遂げる土器が存在することを小山氏は注目している。（小山岳夫2001）小山氏は櫛描文を胴上半部に施す多段帯状施文系壺が小地域性を示すと指摘するが、本遺跡には明瞭なものがない。こうした発展を遂げる以前に位置づくと思われる。

参考文献

- 1991 直井雅尚「松本平における百瀬式土器の実態」『長野県考古学会誌63』長野県考古学会
- 1996 直井雅尚「第3章 第3節 1（2）弥生土器」『竹淵遺跡Ⅱ』松本市教育委員会
- 1999 直井雅尚「松本盆地南部における弥生中期後半～後期の土器編年」『長野県の弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会
- 2001 直井雅尚「弥生中期から後期へ」『長野県考古学会誌93・94』
- 2001 小山岳夫「長野県後期弥生土器の地域圏」『長野県考古学会誌93・94』
- 2002 小山岳夫「長野県の後期弥生土器」『東日本弥生時代後期の土器編年 第一分冊』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会
- 2002 山下誠一「長野県の弥生土器」『東日本弥生時代後期の土器編年 第一分冊』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会
- 1999 福島 永「伊那谷北部の弥生土器」『長野県の弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会
- 1999 山下誠一「飯田・下伊那の弥生土器」『長野県の弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会
- 1991 市沢英利「第二編 第4章 農耕社会の始まり—弥生時代—」『下伊那史』第1巻
- 1977 箕輪町教育委員会『木下北城』
- 1980 飯田市教育委員会『猿小場遺跡』
- 1981 岡谷市教育委員会『橋原遺跡』
- 1996 松本市教育委員会『竹淵遺跡Ⅱ』

④ 弥生後期末～古墳時代前期

後期後半の土器は不明瞭だが、北部Ⅱ区検出のSB101、Ⅲ区河道跡低地内3面、微高地域のSB35上層で弥生後期末～古墳時代初頭と思われる土器が出土した。微高地では出土地点が限られるが、Ⅲ区低地内は広く散在的に採取されている。SB101とSB35上層出土土器は弥生後期末頃とみられるが、Ⅲ区低地出土品に若干下の時代のものがある。また、SB101とSB35上層出土品は断片的な資料であり、しかもSB35は下層土器も含んで厳密な単一時期の所産とは言いがたい。ここでは量が少ないことや若干幅のある時期をまとめて扱うため、出土地点ごとに概観する。

SB101は甕のみ出土し、器形が判明するのは埋甕炉の211のみがある。胴部に最大径をもち、緩やかに外反する口縁に至り、胴部に波状文は施されていない。他には213の櫛描波状文が施された甕片や、図示しえなかった薄いS字甕の体部破片が出土している。SB35上層出土土器は破片が多く、全体の器形が判

明するものはほとんどない。壺は弥生後期の系譜に位置する壺267がある。大きく開いて端部が上方へ折り返され、口縁上部は欠損するが、折り返し端面にタテの沈線（刺突?）、頸部に波状文が認められる。269は簾状文・波状文を施す壺、有段口縁と思われる口縁部破片が出土している。小破片で図示していないが、ここもS字甕破片が出土している。他の甕は当該期の所産か断定できない。なお、微高地の集落域で当該期と思われる411の高杯脚部片が出土している。

Ⅲ区河道跡低地の3面水田からは19・32のS字甕、31の無文で口縁部端部が上方に内湾ぎみに開く甕がある。なお、28の小型丸底土器は古墳中期の所産、30は古墳後期の所産と思われる。34は厚手の甕であるが時期の詳細はわからなかった。

当該期の土器様相は断片的で判然としないが、弥生後期から継続する形態の壺・甕があり、一方でS字甕や高杯など東海地域の所産と思われる土器が少量認められる。また、水田域出土の土器は若干時代の下るものを含むが、一定量出土している点は注意される。

⑤. 古墳時代後期

古墳時代後期の土器はⅢ区南～Ⅳ区の微高地域、Ⅳ・Ⅴ区低地、Ⅲ区河道跡低地内、Ⅵ区の北端など弥生後期同様に広範囲で採取されたが、北部のⅥ区南部～Ⅱ区では出土していない。微高地域では住居跡SB01・04・08・10・13・33・36・42やSB02・15、SK06、掘立柱建物跡、微高地・低地境界域のG低地南辺で多くの土器が採取された。

ア. 土師器の器種別概観

土師器には杯・高杯・壺・甕・甗等がある。杯・高杯などの食膳具は古墳時代中期から継続する器種で出土量も多いが、食膳具には精製・粗製、内面黒色処理されたもの、部分的に須恵器の模倣と思われるものなどがある。また、長胴化傾向の甕、甗などカマドの普及と共に新たに出現した器種が認められる。

杯 出土量が多い。体部は半球状で口縁端部を短く折るものと、そのまま直線的に延びるものに大別され、前者は外側に張り出すものが少量ある。他にはミニチュアとの識別が曖昧ながら、337・404のような小型の杯形土器と338の須恵器模倣を思わせる体部中位に低い稜をもつ雑なつくりのものがある。胎土は比較的精選された粒子の細かい胎土と、1～2mm前後の砂粒を含む粗い胎土のものがあり、これは高杯・小型壺に共通して認められる。成形は紐輪積みで、ハケ調整?後に底部外面を削って丸底とし、全体を磨くものと、ナデのみのものがある。ミガキを施す場合は内面が放射状もしくはタテ方向のジグザグに磨かれ、外面はナナメ・タテ、口縁部はヨコミガキする。また、334・355・367のように内面黒色処理されるものが僅かにある。なお、392はナデ調整だが、非常に薄く作られた異質なもので搬入品の疑いがある。また、318は外底部に「×」のヘラ記号がある。

高杯 古墳時代中期から継続する柱状脚高杯を主体とするが、雑な作りや杯部の屈曲が弱いものなどが認められる。杯部は3形態ある。柱状高台から一旦水平ぎみに底部をつくりだし、さらに稜をもって屈曲する形態が多く、358の杯同様の湾曲した体部から口縁部が短く外側へ屈曲する形態、さらに361・406を代表とする杯部が2段の屈曲をもつ大きめの形態が少量ある。これ以外に362の口縁が屈折する大きめで深い杯部形態と思われる破片があるが、仔細不明である。杯部調整は器面の傷みがひどく仔細不明ながら、内外面に雑なタテミガキを施すものが多く、295のように明らかにミガキを施さないナデ調整のみのものがある。脚部は柱状高台が多く、脚下方に開いた低いものや低部との境が不明瞭なものもある。内部はヘラを少しづつ回転させたオサエ痕や削りが残る。外面は部分的ながらタテミガキが観察される。底部は柱状高台下端から屈曲して広がる形態で、端部が上方へ反るものもある。この高杯は杯同様に精選された胎土と砂粒の目立つ胎土のものがある。

壺 壺は大・小2種ある。大型壺は粗い長石・石英粒を含む厚手の雑なつくりが多く、全般的に器面の傷みが著しい。壺はミガキが施されて比熱を受けていないもの、胴部が球胴に近いもの、口縁部の形態から識別したが、ミガキを施す甕も存在するので体部破片の識別は不十分である。全体形状を窺える資料は少ないが、343などから胴部中位に最大径をもつやや卵型の胴で、頸部が明瞭に折れて口縁部にいたるとみられる。底部は平底である。口縁は有段口縁と、317の内湾するもの、309・360のように外反ぎみの直口縁がある。有段口縁は321・343のように比較的明瞭に折れるものもあれば、302のように折れが形態化して外観は直口縁に近い形態まであり、内湾する口縁部も有段口縁の退化形態バリエーションの一つかもしれない。外反気味に直立する口縁は甕との識別が不十分だが、比較的長めの309・360が該当すると思われる。これらの大型壺の形態は基本的に古墳時代中期から継続するものと捉えられるが、有段口縁壺の口縁形態をみるとかなり退化が認められる。

次に小型壺であるが、胴部は胴下半に最大径をもつ潰れた球胴で、頸部は明瞭に折れて直線的に延びる口縁が付く。底は丸底である。器壁の厚いやや雑なつくりの344と、薄手で精選された胎土を用いる345の2者があり、高杯・杯同様に精製・粗製が認められる。精製胎土の小型壺は比較的識別しやすいが、やや雑なつくりの破片では小型甕との識別が不十分なものもある。調整は内面体部下半をナナメ・ヨコハケ、内面上部は紐輪積み痕を残すものが多い。胴下半を作製してから胴上部を紐輪積みで積み上げ、最後に口縁部を接合する手順とみられる。外底をヘラ削りして丸底とし、その後にナナメ・タテミガキを加え、口縁部は内外面をタテミガキする。

甕 甕は大小2種ある。やや縦長の卵型胴部に頸部が明瞭に屈曲して外反口縁がつく形態である。底は平底と丸底がある。調整は遺存不良で不明瞭なものが多いが、408のようにナナメハケやケズリに近いハケ、ナデ調整が観察される。また、330・331のようにケズリ調整するものや、354や小型甕351のようにミガキを施す甕が少量ある。胎土は壺同様に粗い砂粒を含むものも多く、作りが雑で重量感のあるものが多い。口縁部の形態は短く外反するものが主体だが、僅かに327のような薄手のつくりで口縁が内湾ぎみに立ち上がって、口唇部端面が若干肥厚して内面側に面を取るものがある。小型甕に類例がある。

小型甕は少ないながら、一定量認められる。小型壺の粗製品と識別しにくいものがあるが、307・311～313・325・326・349・379・397・407が該当する。球胴に近い長めの胴部で短く外反する口縁部が付く。底は丸底が多く、厚手の平底に近いものもあるが、ケズリで丸味を帯びる。つくりは全体的に雑で、胎土は甕と同様である。調整はナデが多く、一部ハケを残すものやミガキが認められる。口縁部は短く外反することを基本とするが、349は327は異質な形態で、内湾ぎみに立ち上がり端面が肥厚する。年代的な一致はともかく畿内布留系の甕に類似した形態である。

甕は大小セットで用いられ、大型甕は胴が長めの卵型で丸底志向の特徴をもつ。畿内地域の土器の影響を受けたとみられる。なお、長野県内はこの丸底甕がカマド出現前夜から認められるとの指摘もある（千野 浩1993）が、本遺跡では該当時期の土器がなく詳細は明らかにしえなかった。

甗 甗と思われるものは382があるが、底部の僅かな破片で仔細不明である。筒型で底部が抜けるタイプと思われる。

イ. 須恵器の器種別概観

微高地の集落遺構と水田域境界の土器集中などから土師器に伴って須恵器が少量出土した。器種は甕・はそう・杯・蓋の4種のみあり、破片数では甕胴部破片が多く、続いてははそう、杯・蓋の順である。破片数は器の大きさの反映かもしれないが、肉眼観察でも口縁部の形態などから甕・はそうは、杯・蓋よりも個体数は多い。ただし、当該期の貯蔵具には土師器壺類が存在するが、土師器壺の出土量の多さからすると須恵器に主機能が取って変わられてはいないとみられるが、古墳時代中期から継続した有段口縁壺の形

態が退化することとは関連するかもしれない。

甕は口縁部を中心に314・353・396・455・456の5点図示した。何れも大きく開いて、僅かに肥厚気味に口唇部に至り、先端が僅かに上向く。口唇部直下に凸帯を付して櫛描波状文を加えるが、凸帯はあまり稜がするどくない。焼成良好で青灰色を呈する堅緻な焼成である。陶邑編年に対比するとTK216・208に対比しえようか。体部破片は図示していないが、外面は細かい平行タタキで、ところどころカキ目が観察されるものがある。内面は青海波文をナデ消しているものが多い。

はそうは口縁部3点を図示した。いずれも頸部から一段屈曲して口縁部を形づくる。453は口唇部が丸く、390は口唇部内面が凹線状に窪む。453はTK208、390はTK23に比定できようか。454の頸部は波状文が数段施されている。杯と蓋は1点づつのみ図示したが、これが全てである。399は蓋で、頂部が平坦で端部が外反ぎみとなる。削りは頂部から稜部近くまで施される。TK208頃か。400は杯身であるが、全体形状は不明である。比較的平たい形状で蓋と類似時期の所産か。

以上のように本遺跡の須恵器はTK216・208前後を中心とするとみられる。

ウ. 出土傾向

当該期の土器出土状況は遺構が遺存不良なので傾向を示しにくいだが、土器出土量は弥生後期より多く、弥生中期後半より遺存度の低い破片資料が多い傾向が窺える。土器量の多さは食膳具の多さによる使用土器総量が大きいことの反映と思われる、破片出土が多いことは一括廃棄、あるいはそのまま土器が残されることが少ない廃棄状況が考えられよう。このことと関連するか、低地境で破片を中心とした土器集中が検出されたことは興味深い。上記のような出土状況がある一方で、いくつか特徴的な土器出土状態もみとめられた。SK06から比較的遺存状態が良好な土器が出土し、出土器種は甕を中心とする偏りがある。何らかの祭祀行為に伴う埋納に近い廃棄、あるいは短期の廃棄行為の所産と思われる。また、ST12の柱穴跡のように埋土上層から略完形の甕が出土したり、埋土中で大型破片が出土した例がある。同じ柱穴跡内でも出土層位が違うので行為自体は異なると考えられる。また、集落域の北端の水田域境界部で大量の土器が出土したが、破片出土で完形にならないものの器種の偏りがなく、上述したような破損した土器を集落外へ廃棄した跡と推測した。

エ. 土器の特徴と年代的位置

当該期の土器の特徴を整理しておく。器種は土師器には杯・高杯・壺・甕・甑があり、小型丸底土器を含まず杯類を多用すること、さらに黒色土器や杯・蓋・甕・はそうなどの須恵器が少量認められる特徴が挙げられる。高杯・杯・壺・甕は前段階から継続したものと思われるが、有段壺口縁や高杯など退化形態と捉えられるものがある。一方、比較的出土量が多い杯は若干のバリエーションが認められ、長胴傾向の丸底の甕、甑などカマド普及前後の新たな器種もみられる。また、形態が異質な甕327・349、杯392など搬入品や他地域の影響を受けたと思われる土器があり、これらの土器は箕輪遺跡の土器様相を考える上で鍵になると思われるが、今回は位置付けを明確にできなかった。

なお、土器の年代的位置は上記の土器特徴から、千野浩氏の4段階、広田和穂氏のⅡ期古相に対比しうる。本遺跡の出土須恵器はTK208前後と思われることから白石太一郎氏の説（白石太一郎1979）によれば、5世紀中頃に近い後半頃、尾野善裕氏の年代観に従えば（尾野善裕1999）5世紀末頃と推測される。

参考文献

- 1993 千野 浩「本村東沖遺跡における古墳時代中期以降の土師器編年について」『本村東沖遺跡』長野市教育委員会
- 2001 中村浩『和泉陶邑出土須恵器の形式編年』芙蓉書房出版
- 1999 広田和穂「第V章 第1節 土器」『榎田遺跡 第2分冊』長野県埋蔵文化財センター

- 1989 原明芳「長野県における「黒色土器」の出現とその背景」『東国土器研究 第2号』
 1981 田辺昭三『須恵器大成』角川書店
 1979 白石太郎「近畿における古墳の年代」『月刊 考古学ジャーナル』No. 164
 1999 尾野善裕「古墳時代須恵器の年代観」『古墳時代の猿投窯と湖西窯』三河考古刊行会

⑥. 古代の焼物

古代の焼物は内黒の土師器、須恵器、灰釉陶器などの食膳具類、土師器甕、須恵器甕など、少ないながらⅠ区を除く広域で採取された。出土土器の年代は9C代と皆近似しており、今回の調査区内で採取されたものはあまり時間幅がないと思われる。ただ、これまでに箕輪遺跡内では前後する時期の遺物は少量ながら採取されており、年代別に分布域が状況が異なる可能性は残される。ここでは量が少ないことからまとめて記述する。

土師器はⅢ区河道跡低地周辺で採取された21の杯 A、E 低地の24の碗がある。ロクロ調整で内面は黒色処理される。須恵器は杯と甕がある。杯はⅢ区 E 低地出土の25、微高地域の SK11出土の412、検出面採取の457がある。何れもロクロ調整で412・457は底面に回転糸切りを残す。甕は北部のⅥ①区で破片が採取されている。灰釉陶器はⅡ区採取の15がある。高台は丸みを帯びた三日月型で光ヶ丘1号窯式に比定できようか。他に図示していないが、Ⅲ区 C 低地からロクロ成形の土師器小型甕、ハケ目を残す甕片などが採取されている。

⑦. 中世・近世の焼物

溝跡やⅥ・Ⅰ～Ⅲ区のⅠ・Ⅱ層、Ⅳ・Ⅴ区Ⅲ層などから中近世陶磁器が採取された。まとまった一括出土がないため、生産地・年代別に概観する。時期ごとに出土焼物量の増減が認められ、器種も食膳具ばかりでなく、調理具・貯蔵具もあって焼物出土の背景は明らかでない。

時期別に概観すると、平安時代後半～末までの所産は当該期の白磁と思われる破片が僅かにあるのみで、13世紀代から遺物が多く認められる。図示したものは4・26の山茶碗系こね鉢、474山皿、458古瀬戸合子?、5の常滑壺などがあり、他に未掲載の古瀬戸瓶子、龍泉窯系蓮弁文青磁碗などがある。また、18の手づくねカワラケ、472・476ロクロカワラケも当該期の所産とみられる。14～15世紀代は少なく27・464の古瀬戸卸皿、3の古瀬戸平碗、469の天目茶碗などがある。10は手づくねカワラケであるが、中世前半の所産とは形態が異なっており、当該期に含まれる可能性がある。15世紀末～16世紀にかけて量は少ないが14・20・481の内耳鍋、462の大窯丸皿などが出土している。460は大窯稜皿か、連房の輪ハゲ皿と思われる。図示以外では微高地域の SD01から大窯すり鉢破片が出土した。

近世は18世紀末～近代にかけての陶磁器が多い。17世紀の所産は2の天目茶碗、上述した460の鉄釉輪ハゲ皿とも思われるもの、掲載以外に志野丸皿がある。18世紀では467のすり鉢、459・479の鉢類、その末頃では480の鎧手茶碗、9・12・435・461の灰釉丸碗、17の灯明皿などがある。これ以外に土瓶や瀬戸美濃産の磁器茶碗類があり、破片も含めるとかなりの量がある。

以上のように、13世紀以降の所産は多く、断片的ながらも長期にわたる焼物が出土している。ちなみに、隣接地の南箕輪村調査地点の陶磁器はカワラケを含む13世紀代、15世紀後半頃、16世紀～17世紀前半の所産のまとまりがある。13・15世紀後半代のまとまりは今回の調査域と一致するが、13世紀代でカワラケが多く採取されている点は注意される。

2. 土製品

土器以外の土製品としてミニチュア、土製円盤、土製紡錘車、土玉がある。

①. ミニチュア (第126図 PL49)

箕輪遺跡では集落遺構を中心に11点のミニチュア土器が出土した。出土遺構からみると古墳後期が483・484・491～493の5点、弥生後期は489の1点、弥生中期後半は485～488の4点で、他は帰属時期が特定しにくい溝跡出土である。古墳後期は住居跡2点、G低地境の土器集中地点・SD26周辺3点出土し、何れも破片だが、手づくね成形されている。弥生後期の489は雑な手づくね成形で、古墳時代後期のものと同じ成形方法である。一方、弥生中期後半のミニチュアは通常の土器と類似した施文、調整が施される。485は無頸壺、486は甕、488は高杯に比定され、それぞれミガキが施される。487はモデルが判然としないが、縄文と体下部～低部にかけてミガキを施す。490・492もミガキを施す点では同様で弥生中期後半の所産かもしれない。また、弥生中期後半の所産はSB28のピット4周辺から集中的に出土し、ここから唯一の管玉も出土している。この住居跡では双口壺も出土して特殊な遺物が多く、住居跡の祭祀行為か、居住者の性格に関連して用いられたものだろうか。

②. 土製円盤 (第126図 PL49)

土製円盤は土器片周囲を打ち欠いたり、研磨して円盤状に加工した土製品で、その可能性があるものを掲載した。ただし、周囲を打ち欠くと捉えたものは認定に不安を残し、土製円盤と断定しきれないものもある。ここでは可能性のあるものを含めて提示する。掲載したものは直径2～3cm前後の円形を呈し、何れも土器の破片を用いる。全部で17点認定したが、出土遺構では古墳時代後期の所産が3点、弥生後期4点、弥生中期後半3点、弥生と思われる土坑出土が7点で、古墳後期や弥生後期のものは認定に不安がある。SK80・166などの土坑から比較的多く出土したが、1遺構からの大量出土はない。

周囲の一部に研磨が認められるのは509・510・514・515で、499・501・502・504・505は研磨の可能性はあるが判然とせず、残りは打ち欠きとみられる。県内の弥生時代遺跡から土製円盤が出土する例があるが、その多くが土製紡錘車に転用する過程の製品と思われ、本遺跡の事例より大きめである。従って、土製紡錘車へ転用する未製品とは認められないが、使用目的は明らかにしえない。

③. 土製紡錘車 (第126図 PL49)

土製紡錘車と認められるものが3点出土した。494が検出面、495がSB20、496が微高地北端のSB11・12・43出土である。時期の特定できる遺構出土例はSB20のみで、SB11・12は時期詳細不明ながら弥生土器出土が多いことから弥生時代の可能性がある。形状は中央に直径6mm前後の軸孔をもつ平たい円盤状で、大きさは推定直径5cm前後～6.4cmで、厚さは1.3、1.4、2.1cmである。断面形は494・495が角の丸い楕円形、496は長方形を呈する。494のみ表・側面が磨かれるが、他はナデ調整される。

④. 土玉 (第126図 PL49)

土玉は497・498の2点あり、いずれも古墳後期SB08から出土した。土製の球体で中央に植物茎で穿孔される。1遺構から2点出土したが、つぶられていたかどうかは不明である。

3. 各遺地点構別出土の土器・土製品

遺構別・出土地点ごとに出土土器を記述する。なお、集落域の遺構のみ出土量が多いため土器量や器種別出土量の目安を提示するため土器重量を併記する。

①. VI・I・II区出土土器 (第102図 PL32)

VI区 古墳後期以後の土器・陶磁器が少量出土した。古墳後期土器はVI⑥区から甕、1の杯片が採取され、

古代土器は未掲載ながらⅥ①区中央の微高地周辺で糸切り底の須恵杯、須恵甕が僅かに出土した。中世はⅥ①・②区低地内水田層から3の古瀬戸平碗、4の山茶碗系こね鉢、5の常滑壺が出土した。他に内耳鍋、Ⅵ⑥区で2の17世紀の天目茶碗、18世紀末以後の陶磁器が僅かにある。

I区 I①区1層から瀬戸美濃染付碗・仏飯具、②区から近代の染付碗が採取された。他に時期不明の甕片や不明土師片が少量ある。SD110からは弥生後期と思われる11の壺、他に波状文・短斜文を施す甕破片、不明土器片が出土した。SX102は瀬戸美濃連房碗2点、近在窯鉢・土瓶1点ずつ、近代の瀬戸美濃染付碗1点などがある。

II区 II①区では弥生後期甕、内耳鍋、瀬戸美濃連房すり鉢、II②区で弥生後期甕、15の平安時代灰釉陶器碗、連房灰釉丸碗、土瓶、徳利が採取された。個別遺構ではSD105から図示した12の瀬戸美濃連房灰釉丸碗、未掲載の黄瀬戸鉢が出土した。SD107は瀬戸美濃連房の土瓶。伊万里Ⅴ期と思われる碗が出土し、18世紀末以後の所産と思われる。SD108は図示した9の瀬戸美濃連房灰釉丸碗、10のカワラケが出土している。SD111は弥生後期と思われる壺破片、甕、高杯か鉢と思われる赤彩土器片が少量出土した。甕は波状文と図示した波状文・短斜文を施す破片がある。SA102からは未掲載の瀬戸美濃産と思われる行平鍋片が採取された。SA105からは内耳鍋片と古瀬戸後期様式天目茶碗が出土している。SA33は検出時に上部礫混じり土から採取された近世末～近代の近在窯陶器徳利片がある。SH101から瀬戸美濃染付磁器碗・皿類、連房こね鉢、山茶碗系こね鉢、ガラスなどが出土している。磁器碗皿には銅版転写と上絵付が含まれる。なお、II区SB101は便宜的に微高地域に含めて後述する。

②. III区河道跡低地出土土器 (第102・103図 PL32・33)

A低地 A低地Ⅲ③区1a面から平安時代の回転糸切りを残す須恵器杯、内耳鍋、瀬戸美濃連房すり鉢、連房灯明皿、伊万里網手文染付碗、瀬戸美濃染付碗皿類、連房器種不明小片が採取された。Ⅲ①区1面のSX101では中世のカワラケ、瀬戸美濃連房すり鉢、伊万里瓶類、磁器香炉片が出土した。2面上部の泥炭質土層から中世前半と思われるカワラケが採取され、3面からは古墳後期の内面黒色処理された杯片、弥生後期とみられる甕片?が出土した。SQ101から図示したS字甕が出土した。

B低地 瀬戸美濃連房拳骨茶碗片1点が採取されているが、出土層は不明である。

C低地 時期詳細不明の須恵器甕、土師器ハケ甕、カキ目を残す小型甕、内黒の杯か碗破片が少量と不明土器小片、層位不明の内耳鍋?がある。水田面は平安時代と思われる。

D低地 時期不明の土器小片のみがある。

E低地 1面の前後のⅢ②区現耕土下2層から志野丸皿、内耳鍋、2層下面で山茶碗系こね鉢が1点出土した。SA31から内耳鍋と平安時代須恵器杯片が1点ずつ採取された。2面では泥炭質の4層から古瀬戸卸皿、平安須恵器杯小片が出土し、2面検出時に内黒碗片1点と図示した26の小型丸底土器1点が出土した。SC106は2面上層に帰属する遺構で内黒の杯底部1点が採取された。3面からは図示した29の弥生?壺と思われる破片が出土し、3面の木芯畦跡SA38から図示した弥生後期甕片、SA109から30の古墳時代甕、未掲載の弥生時代と思われる甕小片、SD61土手内からは弥生壺片・甕片、波状文の甕片、S字甕片、古墳後期壺・高杯片、古墳時代と思われる甕、時期不明土器小片が少量出土した。SD61土手は調査時にSD61付属施設と捉えた経緯からSD61の土器が混在した疑いがある。3面水田跡を切るSD61から弥生中期後半の壺・羽状文甕・台付甕、波状文を施す弥生後期甕、弥生と思われる壺・甕片、古墳後期と思われる甕・高杯・須恵器片が出土し、時期不明の土器片が僅かにある。SD61に接続するSD62からは時期不明の土器小片が出土している。

F・G低地 Ⅲ④区II層上部の検出作業で採取された1面遺物には古墳後期杯、平安時代?土師器杯片、灰釉碗片、内耳鍋片、大窯丸皿片、瀬戸美濃近世連房すり鉢・灰釉丸碗・灯明皿、伊万里?碗、不明土器

片少量がある。幕末までの所産が含まれる。2面(Ⅲ⑤区)はF・G低地とE低地が接続する付近のE低地2面相当水田跡で採取された遺物である。古墳後期の壺・甕・高杯片、時期不明小片が少量ある。古墳後期が中心であるが、同調査面ではG低地境の古墳後期土器集中も検出されている。F低地黒土層はⅢ②区の2面水田を覆う泥炭質土層か、その上層で採取された土器と思われる。記録ミスで帰属する土層が特定できなかった。内耳鍋1点ある。F低地水田面からは土器小片が少量のみあり、表採と思われるものに瀬戸美濃連房仏華瓶がある。G低地2面(Ⅲ⑤区)はF低地2面同様にE低地接続部分で調査したE低地2面相当の水田面である。弥生後期?壺・波状文甕片、弥生?甕体部破片、S字甕、古墳後期甕・高杯片、不明小片がある。弥生～古墳後期の所産が含まれる。SD26よりミニチュア491が出土した。

G低地境の土器集中 微高地とG低地の境界部で検出されたSQ31・35、G低地境土器集中として採取された土器である。弥生土器は少量の壺・甕片があり、甕は波状文と短斜文を施す後期の所産である。また、S字甕がある。古墳後期は壺10514g・小型壺1820g・甕10384g・杯265g・高杯6539g・須恵器甕530gがある。いずれも破片で完形にはならない。また、近世の連房すり鉢、中世の内耳鍋、古瀬戸平碗片が少量あるが、中近世陶磁器は耕地造成時の混入だろうか。上層で取り上げられた土器として古墳後期を中心に壺135g、小壺20g、杯4g、高杯328g、弥生1g、不明745g、ミニチュア11gがある。杯40～41、高杯42～46、壺47～50、小壺51から54、甕55～57、ミニチュア492・493を図示した。

③. 微高地域出土土器

ア. 竪穴住居跡の出土土器 (第104～124 PL33～47)

時期別に記述する。住居跡出土土器は接合後、器種別に分類して重量を計測して実測遺物を選別した。実測個体は直接接合せずとも主観的に同一個体と思われるものをまとめて重量を計測し、実測土器比率はこうした未接合の同一個体と思われる破片も含んで算出した。また、かなり小破片も扱ったため、器種識別に不安を残し、器種別の重量は厳密なものではない。なお、(%)は掲載土器重量/遺構内出土土器重量を表し、[%]は器種別の掲載土器重量/遺構内出土土器種別重量を表す。実測個体は遺存良好なものを選択したので、実測土器比率が高いことは遺存度が高い土器が多いことを示す目安と考えられる。

A. 弥生中期後半の住居跡出土土器

当該期の住居跡出土土器は量が多い。最大はSB26の39738g、最小はSB16の1538g、平均は12232gである。SB22・26・28が20kgを越え、SB17・27の15～16kg代と続く。土器量は少なかったものの、遺構遺存不良のSB03・31もこのグループに帰属した可能性がある。上記以外は10Kg以下である。出土土器が多いSB17・22・26は焼失住居跡で、焼失住居跡ではないがSB27・28も出土土器は多い。また、先述したように遺存良好なものを選択したので、参考に実測比率を示すと、平均58.9%だが、平均より低いSB21・24・27・31を除けば60～80%である。

SB03 (29) (第104図 PL33) 土器は3786g出土し、2450gの3点(64.7%)を掲載した。埋土は僅かで出土量は少ないが、遺存良好な土器に恵まれて実測比率は高い。59の壺は器壁が薄く、最大径を胴下部にもつ。60は埋甕炉に埋設されていた甕、61は床面直上出土の甕口縁部である。2/3ほどの残存で本来伏せて置かれていたものが耕作等で胴部以上が削平されたとみられる。

SB16 (第104図 PL33) 土器は1538g出土し、62の略完形品横羽状文甕1350g(87.8%)図示した。

SB17 (第104・105図 PL33・34) 16560g出土し、11411g11点(68.9%)図示した。壺は12023gあり、63～67の5点[71.7%]図示した。63は大型壺で、64は注口の付く赤彩壺で、66は懸垂文が施される。甕は3667g出土し、68～72の5点[73.7%]図示した。68・69・72はタテ羽状文、70・71は波状文を施し、71はやや異質な器形である。他に未掲載ながらコの字重文甕破片が出土した。鉢は掲載した1点415gの

みある。上記以外は不明小片と古墳時代の混入土師器である。

SB21 (第105・106図 PL35) 5875g 出土し、2325g10点 (39.7%) 図示した。出土量は少なく、何れも破片である。壺は2825gあり、74・75・80の3点1510g [53.5%] 図示した。75はピット内から出土したもののだが、上部出土のものと接合した。縄文を地文として横位の沈線で区画間に簾状文・波状文を施し、赤彩される。80はスリップ技法で赤彩され、高杯としても小さいことから壺とした。甕は1865g 出土し、76～79の4点 [21.2%] 図示した。77はミニチュアとしたほうが良いかもしれない。79は台付甕脚で、78も台付甕の可能性が残る。鉢は225gあり、82・83の2点 [88.9%] 図示した。81は甗と思われるが、判然としない。230gある。

SB22 (第106～108図 PL35～37) 27367g 出土し、31点22122g (80.8%) 図示した。量も多いが遺存良好なものが多い。壺は8330gあり、84～91の8点6740g [80.9%] 図示した。90は頸部に「↑」状の沈線があり、87の小型赤彩壺はピット内に埋納されていた。85は南壁際で出土し、頸部以上は耕作等で壊されていたが、内部から黒曜石剥片・未製品等が多数出土した。甕は16267gと多く、17点12772g [78.5%] 図示した。92は器面が傷み文様が途切れるようにみえるが、畿内型櫛描文の可能性はある。104も畿内型で、93は中部高地型櫛描文に垂下文を加える。96は沈線で羽状を表現する。98は羽状文の変形かナナメと思われる。99・100・105・106はタテ羽状文、97・102は格子状文で、ミガキのみは95・101・103がある。107は中部高地型櫛描文に垂下文を加える台付甕である。鉢は1120g 出土し、2点 [85.7%] 図示した。109はスリップ技法で赤彩されるが、110は赤彩が認められない。高杯は2点830g 出土し、全て図示した。直口の111と内湾ぎみ口縁の112があり、何れもスリップ技法で赤彩される。甗は体部破片の識別不十分ながら、113と114の2点820gあり、すべて図示した。上記以外は識別不能な小片である。

SB24 (第108図) 8373g 出土し、1622g (19.4%) 掲載した。量は少なく、破片が多いため図示しえたものは少ない。壺は2928g 出土し、115・116・119・120・122の破片のみ5点 [6.3%] 図示した。甕は3733gあり、3点1405g [37.6%] 図示した。1176は格子状に櫛描文を配し、118は同一個体と思われる破片を図化した。胴部文様は不明である。123は羽状文を施す。高杯は115g 出土し、121の1点のみ [26.1%] 図示した。スリップ技法で赤彩される。他は識別不能な小片で、他に502・503の土製円盤2点がある。

SB26 (第108～110図 PL37～40) 39738g 出土し、27点27315g (70.3%) 図示した。出土量が多く、遺存良好のものが多い。壺は15965gあり、126～132・135の8点10785g [67.6%] 掲載した。130は口唇部のみ施文され、126・129・131は頸部に縄文と沈線文、127は頸部に垂下文を加える。135は大型の壺で胴部にも施文される。131は焼成後の赤彩が認められる。甕は17840g 出土し、133・134・136～146・148・149の15点14930g [83.7%] 掲載した。133・134・136～139・142・145が羽状文、141が格子羽状文、140は垂下文を伴う中部高地型櫛描文が施される。143・144・146は小型台付甕で中部高地型櫛描文と垂下文のみが施される。149はミガキも施文もなく、比較的細かな胎土の土器で、外面に煤が付着して甕として使用されていると思われるが、本跡の所産か不安がある。高杯は470g 出土し、150の1点440g [93.6%] 掲載した。スリップ技法による赤彩が施される。鉢は840g 出土し、147・151の2点620g (73.8%) 掲載した。147は片口状鉢で、151はスリップ技法で赤彩される。甗は152の1点のみ385g 出土した。この他に439の縄文土器片がある。

SB27 (第111図 PL40) 15415g 出土し、14点6135g (39.8%) 掲載した。出土量が多いが、破片が主体で、文様などやや異なる様相の土器がある。他時代遺構見逃しによる混入の可能性も考えたが、判断できずにそのまま掲載する。壺は5700g 出土し、153～157の5点1935g [33.9%] 図示した。154は胎土・文様がSB28の180と類似し、同一個体の疑いがあるものだが、直接接合せず別に掲載した。153は頸部に「↑」状の沈線がある。155・156は胎土がやや細かい砂を含む異質なもので混入か搬入土器かわからなかった。156

は受口としても異質な形状である。甕は7280g出土し、158～162の5点3520g [48.4%] 図示した。159は胴部外面剥落により文様不明で、158・161・162は波状文を施す。161は畿内型櫛描波状文に垂下文を加える。162は口縁外面に波状文を施す異質な土器だが、後期土器とも異なる。158も頸部に1条のみ粗い波状文を施す。160は沈線で格子櫛描文を表現する。164は波状文、165は波状文に垂下文を加える甕である。鉢は640g出土し、163・167の2点480g [75%] 図示した。何れも赤彩されない。高杯は166の155g1点のみがあり、スリップ技法で赤彩される。他に鉢・高杯の識別ができなかった破片が215gある。また、440の縄文晩期浅鉢が出土した。

SB28 (第111～113図 PL41・42) 29997g出土し、36点20603g (68.6%) 掲載した。壺は17046g出土し、168～183の16点14010g [82.3%] 図示した。171は口唇部のみ施文する小型壺、168・169・170は頸部に施文する壺で168は焼成後に赤彩される。175・178は頸部の文様の有無は不明だが、178は赤彩される。173・174は頸部に垂下文をもち、173は赤彩される。179・180は頸部下半まで3帯の装飾帯が拡張され、180はSB27の154と同一個体の可能性がある胴部に重四角文を施す壺である。181は胴部から頸部下部に鋸歯状沈線を施し赤彩される。甕は7934g出土し、184～195・197・199の14点5110g [64.4%] 掲載した。184がタテ羽状文、186がヨコ羽状文、187がナナメもしくはヨコ羽状文と思われる。193は胴下半の器面が剥落するが、口縁が開く異質な器形である。188はタテのミガキともハケともつかない幅の狭い工具による調整を施す。192は畿内型波状文を施す小型甕、185・191・195が縄文地文とし、185はコの字重、191が楕円区画文、195は垂下する沈線と鋸歯状沈線を施す。199は器種が判然としないが、内面にミガキが施されることから甕とした。197は格子状櫛描文を施文する。鉢は1190g出土し、4点865g [72.7%] 掲載した。198・200は内湾ぎみの口縁で、201は内湾して外面に縄文と鋸歯状の沈線を施す。201は内外面赤彩される。202は折縁の口縁部で、底部と口縁部破片から図上推定復元した。口径の推定には不安がある。高杯は断定できるもので105g出土し、196の1点 [38.1%] 図示した。203は双口壺で胴下半を欠落する。375gで部分的に焼成後の赤彩が残る。他に485～488のミニチュア4点出土した。

SB31 (第114図 PL43) 7220g出土し、7点3560g (49.3%) 掲載した。埋土は薄く、破片が少量しかないため埋甕炉出土の204・205・210のみで重量3315g掲載土器93.1%を占める。壺は2465g出土し、204・209の2点 [44.0%] 掲載した。204は頸部に沈線文を施文し、焼成後に赤彩される。209は壺底部と思われるが、仔細不明である。甕は205～208・210の4点2475g [64.0%] 掲載した。205は炉底に敷かれていた胴部破片で、接合部が僅かで口縁部・底部を欠損して土器の傾斜等は不安がある。外面ミガキが施されるが、櫛描文は認められず、内面にもミガキがないことから甕とも断じ得ない。206は短斜文とヨコ方向の櫛描横線文を組み合わせる。210は格子状櫛描文、207・208は波状文を施す。他に504の土製円盤? 1点がある。

SB39 (第117図) 平成13年度調査のSB39と平成15年調査のSB30を同一住居跡と誤認して遺物が混じってしまった。ただし、SB39は住居構造や調査時の所見で中期後半とされており、弥生後期についてはSB30にまとめて掲載している。

B. 弥生後期の住居跡出土土器

弥生後期住居跡からは少量の土器しか出土していない。多い例でもSB34の12711g、SB35上層の10490g、SB19の10372gと続き、最も少ないものはSB101の1580gである。4～7kgが多く、平均は6749gとなる。また、埋甕炉の炉体土器以外の器種は破片しかない場合が多く、実測土器比率の平均は46.7%で弥生中期後半よりもはるかに低率である。また、掲載図で甕以外の器種は少ないが、当時の器種構成の様相だけでなく、甕が多用される炉体土器以外は小破片で図示できなかったこともある。

SB101 (第114図 PL43) 2268g 出土し、3点1763g (77.7%) 実測した。甕は2238g 出土し、3点1763g (77.7%) 掲載した。211は炉体土器で1105gあり、掲載土器の62.7%を占める。212は甕の胴部下半～底部、213が波状文を施す甕である。他にS字甕の小片が出土している。

SB07 (第114図 PL43) 6220g 出土し、3507g 5点 (56.4%) 図示した。壺は1576gあり、図示した218は1180g [74.2%] を占める。甕は3979gあり、2327g 4点 (58.5%) 図示した。3点は埋甕炉出土で、残りは壁際の浅い窪みに埋設されていた底部破片である。214・217は作りや文様が類似する。他の未掲載土器には高杯と思われる破片1点、弥生中期混入・不明品、混入と思われる須恵器破片1点がある。

SB09 (第115図 PL43) 4168g 出土し、3点1598g (38.3%) 図示した。壺は200gの破片のみで図示しえなかった。甕は3065gあり、3点 [52.1%] 図示した。炉体土器の219とピット出土の220で合計1528g [49.9%] を占める。221は胴部に沈線が施され、内外面ミガキを施す。切り合うSB03からの混入の疑いがある。

SB18 (第115図) 1580g 出土し、222・223の波状文甕1040g [65.8%] 図示した。他は小破片である。

SB19 (第115・116図 PL44) 12129g 出土し、12点8182g (67.5%) 図示した。壺は6567gあり、4点 [98.2%] 図示した。接合しないが、同個体と判断した破片が多いため実測比率は高い。227は北原式系、228・229が後期に続く系統の壺、230は底部と思われる。甕は4482g 出土し、1732g 8点 [38.6%] 図示した。破片が多く図示しえた個体が少ない。234はハケ調整のみで232は短斜文を施すが、他は波状文である。236は受口状口縁となる。上記以外は識別不能の小片である。

SB20 (第116図 PL45) 6075g 出土し、2210g 7点 (36.4%) 実測した。出土量が多いわりに破片が多い。壺は395gしかなく、239の1点30gを図示した。口縁は屈曲が不明瞭ながら内湾して受口状となる。胴部破片は少なく仔細不明である。甕は3990g 出土し、6点2180g [54.6%] 図示した。バリエーションが多く、240縄文、241ハケ、242短斜文、244短斜文・波状文、245波状文である。他に台付甕の破片、混入と思われる古墳時代土師器、弥生中期土器片、仔細不明の小片、495の土製紡錘車1点出土した。

SB23 (第117図 PL45) 5478g 出土し、4点1610g (29.4%) 図示した。出土量が少なく、破片が多い。壺は1740g 出土し、246の1点 [31%] 図示した。胴部下半の破片で、ハケ調整痕を図化したがミガキは判然としない。甕は2328g 出土し、247～249の3点1070g [42.2%] 図示した。247は縄文、他は波状文を施す。246と248は埋甕炉炉体である。他に500・501の土製円盤が出土している。

SB25 (第117図) 7290g 出土し、5点1780g (24.4%) 図示した。壺は960gあるが、体部破片で図示していない。甕は4210g 出土し、250～254の5点1780g [42.3%] 図示した。250・252・254波状文、251短斜文を施す。このうち250・254が炉体土器である。他は弥生中期土器破片である。

SB34 (第117・118図 PL45) 12711g 出土し、11点8071g (63.4%) 掲載した。量は多く、特に壺類は当該期住居跡では多いほうである。壺は5545g 出土し、255～257の3点3905g [70.4%] 掲載した。255は外反口縁部破片で頸部に波状文を施す。256は器面が荒れて文様は不明ながら、胴部に波状文と貼付ボタン文が認められる。作りは厚く重量感がある。257は壺と思われる胴部破片だが、土器の上下の識別に不安を残す。甕は6715g 出土し、258～265の8点4135g [61.6%] 図示した。264・258は口縁部に短斜文、頸部以下に波状文を施す。263は短斜文、259・261は波状文を施す。260は炉体土器で器面が荒れて文様が不明である。265はSB35下層にも類例があり、甕底部と判断した。タテの粘土紐を貼り付ける。262は台付甕と思われる。他に489のミニチュア1点、507・508の土製円盤? 2点がある。

SB35上層 (第118図) 10490g 出土し、6点1005g (9.5%) 掲載した。SB35廃絶後の窪地出土の土器で、SB35下層土器とは時期差がある。破片が多く、図示できたものは少ない。壺は1705g 出土し、内3点215g [12.6%] 図示した。266は有段口縁壺と思われ、267は後期壺と思われる。口縁屈折部を欠損するが、

へら刺突文が僅かに残る。269は弥生後期壺頸部で、簾状文と波状文を施すが、器面が傷む。甕は4780g出土し、3点790g [10.3%] 図示した。268・270・271は波状文とみられるが、遺存不良で文様も部分的にしか残存しない。他にS字甕の胴部破片15gがある。微高地域では弥生後期末前後の住居跡は検出されなかったが、本跡埋土中から土器が比較的まとまって認められた。

SB35下層 (第118図 PL45・46) 7825g出土し、6点5130g (65.5%) 実測した。出土量は少なく、炉体土器277・276で計3625g [46.3%]、実測土器の71.6%を占める。壺は3825g出土し、272・273・277の3点3115g [81.4%] 掲載した。27は受口状口縁、273は胴部上半破片、677は炉体に使われていた胴部破片である。甕は3135g出土し、274～276の3点2015g [64.3%] 図示した。274は小型の甕と思われる。275は波状文、276は頸部に短斜文、頸部以下に波状文を施す。275は底部脇にタテ粘土紐を貼り付ける。

SB37・38 (第119図 PL46) 3440g出土し、278の炉体甕1点600g (17.4%) のみ図示した。壺は1057g破片のみで、甕は1755gで [34.3%] 図示した。他は鉢・高杯と思われる小破片が1gのみある。図示した甕は頸部上に波状文2帯、頸部直下に短斜文、波状文1帯を施す。

SB30・39 (第119図) 先述したように調査時にSB30・39を誤認して遺物が混乱した。SB39は弥生中期、SB30は弥生後期土器が出土したとの調査記録から、概略区別しうるが、ここではまとめて扱う。1649g出土し、2点378g (23%) 図示した。壺は355gあるが体部破片で図示できず、甕は1063g出土したうち、2点378g [35.6%] 図示した。279は波状文を施す受口状口縁甕、280は頸部に簾状文、口縁部に短斜文、胴部に短斜文を施す。279は弥生中期、280は弥生後期の所産とみられる。他には赤彩された鉢・高杯片が8g、小片の不明土器片が223gある。

SB41 (第119図 PL46) 3939g出土し、3点2030g (51.5%) 図示した。量は少なく、炉体土器281のみで全体の39.6%を占める。壺は1947g出土し、281の1560g [80.1%] 図示した。頸部に三角の沈線区画を配し、短斜文で充填する。SB19の227と共に数少ない北原式系の壺である。甕は1500g出土し、2点470g [31.3%] 図示した。282は頸部に波状文、口縁・体部に短斜文を施す。283は台付甕の脚部破片である。他に鉢と思われる小片5g、残りは小片で仔細不明の破片が出土した。

C. 古墳後期の住居跡出土土器

出土土器量が多いものでSB08の24429g、少ないものでSB33の809g、平均9513gである。当該期の住居跡は後代の耕地化等で削平を受け、総じて遺構遺存状態は不良であるが、出土量は弥生後期よりはるかに多い。これは杯・高杯などを多用する反映と考えられるが、遺存不良な破片が多く、実測比率は平均30.4%で弥生時代後期よりも低い。

SB01 (第119・120図 PL46) 整理時にSK04が内部施設P13に変更されたことを誤認し、SK04出土土器の図は別掲載してしまった(410)が、ここではまとめて扱う。土器は21521g出土し、32点5050g (23.5%) 図示した。破片が多く図示しえたものは少ない。杯は553g出土し、284～292の9点346g [62.6%] 図示した。284～286が内湾ぎみの口縁で、287～289・291・292は口縁部が内傾し、290は口縁部を外側に折る。285・286・287はナデ調整のみでミガキが施されず、284・290・291は内面が放射状ミガキ、他は不明である。高杯は2782g出土し、293～299・410の7点1757g [65.6%] 図示した。柱状高台で口縁部が屈曲する。293・295はナデ調整のみだが、他は雑なミガキが施され、296は摩滅で仔細不明である。壺は6495g出土し、300～302・309の4点547g [8.4%] 図示した。体部破片が多く、口縁部のみ300～302の有段口縁、309の外反ぎみの直口口縁を掲載した。小型壺は686g出土し、303・304の2点105g [15.3%] 図示した。甕は6871g出土し、305～308・310～313の8点2209g [32.1%] 図示した。307・311・312・313が小型甕である。他に須恵器60g出土し、甕30g [50%] 図示した。他は混入弥生土器や小破片で識別不能な破片、483のミニチュア1点がある。

SB04 (第120・121図 PL46) 5341g 出土し、2906g (54.4%) 掲載した。全体的に小破片が多く、壺は994g、小型壺135g、甕3260g、高杯65g、杯250g、残りは弥生・不明品である。杯は70g [28.0%] 図示した。口縁部が丸く収まるものと、端面を内傾ぎみに面取りするもの、外反して開くものがある。318底部にヘラ記号状の線刻がある。高杯は杯より少なく、図示しえたのは323の1点5g [7.7%] のみである。壺は胴部破片が多いことから口縁部を中心に2個体112g [11.3%] 掲載した。内湾ぎみに立ち上がる口縁と有段口縁である。小型壺は324のみ130g [96.3%] 図示した。他に別個体の小破片1点のみある。甕は7点2589g [79.5%] 図示した。330・331は調整・胎土が類似し、同一個体の疑いがある。ケズリ調整である。325・326は小型甕とみられる。327は口縁端部を内側に肥厚させて面取り状にする。

SB08 (第121・122図 PL47) 24429g 出土し、23点10695g (43.7%) 図示した。破片が多いが、遺存良好な土器もある。杯は1200g 出土し、7点915g [76.3%] 図示した。高杯は910g 出土し、3点380g [41.8%] 図示した。杯は口縁破片が図化しやすいために実測比率が高い。杯は335・337・338がナデ調整のみ、337はミニチュアかもしれない。338は須恵器模倣とも思われ、334は黒色処理される。高杯は柱状高台3点図示した。壺は6800g 出土し、3点3230g [47.5%] 掲載した。342・343は有段口縁壺で、347は口縁部は甕に類似するが、体部形状から壺とした。354はミガキが施されるが、器形から甕と思われる。小型壺は475g 出土し、[74.4%] 図示した。甕は体部破片が多く9130g あるが、口縁部を中心に5点 [40.7%] 図示した。349の小型甕は口縁形態が異質で327に類似する。他に須恵器甕が110g あり、混入と思われる中世陶器、弥生土器、仔細不明の土器小片、497・498の土玉がある。

SB10 (第122図 PL47) 8853g 出土し、12点1762g (19.9%) 図示した。破片が多い。杯は596g あり、4点380g [63.8%] 図示した。口縁は外反ぎみに外へ折る355・357・359、内湾ぎみの356がある。355は黒色処理され、356はナデのみである。359は高杯の可能性もある。高杯は796g 出土し、3点429g [53.9%] 図示した。柱状高台で、有段の361、杯と同形態の358などバリエーションがある。362は大型の深い杯部の高杯とも思われる。361は作りが雑である。壺は2630g 出土し、2点613g [23.3%] 図示した。内湾する364、外反ぎみの直口口縁360を図示した。小型壺は破片のみ165g あり、図示しえなかった。甕は3113g あり、体部破片が多いため3点340g [10.9%] しか図示しえなかった。外反口縁でハケ調整される。これ以外に須恵器甕片20g、484のミニチュア1点、499の土製円盤?がある。

SB13 (第122・123図 PL47) 8691g 出土し、18点1922g (22.1%) 図示した。杯は205g 出土し、3点180g [87.8%] 図示した。内湾ぎみの口縁である。高杯は877g 出土し、5点457g [52.1%] 図示した。遺存不良で全体形を窺えるものはないが、いずれも柱状高台高杯である。371はナデ調整である。壺は563g 出土し、3点143g [25.4%] 図示した。いずれも有段口縁である。小型壺は2点110g 全て図示した。甕は5018g で、壺との識別が不十分なものもあるが、5点1032g [20.6%] 図示した。ほとんどが破片だが、384のみ比較的遺存良好である。379～381は小型甕、383・384は大型甕で、384は丸底ぎみとなる。他は須恵器甕105g で、残りが重複するSB17からの混入弥生土器や小片で識別不能土器片である。

SB33 (第123図) 809g 出土し、3点507g (62.6%) を掲載した。出土量が少なく、破片が主体である。壺は288g 出土し、385・387の2点246g [85.4%] 図示した。385は有段口縁である。甕は387g 出土し、386の1点261g [67.4%] 図示した。他に505・506の土製円盤? 2点がある。

SB36 (第123図 PL48) 5525g 出土し、10点900g (16.2%) 図示した。埋土が残存せず、破片が少量のみある。杯は215g 出土し、4点65g [30.2%] 図示した。388・389は内湾ぎみの口縁で、391・392は端部を外側へ折る。392はナデ調整ながら薄手のつくりで搬入品の可能性がある。高杯は315g 柱状高台高杯があるが図示していない。壺は1065g 出土し、破片のみ1点50g [4.7%] 図示した。393は有段口縁である。小型壺は205g 出土し、394の1点110g [53.7%] を図示した。甕は2395g 出土し、2660g [27.6%] 図示

した。395は甕口縁部で、397は作りが雑で厚い小型甕である。須恵器甕は30g出土し、390・396の2点15g [50%] 図示した。390ははそう口縁、396は甕口縁である。上記以外に重複するSB35からの混入と思われる弥生土器片が出土した。

SB42 936g出土し、壺53g、甕569g、高杯44g、杯15g、高杯・杯10gで残りが弥生土器と不明品である。破片のみで図示しえたものはない。

D. 竪穴遺構・時期不明竪穴住居跡出土土器

SB02 (第120図) 破片ばかり522g出土し、2点164g (31.4%) 図示した。壺85g、甕12g、高杯164g、残りが弥生土器と不明品で、高杯は全てにあたる2点を図示した。

SB05 SK06と重複し、埋土が僅かに残存するのみで確実に本跡の所産と捉えられた土器はない。

SB06 古墳後期の高杯60g出土し、図示していない。同一個体と思われる柱状高台高杯片がある。

SB14 (第115図) 957g出土し、72g (7.5%) 図示した。小破片ながら波状文甕破片、台付甕を図示した。

SB15 275g出土し、古墳後期と思われる甕破片220gと弥生・不明品があるが、図示していない。

SB11・12・43 (窪地) (第124図) 5030g出土し、430・431の2点75g (1.5%) 図示した。破片主体で弥生中期後半～古墳時代までのものがあるが、弥生中期後半・後期が多い。図示したのは430の波状文を施す甕、431の格子状に櫛描文を施す甕である。他に496の土製紡錘車1点がある。

SB32 384g出土した。南東隅から土器が集中的に出土したが、遺存状態不良で図化しえなかった。甕は267g出土し、弥生後期の波状文を施す破片が認められる。他に高杯片2g、古墳時代杯破片5g、残りが識別不能な小片である。杯以外は弥生後期と思われるが、識別できる破片が少なく仔細不明である。

SB40 96g出土し、掲載したものはない。いずれも小片で時期等は判断できなかった。

イ. 掘立柱建物跡・柱穴跡出土土器

ST01 (第123図) 古墳後期土師器・須恵器の破片が出土した。柱穴跡SK13で古墳後期壺・小型壺・甕・高杯・杯・須恵器、不明土器片など633g、SK14は古墳後期甕・杯・須恵器、不明・弥生土器片など165g、SK15は古墳後期壺・高杯・杯、弥生・不明土器片など225g、SK16は古墳後期壺・甕、弥生・不明土器片515g、SK17は古墳後期壺・甕・高杯、弥生・不明土器片197g、SK18は古墳後期甕・高杯、不明土器小片143g、SK19は須恵器片と不明土器片80g、SK21は古墳後期甕・高杯・須恵器蓋、弥生・不明土器片373g、SK22は古墳後期壺・杯、弥生・不明土器片など145g、SK250は古墳後期高杯と弥生・不明土器片95g、SK251は古墳後期甕・高杯、弥生・不明土器片265gが出土した。このうち、SK18高杯398、SK19須恵器蓋399、SK21須恵器杯400を図示した。

ST02 古墳後期の所産が中心である。SK26で古墳後期壺・甕、弥生・不明など80g、SK27では古墳後期杯片、不明10g、SK29・31は不明小片20g、35g、SK33は弥生・不明135g、SK34は古墳後期甕、弥生・不明17g、SK82は古墳後期壺・甕・高杯?、弥生・不明など1265gがある。

ST03 (第123図) 古墳後期が多く、SK35は古墳後期壺、弥生・不明など113g、SK36は古墳後期甕、弥生など55g、SK57は不明60g、SK60から古墳後期壺・甕・高杯・杯・須恵器甕、弥生不明など430g、SK61は須恵器、弥生・不明45g、SK62から弥生・不明45g、SK63から不明37g、SK64から不明87g、SK66から古墳後期高杯、不明49gが出土している。SK60の杯401、SK62の弥生甕402を図示した。

ST04 SK41・74・91・101から土器は出土せず、SK51から弥生中期壺・甕150g、SK71では弥生中期甕10g、SK92から弥生中期壺・甕20g、SK93から弥生中期甕30gが出土した。

ST05 SK94から弥生壺10gと不明小片25g、SK95から弥生壺?片25gが出土した。

ST06 SK38・41・42・45・67・102・106は遺物がなく、SK44から弥生中期甕15g、SK39から羽状文他の甕と不明97g、SK40から弥生中期壺・羽状文甕など95gが出土している。

ST07 SK233から弥生中期甕片5g、SK234から弥生甕13g、SK235から弥生壺片30gが出土し、SK236からは遺物が出土していない。

ST08 SK244から不明土器片5g、SK245から弥生壺10g、SK246から弥生甕片と不明土器片11gが採取され、SK247・248からは遺物が出土しなかった。

ST09 (第123図) SK12から古墳後期高杯片と不明土器片30g、SK23から古墳後期甕・同高杯、不明土器片など78g、SK24から古墳後期壺・甕、弥生・不明土器など54g、SK28は古墳後期壺・小型壺・甕、不明など175g、SK83から古墳後期杯と不明土器片50g、SK84から古墳後期壺15g、SK114から古墳後期甕・壺、不明小片など285gが出土した。SK114出土の409を図示した。

ST10 SK11から古墳後期壺、平安須恵器杯、弥生・不明土器片など476g、SK16から遺物はなく、SK25から弥生壺と不明土器片30gが出土している。

ST11 遺物出土はない。

ST12 (第123図 PL48) 柱穴跡出土土器をまとめて計測した。古墳後期の壺80g、小型壺27g、甕2047g、杯515g、高杯237g、須恵器3g、弥生・不明片400gが出土し、6点図示した。403・404は古墳後期杯、405・406は同高杯、407は同小型甕、408が同甕である。

ST13 SK20は遺物なく、SK54は須恵器と弥生壺・甕、不明225g、SK79から古墳後期甕と弥生・不明405g、SK96から弥生壺、弥生後期甕、弥生高杯・鉢、不明土器片88g、SK238からは古墳後期甕と不明土器片34gが出土し、SK252は出土遺物がない。

ST14 SK78から弥生壺・甕と不明小片285g、SK89からは古墳後期甕・杯、弥生・不明土器小片110g、SK90から不明小片60g、SK59から弥生壺・甕53g、SK97から弥生鉢と不明土器小片28gが出土した。古墳時代土師器を出土したのはSK89のみで他は弥生土器が出土している。

ST15 出土遺物は全くない。

ウ. 柱穴跡出土土器 (第124図 PL49)

少量ながら弥生土器を中心に出土した柱穴跡状土坑には次のものがある。SK07弥生甕と不明土器片190g、SK46弥生中期甕、不明小片など30g、SK49羽状・波状文甕破片、不明など31g、SK50弥生中期甕と不明土器片15g、SK86弥生中期壺315gあり、422を図示した。SK153から掲載した423の弥生壺165g、SK231弥生中期壺・弥生甕と不明土器片127g、SK232弥生甕と不明土器片23g、SK239弥生甕・高杯・鉢45g、SK240弥生壺と不明土器片12g、SK242弥生壺と不明土器片22g、SK249弥生甕と思われる破片と不明小片6gが出土している。

次に古墳後期の土師器を出土した土坑には次のものがある。SK05古墳後期甕・高杯と弥生・不明片189g、SK37古墳後期壺・甕・須恵器と弥生・不明片486g、SK87古墳後期甕・杯と弥生・不明片180g、SK88古墳後期甕・杯・須恵器と弥生・不明片365g。、SK154古墳後期?壺10g、SK160古墳後期壺?10g、SK201古墳後期高杯と弥生・不明片13g、SK204古墳後期甕・杯と弥生・不明片235g、SK205古墳後期甕と弥生高杯・鉢137g、SK206古墳後期甕・高杯、弥生中期壺、不明片など143g、SK253古墳後期甕・杯・高杯・須恵器と弥生・不明片308gである。このなかで426の杯を図示した。

上記以外に不明小片しか出土していない土坑にはSK52不明10g、SK53不明15g、SK58弥生?5g、SK77不明55g、SK81不明80g、SK85不明7g、SK151不明25g、SK203不明36g、SK237不明13g、SK254不明20g、SK247不明2gがある。これ以外は出土遺物がない。

エ. 土坑出土土器 (第124図 PL48・49)

SK06 古墳後期の壺3735g・小型壺275g・甕3725g・高杯185g・杯200g、弥生・不明300gの合計8420gがあり、9点[63.3%]図示した。壺・甕は遺存良好で量も多いが、高杯は少ない。杯は内湾ぎみに立ち上

がる413・414、端部を折る417があり、474はミガキが施されていない。415・421が壺、他は甕とみられる。**SK75**古墳後期の壺65g、甕88g、高杯248g、須恵器100g、弥生・不明134g出土した。古墳後期高杯と有段口縁壺を図示した。**SK80**弥生中期?壺505g、甕70g、不明310g、442の縄文晩期浅鉢13g、512~515の土製円盤?4点24gがある。**SK165**古墳後期の甕1165g、弥生5gがあり、甕は428を図示した。**SK166**弥生中期壺165g、甕127g、鉢10gの合計302g、古墳後期は壺?13g、甕10g、須恵器25gの合計48gがある。圧倒的に弥生中期が多いが、僅かながら古墳後期の所産が混じる。他に土製円盤509~511の3点37.8g、不明250gがある。**SK198**弥生中期壺13g、同じく甕40gが出土した。小片で図示していない。**SK200**弥生と思われる甕胴部破片が15g、不明品8gのみで図示していない。**SK256**弥生時代壺210g・甕12g出土し、427の壺を図示した。

オ. 田溝跡出土土器 (第124図)

田溝跡 3 (SD53) 弥生後期甕272g、弥生高杯20g、弥生中期甕片があり、波状文甕429を図示した。

カ. 溝跡出土土器 (第125図)

SD01連房すり鉢、大窯すり鉢、古墳時代後期壺・小型壺・甕、不明土器片、弥生土器など3468gが出土した。**SD02**古墳後期壺・小型壺・高杯・杯、不明土器片、弥生土器片など636gがあり、古墳後期杯433・434の2点を図示した。**SD03~08**何れも古墳後期の土器小片が少量出土した。SD03は古墳後期甕・杯40g、SD05は古墳後期壺75g、SD07は同壺と不明土器片40g、SD08は壺・甕識別できない破片や不明破片130gがある。**SD10**弥生甕片と不明土器片75gとミニチュア1点85gがある。**SD11**弥生中期壺・甕、不明土器片など517gある。**SD12**不明15g土器小片のみがある。**SD13**弥生中期壺・甕、器種不明ながら弥生中期と思われる破片や不明土器片など505gがある。**SD14**弥生中期甕23g出土した。**SD15**弥生?壺と高杯35gがある。**SD18**古墳後期杯と不明土器片、弥生土器45gがある。**SD52**時期不明土器片263gがある。**SD56**弥生後期波状文甕6gのみある。**SD58**古墳後期甕片200gのみがある。**SD66**瀬戸美濃染付磁器碗片や弥生小片59gがある。**SD67**弥生壺片・甕片や僅かな土器破片が27gある。**SD69・74**SD69で内耳鍋・カワラケ・古瀬戸合子・瀬戸美濃連房碗・常滑三筋壺、弥生・不明片土器片664gがある。SD74は連房輪ハゲ皿・碗、大窯丸皿など9gのみがある。何れも近世陶器を含み近世の所産と思われるが、中世土器も多い。658~462を図示した。**SD71**弥生中期甕片が33gのみ採取されている。伴う遺物とは判断しがたい。**SD80**弥生中期と思われる土器小片など不明小片132gしか出土していない。**SD97**弥生時代と思われる甕破片と不明土器片53gがある。**SD98**波状文の弥生甕片27gのみが出土している。

キ. 遺物集中出土土器 (第125図 PL33)

SQ32 縄文晩期と思われる掲載437が出土した。類例はIV区検出面にある。

SQ33 縄文前期の下鳥式並行と思われる半裁竹管文が施される破片がある。小片に割れて接合しきれなかったが、同一個体と思われる。

SQ34 遺存状態不良だが縄文晩期浅鉢253gが出土した。表面は傷みで仔細不明である。

SQ36 多種の破片からなる。弥生と思われる土器片が多く、壺323g、甕330g、不明80gがある。甕は波状文と縄文地文と沈線を施す中期後半の所産がある。

ク. 微高地域採取土器 (第125図)

検出面採取土器で、特徴的な土器を中心に述べる。縄文土器は晩期浅鉢40gあり、441~444に図示した。444はSQ32出土土器と類似する。弥生中期の土器は壺2215g、甕1894g、高杯・杯151g、甌20gがある。壺は赤彩された445のみ、甕は446・447を図示した。弥生土器と思われるが、中・後期の識別ができなかったものは壺1225g、甕3300gある。体部破片で図示していない。弥生後期の壺は219g、甕1025gある。壺は451、甕は449・450を図示した。古墳後期は壺1450g、小壺728g、甕2488g、杯226g、高杯1373g出土

した。壺は452、杯は448を図示した。高杯の出土量が多い。須恵器は甕・はそう1215gあり、453～456を図示した。古代では須恵器杯1点475のみ掲載した。45gある。他に弥生～古墳後期の所産ながら小片で識別できなかった土器41314g、494の土製紡錘車が1点ある。

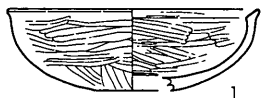
中世は平安末の白磁碗、龍泉窯系蓮弁文青磁碗、古瀬戸縁釉小皿・小皿、大窯丸皿・稜皿、大窯？瓶類、山茶碗、中津川甕、常滑甕があり、何れも図示していない。13世紀前後と16世紀前後にまとまりがある。近世は伊万里碗、京焼系碗、唐津刷毛目鉢、瀬戸美濃連房ひだ皿・輪ハゲ皿・灰釉鉢・瓶類・土瓶・灰釉丸碗・灯明皿・こね鉢・片口・徳利、瀬戸美濃染付碗、近世～近代の在地火鉢類がある。何れも破片で、18世紀末～19世紀の所産が多い。

⑤. IV・V区低地域出土土器

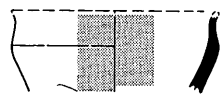
IV区低地（第126図 PL49）水田耕作土と捉えた黒～黒褐色土層中から出土し、水田跡検出時に採取された。縄文と思われる破片、弥生中期甕、弥生時代としかわからない壺・甕片、古墳後期甕・小壺・杯片がある。中世はカワラケ・内耳鍋・山皿・山茶碗系こね鉢・古瀬戸天目茶碗・龍泉窯系青磁碗片がある。下層の縄文土器集中地点では縄文土器片が350gほど採取されたが、摩滅して網代底片ぐらいしか識別できなかった。

V区低地（第126図 PL49）IV区同様に水田跡精査時採取品が中心だが、V②区はSD72・78の遺物が混在する。V①区では内耳鍋・カワラケ、不明土器片、V②区は弥生甕、古墳後期甕・杯片、内耳鍋・山茶碗系こね鉢・山茶碗・古瀬戸瓶子、不明土器片があり、V②区南部で内耳鍋・連房鎧手茶碗・土瓶・不明土器少量が採取された。また、V②区のI～III層では縄文土器片、内耳鍋・カワラケ・大窯稜皿？、瀬戸美濃連房灰釉丸碗・志野皿・陶胎碗、近代の染付碗、不明土器片少量が採取された。検出面採取では①区で内耳鍋、連房鉄釉碗、大窯すり鉢片がある。②区は平安灰釉陶器、中世カワラケ・内耳鍋・古瀬戸瓶子・縁釉小皿、近世末～近代の土瓶・陶胎碗・京焼系碗・急須・連房すり鉢、近代の染付徳利や碗破片がある。SD72・78検出時遺物が混在するV②区を除くと中世かそれ以前の土器が主体となる。SD78から山皿・山茶碗系こね鉢、瀬戸美濃連房灯明皿・急須・鉢・瀬戸美濃染付碗、仔細不明の連房製品が少量出土し、SD72は古墳時代後期土師器、須恵器、古瀬戸卸皿、青磁？碗小片がある。銅版転写・紙型摺を含む瀬戸美濃染付碗・皿、連房製品が中心で、他にガラス片もある。SD79からは近世の連房すり鉢のみが出土した。SA203からは弥生時代と思われる甕片が出土したが、直接伴わないと思われる。SC201からは近代の瀬戸美濃染付碗、内耳片、SC202 古瀬戸天目茶碗片が出土している。

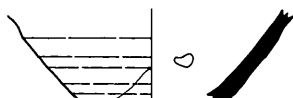
VI区 (1~6)



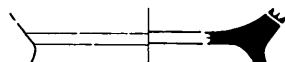
1



2



3



4



5



6

SD111 (7·8)



7



8

SD108 (9·10)

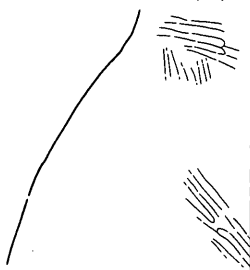


9



10

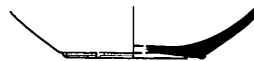
SD110 (11)



SX102 (12·13)



12



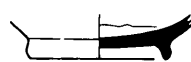
13

SA105 (14)



14

II区 (15·16)

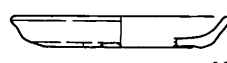


15

A低地 (17·18)

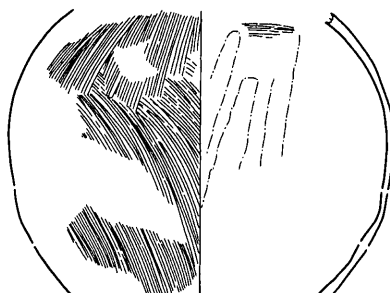


17



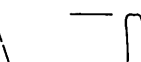
18

SQ101 (19)



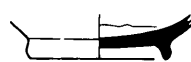
19

SA105 (14)



14

II区 (15·16)



15

SA31 (20)



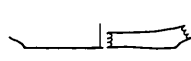
20

SC106 (21)



21

III区低地 (22·23)

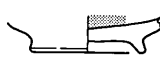


22



23

E低地 (24~29)

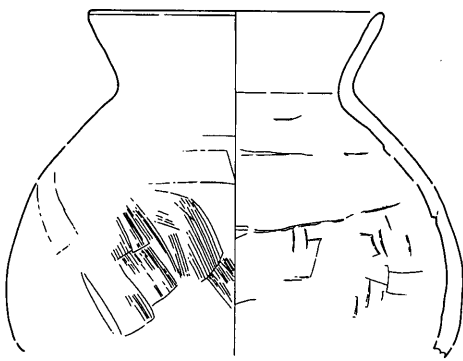


24



25

SA109 (30)



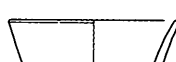
30



26



27

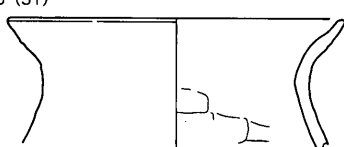


28



29

SA38 (31)



31

SD61 (32~39)



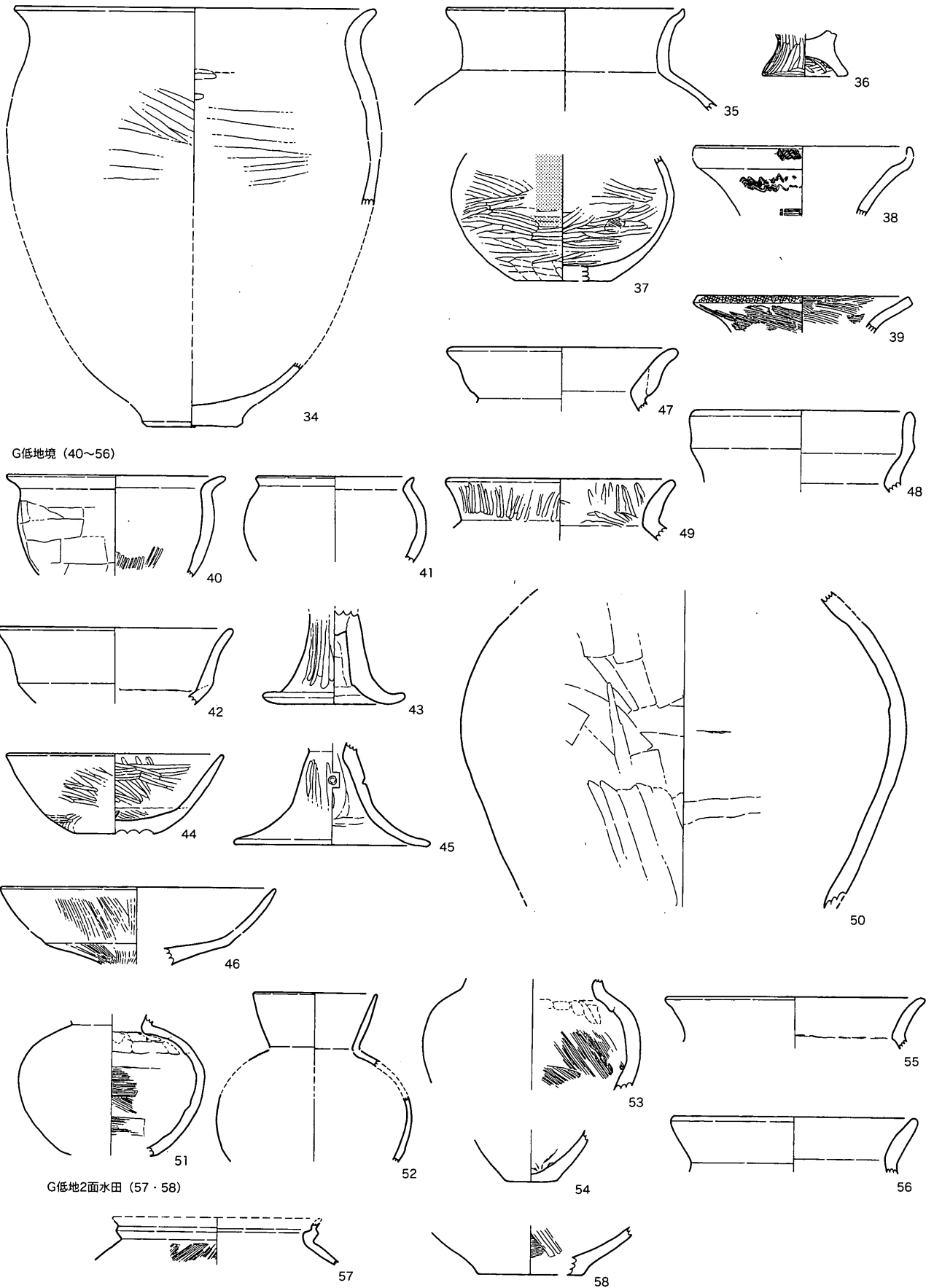
32



33

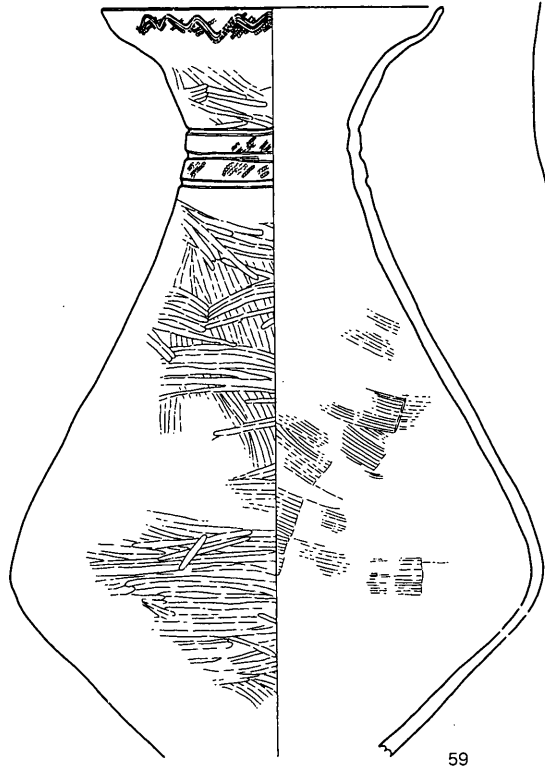
0 (1:4) 10cm

第102图 土器 1

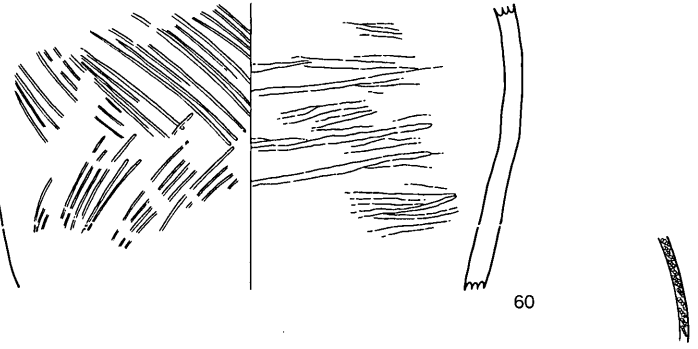


第103図 土器 2

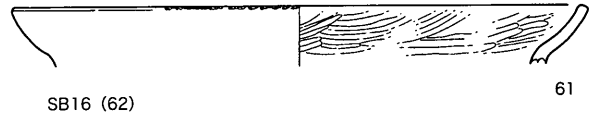
SB03 (29) (59~61)



59

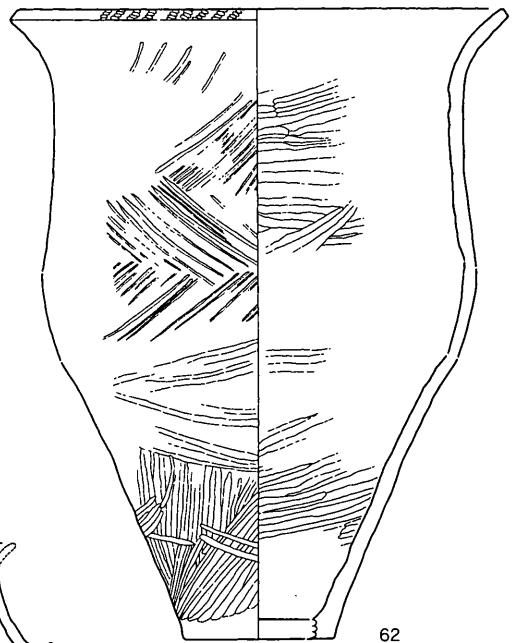


60



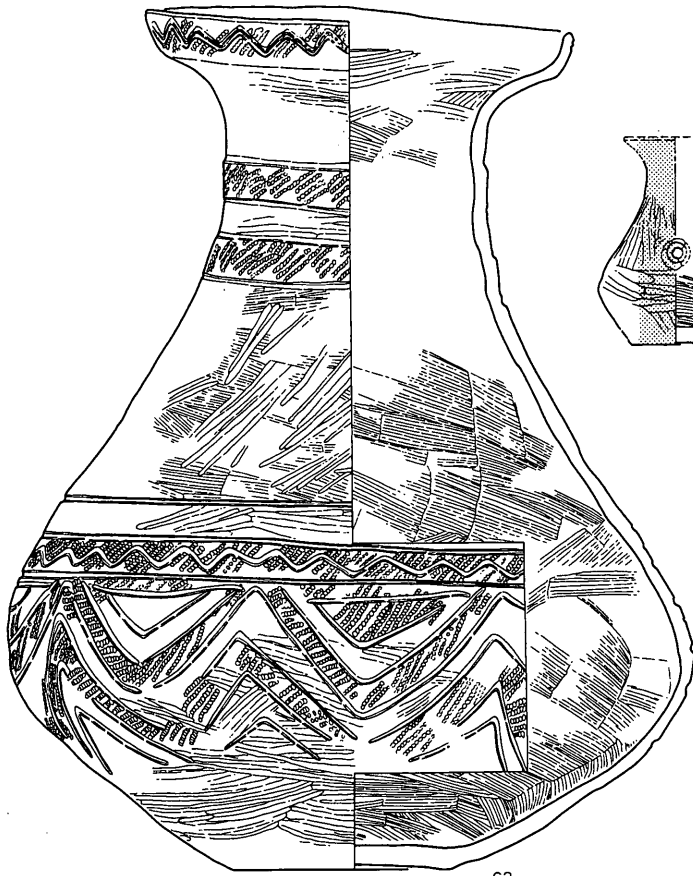
61

SB16 (62)

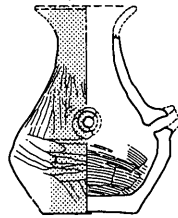


62

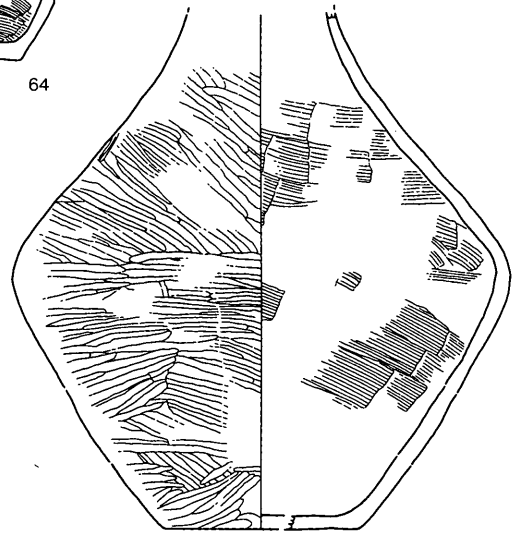
SB17 (63~73)



63



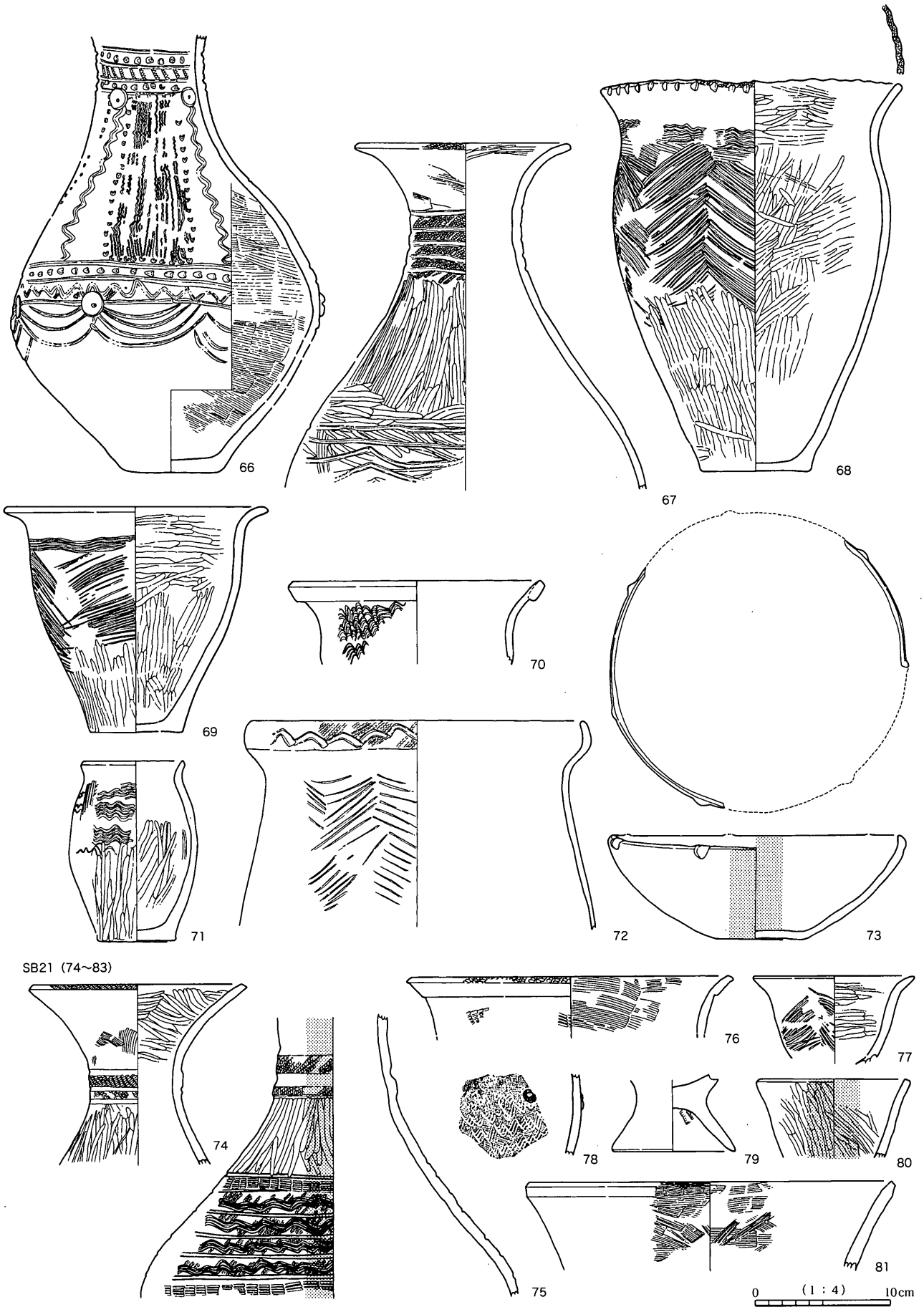
64



65

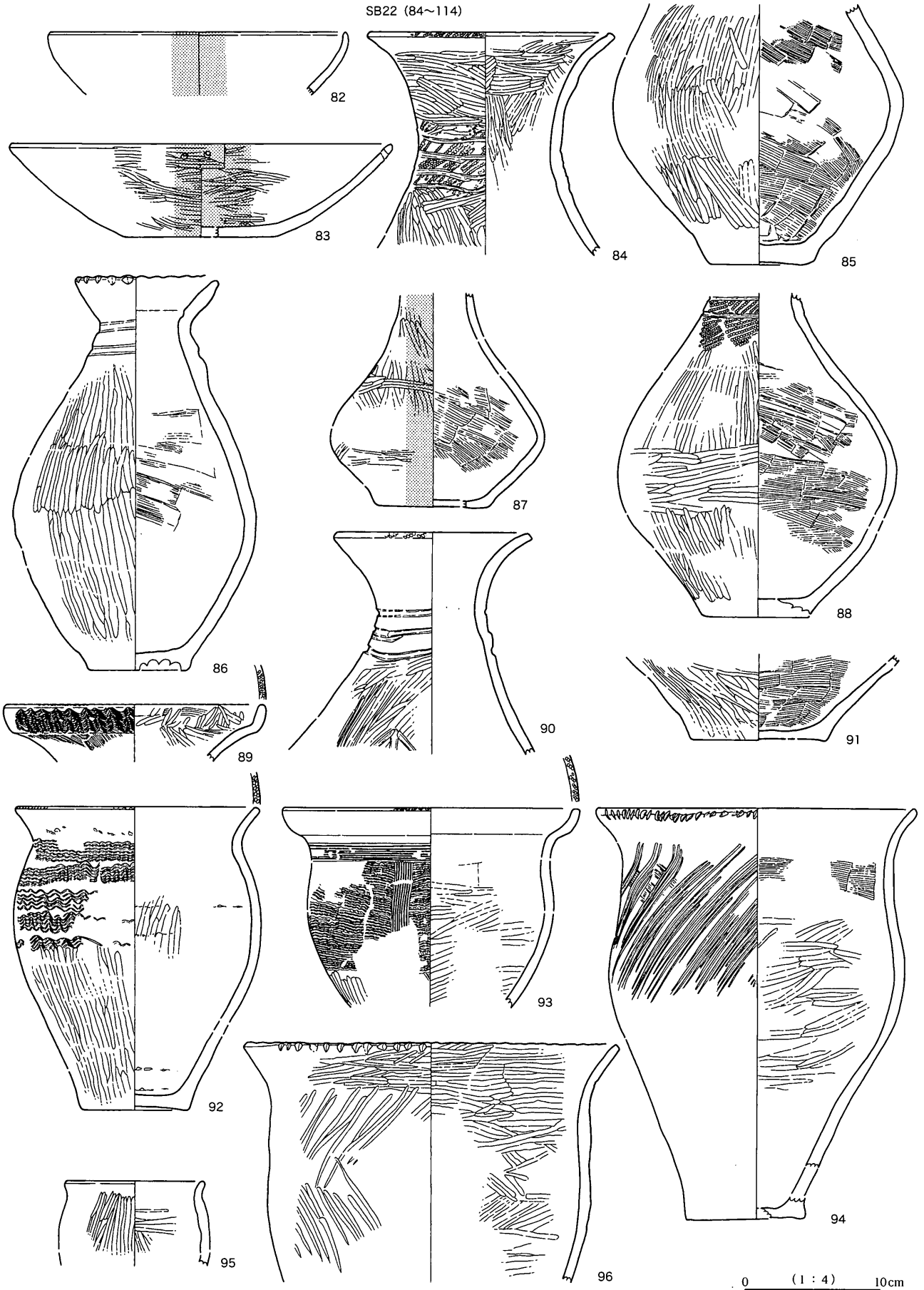
0 (1:4) 10cm

第104図 土器3

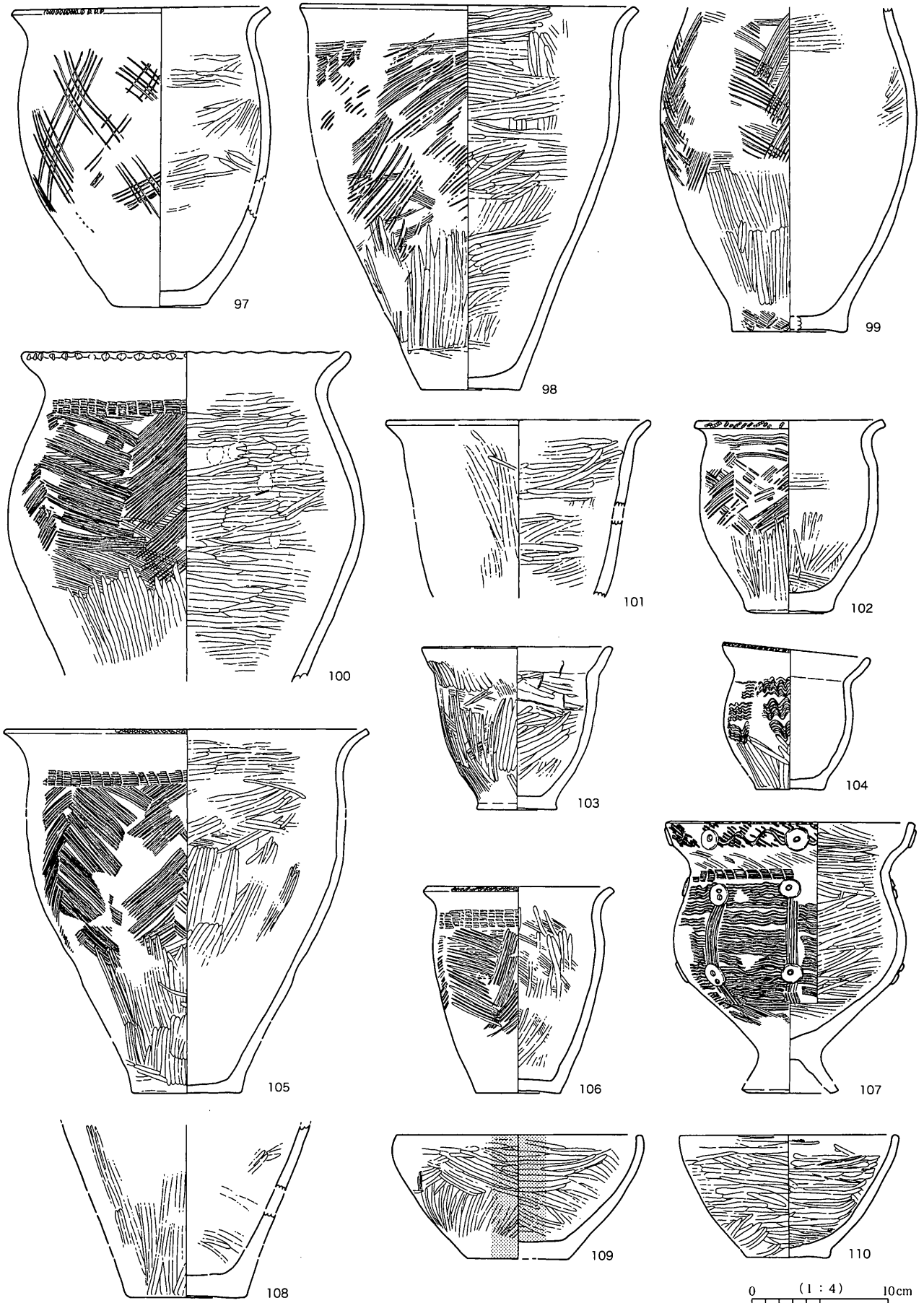


第105図 土器 4

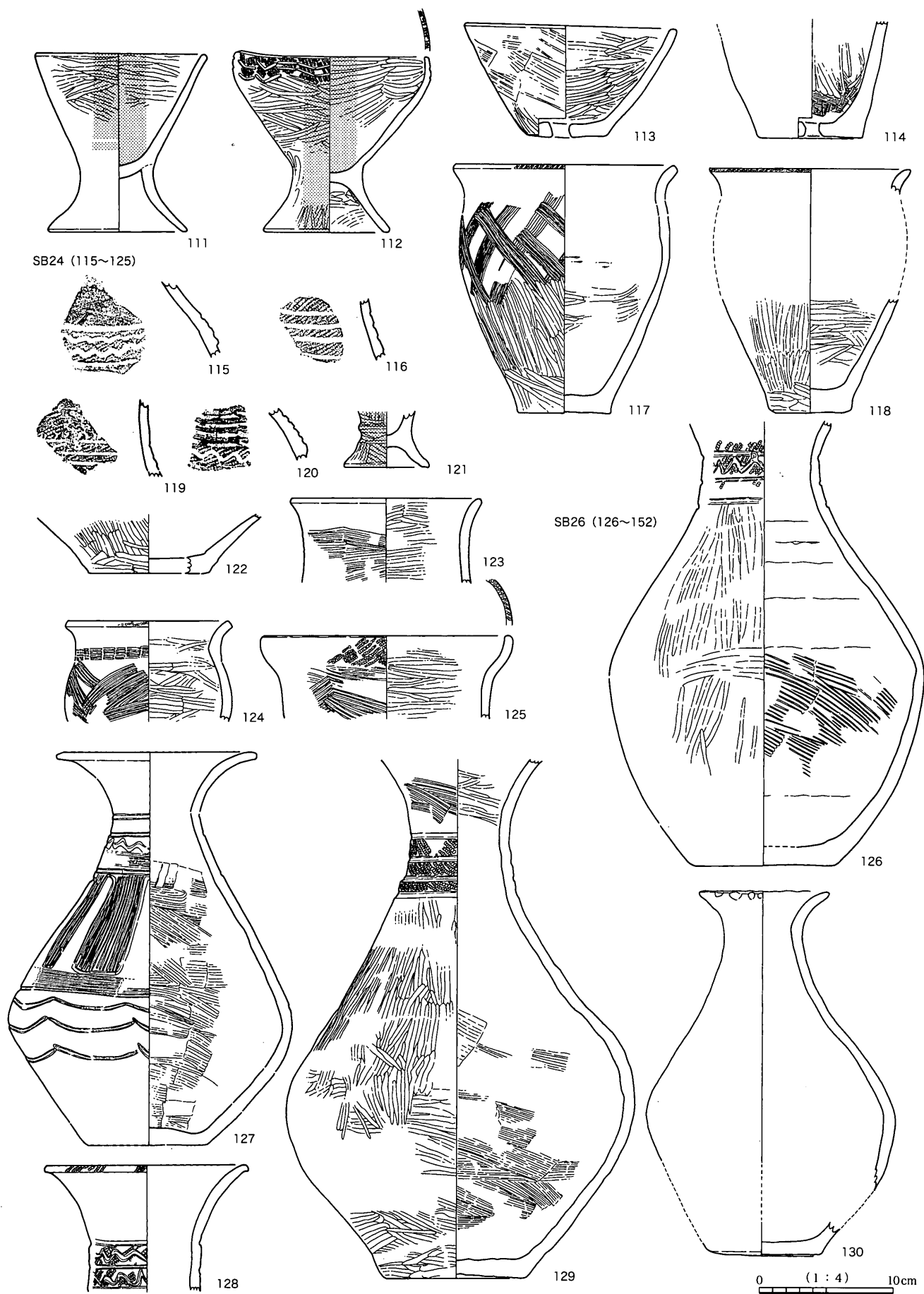
SB22 (84~114)



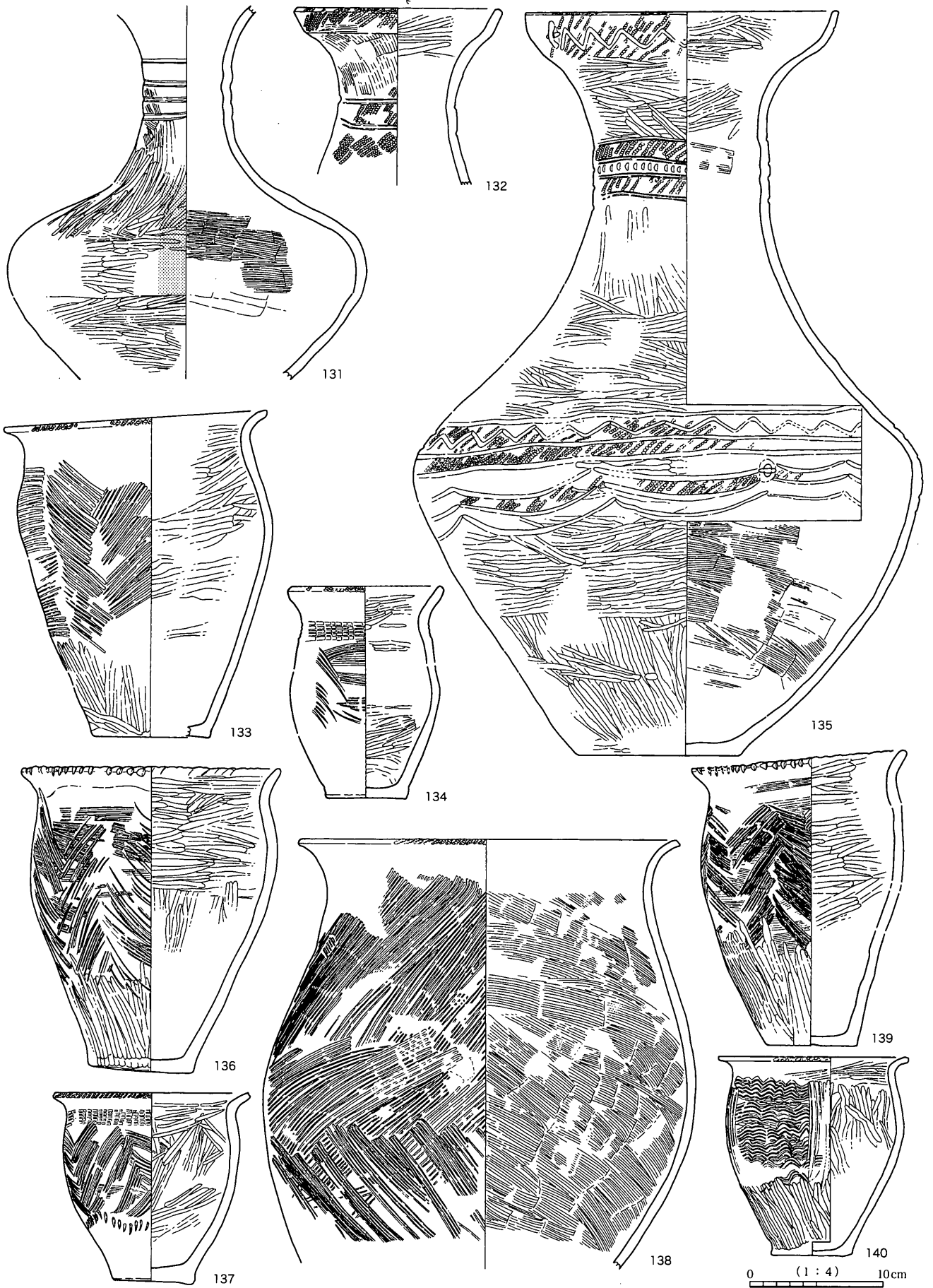
第106図 土器 5



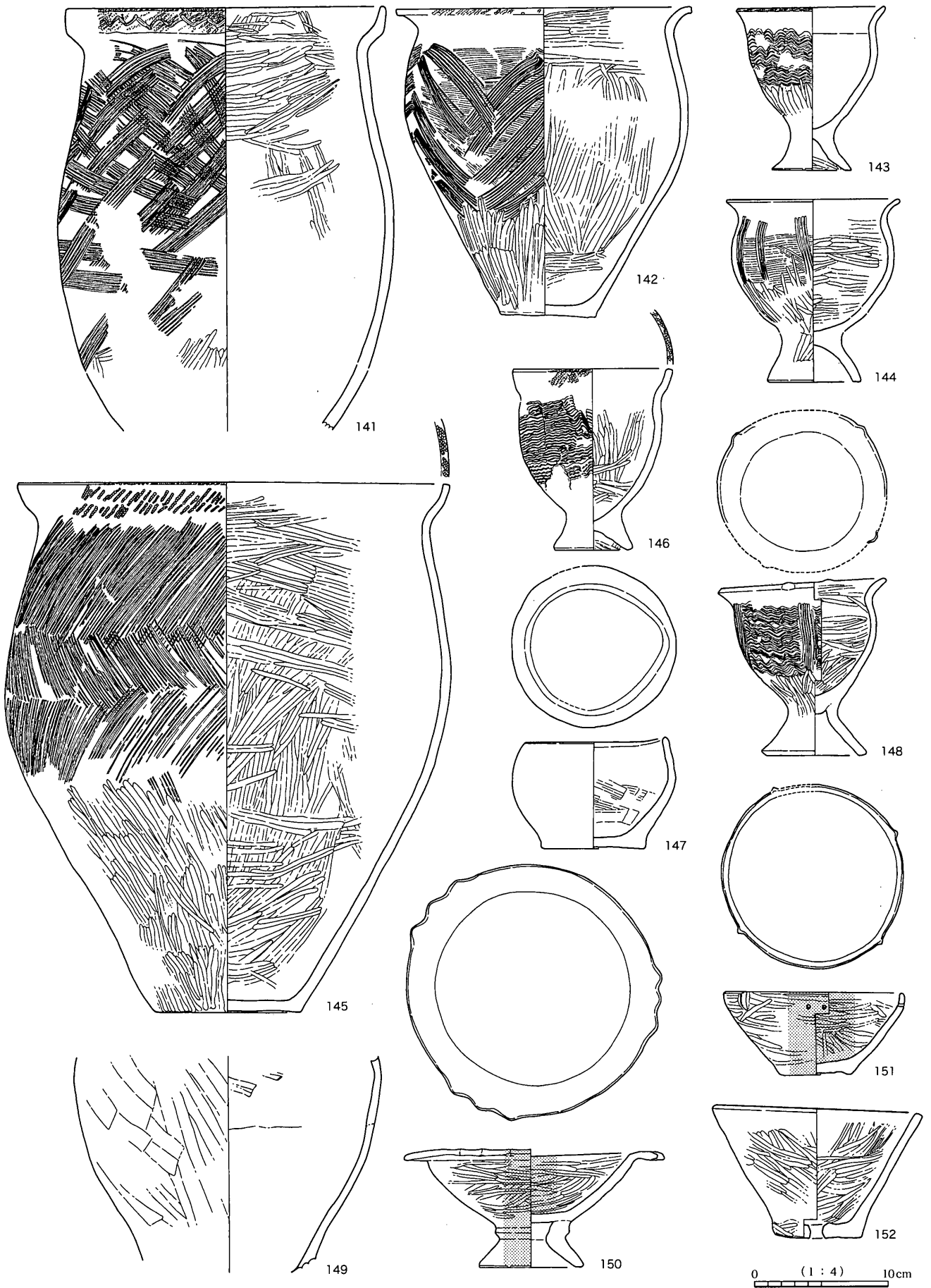
第107図 土器 6



第108図 土器7

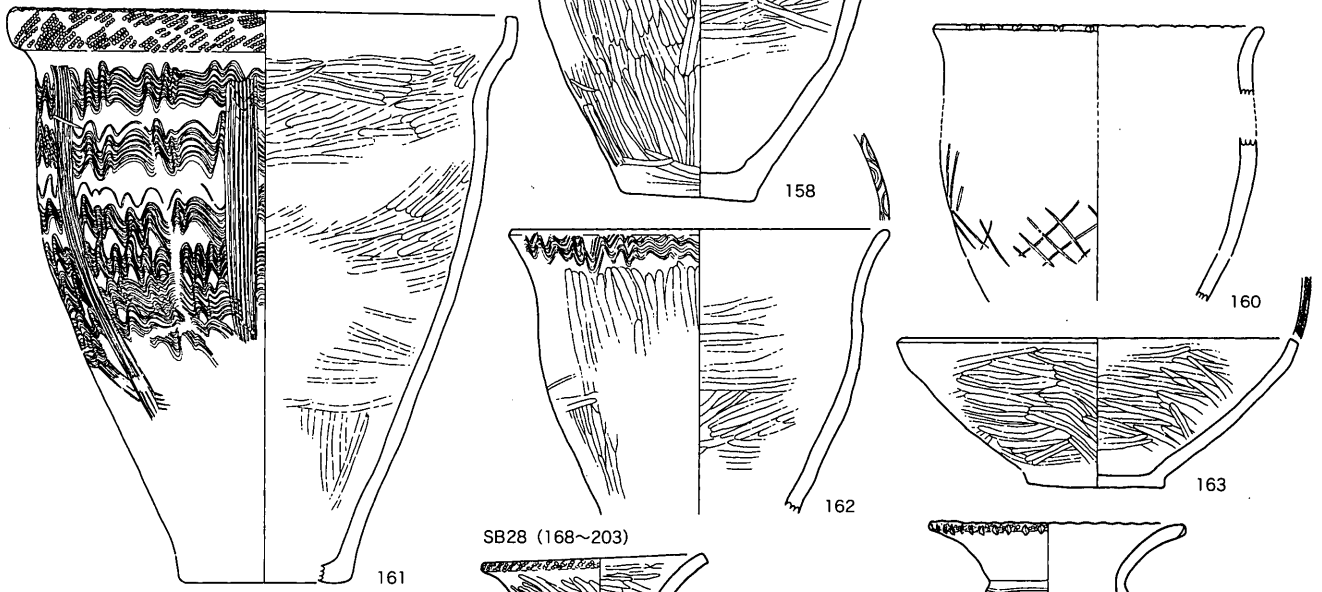
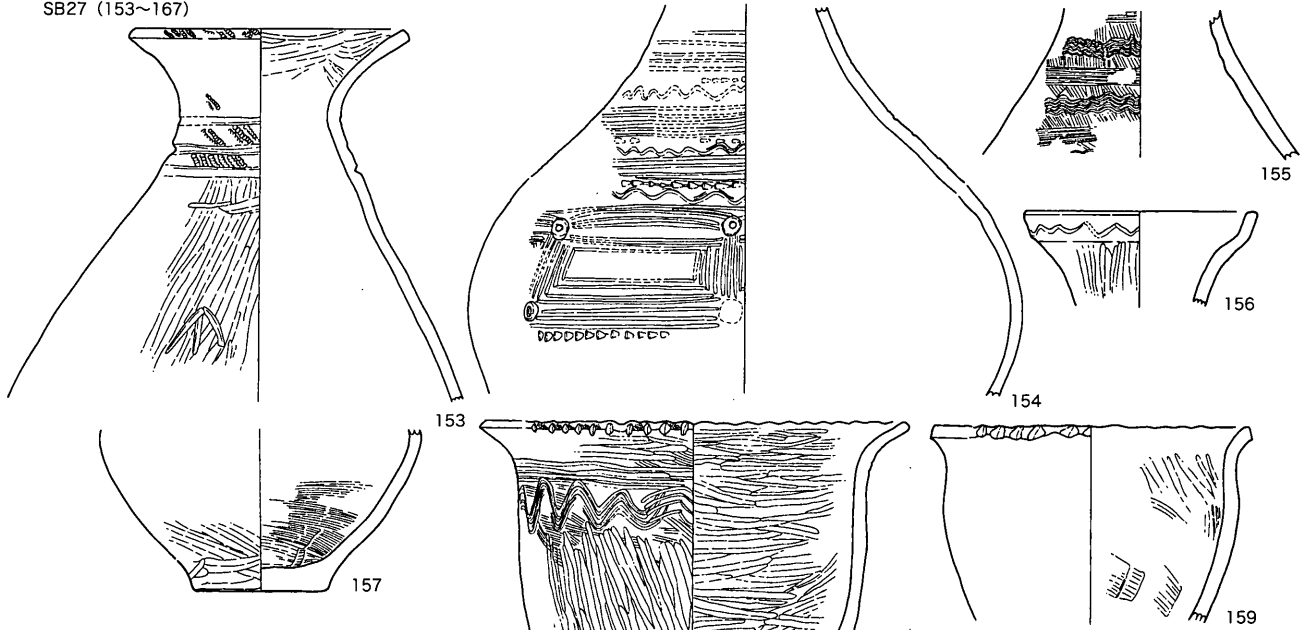


第109図 土器 8

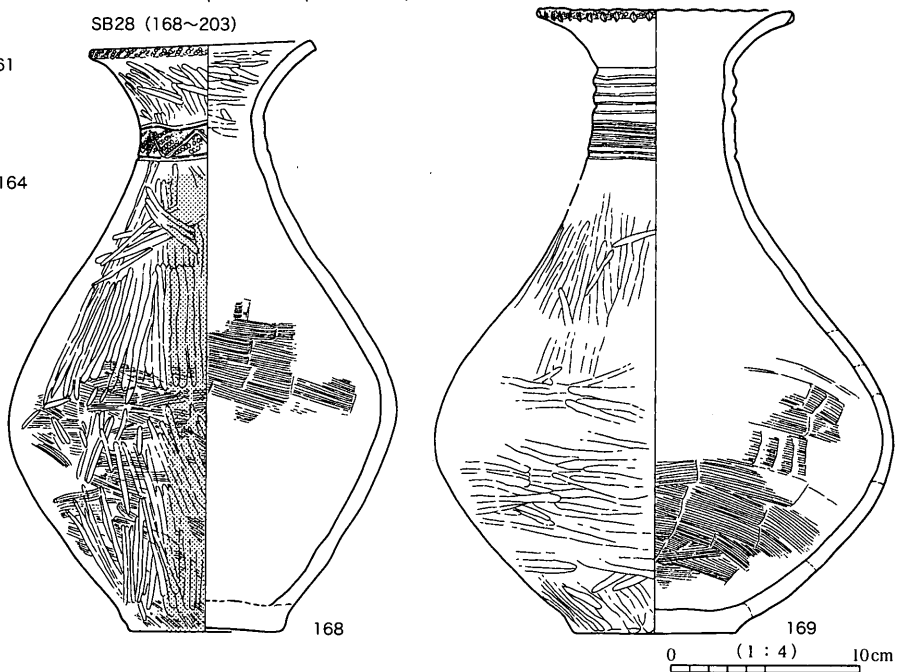


第110図 土器9

SB27 (153~167)

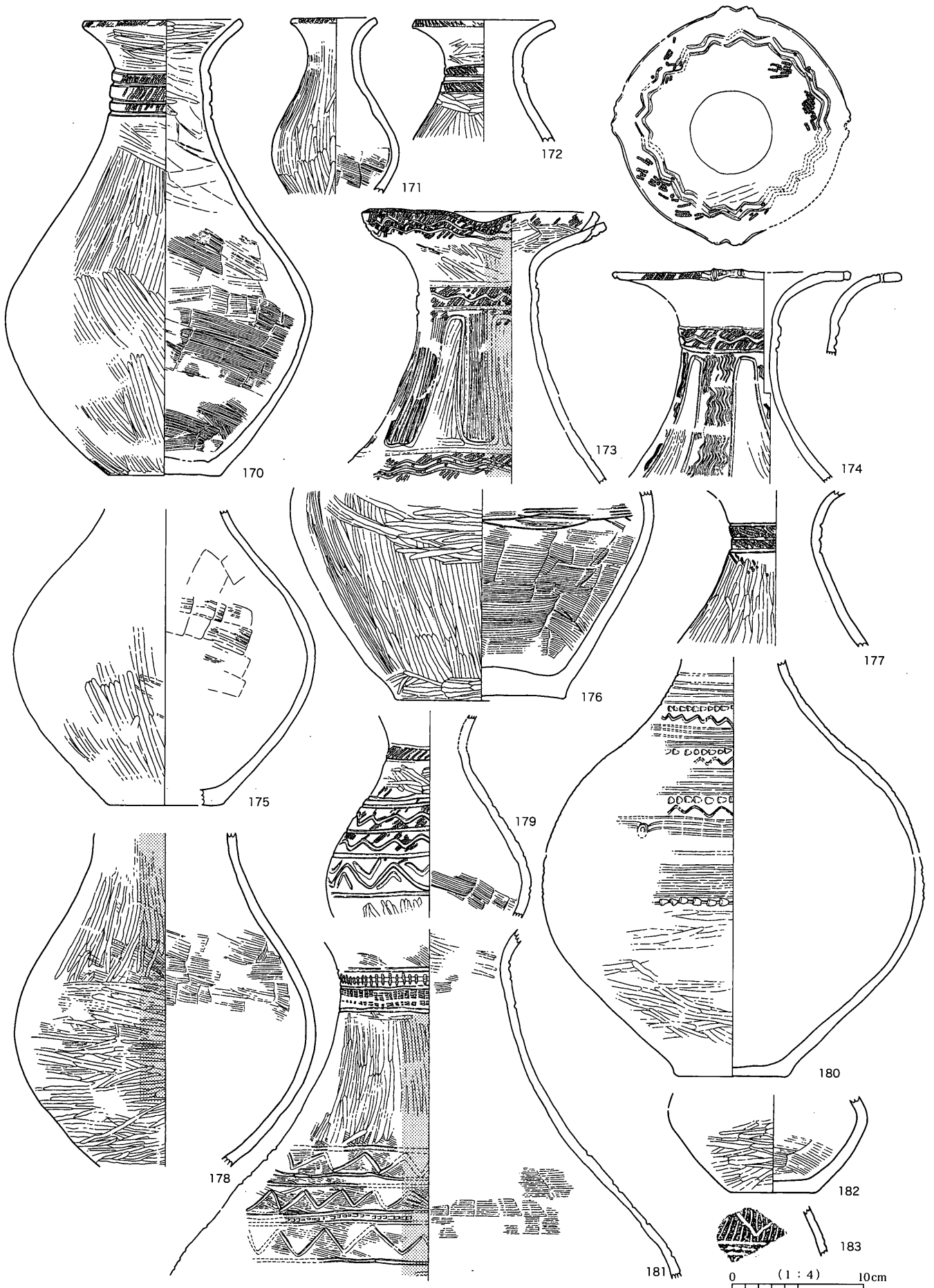


SB28 (168~203)

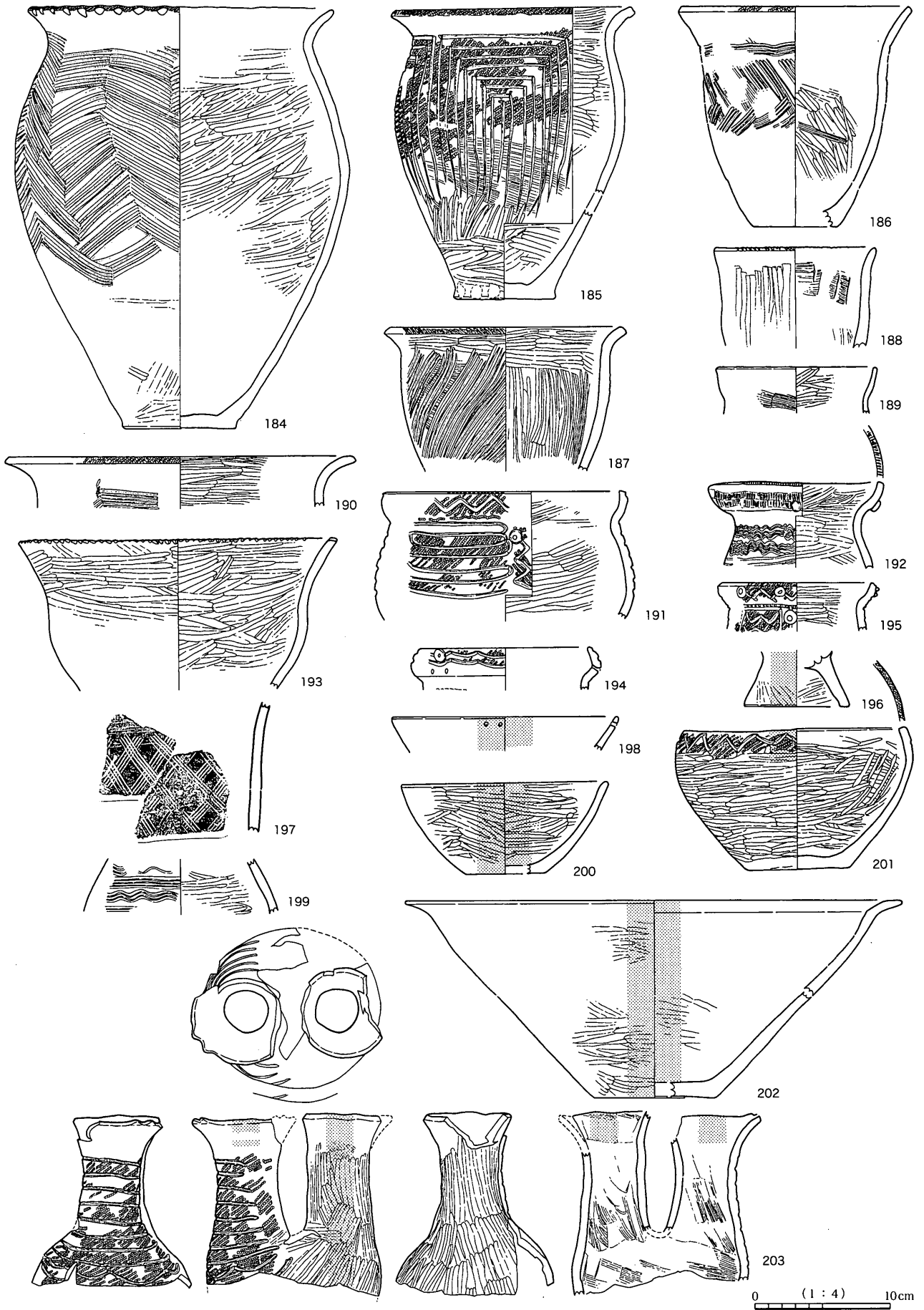


0 (1:4) 10cm

第111図 土器10

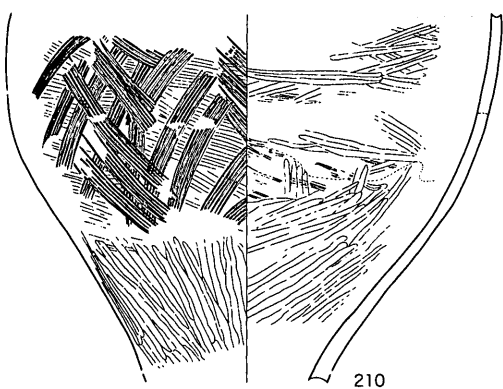
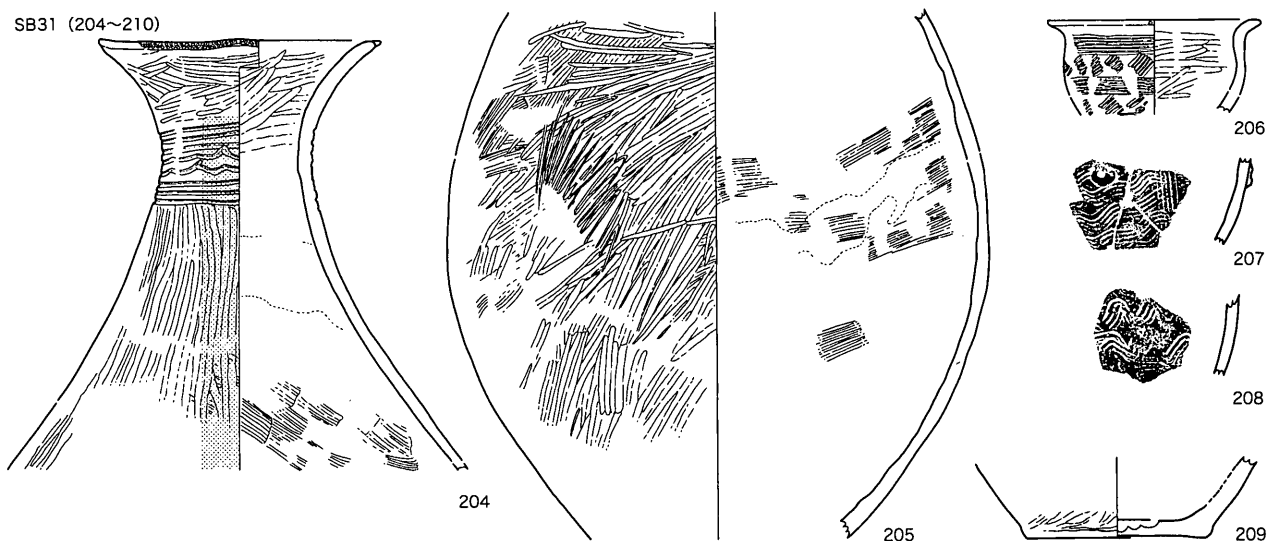


第112图 土器11

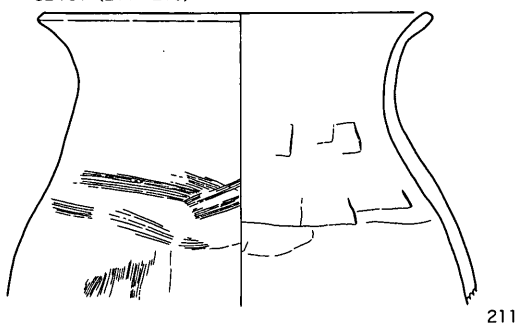


第113圖 土器12

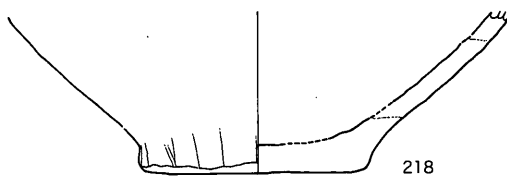
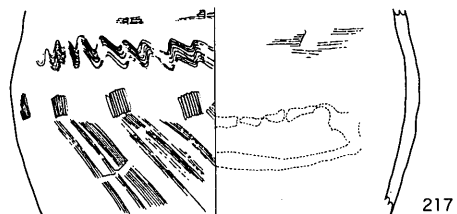
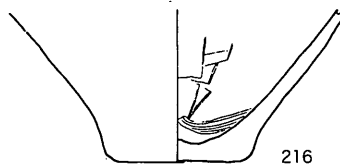
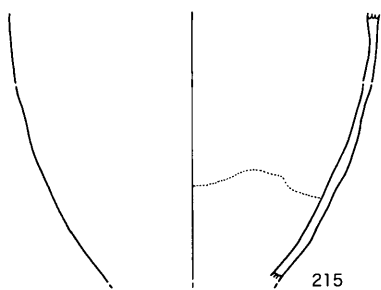
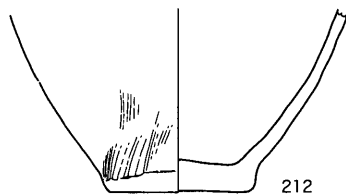
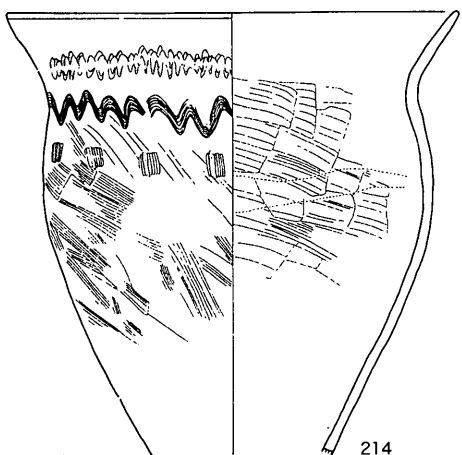
SB31 (204~210)



SB101 (211~213)



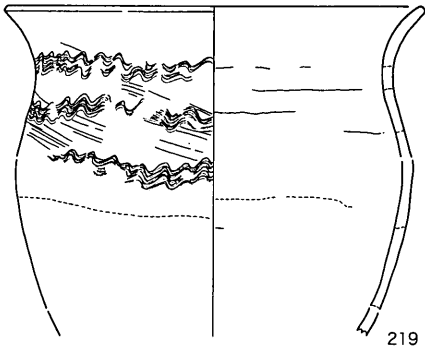
SB07 (214~218)



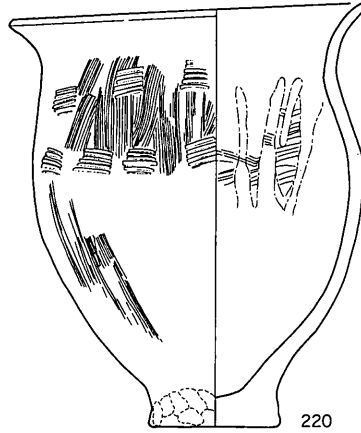
0 (1:4) 10cm

第114図 土器13

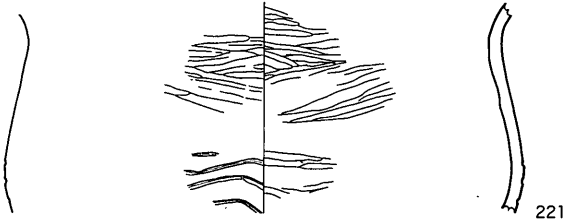
SB09 (219~221)



219

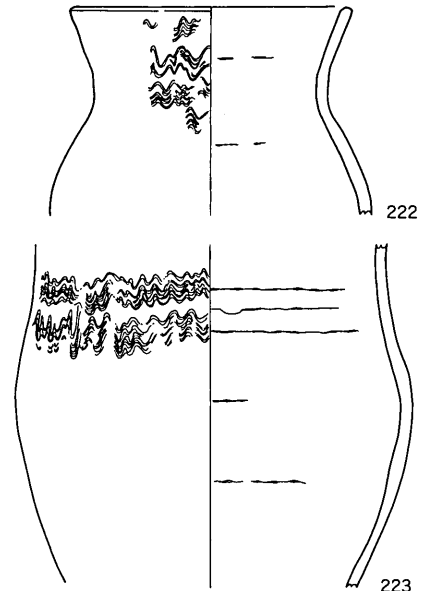


220



221

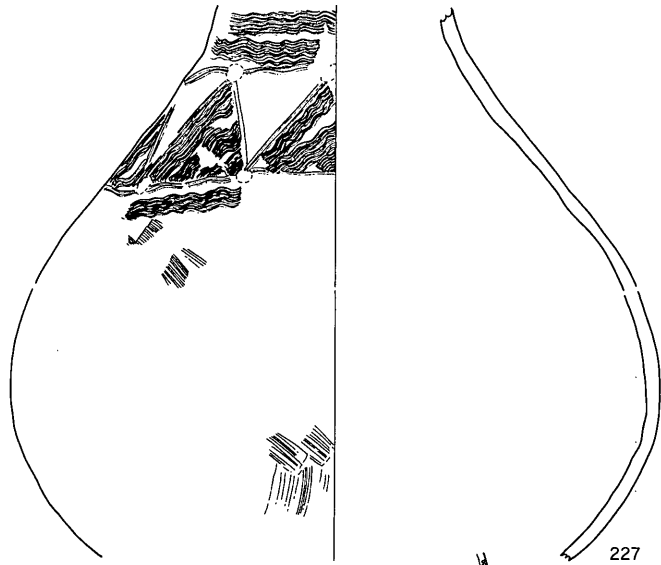
SB18 (222・223)



222

223

SB19 (227~238)



227

SB14 (224~226)

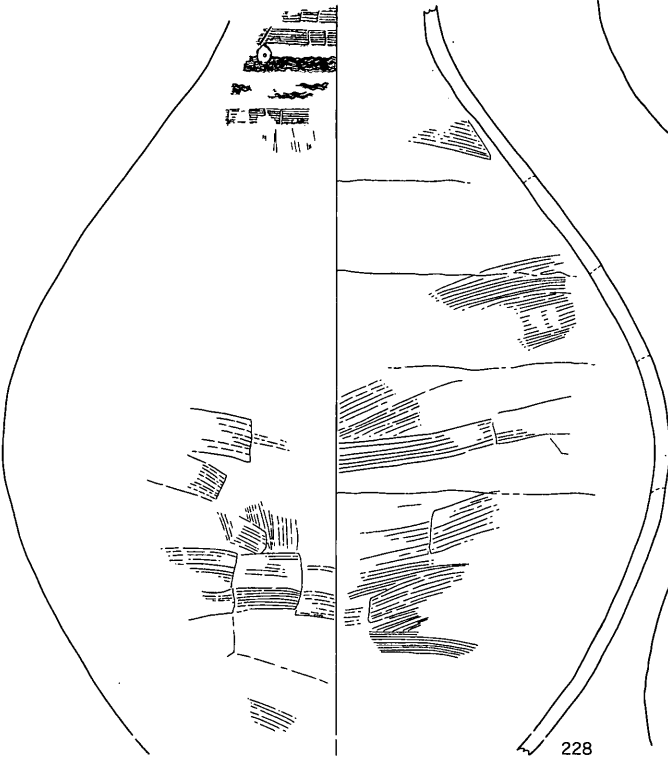


224

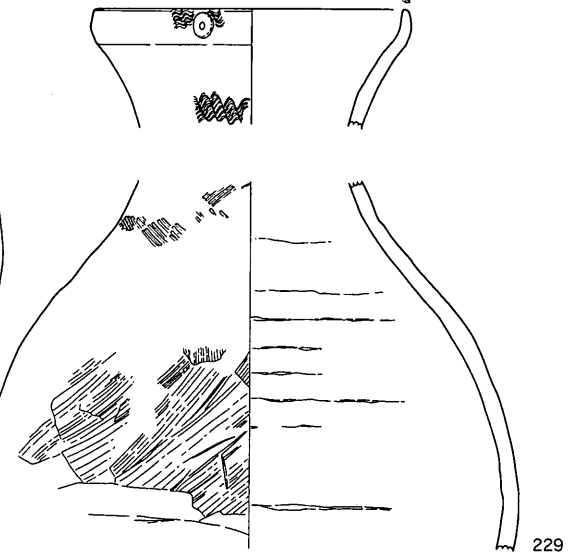
225



226



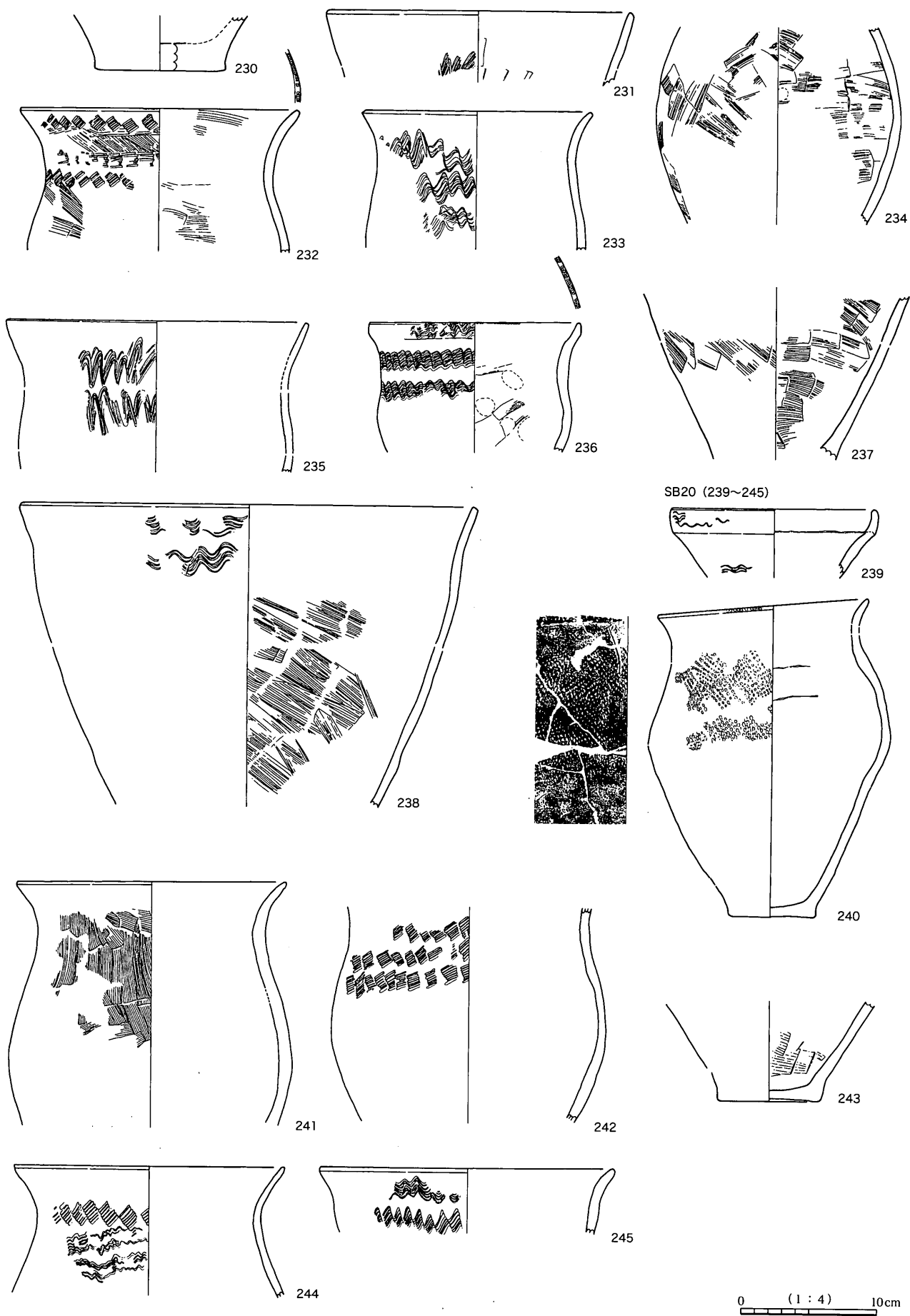
228



229

0 (1:4) 10cm

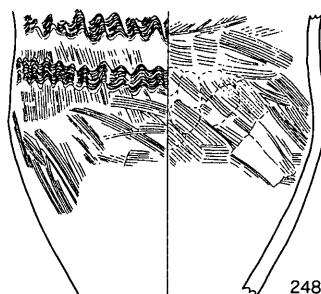
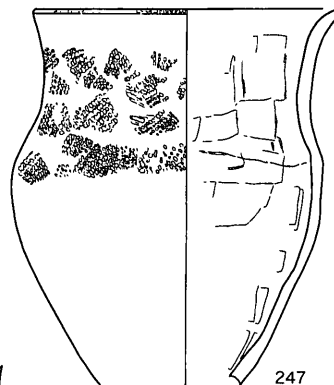
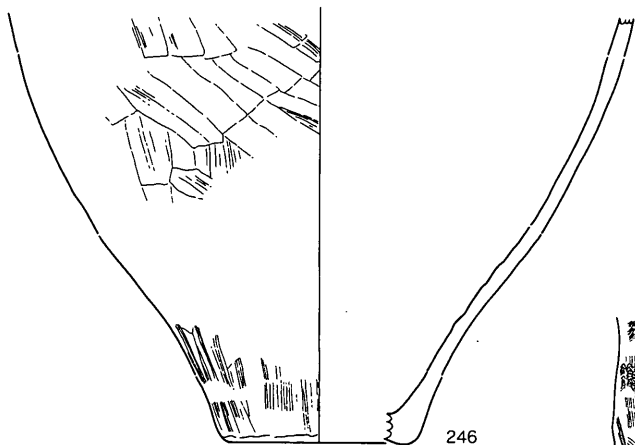
第115図 土器14



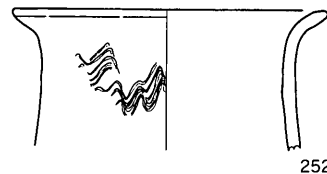
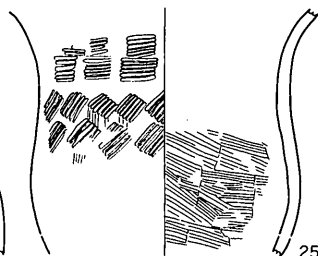
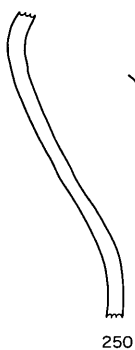
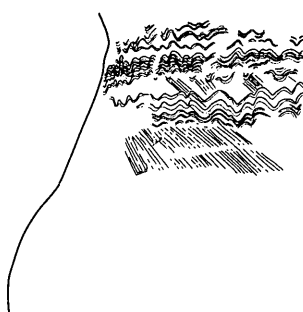
SB20 (239~245)

第116図 土器15

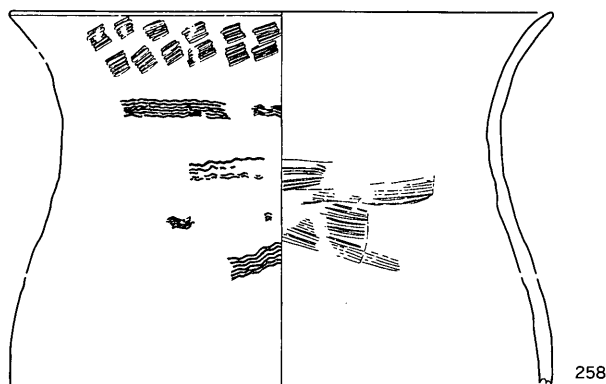
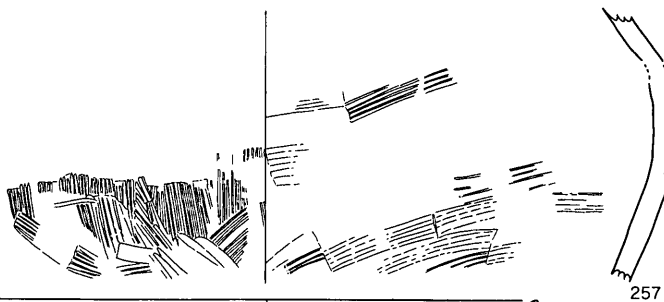
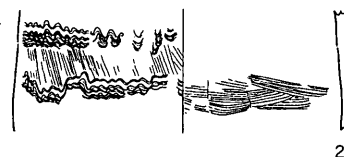
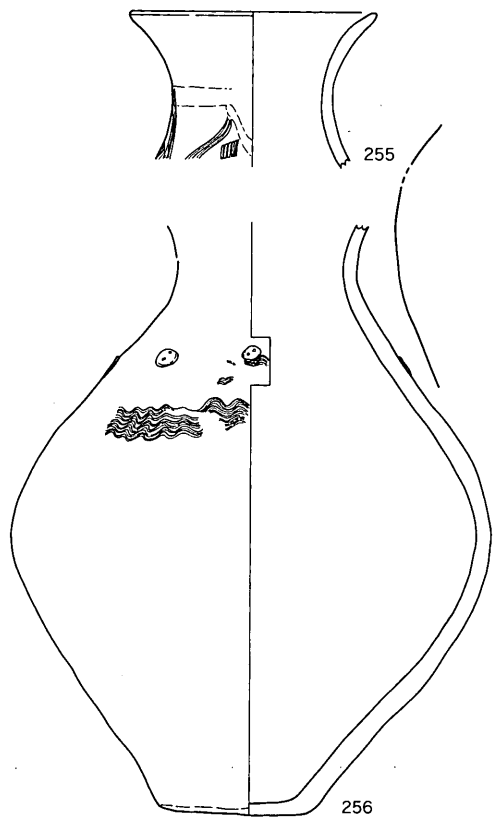
SB23 (246~249)



SB25 (250~254)

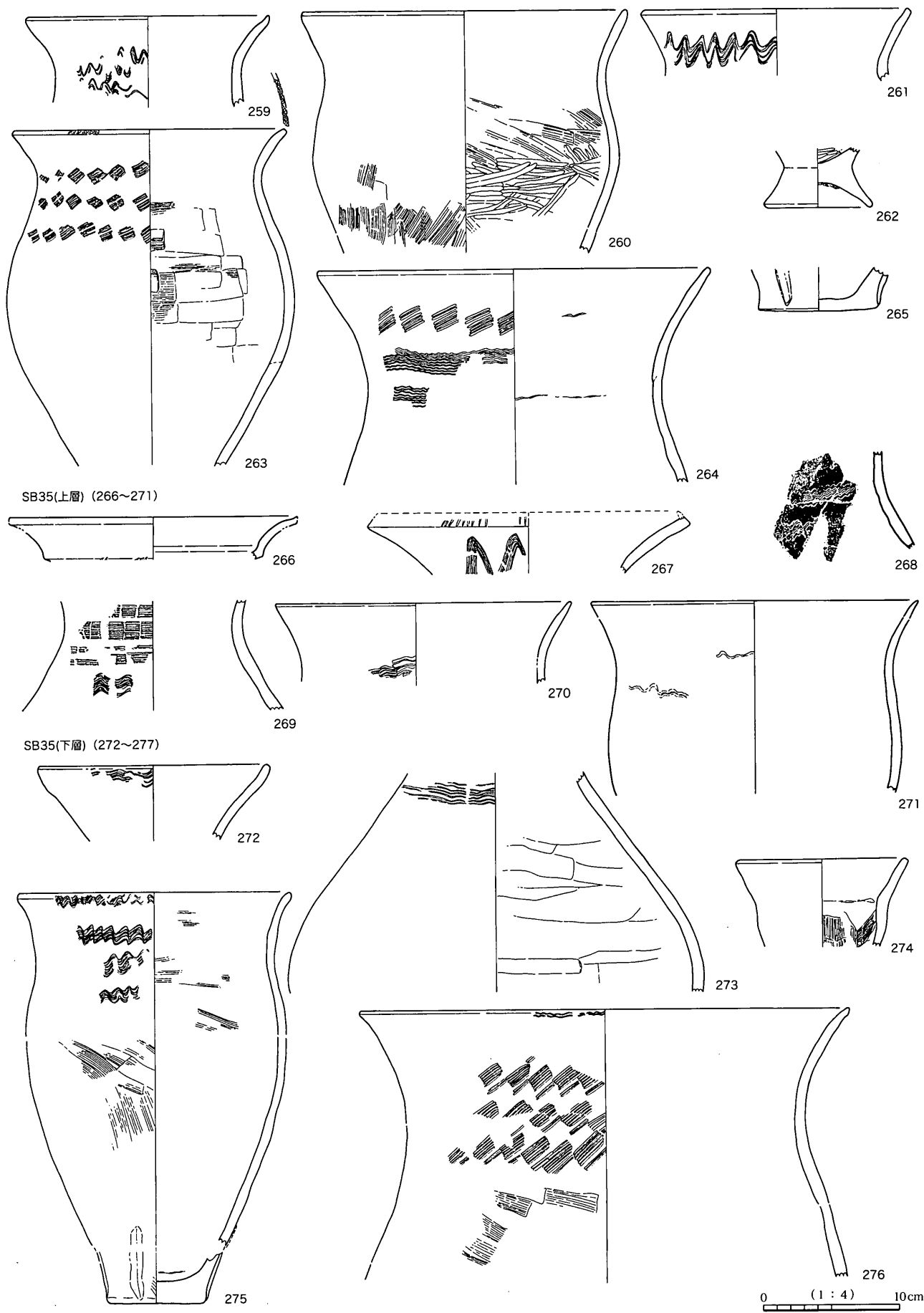


SB34 (255~265)

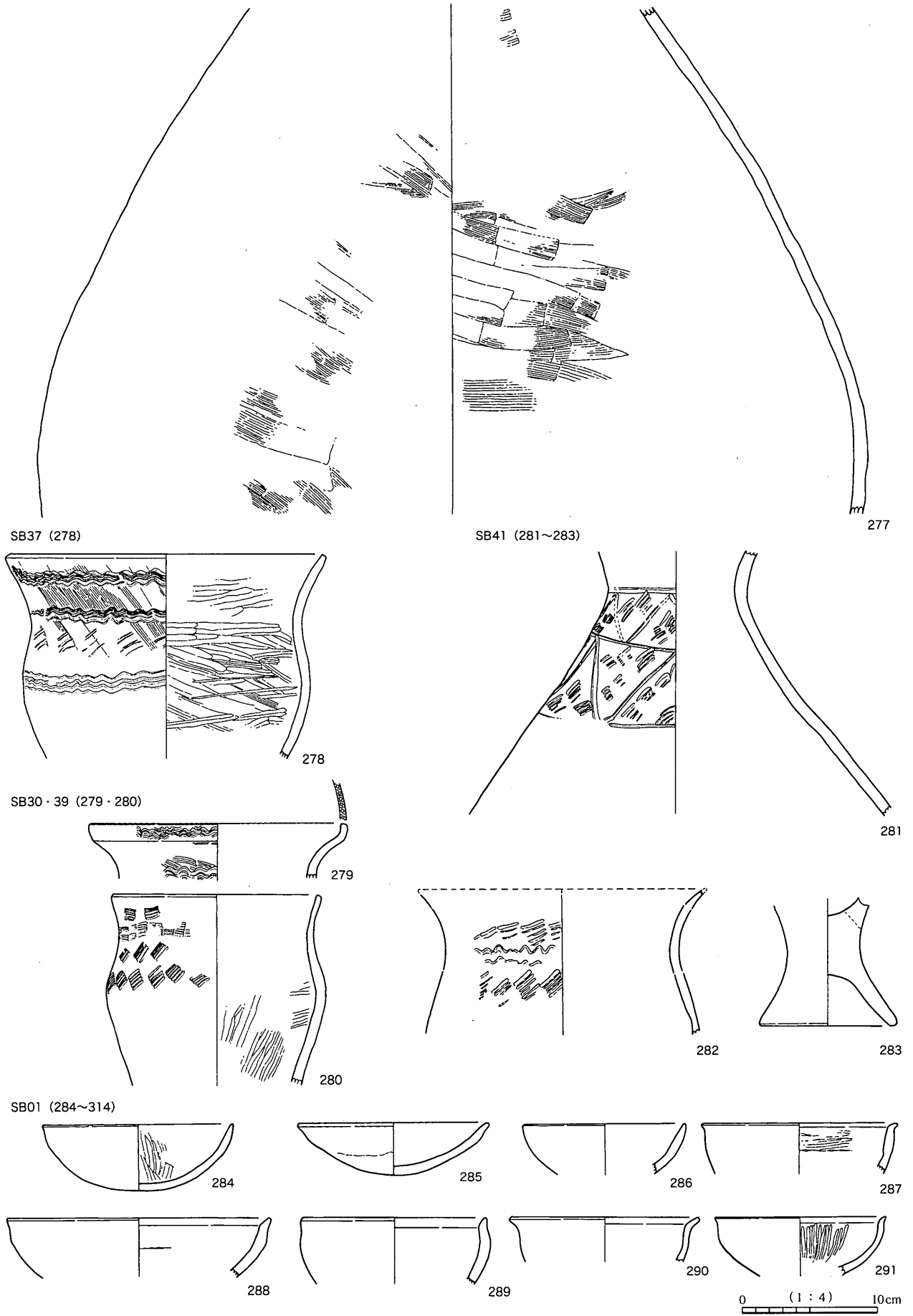


0 (1:4) 10cm

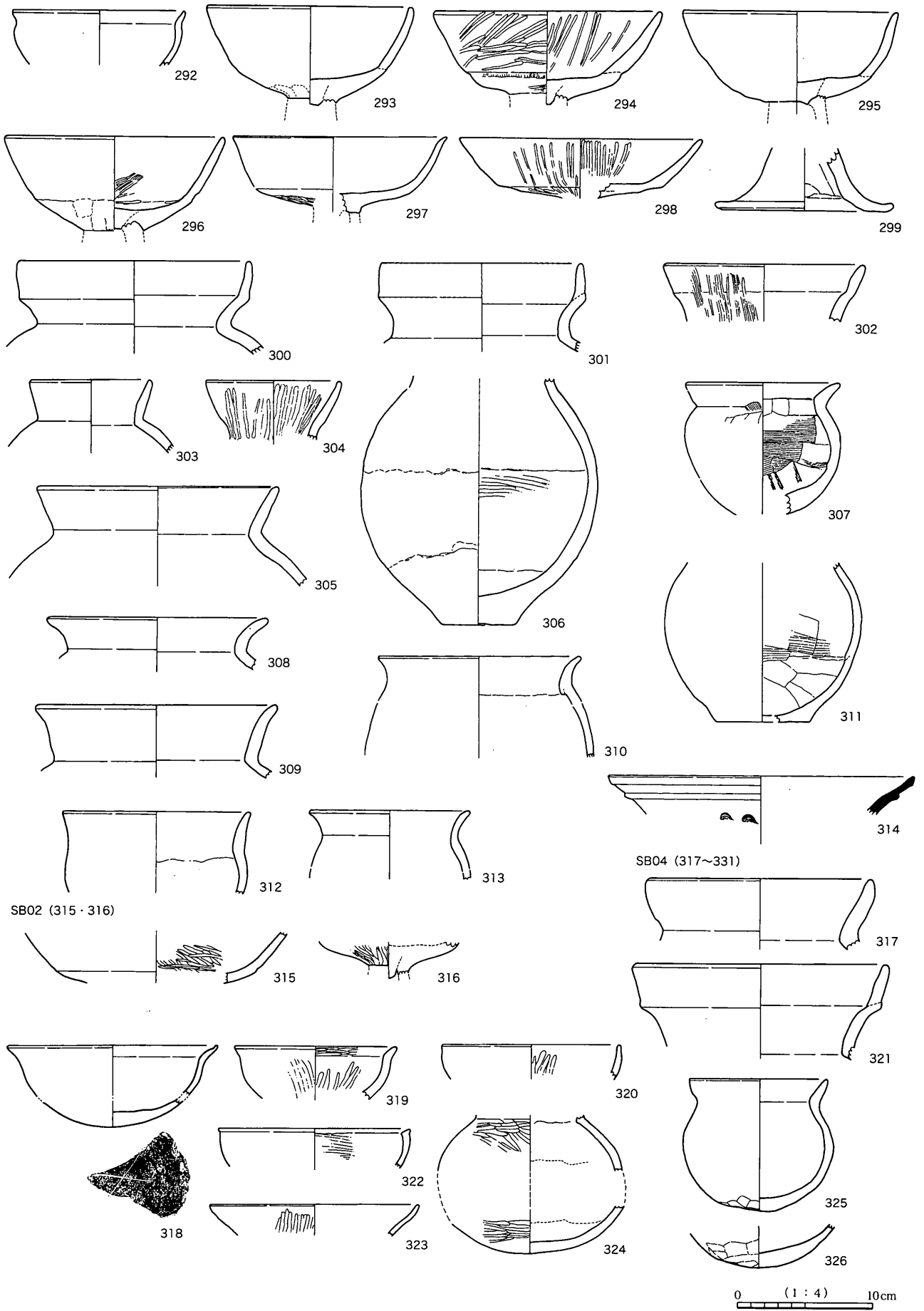
第117図 土器16



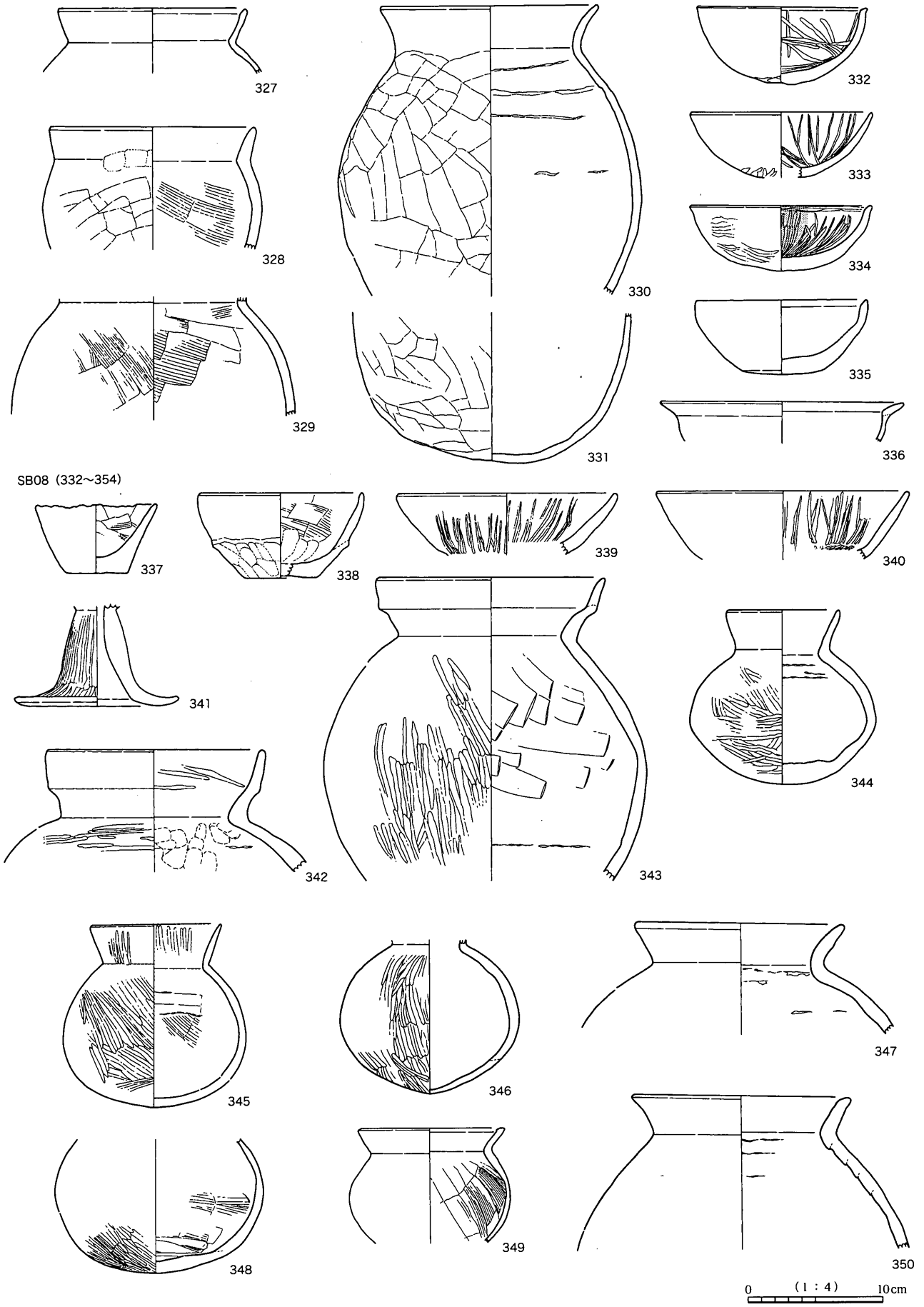
第118図 土器17



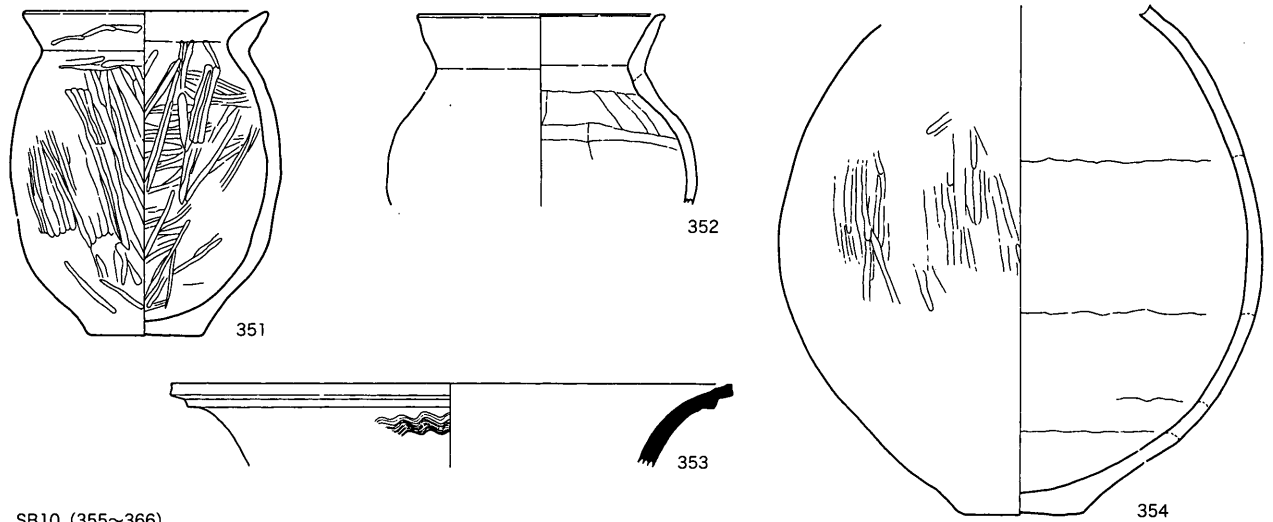
第119図 土器18



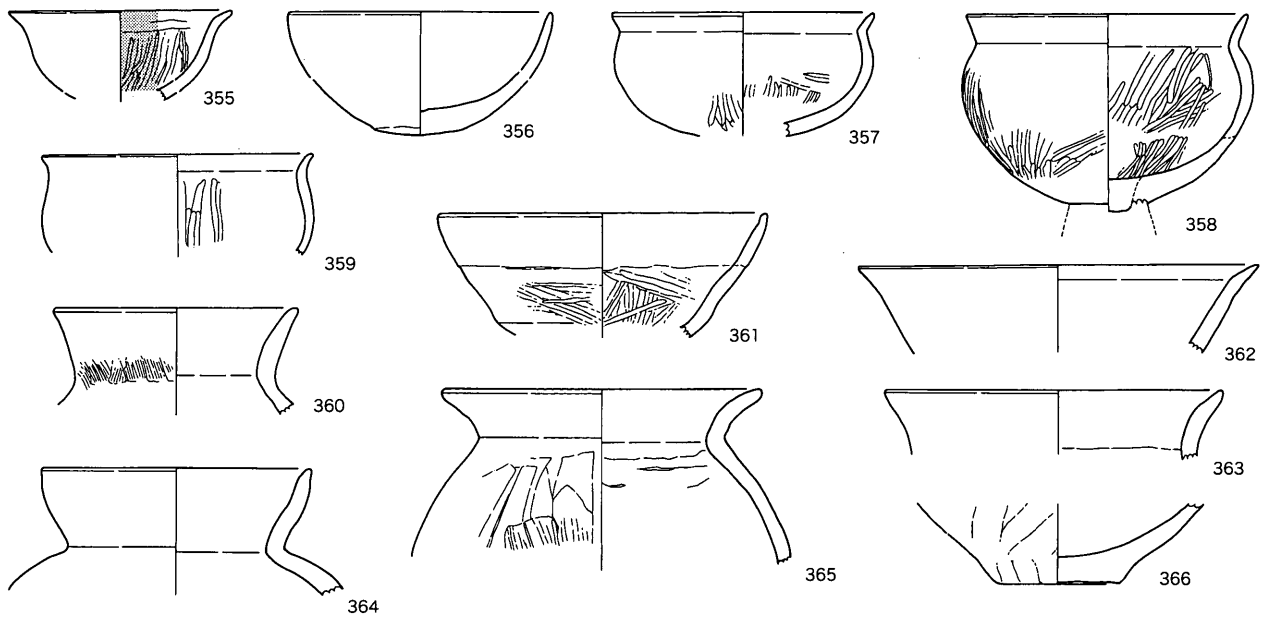
第120図 土器19



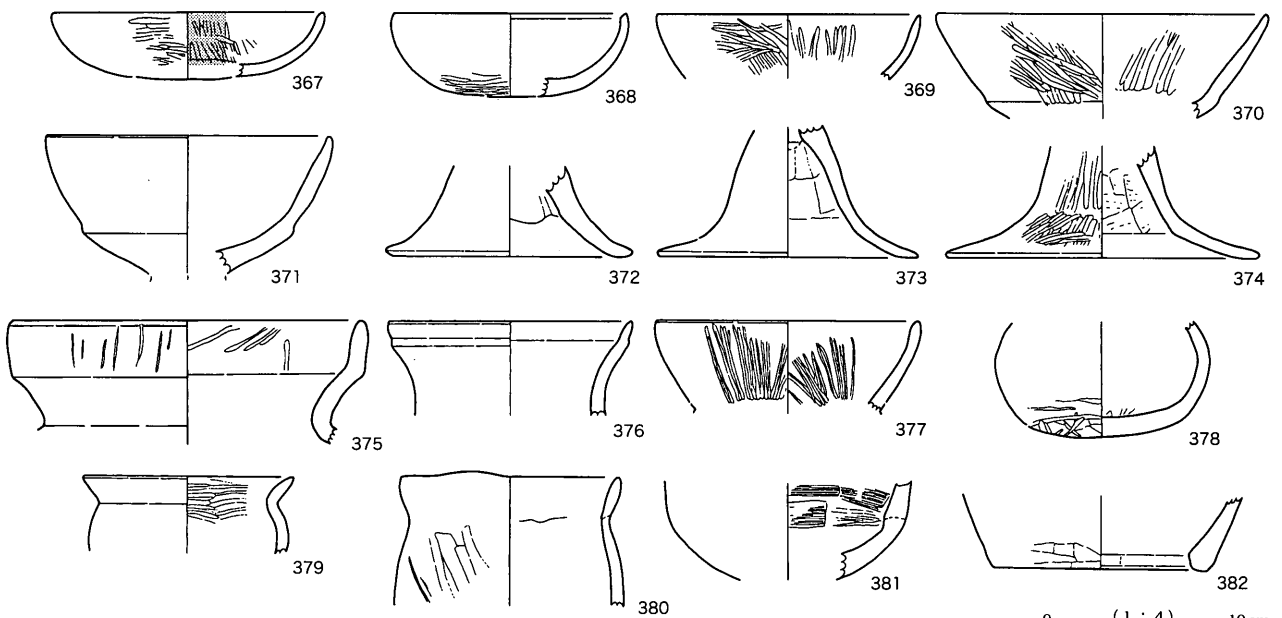
第121図 土器20



SB10 (355~366)

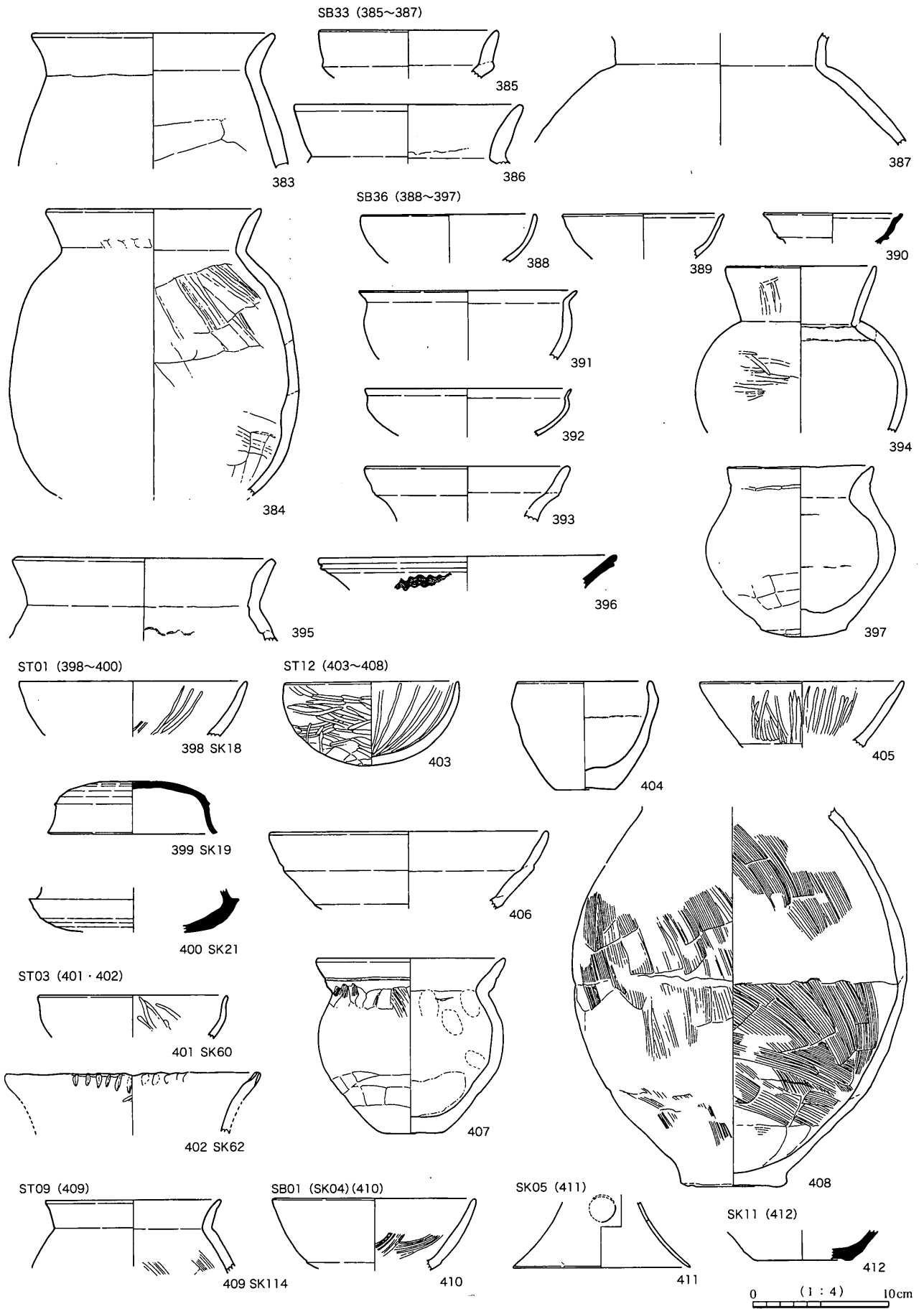


SB13 (367~384)

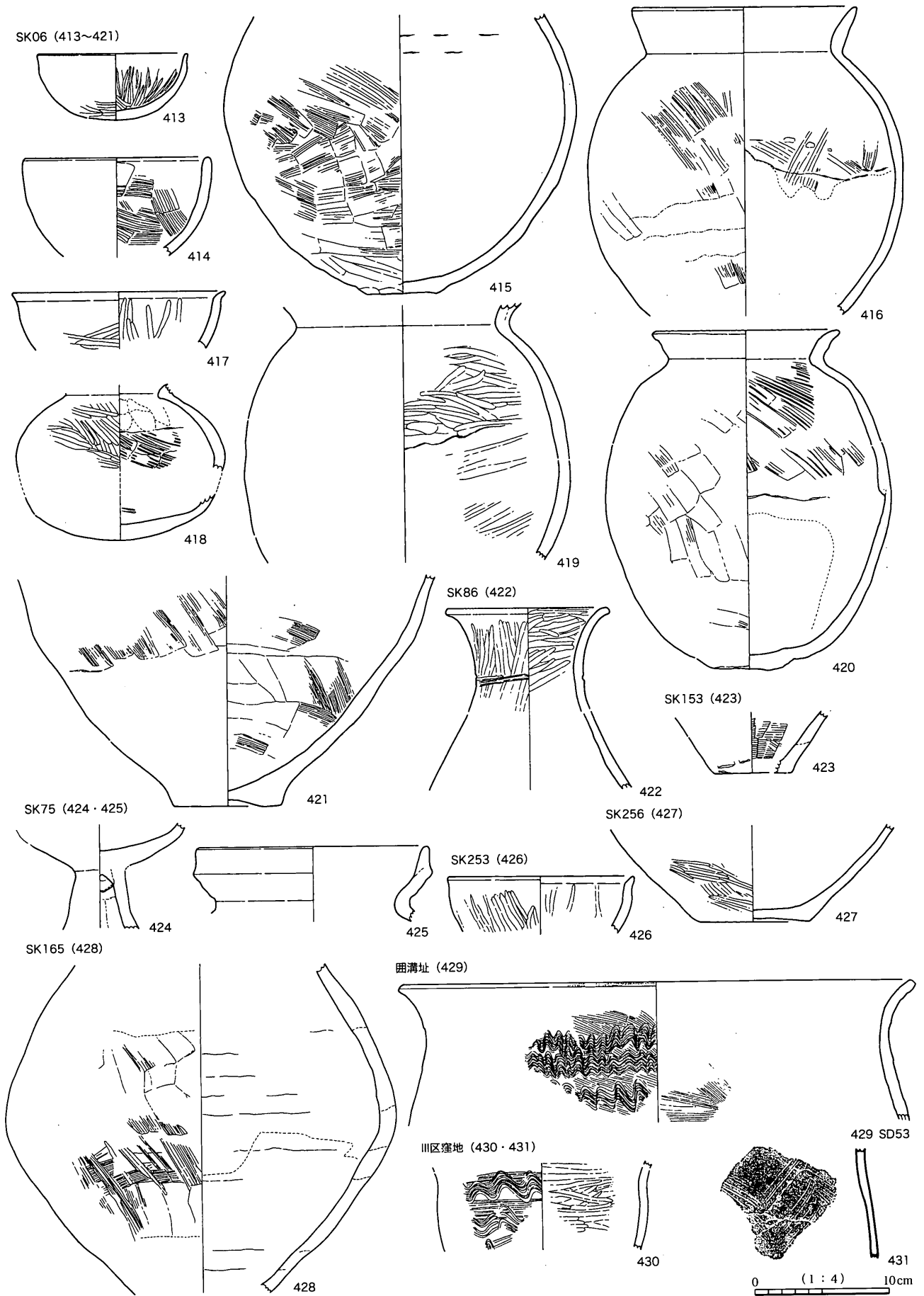


0 (1:4) 10cm

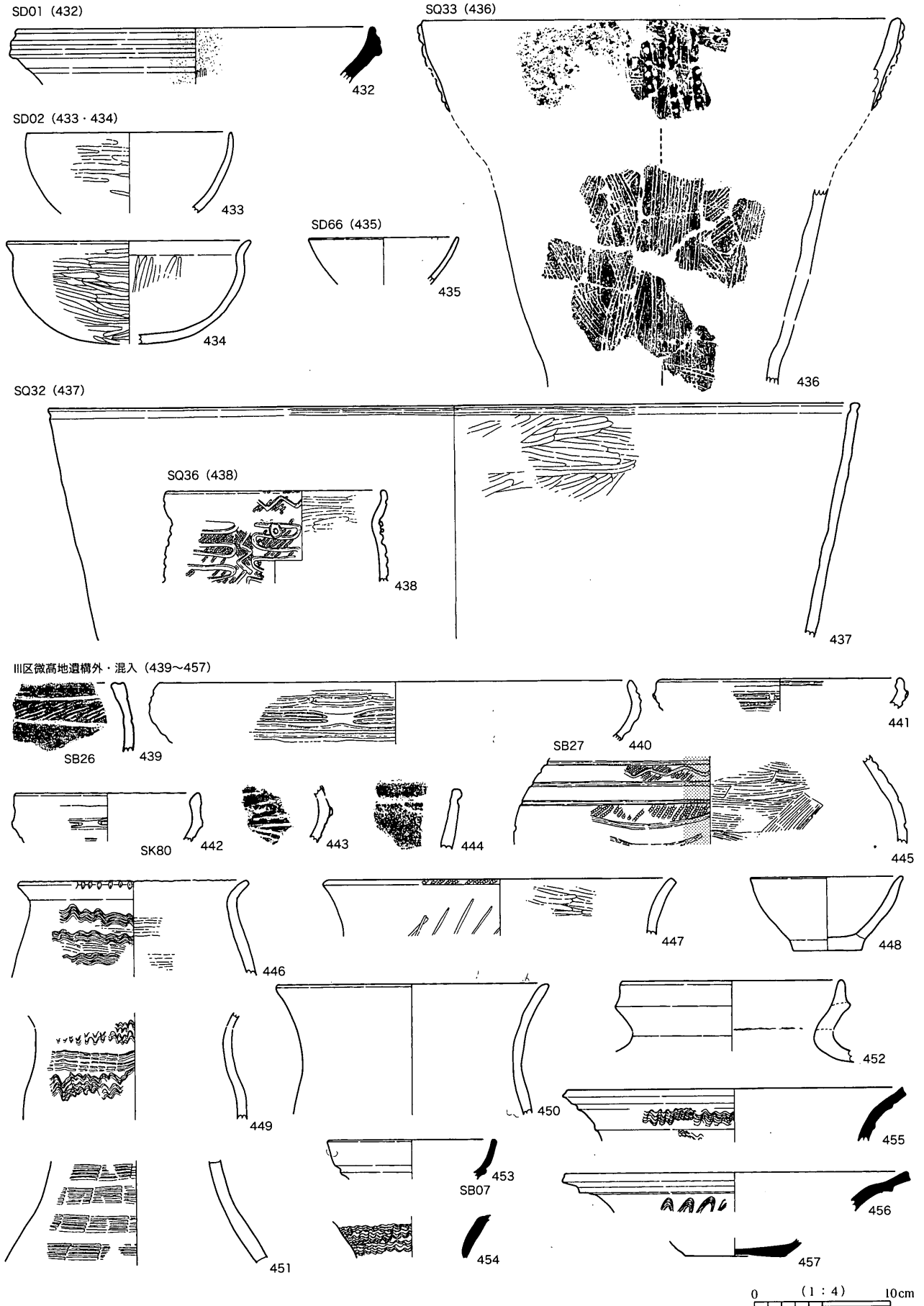
第122図 土器21



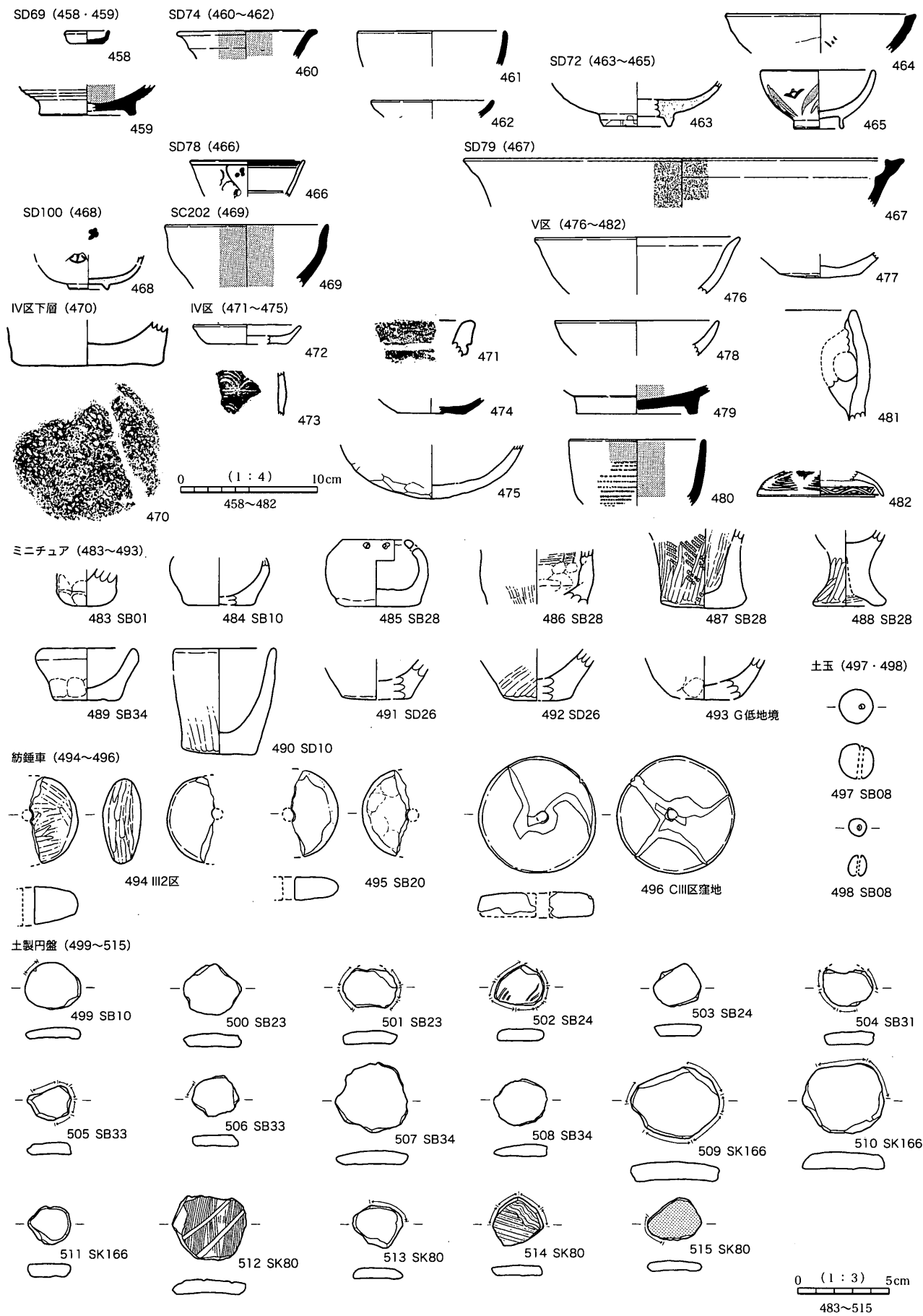
第123図 土器22



第124図 土器23



第125図 土器24



第126図 土器25

表2-1 土器観察表

掲載	遺構名	焼物種・器種	法量 cm	遺存状態	胎土	成形・調整	取り上げ・備考
1	Ⅵ区	土師器杯	口(13.4) 高4.2	口~底 2/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 外ヨコミガキ 弧状ヨコミガキ	Ⅵ②区 Ic-a層
2	Ⅵ区	瀬戸美濃連房天目	-	口1/8 唇部欠損	明灰色密	ロクロナデ 鉄軸漬け掛け	Ⅵ②区 Ic-a層
3	Ⅵ区	古瀬戸平碗	-	体1/8	灰白色密	ロクロナデ 外回転ヘラケズリ 灰軸漬け掛け	Ⅵ②区 北低地2層
4	Ⅵ区	山茶碗系こね鉢	底(12.4)	底2/8	灰白色緻密	ロクロナデ 外体回転ヘラケズリ 付け高台	Ⅵ②区 北低地1C層
5	Ⅵ区	常滑壺	-	胴2/8	灰色1~3mm砂少含	内外ヨコナデ	Ⅵ②区 北低地1C層
6	Ⅵ区	瀬戸美濃連房土瓶	口径1.5	注口のみ	灰色緻密	ロクロナデ 本体穿孔後に貼付	Ⅵ②区 Ib層
7	SD111	弥生甕	-	体1/8	1~3mm砂含	内ナメツ 外液状文・短斜線描文	SD111マイ土
8	SD111	弥生壺	底(7.8)	底4/8	1~2mm砂含	内ナメツハケ 外底脇ヨコハケ 体タテハケ	SD111マイ土
9	SD108	瀬戸美濃連房碗	底4.2	底8/8	灰白色密	ロクロナデ 外体ロクロケズリ 灰軸全面施軸灰軸	SD108マイ土
10	SD108	カワラケ	口(10.6)	口1/8	1mm以下細砂含 精胎	手づくね ヨコナデ	SD108マイ土
11	SD110	弥生壺	-	体2/8	1~2mm砂含	内ナメツ? 外ナメツタテミガキ	SD110A・Bマイ土
12	SX102	瀬戸美濃連房丸碗	底4.1	底8/8	灰白色密	ロクロナデ 全面灰軸施軸→高台端軸ふき取り	SX102
13	SX102	産地不明土瓶	底(7.0)	底3/8	赤褐色。1mm以下細砂含	体ロクロナデ?→底ナデ	SX102
14	SA105	内耳鍋	-	口1/8	細砂含	回転台ナデ	SA105
15	Ⅱ区検	灰軸陶器椀	底7.3	底8/8	灰色緻密(東濃?)	内ロクロナデ 外底付高台 灰軸つけ掛け?	Ⅱ②区2層上面P1
16	Ⅱ区検	弥生壺	口(18.4)	口1/8	1~2mm砂含	内ナメツ 外ナメツ液状文	Ⅱ①区検出
17	Ⅲ③A低1面	瀬戸美濃連房灯明皿	口(9.0)	口1/8	灰色緻密	ロクロナデ 外体下半回転ヘラケズリ 鋳軸	Ⅲ③区A低地1面
18	Ⅲ③A低3層	手づくねカワラケ	口(11.6)・高1.6 底(8.6)	口~底1/8	灰白色緻密 風酸化鉄粒少含	外下半ユビ圧痕 口~内ヨコナデ	Ⅲ③ A低地3層
19	SQ101	台付甕(S字甕)	-	胴1/8	1mm以下細砂含	内ナメツ 外ナメツハケ	SQ101
20	SA31	内耳鍋	-	口1/8	細砂含	回転台ナデ	SA31
21	SC106	内黒杯	底5.4	底8/8	1mm砂含	ロクロナデ 内放射ミガキ 黒色処理外底回転糸切り	SC106
22	Ⅲ区低地	ロクロカワラケ	底(8.0)	底2/8	1mm以下細砂含	ロクロナデ 外底回転糸切り	Ⅲ②区E低地(平井星光堂前)
23	Ⅲ区低地	瀬戸美濃連房丸碗	口(12.0)	口1/8	灰白色密	ロクロナデ 鉄軸漬け掛け 灰軸飛ばし掛け	Ⅲ②区E低地(平井星光堂前)
24	Ⅲ②区E低2面	内黒椀	底(6.2)	底7/8	1mm前後細砂含	ロクロナデ 付高台 内面ミガキ 黒色処理	Ⅲ②区E低地泥炭層
25	Ⅲ区E低4層上	須恵器杯	口(12.0)	口1/8	1mm以下細白色粒含	ロクロナデ	Ⅲ②区E低4層上部
26	Ⅲ②区E低2層下面	山茶碗系こね鉢	底(10.0)	底2/8	灰白色緻密	内使用による磨耗 外ロクロナデ外体回転ヘラケズリ 付高台	Ⅲ②区E低2層下面
27	Ⅲ②区E低2面	古瀬戸鉢皿	口(14.0)	口1/8	灰白色密	ロクロナデ 内底削目 口灰軸	Ⅲ②区E低地泥炭層
28	Ⅲ区E低2面	小型丸底壺	口(9.0)・高(8.6) 底(4.7)	口1/8 胴~底6/8	1~2mm砂含	内ナメツ 外口ナデ 胴上ナメツハケ→ナデ 外底ケズリ	Ⅲ②区E低地2面
29	Ⅲ③区E低地3面	弥生壺?	-	体下6/8	1~2mm砂含	内ヨコ・ナメツハケ 外タテ・底脇ヨコミガキ	Ⅲ③区E低地3面
30	SA109	土師器壺	口(15.6)	口~胴2/8	1~3mm砂含	内ヨコハケ 口ナデ 外胴ナメツハケ・所々ナメツ 口ナデ	SA109
31	SA38	弥生甕	口(17.8)	口1/8	2mm砂主 1~3mm砂含	内口ナデ 胴ヨコハケ 外ナメツ	SA38周辺
32	SD61土手内	台付甕(S字甕)	-	底2/8	1mm以下細砂含	内ヨコハケ 外タテハケ 器壁薄い	中央土手内
33	SD61土手内	土師器?甕	口(16.0)	口1/8 未接合底8/8	1~2mm砂含	内外ナメツ	土手内
34	SD61	弥生甕?	口(26.2) 底7.3	口1/8	1~2mm砂含	内外幅0.5~1cm 前後の工具によるミガキ 口ナデ	SD61一括
35	SD61	土師器甕?	口(19.4)	口2/8	1mm細砂主 3~5mm砂少含	内外ナメツ	SD61南カブ No.4・6
36	SD61	弥生台付甕	底6.2	底8/8	1~2mm砂含	脚内ナメツミガキ 外タテミガキ	SD61南カブ底
37	SD61	弥生鉢	底(7.0)	体4/8~底2/8	1~2mm砂含	内弧状ヨコミガキ 外底~底脇ケズリ 胴下弧状ヨコミガキ 胴上ナメツミガキ 焼成後赤彩(範囲詳細不明)	SD61北カブ底
38	SD61	弥生壺	口(16.0)	口2/8	1~2mm砂主 3mm砂少含	内ナメツ 外液状文・簾状文	SD61 No.7・8 底
39	SD61	弥生壺	口(15.2)	口2/8	1~2mm砂含	内ナメツハケ 外唇歯状工具刺突? 口ナメツハケ	SD61底A
40	G低境	土師器杯?	口(15.9)	口~胴上3/8	1~2mm砂含	内口ナメツ 胴下タテハケ 外口ナデ 胴ケズリ	G低境 SQ31・35
41	G低境	土師器杯	口(11.4)	口1/8	1mm砂含	内外ナメツ	G低境 SQ35 泥炭
42	G低境	土師器高杯	口(17.0)	口2/8	1~2mm砂含	内ヨコナデ 外ヨコナデ 杯底ケズリ→ナデ	G低境 SQ31
43	G低境	土師器高杯	底(10.4)	脚8/8~底1/8	1~3mm砂含	内ヨコヘラケズリ 外タテミガキ	G低境 SQ35
44	G低境	土師器高杯	口(15.8)	口4/8	1mm前後細砂含	内放射ミガキ 外ナメツミガキ	G低境 SQ35ホ 泥炭
45	G低境	土師器高杯	底(14.2)	脚8/8~底1/8	1mm細砂含	内タテヘラ押さえ 外タテミガキ 底不明 脚中央穿孔途中	G低境 ホ
46	G低境	土師器高杯	口(16.0)	口2/8 未接合脚・底片あり	1mm以下細砂含 比較的 精胎	内ナメツ(タテミガキ) 外タテミガキ	G低境東 SQ31
47	G低境	土師器壺	口(16.8)	口2/8	1~3mm砂含	内ヨコハケ→ナデ 外ナデ	G低境 SQ35
48	G低境	土師器壺	口(16.4)	口2/8	1~2mm砂含	内外ナメツ	G低境
49	G低境	土師器壺	口(16.6)	口2/8	1~3mm砂含	内口タテミガキ 外口タテミガキ	G低境 SQ35
50	G低境	土師器壺	-	胴2/8	1~3mm砂含	内ナメツ 外胴下ケズリに近いタテハケ 胴ケズリに近いヨコハケ 胴上ナメツハケ	G低境 SQ35 西 検出面
51	G低境	土師器小壺	-	胴2/8	精胎	内胴下ヨコハケ 胴上ナデ 外ナメツ(ミガキ)	G低境 SQ35 泥炭 東
52	G低境	土師器小壺	口(8.0)	口1/8~胴2/8 未接合片あり	1mm砂含	内外ナメツ(ナデ?)	G低境 東
53	G低境	土師器小壺	-	胴5/8	細砂含 精胎	内胴下ナメツハケ 上ナデ 外ナメツ	G低境 西より SQ35
54	G低境	土師器小壺?	底(3.8)	体~底1/8	1~2mm砂含	内ハケ→ナデ 外底脇ハケ	G低境 チ
55	G低境	土師器甕	口(19.0)	口2/8	1~2mm砂含	内外ナメツ	G低境
56	G低境	土師器甕	口(18.0)	口2/8	1~3mm砂含	内外ナメツ	G低境 泥炭 SQ35
57	Ⅲ②区G低水田	台付甕(S字甕)	-	口~体1/8	1mm以下細砂含	内ナメツ 外体ナメツハケ	Ⅲ②区G低地2面水田
58	Ⅲ②区G低水田	土師器壺?	底(4.0)	底1/8	1~2mm砂含	内ナメツハケ 外ナメツ	Ⅲ②区G低地2面水田
59	SB03(29)	弥生壺	口(18.0)	口~胴下4/8	1~3mm砂含	内口~頸ナメツ 胴ナメツ(所々ナメツハケ) 外口縄文→沈線 口ナメツミガキ 頸縄文→沈線文タテミガキ→所々弧状ヨコミガキ	No.2
60	SB03(29)	弥生甕	-	胴7/8	1~3mm砂含	内ヨコミガキ 外横羽状文	埴土土器
61	SB03(29)	弥生甕	口(30.2)	口6/8	1~2mm砂含	内弧状ヨコミガキ 外唇縄文 口ナメツ	No.3
62	SB16	弥生甕	口(26.2)・高32.7 底(9.0)	口~胴4/8・底7/8	1~2mm砂含 比較的細かく均一	内胴ヨコミガキ・口ナメツ 外胴ヨコ羽状文胴下タテミガキ	No.1
63	SB17	弥生壺	口(22.4)・高45.2 底11.6	口7/8 胴~底8/8	1~3mm砂含	内口ミガキ 頸ナメツ 胴ナメツハケ 外口縄文→沈線文 頸ミガキ 縄文→沈線文・ヨコミガキ 胴ナメツハケ→ミガキ 沈線文・縄文・ミガキ 胴下ミガキ	No.51・52・53 ・54・55
64	SB17	弥生壺	底5.0	口欠 頸~底8/8	1mm前後細砂含	内ナメツハケ→頸ナメツ 外タテ・ヨコミガキ 赤彩	No.57・マイ土
65	SB17	弥生壺	底(10.0)	胴~底4/8	1~3mm砂含	内頸上ナデ 胴ナメツハケ 外頸ナメツミガキ 胴弧状ヨコミガキ	No.12・マイ土
66	SB17	弥生壺	底7.5	口欠 頸~底8/8	1~2mm砂含	内胴ヨコハケ頸ナメツ 外頸管・歯状工具刺突文 タテ波状文・沈線(4)・貼付文(4) 胴線・管刺突・一部縄文・貼付文(5)	No.52
67	SB17	弥生壺	口(16.1)	口2/8 頸8/8 胴上5/8	1~2mm砂含	内口ミガキ頸ハケ→ナデ 外口縄文・ナメツハケ→ナデ 頸縄文→沈線文・タテミガキ 胴ナメツヨコミガキ・沈線	No.58
68	SB17	弥生甕	口(22.3)・高28.5 底8.2	口6/8 胴7/8 底8/8	1~2mm砂含	内口ヨコミガキ 胴タテ・ナメツミガキ 外口縄文ユビ圧痕・ナデ 胴上麓内型波状文タテ羽状文 胴下タテミガキ	No.43・44・45 ・46・47・48 ・49・マイ土

第4章 遺物

表2-2 土器観察表

箱順	遺構名	焼物種・器種	法量 cm	遺存状態	胎土	成形・調整	取り上げ・備考
69	SB17	弥生甕	口(19.4) 高16.5 底7.0	口~胴4/8 底8/8	1~2mm砂含 3mm少砂含	内口ヨコミガキ 胴タテミガキ 外口マメツ 頸内型襷描横線文・タテ羽状 胴下タテミガキ	No.57・マイ土
70	SB17	弥生甕	口(19.0)	口1/8	1mm前後細砂含	内ナデ? 外波状文 口縁折返し	マイ土
71	SB17	弥生甕	口(7.6)・高13.2 底5.8	口1/8、胴4/8、底8/8相互未接合	1~2mm砂含	内口マメツ 胴タテミガキ 外中部高地型波状文・タテ襷描文 胴下タテミガキ	No.13・14・マイ土
72	SB17	弥生甕	口(25.6)	口~胴上2/8	1~2mm砂含	全体的にマメツ 内マメツ 外口縄文→沈線 胴タテ羽状文	No.29
73	SB17	弥生鉢	口(22.1)・高7.6 底6.8	口6/8 底8/8	1mm以下細砂含	内外ミガキと思われるがマメツの為仔細不明 赤彩(スリップ)	No.16・マイ土
74	SB21	弥生壺	口16.0	口7/8	1~3mm砂含	内口弧状ヨコミガキ 頸ナデ 外唇縄文 頸ナメ刷毛→ナデ・縄文→沈線文→タテミガキ	No.10 マイ土
75	SB21	弥生壺	-	胴上8/8	1mm細砂含	内頸ナデ 外頸縄文→タテミガキ 胴上縄文・沈線文→襷状文・内型波状文 赤彩(焼成後)	Pit1 NO.3・4 マイド
76	SB21	弥生甕	口(24.0)	口1/8	1~2mm砂含	内ナメハケ 外唇縄文 口剥落(襷状文残)	マイ土
77	SB21	弥生甕	口(11.8)	口3/8・胴1/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 外タテ羽状文	マイ土
78	SB21	弥生甕	-	体1/8	1~2mm砂含	内ヨコハケ→タテミガキ 外波状文貼付ボタン文	No.2 マイ土
79	SB21	弥生台付甕	底9.1	底8/8	1~3mm砂含	内ヨコハケ→ナデ 外マメツ	No.2 マイ土
80	SB21	弥生高杯?	口(11.2)	口1/8	1~2mm砂含	内ナメミガキ 外タテミガキ 内外面赤彩(スリップ)	No.22
81	SB21	弥生甕?	口(27.4)	口1/8	1~3mm砂含	内ヨコ・ナメハケ 外ナメハケ	マイ土
82	SB21	弥生鉢	口(22.2)	口1/8 高22.3 底8.0	1mm前後細砂含	内外マメツ 赤彩(スリップ)	No.7 Pit3 床下・マイ土
83	SB21	弥生鉢	口(28.2)・高6.8 底(11.5)	口~底1/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 外ヨコミガキ 内外面赤彩(スリップ)	No.7, 9 マイ土
84	SB22	弥生壺	口(18.3)	口~頸8/8	1~2mm砂含	内口弧状ヨコミガキ 頸ナデ 外唇縄文 頸縄文→沈線文→ミガキ	No.8
85	SB22	弥生壺	底7.8	胴~底8/8	1~3mm砂含	内ナメハケ 外タテミガキ 底ナデ	No.24
86	SB22	弥生壺	口(10.6) 高29.4 底7.0	口7/8 胴~底 ほぼ8/8	1~2mm砂含 3mm少砂含	内頸・胴下半マメツ 胴ナメハケ 外唇ユビオサエヒダ 頸沈線 胴タテミガキ	No.20
87	SB22	弥生壺	底8.7	口欠 頸~底8/8	1mm前後細砂含	内胴ナメハケ 頸ナデ 外頸タテミガキ・胴ヨコミガキ 赤彩(スリップ)	Pit7 No.38-2
88	SB22	弥生壺	底(8.0)	胴~底7/8	1~2mm砂含	内頸ナデ 胴ナメハケ 外頸縄文→沈線文 胴タテミガキ→ヨコミガキ	No.37
89	SB22	弥生壺	口(19.2)	口3/8	1~3mm砂含	内ヨコハケ→ナメミガキ 外唇縄文 口内型?波状文 頸ナメハケ	No.43 マイ土
90	SB22	弥生壺	口14.7	口~頸8/8	1~3mm砂含	内ナデ 外唇縄文 頸沈線・タテミガキ 頸部1ヶ所三叉状沈線文	No.37-1・2、38-1・2・8
91	SB22	弥生壺	底10.0	底8/8	1~2mm砂含	内ヨコハケ 外ナメミガキ	No.36, 37-1, 39, 45 マイ土
92	SB22	弥生甕	口(18.2)・高22.3 底(8.0)	口4/8 胴7/8 底7/8	1~2mm砂含	内マメツ(部分的にタテミガキ残) 外唇縄文 胴上内型波状文 胴下タテミガキ	No.31, 37-2, 38-1・2 マイ土
93	SB22	弥生甕	口(11.0)	口2/8 胴2/8 接合せず	1~3mm砂含	内口ナデ 胴ヨコミガキ 外唇縄文 口ナデ 頸襷描横線文 胴中部高地型襷描文→垂下襷描文 胴下タテミガキ	No.19
94	SB22	弥生甕	口(23.8)・高(30.2) 底(8.9)	口3/8 胴以下7/8	1~2mm砂含	内ヨコナメハケ→雑ミガキ 外唇刻目 胴上ナメハケ→ナメ襷描文	No.14, 7-2, 38-1・2, 42, 43
95	SB22	弥生甕	口10.4	口~胴上5/8	1~2mm砂含	内口ナデ 胴ヨコミガキ 外口ナデ 胴タテミガキ	No.38-1・2
96	SB22	弥生甕	口(28.0)	口2/8 胴1/8	1~2mm砂含 3~4mm少砂含	内ナメ・ヨコミガキ 外唇棒状工具刻目 胴棒状工具羽状文	炉内 床下?(調査ミス?) No.5
97	SB22	弥生甕	口(19.2) 高21.7 底7.0	口1/8 胴7/8 底8/8	1~2mm砂含	内雑なヨコミガキ 胴下~底マメツ 外唇棒状工具押し引き 胴格子状ナメ襷描文	No.34, 37-1・2, 38-2
98	SB22	弥生甕	口(24.8) 高28.0 底7.2	口7/8、胴上6/8、胴下~底8/8	1~2mm砂含	内タテ・ヨコミガキ 外口ナデ 胴上半分は左下り襷描文・半分は左上がり襷描文 胴下タテミガキ	No.22, 27, 29, 31, 32, 35, 37-1・2, 38-2
99	SB22	弥生甕	底8.4	胴4/8 底8/8	1~2mm砂含	内マメツ(ヨコ・ナメミガキ?) 外胴タテ羽状文 胴下タテミガキ	No.7, 29, 30, 31, 36, 37-1, 38-2
100	SB22	弥生甕	口(24.0)	口2/8、胴2/8 接合せず	1~3mm砂含	内口マメツ 胴ヨコミガキ 外唇ヒダ状 頸襷状文 胴タテ羽状文 胴下タテミガキ	No.27
101	SB22	弥生甕	口19.4	口~胴上8/8	1~2mm砂主 3mm少砂含	内ヨコミガキ 外タテミガキ	No.38-A・1
102	SB22	弥生甕	口(14.2) 高13.9 底6.2	口1/8 胴下~底8/8	1~2mm砂含	内上マメツ 胴タテ・ヨコミガキ 外唇縄文 頸襷描横線 胴タテ羽状文 胴下タテミガキ 外底マメツ	No.38-1・2
103	SB22	弥生甕	口(14.0) 高11.8 底5.9	口~胴上5/8 底8/8	1~2mm砂含 3mm少砂含	内口ナデ 胴ナメミガキ 外口ナデ 胴ナメハケ→タテミガキ 外底ミガキ	No.38-1・2
104	SB22	弥生甕	口(10.8) 高10.7 底5.1	口3/8 胴~底8/8	1~2mm砂含	内マメツ 外唇縄文 胴内型波状文 胴下タテミガキ 外底ヨコミガキ	No.38-1・2
105	SB22	弥生甕	口(26.8) 高26.3 底8.2	口2/8 胴上7/8 胴下~底8/8	1~2mm砂含	内タテ・ヨコミガキ 外唇縄文 頸襷状文 胴タテ羽状文 胴下タテミガキ	No.37-1・2, 38-2 床下
106	SB22	弥生甕	口(14.0) 高14.9 底6.2	口2/8 胴7/8 底8/8	1~2mm砂含	内ナメハケ→ナメミガキ 外唇縄文 頸襷状文 胴タテ羽状文 胴下マメツ 外底ヨコミガキ	No.32, 35, 36, 37-1, 38-1
107	SB22	弥生台付甕	口18.2 高19.6 底7.1	口4/8 胴8/8 底6/8	1~2mm砂含	内ナメ・弧状ヨコミガキ 外唇縄文 口縄文→沈線文→貼付ボタン文 胴中部高地型襷描文→垂下襷描文→貼付ボタン文 胴下ミガキ	No.37-1, 38-1・2, 41 床下
108	SB22	弥生甕	底9.0	胴下2/8 底8/8	1~3mm砂含	内全体的にマメツ(ナメミガキ) 外タテミガキ 外底マメツ	No.27・28
109	SB22	弥生鉢	口(18.4) 高9.1 底7.5	口7/8 体~底8/8	1mm前後細砂含 2mm少砂含	内弧状ヨコミガキ 外ナメミガキ 口弧状ヨコミガキ 赤彩	No.38-1・2
110	SB22	弥生鉢	口(16.0) 高9.0 底6.2	口~体6/8 底8/8	1~3mm砂含	内弧状ヨコミガキ 外ヨコミガキ底脳ナメミガキ 赤彩なし	No.37-1, 38-1・2
111	SB22	弥生高杯	口13.0 高13.1 底10.4	杯8/8 脚6/8	1mm砂含	内ヨコミガキ 外弧状ヨコミガキ 脚マメツ 赤彩	No.9 マイ土
112	SB22	弥生高杯	口14.6 高13.3 底9.5	杯8/8 脚6/8 底8/8	1~2mm砂含	内弧状ヨコミガキ 脚内ヨコハケ→ミガキ 外口縄文→沈線文 杯弧状ミガキ 赤彩(焼成後)	No.6
113	SB22	弥生甕	口(16.0) 高8.4 底6.4	口7/8 底8/8	1~3mm砂含	内弧状ヨコミガキ 外ナメハケ・底脳ケズリ→ミガキ?	No.37-1・2, No.38-1・2
114	SB22	弥生甕	底8.0	胴下~底8/8	1~3mm砂含	内ナメハケ→所々タテミガキ 外マメツ	No.38-A
115	SB24	弥生壺	-	胴1/8	1~3mm砂含	内ナメハケ 外ナメミガキ・縄文→沈線文	マイ土
116	SB24	弥生壺	-	胴1/8	1mm前後細砂含	内ナデ 外縄文→沈線文	マイ土
117	SB24	弥生壺	口(16.8)・高18.3 底7.0	口1/8~胴6/8~底8/8	1~2mm砂含	内マメツ(ヨコミガキ) 外唇縄文 胴上格子状襷描文 胴下タテミガキ	No.1
118	SB24	弥生壺	口(15.0) 底6.2	口2/8 底8/8 両者接合せず	1~3mm砂含	内胴下ヨコミガキ 外唇縄文 胴下タテミガキ 底脳ヨコミガキ 外底ヨコズリ	No.3・9・マイ土
119	SB24	弥生壺	-	胴1/8	1~2mm砂含	内ナデ 外縄文→沈線文・刺突文	マイ土
120	SB24	弥生壺	-	胴1/8	1~3mm砂含	内ヨコハケ 外縄文→沈線文	マイ土
121	SB24	弥生高杯	底6.4	底8/8	1~3mm砂含	内底ナデ? 外タテ・ヨコミガキ 焼成後赤彩	マイ土
122	SB24	弥生壺	底(9.2)	底2/8	1~2mm砂主 5mm位少砂含	内剥落 外タテミガキ 底脳ヨコミガキ	マイ土
123	SB24	弥生甕	口(14.4)	口1/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 外口ナデ 胴タテ羽状文	マイ土

表2-3 土器観察表

掲載	遺構名	焼物種・器種	法量 cm	遺存状態	胎土	成形・調整	取り上げ・備考
124	SB24	弥生甕	口(12.6)	口~胴4/8	1mm前後細砂主 3~5mm砂少含	内ヨコミガキ 外唇縄文 頸縷状文 胴タテ羽状文	マイ土
125	SB24	弥生甕	口(19.0)	口1/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 外唇縄文 口縄文 胴タテ羽状文	No.7 マイ土
126	SB26	弥生壺	底11.0	頸8/8~胴5/8~底8/8	1~3mm砂含	表面の痛み著しい 内頸ナデ 胴ナメハケ 外頸縄文~沈縷文 胴タテミガキ~胴中央ヨコミガキ	No.2・3・28・29・30 マイ土・マイ土ペルト
127	SB26	弥生壺	口(15.0)・高29.3・底9.2	口1/8~胴以下8/8	1~3mm砂含	内口ナデ 胴ヨコ・ナメハケ 外口ナデ 頸縷文・ヨコ縷文 胴上垂下沈縷文・タテ縷文(9単位) 胴中央沈縷文・ヨコ縷文 胴下ナメハケ→ナデ?→弧状沈縷文	No.2・3・7
128	SB26	弥生壺	口15.1	口8/8	1~2mm砂含	内ナデ? 外唇縄文 口ナデ? 頸縷文→沈縷文	No.27
129	SB26	弥生壺	底10.4	頸7/8~胴6/8~底8/8	1~2mm砂含	内口雑ヨコミガキ 頸ナデ 胴ナメハケ 外口ナメハケ 頸縷文→沈縷文 胴上タテミガキ 胴下ヨコナメミガキ	No.8
130	SB26	弥生壺	口(9.8)・底8.6	口7/8~頸8/8~胴5/8 底8/8	1~2mm砂含	内マメツ 外マメツ 口ヒダ(ユビオサエ)	No.5 マイ土
131	SB26	弥生壺	-	口8/8(先端欠)~胴上2/8 胴下(直接接合しない)1/8	1~2mm砂含	内口ナデ 胴ヨコハケ 外頸縷文 胴上タテミガキ 胴ヨコミガキ 胴下ヨコミガキ 焼成後赤彩	No.1-1、12 マイ土
132	SB26	弥生壺	口15.6	口8/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 頸ナデ 外唇縄文 タテハケ 頸縷文→沈縷文	No.23
133	SB26	弥生甕	口19.5・高24.4・底8.6	口~底8/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 外唇縄文 口ナデ 胴上タテ羽状文 胴下タテミガキ	No.10
134	SB26	弥生甕	口(11.7)・高15.7・底6.7	口・胴上1/8~胴下・底8/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 外唇縄文 口ナデ 胴上縷状文 タテ羽状文 胴下マメツ	No.14・17 マイ土・トレンチ
135	SB26	弥生甕	口(23.4)・高55.3・底12.2	口5/8~胴7/8~底8/8	1~2mm砂含	内口ヨコナメミガキ 頸ナデ 胴ナメハケ 外唇縄文 口縄文→沈縷文・穿孔貼付文(4) 頸弧状ヨコミガキ 縄文→沈縷文・棒状工具押引 胴上タテミガキ→ヨコミガキ 胴縷文→沈縷文・穿孔貼付文(3) タテヨコミガキ	No.2・7
136	SB26	弥生甕	口19.5・高22.6・底8.0	口~底8/8	1~2mm砂含	内胴下タテミガキ→胴上ヨコミガキ 外唇刻目 口ナデ 胴ヨコナメハケ→タテ羽状文→胴下タテミガキ	No.9 マイ土
137	SB26	弥生甕	口(14.7)・高14.3・底6.0	口7/8~胴・底8/8	1~2mm砂含	内胴タテミガキ→口・胴下ヨコナメミガキ 外唇縄文 口ナデ 胴上縷状文・タテ羽状文 胴下ナデ→刺突文 底ヨコミガキ	No.13
138	SB26	弥生甕	口28.6	口7/8~胴8/8	1~3mm砂含	内口ナデ 胴ナメハケ 外唇縄文 口ナデ 胴ナメハケ→ヨコ羽状文	No.1-5・1-6・3・4・9・10・11・12・17 マイ土
139	SB26	弥生甕	口(16.1)・高22.0・底6.8	口・胴上7/8~胴下・底8/8	1~3mm砂含	内ヨコミガキ 胴下剥落 外唇刻目 口ナデ 胴ヨコナメハケ→タテ羽状文 胴下タテミガキ	No.11
140	SB26	弥生甕	口(14.1)・高14.7・底6.0	口7/8~底8/8	1mm砂含	内胴タテミガキ→口ヨコミガキ 外唇縄文 胴中部高地型波状文→垂下縷文 胴下タテミガキ	No.2・12・26 マイ土
141	SB26	弥生甕	口(24.0)	口4/8~胴8/8	1~3mm砂含	内胴タテミガキ 口ヨコミガキ 外唇縄文 口縄文→沈縷文 胴格子状タテ羽状文 胴下タテミガキ	No.4 マイ土
142	SB26	弥生甕	口(22.1)・高23.9・底7.2	口7/8~胴・底8/8	1mm以下細砂含	内胴タテミガキ→口・底ヨコミガキ 外唇縄文 口ナデ 胴ヨコハケ→タテ羽状文 胴下タテミガキ 底ヨコミガキ	No.1-2・6・12・34・35 マイ土
143	SB26	弥生台付甕	口(11.2)・高12.0・底5.9	口6/8~胴・底8/8	1~2mm砂含	内マメツ 脚内ナデ→ミガキ 外唇縄文 胴上畿内型波状文 胴下タテミガキ 脚マメツ	No.20 マイ土
144	SB26	弥生台付甕	口(13.0)・高13.5・底(7.0)	口~胴上4/8・胴下~脚8/8	1mm細砂含	内ヨコミガキ 脚内ナデ 外口ナデ 胴上ヨコハケ→垂下タテ縷文 胴下~脚タテミガキ	No.14・16 マイ土
145	SB26	弥生甕	口(32.1)・高39.6・底11.0	口6/8 胴・底8/8	1~2mm砂含	内胴タテミガキ→雑なヨコミガキ 外唇・口縄文 胴上ヨコ羽状文 胴下タテミガキ	マイ土
146	SB26	弥生台付甕	口(12.0)・高13.4・底5.9	口1/8~胴・底8/8	1~2mm砂含	内胴ヨコハケ→タテミガキ・ヨコミガキ 脚内ヨコミガキ 外唇・口縄文 胴上中部高地型波状文 胴下~脚マメツ(ミガキ?)	No.22・23 マイ土
147	SB26	弥生鉢	口(10.7)・高8.3・底7.8	口7/8~底8/8	1~2mm砂含	内ナメハケ→ナデ 外ナデ 口1箇所ゆがみ(片口?)	Pit8 外面 煤付着
148	SB26	弥生台付甕	口(12.5)・高13.1・底7.7	口6/8・胴~脚8/8	1~2mm砂多含	内ヨコミガキ 脚内マメツ 外唇突起(4) 胴中部高地型波状文→垂下縷文 胴下タテミガキ 脚マメツ	マイ土
149	SB26	弥生甕	-	胴2/8	1mm以下細砂含	内ナメ・ヨコハケ→ナデ 外ナデ・ナメハケ→ナデ?	No.24
150	SB26	弥生高杯	口19.5・高8.8・底7.9	口~底8/8	1~2mm砂含	内ナメ・ヨコミガキ 赤彩 外ヨコナメミガキ 脚マメツ 赤彩	No.16
151	SB26	弥生鉢	口(13.6)・高6.3・底5.6	口7/8~底8/8	1mm以下細砂含	内弧状ヨコミガキ 口貼付突起(4) 穿孔2孔 赤彩 外弧状ヨコミガキ 赤彩	No.21
152	SB26	弥生甕	口15.6・高10.0・底7.0	口・体7/8~底8/8	1~3mm砂含	内ナメミガキ 外ナメミガキ 底穿孔→ヨコミガキ	No.15 マイ土 トレンチ
153	SB27	弥生壺	口(14.9)	口6/8~頸8/8	1~4mm砂含	内口弧状ヨコミガキ 頸ナデ 外唇縄文 頸縷文→沈縷文 タテミガキ 三叉沈縷文	No.28・29・30・31・32・38・40 記号沈縷あり
154	SB27	弥生壺	-	頸1/8 胴1/8	1~3mm砂含	内マメツ(ハケ?) 外頸縷文・刺突文・波状文 胴重ね四角沈縷文・刺突文・貼付文	No.13・59・63 マイ土SB28(180)と同じ個体か
155	SB27	弥生壺	-	頸1/8	1mm前後細砂含	内マメツ 外ナメハケ→畿内型?縷文・波状文	No.2 マイ土
156	SB27	弥生壺	口(12.4)	口2/8 未接片あり	1mm前後細砂含	内マメツ(ミガキ?) 外口沈縷波状文 頸タテミガキ	No.1 マイ土
157	SB27	弥生壺	底7.0	胴3/8~底8/8	1~2mm砂主 3~4mm砂少含	内ナメハケ 外胴ナメミガキ 底脇ヨコミガキ 底マメツ	No.23・42 マイ土
158	SB27	弥生甕	口(22.8)・高21.5・底7.2	口6/8~胴下・底8/8	1~2mm砂含	内底マメツ 胴ヨコミガキ 外唇縄文刻目 口ヨコミガキ 胴畿内型縷文・波状文 タテミガキ 底脇ヨコミガキ	No.11・13・14・16・17 マイ土
159	SB27	弥生甕	口(17.0)	口~胴2/8	1~3mm砂含 5mm砂少含	全体的にマメツ 内ナメハケ→タテミガキ 外唇刺突ヒダ 胴剥落	No.36・46 マイ土
160	SB27	弥生甕	口(17.4)	口2/8 胴2/8 接合せず	1~2mm砂含	内マメツ 外唇刻目 胴棒状工具縷格子目文(全体的にマメツ)	Pit5 マイ土
161	SB27	弥生甕	口(27.0)・高30.1・底9.2	※口~底6/8	1mm前後砂主 3mm砂少含	内口ヨコミガキ 胴タテミガキ→ヨコミガキ 外口唇縄文 胴上畿内型波状文→タテ垂下縷文 胴下マメツ	No.22・39・45・47・55 マイ土
162	SB27	弥生甕	口(20.0)	口~胴2/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ一部マメツ 外唇波状文 口畿内型波状文 胴タテミガキ	No.53・54
163	SB27	弥生鉢	口(21.2)・高7.9・底7.3	口2/8~底8/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 外ヨコミガキ 赤彩なし	No.14・18・19 マイ土
164	SB27	弥生甕	口(18.2)	口1/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 外唇刻目 胴縷文・波状文	マイ土
165	SB27	弥生甕	口(11.0)	口~胴2/8	1mm前後細砂含	内ヨコミガキ 外唇縄文 胴縷文・中部高地型波状文・垂下縷文	マイ土
166	SB27	弥生高杯	-	脚8/8	1~3mm砂含	内杯部弧状ミガキ 赤彩(スリップ) 外杯部弧状ヨコミガキ 脚タテミガキ 赤彩(スリップ)	No.2
167	SB27	弥生鉢	口(18.0)・高(9.7)・底(7.6)	口~胴2/8	1~3mm砂含	内マメツ 外弧状ヨコミガキ 赤彩なし	No.48
168	SB28	弥生壺	口12.0・高30.8・底8.2	口~底8/8	1~3mm砂含	内口ヨコミガキ 頸ナデ 胴下ナメハケ 一部剥落 外唇縄文 口ナメミガキ 頸縷文・タテミガキ 胴ヨコナメハケ→タテミガキ 焼成後赤彩	No.13
169	SB28	弥生壺	口(13.6)・高32.6・底8.6	口6/8~底8/8	1~3mm砂含	被熱で全体的にマメツ 内口マメツ 頸ナデ 胴下ナメハケ 外唇縄文→刻目 頸縷文・縷文・タテミガキ 胴下タテミガキ→胴中央ヨコミガキ	No.40
170	SB28	弥生壺	口12.4・高34.3・底8.5	口~底8/8	1~2mm砂含	内口ヨコミガキ 頸ハケ→ナデ 胴下ナメハケ 外唇縄文 口ヨコミガキ 頸縷文→沈縷文 タテミガキ 胴タテミガキ	No.5
171	SB28	弥生壺	口6.7	口~胴8/8	1~2mm砂含	内ナデ 胴下ナメハケ 外唇縄文 頸~胴タテミガキ	No.2
172	SB28	弥生壺	口11.0	口~頸8/8	1~3mm砂含	内口マメツ 頸ナデ 外唇縄文 口ミガキ 頸縷文→沈縷文 タテミガキ	No.31 マイ土

第4章 遺物

表2-4 土器観察表

掲載	遺構名	焼物種・器種	法量 cm	遺存状態	胎土	成形・調整	取り上げ・備考
173	SB28	弥生壺	口18.2	口〜頸8/8	1〜2mm砂含	内口縄文→ヨコミガキ 頸ナデ 外唇縄文 口縄文→沈線文 ミガキ 頸縄文→沈線文・垂下沈線→垂下櫛描文・タテミ ガキ 胴縄文・沈線文・焼成後赤彩 口片口状	No.56
174	SB28	弥生壺	口(18.2)	口6/8〜頸8/8	1〜2mm砂含	内口縄文→沈線文・一部ミガキ 外唇突起(4) 縄文 頸 文→沈線文 垂下沈線タテ櫛描波状文・ミガキ	No.32・47・49 マイ土
175	SB28	弥生壺	底(9.0)	胴〜底5/8	1〜3mm砂含	内頸ナデ 胴ナメハケ 胴下マメツ 外頸マメツ 胴下タテミガキ(マメツ)	No.8
176	SB28	弥生壺	底(13.2)	胴下〜底7/8	1〜3mm砂含	内ヨコハケ 外胴下タテミガキ→胴中央ヨコミガキ 底底ヨコミガキ	炉
177	SB28	弥生壺	-	頸8/8	1〜2mm砂主 4〜5mm砂少含	内ナメハケ→ナデ 外口ナデ 頸縄文→沈線文・タテミガキ	No.31 マイ土
178	SB28	弥生壺	-	頸〜胴下4/8	1〜3mm砂含	内頸ナデ 胴ナメハケ 胴下マメツ 外頸タテミガキ 胴 ヨコミガキ 焼成後赤彩	No.62 Pit 4
179	SB28	弥生壺	-	頸7/8〜胴3/8	1〜2mm砂含	内頸ナデ 胴下ナメハケ 外口ナデ 頸縄文→沈線文・ヨ コミガキ 胴下タテミガキ	No.43 マイ土
180	SB28	弥生壺	-	頸〜胴1/8 接 合しない破片多	1〜3mm砂含	内剥落(ハケ?) 外頸棒状工具沈線文・刺突文・波状文 胴沈線重ね方形区画沈線文・刺突文・貼付文 胴下ヨコナ メミガキ	No.4・22・25 マイ土 SB27(154) と同一個体か
181	SB28	弥生壺	-	頸8/8〜頸下3 /8	1〜3mm砂含	内口ヨコミガキ 頸ナデ 胴ヨコミガキ 外口ナメハケ 頸沈線・櫛状文・櫛歯状工具刺突文 タテミガキ 胴ナメハ ケ→沈線 焼成後赤彩	No.58 マイ土
182	SB28	弥生壺	底(6.4)	胴下〜底6/8	1〜3mm砂含	全体的にマメツ 内ナメハケ 外ヨコミガキ	No.7・61
183	SB28	弥生壺	-	胴1/8	1〜3mm砂含	内ヨコナメハケ 外タテ 櫛歯状沈線文・押し文	マイ土
184	SB28	弥生甕	口22.7・高30.8 ・底8.5	口〜底8/8	1〜2mm砂含	内ヨコミガキ 外唇縄文→ユビオサエでヒダ状 胴タテ羽状 文 胴下マメツ(所々ナメ・ヨコミガキ)	No.64・65 マイ土
185	SB28	弥生甕	口18.1・高21.2 ・底7.5	口〜底8/8	1〜3mm砂含	内ヨコミガキ 外唇縄文 胴上ナメハケ→縄文→沈線文の 字重ね 胴下タテミガキ 底底ヨコミガキ 底ヨコミガキ	No.20・24
186	SB28	弥生甕	口(17.2)・高16.0 ・底(6.2)	口4/8〜胴8/ 8 底4/8	1〜3mm砂含	内口マメツ 胴ナメハケ→タテナメミガキ 外唇縄文 胴上畿内型櫛描横線 ヨコ羽状文 胴下マメツ	No.33 マイ土
187	SB28	弥生甕	口(18.0)	口〜胴上2/8	1mm前後細砂含	内胴タテミガキ→口ヨコミガキ 外唇縄文 口ヨコミガキ 胴ナメハケ→ナメミガキ	No.38
188	SB28	弥生甕	口(12.0)	口〜胴上1/8	1mm前後砂主 2〜3mm 砂少含	内胴上ヨコハケ→ナデ 胴下雑なタテミガキ 外唇刻目 胴 幅5mm位の板状工具タテナデ	No.22 マイ土
189	SB28	弥生甕	口(12.0)	口1/8	1〜2mm砂含	内ヨコミガキ 外口ナデ 胴ナメハケ	マイ土
190	SB28	弥生甕	口(26.0)	口1/8	1〜3mm砂含	内ヨコミガキ 外唇縄文 胴タテ羽状文?	マイ土
191	SB28	弥生甕	口(18.0)	口〜胴上1/8	1〜2mm砂含	内口弧状ヨコミガキ 胴ヨコミガキ 外唇縄文 口縄文→沈 線文 胴縄文→格内区画 貼付文垂下波状沈線文 胴下ヨ コハケ→ナデ?	No.29 初庄 瓦 あり。
192	SB28	弥生甕	口12.8	口〜胴上8/8	1mm前後細砂含	内口弧状ヨコミガキ 外唇櫛描横線 口タテ櫛描文・貼付文 胴畿内型波状文	No.50
193	SB28	弥生甕	口23.6	口〜胴上8/8	1〜2mm砂含	内ヨコミガキ 外唇刻目 口弧状ヨコミガキ 胴下マメツ	No.39・41・42 ・43 マイ土
194	SB28	弥生甕	口(12.1)	口1/8	1〜3mm砂含	内マメツ 外口縄文→沈線文・貼付文 穿孔2孔 胴上櫛状文?	マイ土
195	SB28	弥生甕	口(11.8)	口1/8	1〜2mm砂含	内ヨコミガキ 外唇縄文 口縄文→沈線文→貼付文 胴棒状 工具押し文・縄文→沈線文→貼付文	No.4 マイ土 床下
196	SB28	弥生高杯	底(8.8)	底2/8	1mm前後細砂含	胴内ヨコミガキ 脚外ナメミガキ 外面赤彩(スリップ)	マイ土
197	SB28	弥生甕	-	体1/8	1〜2mm砂含	内ヨコミガキ 外格子状櫛描文	No.35・42
198	SB28	弥生鉢	口(16.6)	口1/8	1mm前後細砂含	内外マメツ(ミガキ?) 口穿孔2孔 内外面赤彩(スリップ)	No.42・44
199	SB28	弥生甕	-	胴1/8	1〜2mm砂主 3mm砂少含	内ヨコミガキ 外櫛描波状文・横線文	マイ土
200	SB28	弥生鉢	口(15.4)・高6.6 ・底(6.0)	口〜底2/8	1〜2mm砂含	内弧状ヨコミガキ 外ヨコ・ナメミガキ 内外面赤彩(ス リップ)	No.37・40
201	SB28	弥生鉢	口(16.7)・高 10.3・底7.8	口6/8〜体・底 8/8	1〜3mm砂含	内ヨコミガキ 外唇縄文 口縄文→沈線文 胴ヨコミガキ 内面赤彩不明 外焼成後赤彩	No.20 マイ土
202	SB28	弥生鉢	口(36.4)・底 (9.0)	口1/8 底1/ 8接合せず	1〜3mm砂含	内外マメツ 内マメツ(ヨコミガキ?) 外ヨコミガキ 弧 状ヨコミガキ 内外面赤彩(スリップ)	マイ土
203	SB28	弥生双口壺	口(7.8)(6.6)	口〜胴上7/8	1〜2mmの砂含	内口ヨコハケ→ナデ?赤彩 頸ナメハケ→ナデ 胴ナメハケ →一部ナデ 外口ナデ? 頸縄文→沈線文・タテミガキ 胴半分縄文 →沈線文 半分ナメミガキ 焼成後赤彩 胴下ヨコミガキ	No.52・57 マイ土
204	SB31	弥生壺	口14.7	口〜頸8/8	1〜2mm砂含	内口弧状ヨコミガキ 頸ナデ 胴上ナメハケ 外唇突起 (4) 縄文 口弧状ヨコミガキ 頸沈線 タテミガキ 焼成後 赤彩	炉(炉脇埋設) 内面転用時の 炭化物付着
205	SB31	弥生甕	-	胴4/8	1〜2mm砂主 3mm以上粗砂少含	内ナメハケ 外ナメハケ→ナメミガキ	新炉
206	SB31	弥生甕	口(11.2)	口1/8〜胴上3 /8	1mm前後細砂含	内ヨコミガキ 外唇マメツ(縄文?) 胴畿内型?櫛描横線 文・短斜櫛描文	No.4
207	SB31	弥生甕	-	胴1/8	1〜2mm砂含	内ヨコミガキ 外波状文・垂下櫛描文→貼付文	No.7
208	SB31	弥生甕	-	胴1/8	1mm細砂主 3mm砂少含	内ヨコミガキ 外粗ハケ→粗波状文	壁溝内
209	SB31	弥生壺	底10.0	底8/8	1〜2mm砂主 3mm砂少含	内表面剥落 外マメツ(一部ナメミガキ残) 底ヨコミガキ	炉2・炉3
210	SB31	弥生甕	-	胴8/8	1〜3mm砂含	内胴上ナメハケ→雑ヨコミガキ 胴下ナメミガキ 外胴 上ナメハケ→格子状櫛描文 胴下タテミガキ	旧炉
211	SB101	弥生甕	口20.9	口〜胴上8/8	1〜2mm砂含	内ヨコハケ→ナデ 外口ナデ 胴上ヨコハケ 胴下タテハケ	炉体
212	SB101	弥生甕	底8.0	胴下〜底8/8	1〜2mm砂含	内ミガキ? 外マメツ(ナメハケ?)	No.1 マイ土B/C区
213	SB101	弥生甕	-	胴1/8 他未接片あり	1〜2mm砂含	内ミガキ? 外波状文	No.2 マイ土C・D区
214	SB07	弥生甕	口(24.0)	口4/8 胴8/8	1mm前後細砂含	内ナメハケ 外ナメハケ畿内型波状文・短斜櫛描文	炉1・炉2・炉3(新 炉) 内面炭化物付着
215	SB07	弥生甕	-	胴7/8他に未接片あり	1〜2mm砂含	内外マメツ	炉2・炉3 内面炭化物付着
216	SB07	弥生甕	底7.8	底8/8	細砂含	内タテハケ→ナデ? 外マメツ	No.10
217	SB07	弥生甕	-	胴3/8	細砂含	内マメツ 外ナメハケ畿内型波状文・短斜櫛描文	炉4(旧炉) 内面炭化物付着
218	SB07	弥生壺	底12.6	底8/8 他に未 接片2/8あり	1〜3mm砂含	内剥落 外底ナデ・脇タテハケ	No.3
219	SB09	弥生甕	口(22.2)	口〜胴2/8	1mm前後細砂含	内マメツ 外ナメハケ→畿内型波状文?	炉 内外面炭化物付着
220	SB09	弥生甕	口(19.0)・高22.0・底7.0	口6/8 胴〜底8/8	1〜2mm砂含	内ヨコハケ→タテナデ 外タテハケ→ナデ 外ユビオサエ	Pit 6
221	SB09	弥生甕	-	胴1/8	1〜3mm砂含	内ミガキ 外ヨコミガキ→沈線文	No.10 小片で仔細不明
222	SB18	弥生甕	口(15.0)	口〜胴上1/8	1〜3mm砂含	内外マメツ 外波状文	マイ土
223	SB18	弥生甕	-	胴8/8	1〜2mm砂含	内外マメツ 外畿内型波状文	炉体土器
224	SB14	弥生甕	-	胴1/8	1〜2mm砂含	内ナメハケ 外波状文	床下
225	SB14	弥生甕	-	胴1/8	1〜2mm砂含	内マメツ 外タテハケ→波状文	床下
226	SB14	弥生台付壺	底(7.0)	台1/8	1〜2mm砂含	内外ナデ	床下
227	SB19	弥生壺	-	頸〜胴4/8 接 合しない同一個体片多	1〜3mm砂含	内外マメツ 内マメツで不明 外波状文・沈線貼付ボタン文	No.21・22・42 ・マイ土
228	SB19	弥生壺	-	頸6/8 胴8/8	1〜3mm砂含	内外マメツ 内ナメハケ 外頸波状文・櫛状文・貼付ボ タン文 胴タテ・ナメヨコハケ	No.36・37・38 ・39・40・41
229	SB19	弥生壺	口(17.0)	口1/8 胴2/8 口と胴接合せず	1〜2mm砂含	内口ナデ 胴マメツ 外口波状文・貼付ボタン文 胴ナメ ハケ	No.24
230	SB19	弥生壺	底(9.6)	底3/8	1〜2mm砂含	内外マメツ 外底ミガキ?	No.20
231	SB19	弥生甕	口(22.8)	口2/8	1〜3mm砂含	内ヨコハケ→ナデ? 外波状文	No.13・14・マイ土

表2-5 土器観察表

掲載	遺構名	焼物種・器種	法尻 cm	遺存状態	胎土	成形・調整	取り上げ・備考
232	SB19	弥生甕	口(20.8)	口~胴上半2/8	1~2mm砂含	内ヨコハケ→ナデ? 外ナメハケ→短斜行襷文・襷文 口唇歯状工具刺突	No.8・29・マイ土
233	SB19	弥生甕	口(17.0)	口~胴2/8	1mm前後細砂主 3mm砂少含	内ヨコハケ→ナデ? 外ナデ→波状文	No.5 マイ土
234	SB19	弥生甕	-	胴2/8	1~3mm砂含	内ヨコハケ→ナデ・ミガキ? 外ナメハケ?	No.23・43
235	SB19	弥生甕	口(22.4)	口1/8 胴2/8 縁部	1~2mm砂含	内ナデ? 外ナデ→波状文	No.9・10
236	SB19	弥生甕	口(15.8)	口~胴上2/8	1~2mm砂含	内ナメハケ→ナデ? 外内型波状文?・口唇歯状工具刺突 内ユビオサエ	No.43
237	SB19	弥生甕	-	胴3/8	1mm砂主 2mm砂少含	内ナメハケ→ナデ?ミガキ? 外ナメハケ?	No.9 マイ土
238	SB19	弥生甕	口(33.8)	口1/8 胴5/8	1~3mm砂含	内ナメハケ 外マメツ 畿内型波状文	No.1・2・6 マイ土
239	SB20	弥生甕	口(15.4)	口2/8	1~3mm砂含	内ナデ 外マメツ・波状文	マイ土
240	SB20	弥生甕	口(15.6)・高23.2・底6.5	口6/8 胴以下8/8	1~3mm砂含	内ハケ→ナデ 外口唇部細文? 胴上縄文	No.9 マイ土
241	SB20	弥生甕	口(20.0)	口~胴上4/8	1~3mm砂含	内マメツ 外口ナデ 口下ナメハケ 胴タテハケ	No.10 マイ土
242	SB20	弥生甕	-	胴2/8	1~2mm砂含	内マメツ(ナデ?) 外ナデ?短斜襷描文	No.12
243	SB20	弥生甕	底(7.6)	胴1/8・底8/8	1~2mm砂含	内ナメハケ 外マメツ	No.4・マイ土
244	SB20	弥生甕	口(20.0)	口1/8	1~3mm砂含	内ナデ? 外短斜襷描文・波状文	No.1・マイ土
245	SB20	弥生甕	口(22.0)	口1/8	1mm前後砂含	内ナデ 外ナデ?波状文	マイ土
246	SB23	弥生甕	胴4/8・底10.5	胴3/8 未接合底4/8	1~5mm砂含	内剥落 外胴中央ナメハケ 底脇タテハケ	炉体脇 炉体外側
247	SB23	弥生甕	口(16.0)	口~胴6/8	1~2mm砂含	内ヨコハケ→ミガキ? 外唇縄文? 胴上縄文 胴下ミガキ?	No.4 マイ土
248	SB23	弥生甕	-	胴4/8	1~2mm砂含	内ナメハケ(胴下マメツ) 外ナメ・タテハケ→畿内型波状文	炉体・マイ土
249	SB23	弥生甕	-	胴1/8	1~3mm砂含	内マメツ(ミガキ?) 外タテハケ→波状文	No.2
250	SB25	弥生甕	-	胴上8/8	1~2mm砂含	内ミガキ? 外胴上ナメハケ→畿内型波状文 胴下ナデ?	炉体
251	SB25	弥生甕	-	胴2/8	1mm前後細砂含	内胴上ナデ? 胴下ナメハケ 外胴上(タテハケ)短斜襷描文	No.11・12 マイ土
252	SB25	弥生甕	口(16.8)	口1/8	1~2mm砂含	内マメツ 外波状文	マイ土
253	SB25	弥生甕	底(6.0)	底8/8	1~3mm砂含	内ナデ 外ナメハケ 底脇ヨコハケ 底ナデ	マイ土
254	SB25	弥生甕	-	胴4/8	1mm前後細砂含	内胴上ナデ 胴下ヨコハケ 外胴上タテハケ 畿内型波状文	炉体
255	SB34	弥生甕	口(13.0)	口~頸2/8 未接合片多	1~3mm砂含(256類似胎土)	内ナデ 外マメツ→口ナデ? 頸波状文・短斜襷描文? 貼付ボタ文	No.28・55・58マイ土
256	SB34	弥生甕	底8.6	頸~底8/8	1~3mm砂含(255類似胎土)	内剥落 外マメツ 胴上波状文→貼付文	No.7・2 7・8
257	SB34	弥生甕	-	胴2/8	1~3mm砂含 5mm砂少含	内胴ナメハケ 外胴上ナデ? 胴下タテハケ	No.9・22・39・51 Pit マイ土
258	SB34	弥生甕	口(25.0)	口4/8~胴1/8	1~2mm砂含	内口ナデ 胴ヨコハケ 外マメツ 短斜襷描文 波状文	No.12・25・26・27・59・62 Pit 周辺 マイ土
259	SB34	弥生甕	口(18.0)	口4/8	1~2mm砂含	内マメツ 外マメツ 波状文	No.3
260	SB34	弥生甕	口(20.4)	口5/8~胴4/8	1~2mm砂含	内口ナデ・胴ナメハケ→雑なヨコミガキ? 外マメツ(口ナデ? 胴タテハケ→胴中ナデ?)	No.2 Pit 4 Pit 4 周辺
261	SB34	弥生甕	口(20.0)	口3/8	1~2mm砂含	内ナデ? 外ナデ? 畿内型波状文?	No.3
262	SB34	弥生甕付甕	底8.0	底8/8~脚3/8	1mm以下細砂含	内ナメハケ 脚内ヨコハケ→ナデ? 外マメツ	No.5-1
263	SB34	弥生甕	口(24.0)	口2/8~胴5/8	1mm前後砂含	内口ナデ・胴ヨコハケ→ミガキ? 外唇縄文 胴短斜襷描文 他マメツ	No.7・7-8・炉体 炉体内 炉体中 Pit 4 周辺
264	SB34	弥生甕	口(27.0)	口~胴上2/8	1~3mm砂含	内マメツ(ヨコハケ→ナデ?) 外短斜襷描文 波状文	No.8
265	SB34	弥生甕	底8.9	底8/8	1~3mm砂含	内マメツ 外底脇凝結土組貼付(3)	No.2
266	SB35上層	弥生甕	口(22.3)	口1/8	1mm砂含	内外面剥落 外口屈曲部刻目	上層トレンチ
267	SB35上層	弥生甕	口(33.8)	口1/8口唇欠損	1~3mm砂含	内剥落 外唇刻目 口ナデ→波状文	上層トレンチ
268	SB35上層	弥生甕	-	胴1/8	1mm前後細砂含	内マメツ 外波状文	上層 No.27
269	SB35上層	弥生甕	-	頸3/8	1~3mm砂含	内マメツ 外頸波状文・波状文	上層 No.20
270	SB35上層	弥生甕	口(20.8)	口1/8 未接合同一 個体片あり	1mm前後細砂含	内マメツ 外口タテハケ?→波状文	上層 No.13
271	SB35上層	弥生甕	口(24.0)	口~胴2/8	1~2mm砂含	内マメツ 外マメツ(波状文2帯以上)	上層 No.5 マイ土(北西部)
272	SB35下層	弥生甕	口(17.2)	口1/8	1~2mm砂主 3~5mm砂少含	内ヨコナデ 外口波状文 口マメツ(ミガキ?)	下層マイ土北西部
273	SB35下層	弥生甕	-	胴3/8	1~2mm砂含	内マメツ(ヨコハケ) 外マメツ(頸波状文 胴ナメハケ?)	SB35下層 No.7・10 マイ土北西部
274	SB35下層	弥生甕	口(12.8)	口~胴上3/8	1~2mm砂含	内口ナデ? 胴ナメハケ 外ナデ?	Pit 9 下層マイ土 南西 上層南西
275	SB35下層	弥生甕	口(20.2)・底7.2	口2/8~胴下4/8 底8/8	1~2mm砂含	内ヨコハケ→ミガキ? 外口波状文 胴波状文・襷文 胴下ナメハケ→不明 底脇凝結土組貼付	下層 No.2・11 マイ土北西部・中央 西 トレンチ
276	SB35下層	弥生甕	口(36.0)	口1/8~頸8/8	1~3mm砂含	内ヨコハケ→ナデ? 外唇波状文 口短斜襷描文 胴上ナメハケ	北層 下層 No.6 マイ土北西部
277	SB35下層	弥生甕	-	胴2/8	1~2mm砂主 3mm砂少含	内マメツ(ナメハケ) 外マメツ(ナメハケ)	南層 No.1~4
278	SB37	弥生甕	口(23.4)	口~胴上6/8	1mm砂主、2mm砂少含	内ナメハケ→雑ミガキ 外口上ナデ 口~胴上ナメハケ→畿内型波状文・短斜襷描文	炉体内外 炉1・2・3・5
279	SB30・39	弥生甕	口(19.2)	口1/8	1~3mm砂含	内ナデ? 外唇縄文 口畿内型波状文 口ナメハケ→波状文	マイ土
280	SB30・39	弥生甕	口(15.4)	口~胴2/8	1~2mm砂含	内口~胴上マメツ 胴タテミガキ 外マメツ 短斜襷描文・襷文	マイ土
281	SB41	弥生甕	-	頸~胴上8/8	1~2mm砂主 3mm以上砂少含	内マメツ 外沈線による三角区画→短斜襷描文	炉体
282	SB41	弥生甕	口(22.6)	口1/8 未接合胴2/8	1~3mm砂含	内マメツ 外短斜襷描文・波状文	炉
283	SB41	弥生甕付甕	底10.1	脚5/8~脚8/8	1~2mm砂含	内外マメツ	No.1
284	SB01	土師器杯	口(14.0)・高4.9・底-	口~体2/8	粒子細砂精胎	内ナメミガキ 外マメツ	P.2・床下・埋土
285	SB01	土師器杯	口(14.0)・高3.8・底-	口~底2/8	1~3mm砂含	内ヨコハケ→ナデ 外ナメハケ→ナデ	床下
286	SB01	土師器杯	口(12.0)	口1/8	細砂含	内ナデ 外ハケ→ナデ	床下
287	SB01	土師器杯	口(14.6)	口1/8	細砂含	内ヨコハケ 外ハケ→ナデ	床下
288	SB01	土師器杯	口(19.6)	口1/8	1~3mm砂含	内ナデ?	トレンチ・床下
289	SB01	土師器杯	口(13.8)	口1/8	1~3mm砂含	内外マメツ	床下
290	SB01	土師器杯	口(14.0)	口1/8	粒子細かい精胎	内マメツ 外下ケズリ 口ナデ→粗ミガキ。	床下
291	SB01	土師器杯	口(12.6)	口1/8	1mm前後細砂含	内タテミガキ 外マメツ	トレンチ
292	SB01	土師器杯	口(12.8)	口2/8	粒子細かい精胎	マメツ	床下
293	SB01	土師器高杯	口(15.4)	口5/8	1~3mm砂含	内外ナデ	P.5 (SB01脇)
294	SB01	土師器高杯	口(17.0)	口8/8	細砂含	内雑タテミガキ 外粗ナメ・ヨコミガキ	P.3・床下
295	SB01	土師器高杯	口(16.0)	口8/8	1~3mm砂含	内外ナデ	Pit13
296	SB01	土師器高杯	口(16.4)	口底5/8-口2/8	1~2mm砂含	内ハケ→ナデ? 外ナデ?	床下・埋土
297	SB01	土師器高杯	口(16.0)	口3/8全体マメツ	1~3mm砂含	内外表面剥落 外底ミガキ	トレンチ・床下・埋土
298	SB01	土師器高杯	口(18.0)	口3/8	粒子細かい精胎	内タテミガキ 外放射・タテミガキ	床下・埋土
299	SB01	土師器高杯	底(13.2)	脚~底3/8	粗砂含	内ハラナデ・底ナデ? 外マメツ(ミガキ?)	床下・埋土・トレンチ
300	SB01	土師器壺	口(17.4)	口2/8	1~3mm砂含	内外マメツ	P.6
301	SB01	土師器壺	口(15.0)	口2/8	1~2mm砂含	内外 ナデ	床下
302	SB01	土師器壺	口(15.0)	口1/8	1~2mm砂含	外タテハケ?	床下
303	SB01	土師器小壺	口(9.0)	口1/8 未接合片あり	砂多含	内外マメツ	床下・埋土
304	SB01	土師器小壺	口(10.0)	口1/8	細砂含	内外タテミガキ	床下

第4章 遺物

表2-6 土器観察表

編號	遺構名	焼物種・器種	法量 cm	遺存状態	胎土	成形・調整	取り上げ・備考
305	SB01	土師器甕	口(18.0)	口3/8	1~3mm砂含	内外ナデ?	床下・埋土
306	SB01	土師器甕	底5.4	胴~底8/8	1~3mm砂含	内ナデ一部ハケ 外ナデ	No.1
307	SB01	土師器甕	口11.6	口~胴8/8	1~2mm砂含	内ヨコハケ・頸ケズリ 外上ナデ・下マメツ	P4
308	SB01	土師器甕	口(16.4)	口1/8	1~3mm砂含	内外ナデ	トレンチ
309	SB01	土師器甕	口(18.0)	口2/8	1~3mm砂含	内外ナデ?	床下・トレンチ
310	SB01	土師器甕	口(15.0)	口1/8	粗砂含	内ハケ→ナデ 外(ケズリ?)→ナデ	埋土
311	SB01	土師器甕	底(7.0)	胴~底2/8	1~3mm砂含	内ヨコハケ 外マメツ(ナデ?)	床下
312	SB01	土師器甕	口(14.0)	口2/8	1~3mm砂含	マメツ(ナデ)?	壁溝内
313	SB01	土師器甕	口(12.0)	口2/8	1~2mm砂含	内外マメツ	床下
314	SB01	須恵器甕	口(22.6)	口1/8	緻密 黒・白粒子含	外ロクロナデ外波状文	埋土
315	SB02	土師器高杯	-	口1/8	砂多含	内ミガキ 外マメツ	埋土
316	SB02	土師器高杯	-	脚8/8	1~3mm砂含	内剥落 外タテミガキ	P1
317	SB04	土師器壺	口(17.0)	口1/8	1~2mm砂含	内外ナデ	マイ土
318	SB04	土師器杯	口(15.4)	口1/8 未接合底2/8	粒子細かい精胎	内外マメツ(ミガキ?) 底ヘラ記号「×」	マイ土
319	SB04	土師器杯	口(12.0)	口1/8	粒子細かい緻密	内タテミガキ 口ヨコミガキ 外ハケ→弱ナデ	床下
320	SB04	土師器杯	口(13.2)	口1/8	細砂含	内タテミガキ 外ミガキ? 仔細不明	マイ土
321	SB04	土師器壺	口(19.0)	口1/8	1~2mm砂含	内外ナデ	床下10
322	SB04	土師器杯	口(14.2)	口1/8	細砂粒含	内ヨコハケ 外不明	マイ土
323	SB04	土師器高杯	口(15.6)	口1/8	細砂粒含	内マメツ 外ミガキ?	マイ土
324	SB04	土師器小型壺	-	胴3/8 底1/8	細砂含	内ナデ? 外ミガキ	床下No.8・マイ土・No.3 同-カ 内面炭化物付着
325	SB04	土師器小甕	口10.2・高9.8	口~底8/8	1~2mm砂含	外体→口縁ナデ 外底ケズリ丸底	NO.6
326	SB04	土師器小甕	-	底8/8	1~2mm砂含	内ナデ 外タテハケ底ケズリ丸底	マイ土
327	SB04	土師器甕	内(14.0)	口1/8	砂多含	内ヨコハケ→ナデ? 外マメツ 口縁端内側面取	No.2
328	SB04	土師器甕	口(15.4)	口~胴2/8	1~2mm砂含	内ナメハケ口ナデ 外ケズリ口ナデ	床下
329	SB04	土師器甕	-	胴3/8	1~2mm砂含	内ナメハケ 外ナメハケ 口ナデ	床下No.2・3・5・7
330	SB04	土師器甕	口16.2	口~胴上8/8	1~3mm砂含	内ナデ 外ケズリ	No.7 33と同一個体か?
331	SB04	土師器甕	-	底8/8	1~3mm砂含	内マメツ 外ケズリ丸底	No.1 330と同一個体か
332	SB08	土師器杯	口(12.4)・高5.7	口7/8底8/8	1mm細砂主、2~3mm砂少含	内一部放射・一部弧状ヨコミガキ 外剥落(ミガキ?)	床下・マイ土
333	SB08	土師器杯	口(13.4)・高4.7	口~底3/8	粒子細かい+精胎	内ナデ→暗文風のタテミガキ 外ナデ?・丸底一部ヨコミガキ	床下
334	SB08	土師器杯	口(13.4)・高4.8	口~底4/8	細砂含 比較的精胎	内放射タテミガキ・口縁ヨコミガキ 外マメツ(部分的に弧状ヨコミガキ 内面黒色処理)	NO.6
335	SB08	土師器杯	口(12.8)・高5.4・底(6.0)	口1/8底4/8	1~2mm砂含	内外ナデ 粗製	No.4 床下
336	SB08	土師器杯	口(18.0)	口1/8	1mm前後細砂含	内外マメツ	床下
337	SB08	土師器杯	口9.0・高5.1・底4.6	口~底8/8	1~2mm砂含	内ヨコ・ナメハケ→ナデ 外ナデ	No.41
338	SB08	土師器杯	口(12.2)・高6.2 底5.4	口~底3/8	1~3mm砂含	内ナメハケ・ナデ 外下ユビ匠痕・上ナデ・底ナデ 粗製	床下・Pit4
339	SB08	土師器高杯	口(16.4)	口2/8	1~2mm砂含	内雑タテミガキ 外雑タテミガキ	No.38
340	SB08	土師器高杯	口(18.8)	口2/8	粒子細かい精胎	内雑タテミガキ 外マメツ	床下
341	SB08	土師器高杯	-	脚~底8/8	1~3mm砂含	内脚ヘラナデ・底ナデ 外脚~底ミガキ	No.25
342	SB08	土師器壺	口16.1	口~胴上8/8	1~3mm砂含	内胴ナデ・口雑ミガキ ユビオサエ 外胴ミガキ・口不明	No.38・39・40
343	SB08	土師器壺	口(16.9)	口~胴上3/8	1~3mm砂含	内ナデ(ナメハケ残) 外胴ミガキ	No.1
344	SB08	土師器小壺	口(8.4)・高12.8	口7/8胴~底8/8	1mm前後細砂含	内マメツ 外胴ナメミガキ中位ヨコミガキ 丸底	Pit2・Pit15・床下
345	SB08	土師器小壺	口(9.7)・高13.5	口7/8胴~底8/8	粒子細かい精胎	内口タテミガキ・胴ナメハケ・底マメツ 外口タテミガキ・胴ナメミガキ・底丸底調整不明	No.19
346	SB08	土師器小壺	-	胴5/8	粒子細かい精胎	内胴ナデ 外胴タテミガキ・底ヨコミガキ	No.5・10・11・12・13・58
347	SB08	土師器壺	口15.6	口~胴上8/8	1~2mm砂含	内外ナデ	No.38
348	SB08	土師器小壺	-	胴5/8底8/8	細砂含み 精胎?	内胴ナメハケ→雑ナデ 外底ヨコミガキ・胴マメツ 丸底	床下
349	SB08	土師器甕	口10.9	口~胴上8/8	1~2mm砂含	内胴ナメハケ・口ナデ 外ナデ? 口端内側折返し	No.7・70・バト・床下
350	SB08	土師器壺?	口16.4	口~胴上8/8	1~3mm砂含	内外マメツ	No.4・9・16・床下
351	SB08	土師器甕	口(14.9)・高17.8・底6.2	口~胴上2/8 胴下底8/8	1~2mm砂含	内ナデ・胴ヨコミガキ・雑タテミガキ 外口ナデ・胴タテミガキ・底ケズリ→ヨコミガキ	No.44
352	SB08	土師器甕	口13.0	口~胴上2/8 未接合底多	1~2mm砂含	内脚ケズリに近いハケ・口ナデ 外口ナデ・胴マメツ	No.18・床下・トレンチ
353	SB08	須恵器甕	口(29.6)	口1/8	緻密 黒・白粒子含	ロクロナデ 波状文	Pit6
354	SB08	土師器甕	底6.5	胴~底8/8	1~3mm砂含	内マメツ 外胴タテミガキ(胴下半マメツ→ハケ→ナデ?)	No.38
355	SB10	土師器杯	口(11.8)	口1/8	細砂含 精胎	内タテミガキ 口唇ヨコミガキ 外マメツ	マイ土
356	SB10	土師器杯	口(7.0)・高(6.4)・底4.8	口1/8 底8/8	1~3mm砂含	内ハケ→ナデ 外ハケ→ナデ底ケズリ→ナデ	カマド内・NO.8
357	SB10	土師器杯?	口(14.0)	口2/8	1~2mm砂含	外マメツ 内タテ・ヨコミガキ 外雑タテミガキ	マイ土
358	SB10	土師器高杯	口(15.0)	口2/8	細砂含	内底ヨコミガキ 体タテミガキ 外ナメミガキ口マメツ	カマド内・No.11・13
359	SB10	土師器杯?	口(14.4)	口3/8	細砂含 精胎	外剥落 内雑タテミガキ	No.10
360	SB10	土師器甕	口(13.0)	口1/8	1~2mm砂含	内ナデ 外胴タテハケ 口ナデ	マイ土
361	SB10	土師器高杯	口(16.8)	口1/8	1~2mm砂含	内タテミガキ 外マメツ	No.5
362	SB10	土師器高杯	口(21.0)	口1/8	1~2mm砂主 5mm砂含	内外マメツ	No.4
363	SB10	土師器甕	口(14.4)	口1/8	1~2mm砂含	内外マメツ	Pit1
364	SB10	土師器壺	口14.4	口8/8	1~3mm砂含	内外マメツ	No.7
365	SB10	土師器甕	口(17.0)	口2/8	砂多含	内ナデ 外胴タテハケ 口ナデ	Pit2・5
366	SB10	土師器壺?	底6.4	底8/8	1~3mm砂主 3mm砂少含	内ナデ 外脚ケズリに近いタテ・ナメハケ→ナデ	No.12・13
367	SB13	土師器杯	口(14.4) 高3.4	口2/8	細砂少含 精胎	内タテミガキ 外ヨコミガキ 内面黒色処理	(SB17-8・23)
368	SB13	土師器杯	口(12.6) 高4.4	口2/8	1~2mm砂含	内マメツ 外雑ミガキ	床下・Pit5・Pit1
369	SB13	土師器杯	口(13.8)	口3/8・底2/8	精胎 砂目立たず	内タテミガキ 外ナメ・上雑ヨコミガキ	Pit5
370	SB13	土師器高杯	口(19.6)	口1/8	1~2mm砂含	内ナメミガキ 外ナメミガキ	床下・Pit1
371	SB13	土師器高杯	口(15.0)	口2/8	1~3mm砂含	内外マメツ	(SB17-No.13)
372	SB13	土師器高杯	底(13.0)	脚~底2/8	1~3mm砂含	脚内ケズリ 外マメツ	Pit5 (SB17)
373	SB13	土師器高杯	底(13.8)	脚8/8底2/8	1~2mm砂含	内脚紋り痕・ヘラケズリ 外マメツ(タテミガキ?)	Pit2・Pit2-No.1
374	SB13	土師器高杯	底(14.6)	脚~底1/8	1~3mm砂含	内脚ケズリ・底ナデ 外脚タテミガキ・ナメミガキ	Pit2・Pit2-No.2
375	SB13	土師器壺?	口(19.0)	口1/8	1~3mm砂含	内ナデ→ミガキ 外ナデ→タテミガキ?	Pit5
376	SB13	土師器壺	口(13.0)	口3/8	1mm以下細砂含 精胎	内外マメツ	Pit5
377	SB13	土師器高杯	口(14.0)	口2/8	1~2mm砂含	内タテミガキ 外タテミガキ	Pit5
378	SB13	土師器小壺	-	体1/8~底8/8	細砂主。3mm砂少含	内マメツ 外体ヨコミガキ? 底ケズリ→雑ミガキ	Pit2・床下
379	SB13	土師器甕	口(11.0)	口2/8	細砂含	内ヨコミガキ 外マメツ 内面黒色処理	Pit1・Pit2
380	SB13	土師器甕	口(11.7)	口~胴1/8	細砂含	内ナデ 外タテハケ	Pit1
381	SB13	土師器甕?	-	体下半2/8	1~3mm砂含	内ヨコハケ 外ケズリ→ナデ	Pit1・Pit2
382	SB13	土師器甕	底(11.0)	底1/8	1~2mm砂含	内ナデ・底孔ケズリ 外ナデ・底脇ケズリ	Pit15
383	SB13	土師器甕	口(18.0)	口~胴1/8	1~2mm砂含	内胴ナメケズリ・口ナデ 外マメツ	Pit2・Pit3
384	SB13	土師器甕	口(15.8)	口1/8~胴3/8	細砂含	内ナメハケ→下半ヨコハケ 外ナデ	Pit1
385	SB33	土師器壺	口(13.2)	口1/8	1~3mm砂含	内外ナデ?	Pit1
386	SB33	土師器壺	口(17.0)	口6/8	1~2mm砂含	内外ナデ?	No.5・6
387	SB33	土師器壺	-	頸~胴上1/8	1~2mm砂含	内外ナデ?	No.5 カマド

表2-7 土器観察表

掲載	遺構名	焼物種・器種	法量 cm	遺存状態	胎土	成形・調整	取り上げ・備考
388	SB36	土師器杯	□(13.0)	□1/8	細砂含 やや精胎	内外マメツ	壁溝内
389	SB36	土師器杯	□(12.0)	□1/8	1~2mm砂含 やや精胎	内ナデ?	Pit4
390	SB36	須恵器はそう	□(10.2)	□1/8	黒色粒・白色粒多含	クロコナデ	床下
391	SB36	土師器杯	□(16.0)	□1/8	1~2mm砂含 精胎	内外マメツ	床下
392	SB36	土師器杯	□(15.2)	□1/8	1mm以下細砂含 精胎	内ナデ 外マメツ	Pit11
393	SB36	土師器壺	□(15.0)	□1/8	1~2mm砂含	内外ナデ	Pit2
394	SB36	土師器小壺	□(11.2)	□1/8~胴2/8	1~2mm砂含	内口ミガキ? 胴上ナデ 外口タテミガキ? 胴口コミガキ	Pit4・5
395	SB36	土師器甕	□(19.4)	□1/8	1mm前後砂含	内ヨコハケ→ナデ 外ナデ	Pit2
396	SB36	須恵器甕	□(22.0)	□1/8	灰白色 細白色粒含	クロコナデ 外波状文	SB36検出面
397	SB36	土師器甕	□10.9・高12.4・底6.3	□4/8~底8/8	1~2mm砂含	内ナデ 外口~胴ナデ 底ケズリ 粗製	Pit11・12・13
398	ST01(SK18)	土師器高杯	□(16.8)	□2/8	細砂含	内雑タテミガキ 外マメツ	マイ土
399	ST01(SK19)	須恵器杯蓋	□(12.4)・高3.9	□~底2/8	緻密 白・黒色粒含	クロコナデ 外底回転ヘラケズリ	マイ土
400	ST01(SK21)	須恵器杯身	-	体2/8	緻密白色粒小含	クロコナデ 外底回転ヘラケズリ	マイ土
401	ST03(SK60)	土師器杯	□(14.0)	□1/8	1mm前後細砂含	内雑タテミガキ 外マメツ	マイ土
402	ST03(SK62)	弥生甕	□(17.4)	□1/8	1~3mm砂含	内唇ユビオサエ ロマメツ(ミガキ?) 外唇刻目 ロコナメハケ→ナデ?	マイ土
403	ST12	土師器杯	□13.0・高6.1	□~底8/8	1~2mm砂含	内タテミガキ 外底ケズリ→ヨコミガキ	ST12 Pit2
404	ST12	土師器杯	□9.8・高7.9・底4.5	□4/8~底8/8	1~2mm砂主, 3~5mm砂少含	内雑ヨコナデ 外雑ヨコナデ	ST12Pit1 No.3
405	ST12	土師器高杯	□(15.2)	□2/8	1~3mm砂含	内タテミガキ 外タテミガキ	ST12Pit1A
406	ST12	土師器高杯	□(20.8)	□1/8	1~2mm砂含	内外ナデ	ST12Pit5
407	ST12	土師器甕	□13.8・高12.8・底4.8	□~底4/8	1~3mm砂含	内ナデ 外胴下半ケズリに近いハケ・胴上ナメハケ→ナデ	ST12 Pit2
408	ST12	土師器甕	底7.8	胴6/8~底8/8	1~3mm砂含	内ナメハケ 外ナメハケ	ST12 Pit2 No.1-2
409	ST06(SK114)	土師器甕	□(13.0)	□1/8	1~2mm砂含	内胴ナメハケ ロコナデ 外表面剥落	(旧SB16Pit1)整理時SK114変更
410	SB01 Pit13(SK04)	土師器高杯	□(15.0)	□3/8	1mm以下細砂含	内ナメハケ→ナデ 外ナデ?	マイ土
411	SK05	弥生高杯?	底(13.0)	脚1/8	細かい白色粒含	内外2次焼成でマメツ 一部歪み 脚部穿孔	マイ土
412	ST10(SK11)	須恵器杯	底(7.2)	底2/8	1mm以下細白色粒含み	クロコナデ 外底回転系切り	マイ土
413	SK06	土師器杯	□(11.3)・高4.8	□~底2/8	1mm前後砂含	内タテミガキ→黒色処理 外口マメツ 体ヨコミガキ	No.3
414	SK06	土師器杯	□(14.1)	□1/8	1~3mm砂含	内ヨコ・ナメハケ 外タテハケ→ナデ	マイ土
415	SK06	土師器杯	□(16.0)	□1/8	1mm砂含	内タテミガキ 外ナデ→雑ヨコミガキ	No.1・25
416	SK06	土師器小壺	-	胴上2/8 未接合底8/8	細砂含	内胴ナメハケ 胴上ナデユビオサエ 外胴ナメミガキ 底マメツ	No.14・24 マイ土
417	SK06	土師器壺	底(5.0)	胴4/8~底6/8	1~3mm砂含	内ナデ 外胴下ナメハケ 胴口コハケ 胴上ナメハケ 底ケズリ	No.5・8・15・17・19・20 マイ土
418	SK06	土師器甕	□(16.8)	□6/8~胴3/8	1~4mm砂含	内口ナデ 胴ナメハケ→所々タテハケ→ナデ? 外口ナデ 胴ナメハケ→ナデ?	No.15・25
419	SK06	土師器甕	-	胴上8/8	1~3mm砂含	内胴下ナデ? 胴上ナメミガキ 外胴ナデ?	No.4・6・9・12・24・25・26 マイ土
420	SK06	土師器甕	□(14.0)・高25.0・底5.0	□2/8~胴3/8~底8/8	1~3mm砂含	内口ナデ 胴上ナメハケ 胴下マメツ 外口ナデ 胴タテハケ→胴上ナメハケ 外底ケズリ	No.17・18・19・20・27・29・30 マイ土
421	SK06	土師器壺	底8.2	胴下4/8~底8/8	1~3mm砂含	内ナメ・ヨコハケ 外全体にマメツ 底脇ヨコハケ 胴下タテハケ 胴上ナメハケ?	No.15・20・21 マイ土
422	SK86	弥生壺	□12.0	□8/8~頸1/8	1~2mm砂主 3mm砂少含	内口弧状ヨコミガキ 頸ナデ 外口~頸タテミガキ 頸下マメツ	No.2~4
423	SK153	弥生壺	底5.8	底8/8 中央欠損	1~2mm砂含	内ヨコハケ 外マメツ(ナデ?)	マイ土
424	SK75	土師器高杯	-	杯8/8~脚7/8	1~3mm砂含	脚内ヨコヘラケズリ 他マメツ	No.1・2
425	SK75	土師器壺	□(17.4)	□1/8	1~3mm砂含	内外ナデ	マイ土
426	SK253	土師器杯	□(13.8)	□1/8	1~2mm砂含	内タテミガキ 外ナメミガキ	マイ土
427	SK256	弥生壺	底(8.6)	底5/8	1mm前後砂含	内マメツ 外マメツ 一部ナメミガキ 外底ナデ	No.1
428	SK165	土師器甕	-	※胴8/8	1~2mm砂含	内マメツ 外胴下タテハケ→胴上ナメハケ	マイ土
429	厩溝跡 SD53	弥生甕	□(38.4)	□1/8	1~3mm砂含	内口ナデ 胴ナメハケ 外唇描工具押圧? ロコナメハケ→波状文	マイ土
430	窪地	弥生甕	-	胴1/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 外唇描横線→波状文	Ⅲ⑥区窪地
431	窪地	弥生甕	-	胴1/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 外タテ羽状文	Ⅲ⑥区窪地
432	SD1	瀬戸美濃連房すり鉢	□(26.4)	□1/8以下	灰白色密 1~3mm長石粒含	クロコナデ 内卸目 錆釉	マイ土
433	SD02	土師器杯	□(15.2)	□3/8	精製胎土	内マメツ 外マメツ(所々ヨコミガキ残り)	マイ土
434	SD02	土師器杯	□(17.9)・高7.5	□~底3/8	1~3mm砂含	内タテミガキ内底剥落 外体ナメミガキ 口ヨコミガキ	マイ土
435	SD66	瀬戸美濃白磁碗	□(11.0)	□1/8	白色緻密 光沢あり	クロコナデ	マイ土
436	SQ33	縄文深鉢	□(35.6)	□1/8 胴1/8	1~2mm内礫きみの砂含	内ナデ 外半裁竹管文	No.2・3 下鳥式平行
437	SQ32	縄文深鉢	□(60.0)	□2/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 唇下沈線文 外唇下沈線文 マメツ	SQ32
438	SQ36	弥生甕	□(18.0)	□~胴上2/8	1~3mm砂含	内ヨコミガキ 外縄文→沈線栞円区画・タテ波状文→貼付文 沈線内に赤色? 赤彩有無不明	SQ36 No.29・30
439	SB26	縄文深鉢?	-	□1/8 接合しない小片多		内ナデ・ケズリに近いハケ 外縄文?・沈線 ナデ	マイ土
440	SB27	縄文浅鉢	□(34.6)	□1/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 外浮線網状文・ミガキ	マイ土 水式
441	微高地検出面	縄文浅鉢	□(18.2)	□1/8以下	1~2mm砂含	表面マメツ 外浮線網状文	Ⅳ①区 検出 水式
442	SK80	縄文浅鉢	□(13.8)	□1/8	1~3mm砂含	内ヨコナデ 外浮線網状文	マイ土 水式
443	微高地検出面	縄文浅鉢	-	体1/8以下	1~2mm砂含	表面マメツ 外浮線網状文	Ⅲ②区攪乱 水式
444	微高地検出面	縄文深鉢	-	□1/8以下	1~2mm砂含	表面マメツ 外沈線一条	Ⅳ①区 検出
446	微高地検出面	弥生甕	□(17.0)	□~胴上1/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 外唇刻目 胴上ヨコハケ→波状文	Ⅲ②区 L24検出
447	微高地検出面	弥生甕	□(26.0)	□1/8	1~2mm砂含	内ヨコミガキ 外唇縄文 ロコナメ飾描文?	Ⅲ②区 検出
448	微高地検出面	弥生壺	-	胴1/8 接合しない破片多数あり	1~2mm砂含	内ナメ・ヨコハケ 外縄文→沈線文 焼成後赤彩	Ⅲ②区 Q16検出
448	微高地検出面	土師器杯	□(11.2)・高5.4・底5.1	□2/8~底4/8	1~2mm砂含	内外ナデ	Ⅲ②区 検出
449	微高地検出面	弥生甕	-	胴1/8	1~2mm砂含	内ナデ 外波状文・籾状文	Ⅲ②区北 検出
450	微高地検出面	弥生甕	□(20.0)	□1/8	1~2mm砂含	内外ナデ?	Ⅳ①区 攪乱
451	微高地検出面	弥生壺	-	頸1/8	1~2mm砂含	内ナデ 外籾状文	Ⅳ①区 攪乱
452	微高地検出面	土師器壺	□(16.6)	□1/8	1~3mm砂含	内外ナデ	Ⅲ②区 L13検出
453	SB07	須恵器はそう	□(12.4)	□1/8	1mm以下細砂含	クロコナデ	マイ土・混入
454	微高地検出面	須恵器はそう	-	頸4/8	青灰色緻密。1mm以下白色粒含	クロコナデ 外波状文	Ⅲ②区 検出
455	微高地検出面	須恵甕	□(28.6)	□1/8	緻密。所々5mm白色粒含	内外クロコナデ 外波状文	Ⅲ②区 L23検出
456	微高地検出面	須恵甕	□(30.8)	□1/8	灰色緻密 1~3mm白色粒少含	クロコナデ 外波状文	Ⅲ②区南 検出

第4章 遺物

表2-8 土器観察表

掲載	遺構名	焼物種・器種	法量 cm	遺存状態	胎土	成形・調整	取り上げ・備考
457	Ⅲ区高地検出面	須恵器杯	底(7.4)	底3/8	灰色密 1~2mm白色・風化酸化鉄粒含	ロクロナデ 外底回転糸切り	Ⅲ区 検出面
458	SD69	古瀬戸合子	口3.2・高0.9・底2.5	口~底8/8	灰白色緻密	ロクロナデ 外底回転糸切り	SD69マイ土
459	SD69	瀬戸美濃連房碗	底7.0	底4/8	灰白色 密	高台ロクロナデ 外底・体下半回転ヘラケズリ 内面鉄軸	SD69マイ土
460	SD74	連房輪ハゲ皿?	口(10.4)	口1/8	灰白色密 黒色粒顕著	ロクロナデ 鉄軸	SD74マイ土
461	SD74	瀬戸美濃連房碗	口(11.0)	口1/8	灰白色密	ロクロナデ 灰軸	SD74マイ土
462	SD74	大窯丸皿?	口(9.0)	口1/8	明灰白色密	ロクロナデ 灰軸	SD74マイ土
463	SD72	古瀬戸御皿	口(14.0)	口1/8	灰白色密	ロクロナデ 内面御目 口灰軸	SD72マイ土
464	SD72	背磁碗?	底4.9	底~体4/8	青灰色緻密	ロクロナデ 外底ケズリ出し高台 高台ナデ 外底無軸	SD72マイ土
465	SD72	瀬戸美濃染付	口(8.4)・高4.3・底3.6	口6/8~底8/8	やや青味灰白色緻密	ロクロナデ 外底ケズリ出し 高台内無軸 外面鉄具須絵	SD72マイ土
466	SD78	瀬戸美濃染付	口(8.4)	口1/8	灰白色緻密 光沢あり	ロクロナデ 呉須絵	SD78マイ土
467	SD79	瀬戸美濃連房すり鉢	口(32.0)	口1/8	灰白色密	ロクロナデ 銅軸	SD79マイ土
468	V低 SD100	瀬戸美濃染付鉢	底(2.8)	底4/8	白色緻密 光沢あり	ロクロナデ 全面透明軸 呉須絵	SD100
469	V低 SC202	古瀬戸天目茶碗	口(12.0)	口1/8	灰白色密	ロクロナデ 鉄軸漬け掛け	SC202
470	Ⅳ区Jaブロック	縄文深鉢	底(11.0)	底4/8	1~3mm砂含	内マメツ 外マメツ 底網代	Ⅳ区Jaブロック
471	Ⅳ区Ⅱ低地2層	縄文深鉢	-	口1/8	1~3mm砂含	内外ナデ 外口下沈線	Ⅳ区Ⅱ低地2層
472	Ⅳ区Ⅰ低地	ロクロカワラケ	口(8.0)・高1.4・底(6.0)	口~底2/8	1mm以下細砂含	ロクロナデ 外底回転糸切り	Ⅳ区Ⅰ低地検出面
473	Ⅳ区Ⅰ低地	弥生甕	-	体1/8	1~2mm砂含	内マメツ 外粗掘波状文・横線文	Ⅳ区Ⅰ低地2面
474	Ⅳ区Ⅰ低地	山茶碗系皿	底(5.0)	体~底2/8	灰白色緻密	ロクロナデ 外底回転糸切り 内底研磨?	Ⅳ区Ⅰ低地検出面
475	Ⅳ区Ⅱ低地2層	土師器小壺	-	底2/8	1~3mm砂含	内ナデ 外底ケズリ 体マメツ	Ⅳ区Ⅱ低地2層
476	V区低地	杯	口(12.0)	口1/8 未接合片あり	1~2mm砂主 3mm以上砂少含	内外マメツ	V区Ⅱ北 2層
477	V区低地	甕	底(5.8)	底3/8	1~2mm砂主 3mm砂少含	内マメツ 外体ナデ 底ヘラケズリ	V区Ⅱ北 2層
478	V区低地	ロクロカワラケ	口(12.0)	口1/8	1mm以下細砂含	ロクロナデ	V区Ⅰ区2層
479	V区低地	瀬戸美濃連房鉢	底(8.8)	底2/8	灰色 1~2mm砂含	内外ロクロナデ 外体~底回転ヘラケズリ 高台ロクロナデ	V区Ⅰ区検出
480	V区低地	瀬戸美濃連房鏡手茶碗	口(10.0)	口1/8	灰色1~2mm長石粒含	ロクロナデ 外体回転ヘラケズリ カンナ弾き 鉄軸漬け掛け	V区Ⅱ区中南3層
481	V区低地	内耳鍋	-	口1/8以下	1mm前後砂多含	回転台ナデ	V区Ⅱ北 2層
482	V区低地	瀬戸美濃染付蓋	口(9.2)	口2/8	灰白色緻密 光沢あり	ロクロナデ 内口~外面染付	V区Ⅱ区中南1~2層
483	SB01	ミニチュア	底(2.0)	胴下6/8	1~2mm砂含	手づくね	SB01 床下
484	SB10	ミニチュア	底(3.8)	体下半2/8	1~2mm砂主 3mm砂少含	手づくね	SB10マイ土
485	SB28	ミニチュア	口3.8・高3.7・底4.7	口~底8/8	1~2mm砂含	内外ヨコナデ 口穿孔2孔	SB28No.6
486	SB28	ミニチュア	-	体2/8	1~3mm砂含	内ヨコハケ→ユビ圧痕・ナデ 外タテハケ→ナデ	SB28 マイ土
487	SB28	ミニチュア	底4.4	胴下8/8	1~2mm砂含	内タテミガキ 外縄文→タテミガキ	SB28 No.63
488	SB28	ミニチュア	底4.0	脚~底8/8	1mm砂含	内杯ミガキ?脚内ヨコミガキ 外脚タテミガキ	SB28 No.9 高杯形
489	SB34	ミニチュア	口(5.0)・高2.8・底3.6	口2/8~底8/8	1~2mm砂含	内ナデ 外底脇ユビ圧痕 口・底ナデ	SB34 マイ土
490	SD10	ミニチュア	口(5.6)・高5.7・底4.1	口6/8~底8/8	1~2mm砂主、3mm砂少含	内ヨコハケ→ロナデ 外体タテミガキ・口ヨコナデ	SD10
491	SD26	ミニチュア	底(3.2)	体下半4/8	1~2mm砂主、3mm砂少含	内ユビナデ 外ナデ	SD26
492	SD26	ミニチュア	底(6.0)	体~底2/8	1~2mm砂含	内ナナメハケ→ナデ 外体ナナメミガキ 底ヨコミガキ	SD26
493	G低境	ミニチュア	底(3.4)	体下半2/8	1~2mm砂含	内ナデ 外底脇ユビ圧痕	G低境上層(SD26)
494	Ⅲ区2区検	紡錘車	径(5.0)・厚2.1	約半分	1~2mm砂含	表・側面ミガキ 軸孔推定6mm 残存重量22.9g	Ⅲ区Ⅱ区VIQ16検
495	SB20	紡錘車	径(5.0)・厚1.3	約半分	1~2mm砂含	ナデ 軸孔推定6mm 残存重量14.2g	SB20埋土
496	Ⅲ区窪地	紡錘車	径(6.4)・厚1.4	裏表1/4づつ欠損	1~3mm砂含	ナデ 軸孔7mm 残存重量50.1g	SB11・12
497	SB08	土玉	径1.8・高1.9	完存	細砂含	ナデ 穿孔植物茎 孔径3mm	SB08
498	SB08	土玉	径1.0・高1.2	完存	細砂含	ナデ 穿孔植物茎 孔径2mm	SB08
499	SB10	土製円盤	長さ3.0・幅2.6・厚0.6	ほぼ完	1~2mm砂含	甕破片転用 周囲打ち欠き?一部研磨?土製円盤か断定できず	SB10マイ土
500	SB23	土製円盤	長さ3.2・幅2.8・厚0.7	ほぼ完	1mm以下細砂含	弥生甕転用 周囲打ち欠き?土製円盤と断定できず	SB23マイ土
501	SB23	土製円盤	長さ3.0・幅2.1・厚0.7	一部欠損	1~2mm砂含	甕転用?周囲研磨?円盤と断定できず	SB23マイ土
502	SB24	土製円盤	長さ2.8・幅2.2・厚0.6	一部欠損	1mm砂含	弥生甕転用 周囲研磨?判然とせず	SB24マイ土
503	SB24	土製円盤	長さ2.6・幅2.4・厚0.6	ほぼ完	1~2mm砂含	甕転用 周囲打ち欠き?判然とせず	SB24マイ土
504	SB31	土製円盤	長さ2.7・幅2.0・厚0.7	一部欠損	1~2mm砂含	弥生甕転用 周囲研磨?判然とせず	SB31マイ土
505	SB33	土製円盤	長さ2.4・幅1.9・厚0.7	ほぼ完	1mm以下細砂含	甕転用 周囲研磨?判然とせず	SB33カマド
506	SB33	土製円盤	長さ2.6・幅2.5・厚0.6	一部欠損	1mm以下細砂含	甕?転用 周囲平滑だが研磨と断定できず	SB33カマド
507	SB34	土製円盤	長さ3.9・幅3.8・厚0.6	ほぼ完	1~3mm砂含	甕?転用 周囲打ち欠き?	SB34Pit4周辺
508	SB34	土製円盤	長さ2.9・幅2.2・厚0.6	ほぼ完	1~3mm砂含	甕転用 周囲打ち欠き?	SB34マイ土
509	SK166	土製円盤	長さ4.7・幅3.8・厚1.0	一部欠損?	1~3mm砂含	甕?転用 周囲研磨 一部欠損?	SK166マイ土
510	SK166	土製円盤	長さ4.5・幅3.7・厚0.9	一部欠損?	1~3mm砂主 5mm砂少含	甕?転用 周囲一部研磨 一部打ち欠き 円盤と断定できず	SK166マイ土
511	SK166	土製円盤	長さ2.4・幅2.0・厚0.7	ほぼ完	1~2mm砂含	甕か甕転用 周囲打ち欠き?円盤か断定できず	SK166マイ土
512	SK80	土製円盤	長さ4.0・幅3.5・厚0.8	ほぼ完	1~2mm砂含	弥生中期甕転用 周囲打ち欠き?円盤と断定できず	SK80マイ土
513	SK80	土製円盤	長さ2.7・幅2.4・厚0.6	ほぼ完	1mm砂含	器種不明 打ち欠き?一部研磨?円盤と断定できず	SK80マイ土
514	SK80	土製円盤	長さ2.7・幅2.5・厚0.5	ほぼ完	1mm砂含	弥生甕転用 周囲打ち欠き一部研磨	SK80マイ土
515	SK80	土製円盤	長さ2.9・幅2.3・厚0.5	ほぼ完	1~3mm砂含	弥生鉢・高杯転用 周囲打ち欠き一部研磨	SK80マイ土

第2節 石器

石器は調査時に識別できたものを採取したため、微細な石器・剥片、目立たない黒曜石以外の剥片類やSB28・34など河川円礫が集中する地点内の自然礫を用いた石器の識別は不十分なところもある。ここでは採取された石器のなかで、定型的な石器とSB26黒曜石集中、SB22土器85内出土黒曜石剥片など特徴的な出土状況が認められた黒曜石剥片類や下呂石剥片を中心に報告する。なお、見直し作業で新たに369～372を追加実測したが、これらは本文中に別図で掲載した。

調査では弥生中期後半～後期初頭の石器と古墳時代以後の使用痕をもつ円礫や砥石が採取された。これらの石器は微高地域の集落遺構から多く出土し、Ⅲ区河道跡低地、Ⅳ・Ⅴ区水田域の遺構からは少量、北部のⅥ・Ⅰ・Ⅱ区では採取されなかった。縄文時代石器は他時代混入や検出面採取品のなかに一部識別できたものがあるが、量は少ない。弥生中期後半の石器は住居跡を中心に磨製石斧類・磨製石鏃・石剣などの磨製石器と、打製石鏃が多く出土している。磨製石斧類は太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧があり、扁平片刃石斧は一部に石材から搬入品と思われる製品もあるが、未製品や砥石の出土から本遺跡での製作が想定できた。一方、太型蛤刃石斧は未製品がなく、ほぼ搬入品で占められる。石鏃は磨製・打製があり、打製石鏃は遺跡内で製作された黒曜石の他に搬入品と思われる下呂石製石鏃がある。木材加工に関わる石斧と狩猟・武器の石鏃が多い様相であり、従来から指摘される箕輪遺跡での石包丁の少なさは今回も同様であった。また、SB26の石核・剥片集中、SB22の黒曜石剥片類が集積された壺、SB31の扁平片刃石斧未製品と黒曜石剥片集中、SB17の扁平片刃石斧数点の集中など特徴的な出土状況も認められている。

弥生後期は出土量も少ないが、磨製石斧類がほとんど認められない代わりに打製石斧が出土している。また、弥生中期後半のような特徴的な石器出土状況は認められないが、SB20より磨製石鏃未製品が集中的にみつかった。中期後半では未製品が散在的に出土するが、後期は限定された遺構から出土している。古墳時代以後は砥石や敲きや研磨の痕跡をもつ自然礫、砥石がある。以下には種別に石器について記述する。なお、石器の器種分類と名称は（株）アルカ 馬場伸一郎氏の分類を基本に市川が一部変更した。

1. 石器の種別概要

①. 打製石鏃（第134～136図 PL50）

製品43点、未製品と思われるもの22点あるが、他に石錐や剥離調整痕をもつ剥片としたなかに未製品が含まれる可能性もある。掲載したのは製品43点全部、未製品は21点である（1～64）。石材は下呂石（製品11、未製品2）、黒曜石（製品28・未製品19）、チャート（製品2・未製品1）、泥岩・頁岩（製品？2）である。時期別に住居跡出土石鏃石材を比較すると弥生中期下呂石8、黒曜石製品10・未製品14、チャート0、泥・頁岩2で合計34点、弥生後期は下呂石製未製品1、黒曜石製品5・未製品1、チャート・泥・頁岩0点で7点しかない。形式的検討は十分でないが、弥生後期住居跡出土石鏃が僅かで、弥生中期後半の遺構出土が主体となる。石材は黒曜石が多く、下呂石少量、チャート・頁岩が僅かにあり、未製品の出土から遺跡内では黒曜石を中心に少量ながらチャート、下呂石でも石鏃が製作されていた可能性が窺える。ただ、黒曜石産地に近い地理的条件に関わらず、下呂石製石鏃が出土した点は興味深い。また、遺構別出土数ではSB26が10点と最多で、他は1遺構1～3点である。未製品はSB31の5点（黒曜石集中3点）、SB22の4点（土器85壺内出土4点）が多い例で、他は1遺構1～2点前後の出土である。

下呂石製石鏃は長さ6.5cm、4.5cm前後、3.5cm、3cm弱、1.8cmのサイズがあり（第127図）、黒曜石製石鏃より大型が多い。4.5cm以上は鏃身部が一定幅に延びて先端が一旦膨らむか、そのまま三角に

尖る長五角形の有茎で、5のみ細身の紡錘形となる。弥生中期SB26から最多の7点、SB24で1点出土している。3.5cm以下には9の厚手で幅広の有茎、12の平基、13の黒曜石と類似形態の有茎など多様なものがある。9・12は調整が粗く未製品の可能性がある。13は五角形に近い31の黒曜石製鏃と類似形態である。小型石鏃は弥生後期SB23出土の9を除くと検出面か土坑出土で帰属時期が判然とせず、9も重複する中期後半SB22からの混入の疑いがある。

なお、下呂石剥片は弥生中期後半SB26で未掲載2点、SB28の202、弥生後期SB35の220、他は検出面出土の63・222の6点出土した。剥片は平面形状が長台形である共通点があり、下呂石製石器は石鏃しかないことから剥離調整痕のある63は石鏃未製品と判断した。

泥岩・頁岩製石鏃は下呂石製石鏃に類似した形態で8・11の2点のみある。8は茎が太く未製品の疑いがある。チャート製石鏃は2点がV区低地SD72、

47の1点が集落域の出土である。35は凹基鏃で、14は黒曜石製26と共に下呂石製石鏃に類似した形態の有茎鏃である。47は基部調整中の破損品と思われる。

黒曜石製石鏃は最も多く、有茎鏃を主体として凹基鏃は僅かに22・40～43がある。有茎鏃は2cm、2.5cm、4cm弱のサイズがある(第127図)。2cm前後が主体で、鏃身側縁が直線的な三角形と、逆刺が丸味を帯びるものがある。2.5cmサイズは20・31・39の下呂石製石鏃と類似した五角形鏃に近い形態と18のような広く側縁が直線的なものがあり、4cm弱もチャート製14と類似形態の鏃身が長い26がある。長さ2.5cm前後を境に、長いものは下呂石石鏃に類似した形態、それ以下は黒曜石の独自の形態と捉えられようか。

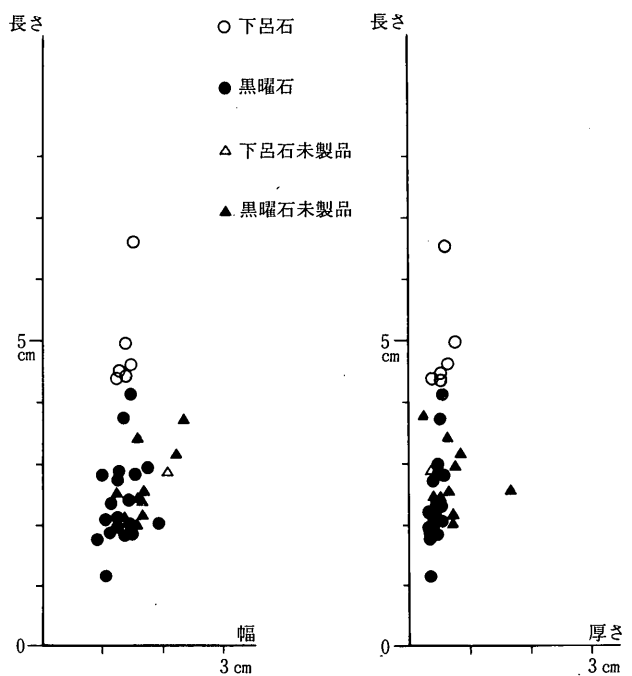
また、長さ2～3cmの鋭角1角をもつ三角形剥片・原石片で、側縁に調整痕が認められるものを石鏃未製品と捉えた。21・32・45～62が該当するが、石錐とした125、剥離調整痕をもつ剥片208なども可能性がある。剥片や小角礫状原石を用い、剥片は表面側縁から先端へ剥離調整を施して整形している。

本遺跡出土石鏃は下呂石・頁岩・泥岩製品が大型で、黒曜石・チャート(下呂石の一部)は小型品が多い傾向がある。小型石鏃は遺跡内製作で大型石鏃は搬入品と考えられるが、サイズや形態差は機能的な差に由来すると思われる。遺跡内製作の石鏃が小型主体であることは、必要な機能が小型鏃で事足りたと思われるが、搬入品大型鏃が存在することや、類似形態の黒曜石製石鏃が製作された背景は不明である。

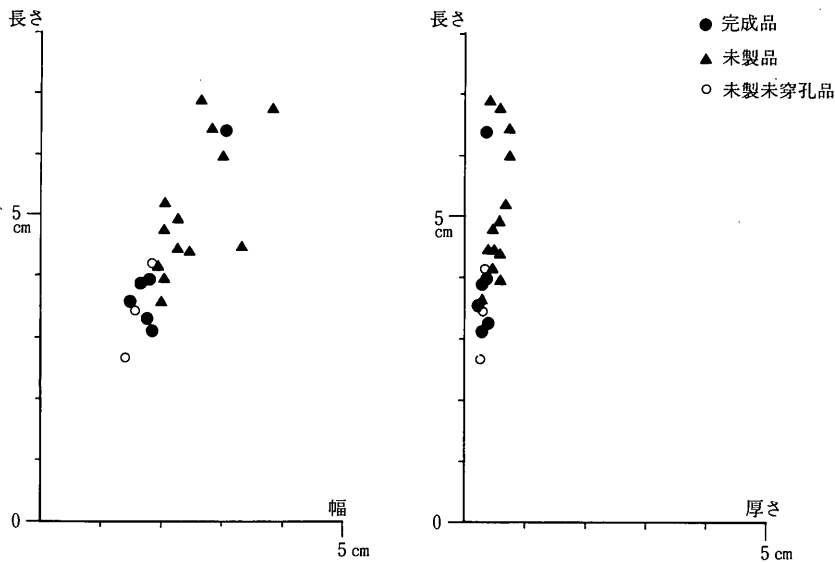
②. 磨製石鏃 (第129、136～140図 PL51・52)

製品14点、未製品42点、剥片類23点、原石2点採取され、製品12点、未製品42点、剥片2点、原石2点を図示した(65～122)。なお、367は平板で側面が平に研磨されることから別器種と考えたが、形状を整える研磨中の未製品かもしれない。石材は珪質岩(緑色片岩)や粘板岩を用い、長三角凹基で基部近くに1孔穿孔される形態が主体で、僅かに67・65のM字基部(町田勝則1999)がある。

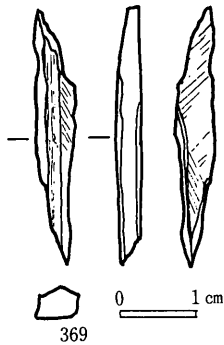
未製品は原石121・122、粗割93～118、研磨途中79・81～92、剥片119・120を図示した。製作工程を推測すると、100のように粗割・剥離調整で概略の形を作って研磨し、必ずしも厳密ではないものの、おお



第127図 打製石鏃・未製品規模グラフ



第128図 磨製石鏃・未製品規模グラフ



第129図 擦切片

もしれない。県内で磨製石鏃製作方法について桜井弘人氏（桜井1986）、関沢 聡氏（関沢1990）、町田勝則氏（町田1999）の検討があるが、本遺跡も概ね指摘される手順と同様と理解される。このなかで桜井氏が指摘した擦切技法は、その可能性のある溝をもつ裂片369がSB39から出土し（第129図）、1側縁が直線的な84・109、タテ方向の研磨痕を残す109もその可能性がある。関沢氏は擦切技法が薄く剥がれ易い石材に用いられる可能性を指摘するが、本遺跡例は関沢氏の指摘された石材に含まれる。また、薄い石片は剥離工程を省略するものがあると指摘されているが、87が該当しようか。

磨製石鏃は製品よりも未製品が圧倒的に多く、未製品も後の工程のものほど出土数が少ない傾向があるが、初期の工程ほど破損・失敗品を生じやすいことによると思われる。住居跡別出土数では弥生中期製品6点・未製品19点、弥生後期製品1点、未製品15点で、弥生中期後半のほうが出土数は多く、弥生後期住居跡では未製品が多いにも関わらず製品は少ない。さらに、弥生中期の未製品はSB17・22・26・27・28・31・39から少量づつ分散して出土しているが、後期はSB09・19・20・23、原石はSB18・37といったように出土住居跡が限定される傾向がある。なかでもSB09・18・23・37は僅かな出土だが、SB19・20は複数剥片・未製品が出土し、製作遺構が偏る（限定される）傾向を示す。

製品は65～75・77の12点あるが、6点が弥生中期後半、1点が後期、他は土坑・検出面・古墳時代住居跡出土である。規格は厚さ3mm前後で、長さ2cm前後、3.5～4.0cm、6.0cm以上の3種あると思われる（第128図）。打製石鏃はサイズ別に形状も異なっていたが、磨製石鏃は同形態で規格を違える。このようなサイズ差は打製石鏃と共通した機能差と捉えられるかは不明である。

③. 石錐（第140図 PL52）

製品19点、未製品5点あり、製品18点、未製品2点を掲載した（123～141・212）。石材は132の粘板岩製以外はすべて黒曜石製である。穿孔機能を果す同じ幅・厚さの尖った鋭角部を有することを基本とし、縦長で全面剥離調整された124・126・128・131・133・134・136・137・139と、横長で広めの基部中央に短い突起状鋭角部をもつ123・130・138の2種ある。粘板岩製132は前者同様の縦長形態だが、剥離調整は少なく先端が丸く磨耗する。上記形態に類似した125・127・129・140・141も石錐としたが、使用痕が判

然としないものもあって断定は躊躇される。未製品は125・212があるが、125は錐の破損品の疑いもある。また、RFとした157は石錐の可能性が高く、石鏃未製品にも錐未製品があるかもしれない。住居跡出土品はすべて弥生中期後半のもので、他の土坑・検出面出土は時期の詳細は不明である。遺構別出土数はSB31が7点と突出するが、他は1遺構1～2点である。

④. 両極石器 (第141図 PL52)

長さ1.6～2.5cm、幅1.5～2.1cm 前後の四辺形で、断面形が紡錘型で両極に剥離を顕著に残す石器を両極石器(ピエス)とした。黒曜石製9点あり、8点図示した(142～149)が、147以外は弥生中期後半住居跡出土である。両極石器は両極打法で製作される(岡村1976)が、かつて石核の可能性も想定されていたように本遺跡にも類似形態の石核がある。(註1)。328・329・332・326・339・340・344・346・350などが該当するが、石器の1種か、両極打法を用いた剥片かの識別は十分できていない。

⑤. 石匙 (第141図 PL52)

黒曜石製石匙が1点のみ微高地域Ⅲ④区検出面で採取された(152)。縦長の剥片の縁部に細かい剥離調整を加え、先端につまみが作り出される。数少ない縄文時代と思われる石器である。

⑥. UF・RF・剥片 (第141～145図 PL52～54)

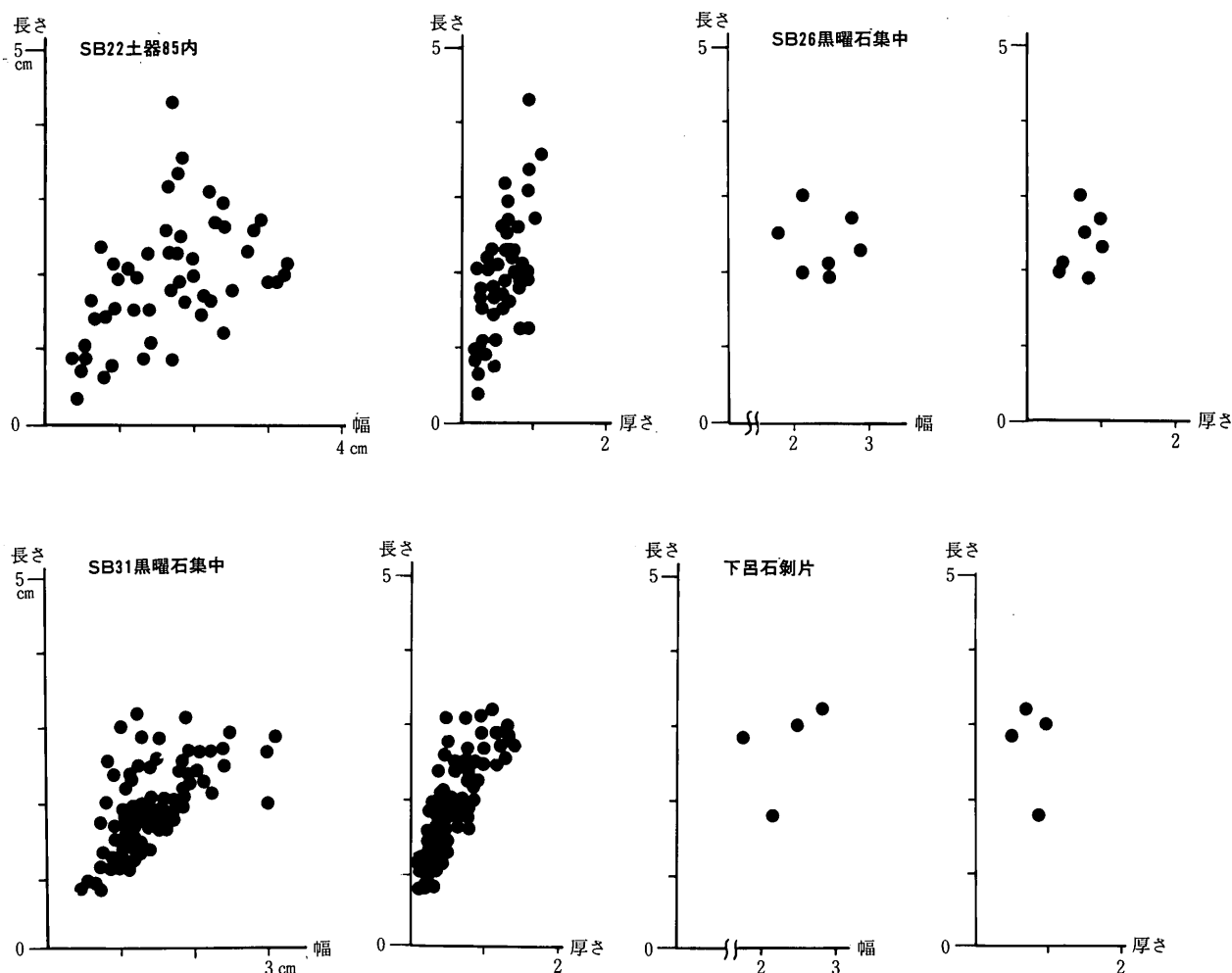
部分的な剥離調整痕を残す剥片(RF)、微細な剥離痕を残す剥片類(UF)、特徴的な出土状態や石材の剥片類をまとめて記述する(150・151、153～222)。UF・RFは弥生時代においてどの程度普遍的な存在かわからないが、SB22の土器85内黒曜石集中やSB26・31の黒曜石集中などから剥片・未製品と共にRF・UFも出土した。黒曜石小型石器を製作している本遺跡の様相からも黒曜石製石鏃や石錐製の未製品も含まれる可能性があって認定に不安を残す。石材は大部分黒曜石である。

剥片の側縁に剥離調整を施したRFは未掲載を含めて38点出土し、150～157・163・164・166・199・206・208・209・210～211・215～217を図示した。このなかで150・153・155は長方形に近い縦長剥片の側縁に部分的な剥離調整が施され、削器としたほうが良いかもしれない。154・199も類似する。151・156は三角形剥片の片側縁に細かい剥離調整を加える。157・206・208・209・212は全面剥離調整を施し、石鏃か錐などの未製品の可能性がある。

微細な剥離痕が認められるUFは未掲載を含め28点ある。このうち158～160・167～175・198・200～205・213・218・219を図示した。長方形の縦長剥片側縁に細かい剥離痕が認められるのは170・171・175・205・210・211・217、長三角の縦長剥片側縁に微細な剥離を残すものは200・203がある。両者は上記のRFの素材剥片形状にそれぞれ対応している。

上記以外の剥片は黒曜石1483点(2408.8g)、下呂石剥片6(15.1g—図63石鏃未製品を含む)、チャート剥片2(9.6g)ある。他に蛇紋岩・頁岩・珪質岩剥片があるが、それぞれ扁平片刃石斧・磨製石鏃製作に関わる可能性が高いと考え、各石器のところで触れた。チャートは円礫裂片状のものがあるが、積極的に石核と認定できない。黒曜石剥片類は圧倒的の量があり、形状・規模は多様である。薄片も含めたために上記のような点数となるが、石核を伴ったSB26黒曜石集中から加工を目的とする剥片は長さ・幅共に2～3cm前後、厚さ0.5～1cmと想定すると、該当する大きさの剥片は少ない。また、上記のサイズに合致しても、原石自体が小さいこともあって自然面を残す裂片が多い。ここでは特徴的な黒曜石出土状況と認められたSB22土器85内出土、SB26黒曜石集中、SB31黒曜石集中の3地点出土剥片を中心に掲載した。

まず、SB22土器85内集積黒曜石剥片類であるが、黒曜石剥片は59点(55.8g)あり、他に打製石鏃1(1.2g)、打製石鏃未製品4(15.1g)、石錐未製品1(1.3g)、UF5(27.3g)、RF4(15.2g)、石核4(7.4g)、原石1(6.4g)、ミガキ石2(66.9g)が得られた。剥片・UF・RFについては151・163～192を



第130図 黒曜石・下呂石剥片規模グラフ

図示した。19打製石鏃、48～51石鏃未製品、142・172両極剥片・石器、315・334・336・345黒曜石石核、284ミガキ石は別掲載である。黒曜石剥片は長さ0.5～4.3cm、幅0.4～3.3cm、厚さ0.2～1.1cmまであり(第130図)、主体は長さ1.5～3.0cm、幅1.0～3.0cm、厚さ0.3～1.0cm前後である。チップも少量あるが、SB26黒曜石集中と重なる規模も多い。この大きさは石鏃の最小となる幅1.2cm、長さ1.8cmは一応取れる規模であるが、石鏃未製品の工程初期と思われる49・50の幅2.2～2.4cm、長さ3.1～3.7cm前後、工程の進んだ48・53の幅1.6cm前後、長さ2.4cm前後と比べるとやや小さい。石鏃以外の石錐素材も含むか。

SB26黒曜石集中は石核2点、剥片5点、UF1点 RF1点の合計9点が出土し、石核は別掲載した。198はUF、199はRF、193～197が剥片で、サイズは長さ1.8～3.3cm・幅1.2～2.9cmで(第130図)SB22土器85内の集石剥片類よりも大きめのものが多い。

SB31黒曜石集中では住居跡北東壁際で扁平片刃石斧未製品・製品、磨製石鏃、砥石、蛇紋岩剥片などと共に黒曜石剥片・チップ類が集中的に出土した。黒曜石石核・原石を含まず、一定範囲に散って出土した。黒曜石は剥片203点(183.8g)、UF5(14.2g)、RF10(25.5g)、打製石鏃2(2.1g)、打製石鏃未製品3(4.3g)、石錐4(12.4g)、両極石器2(4.1g)がある。他に蛇紋岩剥片15(15.3g)、珪質岩剥片1(0.4g)、磨製石鏃2(3.1g)と未製品1(16.0g)、扁平片刃石斧・未製品9(547.9g)が出土した。黒曜石剥片サイズは幅1.0～3.0cm、長さ2.0～3.0cmまであり(第130図)、204～210の大きめのものを掲載した。上記のSB22・26出土剥片サイズに重なるが、微細なチップ類も比較的多い傾向が窺える。

以上3地点はRF・UFを含み、類似規模の剥片を含む共通点はあるが、SB22土器85内とSB26黒曜石集中は石核を含むが、SB31黒曜石集中にはなく、SB22土器85内とSB31黒曜石集中には石鏃や未製品が含まれるが、SB26にはない差異もある。剥片量が多いものからSB31、SB22、SB26の順だが、量が多いほど小さな剥片を多く含む傾向である。

下呂石・チャート剥片は220～222を図示したが、未掲載を含めても出土量が少ない。下呂石剥片は石鏃未製品とした63を含めて6点ある。打製石鏃のところで記述したように台形・長台形の剥片で、220・222が幅2.4～2.8cm、長さ2.9～3.2cmと、上記のSB26黒曜石集中出土黒曜石と類似サイズである(第130図)。また、下呂石石核・剥片を出土した塩尻市和手遺跡(神村1997)の剥片で最も多いサイズに一致し、このことから剥片素材と捉えられよう。チャート剥片は221のみ図示したが、数が少ない上に他は円礫の裂片と思われるものである。製品の少なさに対応すると思われる。

⑦. 打製石斧・石鏃 (第145～147図 PL54)

微高地南部から低地にかかるⅣ区検出面で7点、弥生後期住居跡SB19で2点、SB38で1点、SB37で1点、SB34で1点、南端の近代溝跡SD72出土1点の計13点出土し、すべて図示した(223～235)。時期を特定できない検出面やSD72出土を除くと弥生後期住居跡出土のみで弥生中期後半遺構出土品はなく、弥生後期を代表する石器とみられる。形態は所謂短冊型か先端が若干広がる225・229のしゃもじ型が多く、撥型は226の1点である。短冊型・しゃもじ型は長さ11～14cm、幅4～6cmが主体で、長さ不明ながら一部に幅8cm前後と大型のものもある。これらは広面1面に自然面を残し、232のみ基部側に自然面を残す。いずれも円礫から採った大型剥片を素材とするが、232は石の核部分を用いた可能性があり、同一円礫から複数製作された可能性も浮かぶ。224は先端部に土擦れと思われる痕跡がある。石材はほとんど硬砂岩で、一部緑色片岩3点、粘板岩1点ある。ちなみに硬砂岩片(剥片?)は弥生中期後半SB03・26、弥生後期SB23、ST13、検出面などでも採取されている。弥生中期後半の所産は同石材の石器が判然とせず、弥生後期は出土数が少なすぎて打製石斧が遺跡内で製作されたかは断定できない。

⑧. 大型刃器類・石包丁 (第148図 PL55)

収穫具と考えられる大型粗製刃器・石包丁、刃器とその可能性があるものを扱う(236～242)。箕輪遺跡では粗製の刃器類や一部研磨を伴う刃器類が少量のみ採取され、しかもほとんどが破損品である。また、石包丁は微高地域では全く出土せず、唯一確実な例は微高地から離れた調査域南端SD72から1点出土した。中期後半住居跡から木材加工具の石斧類が豊富に出土していることからすると収穫具の少なさが目立つが、これは既に指摘されている(藤沢宗平1954)ところである。

石包丁は1点のみ236がある。刃部が若干湾曲し、湾曲部から寄った位置に2孔穿孔される。粘板岩製ながら、遺跡内で出土した同石材とは色調が異なる。刃部を研磨するものは破片の241・242があるが、241は全体的に研磨されるので石包丁の可能性も残る。石材は緑色片岩である。これ以外は打製の刃器である。238・240は鋭角部をもつが、刃器とできるか不安がある。237・239が下伊那地域と共通する形態の刃器で、有柄石器もしくは有挟石器に該当すると思われる。237が硬砂岩、239が緑色片岩である。なお、下伊那で出土する有柄石器・有挟石器・有肩扇状石器は用途が確定しきれていないところもあるとされるが、ここでは恒川遺跡の桜井氏の想定に従い収穫具として扱った。

出土遺構時期からみると弥生中期後半住居跡出土は238・240～242、弥生後期は237のみである。また、Ⅲ区北海道跡低地内採取の239は出土地点を考えると水田耕作に伴う可能性もある。

⑨. 太型蛤刃石斧・石鏃 (第148・149図 PL55)

両刃石斧のなかの太型蛤刃石斧を扱い、太型蛤刃石斧を転用した石鏃も合わせて扱う。太型蛤刃石斧は未製品がなく、製品のみ弥生中期後半のSB17・21・26・31から7点(石槌250含む)とSB23から太型蛤

刃石斧表面剥落片と思われる破片1点(3.9g)が出土し、7点図示した(243~250)。SB17が3点、SB31で2点と複数出土した例もあるが、完形・略完形土器が多く残されていた焼失住居跡SB22やSB27・28からは出土していない。SB17・31は扁平片刃石斧未製品を多く出土しているが、こうした傾向と大型蛤刃石斧の出土が関係しているかは不明である。石斧の規模は長さ18.1~18.6cmで幅7.0~7.3cm、厚さ3.9~4.1cmのものと、長さ13.5~14.4cmで幅6.3~6.9cm、厚さ3.9~4.1cmの2種ある(第131図)。県内の製作遺跡である榎田遺跡出土例と比較すると、それぞれ中型・小型に対比される(町田勝則1999)。また、2種サイズは幅・厚さの格差が5mm以内しかなく、むしろ長さに差がある。長さは使用に伴う研ぎ減りもあるかもしれないが、基本的に同じ規格柄に装着することも関連するだろうか。なお、複数出土したSB17、SB31は各サイズが1本ずつある。また、第5章に掲載したアルカの高橋氏の分析によると使用痕が確認され、未使用製品ではないことが想定された。石材は変質輝緑石で、同石材には扁平片刃石斧製品もある。

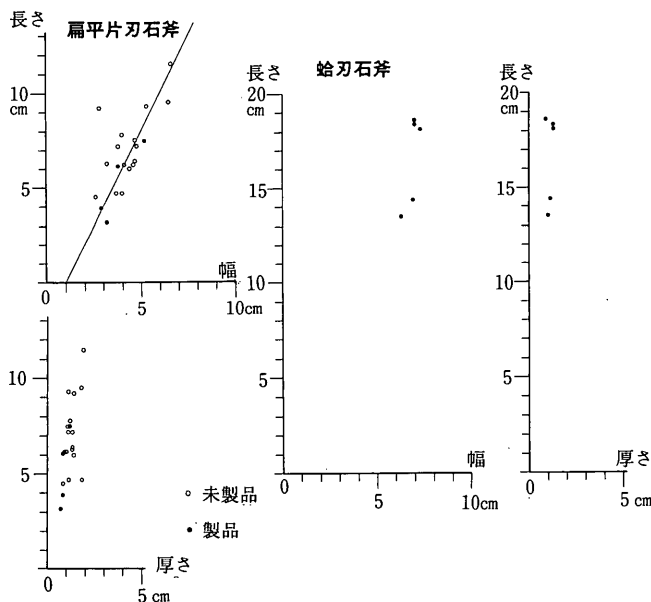
石鎚は長楕円の礫1端が平滑に研磨された石器で、SB17から大型蛤刃石斧基部片を転用した250、SB38から自然礫転用の249の2点出土した。249は側面に敲打痕を残し、敲く・磨る道具として使用されている。研磨面はかなり微細なものを磨ったためか光沢がある。249が硬砂岩、250が変質輝緑石である。

⑩. 乳棒状石斧 (第150図 PL55)

IV⑤区検出面から251の1点のみ出土した。細身の基部破片で断面は円形を呈する。石材は凝灰岩で表面には成形の敲打痕が残る。帰属時期は判然としないが、恒川遺跡では弥生中期に大型蛤刃石斧のほかに輝緑凝灰岩や緑色片岩、粘板岩といった堆積岩を用いた研磨痕や剥離を残す石斧が存在すると指摘している(桜井弘人1986)。弥生中期住居跡から類似石斧が全く出土しておらず、縄文の可能性も残る。

⑪. 扁平片刃石斧 (第150~152図 PL56)

製品と未製品26点出土し、すべて図示した(252~277)。他に製作時に排出されたと思われる蛇紋岩片が、SB27で1点(1.6g)、SB31黒曜石集中から15点(15.3g)ある。全面研磨された製品は252~255の4点あり、石材は255が変質輝緑岩、他は蛇紋岩である。255は同種石材の未製品がないことから、同石材の大型蛤刃石斧同様の搬入品とみられる。252・253は他の蛇紋岩石斧と異なってかなり磨き込まれて光沢があり、刃部脇に抉りがある。254は253と類似サイズである。これらの製品サイズは幅3cm・長さ3~4cm、



第131図 扁平片刃石斧、大型蛤刃石斧規模グラフ

幅4cm・長さ6cm、幅5cm・長さ6cmの3種に分けられる(第131図)。さらに、未製品のサイズを加えると幅4cmで長さ5cm、幅6cm前後で長さ9.5cm前後、幅6.5cmで長さ11.5cm、幅3cmで長さ9cmの4種あり、全部で5種前後に区分できそうである。全体的に数値が分散し、厳密な規格を認定しにくいのが、平面形の幅/長さの関係は Y (長さcm) = $2X$ (幅cm) - 2(cm)のラインに載り、唯一の例外が271の未製品である。大部分は幅/長さが一定の比率で製作されていると思われる。大型蛤刃石斧と異なって幅・長さが多様なのは装着方法によると思われるが、上記比率が何に由来するかは不明である。

未製品には剥離調整で粗形をつくる256・271

・273、研磨を加えた257～263・26～270・272・275・276がある。264は剥離調整段階の破片、266は研磨途中の失敗品かもしれない。これらの未製品から粗割で粗形をつくり、広面・先端刃部から側面と基部側を整える手順の研磨と思われる。機能上重要な刃部の形状の決定が優先され、規模の分散からも側面研磨は副次的な調整と思われる。石材は257がホルンフェルス、265が硬砂岩、276が緑色岩以外はすべて蛇紋岩である。本遺跡では蛇紋岩を主体とした扁平片刃石斧製作が行われていたといえる。

遺構別出土状況では弥生後期 SB37と検出面で各1点あるが、他はすべて弥生中期後半の住居跡出土で SB31が11点、SB17が5点、SB22が3点、SB26が4点、SB28が1点である。ほぼ弥生中期後半の所産である。このなかで SB31は黒曜集中地点で未製品・製品が集中出土し、SB17も住居跡北西部で近接出土したが、SB26は埋土中やトレンチ出土で出土位置を特定できない。SB17は扁平片刃石斧未製品のみ、SB31では黒曜石剥片等と伴出したが、SB17・31の複数出土例から集中生産の可能性は考えられる。

⑫. 敲石 (第152・153図 PL57)

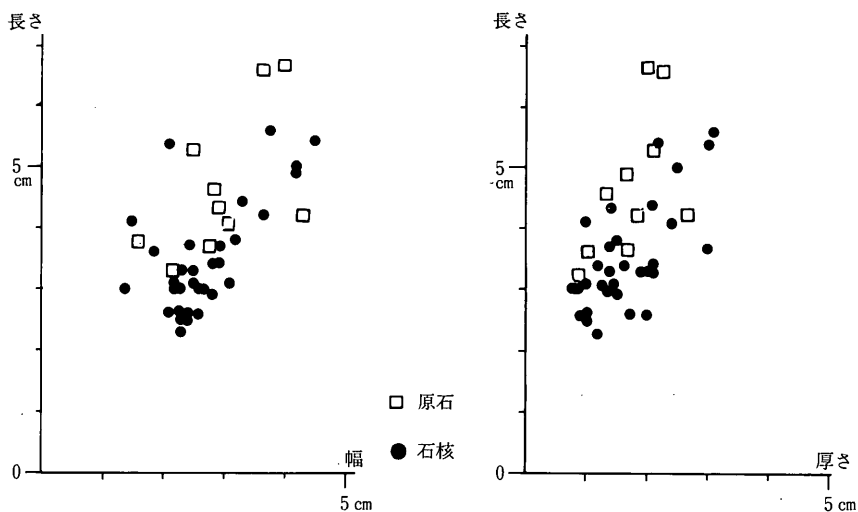
具体的な使用対象は不明ながら、敲打痕が認められる石器をまとめた (278～283・285)。249も敲打痕を残すが、石鎚のところで掲載した。281のみ剥離痕があるが、基本的に自然円礫を用いる。大きさから2種分けられる。一つは手にもてる小ぶりの278～283で、279・282は縦長円礫端部、281・283は横長の側面、278・280は両部位に敲打痕がある。もう一つは大きめで置いて使用したと思われるもので、平坦面に敲打痕を残す285がある。278～280の3点が古墳後期住居跡、282・285が弥生後期住居跡、281・283が弥生中期住居跡出土で、あらゆる時代の遺構から出土している。石材は砂岩278・280・285、粘板岩281、泥岩279、安山岩が282・283である。

⑬. 砥石・研磨痕を有する礫 (第153～157図 PL57・58)

研磨に用いられた石器や砥石をまとめて扱う。形態・重量も多様で、石斧や磨製石鏃研磨、金属器研磨、さらに石皿のように磨り潰す台石、ミガキ石まで多様なものを含む。形態・素材別では円礫と、断面方形(円形)の整った形状の砥石があり、研磨痕を有する円礫は16点、砥石は24点ある。前者は8点、後者は21点図示した (284・286～313)。弥生中期後半の所産が圧倒的に多いが、以下には時期毎に記述する。

弥生中期後半遺構出土はミガキ石284、研磨痕のある円礫294、断面円形の棒状砥石303、小型の断面長方形砥石303・304・305・306・307・309・310・311、断面方形の中型以上の砥石292・293・301・302、研磨痕のある大型円礫299がある。石材は284が泥岩、205が安山岩で他はすべて砂岩である。砂岩は円礫の294・299が比較的緻密で硬いものの、他は粒度が粗い。断面方形砥石は後者の砂岩を用い、摂理で割れた礫を用いたと思われる。大型

の293・295・299・302は置き砥石とみられ、扁平片刃石斧や磨製石鏃研磨に用いられたものだろうか。小型砥石は後代の金属を研磨する砥石に類似するが、弥生後期よりも出土例が多く、308などはあまりにも小さすぎて研磨対象はわからない。303は断面円形を呈し磨製石鏃の基部研磨に用いられたとも考えられるが確証はない。住居跡別では SB



第132図 黒曜石石核・原石規模グラフ

31が置き砥石、中・小方形砥石計6点と最多で、SB22が置き砥石と小型砥石・ミガキ石計4点で、他は中・小型砥石を中心にSB17が1点、未掲載2点、SB21・28が2点ずつ、SB26で1点、SB27から未掲載の幅の狭いものを研磨したとみられる幅1cm、長さ3～5cmほどの細く浅い研磨痕が残る扁平円礫が出土している。小型の方形砥石は比較的多くの住居跡から散在的に出土する。なお、284は黒曜石剥片が集積されていた土器85内出土である。

弥生後期はSB19から粗い砂岩の置き砥石288、研磨痕を残す平たい安山岩礫291、小型の長方形砥石308の3点、SB35から大型砥石295が1点出土したのみである。住居跡数に比して出土点数は少なく、しかも大型砥石が目立つ。291はかなり粒度の細かいものを磨ったと思われる、光沢のある鏡面状を呈する。

古墳後期はSB01から289と未掲載1点の研磨痕を有する円礫、穿孔された砥石312と砥石片1点の4点、SB04は未掲載の研磨痕のある円礫1点、SB08は研磨痕を有する円礫290と未掲載1点の計2点、SB13で研磨痕を有する円礫286・287の2点、ST12から研磨痕を有する円礫296の1点出土した。石材は286・290・296・312が砂岩、長楕円形円礫の287が安山岩、289が粘板岩である。中世以後ではSD67から298の断面方形の砂岩製砥石、SD74から313の安山岩製砥石が出土している。他は遺構外で300の粗い砂岩砥石が出土している。

⑬. 黒曜石原石・石核 (第158～164図 PL59・60)

黒曜石原石は12点(293.9g)、石核と思われるもの50点(731.9g)出土した。原石は風化自然面を残し、円礫状のものと角礫状のものがある。314～323の10点(264.1g)図示した(314～355)。最も小さいもので幅1.9cm、長さ3.6cm、幅1.0cm、最も大きいもので長さ6.7cm、幅4.0cm、厚さ2.0cmで、平均は長さ4.6cm、幅3.0cm、厚さ2.1cmである(第132図)。剥片と大差ないサイズが含まれることは、この大きさで事足りる打製石鏃や石錐等の小型石器製作を目的として搬入されたと思われる。掲載したものではSB17で1点、SB22の黒曜石集積壺内1点、SB27で2点、SB31で2点、混入と思われる古墳後期SB01出土が1点と検出面出土が3点ある。SB01と検出面出土を除くと基本的に弥生中期後半の遺構出土である。

石核は32点(552.2g)図示した。掲載したなかで、原石の1面のみに剥離面があるものは14点、裏・表2面に剥離面があるもの5点、隣接2面に剥離面があるもの3点ある。他は3面以上で4点ある。全般的に剥離面が少ないが、これは原石規模と関連するか。1面、広面表・裏2面、隣接直交面に剥離面のあるものの順で原石が厚いとみられる。また、1面や表裏2面の剥離面があるもののように打面調整を行わずに直接剥片を採るものもあると思われる。さらに、3面以上に剥離面のあるものは柱状を呈するものが多く、長さは2～3cm前後、幅・厚さは1～2cm前後である(第132図)。

1面のみの剥離面をもつものでは1方向のみが325・327・348・342、直交方向324・326・33・334・355、上下方向から328・330・337・346、3方向以上は338がある。2面以上の剥離面があるものでは、面を変えての1方向の他に329・331・351の直交方向、332・339・349・350の複数方向から剥離するものがある。また、上下からの剥離痕が認められるものも多い。これは両極打法によるとみられ、石鏃素材を得る技法として(註1)(四柳1997)用いられたと思われる。ただし、これらはピエスと類似形態で、小型の328・329・332・336・340・344・346・350はピエスとの識別に不安も残る。322は両極石器の可能性が高い。

剥片剥離の技法や製作石器の関係は把握できていないが、弥生中期後半を中心に黒曜石原石が運び込まれ、石核と剥片を集積して保管されていたことは知られる。また、原石サイズから石鏃など小型石器製作が主目的のものと思われる。

⑭. 台石 (第164・165図)

研磨・敲打痕が観察できない大きめの河川礫ながら、住居跡床面直上出土など特徴的な出土状況が認められた礫を台石として報告する(356～361)。こうした台石は恒川遺跡でも報告されており、ベンガラを

粉碎する台石と特定されているもの以外に、使用方法が判然としないものもあって藁叩き台、粘土の練り込み台、踏み台などの用途も想定されている（桜井弘人1986）。本遺跡では住居跡を中心に人頭大かそれ以上の規模で1面が平坦な長楕円形の礫が出土している。SB17の361、SB31の359は床面直上で平坦面を上にして単体で出土し、埋土中から類似規模の礫が出土していないことから、何らかの使用目的で設置されたと思われる。また、356・357・358はSB19の埋土中から288の大型砥石、285の敲打痕をもつ礫、291の研磨痕をもつ礫と共に出土し、床面直上ではないが関連する可能性も考えて掲載した。SK80出土360は単独の出土ながら、台石とも言い切れない。

⑭. 管玉（第165図 PL60）

弥生中期後半のSB28P 4内から1点出土した（362）。断面方形ぎみで、石材は緑色凝灰岩製の弥生時代に通有の細身管玉である。出土したSB28P 4からは略完形の甕、ミニチュア数点等も出土し、管玉も祭祀行為による可能性がある。他に玉類の出土はなかった。

⑮. 石製紡錘車（第165図 PL60）

古墳後期掘立柱建物跡ST12ピット内から滑石製紡錘車が1点出土した（363）。半分欠損し、意図的に入れられたものかどうかはわからない。

⑯. 石製模造品（第165図 PL60）

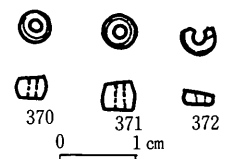
滑石模造品は有孔円板2点、勾玉1点が古墳後期住居跡から各1点ずつ出土した（364～366）。有孔円板364は黒味の強い灰色滑石製で、楕円形の両端に寄って2孔穿孔され、表裏面は斜め方向、側縁はヨコ方向に研磨される。穿孔は片側穿孔である。365は小さめの有孔円板で中央に1孔のみ穿孔され、その脇に穿孔途中の小孔がある。色調は灰色ぎみの明褐色を呈する滑石である。366は勾玉形で、黒色に近い茶褐色滑石を用いる。側縁はヨコ方向に研磨されるが、勾玉の内湾側を鋭利な刃物で削って形づくる。模造品は祭祀に関わる遺物と考えられ、本遺跡では製品で搬入されている。産地が判明すれば祭祀具の分配システムを通じて本遺跡の位置付けを明らかにできるかもしれないが、具体的な産地は検討できていない。

⑰. 白玉（第133図）

古墳後期住居跡SB08の土器343内から白玉2点が採取された。滑石製で断面は若干中位が膨らむ太鼓状の形状である。側面はタテ方向に研磨されている。

⑱. 石剣（第165図 PL60）

SB31柱穴跡脇から太型蛤刃石斧2点、後述する粘板岩製の研磨石製品と共に368が出土した。平たく長い板状の形状で、柄部側縁が挟り込むように作られ、刃部は鋭角に研磨される。茎部のみの出土で、床面出土であることから廃棄以前に切先部を欠損していたと思われる。祭祀行為に伴う意図的な破損廃棄か、磨製石鏃などへの転用目的で持ち込まれたものかわからない。形態は鉄剣型磨製石剣に該当する。



第133図 白玉

⑲. その他（第165図 PL60）

367は緑色片岩製で側面はヨコ方向に研磨される。刃部と基部研磨直前の磨製石鏃未製品の可能性もあるが、幅広くやや異質な感があり、磨製石鏃に含めずに別に取り上げた。SB31の柱穴跡脇で太型蛤刃石斧・石剣と近接して出土した。

註1（株）アルカ 馬場伸一郎氏ご教示による。

参考文献

1986 桜井弘人「2 石器」IV 弥生中期後半から古墳時代前期の石器について」

【恒川遺跡群】飯田市教育委員会

- 1990 関沢 聡「第3節 弥生時代の石器」『県町遺跡』松本市教育委員会
- 1999 町田勝則「第V章 第2節 4 考察（磨製石器の評価）」『榎田遺跡 第2分冊』長野県埋蔵文化財センター
- 1996 町田勝則「弥生中期の石器からみた社会 続・希少な品々」『長野県考古学会誌 80』
- 1997 町田勝則「希少な品々—信州弥生文化にみる特殊遺物の変遷—」『人間・遺跡・遺物 3 麻生優先生退官記念論文集』発掘者談話会
- 1976 岡村道雄「ピエス・エスキューについて」『東北考古学の緒問題』東北考古学会
- 1997 神村 透「弥生時代の石器をみて」『和手遺跡Ⅱ』塩尻市教育委員会
- 1954 藤沢宗平「箕輪遺跡の今後」(1970『箕輪遺跡 調査第1集』)に収録
- 1997 四柳 隆「千葉県における石鏃の製作」『人間・遺跡・遺物 3 麻生優先生退官記念論文集』発掘者談話会

2. 地点・遺構別出土の石器

(1) Ⅲ区北部河道跡低地出土石器

A 低地のⅢ①区6層泥炭質土層から37の打製石鏃、層位不明ながら239の打製刃器が出土している。E 低地はⅢ①区7層上部（2面水田）から未掲載の黒曜石原石片1（13.4g）が出土し、Ⅲ③区のE低地採取品に未掲載の黒曜石剥片5（5.6g）、石核？1（6.5g）がある。角礫状で3面に自然面を残し、剥離面は調査時の破損か剥離面か判然としない。また、SD61土手内からは未掲載の黒曜石剥片1（4.5g）が出土した。G 低地境から黒曜石剥片1（3.1g）、赤色チャート片1（10.8g）が採取された。他に低地名不明ながらⅢ①区低地2層で取り上げられた黒曜石剥片1（4.3g）、赤色チャート裂片1（2.2g）がある。

(2) 微高地域の遺構出土石器

①. 竪穴住居跡出土石器

SB01 289の研磨痕をもつ円礫、312の穿孔された砥石、278・279の敲打痕のある円礫、316の黒曜石原石などが出土した。未掲載品には黒曜石剥片8（14.4g）、チャート片2（36.3g）、砥石片？1（14.4g）、研磨痕のある小円礫1（132.2g）がある。また、遺構を誤認してSK04として取り上げられたなかには未掲載の黒曜石剥片2（5.4g）、チャート片1（52.8g）がある。

SB02 床面から出土した365の石製模造品のみがある。

SB03 (29) 埋土が浅く石器は少ない。65の磨製石鏃のみ掲載したが、未掲載に黒曜石剥片11（10.4g）、珪質岩片1（3.7g）、硬砂岩の薄い板状剥片1（28.3g）がある。硬砂岩片は刃器状ながら使用痕はない。

SB04 東壁際で未掲載のこも網石の可能性のある礫4点が出土した。3点は自然円礫で残り1点が割れた円礫片である。重量は101.9g、198.2g、535.1g、835.7gと一定していない。また、貼床埋め土からは未掲載の1面に研磨の線状痕を残す円礫1点（1150.9g）が出土した。

SB07 打製の刃器と思われる石器237の1点のみある。

SB08 280の敲打痕をもつ円礫、290の研磨痕を有する円礫などと、364の模造品、370・371の白玉、他に158のUF、68の磨製石鏃、15の打製石鏃がある。未掲載では黒曜石打製石鏃未製品1（1.5g）、磨製石鏃未製品と思われる頁岩片2（3.7g）、珪質岩1（1.4g）、黒曜石剥片9（9.0g）、黒曜石UF1（1.3g）、砂岩片1（86.6g）、研磨痕を残す安山岩円礫1（1062.9g）・泥岩1（125.8g）がある。

SB09 16・17の打製石鏃、45の未製品、93の磨製石鏃未製品、324～326の黒曜石石核がある。未掲載では黒曜石剥片1（0.8g）、2面に自然面を残す石核1（24.5g）がある。

SB10 未掲載の黒曜石剥片2（2.0g）、黒曜石石核1（5.3g）、頁岩片2（5.0g）がある。

SB13 286・287の研磨痕をもつ円礫と、46の打製石鏃未製品、352の黒曜石石核、未掲載の黒曜石剥片6

(16.5g) など切り合う弥生中期後半 SB17からの混入と思われる石器類が出土している。

SB14 47の打製石鏃未製品のみが出土した。

SB15 366の石製模造品のみがある。

SB17 78・94の磨製石鏃未製品、243・246の大型蛤刃石斧、253・254・257・260の扁平片刃石斧、256の片刃石斧未製品、306の砥石、250の大型蛤刃石斧転用の石鏃、159のUF、327～331の黒曜石石核、314の黒曜石原石が出土した。黒曜石石核の多さに比して、打製石鏃類の出土はない。361は床面直上に置かれた状態で出土した河川礫であるが、使用・加工痕は認められない。他に未掲載でチャート円礫裂片1 (42.1g)、黒曜石剥片21 (40.0g) がある。黒曜石剥片は自然面を残すものが多い。

SB18 121の磨製石鏃原石と思われる珪質岩片と未掲載の珪質岩剥片1 (0.3g)、282の敲打痕をもつ円礫が出土した。

SB19 76・95の磨製石鏃未製品、224・226の打製石斧と、288の大型砥石、308の小型砥石、291は研磨痕をもつ円礫破片、285は敲打痕をもつ円礫である。356～358は使用痕が認められないが、291・285と類似サイズの円礫で参考に掲載した。

SB20 磨製石鏃未製品や剥片類が多く採取された。18の打製石鏃、66の磨製石鏃と81・96～100の未製品や120の磨製石鏃製作に伴う剥片がある。剥片は他に未掲載の珪質岩片11 (4.9g) がある。

SB21 150の黒曜石 RF、240の打製刃器、245の大型蛤刃石斧、332の両極石器、292の砥石、294の敲打痕と研磨痕を残す円礫、283の敲石があり、他に未掲載の黒曜石剥片7 (21.7g) がある。

SB22 埋土中からは8の打製石鏃、82・101・103の磨製石鏃未製品、125の石鏃未製品、160・162のUF、161の剥片、252・259・261の扁平片刃石斧、293・305の砥石、303の断面円形の棒状砥石、333の黒曜石石核がある。他に未掲載の黒曜石鏃未製品1 (0.5g)、黒曜石剥片22 (47.7g)、黒曜石原石片? 1 (17.7g)、研磨痕を残す円礫1 (58.6g)、砂岩片2 (78.8g) が出土している。

また、住居跡南壁際の壺(土器85)内から、黒曜石剥片59点(55.8g)、打製石鏃1(1.2g)、打製石鏃未製品4(15.1g)、石鏃未製品1(1.3g)、UF5(27.3g)、RF4(15.2g)、石核4(7.4g)、原石1(6.4g)、ミガキ石2(66.9g)が出土した。このうち、19の打製石鏃、48～51の黒曜石石鏃未製品、142・172の両極剥片・石器、167～170・175黒曜石UF、151・163・164・166黒曜石RF、165・173・174・176～192の黒曜石剥片、334・336・345黒曜石石核、315の黒曜石原石、表面に研磨の線状痕を残す小円礫のミガキ石284を図示した。黒曜石剥片は長さ0.5～4.3cm、幅0.4～3.3cm、厚さ0.2～1.1cmまであり、最も多いのが長さ1.5～3.0cm、幅1.0～3.0cm、厚さ0.3～1.0cm前後のものである。

SB23 9の下呂石石鏃未製品、79の磨製石鏃と83・104の未製品、未掲載の大型蛤刃石斧表面の剥落片1(3.9g)、黒曜石剥片3(5.5g)、粗い砂岩円礫片1(24.3g)、珪質岩円礫片2(5.6g)、硬砂岩片1(1.6g)がある。

SB24 埋土中から散在的に10・11・20の打製石鏃(10下呂石)と53の未製品、102の磨製石鏃未製品片、123・124の打製石鏃、153・154・156のRF(削器?)、145の両極石器、200のUF、未掲載では黒曜石剥片47(86.8g)、黒曜石石核6(60.0g)、黒曜石RF1(1.7g)、珪質岩片3(0.8g)が出土した。

SB25 未掲載の硬砂岩片1(13.1g)、黒曜石剥片6(11.1g)、軽石円礫1(21.3g)、頁岩の大型分割礫片1(188.4g)、変成岩分割礫片1(53.4g)が出土している。

SB26 下呂石製石鏃が複数出土し、小規模ながら黒曜石集中が検出された。1～7下呂石製石鏃、21～23黒曜石製打製石鏃、105磨製石鏃未製品、248大型蛤刃石斧、262・263扁平片刃石斧、241・238粗製刃器、264・265扁平片刃石斧未製品、310小型砥石がある。241刃器は粗い研磨が加えられており、石包丁の可能性はある。193～199・337・338は集中して検出された黒曜石で、198がUF、199がRF、337・338が石核、

他は剥片である。剥片・UF・RFのサイズは長さ2～3cm、幅2～3cm、厚さ0.5～1cm前後の類似規模である。他に未掲載の磨製石鏃未製品1(6.5g)、黒曜石剥片・裂片53(106.5g)、黒曜石RF1(5.4g)、石核2(24.8g)、硬砂岩片4(82.8g)、黒灰色下呂石と思われる剥片2(4.8g)、粗い砂岩片2(24.9g)がある。下呂石剥片は1点が長さ27.8×幅15.8×厚さ5.2mmの長台形を呈し、1側面は切断された可能性がある。重量は2.4gを計る。もう1点は長さ19.8×幅17.8×7.7mmの長台形で、重量2.2g計る。また、埋土中採取円礫のなかに珪質岩円礫2点(222.0g・340.0g)がある。1点は取り上げ時に薄く剥れてしまったが、かなり質が悪く、磨製石鏃用原石とは断じ得ない。他に研磨痕のある円礫1(81.5g)がある。

SB27 石器は埋土中から散在的に出土した。24の打製石鏃と52・54の未製品、84・86・90・106・107の磨製石鏃未製品、127の打製石鏃、317・339～341の石核、317・319の原石、未掲載では黒曜石石鏃片1(0.4g)、黒曜石剥片52(129.6g)、黒曜石UF2点(3.6g)、蛇紋岩剥片1(1.6g)、研磨痕のある硬砂岩円礫片1(338.1g)がある。研磨痕のある礫は幅1cm前後の帯状研磨痕が3条前後認められる。

SB28 多くは埋土中から散在的に出土した。25打製石鏃と55未製品、85・87・108・109磨製石鏃未製品、144両極石器、155RF(削器?)、203UF、201磨製石鏃製作に伴う珪質岩剥片、202下呂石剥片、266扁平片刃石斧片、297・304砥石、281敲石、342・343・345黒曜石石核、362管玉を図示した。未掲載では磨製石鏃未製品1(0.5g)、黒曜石剥片38(66.9g)、黒曜石原石1(7.5g)、黒曜石石核2(12.2g)、同UF1(1.2g)、同RF2(2.5g)がある。

SB31 住居跡北東隅で黒曜石剥片・扁平片刃石斧未製品の集中、柱穴周囲で大型蛤刃石斧や石剣、入口施設周囲で砥石、炉内や炉掘り方から磨製石鏃、南壁より床直上で台石とした細長い円礫など特徴的な出土状況が認められた。黒曜石集中を除いた石器には26・27打製石鏃、56・59石鏃未製品、67・70・72磨製石鏃、80同未製品、128・129・130石鏃、211UF、209RF、272扁平片刃石斧、244・247大型蛤刃石斧、242刃部研磨の刃器、344・346・348・349・350黒曜石石核、320・321の同分割礫・原石、299・301・302・309・311砥石、359台石、368磨製石剣がある。367は磨製石鏃未製品とも思われるが、形態から別器種と考えた。磨製石鏃67は数少ないM字基部である。扁平片刃石斧272は検出時に出土したが、位置的に黒曜石集中地点に含められる可能性がある。黒曜石集中周辺を除く未掲載石器では黒曜石剥片128(121.3g)、黒曜石石核1(19.4g)、黒曜石石鏃未製品1(1.5g)がある。

黒曜石集中からは黒曜石剥片203点(183.8g)、黒曜石UF5(14.2g)、RF10(25.5g)、打製石鏃2(2.1g)、打製石鏃未製品3(4.3g)、石鏃4(12.4g)、両極石器2(4.1g)が採取された。黒曜石以外では蛇紋岩剥片15(15.3g)、珪質岩剥片1(2.4g)、磨製石鏃2(3.1g)と未製品1(16.0g)、扁平片刃石斧・未製品9(547.9g)が採取された。黒曜石剥片は長さ1.0～3.0cm、幅0.8～2.5cm、厚さ0.1～1.4cmほどのものが多い。図示したのは打製石鏃29と未製品57・58・60、磨製石鏃69・71と未製品88、打製石鏃131・132・134・135、両極石器146・148、黒曜石UF205・210、同RF157・206・208、黒曜石剥片は204・207の2点、扁平片刃石斧製品・未製品は255・267～271・273・274・277、砥石307である。扁平片刃石斧未製品・製品、磨製石鏃、砥石、蛇紋岩剥片などと共に黒曜石剥片・チップ類が出土し、黒曜石石核・原石を含まない点は、類似したSB22・26の黒曜石集中・壺内集積とは異なる。

SB32 未掲載の黒曜石剥片1点(0.4g)が出土した。

SB34 233の石鏃と未掲載の珪質岩片1(61.8g)が出土した。

SB35 石器は少量しか採取されていない。220は下呂石剥片、213が粘板岩RF、295が砥石である。他に未掲載の黒曜石剥片9点(49.1g)、黒曜石RF1(4.0g)がある。

SB36 351は黒曜石石核、110は磨製石鏃未製品である。未掲載では黒曜石剥片4(18.0g)、珪質岩片1

(65.2g)、砂岩片4 (26.8g) が出土している。これらは重複するSB35や周囲からの流れ込みと思われる。

SB37 122磨製石鏃原石片、147両極石器、235石鏃、221・214粘板岩・黒曜石剥片、276扁平片刃石斧破片があり、未掲載では黒曜石片6 (4.1g)、砂岩片1 (5.0g) がある。

SB38 自然円礫を用いた249石鏃、232石鏃が出土した。

SB39 28打製石鏃、149両極石器、91・111磨製石鏃未製品、369磨製石鏃製作の擦切加工片、269頁岩片1 (0.6g) が出土した。擦切片は1面2条あり、一条は斜めの線状痕、もう一つは溝方向の線状痕が認められ、切断端部とも思われる。裏面に溝らしきものがあるが、調査時のきずの可能性はある。他に未掲載の黒曜石剥片36 (26.6g)・石核1 (12.1g)・RF1 (0.4g)、珪質岩剥片1 (0.4g) がある。

SB41 30・31打製石鏃、112磨製石鏃、212RF?、未掲載の黒曜石剥片12 (13.4g) がある。

SB11・12・窪地 47打製石鏃、61磨製石鏃、未掲載黒曜石剥片2 (2.0g) と黒曜石石核1 (6.3g) がある。

②. 掘立柱建物跡出土石器

ST01 SK14から未掲載黒曜石剥片1 (0.8g)、SK16から未掲載黒曜石剥片1 (0.6g)、SK17から114の磨製石鏃未製品と354の石核、未掲載の磨製石鏃粗割剥片と思われる頁岩片3 (2.6g)、黒曜石剥片8 (18.3g)、黒曜石原石裂片3 (16.1g)、両極石器1 (2.7g)、黒曜石残核? 1 ((4.4g)、蛇紋岩剥片1 (1.9g)、SK251から未掲載の頁岩片1 (8.7g)、黒曜石剥片1 (0.4g) が出土している。

ST02 SK34から未掲載の黒曜石剥片1 (2.4g) のみが採取された。

ST03 SK61から未掲載の黒曜石剥片6 (6.1g)、円礫の自然面を残す珪質岩裂片1 (11.9g)、SK57から未掲載の黒曜石剥片2 (3.6g) が出土した。

ST10 SK11から未掲載の黒曜石剥片2 (4.8g) が出土した。

ST12 P1から296の磨石、363の滑石製紡錘車、372の白玉、未掲載ではP1土器内から磨製石鏃破片1 (0.1g)、P4から砂岩片1 (4.4g) が出土している。

ST13 SK54から未掲載の黒曜石剥片1 (1.3g)、石英片1 (10.0g)、SK79から未掲載の硬砂岩剥片1 (2.4g) が出土した。

ST14 SK90から未掲載の黒曜石剥片1 (0.1g)、SK97から未掲載の黒曜石剥片1 (0.7g)、石英片1 (9.4g)、SK78から未掲載の黒曜石自然面を残す原石裂片1 (7.1g) が出土した。

③. 土坑出土石器

SK07から34打製石鏃断片1点、SK58から13打製石鏃、SK75から未掲載の軟質珪質岩円礫片1 (9.3g)、SK80は89磨製石鏃未製品と360の台石の可能性のある礫、未掲載の石英片1 (1.8g) と黒曜石剥片1 (1.0g) がある。SK88は133の石錐が出土した。SK153は未掲載の黒曜石剥片1 (1.3g) がある。SK166からは73・74の磨製石鏃と115未製品、137石錐、未掲載の黒曜石剥片1 (0.7g)、粗い砂岩円礫片1 (364.3g) が出土している。SK180からは32打製石鏃、未掲載の黒曜石剥片5 (3.0g)、SK206からは未掲載の石英円礫1 (19.1g)、SK231は未掲載の黒曜石剥片1 (0.4g)、SK253から未掲載のチャート片1 (1.8g)、SK254から未掲載の黒曜石剥片1 (1.5g)、SK256から未掲載の黒曜石剥片2 (1.9g)、石錐先端1 (0.1g) が出土した。

④. 溝跡出土石器

SD01からは61打製石鏃未製品と、未掲載黒曜石剥・裂片12 (24.6g)、黒曜石RF1 ((0.5g)、磨製石鏃片? 1 (0.7g) が出土した。黒曜石裂片には自然面を残す円礫原石分割剥片がある。SD02からは未掲載の黒曜石石核、原石裂片と思われる黒曜石片2 (16.8g) がある。何れも風化した自然面を2面以上残し、角礫状の原石片である。SD10からは砂岩円礫片1 (13.9g) が出土したが、加工・使用痕はなく積極的に

剥片とも断じ得ない。SD11からは未掲載の2面に自然面を残す黒曜石片1 (3.0g) が出土した。SD13は未掲載の黒曜石剥片1 (2.3g) のみがあり、SD14は未掲載の黒曜石石核1 (4.8g)、SD18は未掲載の黒曜石剥片1 (1.7g)、SD52から113の磨製石鏃未製品が出土した。SD59からは未掲載の珪質岩製磨製石鏃粗割破片1 (3.3g) がある。SD67では298砥石が出土した。SD69からは33打製石鏃、未掲載の黒曜石剥片2 (2.7g)、黒曜石 RF 1 (1.3g)、自然面を残す石核1 (11.5g)、頁岩片1 (6.5g) が出土した。黒曜石 RF は細長い剥片に短辺2方向から剥離調整を加えており、石鏃未製品かもしれない。重複する SD74からは313砥石、未掲載の黒曜石剥片1 (0.7g)、石英片1 (4.2g) がある。SD71からは353石核が出土した。SD80からは36打製石鏃が出土している。

⑤. 検出面他出土石器

Ⅲ②区 検出面とⅠ層採取品である。38・39打製石鏃と62・63未製品、77・92・116～118磨製石鏃未製品、136・138石鏃、215UF、222RF、275扁平片刃石斧、227・230・231打製石斧、300砥石が出土している。未掲載では黒曜石剥片112 (282.3g)、石英片1 (16.1) 粗い砂岩片1 (188.9)、チャート円礫片1 (42.4g)、チャート剥片1 (7.1g)、頁岩剥片1 (5.5g)、珪質岩円礫片1 (66.3g)、硬砂岩片1 (42.2g) がある。黒曜石とチャート剥片、頁岩剥片以外は石器製作に伴うものとは断じ得ない。また、黒曜石剥片は自然面を残す原石の裂片と思われるものも多い。

Ⅲ④区 40打製石鏃、140石鏃、323黒曜石石核未製品?と322原石や355石核、216UF、152縦長石匙がある。未掲載は珪質岩剥片1 (0.6g)、黒曜石剥・裂片27 (87.6g)、RF 1 (2.8g)、泥岩片1 (2.8g)、石英片3 (17.6g)、部分的に研磨される円礫片1 (16.5g)、粗い砂岩片16 (74.5g) がある。

Ⅲ⑤区 64打製石鏃未製品、141石鏃?があり、未掲載として緑色岩石斧破片1 (4.1g)、黒曜石原石 (22.3g)、黒曜石剥片12 (19.1g) がある。石斧破片は片刃石斧とも思われるが、小片で仔細不明である。

Ⅳ①区 12石鏃未製品、223打製石斧があり、未掲載では黒曜石剥・原石裂片6 (34.7g)、研磨痕のある安山岩円礫1 (692.3g) が採取された。

Ⅳ②区 41打製石鏃、218・219RF、228・229打製石斧、217UF、318黒曜石原石がある。未掲載では黒曜石剥片22 (40.2g)、薄い縦長剥片刃部に微細な剥離痕のある UF 1 (0.8g)、微細な剥離調整が認められる厚めの黒曜石 RF 1 (1.7g)、赤色チャート裂片1 (2.8g) が出土した。

Ⅳ③区 44打製石鏃、251乳棒状石斧片が採取された。

微高地域検出面 調査地区の記載がないもので、225打製石斧がある。

(3) Ⅳ・Ⅴ区低地出土石器

Ⅳ①区では未掲載の黒曜石原石裂片1 (14.3g)、Ⅴ①・②区では42の打製石鏃、未掲載の黒曜石剥片4 (83.7g)、赤色チャート裂片1 (1.8g) がある。SD72からは14・35打製石鏃、139石鏃、353石鏃、236磨製石包丁、未掲載の黒曜石原石裂片3 (10.9g) がある。内1点は両極打法による裂片とみられる。他に黒曜石1 (9.4g)、チャート剥片1 (1.6g) がある。SD78から未掲載の黒曜石剥片1 (0.6g) のみがある。

3. 黒曜石の産地推定分析結果について

箕輪遺跡出土黒曜石の産地推定について沼津工業高等専門学校 望月 明彦氏に分析を依頼した。その結果は第5章に掲載した通りであるが、ここでは若干の分析を加えておく。

県内の弥生時代黒曜石石器の産地推定では、比較的数多く分析された例として佐久市内の資料群がある(註1)。佐久市例は諏訪・和田地域が主体で、なかでも諏訪星ヶ台群が圧倒的な比率を占め、和田の緒群

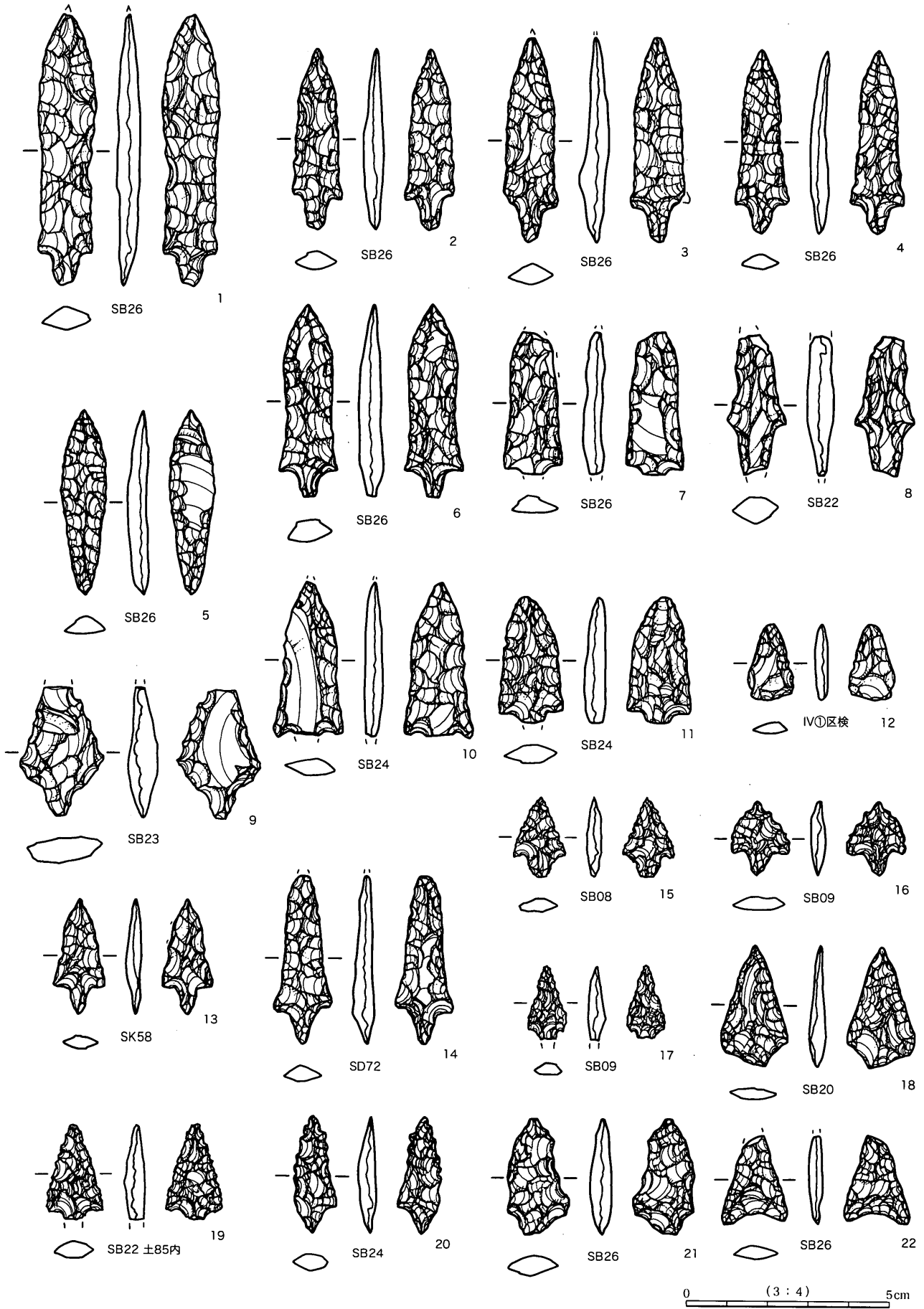
が少量加わるあり方は箕輪遺跡の分析結果とほぼ一致する。ただし、箕輪遺跡では蓼科系が全く確認されず、一方で和田付近と思われるが産地の特定できない一群（註2）が存在する若干の違いもある。しかし、大枠は一致するので同じ産地採取の黒曜石が北一佐久地域と、南一伊那谷北部に搬出されていると理解できよう。こうしたあり方は誰でも採取できる共有産地とされていたか、採掘を担う特定の生産者が介在したことによるのだろうか。ただ、差異を示す資料は佐久市や箕輪遺跡の分析資料にたまたま含まれなかったという確率の問題かもしれないが、星ヶ台群を中心としながらも、周辺の若干異なる複数産地が含まれるあり方が佐久・上伊那で認められる背景は気になる。

次に箕輪遺跡内で搬入された原石・石核・剥片類など石器製作に関わる資料と石鏃を対比してみると、黒曜石石鏃の製品・未製品は諏訪星ヶ台群を中心に和田芙蓉ライト群、同鷹山群、同土屋橋北群、同土屋橋西群、同土屋橋南群などが認められ、ほぼ原石・石核・剥片と一致している。このことから黒曜石の搬入から製品製作までが行われていたことは推測できる。

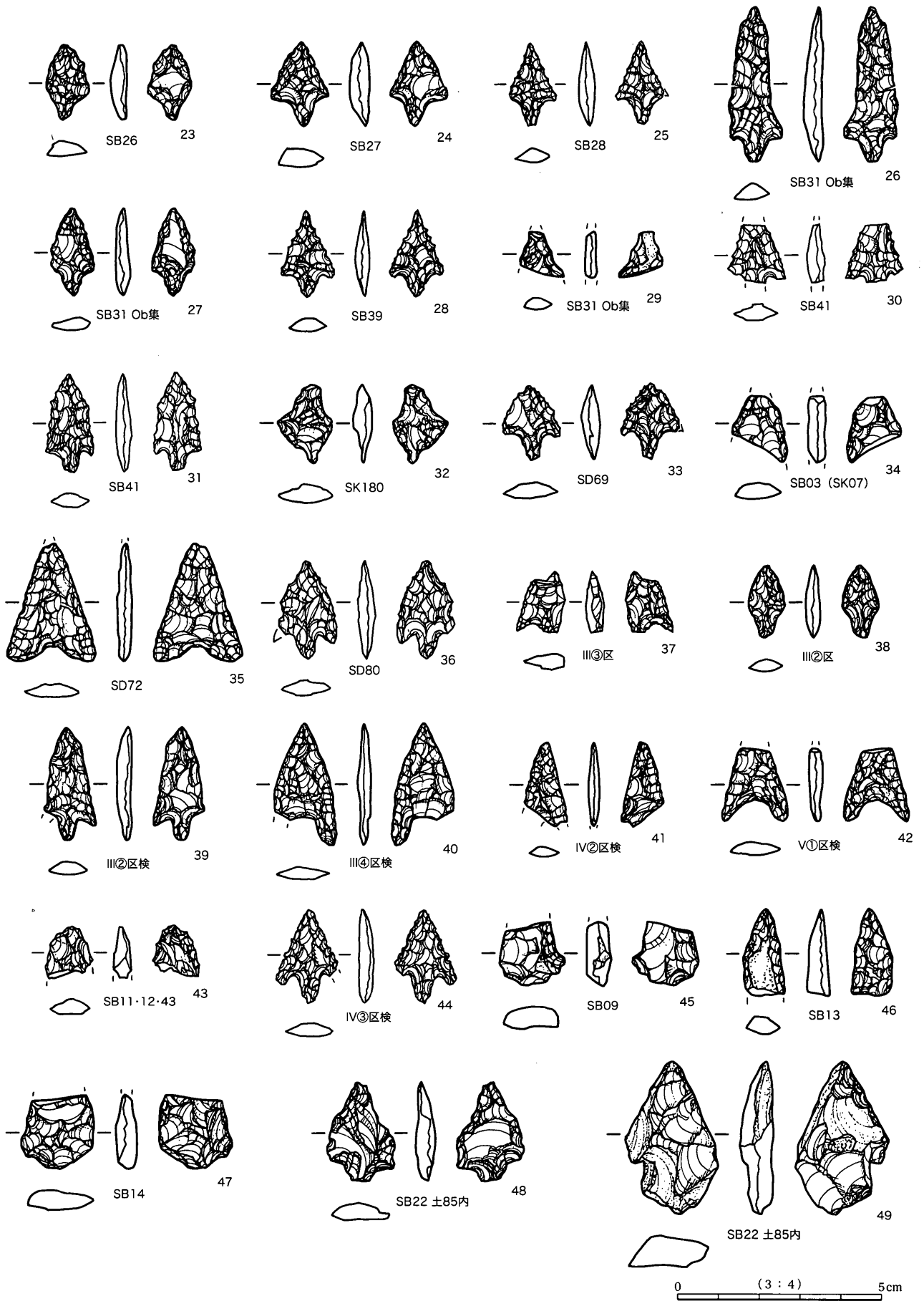
ところで、本遺跡ではSB22土器85内、SB26黒曜石集中、SB31黒曜石集中など特徴的な黒曜石一括出土が認められたが、その産地を比較すると、SB22とSB31例は諏訪星ヶ台が圧倒的で和田芙蓉ライト群、和田鷹山群が続くあり方は類似し、SB26黒曜石集中は和田産が多い傾向で若干異なる。しかし、何れも単一産地で占められることはない。搬入時に複数産地のものが混ぜられていた可能性もあるが、SB26のような比率が異なる事例もあることからすれば、搬入契機の異なる黒曜石が消費―剥片集積を繰り返すなかで混在したと理解したほうが良いかもしれない。

註1 2004佐久市教育委員会『東五里田遺跡』

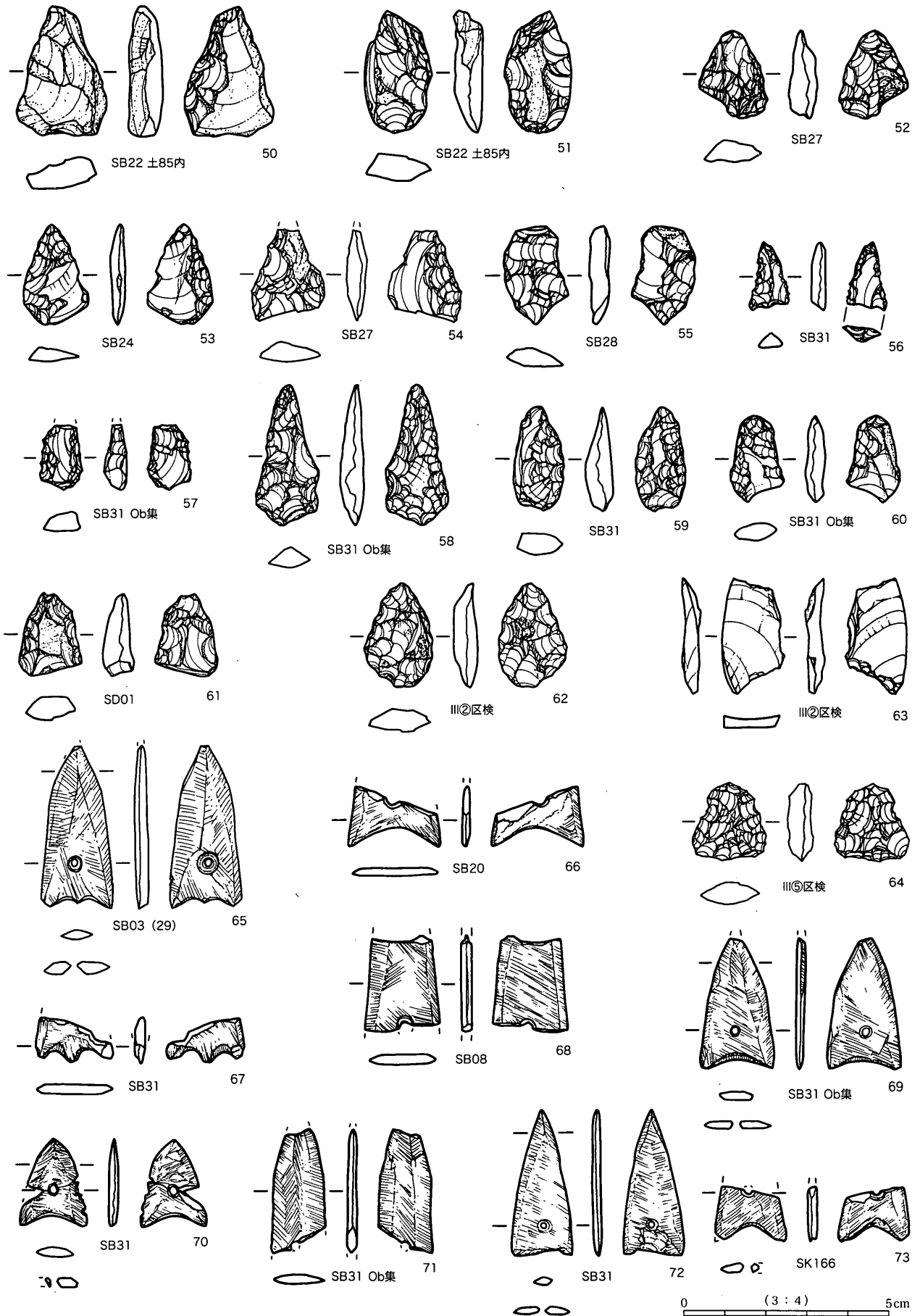
註2 望月 昭彦氏のご教示による。



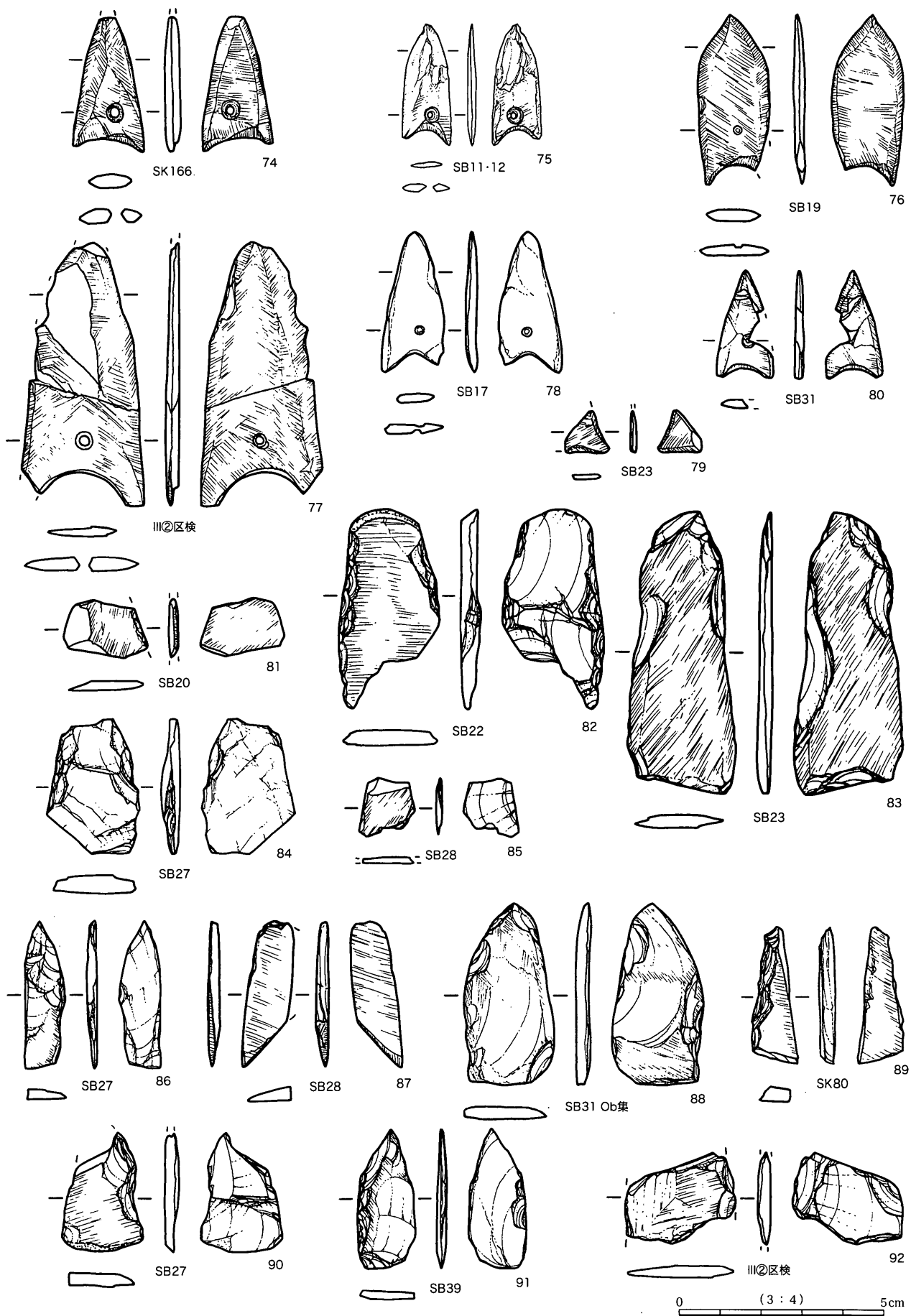
第134图 石器 1



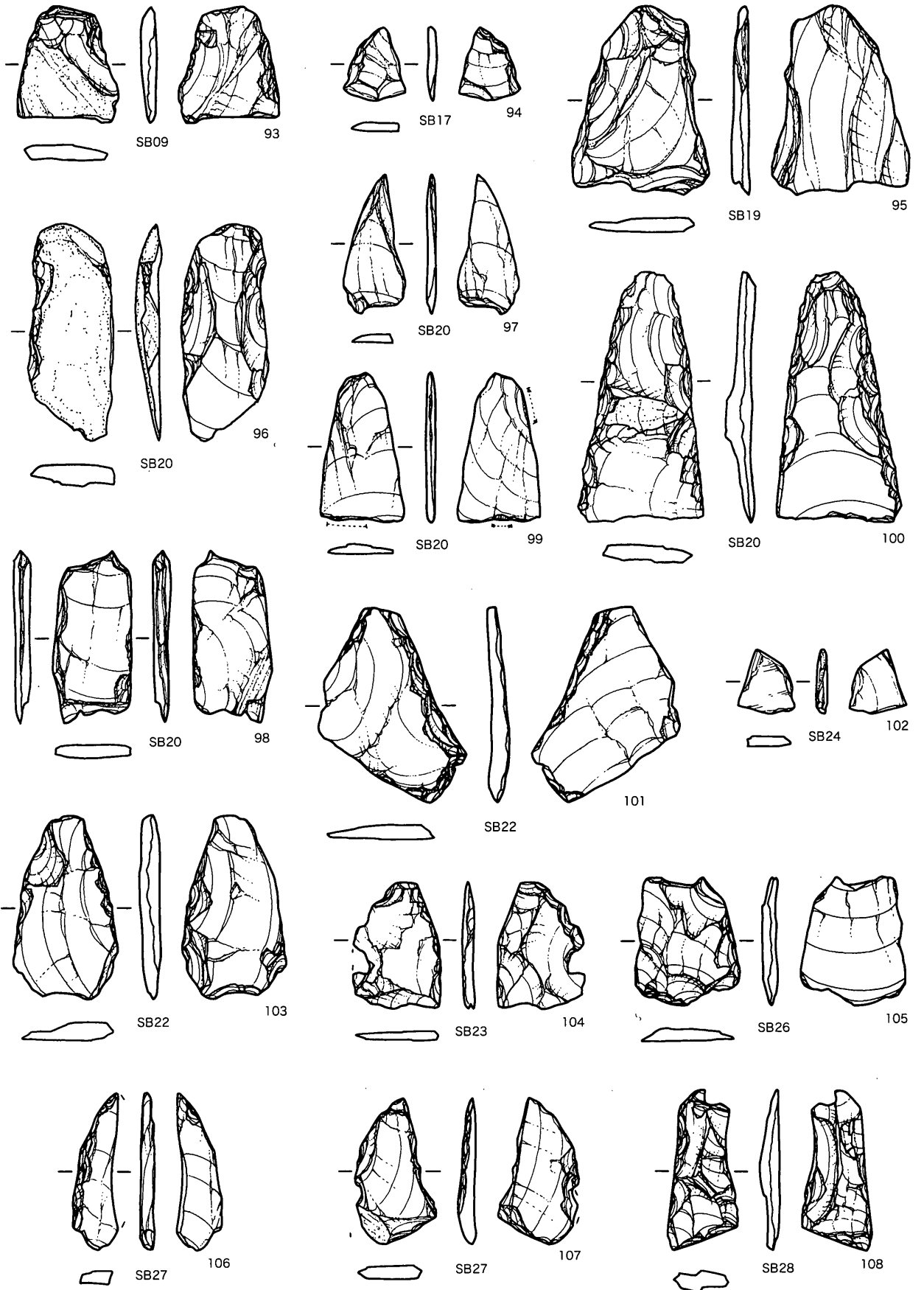
第135图 石器 2



第136図 石器3

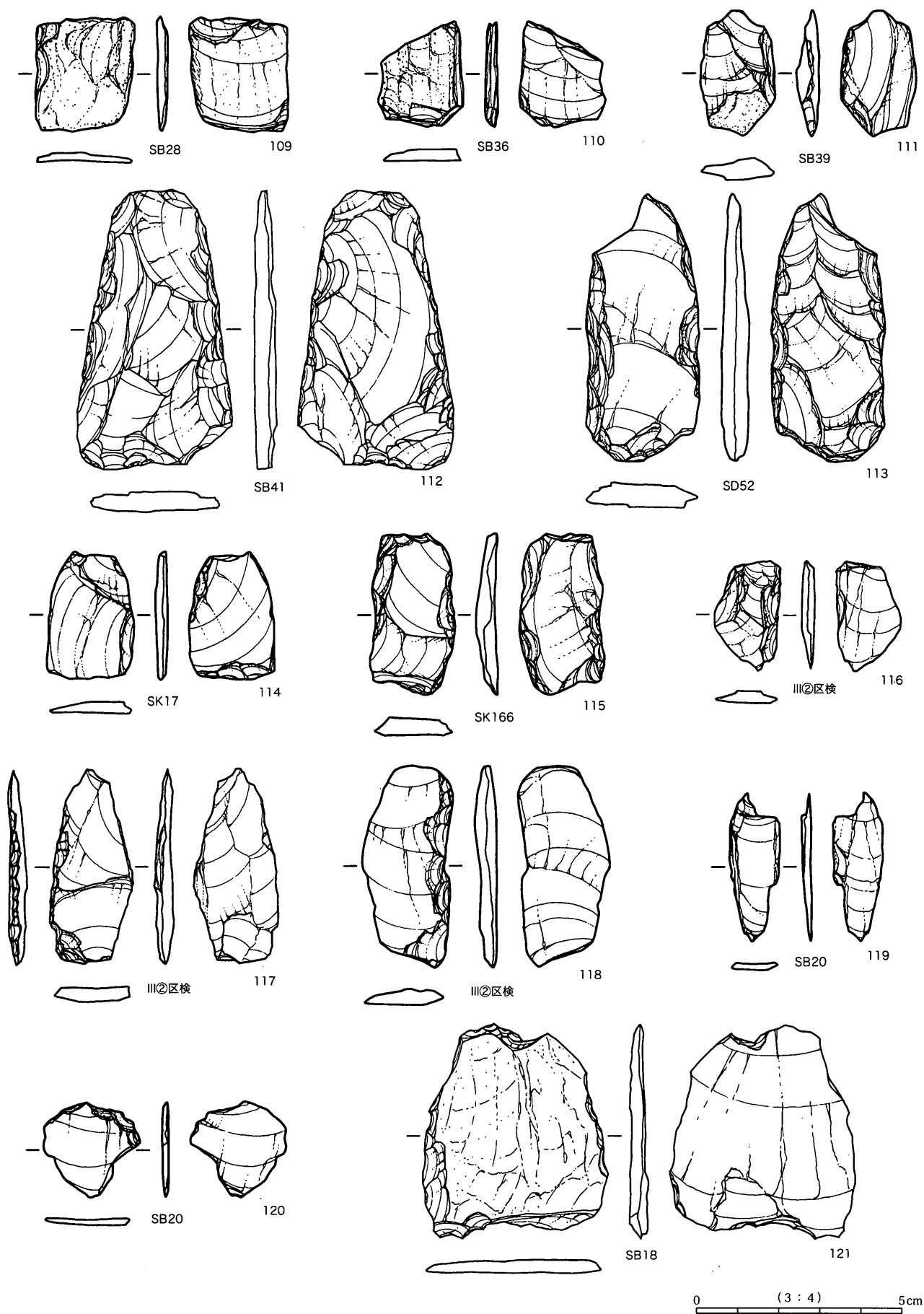


第137图 石器4

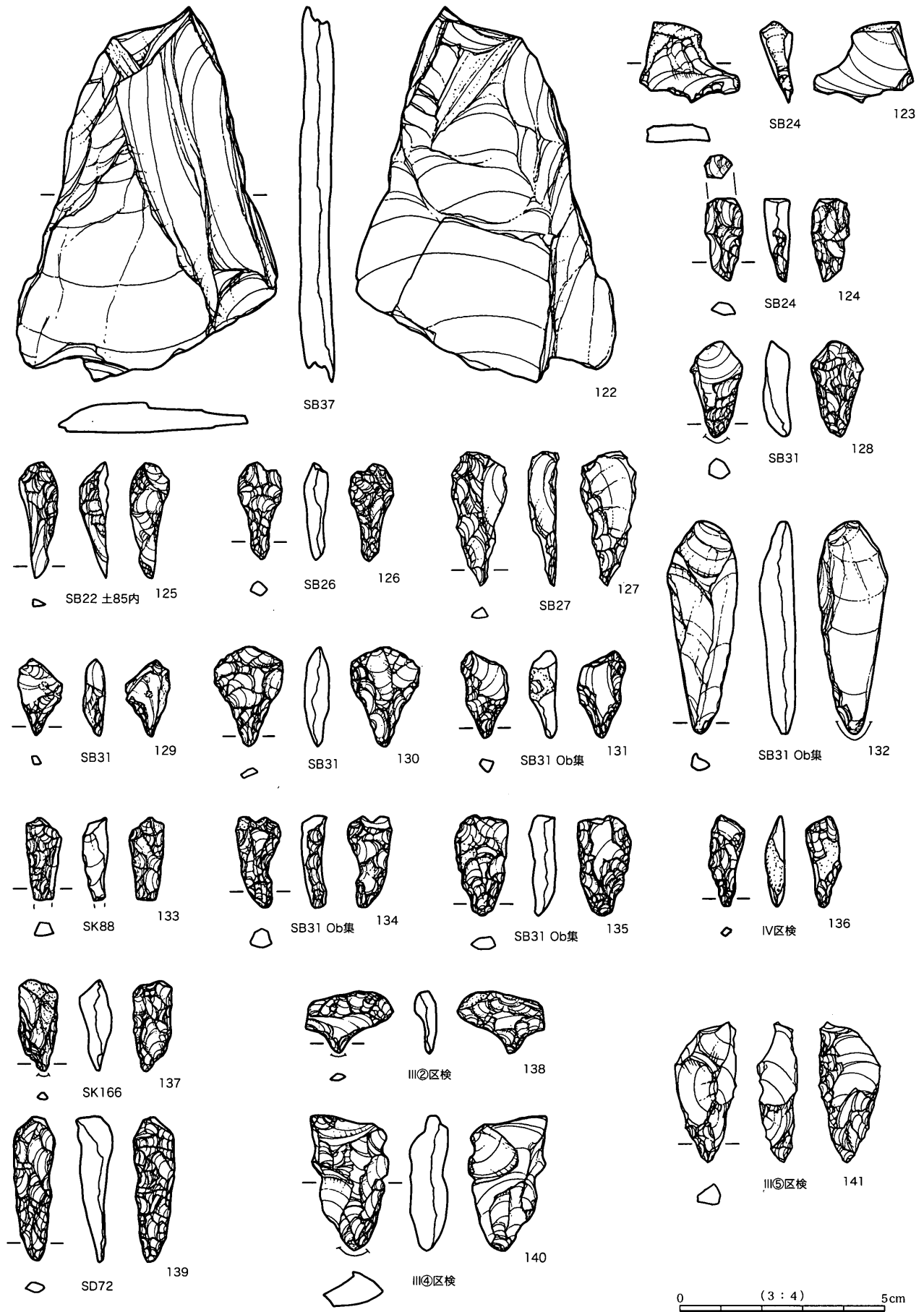


0 (3 : 4) 5cm

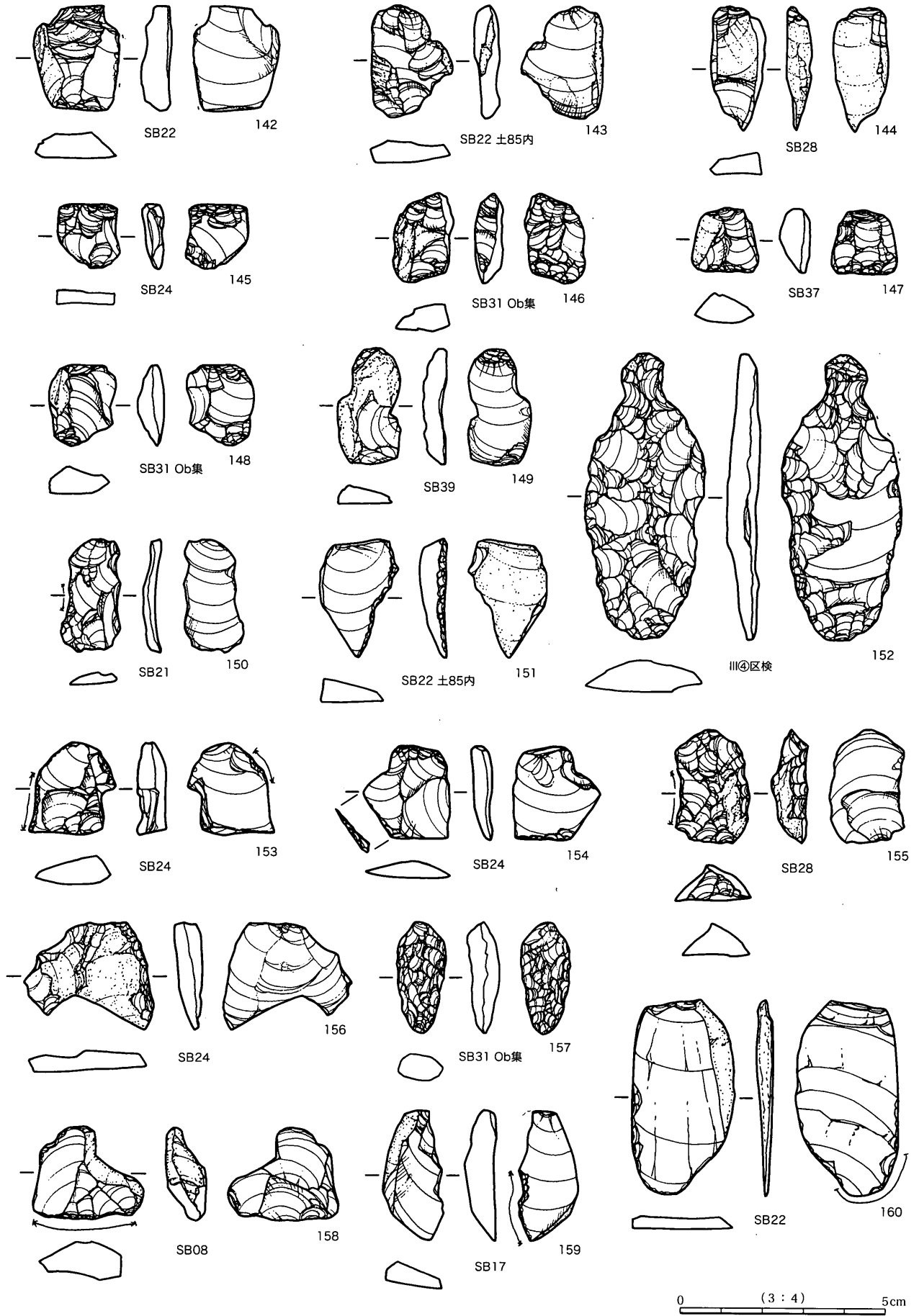
第138圖 石器 5



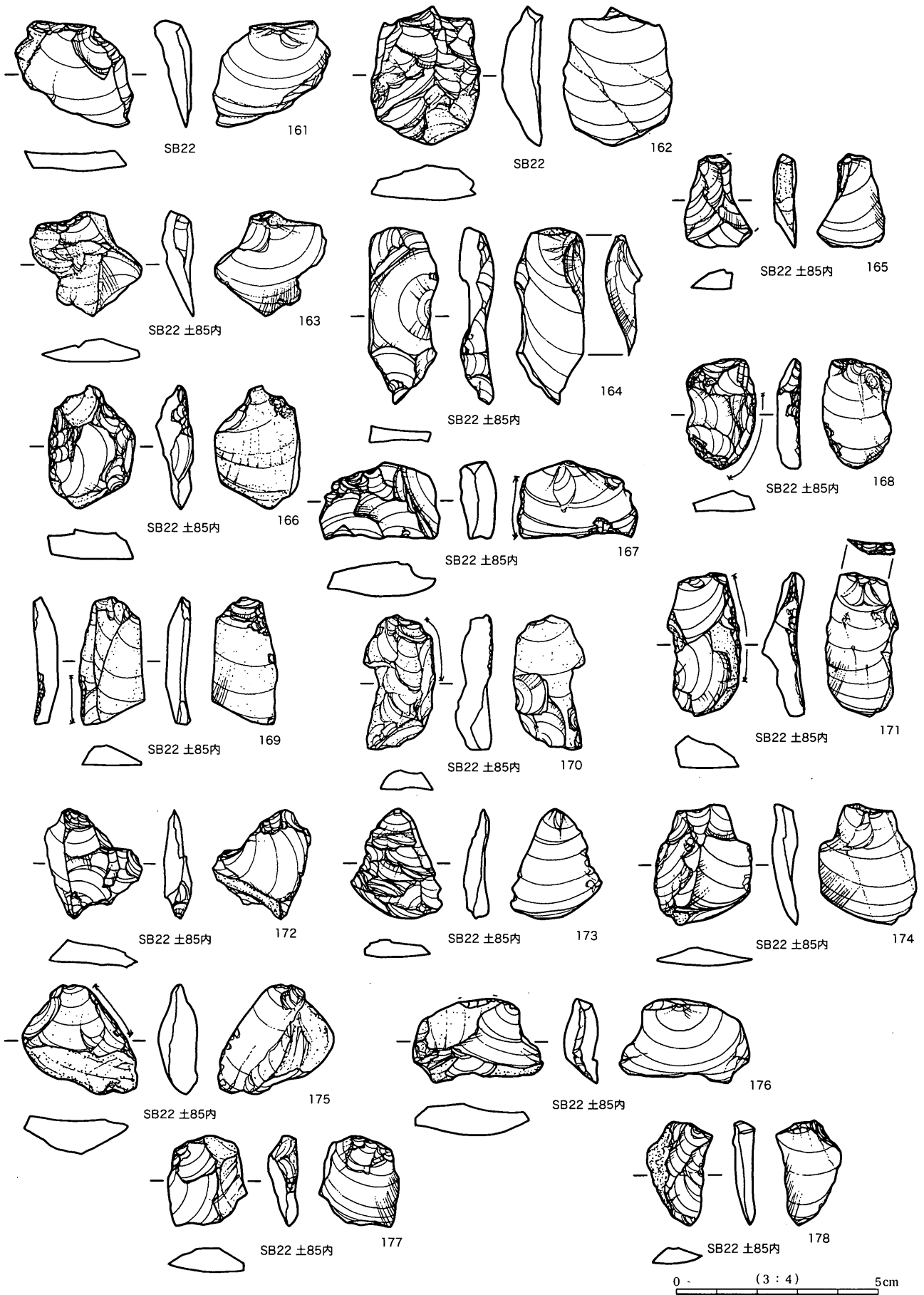
第139図 石器 6



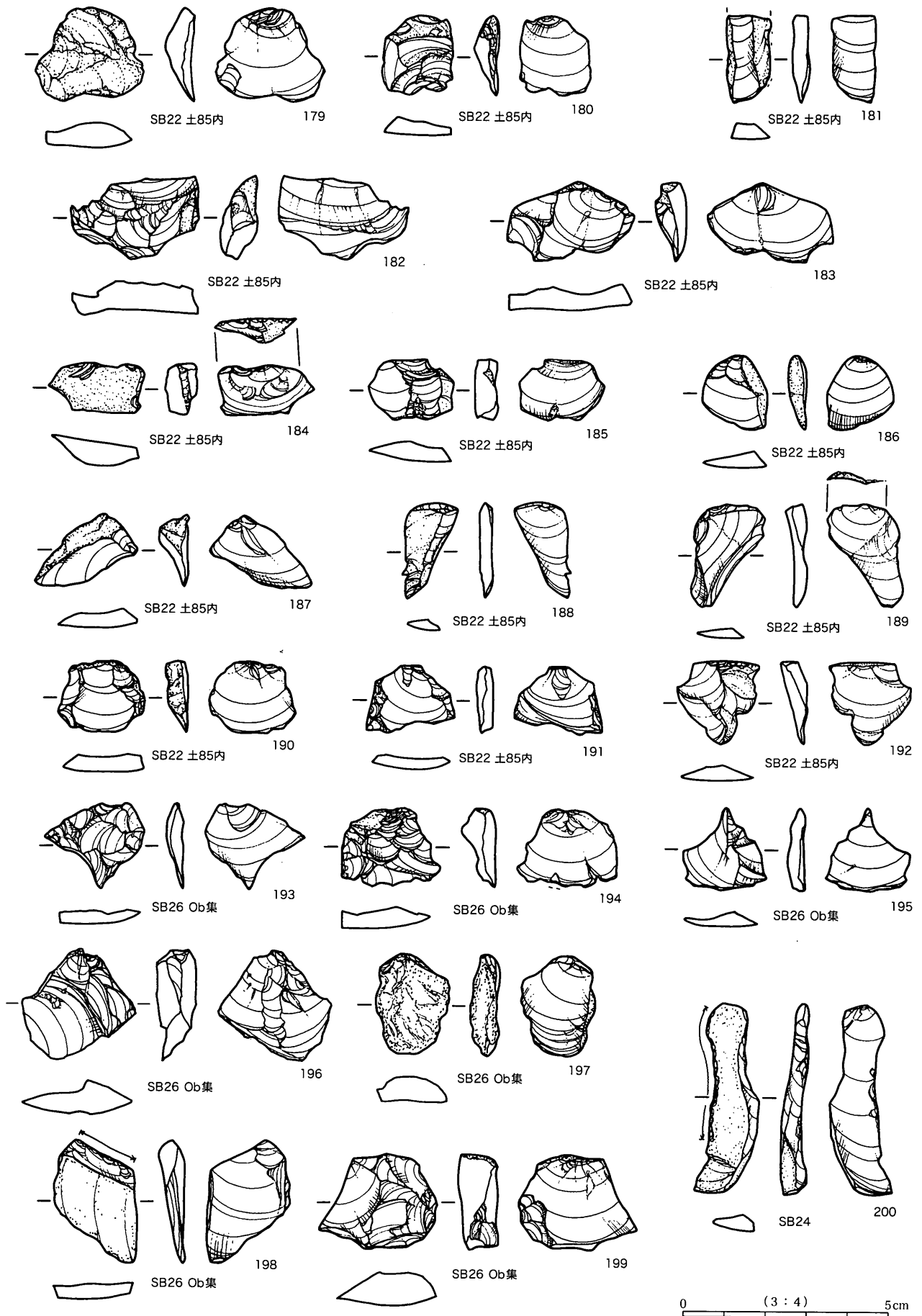
第140图 石器 7



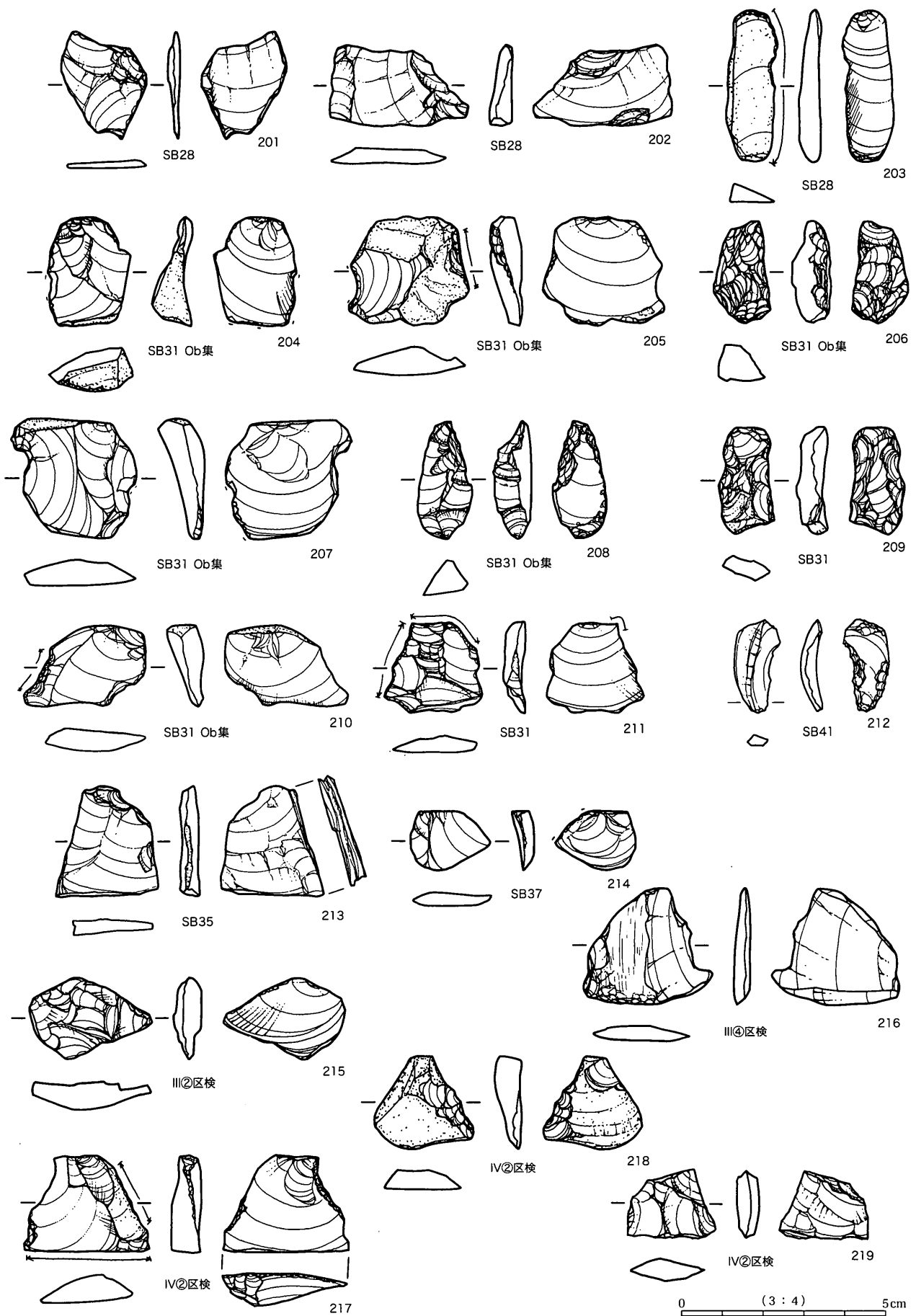
第141图 石器 8



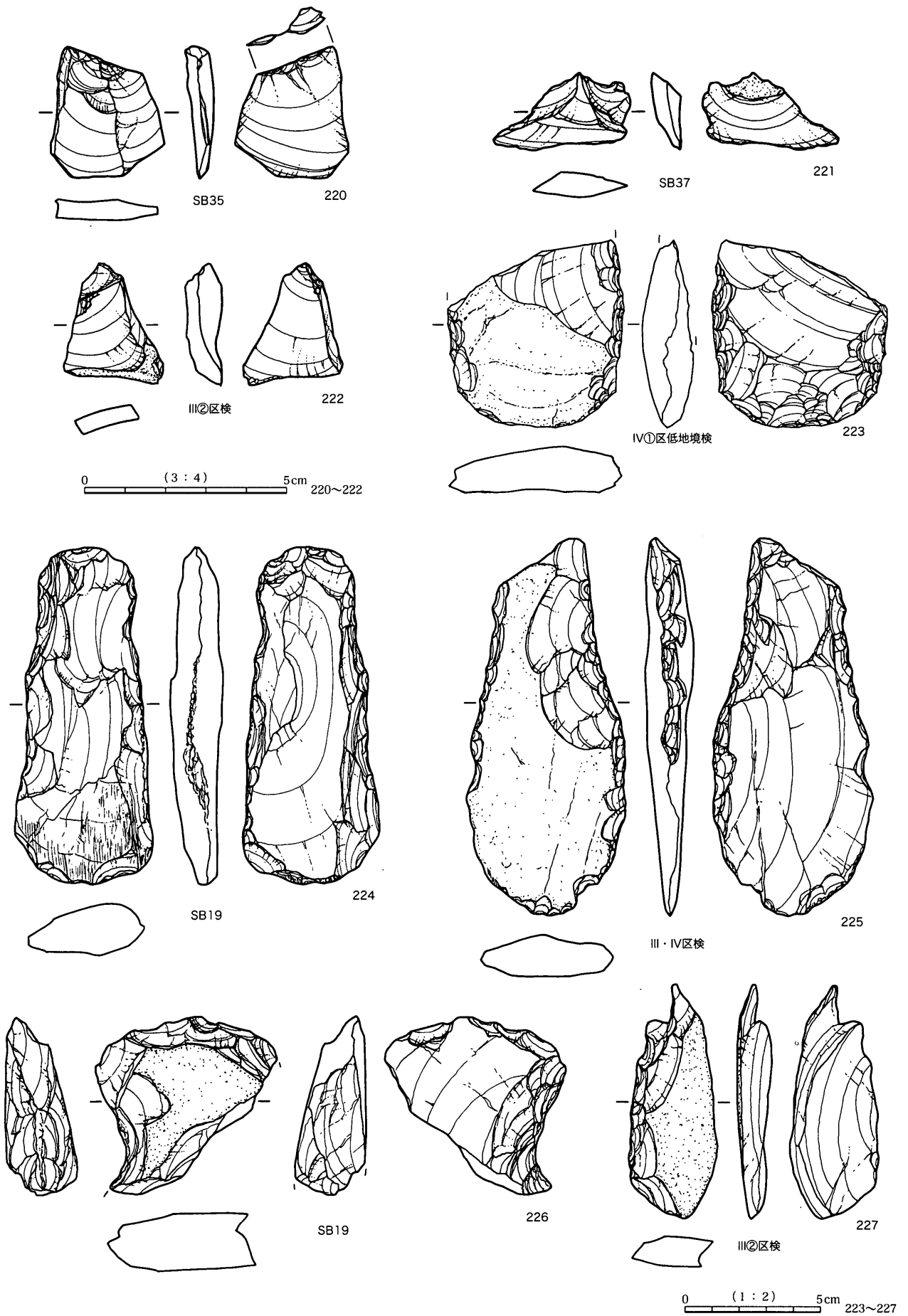
第142图 石器 9



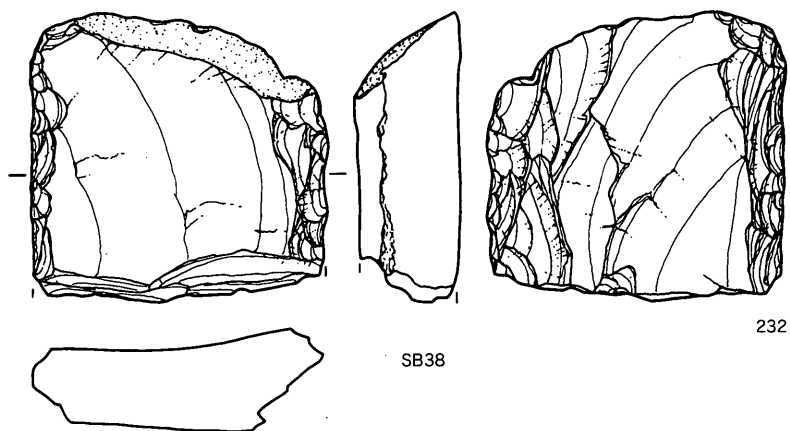
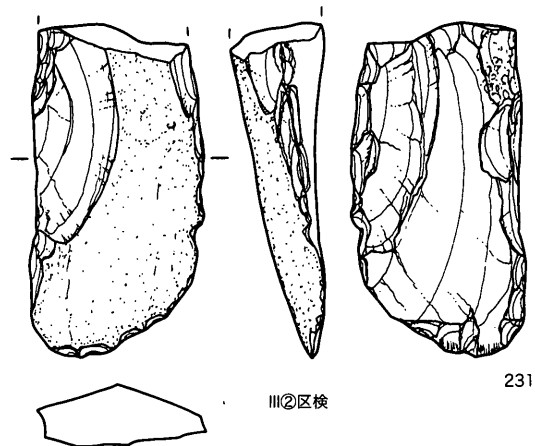
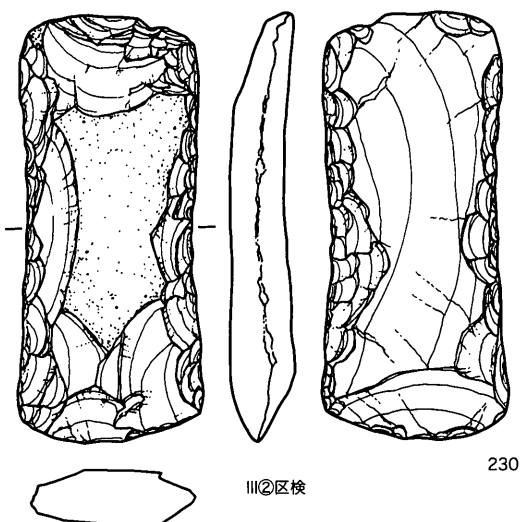
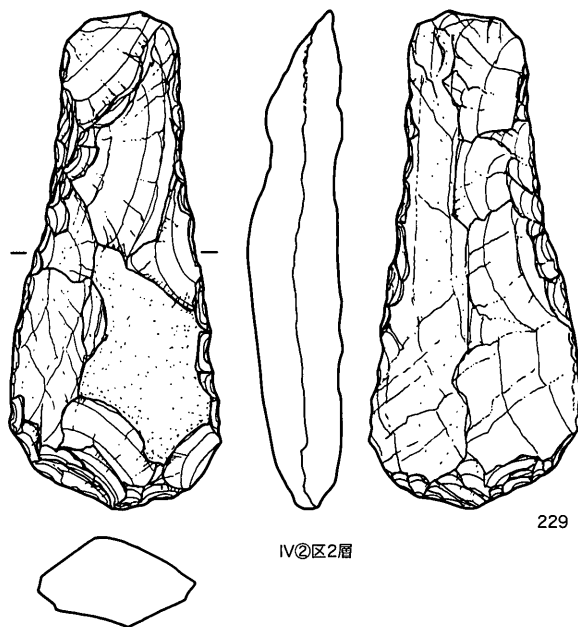
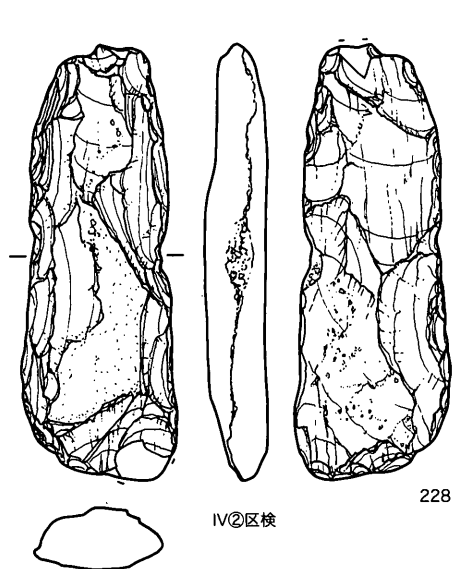
第143図 石器10



第144图 石器11

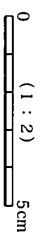
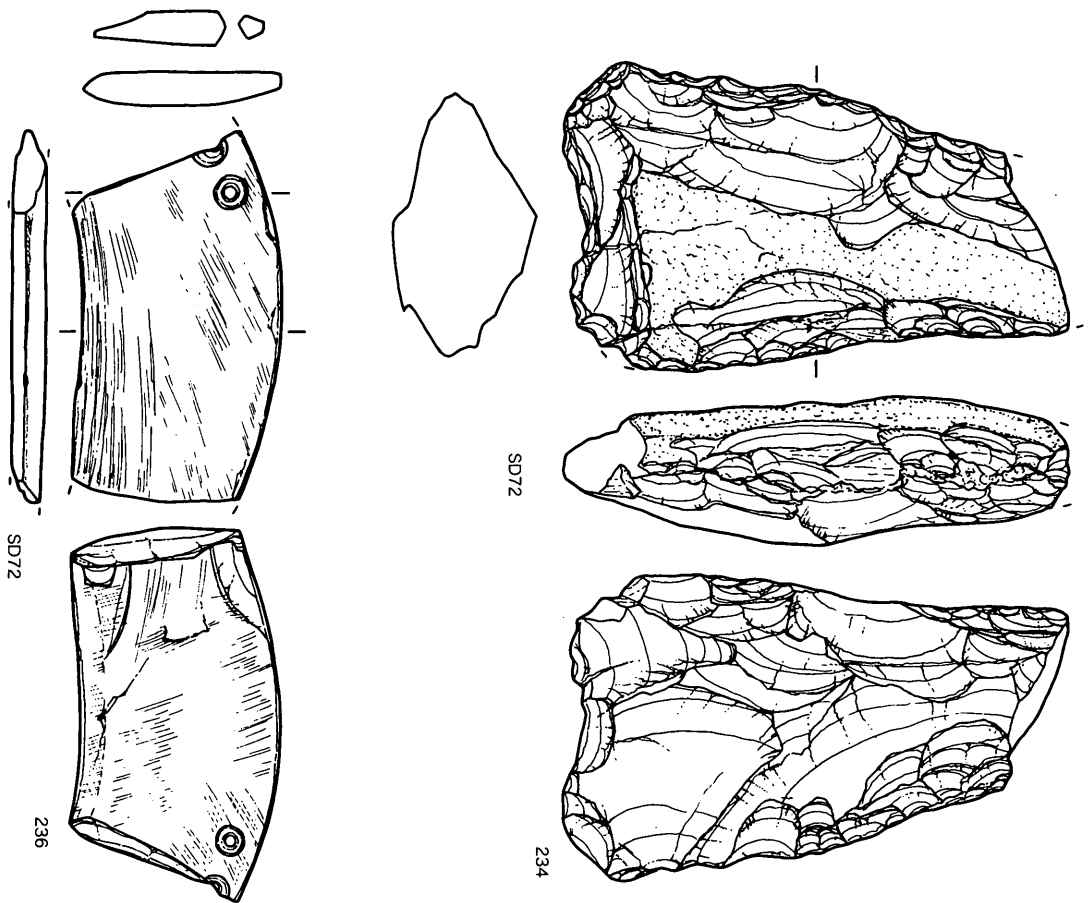
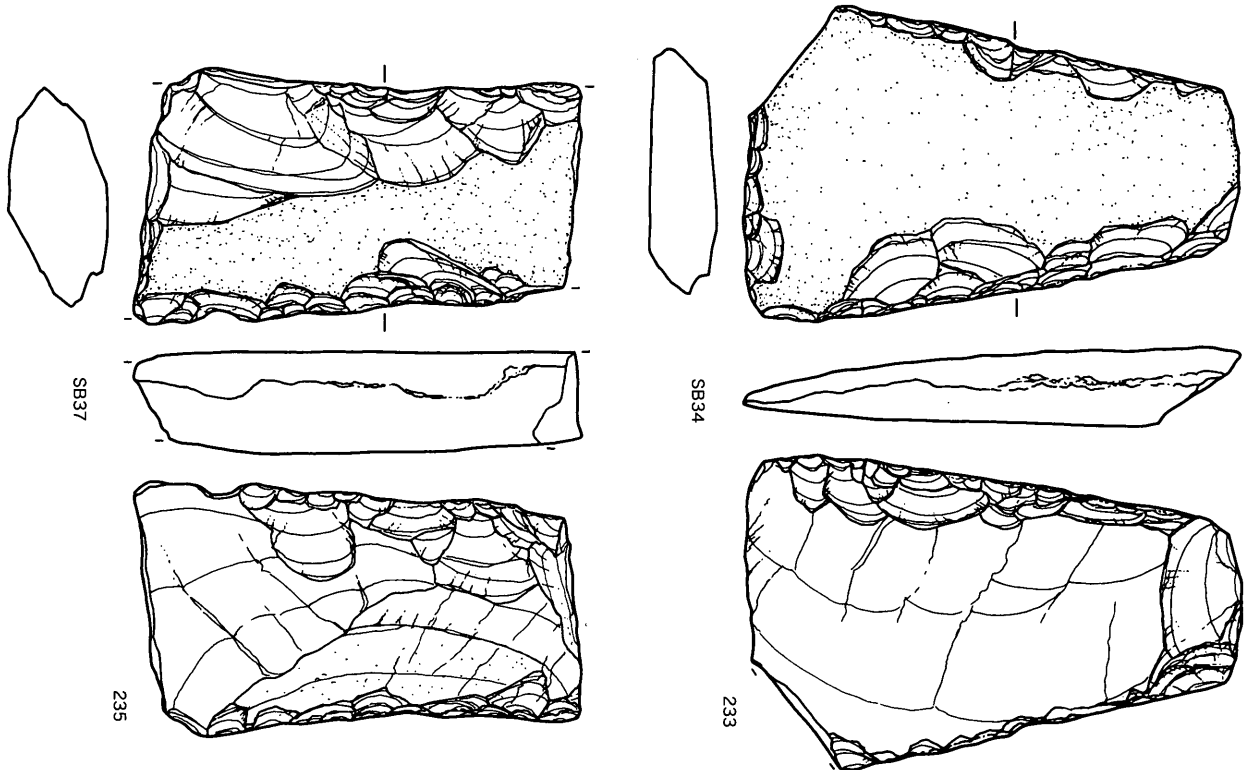


第145图 石器12

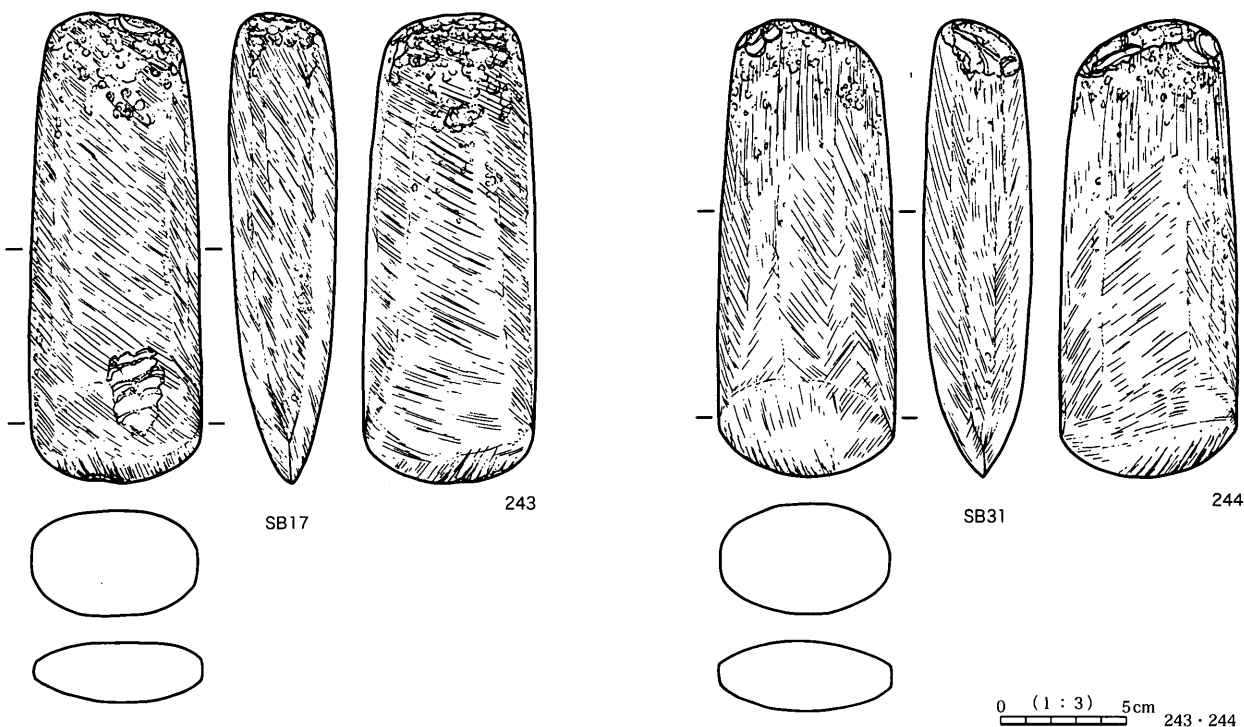
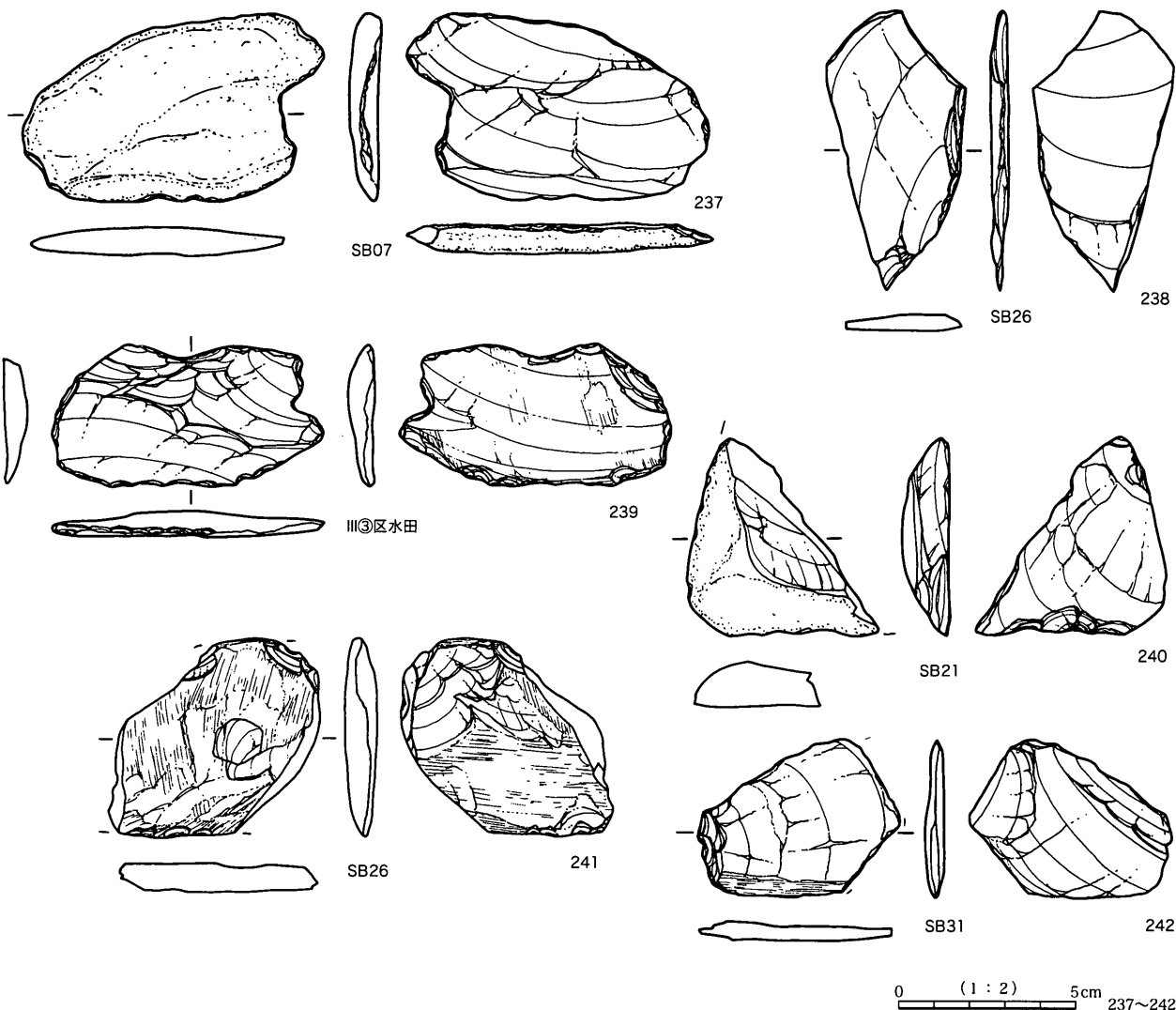


0 (1:2) 5cm

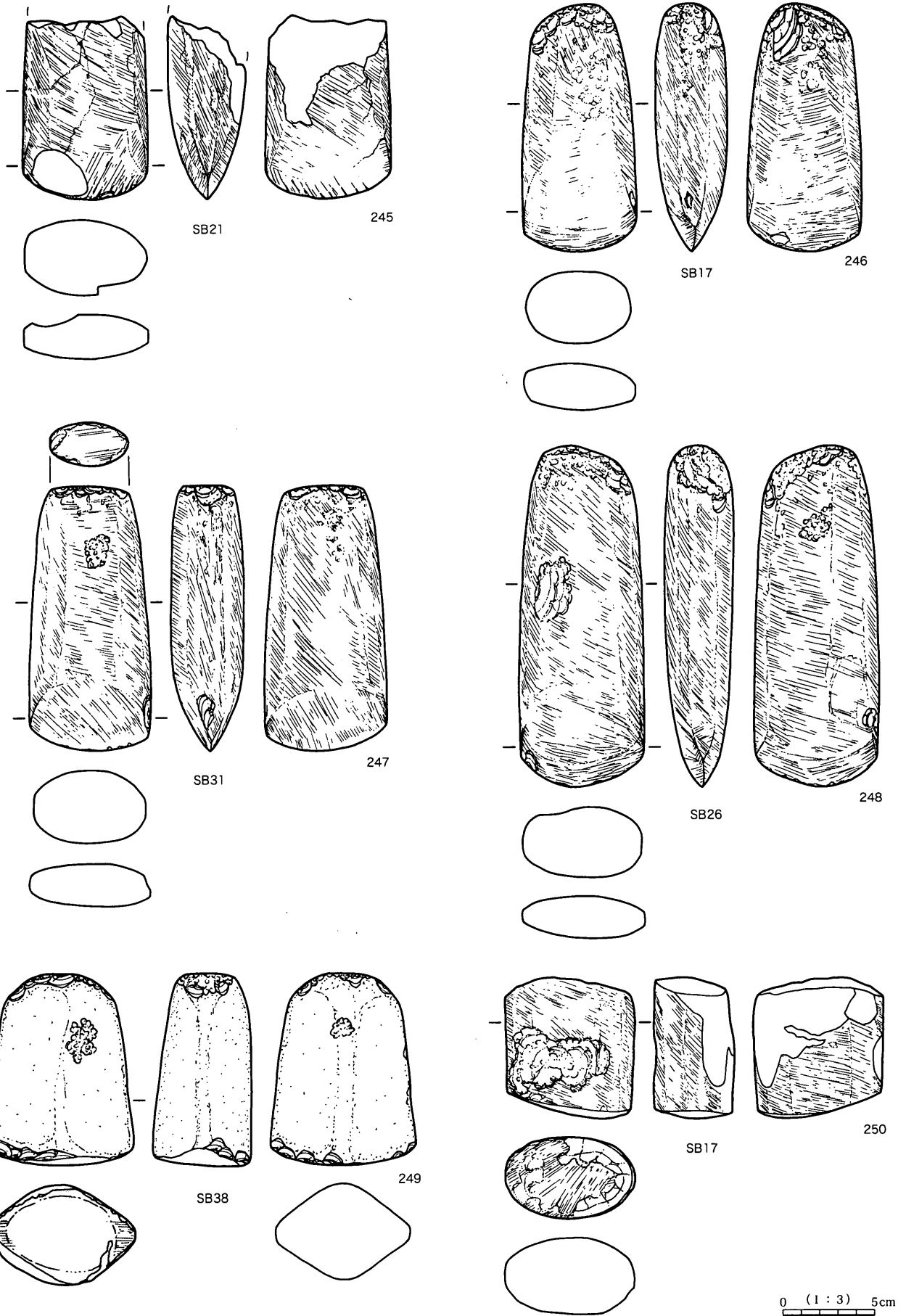
第146図 石器13



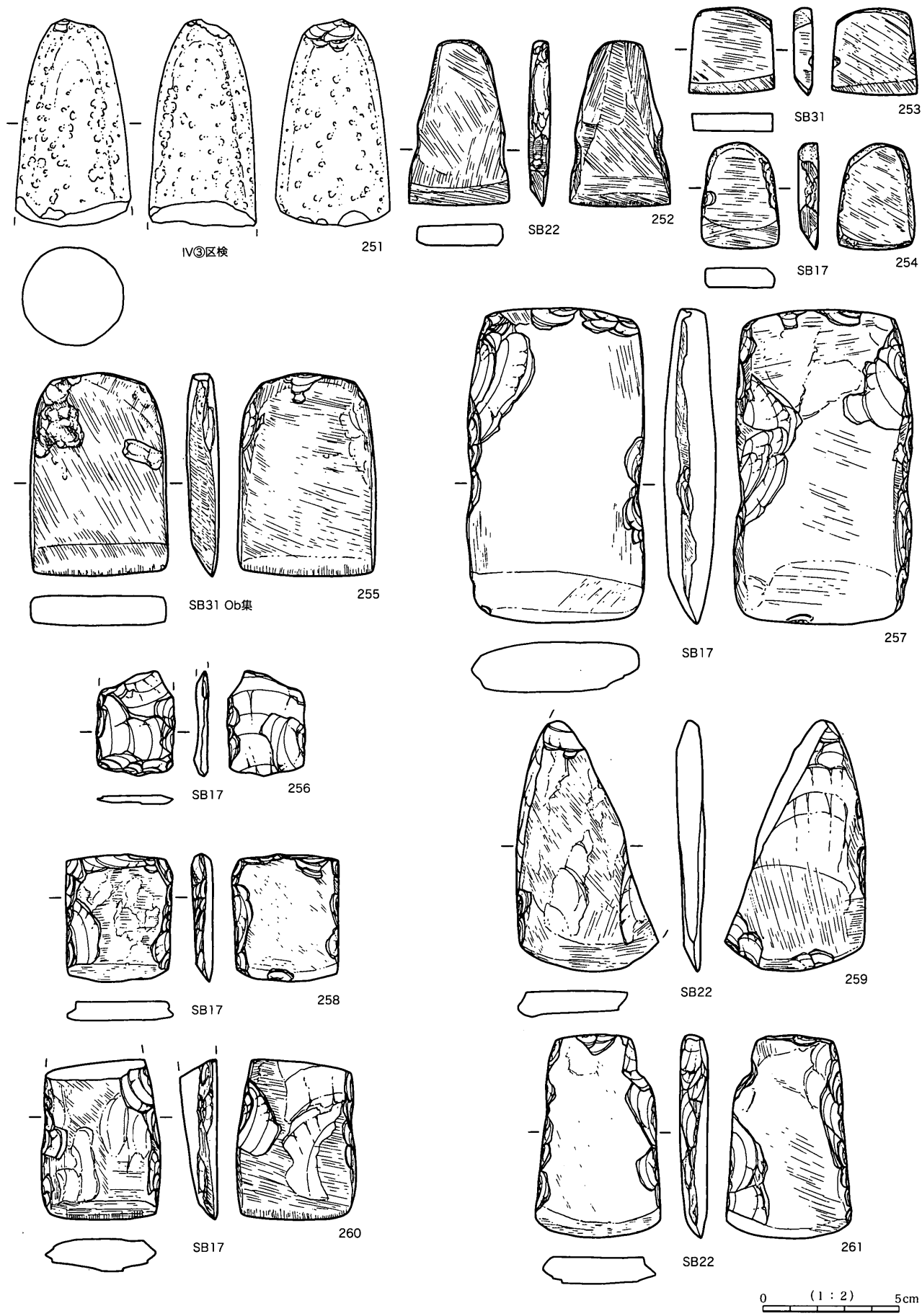
第147図 石器14



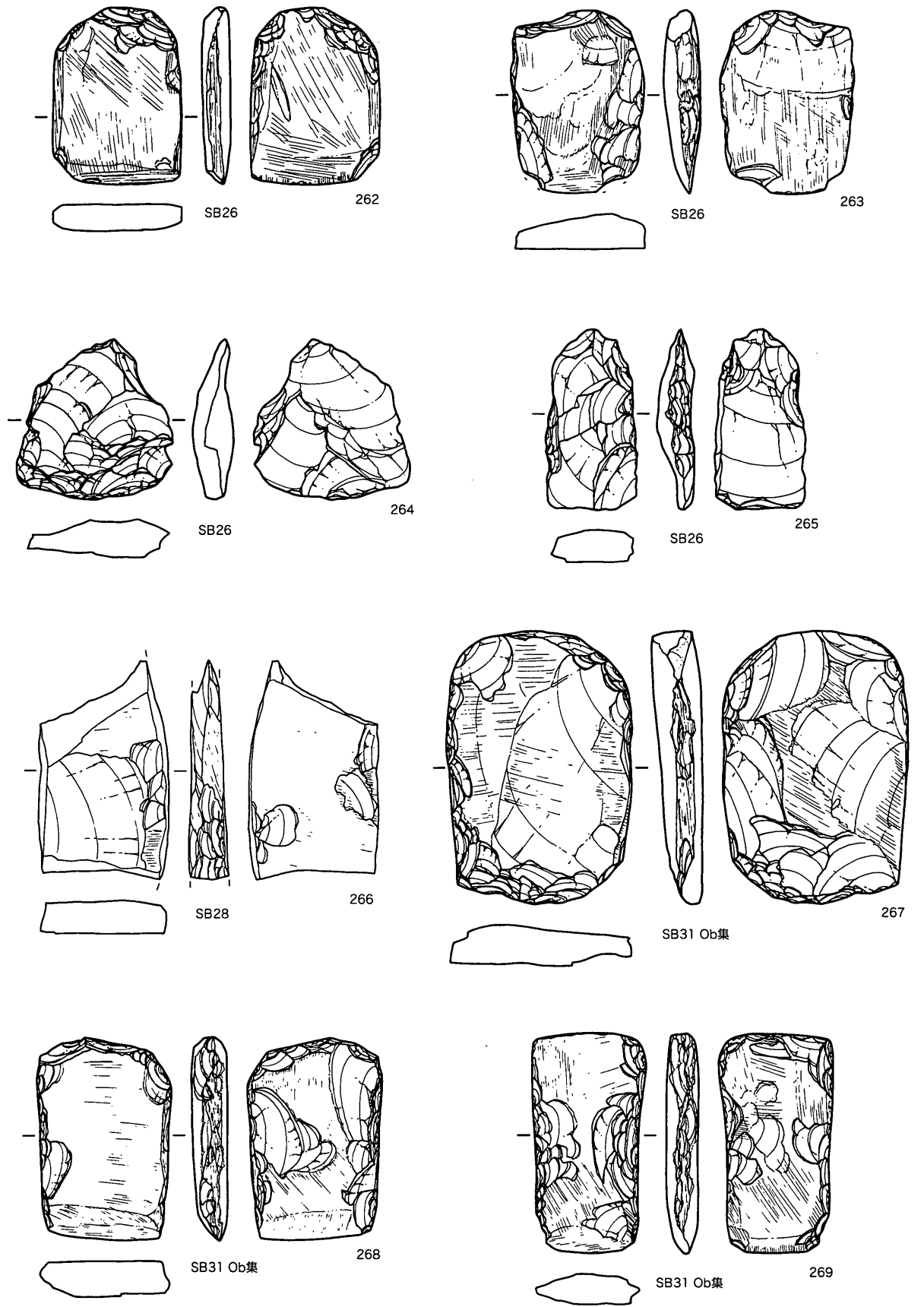
第148図 石器15



第149图 石器16

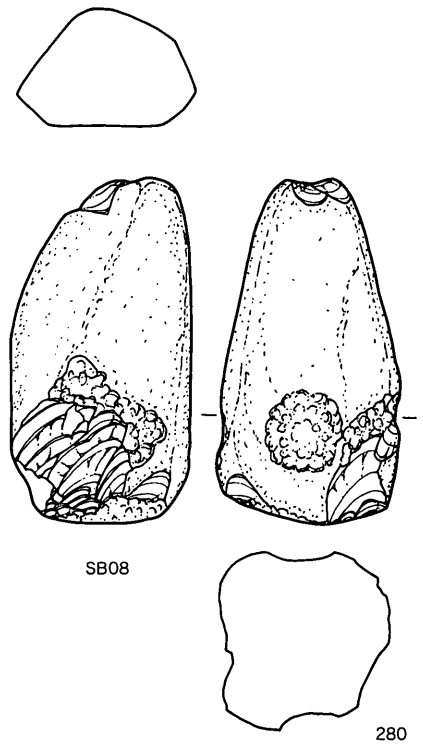
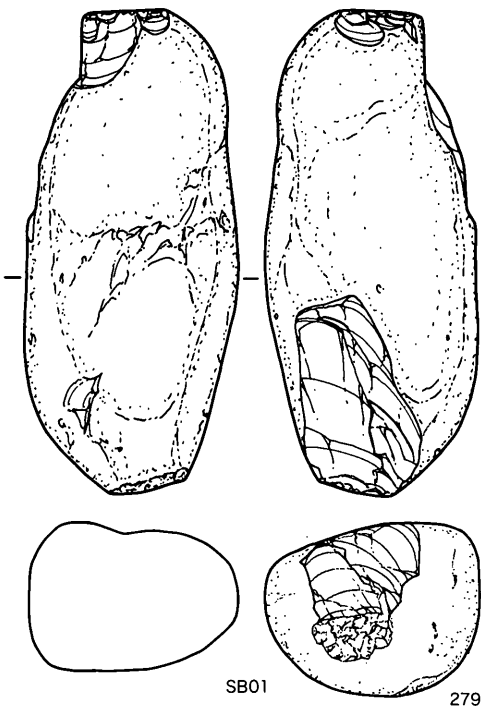
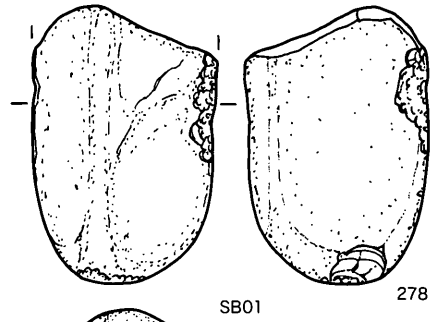
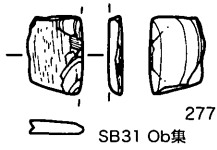
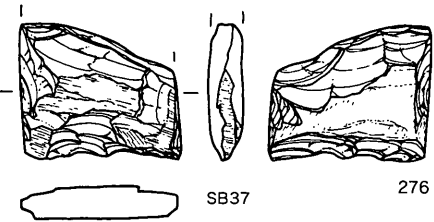
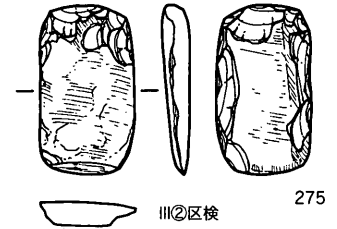
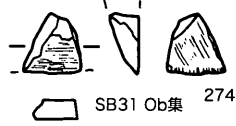
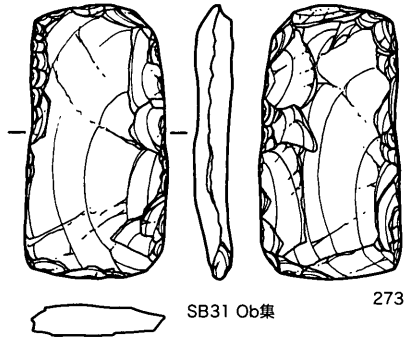
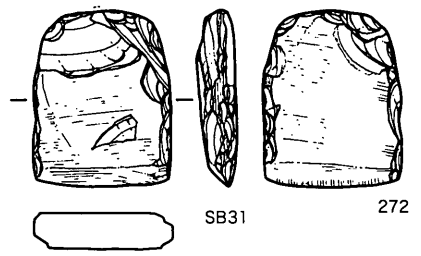
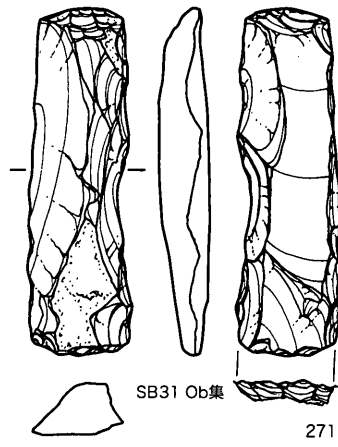
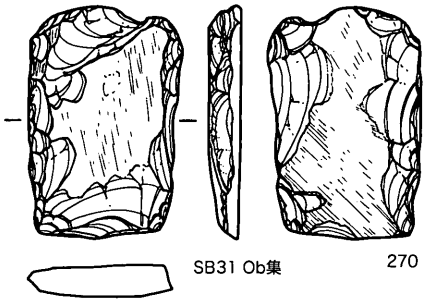


第150図 石器17



0 (1:2) 5cm

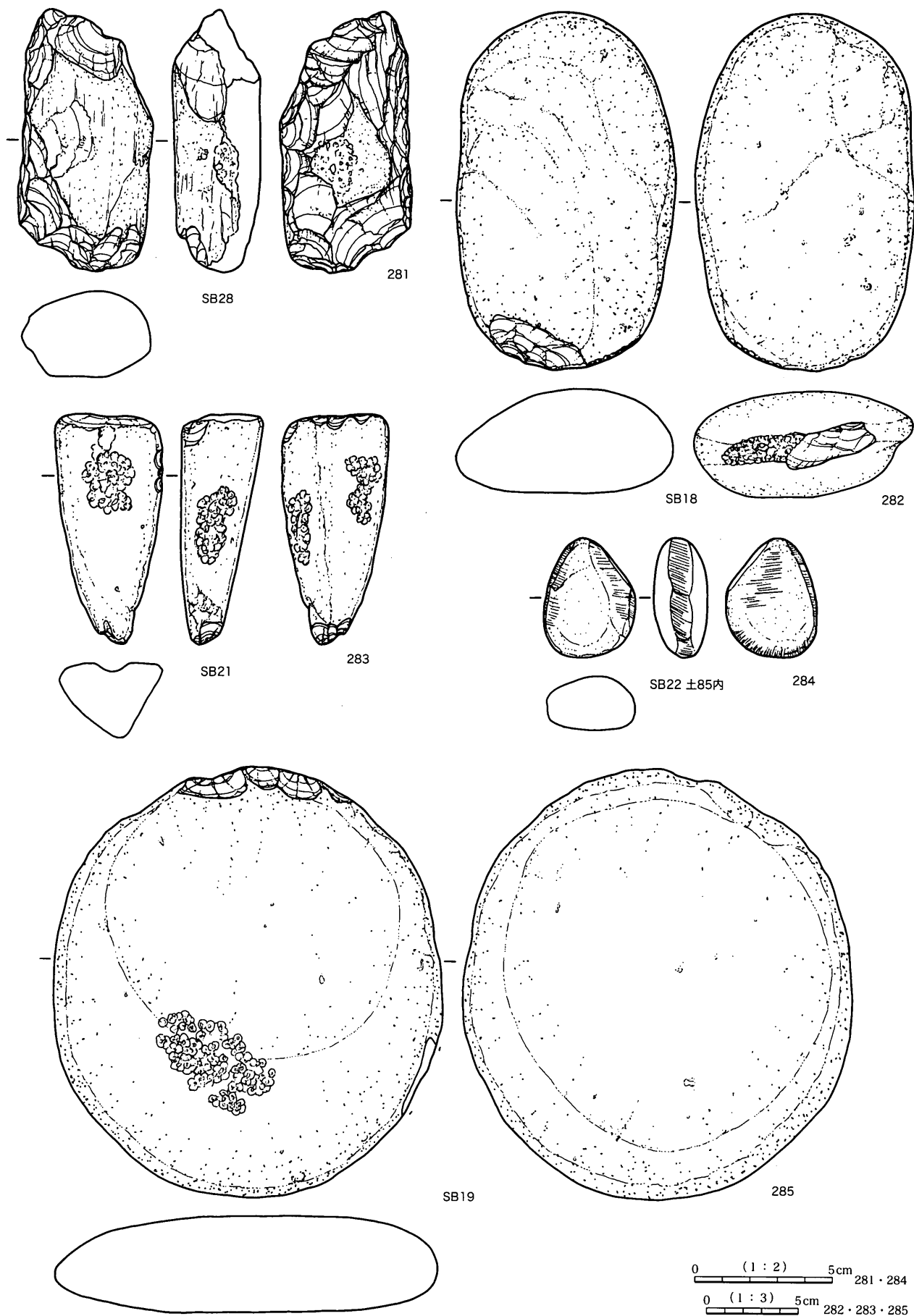
第151图 石器18



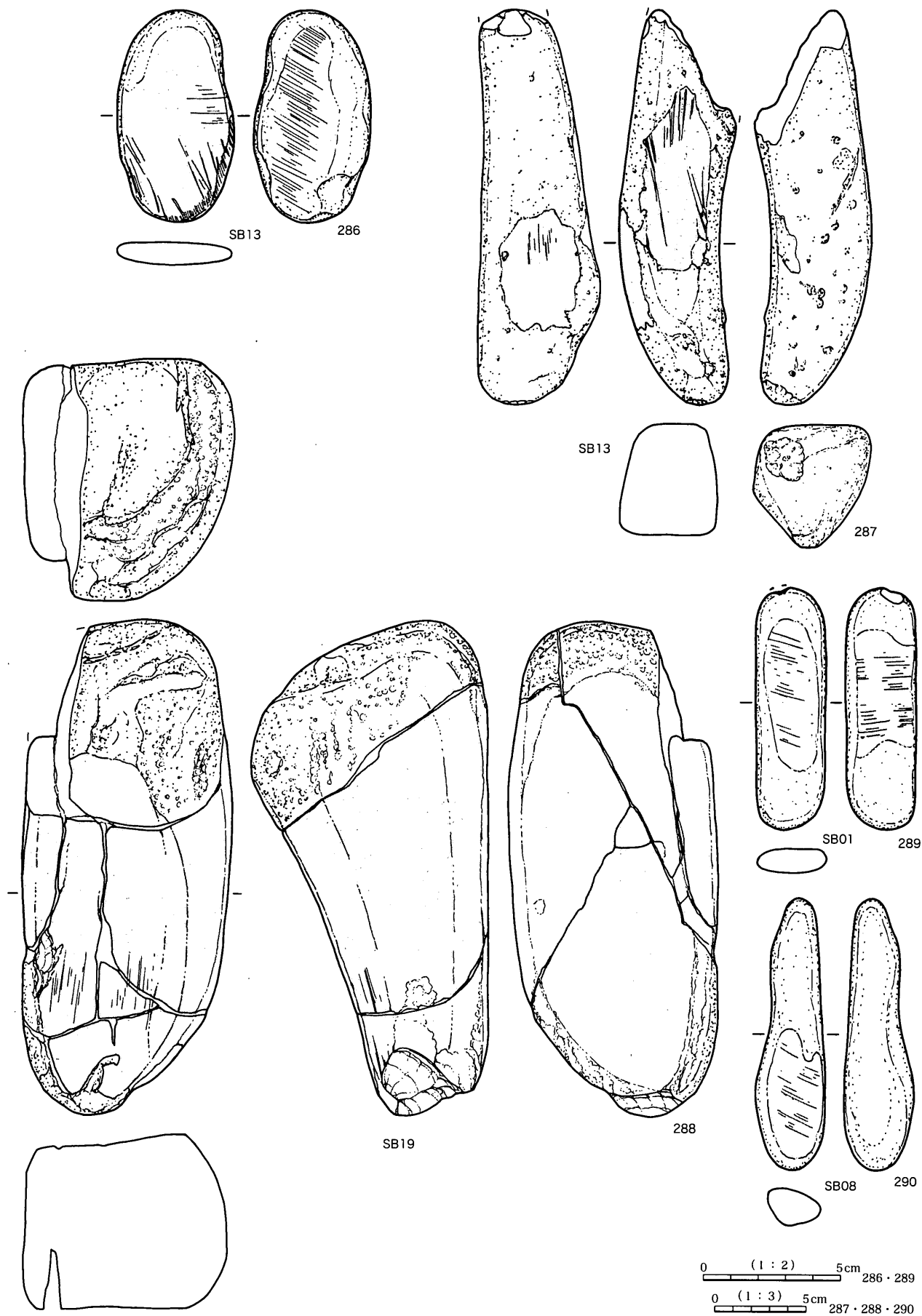
0 (1:2) 5cm 270~279

0 (1:3) 5cm 280

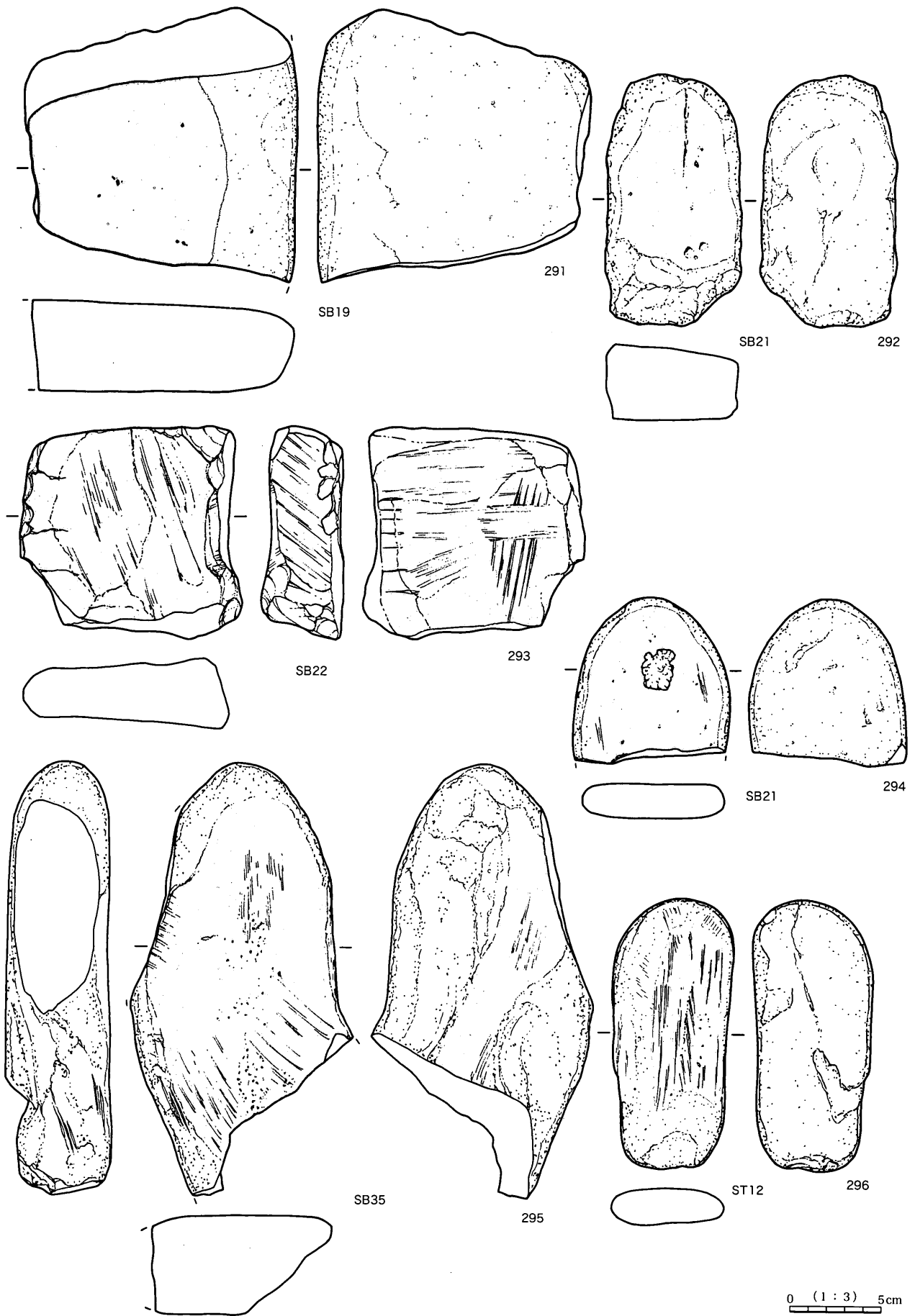
第152図 石器19



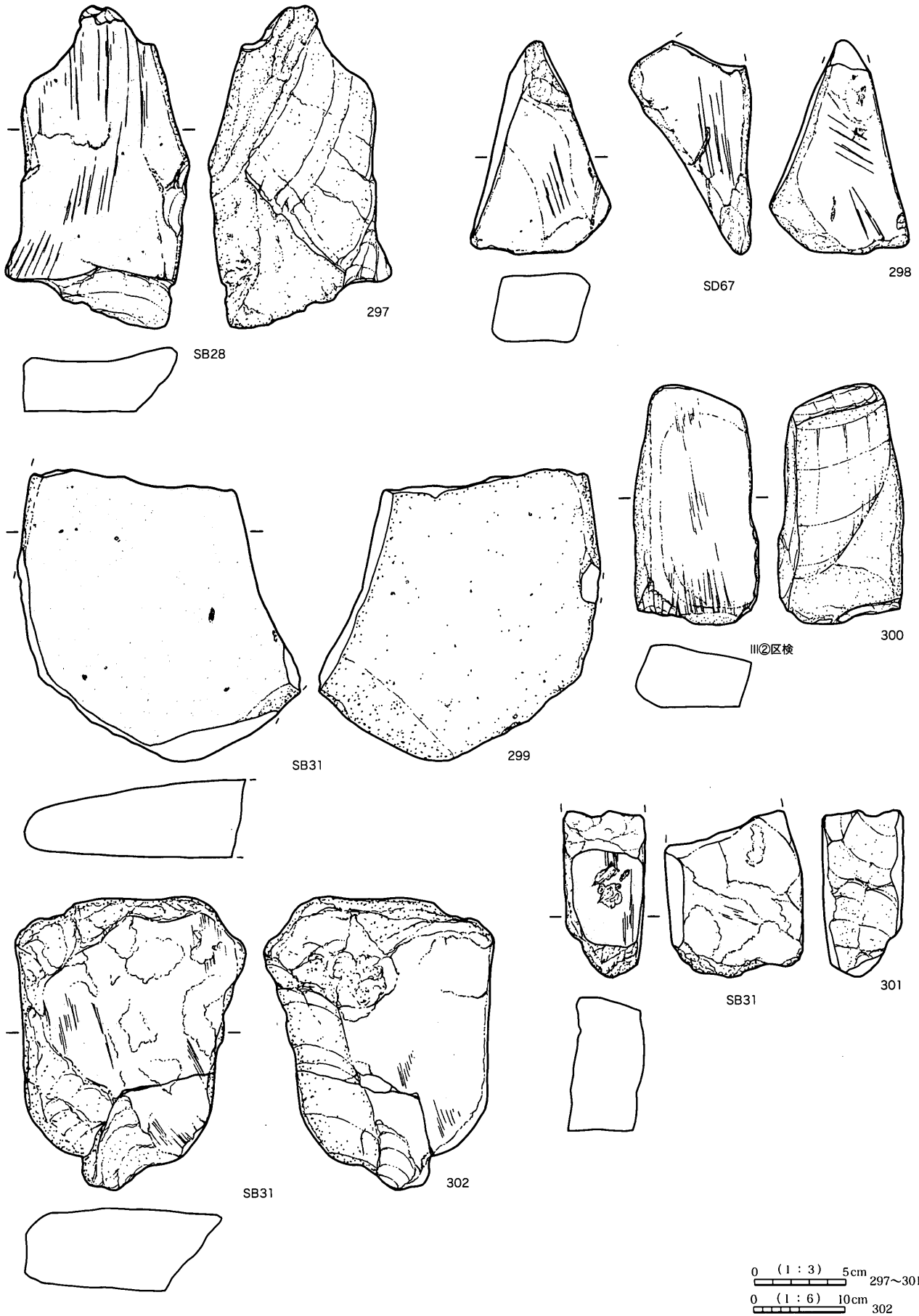
第153図 石器20



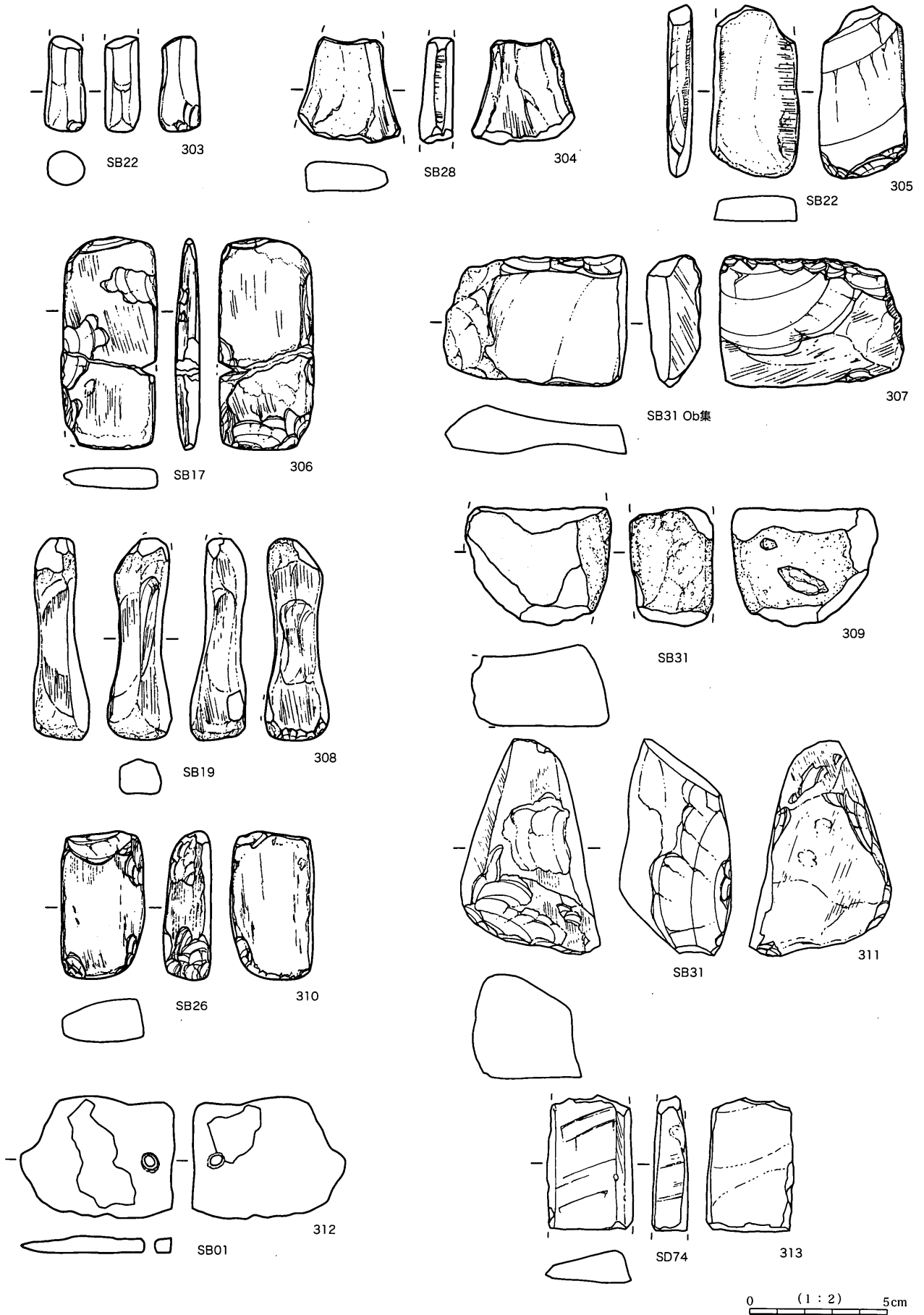
第154図 石器21



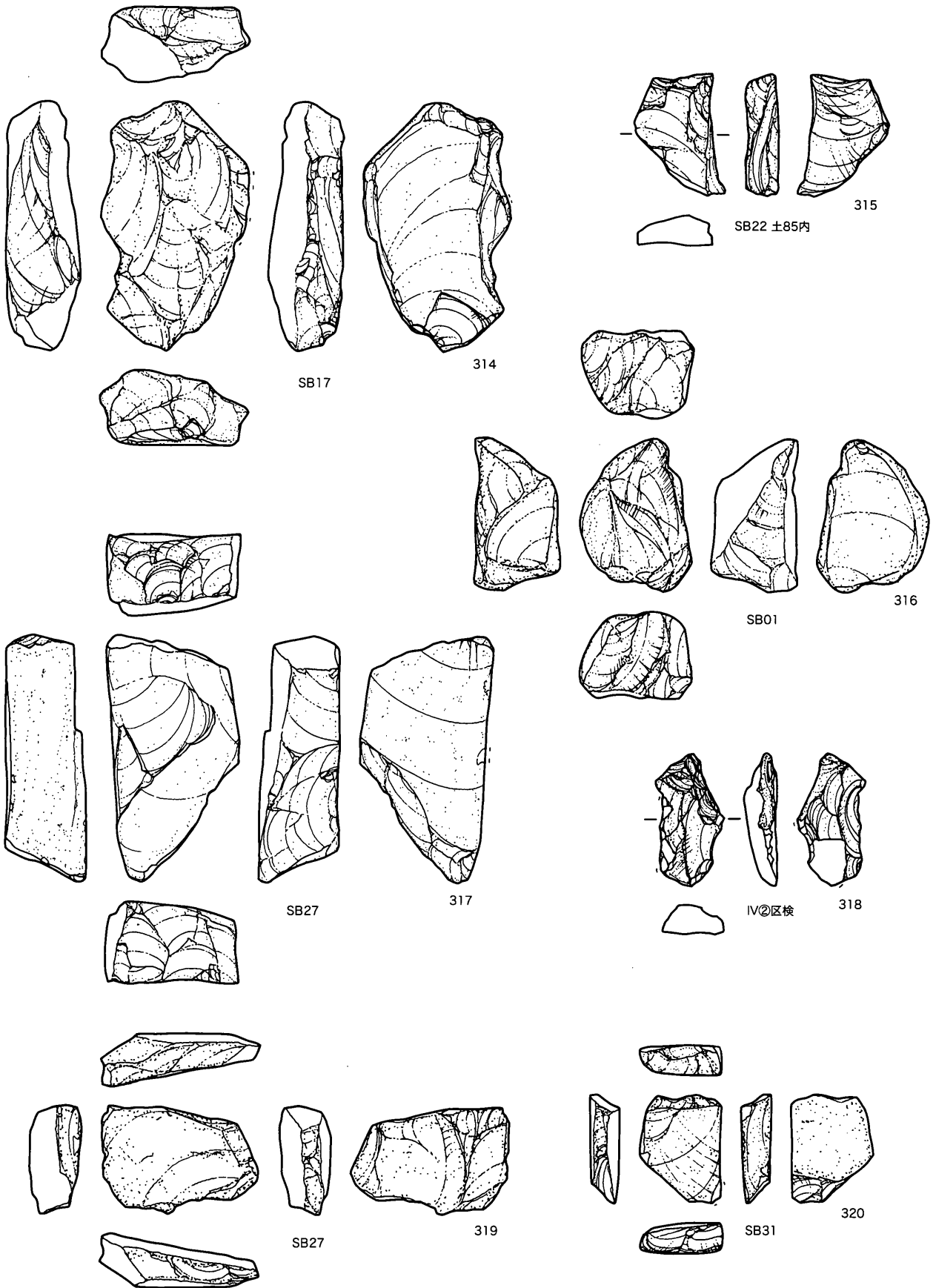
第155図 石器22



第156図 石器23

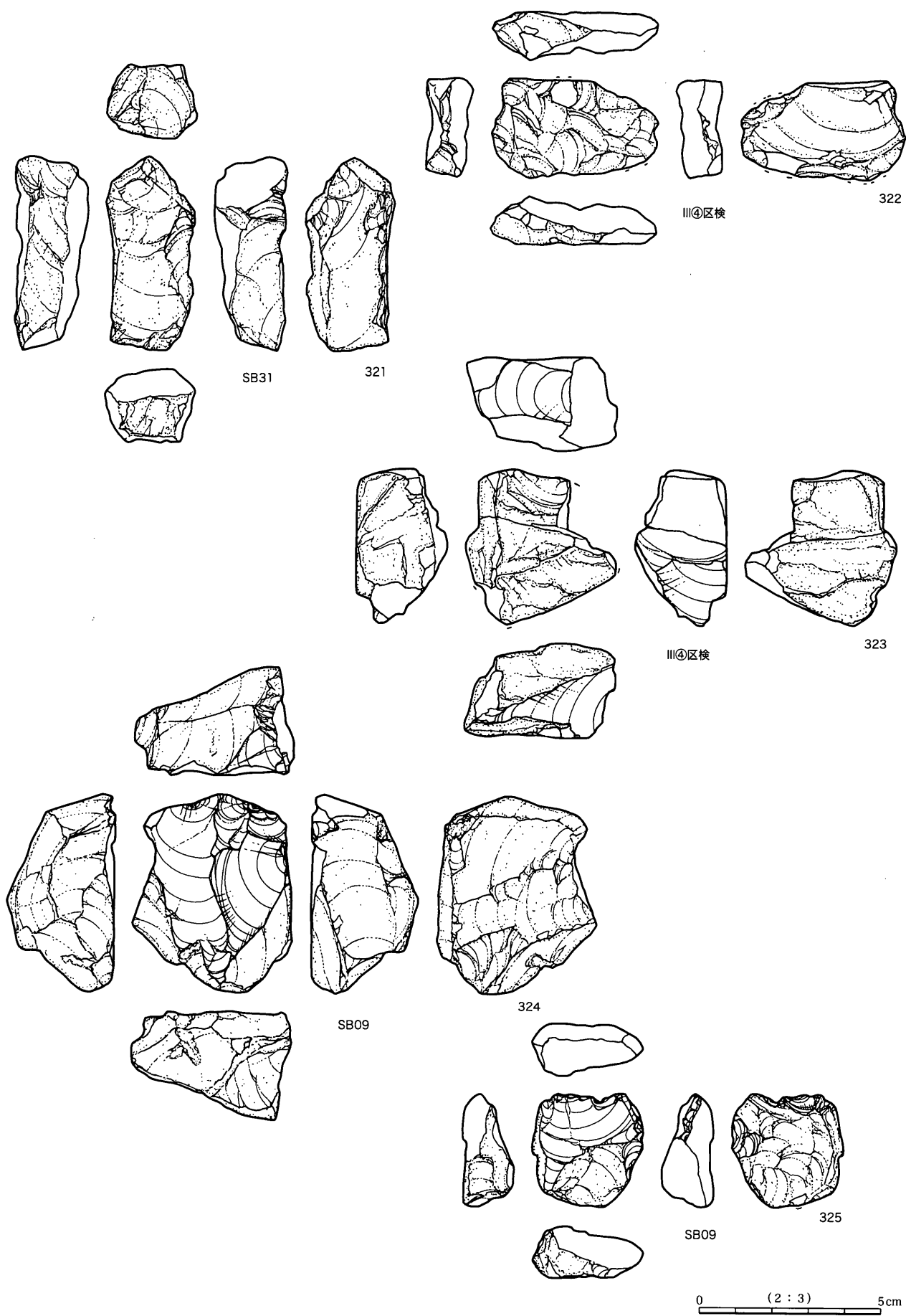


第157图 石器24

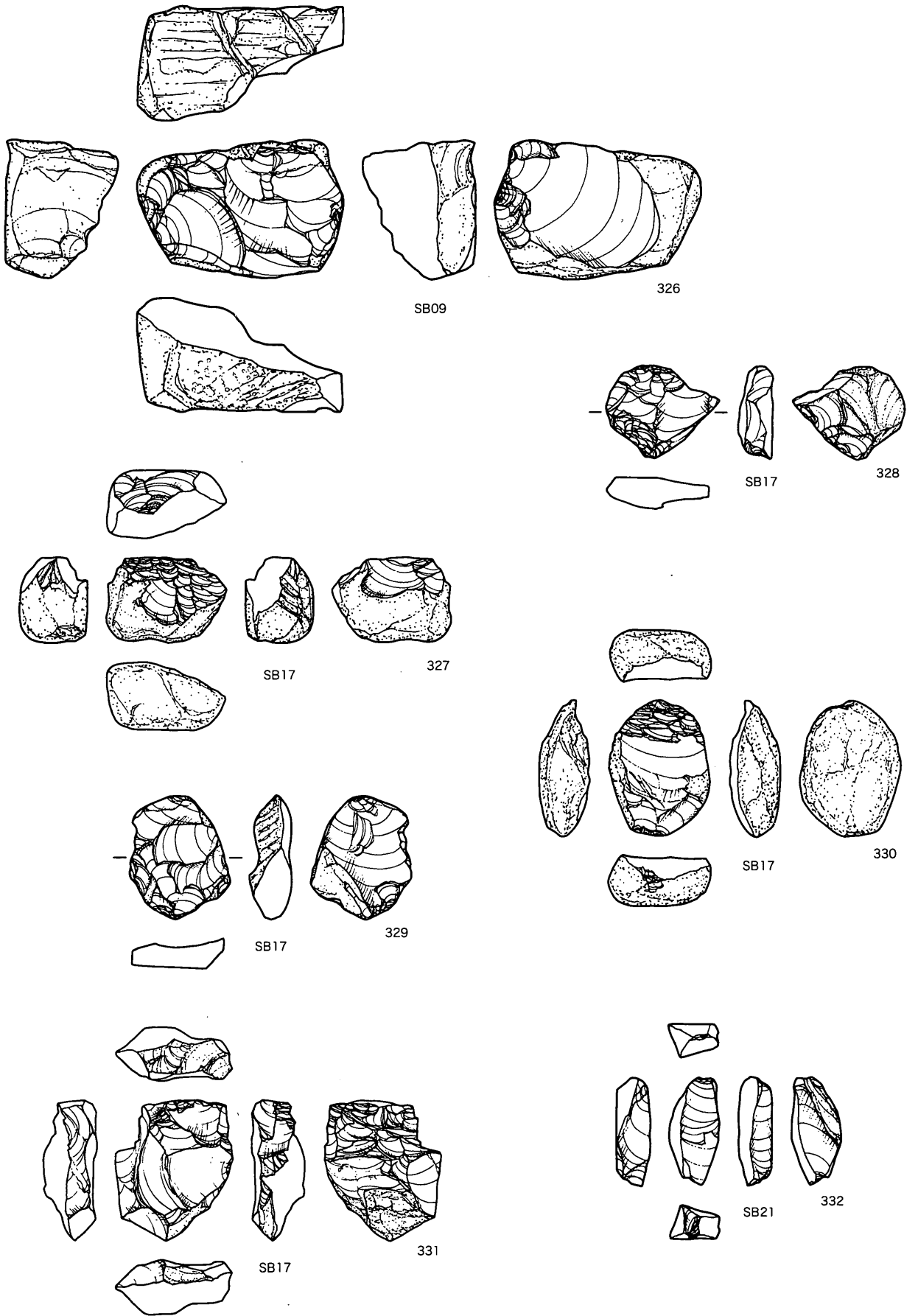


0 (2:3) 5cm

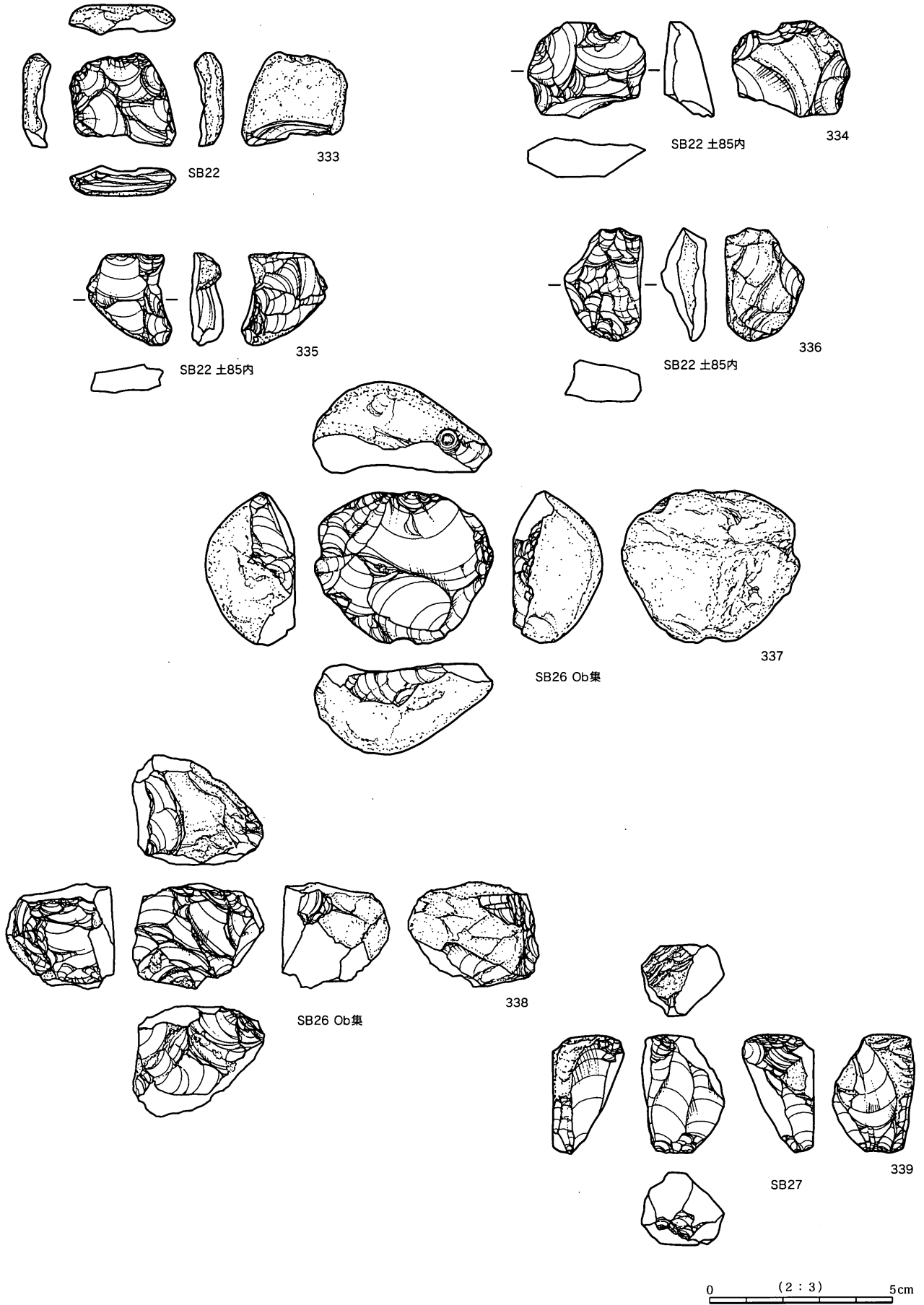
第158圖 石器25



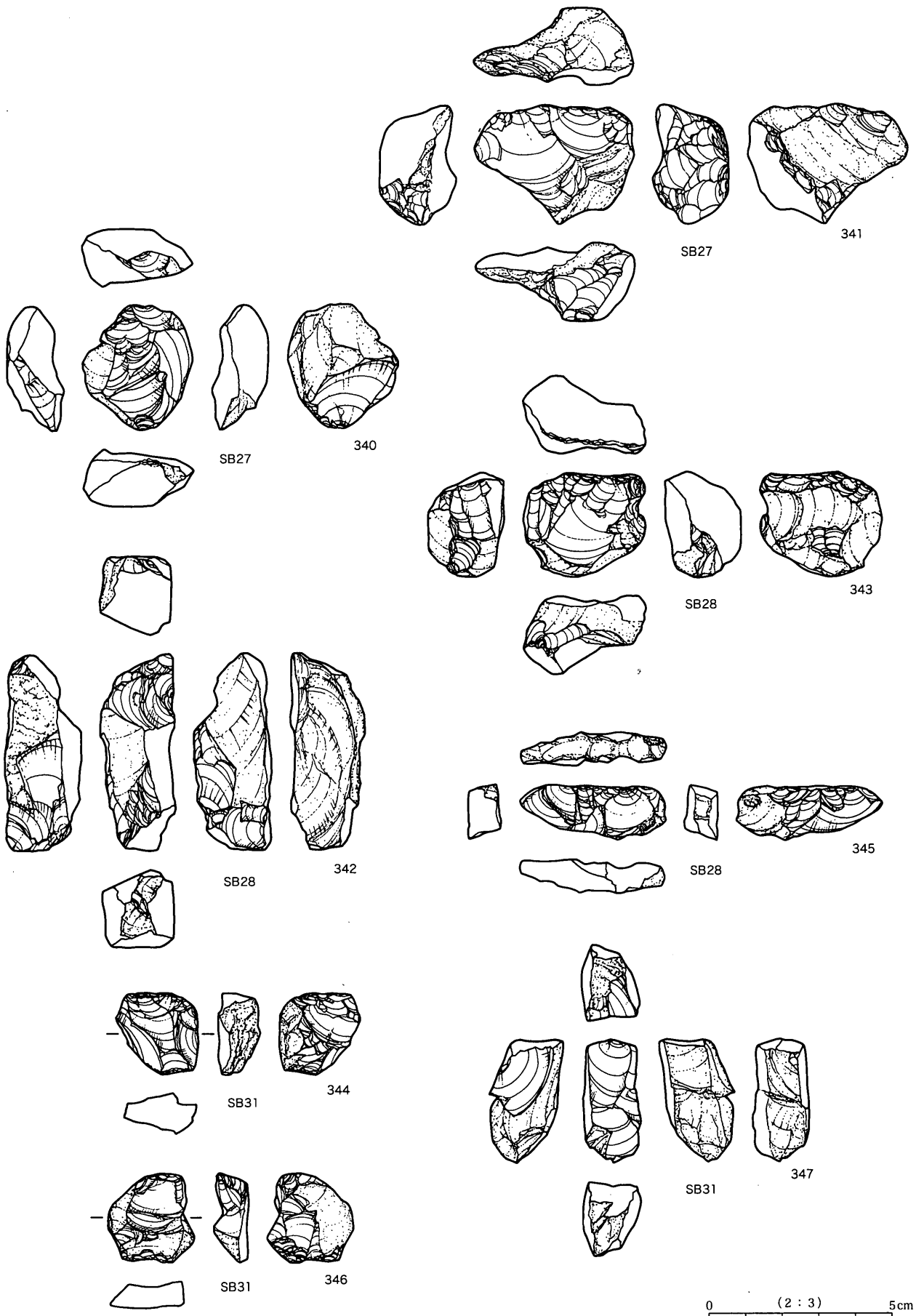
第159図 石器26



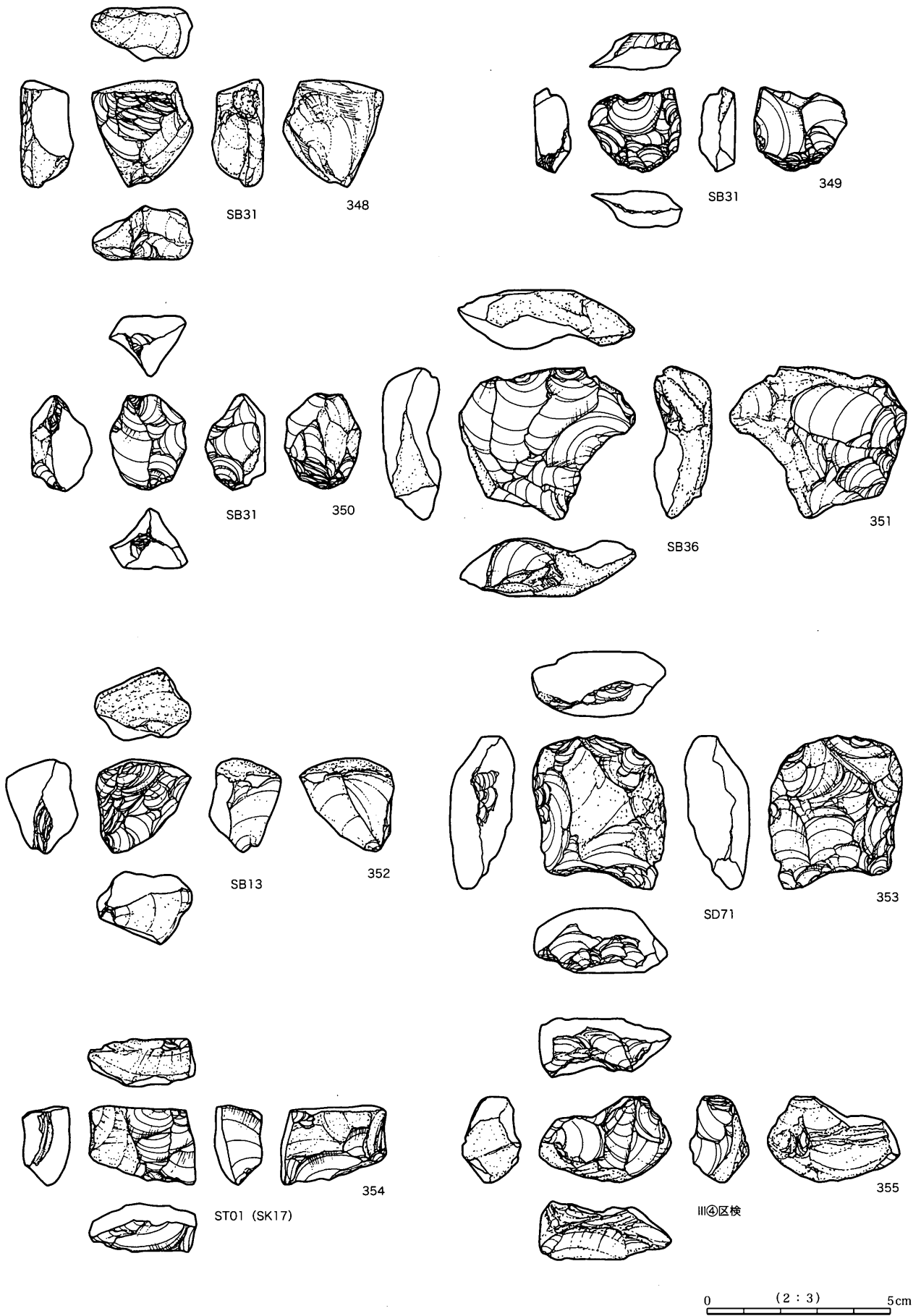
第160図 石器27



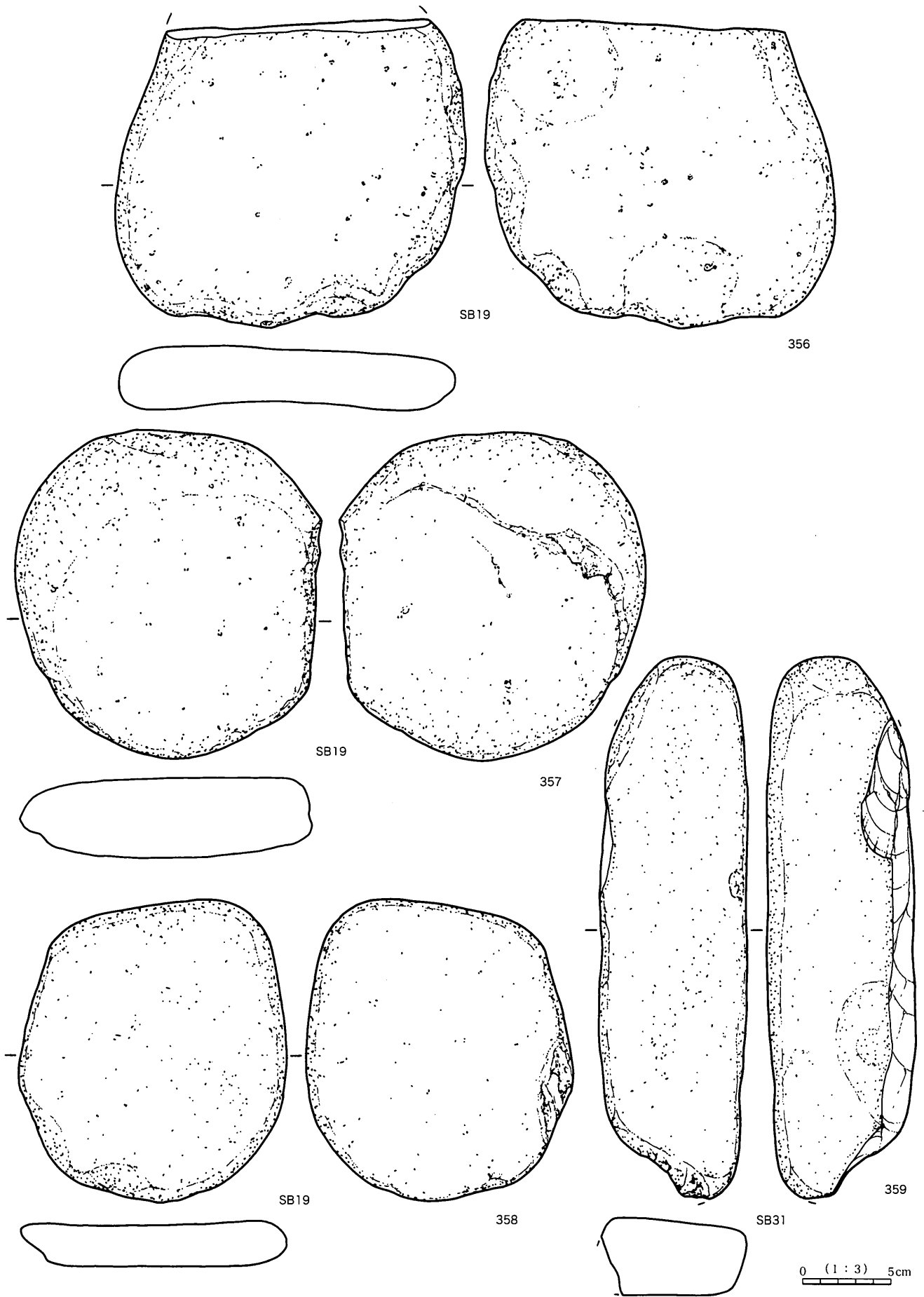
第161図 石器28



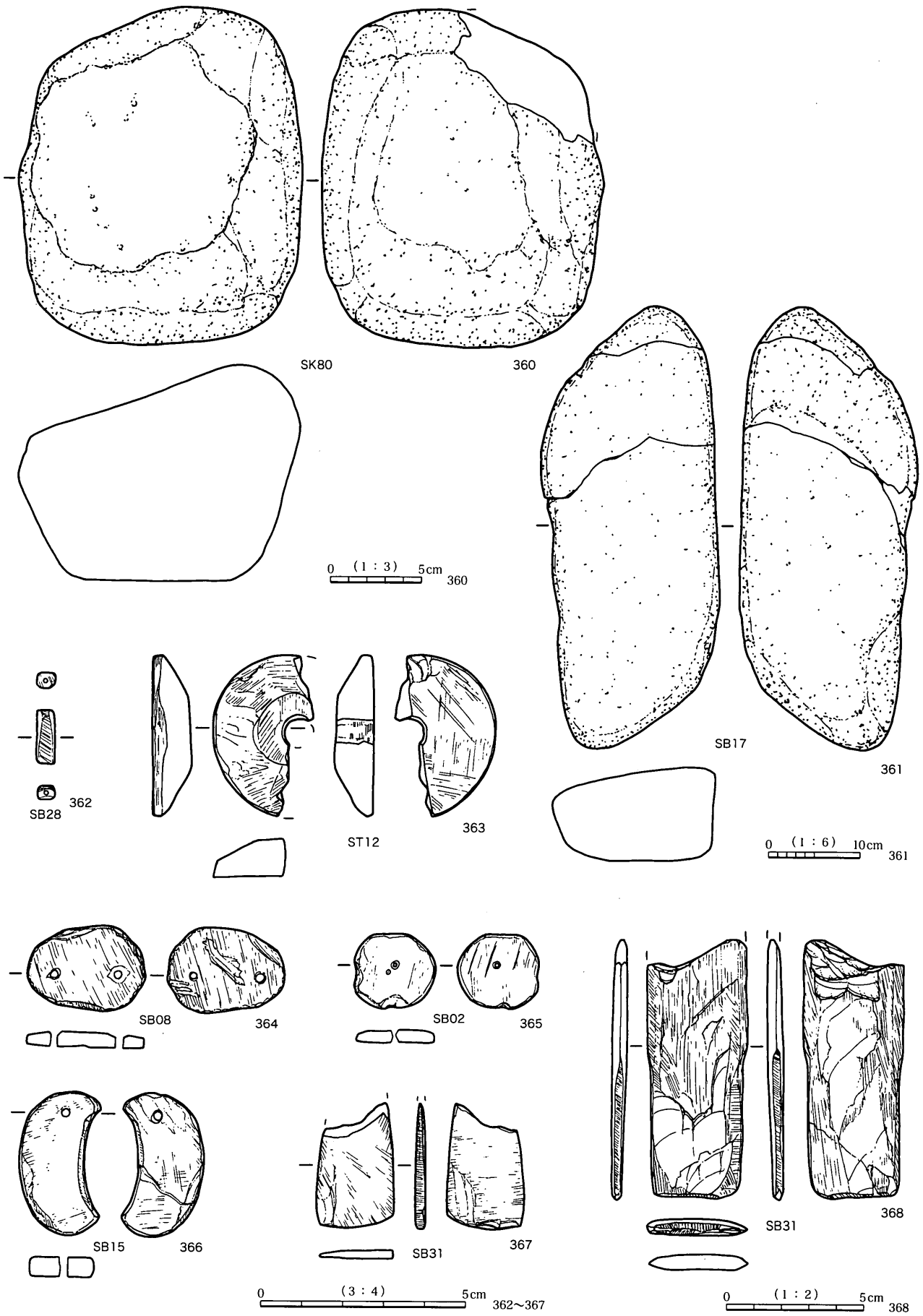
第162図 石器29



第163图 石器30



第164図 石器31



第165図 石器32

表3-1 石器観察表

番号	器種	出土遺構・地点	遺存状態	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考	取上げ/備考
1	打製石鏃	SB26	先端欠	下呂石	66.0	14.5	6.0	4.6	先端欠損。有茎で鏃身長い。搬入品か。	No. 2
2	打製石鏃	SB26	完形	下呂石	43.8	12.3	5.2	2.0	有茎で鏃身長い。搬入品か。	ロ
3	打製石鏃	SB26	完形	下呂石	49.8	13.5	7.5	2.9	有茎で鏃身長い。搬入品か。	No. 1
4	打製石鏃	SB26	完形	下呂石	44.4	13.4	4.9	1.7	有茎で鏃身長い。搬入品か。	土器 No. 1下
5	打製石鏃	SB26	完形	下呂石	44.8	11.3	5.5	2.1	縦長剥片を用いる。細長い。	イ
6	打製石鏃	SB26 炉内	完形	下呂石	46.6	14.5	6.3	3.4	有茎で鏃身長い。搬入品か。	炉内
7	打製石鏃	SB26	先端と茎欠	下呂石	34.4	14.3	5.5	2.3	縦長剥片を用いて細長い。茎が長い。搬入品か。	ハ
8	打製石鏃	SB22	先端と茎欠	泥岩	34.0	14.6	6.7	2.5	縦長剥片を用いる。先端・茎欠損。	S11
9	打製石鏃未製品	SB23	先端欠	下呂石	31.6	20.7	7.3	3.7	横長剥片を用いる。表面の剥離調整少ない。	No. 8
10	打製石鏃	SB24	先端と茎欠	下呂石	37.9	17.0	4.9	2.4	横長剥片を用いる。1面の剥離調整少ない。	No. 11
11	打製石鏃	SB24	茎欠	頁岩	30.9	15.7	5.6	2.1	基部欠損。搬入品か。	No. 13
12	打製石鏃未製品	IV①区検出面	完形	下呂石	18.9	11.4	3.3	0.6	平基?か未製品。横長剥片を用いるか。	
13	打製石鏃	SK58	完形	下呂石	28.4	12.7	3.9	0.9	やや小型の有茎鏃。	
14	打製石鏃	SD72 埋土	先端欠	チャート	41.3	14.3	5.7	2.2	縦長剥片を用いるか。鏃身が長い鏃。	埋土
15	打製石鏃	SB08 床下	完形	黒曜石	19.6	12.8	4.0	0.7	小三角逆刺をもつ有茎鏃。	床下 黒曜石分析 No. 241
16	打製石鏃	SB09 床直上	完形	黒曜石	18.2	14.5	3.9	0.7	小三角逆刺をもつ有茎鏃。	床直上 黒曜石分析 No. 5
17	打製石鏃	SB09 床直上	茎欠	黒曜石	18.2	9.6	4.8	0.7	小三角逆刺をもつ有茎鏃。茎欠損。	床直上 黒曜石分析 No. 6
18	打製石鏃	SB20	完形	黒曜石	29.6	16.6	4.5	1.3	横長剥片使用?。茎のつくりやや弱い。	黒曜石分析 No. 242
19	打製石鏃	SB22 土器85内	完形	黒曜石	23.6	13.9	5.3	1.2	小三角逆刺つき有茎鏃。	P24内 黒曜石分析 No. 21
20	打製石鏃	SB24	完形	黒曜石	28.7	10.7	5.0	1.0	片側逆刺なし。失敗品か。	No. 12 黒曜石分析 No. 243
21	打製石鏃	SB26	完形	黒曜石	28.5	15.2	5.5	1.9	片側逆刺の剥離調整少ない。未製品の可能性あり。	ニ 黒曜石分析 No. 78
22	打製石鏃	SB26	先端欠	黒曜石	22.1	16.2	3.8	1.0	凹基で、先端欠。剥離調整は細かい。	ホ 黒曜石分析 No. 80
23	打製石鏃	SB26	完形	黒曜石	18.3	10.7	4.2	0.7	縦長剥片?利用。片側逆刺が弱く、表面剥離調整少ない。	東北版区 黒曜石分析 No. 79
24	打製石鏃	SB27	完形	黒曜石	20.6	14.1	5.2	1.0	三角有茎鏃。表裏面剥離調整。	黒曜石分析 No. 244
25	打製石鏃	SB28	完形	黒曜石	20.4	11.9	4.4	0.6	三角有茎鏃。表裏面剥離調整。	黒曜石分析 No. 245
26	打製石鏃	SB31黒曜石集中	完形	黒曜石	37.6	13.1	5.1	1.5	少し離れて出土の2片接合。下呂石製石鏃模倣か。	No. 130・205 黒曜石分析No. 99
27	打製石鏃	SB31黒曜石集中	完形	黒曜石	21.5	10.7	4.0	0.6	縦長剥片?。表面剥離調整少ない。	No. 176 黒曜石分析 No. 101
28	打製石鏃	SB39 埋土	完形	黒曜石	21.1	13.1	3.8	0.6	三角有茎。表裏面剥離調整。	埋土 黒曜石分析 No. 246
29	打製石鏃	SB31黒曜石集中	先端・基部欠	黒曜石	11.5	10.9	3.3	0.3	鏃身部のごく部分的な破片。	No. 217 黒曜石分析 No. 111
30	打製石鏃	SB41	欠損	黒曜石	14.4	13.9	4.5	0.6	三角有茎鏃の破片?。	黒曜石分析 No. 247
31	打製石鏃	SB41 埋土	完形	黒曜石	23.9	11.7	4.3	0.7	下呂石小型石鏃と共通する形状の有茎鏃。	埋土 黒曜石分析 No. 248
32	打製石鏃	SK180	完形	黒曜石	19.2	13.6	5.0	0.7	三角有茎鏃未製品と思われるが、不整形で上下逆かもかもしれない。	黒曜石分析 No. 249
33	打製石鏃	SD69 埋土	完形	黒曜石	18.3	14.3	4.7	0.7	三角有茎鏃で逆刺の1端欠損。	埋土 黒曜石分析 No. 250
34	打製石鏃	SB03 (SK07)	先端・基部欠	黒曜石	16.2	13.5	4.5	0.8	鏃身部の破片。	P 1 黒曜石分析 No. 251
35	打製石鏃	SD72 埋土	先端欠	チャート	29.0	21.9	4.0	2.0	凹基鏃で比較的剥離調整は丁寧。	埋土
36	打製石鏃	SD80	逆刺一部欠	黒曜石	23.9	14.2	4.6	1.0	片側逆刺を欠損する三角有茎鏃。	黒曜石分析 No. 252
37	打製石鏃	III③区 A低地	先端と茎欠	黒曜石	14.9	12.0	4.6	0.7	有茎三角鏃破片。先端も欠損か。	
38	打製石鏃	III③区耕作土	完形	黒曜石	17.8	9.2	3.8	0.5	小型逆刺が弱く、丸みを帯びる。	3層泥炭 黒曜石分析 No. 253
39	打製石鏃	III③区検出面	完形	黒曜石	27.5	12.8	4.0	1.0	下呂石石鏃と類似する鏃身部がやや長い鏃。	黒曜石分析 No. 254
40	打製石鏃	III③区 検出面	脚欠	黒曜石	29.8	15.4	3.5	0.9	凹基鏃で比較的剥離調整は丁寧。	SB31周辺 黒曜石分析 No. 125
41	打製石鏃	IV①区 検出面	脚欠	黒曜石	20.4	10.7	2.9	0.5	基部形状は凹基か。	黒曜石分析 No. 255
42	打製石鏃	V①区 検出面	先端欠	黒曜石	17.8	16.2	3.6	0.8	凹基三角鏃。先端欠損。	黒曜石分析 No. 256
43	打製石鏃	SB11・12・43	欠損	黒曜石	13.3	10.9	4.7	0.5	鏃身部小片。	III③区窪地
44	打製石鏃	IV①区 検出面	逆刺一部欠	黒曜石	22.8	15.0	3.8	0.8	片側逆刺欠損する有茎三角鏃。	黒曜石分析 No. 257
45	打製石鏃未製品	SB09	先端欠	黒曜石	15.7	16.3	6.5	1.5	鏃身部下半部未製品破片か。	黒曜石分析 No. 4
46	打製石鏃未製品	SB13 埋土	基部欠	黒曜石	21.5	10.5	5.9	1.1	折れた面を打面として再加工している。石鏃か?。	埋土 黒曜石分析 No. 258
47	打製石鏃未製品	SB14	先端欠	チャート	18.3	18.5	5.2	1.7	基部側の失敗品か。	
48	打製石鏃未製品	SB22 土器85内	完形	黒曜石	24.3	16.8	5.0	1.4	基部/先端端部欠損。左右の形状がずれる。失敗品か。	P24内 黒曜石分析 No. 22
49	打製石鏃未製品	SB22 土器85内	完形	黒曜石	37.3	23.1	8.5	5.3	小亜角礫原石に直接剥離調整を加える。	P24内 黒曜石分析 No. 23
50	打製石鏃未製品	SB22 土器85内	完形	黒曜石	31.5	22.0	8.9	5.0	小亜角礫原石に直接剥離調整を加える。	P24内 黒曜石分析 No. 24
51	打製石鏃未製品	SB22 土器85内	完形	黒曜石	29.5	16.7	7.3	3.4	小亜角礫原石(片?)を用いた未製品先端部破片か。	P24内 黒曜石分析 No. 25
52	打製石鏃未製品	SB27 埋土	完形	黒曜石	21.3	16.9	7.1	1.7	一部に自然面を残す剥片?原石?を用いる未製品。	埋土 黒曜石分析 No. 259
53	打製石鏃未製品	SB24 埋土	完形	黒曜石	24.2	16.2	4.0	1.1	剥片周囲を剥離調整する未製品。	埋土 黒曜石分析 No. 260
54	打製石鏃未製品	SB27 床下	欠損	黒曜石	22.0	17.7	5.3	1.4	凹基鏃未製品か。剥離調整は少ない。	床下 黒曜石分析 No. 261
55	打製石鏃未製品	SB28 埋土	完形	黒曜石	23.7	15.7	5.2	1.4	剥片縁部に剥離調整。一部原石自然面が残る。	埋土 黒曜石分析 No. 262
56	打製石鏃未製品	SB31 埋土	完形	黒曜石	16.6	10.0	3.8	0.5	横長剥片?用いる鏃先端破片。剥離調整は部分的で未製品とした。	埋土 黒曜石分析 No. 118
57	打製石鏃未製品	SB31 黒曜石集中	先端欠	黒曜石	15.7	10.6	5.8	0.9	裏面の主要剥離面はバルブのない面でリングが液打つ。	No. 140 黒曜石分析 No. 105
58	打製石鏃未製品	SB31 黒曜石集中	完形	黒曜石	34.1	15.4	6.1	2.2	横長剥片に剥離調整を加える。細長い形態か。	No101・103 黒曜石分析No.121
59	打製石鏃未製品	SB31 Pit 2	完形	黒曜石	25.2	12.4	7.1	1.9	剥片縁部に剥離調整を加える。片側縁は欠損か。	黒曜石分析 No. 114
60	打製石鏃未製品	SB31 黒曜石集中	完形	黒曜石	21.0	13.3	5.0	1.2	縦長剥片に剥離調整を加える。一部自然面残る。	No. 111 黒曜石分析 No. 108
61	打製石鏃未製品	SD01	完形	黒曜石	20.0	15.3	7.7	1.9	自然面を残す剥片縁部に剥離調整を施す。	黒曜石分析 No. 263
62	打製石鏃未製品	III③区検出面	完形	黒曜石	25.2	16.7	5.9	2.0	表裏面に剥離調整を加える。有茎鏃未製品か。	黒曜石分析 No. 264
63	打製石鏃未製品	III③区 検出面	完形	下呂石	28.0	15.2	4.8	1.6	表面剥片の一部に剥離調整が認められる。	IVL17グリッド
64	打製石鏃未製品	III③区 検出面	欠損	黒曜石	19.0	17.8	6.4	1.7	表裏面に剥離調整を加える。未製品破片か。	黒曜石分析 No. 265
65	磨製石鏃	SB03 (29)	完存	凝灰岩	39.2	17.5	3.6	2.8	M字基部の磨製石鏃製品。	
66	磨製石鏃	SB20	先端欠	粘板岩	14.8	22.7	2.1	0.7	穿孔された磨製石鏃基部破片。	
67	磨製石鏃	SB31	基部欠	不明	11.1	19.0	2.7	0.6	M字基部の磨製石鏃製品。	No. 27
68	磨製石鏃	SB08 床下	先端・基部欠	粘板岩	23.3	18.4	2.7	1.7	穿孔された製品破片か。太い研磨線状痕と細い研磨線状痕が混在。	床下
69	磨製石鏃	SB31 黒曜石集中	先端欠	粘板岩	31.4	18.2	2.6	1.6	先端欠損する穿孔終了製品。	No. 211
70	磨製石鏃	SB31	完形	千枚岩	21.4	16.4	2.7	0.9	片側縁が鋭角となる。	No. 17
71	磨製石鏃	SB31 黒曜石集中	先端・基部欠	粘板岩	30.3	13.5	2.6	1.5	刃部の研磨が深い穿孔終了製品の破片。	

第4章 遺物

表3-2 石器観察表

番号	器種	出土遺構・地点	遺存状態	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	取上げ/備考
72	磨製石鏃	SB31	完形	緑色片岩	35.4	14.9	2.3	1.3	基部研磨の弱い穿孔終了製品。	No. 18
73	磨製石鏃	SK166	先端欠	凝灰岩	13.5	17.5	2.6	0.7	上部欠損する穿孔終了製品。	No. 2
74	磨製石鏃	SK166	先端欠	粘板岩	32.7	17.5	3.9	2.1	先端欠損する穿孔終了製品。	No. 1
75	磨製石鏃	SB1・12	完存	凝灰岩	38.9	16.3	2.9	2.0	穿孔終了製品。	
76	磨製石鏃未製品-未穿孔	SB19	完形	粘板岩	41.3	18.1	3.4	2.6	鏃身上部を最大幅とする穿孔途中未製品。	
77	磨製石鏃	Ⅲ㉔区検出面	先端欠	粘板岩	63.9	30.2	3.6	7.2	大型の穿孔終了製品。掘り出す際に欠損。	
78	磨製石鏃未製品-未穿孔	SB17	完形	粘板岩	34.1	15.7	3.0	1.3	表面風化で仔細不明。穿孔途中で表面から穿孔。	No. 71
79	磨製石鏃?	SB23 埋土	断片	緑色片岩	10.5	10.9	1.7	0.2	製品の破片か。	埋土
80	磨製石鏃未製品-未穿孔	SB31 炉掘方	部分欠	凝灰岩	26.3	14.0	2.5	0.8	穿孔途中の未製品。調査時に欠損。	炉掘方
81	磨製石鏃未製品-研磨	SB20	断片	緑色片岩	14.4	20.9	2.7	0.9	研磨された破片。	
82	磨製石鏃未製品-研磨	SB22	完形	粘板岩	48.5	25.0	5.2	6.9	広面1面を研磨する未製品破片。	No. 45
83	磨製石鏃未製品-研磨	SB23 埋土	完形	緑色片岩	68.5	26.9	4.0	9.1	広面と刃部研磨途中の未製品。	埋土
84	磨製石鏃未製品-研磨	SB27 埋土	完形	緑色片岩	33.1	22.9	5.0	3.8	広面1面研磨途中の未製品破片。	埋土
85	磨製石鏃未製品-研磨	SB28 埋土	断片	粘板岩	14.4	13.8	1.7	0.3	広面1面研磨途中の未製品。	埋土
86	磨製石鏃未製品-研磨	SB27 埋土	完形	緑色片岩	36.0	10.3	2.8	1.3	広面1面研磨途中の未製品破片。	埋土
87	磨製石鏃未製品-研磨	SB28 断片	断片	緑色片岩	35.4	12.9	3.6	1.8	側面研磨途中の未製品破片。左下鋭角部が先端か。	No. 21
88	磨製石鏃未製品-研磨	SB31黒曜石集中	断片	凝灰岩	44.3	22.5	3.9	5.2	広面研磨途中の未製品。一部刃部を研磨する。	No. 196
89	磨製石鏃未製品-研磨	SK80	完形	緑色片岩	33.5	11.5	4.4	1.6	研磨片を再加工している。	
90	磨製石鏃未製品-研磨	SB27 埋土	先端欠	粘板岩	29.3	20.1	3.7	2.5	研磨途中の未製品破片。	埋土
91	磨製石鏃未製品-研磨	SB39 埋土	完形	凝灰岩	34.2	14.4	2.8	1.6	部分的に研磨される未製品破片。	埋土
92	磨製石鏃未製品-研磨	Ⅲ㉔区検出面	上・下欠	粘板岩	22.7	27.2	3.5	2.0	広面1面を研磨する未製品破片。	
93	磨製石鏃未製品-剥離	SB09 床面	完形	緑色片岩	27.6	24.3	4.1	3.3	粗削工程の未製品	床面
94	磨製石鏃未製品-剥離	SB17	完形	粘板岩	17.5	14.8	2.5	0.6	粗削工程の未製品	
95	磨製石鏃未製品-剥離	SB19	完形	緑色片岩	44.8	33.1	4.6	6.0	粗削工程の未製品	S 8
96	磨製石鏃未製品-剥離	SB20 埋土	完形	粘板岩	51.6	20.7	6.2	7.0	粗削工程の未製品	埋土
97	磨製石鏃未製品-剥離	SB20 埋土	完形	緑色片岩	33.3	14.9	2.3	1.1	側面直線的。粗削工程を省略した素材か。	埋土
98	磨製石鏃未製品-剥離	SB20 埋土	完形	緑色片岩	41.2	19.1	4.4	4.6	側面直線的。素材か。	埋土
99	磨製石鏃未製品-剥離(部分研磨)	SB20 埋土	完形	緑色片岩	35.5	20.0	2.7	1.9	擦り切り痕。粗削工程を経ない素材か。	埋土
100	磨製石鏃未製品-剥離	SB20 埋土	完形	粘板岩	59.4	30.0	7.3	9.7	粗削工程の未製品。	埋土
101	磨製石鏃未製品-剥離	SB22	完形	粘板岩	46.6	35.5	5.5	5.8	粗削工程の未製品。	
102	磨製石鏃未製品-剥離	SB24 埋土	欠損	粘板岩	15.8	13.7	2.9	0.7	粗削～研磨始めの未製品破片か。	埋土
103	磨製石鏃未製品-剥離	SB22	完形	緑色片岩	43.8	24.9	5.3	5.1	粗削工程の未製品。	
104	磨製石鏃未製品-剥離	SB23 埋土	完形	粘板岩	30.3	21.2	3.2	1.9	粗削工程の未製品破片。	埋土
105	磨製石鏃未製品-剥離	SB26 埋土	完形	緑色片岩	30.6	25.3	4.2	2.9	粗削工程の未製品破片。	埋土
106	磨製石鏃未製品-剥離	SB27 埋土	断片	緑色片岩	37.4	11.1	3.8	2.0	粗削工程の未製品破片か。	埋土
107	磨製石鏃未製品-剥離	SB27 埋土	完形	粘板岩	34.7	19.6	4.7	2.2	粗削工程の未製品破片か。	埋土
108	磨製石鏃未製品-剥離	SB28 埋土	完形	緑色片岩	38.4	17.0	5.2	2.7	折り取り素材段階破片か。	埋土
109	磨製石鏃未製品-研磨	SB28 埋土	完形	緑色片岩	27.6	24.5	3.2	2.6	僅かに研磨。粗削工程を省略した未製品か。	埋土
110	磨製石鏃未製品-剥離	SB36 床下	完形	緑色片岩	25.6	21.1	3.3	2.0	側面が直線的。折り取り。	床下
111	磨製石鏃未製品-剥離	SB39 埋土	完形	凝灰岩	30.2	18.6	5.8	2.4	粗削工程の未製品破片。	埋土
112	磨製石鏃未製品-剥離	SB41	ほぼ完形	粘板岩	67.1	38.3	5.7	17.5	大型鏃の粗削工程未製品。	
113	磨製石鏃未製品-剥離	SD52	完形	粘板岩	64.4	28.1	7.1	14.8	大型鏃の粗削工程未製品。	
114	磨製石鏃未製品-剥離	SK17	欠損	粘板岩	31.2	21.1	3.3	2.6	粗削工程の未製品破片。	
115	磨製石鏃未製品-剥離	SK166	完形	粘板岩	39.3	21.0	5.5	5.0	粗削工程の未製品。	
116	磨製石鏃未製品	Ⅲ㉔区検出面	完形	緑色片岩	26.8	16.3	3.3	1.4	粗削工程の未製品破片。	L24グリッド
117	磨製石鏃未製品	Ⅲ㉔区検出面	完形	緑色片岩	47.2	20.4	4.8	5.2	粗削工程の未製品。	
118	磨製石鏃未製品	Ⅲ㉔区検出面	完形	凝灰岩	48.8	22.6	5.5	6.0	粗削工程の未製品破片。	
119	剥片	SB20 埋土	完形	緑色片岩	36.1	12.4	2.7	0.9	粗削工程で生じた剥片か。	埋土
120	剥片	SB20 床下	完形	緑色片岩	23.2	23.6	2.0	1.1	粗削工程で生じた剥片か。	床下
121	磨製石鏃素材	SB18 埋土	完存	珪質岩	51.6	45.3	4.9	13.1	扁平な素材。	埋土
122	磨製石鏃用原石	SB37	完形	粘板岩	90.3	63.6	8.9	45.8	扁平な原石。折取。	
123	石鏃	SB24 埋土	完形	黒曜石	19.7	24.3	8.0	2.0	縦長剥片の片辺に剥離調整で小突起を作り出す。	埋土
124	石鏃	SB24 埋土	完形	黒曜石	20.1	9.4	6.5	1.2	棒状で周囲に細かい剥離調整を加える。	埋土
125	石鏃未製品?	SB22 土器85内	欠損	黒曜石	28.2	9.7	7.3	1.3	縦長剥片の一部に剥離調整を施す。石鏃未製品の基部側破片か。	P24内 黒曜石分析 No. 26
126	石鏃	SB26 埋土?	完形	黒曜石	23.6	11.0	6.0	1.0	棒状で細かい剥離調整を加える。	埋土? 黒曜石分析 No. 81
127	石鏃	SB27 埋土	完存	黒曜石	32.3	13.7	7.6	2.1	縦長剥片の表面を中心に剥離調整。	埋土
128	石鏃	SB31 トレンチ	完形	黒曜石	23.4	12.9	6.7	1.8	縦長剥片周囲に剥離調整を施す。刃部先端磨耗。	トレンチ 黒曜石分析 No. 116
129	石鏃	SB31 埋土	完形	黒曜石	18.8	10.9	5.3	0.9	片側面を中心に剥離調整を加える。もう片側は破損面か。	埋土 黒曜石分析 No. 119
130	石鏃	SB31	完形	黒曜石	24.5	17.0	6.3	1.9	剥片周囲に剥離調整。形状から打製石鏃未製品の疑いあり。	Pit 5 No. 1 黒曜石分析 No. 124
131	石鏃	SB31黒曜石集中	完形	黒曜石	21.5	11.7	6.8	1.4	側面に自然面を残す剥片先端に剥離調整を施す。	No. 125 黒曜石分析 No. 97
132	石鏃	SB31黒曜石集中	完形	粘板岩	51.8	17.4	9.2	7.9	縦長剥片側面に簡単な剥片剥離調整を加える。先端磨耗。	No. 213 黒曜石分析 No. 107
133	石鏃	SK88	先端欠	黒曜石	20.4	8.6	6.4	1.0	棒状で周囲に剥離調整を施す。片側面・側面・基部欠損か。	
134	石鏃	SB31黒曜石集中	完形	黒曜石	22.2	11.0	6.3	1.2	縦長剥片周囲に剥離調整を加える。	No. 161 黒曜石分析 No. 109
135	石鏃	SB31黒曜石集中	完形	黒曜石	24.4	13.1	6.8	1.9	縦長? 剥片周囲に剥離調整を加える。	No. 115 黒曜石分析 No. 122
136	石鏃	Ⅳ区検出面	完形	黒曜石	22.2	8.9	4.8	0.8	縦長? 剥片周囲に剥離調整を加える。片側面は自然面を残す。未製品か。	ⅣL24グリッド
137	石鏃	SK166	完形	黒曜石	22.2	9.7	8.2	1.3	部分的に自然面を残す剥片周囲に剥離調整を施す。	
138	石鏃	Ⅲ㉔区検出面	完形	黒曜石	15.1	21.4	5.3	1.1	縦長剥片? 縁部中央を小突起状に作り出す。先端磨耗。	
139	石鏃	SD72 埋土	完形	黒曜石	35.0	10.1	9.0	2.3	剥離調整で棒状に作り出す。	埋土
140	石鏃	Ⅲ㉔区検出面	完形	黒曜石	32.8	19.3	9.5	4.7	縦長剥片側面に剥離調整を施す。未製品にも見えるが先端部に磨耗痕あり。	
141	石鏃	Ⅲ㉔検出面	完存	黒曜石	33.6	15.1	10.0	3.6	縦長剥片先端周囲に部分的に剥離調整を加える。未製品か。	
142	両極石器	SB22	完形	黒曜石	25.5	21.4	7.6	3.4	表面両端に両極打法の剥離痕残す。両端は尖らず。	黒曜石分析 No. 17
143	両極石器	SB22 土器85内	完形	黒曜石	27.2	20.2	6.7	2.8	表面に両極打法による剥離痕残す。	P24内 黒曜石分析 No. 27
144	両極石器	SB28 埋土	完形	黒曜石	30.1	13.5	6.4	2.1	両極打法による剥離痕残す。小原素材とするか。	埋土
145	両極石器	SB24	完形	黒曜石	15.8	15.7	5.7	1.3	表・裏に両極打法の剥離痕残す。打面は平坦で自然面か。	
146	両極石器	SB31 黒曜石集中	完形	黒曜石	21.8	15.0	7.0	2.3	断面紡錘型。両極打法の剥離痕残す。	No. 134 黒曜石分析 No. 123

表3-3 石器観察表

番号	器種	出土遺構・地点	遺存状態	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考	取上げ/備考
147	両極石器	SB37 埋土	完形	黒曜石	15.6	16.3	7.6	1.7	一部自然面残す。両極打法の剥離痕残す。	埋土
148	両極石器	SB31黒曜石集中	完形	黒曜石	19.9	16.7	6.9	1.8	一部自然面を残す剥片で両端に両極打法による剥離痕残す。	黒曜石分析 No. 94
149	両極石器	SB39	完形	黒曜石	28.3	15.8	6.0	2.3	原石端部の破片で両端に僅かに剥離痕残す。	
150	二次加工剥片 (RF)	SB21	完形	黒曜石	27.6	15.0	4.7	1.1	素材は両極剥片の可能性あり。縦長剥片の片側縁に細かい剥離痕あり。	
151	二次加工剥片 (RF)	SB22 土器85内	完形	黒曜石	28.9	19.4	6.9	3.1	亜角礫から剥ぎ取った縦長剥片片側縁に細かい剥離調整を施す。	P24内 黒曜石分析 No. 28
152	縦形石匙	Ⅲ㊦区検出面	完形	黒曜石	69.0	29.6	8.4	13.3	縦長剥片表面に剥離調整を施す。縄文時代。	
153	二次加工剥片 (RF)	SB24	完形	黒曜石	22.7	21.3	7.5	2.9	縦長剥片縁部に細かい剥離痕あり。左下部分は欠損か。	
154	二次加工剥片 (RF)	SB24	完形	黒曜石	22.7	21.4	5.4	2.1	原石端部の矩形剥片片側縁に細かい剥離痕あり。	
155	二次加工剥片 (RF)	SB28 埋土	完形	黒曜石	27.5	18.5	9.1	3.9	縦長剥片の打面側を除く縁部に細かい剥離痕あり。	埋土
156	二次加工剥片 (RF)	SB24	完形	黒曜石	26.4	31.6	6.7	4.1	原石端部の矩形剥片周囲3片を剥離調整、1側縁に細かい剥離痕あり。	
157	二次加工剥片 (RF)	SB31黒曜石集中	完形	黒曜石	27.5	12.2	8.1	2.4	原石端部の横長剥片?片側縁に剥離調整を施す。下側欠損の疑いあり。	No. 151 黒曜石分析 No. 100
158	使用痕剥片 (UF)	SB08 検出面	完形	黒曜石	22.6	27.4	10.0	4.0	剥離調整を加える棒状石器。形状は石錐の可能性あり。	
159	使用痕剥片 (UF)	SB17	完形	黒曜石	31.7	15.0	8.0	2.5	原石端の縦長剥片1側縁に細かい剥離痕あり。	黒曜石分析 No. 10
160	使用痕剥片 (UF)	SB22	完形	粘板岩	63.5	33.6	5.8	14.0	円礫中央部の剥片で側縁に細かい剥離痕あり。縁辺摩耗している。粗製刃器か。	N. 12
161	剥片	SB22	完形	黒曜石	26.3	29.2	9.5	4.3	打面を自然面とする横長剥片。	黒曜石分析 No. 18
162	使用痕剥片 (UF)	SB22	完形	黒曜石	34.1	27.2	10.2	8.1	打面側を除く側縁部に部分的な細かい剥離痕あり。	黒曜石分析 No. 19
163	二次加工剥片 (RF)	SB22 土器85内	完形	黒曜石	25.7	27.8	7.7	3.1	原石端部の剥片で打面縁部に剥離調整を施す。	P24内 黒曜石分析 No. 29
164	二次加工剥片 (RF)	SB22 土器85内	完形	黒曜石	43.0	17.4	8.8	4.8	背面にヒンジエンドの剥離面があり、元来それを除去し作業面再生したときに生じる剥片とも考えられる。(アルカ)	P24内 黒曜石分析 No. 30
165	剥片	SB22 土器85内	左半欠	黒曜石	23.0	16.8	5.8	1.5	縦長剥片。	P24内 黒曜石分析 No. 31
166	二次加工剥片 (RF)	SB22 土器85内	完形	黒曜石	30.5	21.5	9.2	4.2	打面欠損する縦長剥片で縁部に部分的に剥離調整を施す。	P24内 黒曜石分析 No. 32
167	使用痕剥片 (UF)	SB22 土器85内	完形	黒曜石	19.0	30.0	9.0	4.4	横長剥片の片側縁に細かい剥離痕あり。	P24内 黒曜石分析 No. 33
168	使用痕剥片 (UF)	SB22 土器85内	完形	黒曜石	27.3	17.3	6.2	3.2	両極打法による剥片で、片側縁に細かい剥離痕あり。	P24内 黒曜石分析 No. 34
169	使用痕剥片 (UF)	SB22 土器85内	完形	黒曜石	31.8	16.5	6.2	3.1	縦長原石?の片側縁に細かい剥離痕あり。	P24内 黒曜石分析 No. 35
170	使用痕剥片 (UF)	SB22 土器85内	完形	黒曜石	33.5	17.9	9.1	3.8	ずり?の縁部に部分的な細かい剥離痕あり。	P24内 黒曜石分析 No. 36
171	使用痕剥片 (UF)	SB22 土器85内	完形	黒曜石	35.5	18.4	10.6	4.1	縦長剥片の片側縁に細かい剥離痕あり。	P24内 黒曜石分析 No. 37
172	両極石器	SB22 土器85内	完形	黒曜石	26.9	24.3	7.2	3.1	両極打法による剥片か。	P24内 黒曜石分析 No. 38
173	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	26.8	22.8	6.5	2.6	両極打法による剥片?の一部か。	P24内 黒曜石分析 No. 39
174	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	29.5	24.2	6.5	2.8	矩形剥片。打面は自然面。	P24内 黒曜石分析 No. 40
175	使用痕剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	27.2	28.6	9.9	5.6	素材は両極石器。エッジに光沢認められる(アルカ)。	P24内 黒曜石分析 No. 41
176	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	21.0	32.6	8.4	4.4	横長剥片であるが、表裏の面は風化している。	P24内 黒曜石分析 No. 42
177	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	22.4	19.9	7.4	2.7	下端部は欠損するか。	P24内 黒曜石分析 No. 43
178	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	25.6	16.3	5.7	1.6	角礫原石端部の縦長剥片。	P24内 黒曜石分析 No. 44
179	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	22.7	26.9	7.4	2.9	原石端部の剥片	P24内 黒曜石分析 No. 45
180	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	19.4	17.6	6.1	1.4	打面を自然面とする剥片。	P24内 黒曜石分析 No. 46
181	剥片	SB22 土器85内	上半欠	黒曜石	21.1	11.2	4.6	1.2	打面側を欠損する縦長剥片。	P24内 黒曜石分析 No. 47
182	剥片	SB22 土器85内	上半欠	黒曜石	20.3	31.8	9.2	4.2	部分的に自然面を残す縦長剥片。	P24内 黒曜石分析 No. 48
183	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	19.2	31.1	7.8	2.7	打面を自然面とする横長剥片。	P24内 黒曜石分析 No. 49
184	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	12.4	23.7	7.9	1.4	角礫原石端部の剥片。	P24内 黒曜石分析 No. 50
185	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	14.8	21.0	5.9	1.3	打面を自然面とする小型の矩形剥片。	P24内 黒曜石分析 No. 51
186	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	18.2	16.3	4.5	1.0	打面を自然面とする小型の矩形剥片。	P24内 黒曜石分析 No. 52
187	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	17.6	25.0	7.7	1.5	角礫原石端部の縦長剥片。	P24内 黒曜石分析 No. 53
188	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	23.0	14.0	3.6	0.7	角礫原石端部の縦長剥片。	P24内 黒曜石分析 No. 54
189	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	25.0	18.3	5.4	1.2	原石端部の縦長剥片	P24内 黒曜石分析 No. 55
190	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	17.3	21.3	5.5	1.6	円礫原石面を打面とする小型矩形剥片。	P24内 黒曜石分析 No. 56
191	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	16.5	21.7	4.5	1.1	小型矩形剥片。	P24内 黒曜石分析 No. 57
192	剥片	SB22 土器85内	完形	黒曜石	20.2	20.3	6.8	1.6	角礫原石端部の小型矩形剥片。	P24内 黒曜石分析 No. 58
193	剥片	SB26黒曜石集中	完形	黒曜石	20.9	24.5	4.5	1.1	小型剥片	ob 集中 3 黒曜石分析 No. 84
194	剥片	SB26黒曜石集中	完形	黒曜石	19.1	24.4	8.6	2.5	円礫原石面を打面とする小型矩形剥片。	ob 集中 4 黒曜石分析 No. 85
195	剥片	SB26黒曜石集中	完形	黒曜石	20.2	20.5	4.4	1.1	打面側を欠損する小型剥片。	ob 集中 5 黒曜石分析 No. 86
196	剥片	SB26黒曜石集中	完形	黒曜石	27.2	27.8	9.7	5.3	矩形剥片。	ob 集中 6 黒曜石分析 No. 87
197	剥片	SB26黒曜石集中	完形	黒曜石	25.0	18.3	7.4	2.8	円礫原石端部の縦長剥片。	ob 集中 7 黒曜石分析 No. 88
198	使用痕剥片 (UF)	SB26黒曜石集中	完形	黒曜石	29.7	20.6	6.6	2.7	角礫原石表面の剥片で片側縁に細かい剥離痕を残す。	OB 集中 8 黒曜石分析 No. 89
199	二次加工剥片 (RF)	SB26黒曜石集中	完形	黒曜石	23.1	28.9	9.9	5.9	円礫原石表面を打面とする剥片。一部剥離調整痕あり。	ob 集中 9 黒曜石分析 No. 90
200	使用痕剥片 (UF)	SB24	完形	黒曜石	46.7	15.8	6.8	2.8	原石表面の縦長剥片で、鋭角となる片側縁に細かい剥離痕が認められる。	
201	剥片	SB28 埋土	完形	珪質岩	26.2	21.0	3.3	1.4	磨製石錐製作途中で排出された剥片の可能性あり。	埋土
202	剥片	SB28 埋土	完形	下呂石	20.0	34.0	5.8	3.4	矩形剥片。小原石を90°持ち替えながら剥片を剥離したか。	埋土
203	使用痕剥片 (UF)	SB28 埋土	完形	黒曜石	36.8	12.8	5.5	2.2	原石端部の縦長剥片。鋭角となる片側縁に細かい剥離痕あり。	埋土
204	剥片	SB31黒曜石集中	完形	黒曜石	26.8	20.6	9.9	3.5	角礫原石端部の矩形剥片。側縁に部分的な細かい剥離痕がある。	No. 116 黒曜石分析 No. 104
205	使用痕剥片 (UF)	SB31黒曜石集中	完形	黒曜石	26.8	29.8	7.9	5.0	角礫原石端部の薄い剥片で側縁の一部に細かい剥離痕を残す。	No. 141 黒曜石分析 No. 106
206	二次加工剥片 (RF)	SB31黒曜石集中	完形	黒曜石	24.9	14.0	9.7	3.1	棒状で細かい剥離痕多数ある。製作途中で破損した石錐か石錐未製品か。	黒曜石集中一括 黒曜石分析 No. 95
207	剥片	SB31黒曜石集中	完形	黒曜石	29.2	30.9	11.5	7.2	原石自然面を打面とする矩形剥片。側縁の一部に細かい剥離痕がある。	No. 176 黒曜石分析 No. 103
208	二次加工剥片 (RF)	SB31黒曜石集中	完形	黒曜石	28.6	13.4	9.5	2.6	細かい剥離調整を施す。石錐か石錐未製品の可能性あり。	No. 209 黒曜石分析 No. 110
209	二次加工剥片 (RF)	SB31 埋土	完形	黒曜石	26.0	13.8	8.0	2.5	小型亜角礫周囲に剥離調整を加える。石錐か石錐の未製品か。	埋土 黒曜石分析 No. 126

第4章 遺物

表3-4 石器観察表

番号	器種	出土遺構・地点	遺存状態	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考	取上げ/備考*
210	使用痕剥片 (UF)	SB31 黒曜石集中	完形	黒曜石	20.1	30.1	9.1	3.5	円磨原石表面を打面とする剥片。一部細かい剥離痕あり。	黒曜石集中一括 黒曜石分析 No.96
211	使用痕剥片 (UF)	SB31 トレンチ	完形	黒曜石	22.6	23.9	5.7	2.3	矩形剥片縁部に細かい剥離痕が認められる。アルカの使用痕剥片では左側辺頂点に線状痕・摩耗痕認められた。	トレンチ 黒曜石分析 No.117
212	石錐未製品	SB41	完存	黒曜石	22.4	11.5	5.2	0.8	横長剥片破片を素材として両側縁に細かい剥離調整を加える。	
213	二次加工剥片 (RF)	SB35	完形	粘板岩	27.0	25.4	5.0	3.5	磨製石錐未成品の初期段階と思われる。	埋土北西部
214	剥片	SB37 埋土	完形	黒曜石	14.7	19.6	5.8	1.2	原石自然面を打面とする小剥片。	埋土
215	使用痕剥片 (UF)	Ⅲ②区検出面	完形	黒曜石	19.9	30.2	7.2	2.6	貝殻剥片縁部に細かい剥離痕が認められる。	
216	使用痕剥片 (UF)	Ⅲ②区検出面	完形	粘板岩	37.9	41.8	5.8	8.9	縁辺にマイクロフレイキング状の剥離あり。(アルカ) 粗製刃器破片か。	
217	使用痕剥片 (UF)	Ⅳ②区検出	完形	黒曜石	23.7	31.5	7.7	4.9	矩形剥片側縁部に細かい剥離痕、下端面の一端に剥離調整痕が認められる。	
218	二次加工剥片	Ⅳ②区検出面	完形	黒曜石	22.7	24.3	6.8	2.7	角磨原石端部の三角状剥片側面に剥離調整痕あり。石錐未製品の可能性もある。	
219	二次加工剥片	Ⅳ②区検出面	完形	緑色岩	16.8	21.7	5.9	2.3	打製石斧などの破片の可能性あり。	
220	剥片	SB35 埋土	完形	下呂石	32.4	28.3	7.3	5.3	背面にクサビタイプの剥離開始部あり。(アルカ)	埋土北東部
221	剥片	SB37 埋土	完形	チャート	18.9	34.2	7.5	2.5	曲げの剥離開始部。(アルカ)	埋土
222	剥片	Ⅲ②区検出面	完形	下呂石	29.8	24.8	9.6	3.8	矩形剥片。	
223	打製石斧	Ⅳ①区検出面	先端部のみ	砂岩	69.0	66.1	19.3	104.2	片側自然面を残す縦長剥片?側面に剥離調整。刃部破片。	
224	打製石斧	SB19	完形	粘板岩	125.5	51.6	19.9	132.9	横長剥片周囲に剥離調整。側縁・先端磨耗。	S10
225	打製石斧	Ⅲ・Ⅳ区検出面	完形	砂岩	140.4	60.0	18.6	141.6	表面自然面を残す横長剥片側面に剥離調整。先端磨耗。	
226	打製石斧	SB19	刃部欠	砂岩	65.8	68.3	27.0	103.3	表面自然面を残す横長剥片側面に剥離調整。基部側破片か。	S9
227	打製石斧	Ⅲ②区検出面	断片	珪質岩	87.2	33.7	13.5	38.8	表面に自然面を残す横長剥片側縁に剥離調整を施す破片。	L24グリッド
228	打製石斧	Ⅳ②区検出面	完形	珪質岩	115.3	42.0	17.2	112.6	表面に自然面を残す剥片側縁に剥離調整を施す。先端一部調査時に欠損。	
229	打製石斧	Ⅳ②区2層	完形	砂岩	131.6	56.7	25.4	185.8	表面に自然面を残す剥片側縁に剥離調整を加える。	2層黒褐色土
230	打製石斧	Ⅲ②区検出面	完形	砂岩	113.8	50.0	17.8	139.7	表面に自然面を残す横長剥片側縁に剥離調整を加える。	L24グリッド
231	打製石斧	Ⅲ②区検出面	基部欠	珪質岩	88.9	47.1	25.4	108.6	表面に自然面を残す横長剥片側縁に剥離調整を加える。	
232	石錐	SB38 埋土	刃部欠	砂岩	76.5	80.2	29.0	206.5	基部端部を自然面とする横長剥片側縁に剥離調整を加える。刃部側欠損。	埋土
233	石錐	SB34	完形	砂岩	132.7	83.2	21.4	255.1	表面自然面を残す横長剥片側縁に粗い剥離調整を加える。	S1
234	石錐	SD72	基部欠	砂岩	134.9	81.6	40.4	438.3	表面に自然面を残し、周囲に剥離調整を加える。刃部は欠損するか。	
235	石錐	SB37 埋土	上・下欠	砂岩	119.6	67.6	27.5	289.7	表面に自然面を残す横長剥片側縁に剥離調整を加える。基部・刃部両端欠損。	埋土
236	有孔磨製石庖丁	SD72	断片	粘板岩	56.4	98.9	9.4	80.7	定型的な石庖丁。研磨は丁寧。穿孔2孔。やや「く」の字状に屈曲。	
237	打製刃器	SB07 埋土	完形	砂岩	53.1	86.1	9.6	45.9	マイクロフレイキングではない可能性あり。(アルカ)	埋土
238	打製刃器	SB26	完形	緑色片岩	78.7	39.8	5.6	18.9	右側面に剥離加工。	S1
239	打製刃器	Ⅲ②区水田域	完形	緑色片岩	40.1	77.5	7.7	28.0	薄い板状剥片を用いる。一部研磨か。	
240	打製刃器	SB21	断片	凝灰岩	56.2	54.8	13.8	39.1	やや厚めの剥片。縁辺に剥離調整あり。	No.13
241	磨製石庖丁	SB26	左右欠	緑色片岩	56.2	60.3	9.5	38.5	器体は部分的な研磨で整形される。	
242	打製刃器	SB31	完形	緑色片岩	45.1	57.7	6.0	14.3	刃部研磨破片。	No.22
243	大型蛤刃石斧	SB17	完形	変質輝緑岩	187.0	70.3	43.6	1000.3	敲打・研磨。換熱?・破損。	No.3
244	大型蛤刃石斧	SB31	完形	変質輝緑岩	181.7	73.0	43.5	992.6	敲打・研磨	No.15
245	大型蛤刃石斧	SB21	基部欠	変質輝緑岩	100.0	69.9	43.3	419.6	敲打・研磨	No.19
246	大型蛤刃石斧	SB17	完形	変質輝緑岩	135.2	63.6	39.9	581.5	敲打・研磨	No.4
247	大型蛤刃石斧	SB31	完形	変質輝緑岩	144.8	69.1	40.5	719.0	敲打・研磨。基端面に研磨痕。	No.11
248	大型蛤刃石斧	SB26	完形	変質輝緑岩	186.7	70.0	39.1	909.3	敲打・研磨	
249	石錐	SB38	完形	砂岩	106.8	80.7	54.4	608.8	扁平礫使用。磨り面は鏡面状態。側面敲打痕あり。	No.1
250	石錐 (大型蛤刃石斧転用)	SB17	完形	変質輝緑岩	78.8	71.8	44.4	469.0	大型蛤刃石斧の転用。側面敲打痕あり。	No.61
251	磨製石斧 (乳棒状)	Ⅳ③検出面	欠損	凝灰岩	76.0	42.5	39.9	198.8	敲打・研磨。基部破片。	
252	扁平片刃石斧	SB22	完形	蛇紋岩	61.1	37.5	8.4	33.7	丁寧な研磨。刃部側面に抉り状研磨。	No.1
253	扁平片刃石斧	SB31	完形	蛇紋岩	32.1	32.1	7.3	16.0	丁寧な研磨。刃部側面に抉り状研磨。	No.2
254	扁平片刃石斧	SB17	完形	蛇紋岩	39.1	29.1	7.7	17.2	小型の製品か。	No.74
255	扁平片刃石斧	SB31黒曜石集中	完形	変質輝緑岩	74.5	51.5	12.0	92.9	丁寧な研磨。石材から搬入品と思われる。	No.193
256	扁平片刃石斧未製品-剥離	SB17	上半欠	蛇紋岩	39.7	29.3	5.5	7.2	粗製未製品。	No.74
257	扁平片刃石斧未製品-研磨	SB17	完形	ホルンフェルス	115.2	66.2	19.3	239.2	研磨途中の未製品。	No.1
258	扁平片刃石斧未製品-研磨	SB17	完形	蛇紋岩	46.7	39.8	8.1	29.3	研磨途中の未製品。	No.72
259	扁平片刃石斧未製品-研磨	SB22	右側欠	蛇紋岩	92.7	52.6	10.9	59.8	研磨途中の未製品。半分欠損。	No.2
260	扁平片刃石斧未製品-研磨	SB17	上端欠	蛇紋岩	59.5	44.2	14.3	55.0	研磨途中の未製品破片。	No.2
261	扁平片刃石斧未製品-研磨	SB22	完形	蛇紋岩	74.8	46.7	10.4	65.4	研磨途中の未製品。基部側面欠損か。	No.4
262	扁平片刃石斧未製品-研磨	SB26	完形	蛇紋岩	61.5	45.8	10.3	55.3	研磨途中の未製品。	トレンチ
263	扁平片刃石斧未製品-研磨	SB26	完形	蛇紋岩	63.9	47.2	12.9	55.3	研磨途中の未製品。刃部部分的に欠損か。	
264	扁平片刃石斧未製品-剥離	SB26	破片?	蛇紋岩	55.9	55.1	14.7	42.1	粗製工程未製品破片か。石材から扁平片刃石斧と判断。	トレンチ
265	扁平片刃石斧未製品-剥離	SB26 埋土	完形	砂岩	62.7	32.4	13.2	28.2	粗製工程の未製品。	埋土
266	磨製石斧未製品?-研磨	SB28	欠損	蛇紋岩	75.7	46.0	14.2	77.4	研磨された破片。研磨は丁寧。石斧との認定に不安あり。	No.1
267	扁平片刃石斧未製品-研磨	SB31黒曜石集中	完形	蛇紋岩	95.0	65.3	18.1	163.1	研磨途中の未製品。	No.195

表3-5 石器観察表

番号	器種	出土遺構・地点	遺存状態	石材	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考	取上げ/備考
268	磨製石斧未製品? - 研磨	SB31黒曜石集中	完形	蛇紋岩	72.1	47.5	13.0	87.4	研磨途中の未製品。	No.190
269	磨製石斧未製品? - 研磨	SB31黒曜石集中	完形	蛇紋岩	78.2	40.3	11.6	68.8	研磨途中の未製品。	No.212
270	磨製石斧未製品? - 研磨	SB31黒曜石集中	完形	蛇紋岩	61.6	41.3	9.1	41.4	研磨途中の未製品。	No.194
271	扁平片刃石斧未成品 - 剥離	SB31黒曜石集中	完形	蛇紋岩	91.9	28.4	13.9	45.3	粗削工程の未製品。	No.189
272	磨製石斧未製品? - 研磨	SB31	完形	蛇紋岩	46.5	37.2	10.7	32.6	研磨途中の未製品。	No.1
273	扁平片刃石斧未成品 - 剥離	SB31黒曜石集中	完形	蛇紋岩	72.3	38.3	10.5	43.4	粗削工程の未製品。	No.231
274	扁平片刃石斧断片	SB31黒曜石集中	刃部断片	蛇紋岩	16.4	16.4	8.0	2.1	研磨された刃部破片	No.184
275	扁平片刃石斧	Ⅲ②区検出面	完形	蛇紋岩	45.3	25.8	7.8	17.9	研磨途中の未製品。	
276	磨製石斧未製品? - 研磨	SB37 埋土	断片	緑色岩	36.4	43.7	9.5	23.1	研磨途中の未製品破片。	埋土
277	扁平片刃石斧断片	SB31黒曜石集中	側面断片	蛇紋岩	20.8	15.1	3.9	2.1	研磨途中の未製品破片。	No.188
278	砥石	SB01 床下	上半欠	砂岩	73.5	49.6	32.6	154.6	棒状円礫先端側面敲打	床下
279	砥石	SB01 床下	完形	泥岩	129.2	57.3	46.7	410.5	棒状円礫先端に敲打あり。	床下
280	砥石	SB08	完形	砂岩	136.9	74.5	73.1	1007.2	棒状円礫側面・先端に敲打痕あり。	No.45
281	砥石	SB28	不明	粘板岩	95.2	49.3	33.0	190.1	周囲剥離調整。転用か。広面に敲打痕あり。	No.2-2
282	砥石	SB18	完形	安山岩	195.0	121.3	58.3	1977.0	扁平円礫先端に敲打痕あり。	
283	砥石	SB21	完形	安山岩	126.2	59.5	45.7	329.0	三角錐状円礫側面に敲打痕あり。	No.6
284	みがき石	SB22 土器85内	完形	泥岩	44.0	33.7	19.8	39.7	小円礫側面に横方向の研磨による線状痕あり。	P24内
285	砥石	SB19	完形	砂岩	237.1	214.9	68.1	4129.4	扁平円礫上面に敲打痕あり。	S2
286	磨石	SB13 Pit2	完形	砂岩	77.3	43.3	9.5	48.2	扁平円礫表面に線状痕あり。	Pit2
287	砥石	SB13 Pit4	上半欠	安山岩	214.8	64.8	67.1	1095.5	棒状円礫側面に研磨による線状痕あり。	Pit4
288	砥石	SB19	完形	砂岩	269.9	115.8	130.5	4800.0	敲打で形態を整えている。置き砥石。	No.1
289	磨石	SB01 床下	完形	粘板岩	88.3	26.3	10.1	41.9	棒状扁平円礫広面に横方向の線状痕あり。	床下
290	磨石	SB08 床下	完形	砂岩	149.1	38.8	23.1	171.3	表面に線状痕あり。	床下
291	砥石	SB19	断片	砂岩	150.5	152.4	54.2	1772.0	砥面が鏡面状態となっている。	S5
292	砥石	SB21	完形	砂岩	138.4	76.3	45.0	722.1	断面方形の砥石。1面に研磨痕。遺存不良。	No.24
293	砥石	SB22	完形	砂岩	117.1	123.9	46.3	800.3	断面長方形の置き砥石。広面・側面研磨。	
294	磨石 + 砥石	SB21	下半欠	砂岩	91.8	87.7	22.0	263.3	扁平円礫広面に研磨痕。部分的な敲打痕あり。	No.17
295	砥石	SB35下層	下半欠	砂岩	240.3	122.4	59.6	1717.6	置き砥石。扁平な円礫状を使用。	
296	磨石	ST12 Pit1	完形	砂岩	150.1	67.4	21.9	349.9	扁平円礫広面1面に研磨痕あり。	下層
297	砥石	SB28	完形	砂岩	176.4	101.3	43.0	639.8	角礫状礫を用いる。広面1面を研磨。中央部が窪む。	No.10
298	砥石	SD67	上端欠	砂岩	116.7	77.3	67.4	362.9	角礫状砥石。各広面に研磨痕あり。	
299	砥石	SB31	断片	安山岩	159.8	155.6	47.3	1639.0	扁平円礫広面1面に研磨痕あり。	No.9
300	砥石	Ⅲ②区検出面	完形	砂岩	131.2	69.5	58.2	513.8	断面長方形の砥石。広面1面を砥面に利用する。	L24グリッド
301	砥石	SB31	断片	砂岩	91.3	45.2	76.6	444.2	断面長方形の砥石。表面傷みで砥面仔細不明。	No.24
302	砥石	SB31	完形	砂岩	321.5	254.0	104.3	9600.0	磨製石斧研磨用の置き砥石。遺存不良で表面傷む。	No.21
303	砥石	SB22	上端欠	砂岩	35.0	15.5	13.3	8.9	表面風化。断面円形の棒状砥石。	No.5
304	砥石	SB28 埋土	上下欠	砂岩	38.8	38.0	12.7	22.0	断面長方形の砥石。遺存不良で広面・側面を砥面とする。	埋土
305	砥石	SB22	上端欠	砂岩	62.9	32.9	9.3	29.8	断面長方形の小型砥石。遺存不良。	No.3
306	砥石	SB17	断片	砂岩	77.1	35.2	9.2	36.6	2片接合。断面長方形の扁平砥石。	No.75・埋土
307	砥石	SB31 黒曜石集中	完形	砂岩	48.2	68.0	20.1	62.6	砥石破片。砥面1面は緩やかな曲面となる。	No.192
308	砥石	SB19	完形	砂岩	73.7	23.9	20.4	39.2	角礫状砥石。角礫面を砥面に利用。	S7
309	砥石	SB31	断片	砂岩	43.1	54.0	30.7	91.6	砥石破片。広面1面の砥面は緩やかな曲面となる。	No.12
310	砥石	SB26 埋土	完形	砂岩	54.2	30.9	17.8	40.4	断面長方形の小型砥石。遺存不良。遺存不良。	埋土
311	砥石	SB31	欠損	砂岩	78.3	51.8	41.4	172.8	断面長方形の砥石。	No.25
312	砥石	SB01	断片	結晶片岩	44.2	56.5	7.8	20.0	遺存不良で表面剥落している。穿孔あり。	
313	砥石	SD74	欠損	凝灰岩	48.8	32.0	13.4	26.9	断面長方形の砥石。表面に砥石整形痕?あり。	
314	原石	SB17	完形	黒曜石	67.0	39.8	20.2	53.6	一部表面剥落するが、ほぼ全面風化面となる。	No.64 黒曜石分析 No.14
315	原石	SB22 土器85内	完形	黒曜石	33.1	24.8	9.4	6.4	いわゆるズリと呼ばれるもの。	P24内 黒曜石分析 No.59
316	原石	SB01 床下	完形	黒曜石	41.3	30.4	23.6	30.1	表面風化面となる亜角礫。	床下 黒曜石分析 No.3
317	原石	SB27 埋土	完形	黒曜石	66.2	36.0	22.0	60.4	断面長方形の角礫。	埋土 黒曜石分析 No.92
318	原石	Ⅳ②区検出面	完形	黒曜石	35.5	18.8	9.5	4.7	表面風化する亜角礫。側面に剥離調整?あり。	黒曜石分析 No.2
319	原石	SB27	完形	黒曜石	29.2	43.4	14.3	16.8	表面風化面となる角礫。	黒曜石分析 No.91
320	分割礫	SB31	一部欠損	黒曜石	29.5	22.5	8.4	7.1	断面長方形の角礫。一端欠損。	黒曜石分析 No.93
321	原石	SB31	完形	黒曜石	53.3	25.1	20.5	27.7	角礫原石の破片。取り上げ時に敲打。	No.25 黒曜石分析 No.102
322	原石	Ⅲ④区検出面	完形	黒曜石	27.6	46.3	13.2	15.4	亜角礫状の原石で1面1方向から剥片剥離する。	黒曜石分析 No.1
323	石核未成品	Ⅲ④区検出面	部分欠	黒曜石	42.8	42.4	26.0	41.9	右側面の剥離は最近の剥離。剥離面が新しい。	
324	石核	SB09	完形	黒曜石	54.3	45.0	30.2	67.0	風化面を残す角礫。1面を2方向から剥片を剥離する。	黒曜石2 黒曜石分析 No.8
325	石核	SB09	完形	黒曜石	31.3	31.1	14.5	11.7	亜角礫を用い、1面に1方向から剥片を剥離する。	黒曜石3 黒曜石分析 No.9
326	石核	SB09	完形	黒曜石	37.7	56.3	30.9	62.8	亜角礫を用い、1面直交2方向、1面1方向から剥片を剥離する。	黒曜石1 黒曜石分析 No.7
327	石核	SB17 埋土	完形	黒曜石	23.0	32.6	18.6	16.1	小亜円礫を用い、上部1方向から打撃を加える。	埋土 黒曜石分析 No.15
328	両極石核	SB17	完形	黒曜石	25.4	30.9	9.7	5.9	亜角礫を用い、両極打法で分割する。打面は自然面。	黒曜石分析 No.11
329	両極石核	SB17 埋土	完形	黒曜石	33.6	27.7	11.7	8.2	亜角礫を用い、両極打法で剥離する。打面に自然面を残す。	埋土 黒曜石分析 No.16
330	両極石核	SB17	完形	黒曜石	37.2	27.8	13.9	14.5	亜円礫を用い両極打法で打撃する。1面は自然面を残す。	黒曜石分析 No.12

第4章 遺物

表3-6 石器観察表

番号	器種	出土遺構・地点	遺存状態	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考	取上げ/備考
331	石核	SB17	完形	黒曜石	38.2	32.0	14.7	15.0	亜角礫を用い、打面に自然面を残す。広面1面は直交2方向からの打撃、裏1面は両極打法によるか。	黒曜石分析 No. 13
332	両極石核	SB21	完形	黒曜石	29.6	13.9	9.4	3.6	原形不明。角柱状で3面は同一方向からの打撃、1面のみ逆方向で部分的に自然面を残す。	
333	石核	SB22	完形	黒曜石	25.6	29.6	8.2	5.0	亜角礫端部で1面に自然面を残す。剥離面は3方向からの打撃。	黒曜石分析 No. 20
334	石核	SB22 土器85内	完形	黒曜石	26.4	32.8	13.8	8.5	亜角礫端部片で1面自然面。剥離面は回転しながら剥片をとる。	P24内 黒曜石分析 No. 60
335	石核	SB22 土器85内	完形	黒曜石	25.5	23.8	9.3	5.0	亜円礫の板状片で1方向から打撃をくわえる。側面に自然面。	P24内 黒曜石分析 No. 61
336	両極石核	SB22 土器85内	完形	黒曜石	31.0	21.9	12.7	7.4	角礫を用い、両極打法で打撃。(二重パテナ、剥離技術不明、HvD剥片、打面線状。)	P24内 黒曜石分析 No. 62
337	両極石核	SB26 黒曜石集中	完形	黒曜石	42.0	49.7	25.2	46.9	円礫1面を90°回転しながら剥離する。	ob集中1 黒曜石分析 No. 82
338	石核	SB26 黒曜石集中	完形	黒曜石	28.7	36.5	30.1	31.3	角礫で3面自然面を残す。打面を歪えながら剥離か。	ob集中2 黒曜石分析 No. 83
339	両極石核	SB27	完形	黒曜石	32.6	23.0	19.8	13.3	角柱状で2面自然面を残す。3面は同一方向からの剥離で1面は逆方向の剥離・自然面となる	
340	両極石核	SB27	完形	黒曜石	34.0	30.6	15.9	11.9	亜角礫1面を両極打法で打撃を加えている。表面は自然面。(剥離技術HvD、剥片形状HvD剥片、打面自然面、作業面最大長2.0mm)	
341	石核	SB27 埋土	完形	黒曜石	32.8	44.2	21.3	20.7	亜角礫1面1方向から剥離。裏・側面は自然面(剥離技術HD、剥片形状矩形、剥離角98°、打面自然面、作業面最大長28.2mm)	埋土
342	石核	SB28	完形	黒曜石	54.1	20.7	21.6	24.7	角柱状原石一端を1面2方向から剥離する。	No. 58
343	両極石核	SB28 埋土	完形	黒曜石	28.8	33.8	21.3	17.8	亜角礫1面1方向から剥離。	埋土
344	両極石核	SB31 Pit 2	完形	黒曜石	22.5	23.3	11.8	4.8	亜円礫裏表2面を剥離面とする。1面は1方向、もう1面は両極となる。	Pit 2 黒曜石分析 No. 112
345	石核	SB28 埋土	完形	黒曜石	15.3	40.6	9.5	4.7	亜角礫を用い、2面に自然面を残す。打面は自然面で1方向から剥離。(剥離技術BHvD、剥片形状HvD、剥離角100/108°、打面平坦な自然面、作業面最大長不明)	埋土
346	両極石核	SB31 埋土	完形	黒曜石	24.8	24.1	9.7	5.0	小さな亜角礫を両極打法で表面を剥離する。	埋土 黒曜石分析 No. 120
347	石核	SB31 Pit 2	完形	黒曜石	33.8	16.0	20.7	9.5	角柱状で側面2面が剥離面で他面は自然面。上面は剥離面。同一方向から剥離。	Pit 2 黒曜石分析 No. 98
348	石核	SB31 Pit 5	完形	黒曜石	29.4	27.9	14.8	11.4	亜角礫を両極打法で打撃を加える。両極石核の可能性もある。それ以外は自然面	Pit 5 - 2 黒曜石分析 No. 113
349	両極石核	SB31 埋土	完形	黒曜石	23.0	25.6	10.1	4.6	角礫?を両極打法で打撃を加える。下端に打点が入れる階段状剥離認められる。	埋土 黒曜石分析 No. 127
350	両極石核	SB31 壁溝内	完形	黒曜石	26.0	21.3	16.7	7.0	小亜角礫を両極打法で打撃する。	壁溝内 黒曜石分析 No. 115
351	石核	SB36 Pit 4・5	完形	黒曜石	41.6	48.8	16.1	24.2	角礫2面を剥離。1面は1方向、もう1面は両端2方向から剥離。	Pit 4・5
352	両極石核	SB13 床下	完形	黒曜石	26.0	26.4	20.0	10.1	亜円礫1面を両極打法で剥離。(剥離技術HvD、剥片形状HvD剥片、打面自然面、作業面最大長小さい剥離)	床下
353	両極石核	SD71	完形	黒曜石	42.3	37.0	17.9	27.4	角礫状で表面ほとんど風化面。両極打法剥離が部分的にある。(剥離技術は仔細不明、剥片はHvD剥片、打面等仔細不明。作業面最大長10.3mm)	
354	石核	ST01 (SK17)	完形	黒曜石	22.1	29.5	13.4	9.6	角柱状亜角礫3面を側面から剥離。他面は自然面。(剥離技術HvD、剥片形状矩形、剥離角104°、打面自然面、作業面長不明)	
355	両極石核	III㊦区検出面	完形	黒曜石	24.1	36.5	16.4	11.9	亜角礫1面を2方向から剥離。ひとつの剥離は両極打法によるか。(剥離技術HvD、剥片形状HvD、打面自然面、作業面最大長20.5mm)	
356	台石	SB19	上半欠	砂岩	174.6	200.7	45.1	2125.4	扁平円礫。加工・使用痕認められず。	
357	台石	SB19	完形	安山岩	186.4	176.2	53.9	2494.4	扁平円礫。加工・使用痕認められず。	S 6
358	台石	SB19	完形	砂岩	170.6	154.5	29.3	1119.4	扁平円礫。加工・使用痕認められず。	S 3
359	台石	SB31	完形	砂岩	308.6	85.9	51.4	2018.8	角柱状の円礫。熱を受けている。面は平坦ながら使用・加工痕はない。	No. 10
360	台石	SK80	完形	砂岩	184.3	157.1	119.9	5407.0	円礫で、使用・加工痕は認められず。	
361	台石	SB17	完形	砂岩	489.1	196.8	106.6	14400.	使用痕等は確認できない。熱を受けている。	
362	管玉	SB28	完形	緑色凝灰岩	13.3	4.8	4.0	0.4	断面方形さみ。穿孔。	
363	紡錘車	ST12 Pit 2	半分欠	滑石	39.2	24.5	9.9	9.6	周囲研磨。穿孔1孔。	No. 1
364	石製模造品	SB08 床下	完形	不明	20.9	28.9	4.1	4.3	周囲研磨。穿孔2孔。	床下
365	石製模造品	SB02 床面	完形	滑石	18.5	20.2	3.4	2.3	周囲研磨。穿孔1孔、未穿孔1孔。	床面
366	石製模造品	SB15	完形	不明	34.9	20.2	5.2	5.6	表面研磨。穿孔1孔。	
367	磨製石鏃未成品?	SB31	先端欠	緑色片岩	30.6	19.1	2.6	2.1	表裏面・側面研磨。	No. 13
368	磨製石鏃	SB31	刃部欠	粘板岩	96.1	37.7	6.3	35.3	表面研磨。	No. 14
369	磨製石鏃未製品	SB39	破片	頁岩	32.5	4.3	3.6	0.7	両端に溝?のある破片。1条は溝方向に研磨されるが、もう1条は斜めの研磨。	
370	白玉	SB08 土器343内	完存	滑石	3.7	3.4	2.2	0.1	断面形は中位が膨らむそばん型に近い形状でタテ方向に研磨される。	P 1 土器内
371	白玉	SB08 土器343内	完存	滑石	4.4	4.3	3.2	0.1	断面形は中位が膨らむそばん型に近い形状でタテ方向に研磨される。	P 1 土器内
372	白玉	ST12 土器408内	欠損	滑石	5.1	4.0	2.1	0.1	厚さは薄い。断面は中位が膨らむ。1/2欠損し、遺存不良。	P 1 土器内

第3節 木製品

Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区水田跡の畦芯材や杭列から多くの木製品が出土した。詳細な時期を特定できなかったものも多いが、中・近世の所産と、Ⅲ区北部の河道跡低地内下層水田跡で採取された弥生・古墳時代の2時期のものがある。ここでは2時期に大別して記述するが、図は出土地点毎に掲載した。また、木取は柾目・板目・割材・丸木に大別したが、木取りは加工方法や木製品自体の形状解釈に直接関わる重要な観点ながら、不十分な観察しかできなかったことを断っておきたい。特に、県内の他遺跡では柾目・板目の中間的な木取をナナメ材と表現しているが、本遺跡では年輪角度から感覚的に柾目・板目に振り分けたところがある。さらに、広面を年輪と同方向に取る材で、板目ではなく柾目と捉えたものもある。木取りは加工工程の解釈とも関連するが、加工工程と木取の解釈は総合的に整理できていない。なお、樹種分析は(株)パレオ・ラボに委託し、樹種の同定結果は観察表に加えた。

1. (古代) 中世～近世の木製品

(1) 木製品の種別概要

Ⅱ層前後検出の杭、古代以後の遺物を伴う土層・遺構出土の木製品である。Ⅲ区A低地3～5層出土木製品は伴出した下駄の形態等から当該期の所産と判断した。また、A低地一括とされた木製品は類似品が出土しているⅢ③区3～5層出土と思われる。

①. 杭

箕輪遺跡で最も多く出土し、遺存良好な杭を選択的に採取した。採取杭が1割に満たない遺構もあり、遺構全体の傾向を示すにはやや不安もある。杭は断面台形ぎみの方形・長方形、三角形・板状などの割材を主に用い、丸木杭は少量で一部の遺構にみられる。なお、SA107・108・110・41・51出土杭は遺存不良で採取していない。

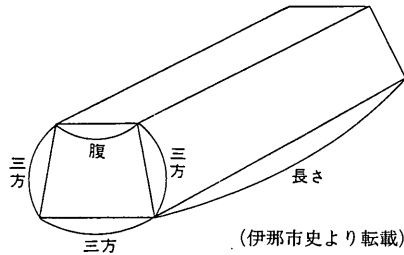
割材杭は柾目材で、広面を年輪直交方向に取る柾目Aと平行方向の柾目Bに分けられる。加工痕が認められないことから建築材等の転用ではなく、放射状にミカン割し、一部芯と表皮を除去した材を用いている。先端の削り加工は方形断面の割材では各角・面の4方向、鋭角1角の三角形断面の材は鋭角側1箇所と反対の鈍角2角の3方向か鋭角側1角のみの1方向、鋭角2角の三角形断面の材は鋭角2角を中心として鈍角を補助的に削る。同一杭列内でも多様な削り方が認められるが、基本的には割材形状に関係する。

丸木杭はⅤ区SD72、Ⅵ区SA50などから多く出土した。SD72は区画整理直前の溝跡で、先行するSA41・42は放射状に分割した割材を用いることから、丸木杭が多用されるのは後出する様相と思われる。これは南箕輪村教育委員会調査での指摘(南箕輪村教育委員会1993)と一致する。なお、樹種はサワラが圧倒的に多い点も、これまでに報じられる樹種傾向に一致する。他樹種を含む例としてSA50・72・74はアカマツ・クリ・アスナロ、SD79でモミ属・トウヒ属がある。アカマツやクリはSA50・SD72のように丸木杭の多い遺構に用いられる傾向がある。

ところで、近年善光寺平の水田遺跡で出土した杭は、古墳以前には建築廃材転用の割材を多用するが、平安以後は細い丸木杭を多用する傾向があること、樹種のなかでサワラは石川条里遺跡の古墳時代祭祀遺構を囲む溝内の杭など限定した場所のみで用いられることが知られる。今回、箕輪遺跡ではサワラが多い状況が知られたが、これは当遺跡の他時代にも共通した様相で、地域的な植生環境によると思われるが、中世以後に割材杭を用いるのは何らかの背景があると思われる。

その解釈の一つとして想起されるのは、伊那谷特産品として中世・近世に産出された樽木との関係であ

種類	天領(享保10年)	高遠領(享保3年)
長 樽 木	長さ 3尺3寸 三方 3寸 腹 2寸	長さ 3尺3寸 三方 3寸 腹 1寸5分
短 樽 木	長さ 2尺3寸 三方 3寸 腹 2寸	長さ 2尺3寸 三方 3寸 腹 1寸5分



第166図 樽木の規格

る。樽木(くれき)とはヒノキ、スギ、サワラを一定の長さに切って放射状に割り、表皮と中心部分を除いて断面台形にした角材を指し、建築材や、薄く剥いで桶用・屋根板材を作る材料木とされた。江戸時代は年貢樽や役樽に屋根板用のサワラ樽木が指定されたという。この樽木の貢納品規格は地域・時代によって用法・サイズが異なるという。浅井舎人氏の整理(浅井舎人1982)によると、延暦十年(791)太政官符に近畿諸国の樽規格を長さ1丈2尺(約3.6m)、幅6寸(約18.2cm)、厚4寸(約12.1cm)に定めているが、この規格から規定材を建築材と推測している。鎌倉時代には中部山岳地帯が産地になり、建築材目的の長さ7~8尺(2.1~2.4m)が産出されたことが知られ、室町時代には屋根板材・曲物・桶材として5~6尺(1.5~1.8m)に短くなるという。近世では伊那市史・箕輪町誌に掲載されている享保年間(18世紀前半)の規格には、長さ3尺3寸(約100.0cm)の長樽木と長さ2尺3寸(約69.7cm)の短樽木があり、長樽木では芯側の

短辺「腹」が天領は2寸(約6.1cm)、高遠藩領で1寸5分(約4.5cm)、「三方」は何れも三寸(約9.1cm)という。短樽木は高遠藩領・天領とも三方3寸(約9.1cm)、腹は天領2寸(約6.1cm)、高遠藩領1寸5分(約4.5cm)という(第166図)。また、生産については天正16年(1591)飯田城代篠治勝次郎秀政の書状に桶材の樽木を出していたことが知られ、文禄年間に伊那から木瓦(板子)を遠州経由で大坂へ出していたことも知られる。伊那谷は古くからサワラ樽木産地として知られ、箕輪町でも近世に産出していたことが知られる。(市川脩一1986)

箕輪遺跡出土の杭材は柁目の放射状に分割し、芯・表皮を除去した台形基調の断面であること、サワラが多く用いられる特徴は樽木にほぼ合致する。杭という性格上、本来の形状のままとはいえないが、計測可能な断面規模を計測してみたところ(第167図)、割材杭断面規格は幅5cm前後を中心とした3~7cmの範囲で、厚さは3cm前後が多い。多少のばらつきはあるが、ほとんどの杭は類似した規格ではある。先の文献に掲載されているサイズと比較すると、明らかに樽木の規格よりも小さいが、出土杭に多い5cm前後は三方9cmの半分の4.5cmに近い数値ではある。樽木1/4分割すればこの数値に近くなるが、サワラ樽木は貢納品として生産されたもので、土木工事で使ってしまうことは考えにくい。むしろ、樽木生産で排出された規格外部分か、規格に合わせて整形する際に派生した端材かもしれない。腹側不用材ならば幅4.5~6.1cm、三方側の端材を1/2分割すれば4.5cmといった近似数値にはなる。また、大量のサワラ割材杭が産出される契機としては樽木生産に関連させると考えやすいようにも思う。

なお、箕輪町誌には興味深い記事が紹介されている。箕輪町内に残る元禄十二年(1699)『樽木代米御訴訟に付御代官様より御勘定江御書上之写』によると、飯田藩小笠原兵部少輔知行時代(1601~1613)に箕輪町28ヶ村は北沢山・霧沢山二箇所から樽木材を伐採して現物で納めていたが、樽木材をとりつくし、そのうえに耕作の妨げになるとの理由から、脇坂淡路知行時代に訴訟して寛永十八年(1641)から代米納になったという。この記事からすると、箕輪町内で藩に納める樽木生産は17世紀前半まで行われ、以後は米で代納して公的納付する現物が生産されていないことになる。しかも、樽木現物納をやめる理由に材を伐りつくしたことが挙げられているので、この時期は規格を充たすサワラが減少していたとみられる。箕輪遺跡の杭がサワラ樽木生産の廃材利用とすると、杭列の年代は1641年以前ともみられるかもしれないが今回の調査で考古学的な裏付けはできていない。もちろん、商品としての個別生産が継続した可能性もあ

るが、サワラ割材杭が箕輪遺跡全域に認められることから、個人レベルよりも、村単位あるいは領主(藩)など広域にわたる施行計画によりサワラ割材杭が多用された可能性が高いように思われる。

②. 板材

Ⅲ③区北A低地の3～5層から薄い柾目板片が多数出土した(71～77、81～89、97～105)。一部折られたものもあって完存品はないが、厚さ0.4～0.7cm、幅は残存長1.5～5.0cm、長さは残存長で8～24cmまでである。すべて同器種とは言いきれないが、柾目の薄い板で側面以外に削りが認められず、76・88・99～101のように片側木口が斜めに削られるものも多い。薄い柾目板ながら曲げの加工や綴じた部分が無いことなどから曲物とは考えにくく、端部が斜めに削られて直縁が少ないことから平折敷破片とも言いきれない。屋根板材などの建築材としても風化が顕著でなく否定的である。箕輪遺跡では類似品として齋申があるが、幅1.4～2.0cm前後、長さは8cm以上の木口一端を斜め・鶏頭状に尖らせた柾目板、さらに直径0.5～0.8cmで長さ8cm前後の棒状材などがあり、あわせて人形・馬形が報じられている。出土状態は不明ながら、時期は古代とされる。一方、Ⅲ③区出土材は古代とは断じえず、高歯下駄の出土からは古代後期～中世の可能性が高い。また、中世齋申例は山梨県大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区出土木製品にその可能性が指摘される木製品があるが、棒状・板状で本遺跡例とはやや形状が異なっており、本例を齋申とも断じ得ない。ここでは器種不明の板材としておく。なお、83のみ年輪に沿う割板片である。

③. 曲物容器底板・曲物

Ⅲ③区A低地5層から86、SD72から691の2点が出土した。86は推定径7cm前後で柄杓底板と思われ、691は底面に3つの脚をはめこむ溝が認められる。

④. 下駄

下駄は全部で3点出土した。SD72から690・692の2点とⅢ③区A低地5層出土の90である。690は遺存不良ながら連歯下駄、90は下端が広がる台形の下駄歯である。上端に鼻緒孔の一部と思われる窪みが認められ、これまでに知られる差歯下駄は歯から離れて鼻緒孔が開けられる例が多いようなので、連歯下駄と思われる。形状から古代後半か中世以後の所産と推測される。692は部分的な破片である。

⑤. 栓

Ⅲ③区A低地一括採取品に94の円筒形木製品がある。遺存不良で削り等は不明ながら両端の平坦面は本来の面と判断され、認定に不安は残るが形状から栓とした。

⑥. 棒状製品

器種を特定できない棒状製品を一括した。すべてA低地3～5層、一括取り上げである。69・70は他部材と組み合わせる部品と思われ、69は差込の削り込みが両端に観察できる。また、70は両端が細めに削られる棒状材で側面に2条細い線が刻まれている。断面台形で上下の形状が異なることから横方向に組み合わせる部品と思われる。80・91・92は加工痕が判然としない角材で、先端を尖らせる加工は認められず、91は端部が平坦である。何らかの部品とも思われるが器種を特定できなかった。96は円筒形に削られた棒状材断片で、全体形状は不明ながら80・91・92とは異なる器種とみられる。

⑦. 不明品

Ⅲ③区からは93のような斜めに切断した角材状木片、細い角材状の85などがある。何かの部品とも思われるが、器種を特定できなかった。

(2) 遺構別出土状況

①. VI～II区出土木製品

SA50(第171図)10本出土し、遺存良好な3本を図示した(1～3)。下層から13世紀のこね鉢が出土し、

中世以後の所産とみられる。丸木主体で割材もある。丸木がアカマツで割材はクリであった。

SA101 (第171図 PL61) 281本検出した杭のうち10本のみを採取・図示した(4~13)。遺存不良で短いものが多い。ほとんど割材杭で4・10・11は部分的に炭化している。いずれも柁目ながら断面形は台形・方形・板状・三角がある。樹種は6点がサワラで4点がヒノキ(属)とされた。

SA102 (第171図 PL61) 251本出土し、10本を採取図示した(14~23)。SA101杭と類似した形状だが炭化した杭は認められない。樹種は7点がサワラで残りがヒノキ(属)である。

SA103 (第171図 PL61) 197本検出したうち、10本を採取図示した(24~33)。やや長めの杭が含まれるが、柁目の割材を多用し、断面形状は台形・方形・三角・板状などがある。樹種は5点がサワラで残り5点がヒノキ(属)である。樹種別の杭形状に差はない。

SA104・105 (第171図 PL61) SA104は約96本、南のSA105で約34本検出し、SA104を中心に11本を採取図示した(34~44)。比較的長く、遺存良好な杭が多い。割材柁目材を用い、断面は方形・台形・三角・長方形など多様である。樹種は6点がサワラ、ヒノキ属1点、モミ属2点で他は針葉樹としか判明していない。

SA106 (第171・172図 PL61) 12本出土し、3本を採取図示した(45~47)。遺存不良ながら割材と丸木杭がある。2点樹種分析し、丸木の47はサワラ、丸木1/2ほどの割材45がマツ属であった。47は数少ないサワラの丸木杭であり、製材時に排出された不用枝材を用いたか。

A 低地3~5層出土品・出土層位不明品 (第203図 PL70) A 低地3~5層から薄い柁目板、棒状材、下駄歯、柄杓底板?などが出土し、その一部を図示した(69~105)。不明一括で取上げられた材も類似形状で、ほぼ3~5層出土品とみられる。器種不明の薄い板材が多く、出土材は下駄歯も含めてすべてサワラであった。なお、高歯下駄歯出土から、古代でも平安時代前半まで溯らないと思われる。

SA33 (第172図) 186本の杭を検出し、10本採取図示した(48~57)。何れも遺存不良で杭先端は残存しない。採取した杭は割材で、断面長方形を呈する。5点樹種分析し、サワラ2点、ヒノキ2点で1点は針葉樹としか判明していない。樹種の傾向は上記の杭列と同様である。

②. III区河道跡~微高地出土の木製品

SA31 (第172図) 総数約588点ほど出土したうち10点を実測した(58~67)。割材が多く、上記の杭列とほぼ同様の傾向を示す。柁目割材で樹種は1点ヒノキとされたが、他すべてはサワラであった。

SA52 (第196図) 微高地域北部で検出された杭列で、散在的な杭6本が見つかった。このなかで比較的遺存良好な517のみ図示した。割材杭で、杭の形状は他の杭列と同様である。樹種はサワラであった。

SD69・74 (第196~199図 PL70) SD69は193点、SD74は36点ほど出土したが、横倒し木材も本来杭であったと思われ実数は多いと推測される。ここではSD69で95点、SD74で18点を図示した(522~634)。杭は柁目割材杭が多いが、SD74に丸木杭が若干含まれる。遺存状態は何れも良好である。樹種はSD69で75点分析し、サワラ67点、ヒノキ属2点、アスナロ4点、クワ属1点、残りは針葉樹としか判明していない。サワラが圧倒的で、クワを除けば基本的に針葉樹である。クワ属とされた550は小丸木を1/3ほど分割したもので形態的に異質である。SD74は17点分析し、サワラ9点、クリ2点、アカマツ2点、ヒノキ属3点、モミ属1点であった。サワラ・クリ・ヒノキ属を用いる点は同様ながら、619・620の丸木杭にアカマツが認められる点は興味深い。丸木杭618は樹種同定していない。

③. IV・V区低地出土の木製品

SA41 (第200図 PL70) SD72に先行する古い溝跡に伴う杭列で、SA42に連続する。82本出土し、内13本図示した(635~647)。割材を用い、小丸木を分割したと思われる表皮の残る杭もある。樹種は7点サワラ、2点アスナロ、2点クリ、他は針葉樹とされた。アスナロは丸木の636、割材の638、クリは641・646

の割材で、樹種別に杭形態差は認められない。

SA42 (第200図 PL70) SA41に連続する杭列で30本出土し、5本採取図示した(648~652)。SA41同様に小丸木を分割したと思われる表皮を残す割材杭を含む。樹種はすべてサワラである。

SA43 (第200・201図 PL70) 117本出土し、25点本図示した(653~677)。細い丸木杭が少量含まれるが、丸木を分割して先端を削る杭が多い。樹種はサワラ15点、ヒノキ属4点、ヒノキ科1点、クリ1点、モミ属2点で圧倒的にサワラが多い。クリ材は少ないが、割材杭に使用されている。

SA44 (第201図 PL70) 25本出土し、3本図示した。(678~680) SA43とほぼ同じ傾向をもつ。径の細い丸木を分割した非常に細い杭が含まれる。クリ2点とサワラ1点である。

SA45 (第201図 PL70) 3点図示した(681~683)。柱目の薄い割材を用いた杭で全てサワラである。

SA47 (第201図 PL70) SA45と関連した遺構で、13本出土し6点図示した(684~689)。丸木材2点あるが、他は割材である。589は側面と裏面に縦引き鋸によると思われる線状痕が無数に認められる。厚さも一定し、製材されたか製材途中の端材を転用したと思われ、縦引き鋸製材普及以後の所産とみられる。樹種はサワラ3点、クヌギ節1点、トウヒ属1点、カエデ属1点である。丸木は684クヌギ節、688カエデ属で、縦引鋸製材の689がトウヒ属である。樹種ごとに木取りが異なる傾向が窺える。

SD72 (第199・200図 PL70) SA41・42に後出する溝跡で、丸木や細い丸木を1/2~1/8分割した杭が多い。SA41・42に後出すると捉えられるので、丸木杭の多用は近世末か近代の後出様相と捉えられる。約150本出土したが、一部を採取して37点図示した(693~729)。樹種はサワラ6点、ヒノキ科1点、トウヒ属2点、アカマツ・マツ属で12点、他は針葉樹等としか判明しない。サワラ・ヒノキよりもマツ類が多い傾向をもつ。しかも、サワラは693・695・703・707・719が割材で718のみ丸木であるが、マツ類は704のみ割材で他は丸木か丸木を1/2前後分割した杭である。

SD79 (第203図 PL70) 掲載した木製品は横倒し状態で出土した(730~733)。先端に削りは認められないが、割材を用いており、その断面形状から杭であった可能性がある。何れも遺存不良ながら、732・733は部分的に削り痕を残す。樹種はサワラ・モミ属・トウヒ属がある。

2. 弥生・古墳時代の木製品

(1) 弥生・古墳時代の器種別概要

弥生・古墳時代木製品はⅢ区北河道跡低地A・E低地内3面水田遺構内から多く出土した。遺存不良や杭転用で本来の形状が不明となるものも多いが、大部分は建築材や建築材製作時の廃材と思われ、農具・容器類は僅かしかない。他に微高地の土坑・住居跡出土のものが少量ある。以下に種別に概観する。

①. 建築材

水田跡畦芯材や杭に転用されたものがある。風化や腐欠、2次加工で本来の形状がわからない材が多く、建築材の部位を特定できたものは少ない。ここでは可能性もあるものを含めて扱う。長野県内の弥生・古墳時代建築材出土例は水田畦跡内から出土した高床建物部材が多いが、これは竪穴住居跡よりも大量に木材入手できる高床建物部材を水田施設構築材に転用したからと考えられている。本遺跡でも板状材の多さから高床建物廃材を用いているとみられ、木芯畦跡は何度か補修・作り替えられていることや炭化した材を用いることからストックされた材を必要に応じて用いたと推測される。なお、木芯畦跡出土材は圧倒的にサワラが多いが、微高地域の竪穴住居跡出土材は広葉樹が多い傾向が知られた。サワラは中世以後も多用されるので当地域の植生環境に関係した傾向と思われるが、竪穴住居跡出土材が広葉樹を多用することは建物種類別に用材が異なることを示唆する。

ア. 高床建物の部材

高床建物部材は柱・束柱・方立など縦材と、梁・桁・台輪・床板・壁板・棟・入口まわりなどの横架材に大別されている(伊藤友久1999)。他に屋根垂木材や梯子、入口部周辺の部材があるが、今回は認められていないので縦材と横架材、壁・床板材、その他に区分して記述する。なお、建築材の部材比定は県内出土例を参照にしたが、認定に不安を残す。また、微高地域の掘立柱建物跡では古墳後期とそれ以前では平面形態が異なると思われたが、建物跡痕跡と部材の関係は検討できていない。

縦材 縦材の代表に柱材があり、県内では石川条里遺跡、川田条里遺跡、榎田遺跡、春山B遺跡などで弥生・古墳時代の柱材が出土している。これらの出土例は直径10～15cm前後の丸みのある材で、先端に横架材を繋ぐほぞか、横架材を落とし込む溝等の造作がある。丸木が多いながら、石川条里遺跡では割材を用いた柱材報告例がある。本遺跡のSA38の209・211など年輪と直交方向に曲面を形づくるものがあり、これらは割材を用いている可能性がある。柱材と認定できた例は318があり、杭出土時の状態で図示したが、建物使用時はほぞが柱上端となる。断面は扇状の1/4分割材と思われ、ほぞは断面が丸い。欠損する下部形状は不明ながら、側面の平坦面に壁板が接すると思われる。樹種はクヌギ節である。また、252はコナラ節の丸木1/2割材で平坦面と側面に削り痕が部分的に残り、柱材の可能性が残る。この2例は広葉樹で、高床倉庫の柱に広葉樹が用いられたか、堅穴住居跡柱材かもしれない。209・211等も柱材と断定できるならば、広葉樹とサワラなど針葉樹を用いる2者があることになる。

横架材 横架材には軸部構造を構成する材と、その間を埋める板材が知られているが、板材は別に後述する。横架材に使われる角材や厚い板材は杭転用時に細かく分割されたためか、認定できたものは少ない。県内出土の横架材には台輪・梁・桁・棟木などが知られる。台輪は床を支える枠組みを構成する材で、この台輪の上に床板が載せられる。石川条里、川田条里遺跡、榎田遺跡などで出土し、若干形態差はあるが、幅18～34cm、厚さ4～7cmの厚めの板状材を用い、長方形のほぞ穴が縦長に施されている共通点がある。梁は川田条里遺跡に報告例があり、幅7～11cmの台輪よりも細めの角材を用い、弥生後期例は両端にほぞ穴、古墳時代前期例はV字状の抉り、古墳時代中期ではさらに浅い削り込みを施すものがあるという。桁は石川条里遺跡で、細長い角材状の材に台輪よりも細めの縦長のほぞ穴をつくりだし、側縁には垂木受けと推測される斜めの浅い抉り込みをもつ材が出土している。棟木は榎田遺跡出土例のみが知られる。1/2割材の両端にほぞ穴を施し、丸木側に斜めの抉り込み2箇所が認められるようだ。伊藤氏は二重梁の上に束柱を建てて棟木を支える構造と推定している。

以上のように横架材は縦材と組み合わせるために、端部にほぞ穴やV字状の抉り込み、あるいは一段低く削り込む仕口が施されている。梁・桁と台輪は同じ柱の上端と中段に設置されることから類似したつくりとなるが、床を支える台輪のほうが上方の横架材よりも幅広く、厚く強固に作られる傾向がある。これらの特徴を参照して箕輪遺跡出土例をみてみた。

ほぞ穴が認められる材は143・490があり、炭化して詳細不明ながら253も本来、ほぞ穴が形づくられていた可能性がある。143は幅11.8cm・厚さ3.4cm、490は幅11.9・厚さ5.4cm、253は幅10.5cm・厚さ4.2cmで、上記県内出土例に照らしてみると台輪以外の梁か桁に該当すると思われ、細いほぞ穴があることから桁材の可能性が高い。他に横架材の可能性のある材として119・141・144・163・251がある。141・251はやや曲面を描くが、比較的厚く広い板材とみられ、141は幅13.0cm・厚4.6cm、251は幅10.8cm以上・厚さ6.2cmで、台輪の可能性が残る。119は幅9.2、厚4.2cmで床板か角材状横架材と思われる。144は幅10.3・厚3.0cmで、板とするには狭く壁板材とするには厚いが、端部が平坦ぎみに削られることから横架材と考えられるか。163は幅約10.1cm・厚さ4.8cmで144に類似した規模である。

壁・床板材 県内では屋根板材と認定されたものはなく、床板材と壁板材が知られる。伊藤友久氏は壁板は過重量が小さいことから厚さ1～2cm前後、柂目板が多く用いられると指摘した(伊藤友久1999)。

壁板材を固定する方法は柱材、壁板同士で板端に開けた穴を縄で結ぶか、目釘で打ち込まれる手法が想定され、石川条里遺跡（弥生後期～古墳時代前期）では縄孔が多く認められる。壁板材は古墳中・後期を中心とする榎田遺跡や川田条里遺跡ではあまり認められていない。床板材は重量を支えるために4 cm前後と厚く、板端には台輪に掛けるために一段低く削り込む造作をもつものが想定されている。また、榎田遺跡では柾目板もあるが、板目材が用いられることが指摘されている（伊藤友久1999）。

箕輪遺跡の板材が多い畦芯横木材の厚さ／幅を比較すると（第168図）、厚さ2 cm前後に一つの集中が認められ、やや曖昧ながら3～4 cm前後にもう一つ集中が認められそうである。また、薄いものほど幅が狭い傾向があり、厚さ2 cm前後の材は幅3～15 cm前後までだが、厚さ4 cm前後の材は幅8～27 cm前後となる。量的には前者の薄い板が多い。また、規格は榎田遺跡と同様だが、箕輪遺跡では木取りの識別に不安があって断定はできないものの、薄い板材にも板目がある。これはサワラという針葉樹の特性や板目材を取った端材を用いた用材や遺存状態に左右された可能性もある。また、薄い板材が多い傾向は、壁板材が多いためか、厚めの板材は薄く割られて転用されたことであろうか。ちなみに杭サイズをみると厚さ3～5 cm、幅3～8 cm前後前後に集中する傾向ももち、厚めの板材とほぼ重なる規格ではある（第169図）。

上記から、壁板材と思われる材は縄孔が認められる128、幅・厚さ共に大きいものの端部をナナメに削った162が挙げられる。162は妻側小屋組部の壁板材とも思われるが、その角度が浅く、かなり緩やかな勾配となるため認定に不安がある。他は薄めの柾目か柾目に近い127・140・177・192・194・310・317・444・464・506があり、遺存不良で板材か年輪方向の割材・破片とも判断できなかった薄い板の159・160・177・310・457～460・472～480もその可能性が残る。

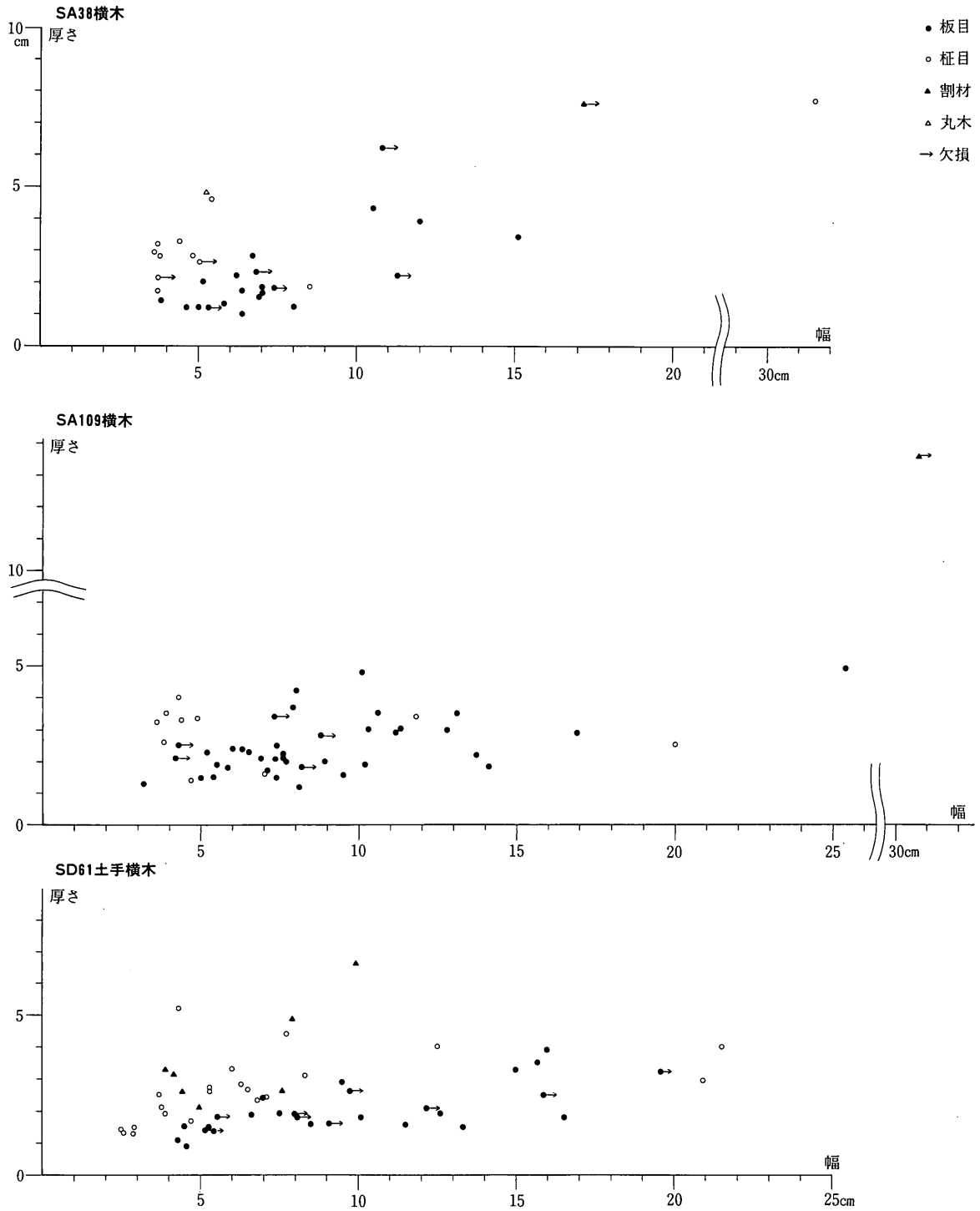
床板材は一端に台輪に重ねる一段低く削り込む造作の有無と厚板を条件とすると、炭化材ながら端部に一段削り込みが認められる199が該当する。他に厚めの119・167・174・292・344・346・463・464なども床板の可能性はある。なお、144は厚めの板状材ながら、端部は削られていることから床板材ではなく、横架材かもしれない。上記の壁・床板材以外の板状材では、節周囲の湾曲部、あるいは節孔をもつ108・142・166・227・250は割板材、あるいは端材の可能性はある。

その他 微高地域で検出された掘立柱建物跡 ST12柱穴跡底から515・516の板材2点出土した。出土状態から礎板と判断したが、類似形状の木製品は榎田遺跡等で端材と報告されるものがあり、本遺跡では土坑 SK06からも同様のものが出土している。断面台形で木口1端が垂直・平坦ながら、片側木口は斜めに削られる。他の広面、側面には何も加工痕は認められない。平坦な木口は傷みで加工痕不明で、切断方法はわからない。先述したように類似品521がSK06から出土している。

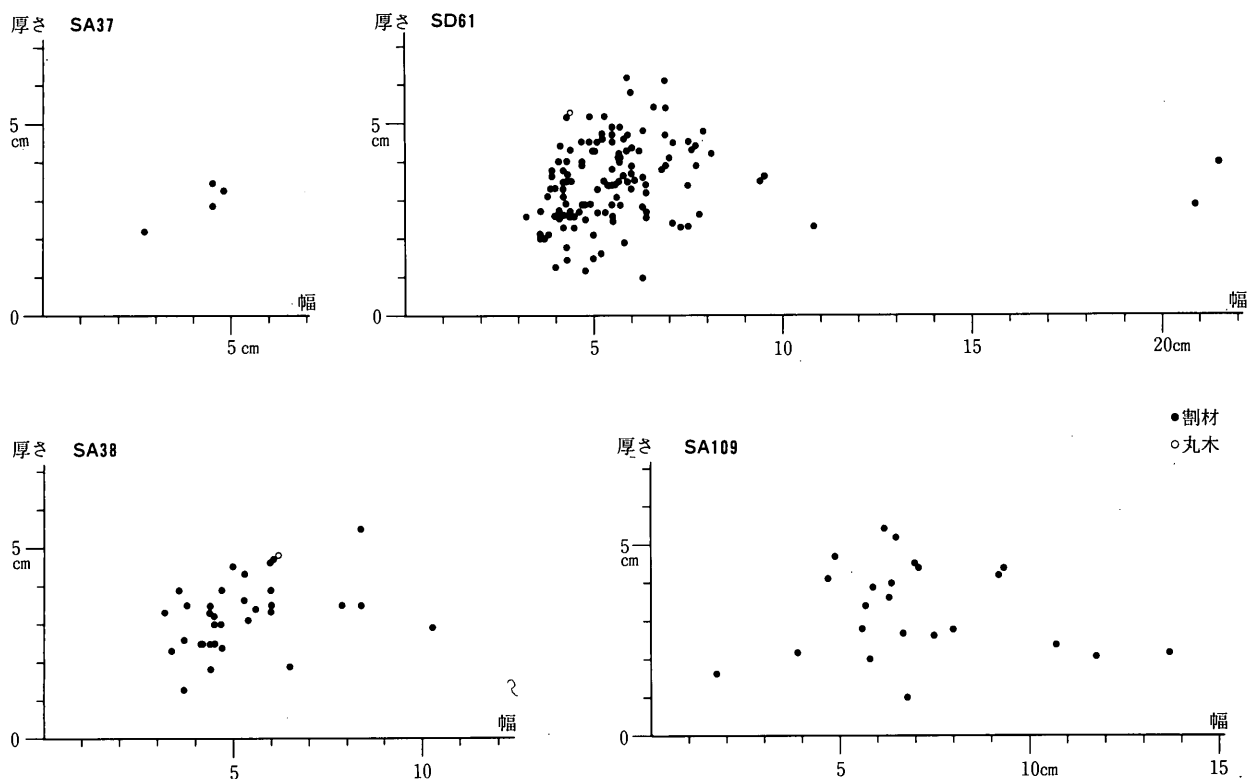
イ. 竪穴建物跡の建築材

竪穴住居跡からは柱材と垂木と思われる炭化材などが出土した。柱材は古墳後期竪穴住居跡 SB10の柱穴跡底出土材や、弥生中期後半の SB31柱穴跡上部に立って出土した炭化材がある。SB10の柱材は下端木口が平坦な丸木だが、遺存不良のため加工痕は残らない。樹種はニレ属であった。SB31の炭化材は本来の形状を残さないが、P1がクワ属、P2がコナラ節であった。

垂木類と思われる断片的な炭化材は、弥生中期後半 SB17・22・26・31出土材81点を樹種分析したところ、針葉樹は SB17でヒノキ6点、イチイ1点、SB22でサワラ1点があり、他はすべて広葉樹でオニグルミ16点、コナラ節16点、クヌギ節13点、クリ7点、ケンボナシ属6点、ニレ属3点、コナラ節かクリ1点、ヤナギ属1点、イヌシデ節1点、ハンノキ亜属3点、トチノキ1点、広葉樹としか判明しなかったもの1点であった。弥生後期では SB101でヒノキ属2点のみが確認された。古墳後期は SB04・08出土材23点分析し、クヌギ節7点、コナラ節3点、トネリコ属7点、ハンノキ属・亜属4点、モクレン属1点、クワ属



第168図 SA38、109、SD61土手横木幅／厚さ規模グラフ



第169図 SA38、109杭幅厚さ規模グラフ

1点不明1点との分析結果を得た。竪穴住居跡材は形状不明のものが多く、樹種は広葉樹を主体ながらも同一遺構内でも多様な樹種が用いられる傾向が知られた。ただし、水田域出土木材ではサワラが多い傾向と比べると、建物種類によって用材が異なる可能性も窺える。もっとも、水田域でも僅ながらコナラ節・クヌギ節建築材の252や381が出土し、一方で竪穴住居跡でもヒノキ属・サワラなど針葉樹材も出土しているので樹種を違える傾向も絶対的とは言いきれない。

なお、弥生中期後半のSB31東壁際中央で細材が直交方向に折り重なるように検出された。位置的に入口等の施設の一部と思われたが、遺存不良で構造は明かにできなかった。

②. 杭

中世以後の杭は選択的に持ち帰ったが、Ⅲ区河道跡低地内の古墳時代杭はすべて採取した。ただし、SA109に関しては遺存良好なものを選択的に図化した。また、整理段階で取り上げ地点のラベルを見なおすと板材ながら杭と表記されるなど、取上げ前後に遺構や番号ラベルを取り違えている疑いがある。畦の作り替えで杭を横木に転用したものもあるかもしれないが、先端の尖らない板材を杭にしたことは考えにくいので、ラベル取り違いがあるとみられる。

杭は丸木が僅かで割材が多く、割材が建築材を加工転用したと思われる。部分的な炭化面を分割・削るものもあり、焼却・焼失した廃材の転用やストックされた材を用いたと思われる。建築材転用杭には上述した板材、柱材と思われるもの、さらに刳物転用があるが、ほとんどは本来の形状がわからない。また、割材杭は、外見上中世以後の杭と変わらないものが多いが、板材利用の杭は中世以後にはあまり認められないので、当該期の所産と判断する材料になる。樹種はすべて分析したわけではないが、サワラが圧倒的に多く、ヒノキ・スギ・アスナロなどの針葉樹が少量あり、僅かながらSA38・SD61土手杭にクリ・ニレ、あるいはコナラ節などが混じる。少ない樹種は丸木、丸木割材杭に認められる傾向がある。畦補修・改築など補助的に用いられた可能性がある。

③. 田下駄・大足

田下駄は紐孔がなければ判断できないため、水田跡出土の板材破片に可能性を残すものがあるが、認定できたものはE低地3面水田跡出土の112・115の2点、SD61埋土出土の294の1点である。このうち、294は板先端に僅かながら孔と思われるものがある。112は曲物底板をまな板に転用し、最終的に田下駄に転用したもので、表面にはまな板使用時の線状痕が残る。側板との結合方法は奈良国立文化財研究所の『木器集成 近畿原始篇』のC・D類にあたとみられる。樹種は何れもサワラである。大足は棧状の木杵に田下駄状板をつけた形状で、民俗例では緑肥を踏み込んで土と混ぜる機能とされる。今回の調査では箕輪遺跡初出となる大足杵木がSD61埋土から出土した。断面は角が丸い方形ぎみのもので、貫通するほぞ穴4つ、未貫通ほぞ穴が貫通ほぞ穴中間に二つづつ合計6孔穿たれている。調査時に馬鋤とも考えたが、山田昌久氏のご教示により、先端に紐をかけた痕跡と思われるくぼみがあることなどから大足杵木と判明された。周囲からは関連する部材出土はない。樹種はサワラである。

④. 刳物・田舟

SA109から田舟と推測される176、SA38杭に転用された刳物破片242が出土した。樹種は前者がサワラ、後者がサクラである。サクラ材は本遺跡内では僅かしか出土せず、同じSA38の226もサクラと分析されたことから、226は同一刳物破片かもしれない。田舟はSA109内に分割して埋設されていたもので、本来のサイズは不明である。箕輪遺跡の既出田舟は2例あり、1点は鱸孔をもつ全長112cm、もう1例は破片である。本例は箕輪遺跡で3例目にあたり、既出資料のなかでは最も大きい。形状は鱸(とも)・舳(へさき)が斜めの平坦面に形づくられる大型の槽形である。県内では春山B遺跡で舟の出土例があるが、全長290cmで最大幅64cmと大きく、鱸(とも)に穴が設けられ、左側に引っぱられた痕跡が確認されている。今回出土のものには鱸穴がなく、舳部の可能性がある。

⑤. 丸木弓

弥生中期後半のSB22より513が1点出土した。一部木質が残存するかなり堅緻な炭化材で調査時にも他炭化材と異なることが窺えた。弓幹断面は楕円形で1面に棒樋を施し、その棒樋周辺に削り痕が認められる。棒樋側が内湾側にあたり、削りがあることから弓弭に近い部分と推測される。

⑥. 柄状木製品

SD114から枝基部を削った柄状の木製品287が1点出土した。幹側の接続部分に削り痕があるが、枝部分は未加工である。形状から柄と考えたが、断定はできない。樹種はクヌギ節とされた。

⑧. 不明材

建築材以外の器種不明の特徴的な木製品を記述する。何れもSD61・114出土である。295は環状材を半分に分断した把手状の木製品で樹種はサワラである。297は半円形の板材で側面に削りを残す。樹種はサワラである。288はSD114出土の棒状材で、木口一端は削り痕があり、側面1面に部分的な削り痕がある。板・角材の破片ではなく、別材と組み合わせる部材片と思われる。水田域という出土場所を考慮すれば、大足杵木にはめ込む部材などが考えられるが、断定はできない。樹種はサワラである。

(2) 遺構別出土木製品

弥生・古墳後期と思われる木製品はⅢ区北河道跡低地3面の水田跡、木芯畔跡SA109・37・38・SD61土手、SD61・62・114、微高地域の住居跡・土坑などから出土した。木芯畦跡は関連する類似時期の所産とみられるが、同一畦内でも改築・補修が認められる。畦内の構築材には土留めや沈下防止の横木に大別されるが、杭は建築材、端材などを適当なサイズに分割して再加工するため、原形を残すものが少なく、横木は比較的本来の形状に近いまま使われるとみられるが、遺存不良のものが多い。微高地域からは炭化

した竪穴住居跡柱材、垂木?、弓など少量が出土した。

① Ⅲ区河道跡低地出土木製品

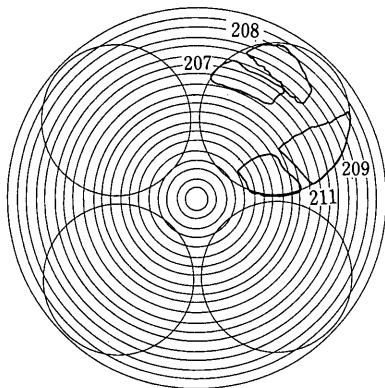
A 低地3面・10層 (第174図 PL61) 遺存不良で少量のみ出土し、図示できたのは6点である(106~111)。108は割板材で割り面は凹凸がある。中央の楕円形孔は人為的なものではなく、薄く破れたものである。109、111は炭化材で本来の形状、器種は不明である。110は板材ながら側縁部に削りが認められる。板材転用の矢板杭の可能性がある。これらは樹種分析していない。10層出土では板材2点があり、何れも桁目板で107のみ木口が削られている。いずれもサワラである。

E 低地3面 (第174図 PL61) 木製品は僅かしかなく、4点図示した(112~115)。112・115が田下駄で、湿地性水田であったことを示す。114は器種不明の板材、113は小角材で、樹種は全てサワラである。

SA37 (第180図 PL64) 調査時の記載もれで位置不明であったが、整理の出土木製品と遺物出土状況図の照合からⅢ③区南端の調査地区検出の杭列に比定した。平面図には杭8本と畦脇に分布する板材・棒状材が記録されている。図示したのは杭3本と板・棒状材7点である(195~204)。杭は桁目の割材杭であるが、建築材の転用かどうかは判然としない。すべてサワラを用いる。198は杭か横木か判然としないが、他は畦芯横木材もしくはその破片と思われる。199は炭化した床板材とみられ、200~204は遺存不良で判然としない。樹種は1点広葉樹があるが、他はすべてサワラであった。

SA38 (第181~185図 PL64~66) 重複するSD62出土木製品に本跡の横木が含まれる可能性がある。また、Ⅲ⑤区では杭のみ検出されたが、SA109と一括で取り上げたのでまとめて後述する。

横木は35点図示した(243~277)。横木の幅/厚さを湾曲が著しい250、1/2割材の252を除いてグラフにすると(第168図)、幅4~6cm前後で厚さ3~5cmの角材、幅4~8.5cmで厚さ1~3cmの板材、幅10~15cmで厚さ3~6cmとなる大きめの板・角材に大別できそうである。256・258・260は横木に転用されたか、横倒しになった杭と思われる。建築廃材と思われる材が多く、251・252・253は建物軸部を構成する構造材、他は角材状か板材である。板材のなかには250のように節孔を留める表皮近くの部位と思われる材もある。断面形状から板材と判断される材は板目20点、桁目4点の合計24点(68.6%)ある。遺存不良で部材加工の痕跡が判然としないものも多い。樹種は全てサワラである。角材状材は桁目7点、板目?2点の合計9点(25.7%)で、横木に角材はあまり用いられない傾向がある。ただ、板目の可能性がある材は板材の割材か、破片の疑いが残る。樹種はサワラのみである。他には杭の可能性のある丸木1点、1/2割材の建築材が1点ある。前者の256がニレ、後者の252がコナラ節と分析されている。いずれも、水田域出土木製品のなかでは数少ない樹種であり、252は柱材の可能性もある。なお、250・251は炭化している。



第170図 SA38杭木取り模式図(推定)

杭はⅢ④区でSD62内検出の杭も含むと、平面図では37本(南北13、東西12、SD62周辺12)ある。Ⅲ⑤区出土の10本ほどはSA109杭と一括して取上げたので、ここではⅢ④区内出土杭を中心に扱う。38点図示した(205~242)。平面図記録より1点多いが、241は杭と表記されていたものながら形状から横木の誤りとみられる。比率計算では除外した。遺存不良で取上げ時の欠損もあって先端の削り部分が不明瞭なものも多い。

幅/厚さの規模は幅3~6cm、厚2~5cmのものが多く、厚3cm前後で長さ6.5~10cm前後のものや幅8.5・厚さ5.5cmのものが僅かにある(第169図)。断面形状から板材、角材、割材状に区別できる。板材は8点(21.1%)あり、図示した205・206・213は板材だが、207

・208は角材に含めたほうが良いかもしれない。木取りは板目が6点、柀目が2点で、柀目も広面側を年輪方向とするもので板目材の可能性が残る。樹種はサワラが6点、針葉樹は1点、少数例ながら205は広葉樹と分析された。角材は24点（63.2%）で最も多い。木取りは柀目が20点で多く、板目は5点である。板目とした角材は板材の分割材かもしれない。また、1側面が曲面となる209・211は曲面が年輪方向ではないため割材から作り出した柱材を分割した可能性がある（第170図）。樹種はすべてサワラである。割材は丸木を放射状に分割したもので4点（10.5%）ある。この杭のみ樹種が異なり、クリ3点、サワラ1点であった。他に242のサクラ材剝物破片があり、226もサクラ材なので同一剝物の破片と思われる。

なお、杭全体の樹種はサワラ29点（76.3%）を占め、残りは広葉樹1点（2.6%）、サクラ2点（5.3%）、針葉樹1点（2.6%）、クリ3点（7.9%）である。SD61土手同様にクリ丸木割杭を含む。

SA109（第174～180図 PL62～64）横木は板材・角材、田舟など52点図示した（143～194）が、遺存不良で加工痕が不明瞭なものが多い。田舟を除く横木の幅／厚さ規模では（第168図）、幅4～14cmで厚さ1～2cmの板材、幅7～17（20）cmで厚3～5cm前後の板状材、幅3～5.5cmで厚3～4cmの角材に大別できる。板材は37点該当し、板目と思われるものが33点を占める。樹種はサワラ35点、スギ1点、未分析1点である。角材状材はすべてサワラで、板目？8点、柀目5点図示した。割材の可能性のあるのは149の1点でサワラである。なお、149・151・156・162・165・189・191・193は炭化している。

横木で建築材と思われるものは、143の横架材とその可能性がある144、壁板材は162・177・192・194とその可能性がある159・160、床板材は167・174がある。145・163・171・172などの板・角材も建築材の可能性はある。166は割材片と思われる。また、横木で取上げられたが174・175・191は杭である。150は一側面に抉りと思われる加工痕があるが判然としない。上記のほかに176の丸木舟が出土している。

杭はⅢ②区で34本、Ⅲ⑤区では11本ほどあり、ここではSA109に限定して取上げられたⅢ②区出土のみを扱う。図示したのは27点で（116～142）、本跡のみ遺存良好な杭を選択図化した。また、139～142は形状から杭とは言いがたく、取上げ時か木製品洗浄時に取り上げラベルを取り違えた疑いがある。140は壁板材と思われ、139・141は建築材、141は割板材と思われる。幅／厚さ規模を比較すると（第169図）厚さ2cm前後で幅2～14cmの板材とみられるものと、幅4～9cmで厚さ3～6cm前後の角材・割材の2グループに分離できる。板状材は120・122・126～128・135・136・137があり、板目4点、柀目4点で合計8点図示した。樹種はすべてサワラである。135は表皮近くを年輪に沿って剥いだ材と思われる。表皮の凹凸にそってS字状に湾曲する。127・128は壁板の転用と思われる。角材では板目が4点、柀目8点の合計12点を図示した。123・131は割材、132も板材破片かもしれない。119は床板の可能性はある。樹種は125がヒノキであるが、他はすべてサワラである。割材は1点のみ133を図示した。サワラである。クリ材は分析資料内に認められなかった。

SA38・109（第185図）Ⅲ⑤区でSA109とSA38が直角に連続するように検出され、この部分は一括して取り上げた。SD62が上部を流れて横木は流出し、杭のみがある。平面図ではⅢ④区SA38延長先に10本、SA109延長先に11本の合計21本ほどあるが、遺存良好な9本図示した（278～286）。278は209同様に年輪直交方向に曲面があり、柱材の転用と思われる。284は板材、279・281は建築角材を転用したと思われ、282は丸木1／2割材、他は柀目の角材状割材である。樹種は9点分析し、サワラ5点、コナラ節2点、ヒノキ1点、ムラサキシキブ属1点との結果を得た。サワラ以外に数種類の樹種が認められる。

SD61土手（第187～195図 PL67～69）整理時の検討で、SA37・38・109と同じ3面水田に帰属する木芯畦跡と判断した。横木は53点図示した（434～486）が、このなかで434～446は杭であり、ラベル取り違えの疑いがある。幅／厚さグラフ（第168図）では幅2.5～21.5cmで厚さ1～4cm前後の板材、幅3～8cmで厚さ2.5～5cm前後の角材状に大別でき、幅5cm以下の材は角材・板材の判別が難しい。板材は34点

(64.2%)を図示した。厚さ2cm前後のものが多いながら、比較的幅のある材は厚さ3～4cm前後に集中する。板目が26点と最も多く、柾目は8点であるが板目と捉えた材には年輪方向を広面とする柾目か、年輪方向に剥落した材も含まれるかもしれない。樹種は8点未分析ながら、サワラ23点、モミ1点、針葉樹2点で、サワラが圧倒的に多い。なお、杭の可能性のある444は数少ない柾目板で、445は木取り認定に不安がある。また、464には手斧の削り痕と思われる加工痕があるが、表面炭化したもので断定はできない。461は一部削りのある表皮部分の板状材で、樹種は数少ないモミ属であった。476は比較的厚く、割材の可能性が残る。457・459・466・477は畦構築時に打設された杭の貫通痕跡がある。板材の444・457～460・472～480は厚さから壁板材、463・464は床板材と思われる。

角材は476など13点あるが、杭6点が含まれ、確実に横木と言い得るものは僅かしかない。しかも、形状は角材ながら残存幅が狭く、板材破片の可能性のあるものを引くと横木に転用された角材は非常に少ないとみられる。すべて柾目で樹種は4点未分析だが、サワラのみである。また、角材状材のなかで割材と判断される材は447、448などサワラ材がある。

杭は146本ほど採取されたが、遺存不良品や取上げ時に破損したものを除き、土手芯材の遺存状態が良好だった本跡北部出土の116点を図示した(318～433)。サイズは幅4～8cmで厚1～6cm前後に集中し、僅かに幅9.5と11cm前後・厚2～4cmのものがある。グラフ上はほぼ連続して規格差は判断しがたいが、厚さ2cm前後の板材とそれ以上の角材状・丸木・割材に区別できる可能性がある。横木は厚さ2cm前後の板状材が多い傾向とは逆に、杭は厚めの材を多用する傾向が知られる。ただし、角材状の割材も厚い板を分割している可能性があつて、あくまでも杭断面形状での傾向である。

このなかで建築材は318の柱材があり、樹種はクヌギ節と分析された。断面形状から板状材とできるものは17点(24.7%)と少なく、樹種はほぼサワラに限定される。板目が多く、柾目は2点のみである。角材状材は最も多く68点(58.6%)ある。344・346は床板材の転用と思われる。角材は断面形が長方形か方形を基調とし、丹精な方形もあれば、菱形で割材の可能性のあるものまで含む。柾目・板目の識別は不安もあるが、柾目が61点、板目7点である。樹種はサワラが多く61点(89.7%)、他にクリ4点(5.9%)、ヒノキ科2点(2.9%)、スギ1点(1.5%)である。クリ材は後述する丸木割材に多いことから、クリの角材は本来割材であった可能性がある。

断面扇状の割材は丸木1/2～1/12前後の細いものまであり、全部で29点図示した。表皮を残すものもあれば、年輪に沿って表皮側が剥落、もしくは割ったと思われるものがある。樹種はクリが14点(48.3%)、サワラが12点(41.4%)、残りはアスナロ1点、ヒノキ属1点(各3.4%)、同一材と思われたがクリ・サワラが混在していたものが1点ある。このなかで丸木割材と明確に捉えられるのはクリ材で細い枝材を1/4前後に分割する。残る丸木は1例のみモミ属であった。

本跡杭の大部分は割材、建築材転用と考えられ、丸木は僅かである。樹種はサワラが圧倒的で77.5%を占め、クリ15.4%であとはスギ、モミ属、ヒノキ属・科、アスナロなど針葉樹を中心とし、柱材のみがクヌギ節である。少数の樹種は丸木分割杭など杭の形状と一定の関係が認められそうである。なお、114のクリ割材は表皮が残存し、春から夏頃の伐採と分析された。

SD61(第186図 PL66・67)埋土出土の25点図示した(293～317)。出土数は少なく、小片で形状不明なものが多いが、農具や器種不明ながら建築材以外と思われる器種がある。293が大足梓木、294が田下駄、295が半円形の把手破片と思われる。296は先端に削り痕が認められ、297は側面に削りを施す半円形の板材で器種不明品である。304は丸木の先端を両端から削って尖らせた丸木、298から303が細い角材状の材、305・306が角材状材、309～317が板材である。310・317は壁板材とも思われる。300・301・303は炭化した類似形状の材で、同一個体の可能性がある。板材は小破片が多いが、一部はSD61土手から流失した横

木と思われる。樹種は304がクヌギ節で他はすべてサワラであった。

SD62 (第195図 PL69) 比較的多くの木製品が出土しているが、SA38から流出した横木が含まれると思われる。26点図示した(487~512)。炭化したり、遺存不良で形状不明となるものも多いが、幅/厚の比較では幅3~11.5cm・厚さ約1~2cmの板材、幅3~6cm・厚さ3~4cm前後の角材状材、幅8~12cm・厚さ5~7cmの角材状材に分けられそうである。このなかでほぞ穴を作りだす490は横架材、手斧と思われる削り痕を残す506などは壁板材と思われ、比較的形の整う487・488も建築材の可能性が高い。他は断片的で判然としない。断面扇型の496は割材破片かもしれない。板材では柾目Aは500・508・510・512、広面を年輪方向とする柾目B材は501・502・504・511、板目材は497・498・506・507などがある。板目材は建築板材とみられる。他は加工痕も不明で木製品製作時の廃材か、建築材か不明である。なお、487・497~499は炭化しており、樹種は490と512がヒノキで、他はすべてサワラである。

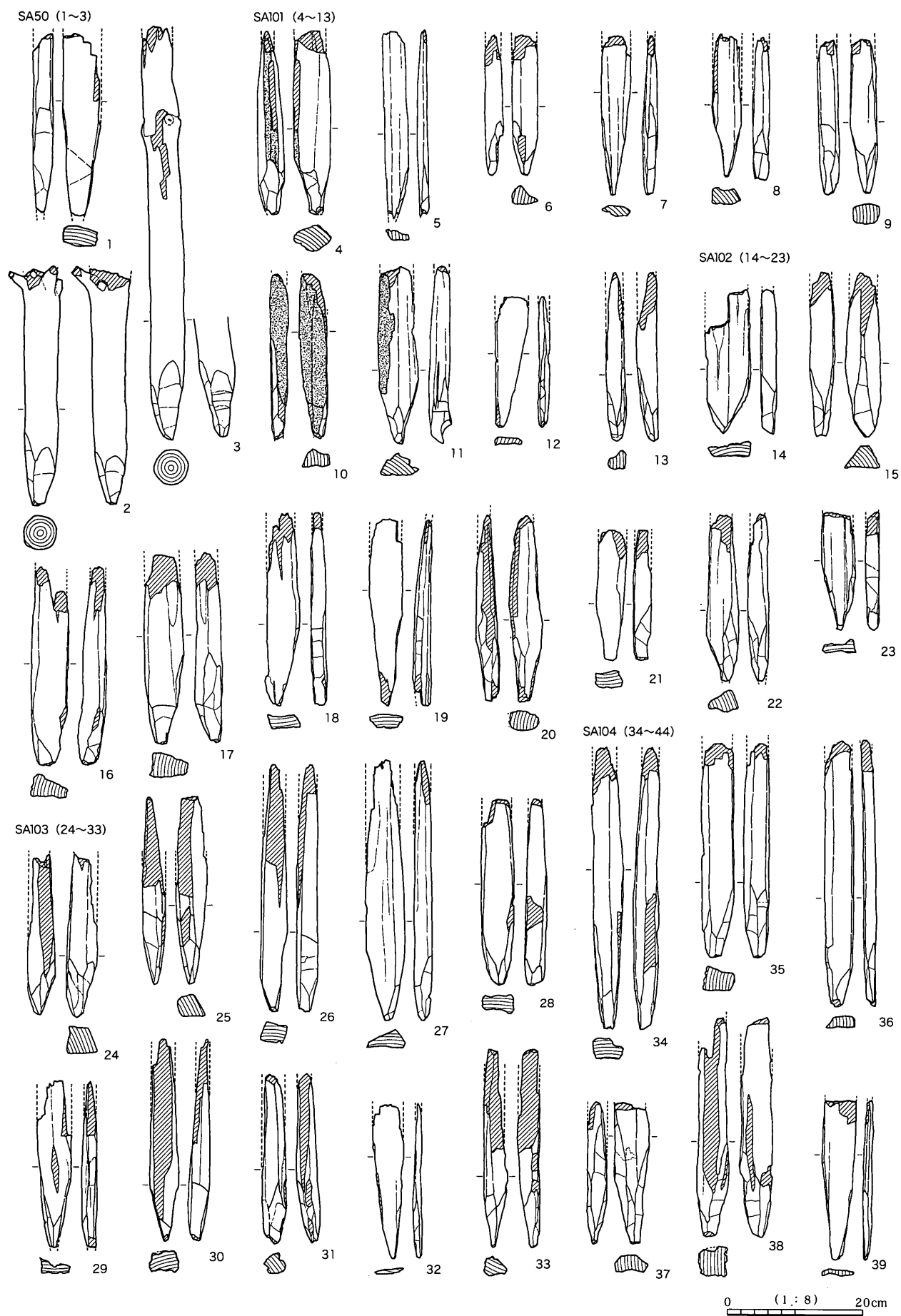
SD114 (第185図 PL66) 木製品は6点のみ図示した(287~292)。287は枝基部を削った柄状の木製品である。遺存不良で全体形は不明ながら側面に削り痕がある。288は基部の一部に削り痕らしき加工が認められる角材である。床板材の可能性もある。289は1/2割材で先端に削り痕があり、杭かもしれない。他は292が側面に削り痕を残す角材、291が板材か角材、290が割材とみられる。樹種分析は287がクヌギ節、289がモミ属、292がコナラ節、他はサワラである。

② 微高地域の遺構出土木製品 (第196図 PL69・70)

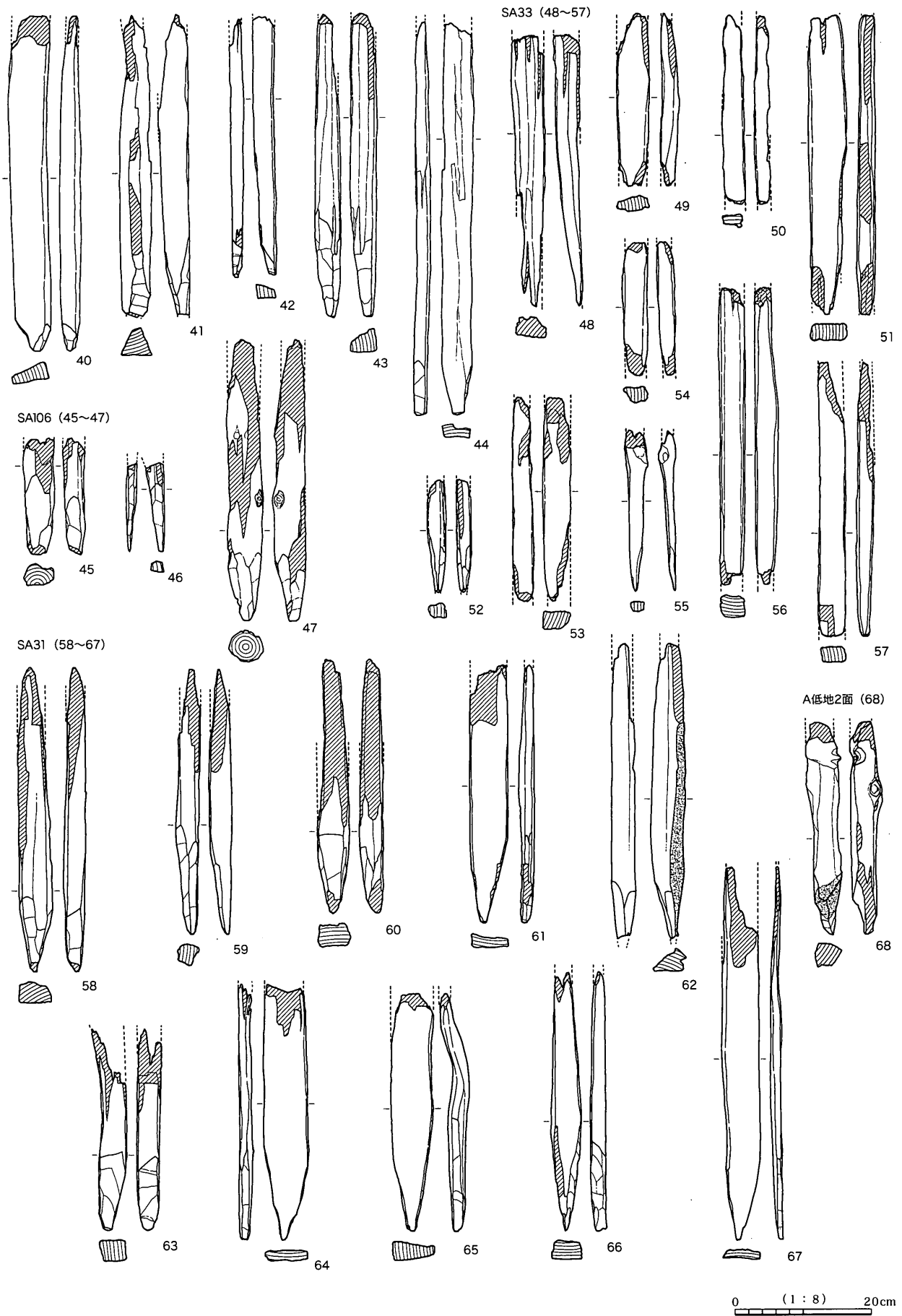
少ないので一括して記述する。炭化材は遺存不良で図示しえず、木質の残る材を中心に図示した。514は古墳後期のSB10出土の柱材、515・516はST12柱穴跡底面出土の礎板、518~521はSK06出土の木製品で比較的遺存状態が良いものを図示した。518は炭化した角材で、他は板材である。521はST12出土礎板と類似形状で、520は木口が削られている。他にSK29などから木片が出土したが、遺存不良で本来の形状は不明である。

参考文献

- 1982 浅井舎人「第3章第5節 榑木」『清内路村誌 上巻』
- 1993 南箕輪村教育委員会『箕輪遺跡』
- 1986 市川脩一「第3編 近世」『箕輪町誌 歴史編』箕輪町誌編集刊行委員会
- 1997 白居直之『石川条里遺跡』第3分冊 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 1999 伊藤友久「第V章 第4節 建築部材」『榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター)
- 2000 伊藤友久「第4章 第7節 建築部材」『川田条里遺跡』第2分冊 長野県埋蔵文化財センター
- 1993 上原真人『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所

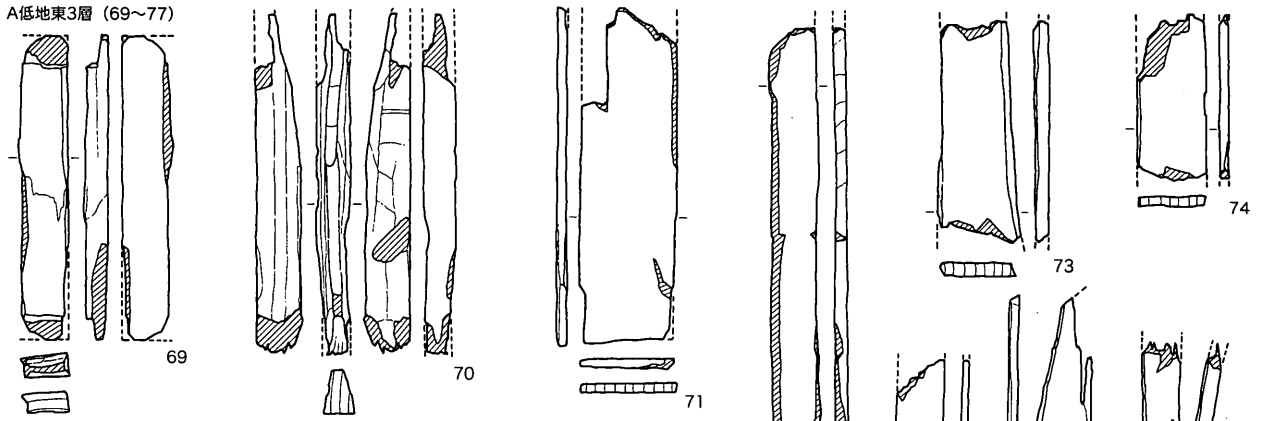


第171図 木製品 1

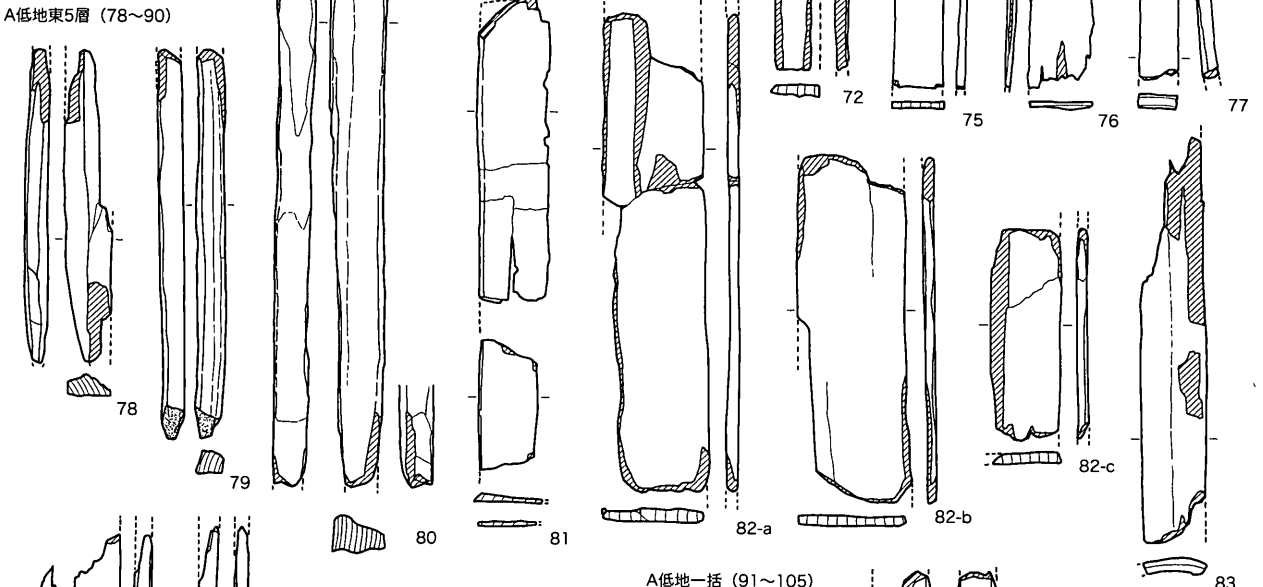


第172図 木製品 2

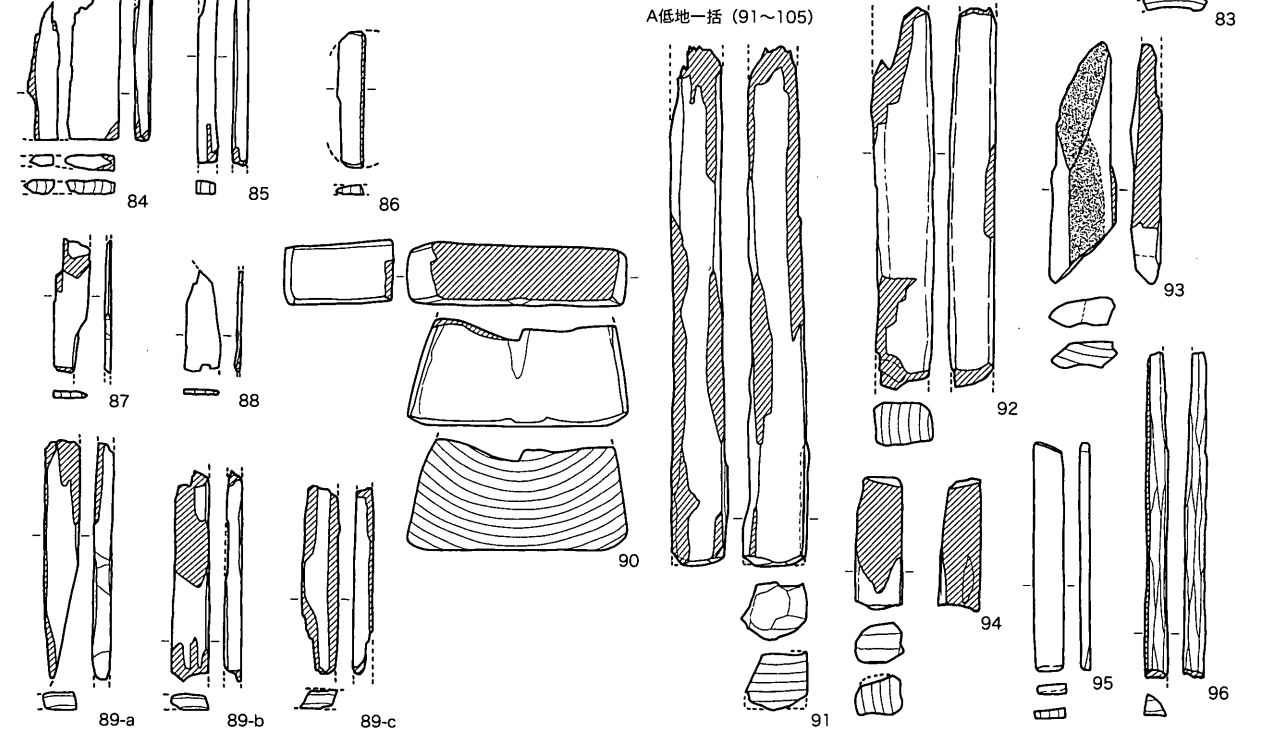
A低地東3層 (69~77)



A低地東5層 (78~90)

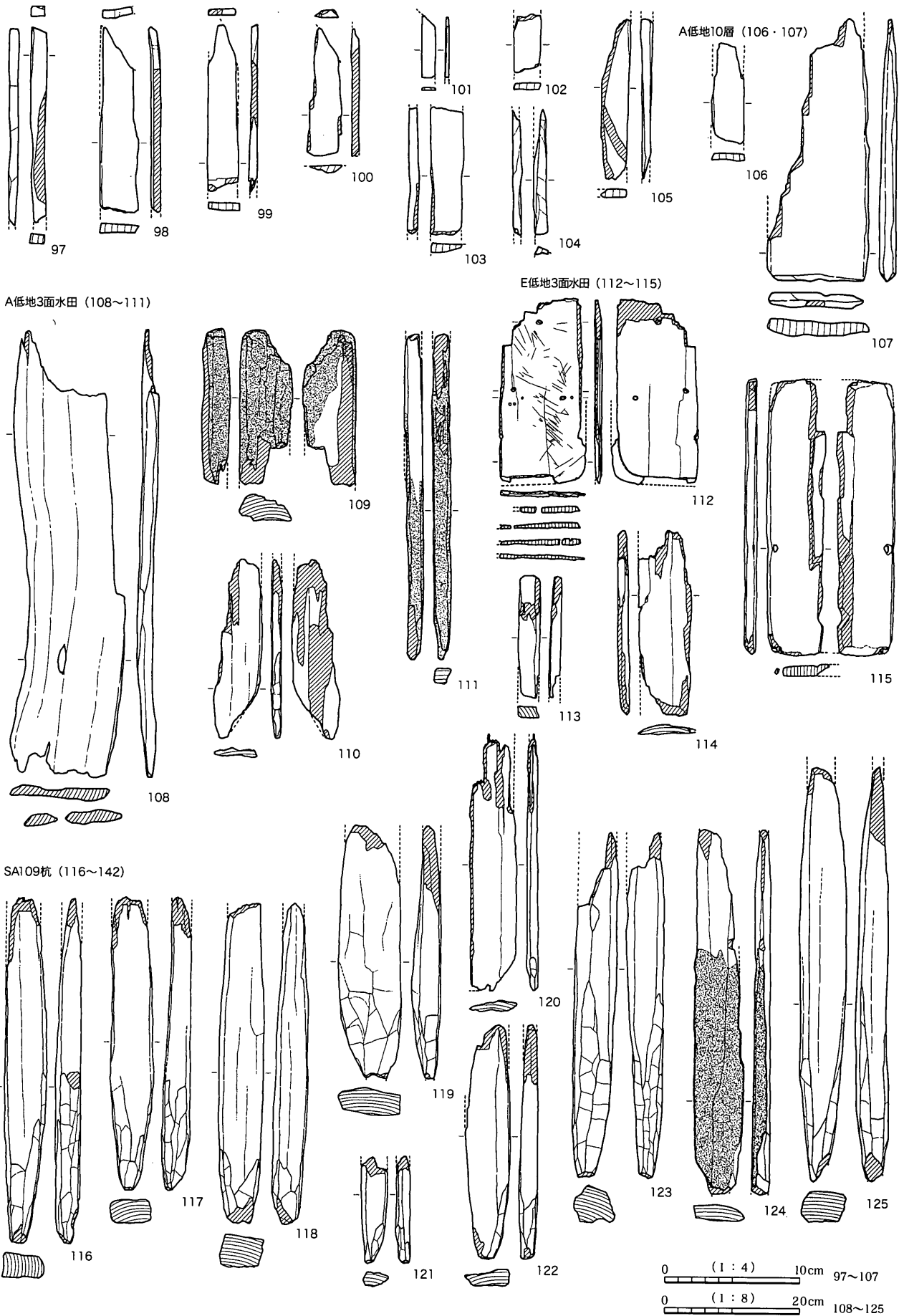


A低地一括 (91~105)

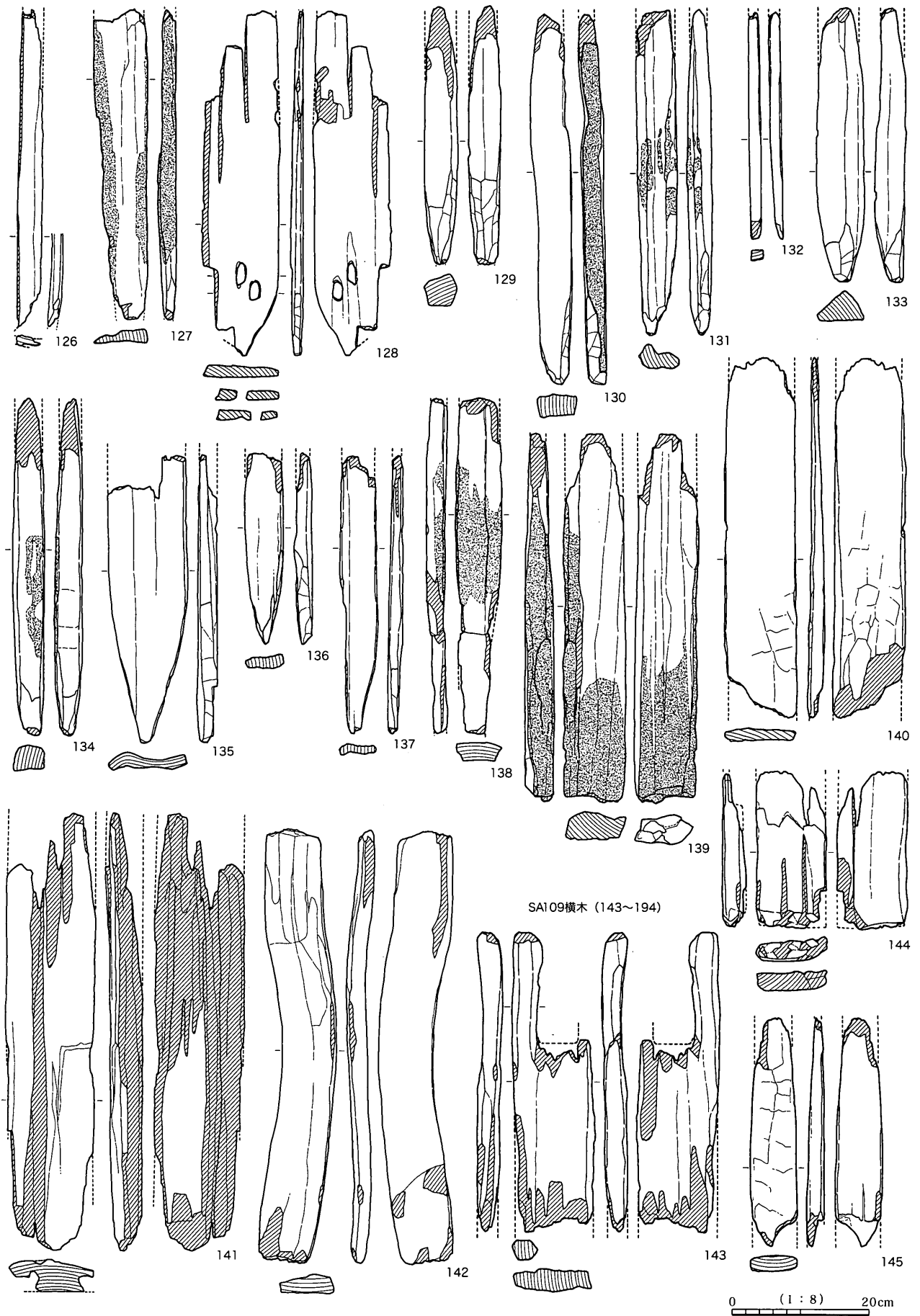


0 (1:4) 10cm 69~77・81~96
 0 (1:8) 20cm 78~80

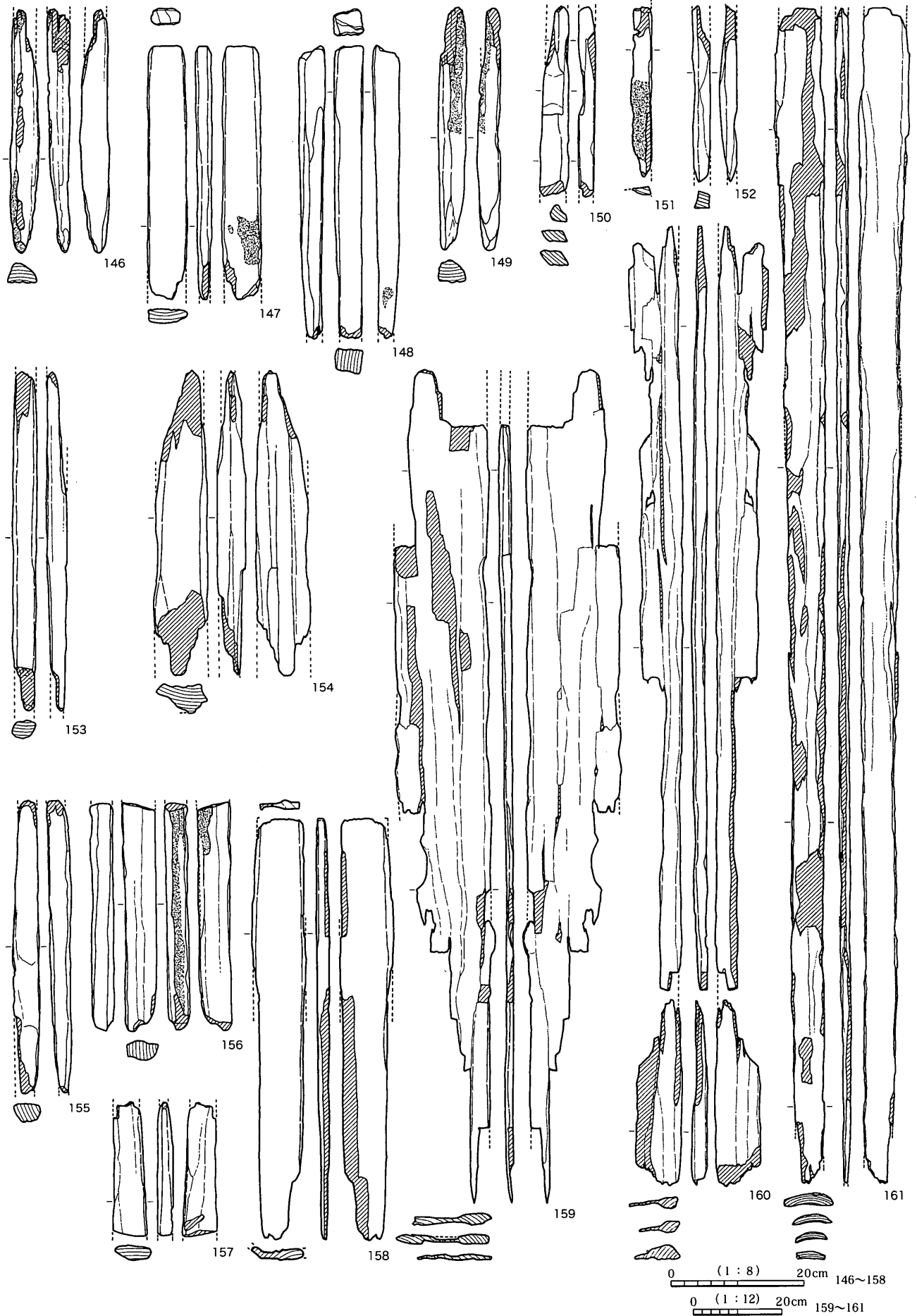
第173図 木製品3



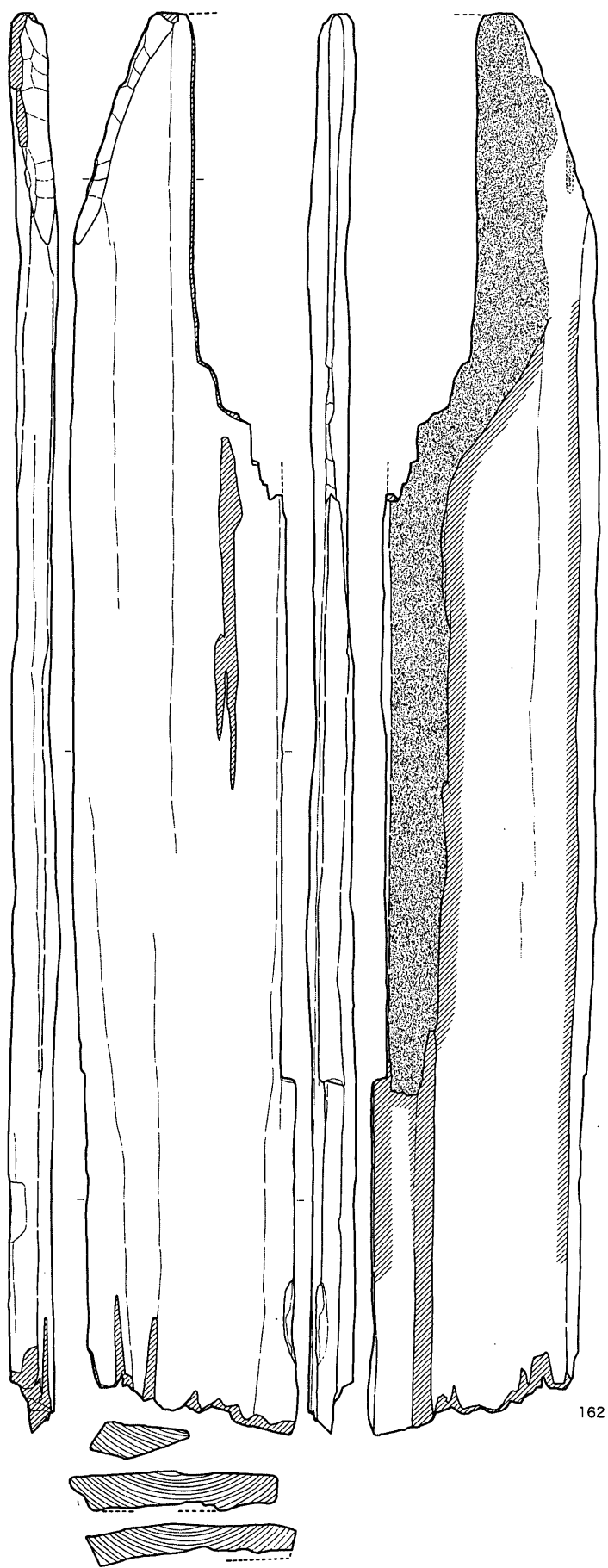
第174図 木製品 4



第175図 木製品5



第176図 木製品 6



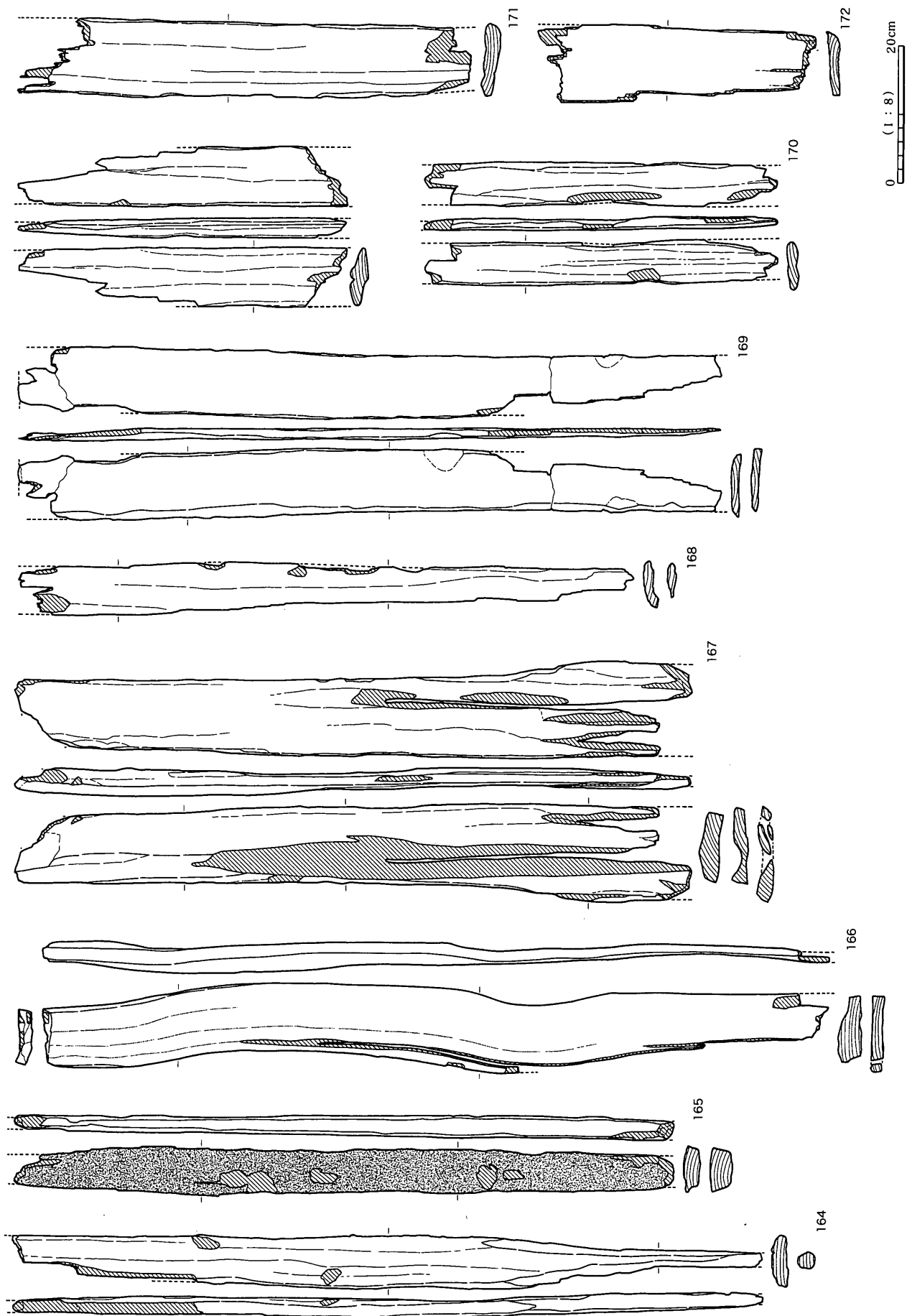
162



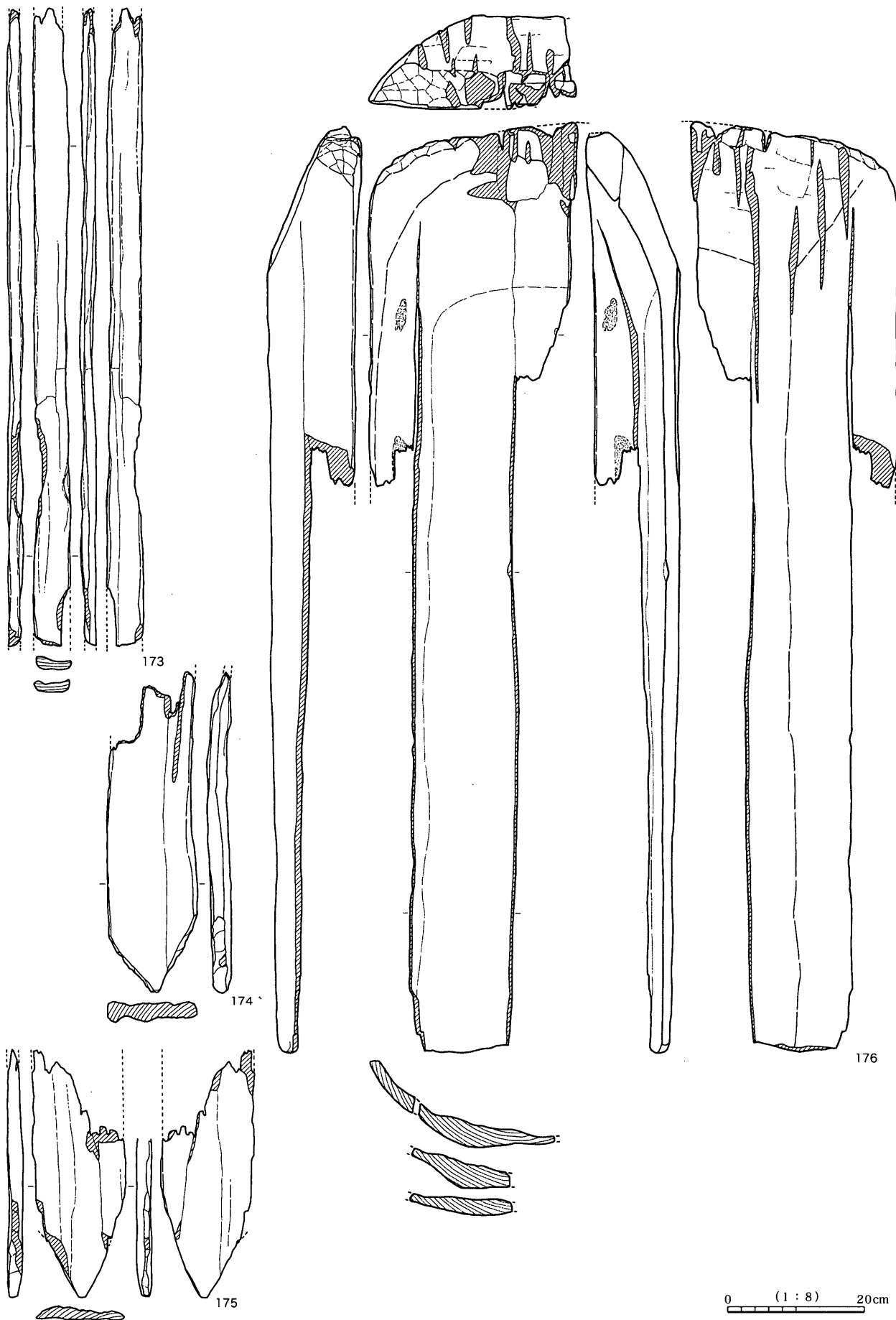
163

0 (1:8) 20cm

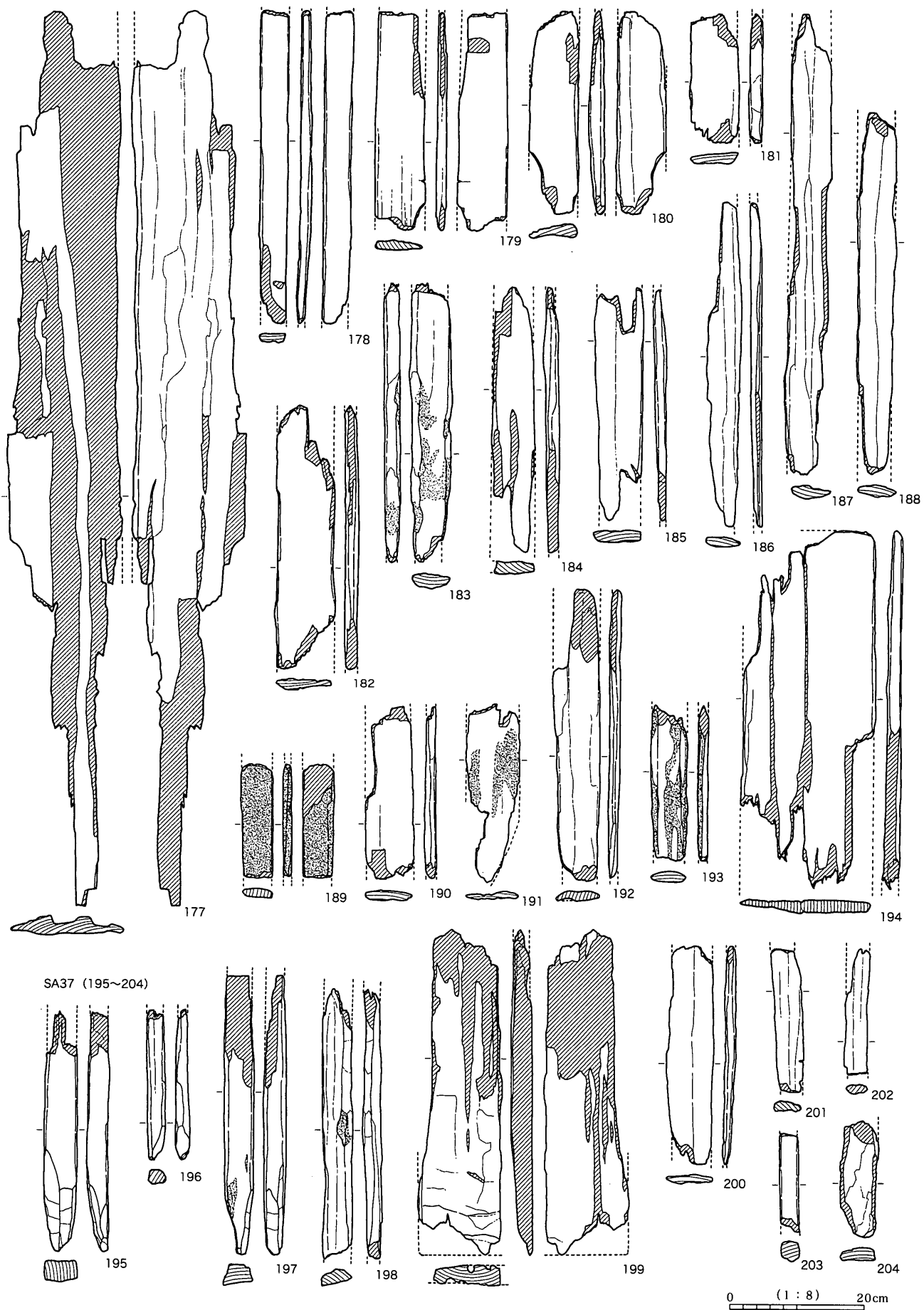
第177図 木製品7



第178図 木製品 8

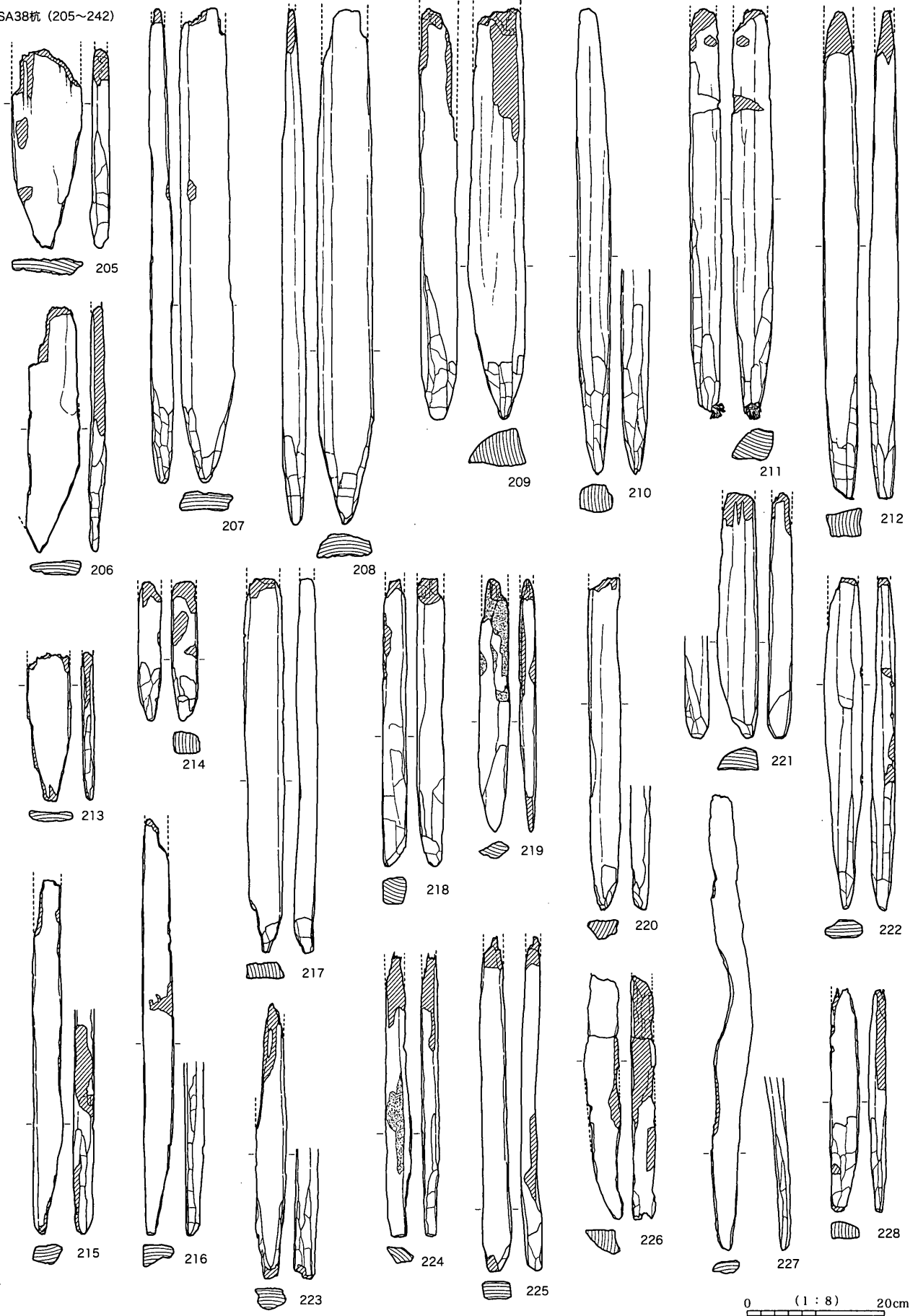


第179図 木製品9



第180図 木製品10

SA38杭 (205~242)



第181図 木製品11